

# 奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

1月号



I. JAN. 1967

奇譚クラブ

昭和四拾二年新年号

定価 三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tensetsya

Osaka Japan



1月号 ¥ 350



100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

大の字荒縄ハリツケ (山原)	首繩にあえぐ哀婉表情 (大塚)	庭園を引き回される (山原)	猿轡を三面鏡に映す (大塚)	ムチ打ちに悶える女体 (大塚)	石橋の上に放置される (玉田)	柱縛りでもがく清子 (山原)	がっちりした後手縛りで (東浦)	アグラ縛りで頑張る女 (大塚)	火あぶりにあう女囚 (大塚)	台上に晒す緊縛裸身 (山原)	エビ縛りの苦悶と戦う (大塚)	縄でくびった柔肌地獄 (一宮)	海老責めで耐え忍ぶ (木村)	後手股間縛りで引返し (一宮)	セーラー服の後手縛り (大塚)	可愛い裸身の鑑賞 (木村)	首細股間縛猿轡の表情 (美木)	室の隅に逃げた女奴隷 (美木)	均斉のとれた美麗縛体 (大塚)	強烈縛りで受ける鼻責 (美木)	徐々に吊られる片足 (大塚)	可愛い小悪魔の表情 (一宮)	夫から鼻責めを受ける (増田)	正坐で放置する縛体 (木村)	亀甲縛りと股間縛り (美木)	縛られて歩かされる (大塚)	後手滑車吊りにあう女 (大塚)	責めぬかれた股間縛り (一宮)	伸びやかな女体の観目 (一宮)	ムチ打ちを願うポーズ (木村)	股間縛り正面で立つ (大塚)	胡坐縛りでもたえる (絹川)	憧憬境のMの表情 (山原)
-------------------	--------------------	-------------------	-------------------	--------------------	--------------------	-------------------	---------------------	--------------------	-------------------	-------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--------------------	--------------------	------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	-------------------	--------------------	-------------------	-------------------	-------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	-------------------	------------------



サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊 花と蛇

小説・絵画

特集号

乞う直接申込みを！ 定価五〇〇円 略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」 テーマ画集 十六葉

1、折り曲げられて弄ばれる女体  
2、逆エビ縛り引き回される女体  
3、水を顔面に浴びせかける男  
4、汚水と薬品の洗禮を受ける女  
5、いちじく浣腸を施される女  
6、浣腸とオシメカバリの羞恥  
7、ガラス製イルリガーの浣腸  
8、強烈なイルリガーの浣腸

9、尻打ちの痛さに泣き喚く女体  
10、片足吊りに狂いまくる女体  
11、女体滑車に吊りの準備万端  
12、お灸責めに汗を流す女体  
13、トイレで排泄の強要を受ける女  
14、後手縛りで宙をぶら下がる女  
15、美女の背の縫い針を黒い管  
16、グリスリセリン浣腸液を注ぐ女

団鬼六作 長篇小説「花と蛇」内容見出し一覧

第一章 密室の秘密ショー

狼の批評会

第二章 脱走の失敗

望み破れて

絶望の涙

第三章 悪魔と鬼女の饗宴

悪魔の二次会

第四章 地獄屋敷へ新顔

鬼女の計画

美津子のいいわけ

美少年のいいわけ

第五章 翻弄されるカップル

折檻部屋

乙女の涙

第六章 恐怖のニラメッコ

正気をついた小夜子

第七章 身代金奪取の失敗

嵐のあと

女体の悲しさ  
美しいニューフェイス

第八章 涙の宣誓文

美女と木馬

毒婦の恋

第九章 恐怖の逆転劇

悪魔の相談

千代夫人と悪徳弁護士

第十章 奇妙な三々九度

鬼女の嬌声

第十一章 飼育される白い動物

美しき敗北者

第十二章 悪魔と悪女の悪業

怖い指

全身美容

第十三章 屈辱の地獄図絵

猫とねずみ

第十四章 逃走の恐怖と失敗

侵入者

風前の灯

再教育

第十五章 悪魔の残忍な所業

勝利に酔う悪魔

朝の酒

白い酒樽

ガラスの尻尾

第十六章 落花無残の修羅場

白いコンビ

開幕準備

第十七章 淫らな美女の調教

嵐のあと

二人の花形

美女合戦

第十八章 すさまじいショー

変身

舌と唇

第十九章 汚水にまみれた宝石

流血

猿の檻

舞台衣裳

第二十章 華々しき美女の屈伏

一難去って

酔態

身体検査

第二十一章 対峙する

嵐に立つ令嬢

美女対峙

悲しき説得

調教開始

第二十二章 あくどい陥穽

修羅図

失心する小夜子

悪の部屋

第二十三章 羞恥図絵の展開

復讐の生贄

汚辱に泣く令嬢

小夜子の屈服







緊縛美態 代表作品 一二〇葉

一部一〇〇〇円（千共） 略号〔美11〕

子。山路ミヨ子。伊吹真佐子。田中芳代。若原明子。春丘リル。益田房  
 かる。梨花悠紀子。熱海容子。前本妙子。加茂良子。桜井葉子。東浦ひ  
 花坂道子。村田那美子。須川令子。田原美佐子。川辺砂登子。花本京子。  
 竹野ひろ子。関谷富佐子。萩千恵子。四方清美。木村洋子。愛川悦子。  
 多奈子。美木乃々子。館典子。新井マリ子。五月亜紀子。水本茂美。川端  
 清子。厚狭春江。雲井久子。津川路子。大井小夜子。柳初子。杉美美

○美しき縛しめ第十一集「縛られた美女」一二〇態内容

立樹に宙縛りて晒らず(梨花)  
 ながし目はS男を誘う(加茂)  
 初々しき緊縛美体燃ゆ(四方)  
 威大な乳尻を責める手(桜井)  
 黒縄は素肌をいろどる(杉)  
 展示された縛人形の美(津川)  
 ローブルで強調した双丘(愛川)  
 後手縛りの裸身麗わし(関谷)  
 猿ぐつわを噛まされる(四角)  
 拷問柱を見上げる奴隷(伊吹)  
 股間縛りの入浴ポーズ(川端)  
 麗身に痛々しき股間縛(花坂)  
 引き回される女ドレイ(前本)  
 全裸猪宙吊りに悶ゆ(川端)  
 筆笥の環に両足を吊る(伊吹)  
 布団に無理に跨がせる(須川)  
 縛られゆく裸身をさらす(竹野)  
 首絞めの裸身をさらす(山路)  
 高々と背負った後手縛(水本)  
 神妙なる縛しめの裸身(長野)  
 上半身を五つにくびる(木村)

哀愁の女囚前手縛の美柳  
汚縄を受けて観念する  
豊満な緊縛美体を誇る  
柔肌をくび切る優婉り  
柔かき美肌にかかる紐  
木の間に洩れ陽の緊縛肌  
荒縄が美肌を強烈縛り  
亀甲縛りの緊縛感の美  
両手吊りの片足挙げ縛り  
双丘に喰い入る股間縛り  
両手吊りの裸身もだゆ  
全裸の刺青女股間縛り  
背後で両手首交叉縛り  
遊園地にて緊縛される  
黒縄に身をゆだねる女  
投げだして縛られた脚  
美しき肌に映える菱縄  
猿ぐつわにとまどう眼  
高々と攀った後手縛り  
水に濡れた後手縛麻縄  
可憐な目つきで見える女  
(花本 梨花 田中 津 田原 竹野 加茂 萩 須川 山原 梨花 川端 桜井 関谷 梨花 絹川 益田 東浦 桜井 絹川)

ガンジガラムの女体（川辺）  
 雨中の庭での全裸縛り（愛川）  
 豊かな裸身で両手吊り（玉田）  
 縄目に羞らう猿轡の目（竹野）  
 ローソク責めの緊縛体（東浦）  
 マダラの紐は美肌の縄目（長野）  
 長身の立姿裸身の縄目（須川）  
 荒縄荒蕪でうめく猿轡（大塚）  
 黒皮猿ぐつわ諦観表情（新井）  
 麗わしの全裸股間縛り（花坂）  
 菱縄縛り石抱きで晒す（木村）  
 首縄荷造り縛りで喘ぐ（山原）  
 全身グルグル巻き縛り（梨花）  
 前手縛りで美体を晒す（絹川）  
 美肌の菱縄がかがやく（田原）  
 縄目の痛にもがく足指（熱海）  
 後手が縛りに裸身映ゆ（玉田）  
 剥がれた下着と後手縛（絹川）  
 美貌は全裸で縄目厳し（梨花）  
 全裸股間縛りで正坐す（大塚）  
 セーラー服で後手縛り（須川）  
 誇らかな乳房縄で強調（長野）  
 破られたストラップで（木村）  
 猿轡の口もむせかえる（熱海）  
 淫らな縛りに泣く蒲団（大塚）  
 乙女の裸身に羞じる縄（川端）  
 泥中の荒縄強烈縛り（大塚）  
 操査めに悶悦する女体（関谷）  
 椅子開股縛りにもがく（萩）  
 端麗な美体に縄目厳し（絹川）  
 黒縄の股間縛りと白肌（絹川）  
 エビ縛りを写される女（水本）  
 樹間に晒らす緊縛裸身（村田）  
 ホールに縛られる全裸（山路）  
 フレッシュな肢体縛り（若原）  
 真白な肌をくびる縄目（大塚）  
 全裸をぐるぐる巻縛り（厚狭）  
 エビ縛りで放心する女（水本）  
 縛りマニアの羞らい（川端）

臀部もち上げてもかく（熱海館）  
 美しき脚線を縦に縛り出す（桜川）  
 ポリウムを縦に縛り出す（梨花）  
 破られたシユミーズ（村田）  
 樹間に全裸身を縮める（東浦）  
 逆エビ責めでいたぶる（雲井）  
 瘦身に痛々しい黒縄縛（加茂）  
 縄目の肌をポーズする（桜井）  
 片足吊りに反る足指（美木）  
 拷問に責めぬかれた末（新井）  
 恋人との緊縛のプレイ（大井）  
 二つ折り縛りの痛さ（新井）  
 緊縛フオトの撮影風景（新井）  
 木馬責めにうめく刺青（山原）  
 カニ縛りに這いまわる（雲井）  
 豊かな縛り裸身を誇る（若原）  
 陽の降り注ぐ屋上にて（萩）  
 後手縛の痛さにあえぐ（文井）  
 浣腸器のある全裸女体（玉田）  
 美しき顔をゆがめる女（春丘）  
 赤の腰巻の似合う縛り（津川）  
 ながし目は男を悩殺（花本）  
 Sマニア垂涎の開股縛（梨花）  
 セーラー服で縛られる（須川）  
 マゾ女性股間縛の表情（川端）  
 泥まみれで縛られる（大塚）  
 全裸雨中の戸外縛り（愛川）  
 両手くさり吊りの女体（大塚）  
 猿ぐつわをされる美貌（五月）  
 白越中にて裸身し（大塚）  
 女学生服白マスク縛り（梨花）  
 股間縛りの全裸身（花坂）  
 初々しき緊縛女体燃ゆ（四方）  
 強烈縛りに裸身うねる（美木）  
 エビ縛りの苦悶表情（関谷）  
 アクロバチックの裸身（長野）  
 始めて受けた縄の洗礼（田原）  
 縄は乙女を美しくする（花本）  
 絶妙の悲愁を漂す鼻責（春丘）



# 奇クサロン

私が知り合った頃は少壮の社会部次長として活躍していたのだがその後、全国各地の支局長を歴任して、やっと本社へ戻ってきたらすでに停年近かで、投書の整理といった閑職に追いやられてしまったと嘆いている友人がある。

ここ十数年ばかり、ずっと本誌を贈呈しているのだが、最近はお暇なのか、よく批評を書き送ってくる。特にマニアという人ではないので、SだMだといったって、深く掘り下げたことはわからない。うだが、流石に永年新聞記者をやってきただけあって、時折機微に触れたアドバイスをやって呉れることがあって参考になる。

近頃言ってきた中で、特に記憶に残っているのは、本誌に掲載した小説、読物などに対する悪評ともいふべき批評を、殊更発表するのはどうだろうか、というのである。新聞社あたりの投書は、都合のわるいものは社の方針で第一番に没にしているが、貴誌では明らか

かにマイナスになるような批評を載せているのは得策ではなからうというアドバイスである。

新興宗教の新聞などを読んでみると、信心して有難い、助かったこんな効果があったという、所謂オカゲバナシが所狭ましと載っている。こんな投書ばかりではないだろうが、編集者がそんな意図で選びだしたとしたら、オカゲバナシ集になってしまふのは当然であろう。反対意見も公平に載せてこそ、より真実性を増すのではないかと考えるのだが、編集者としては馬鹿正直の部類に属するのかもしれない。しかし、こうしたツムジ曲りは、なかなか直らないので折角の力作や傑作の筆者に対してその制作意欲や執筆意欲を欠いてしまふことにもなりかねない。「のおと・あと・らんだむ」の筆

者からの私信によると、誌上に於ける反響が余りにも少いので、何んだか暖簾に腕押しのように意欲が湧かないということだったが、私の見るところでは、同感や好評が多かったため、ともすれば誌上に姿を見せなかったように思う。これが、かえって反対意見が多いと誌上を賑わしたかも知れないと思うと苦笑せざるを得ない。

元来、SといいMといっても、少数意見であり現在の社会から疎外されたものであるという感が深い。僅かに本誌のようなささやかな小冊子を共通の広場として、その意志の交流を計っているに過ぎない。せめて、この共通の広場のなかに於てだけは、何の気もねもなく、自由に意見を述べあいたいものだと思う。また本誌の使命の一つも、こんなところにあるのではないだろうか。

仕事に追われてくると、毎月毎月、待てしほしもなく迫ってくる編集責任者の仕事を投げだして純然たる第三者としての身軽な気持ちでSMの境地を楽しみたいと思う

ことがある。いつも隅から隅まで気を配っておらないと、うっかり目を通し忘れた中に、大変な不発弾が埋没していたりして、精神衛生上も宜ろしくない。この限界というのは、慣れていないと中々判断がつかないものである。要領よくツボを心得えた人の筆になると肝腎のところは掴みどころのないウナギのような文章でうまく逃げて呉れるのだが、案外平常は堅い文章を書いている人や女性の文章の中に、とんでもない露骨なものがある。

寄稿家や執筆者、それに全国の誌友からの通信や原稿を読んでいると、こういう雑誌を編集していることの楽しさを、しみじみと味わうことが出来る。インクを一杯にした万年筆を何本も揃えて、それらの返信を書いているときには、編集の煩しさを忘れるような気がするものである。少数意見同士の親愛感が本誌を綴として愈々押しすすめられることを願うものである。この短い文章を書いている間に六度も電話のため中座させられた。なんとか落ち着いて物を考えたり書いたりする時間が欲しいものだと思いつつ、とりとめのない文章を終ることにする。

## 反対意見と少数意見

編集子



「花と蛇」の作者

団鬼六先生へ捧げる

花と蛇ファン

荒巻謙作



「骨まで縛れ」と「拷問」と二本の映画を観ました。そこで団先生にお願いがあります。

色々と制約があって、団先生も観客たる私達にも、物足りないものになるのは仕様がありません。ただ「骨まで縛れ」ですべて裸にして縛るやり方より、ビキニパンティとか、腰巻等かくすべき所はかくした方が、女優さんも動きやすく、亦悶え易いし、カメラも撮り易い、その結果いわゆる

「責める」という感じが良く出ると思います。

とうてい、全裸開股々間しばかりなどは望んでも出来ない事でありますので。それに小さいブラジャーをつけて（これがうすくて併も水で濡れていけば最高ですが）縛り上げられる過程を刻明に延々と観せて欲しいものです。

「拷問」の第一話、女間者が腰巻一枚で菱縄にされ、油いりを宣告されて後手に縛られた手首の大写し、そして手を握

ぎりしめるシーンがありました。こういう場面がぐっと来ます。前作の「拷問刑罰史」も共に上手に乳首をかくしてあり仲々うまいやり方があります。前作の石抱きの縛りと、「花と蛇」での最後の静子の縛りが一番良かったと思

います。

この度の「骨まで縛れ」のマダム静子の縛りはいつも同じスタイルなので、物足らなかった。これも風呂上りで縛り上げられた上、土蔵へショッピかれる場面を挿入して下さったら、きっとシビレタだろうと残念でした。

この種の映画は徹底した勧善懲悪に仕上げないと映倫にズタズタにされる恐れがあるだろうと思いますが、時代物でも悪玉の親分が村娘や、小町娘を責めぬき、大いに悪玉ぶりを発揮した揚句、サッソウと登場した二枚目のヤクザにバツサリやられる、理くつ抜きの（その方が作りやすい？）少々つじつまが合わなくても、ドタバタSM映画を楽しませて下さい。実現して下さるのは、団先生をお願いして外にはないのですから、神様、仏様、鬼六様です。

尚何度も申しますが、裸かにして縛り上げる感じ、その過程、捕物なら、女賊が召捕られるシーン縄をうたれるシーン等、縛りと、責めの映画ですから、この方に力を入れて頂けないかと思ひます。シーン数が多いと映倫に切られても、生き残るフィルムの呪数も長いでありましょう。それと悪玉は

編集部だより

○新年号より四馬孝氏のレイアウトによって新しく表紙のデザインをして貰う予定だったが、氏の急病のため予定通り進められなかったことをお詫びしておく。

○増田夫人のお腹が月にしては余りにも大きいと思っていたら、双胎とのことと驚いた。去る十月十六日に撮影したときは、普通の臨月ぐらゐの大きさであった。大きな点では今後余り変りはないだろうが、臨月になって胎児が下降した頃のもの撮りたい。

○ダイコーミュージックでアブノーマル演劇と銘うった八女体責めVの劇をやっているのを見てきたと山本一章氏から連絡を受けたが、辻村隆氏の話によると、引続いて鶴見橋第一劇場にて目下上演中の由。秋山夫妻のSショーという名前前で、かつての青木順子以上の凄惨な縛りをやるとのこと。カメラ・ハントの取材も面白いと思う。

○先月号の「奇クサロン」巻頭で若いマゾ女性のこと言及したところ、それでは私が、と名乗りを挙げる女性が次々と出てきた。写





夫婦プレイフォト「愛妻ゆう子の股間縛」 新田英雄

悪に徹底し、これでもか、これでもかといじめ抜く、善玉は旅がらすでも、秘密探偵でも良ろしい、サッと現れて悪を退治し、サッと消えていく正義と女性の味方『SM仮面』というストーリーイでお願したい。イヤ、ストーリーイはチョットでよろしい。イヨイヨ、マニアの欲望ばかり書く事になりました。

私の奇ク歴は長く、大判時代からで、中に五六冊無くしたのもも（アチコチかくし廻って）あります

すが、実行の方は、プレイシタのはたったの二人、そのケのあったもの、つまり簡単な縛りは、大抵の女の子に出来ました、という芳ばしからぬ戦歴の持主で、専ら読書と、分譲フォト派であります。「骨まで縛れ」をみて、イラザル投稿家が、団先生の意欲をそぐよ、うな事を投稿されるのを恐れて、この種のシナリオと映画化を、先生が中止されてしまう事を恐れて、投書するものであります。何卒、小生及び小生如きつつま

しいファンが多勢いる事をお考え下さって、次々と楽しいものを作って下さる様に、お願い申し上げます。小説「花と蛇も」毎回短いのがうらめしく、あの手、この手とさぞお疲れの事と存じますが、ここまですると、勢いとして文夫対、各女性のからみ（近親相姦まで行きますか？）にまで及ぶ事でしよう。何卒末永く連載して頂きます様、お願いして、先生の御健康を、おいのり致します。

このところ、暫くご無沙汰しました。妻のゆう子とのプレイは、相変らず週に一回ぐらいの割合で行っております。元来、肉づきのよい方でしたが、近頃は天高く何とかで、胸やヒップのあたりに大分脂がのつてきましたので、もう少しシゴく必要があると思っています。縛り方はいろいろ変えていますが、最近では慣れたせいか、余り肌を痛めずにより緊縛感のある方法を会得しましたので、二人で楽しんでおります。

真撮影を承知してくれる人もあったので、いずれその結果を誌上に報告しよう。今後とも勇気あるSM女性の出現を大いに期待し、お便りをお願いする。

○SMカメラ・ハント、かずかずネタのある中で、次号はとっておきの新しいものを、と辻村氏が張り切っていていられるので、題は来月のお楽しみとして、期待して頂いて失望はされないと思う。

○カメラ・ハントといえば、各地の腕に自信のあるアマチュア・カメラマンから、我こそは、と本誌の連載を志望してこられるので、頼もしき限り。但し、いずこも同じモデル難にて、モデル嬢を紹介してほしいという願いがしきりである。地方の女性読者の方、どうかハントされてチョウダイ。

○原稿や読者通信で横書きのものがあがるが、これは必ず没になるので御注意願いたい。加筆訂正の事を考えると、原稿用紙のマス目になるべく小さい字で書いてもらえると有難い。

○読者通信では三行広告的なものは極力掲載しないように心がけているので、多くの読者の方々を対象にした内容のものにして頂きたいものである。



## ◇TV・映画・春夏秋冬◇

—楽しめる作品より—

糸 島 博



TVのSMシーンが増加しつつあるのは、我々ファンには喜ばしい。それというのも、ちょっとした捕物帖ブームで、時代劇が映画界から姿を消しつつある今日、TV界に復活しつつあるので、SMシーンがよく画面に姿を見せる結果となっているのであろう。

9月23日放映の「ザ・ガードマン——鍵穴の死刑台」と9月25日再映の「三匹の侍、風雲を斬る」の2本は縛り場面の連続で見られた方も多いと思うが、TVとしては出色のSM作品であった。「鍵穴の死刑台」では沢たまき、稲野和子、市川和子の3人が、孫を殺された祖母が復讐の為に自宅にとじ込められるのであるが、和服の市川和子が後手に縛られたまま犬の様に食事をさせられるシーンや、沢たまきが縛られたままで牛乳を飲ませられて口から牛乳があふれる場面等ははっとさせられた。結末迄に3人が幾度も縛られた姿を見せて呉れたので、きわ

めて楽しかった。

「風雲を斬る」では悪家老をたおさんとして一味に捕われるのが花園ひろみである。拷問されたり、主謀者をおびきよせる為、縛られたまま町中でさらし者になったりあわや打ち首になりかかったりしてSMファンを喜ばしてくれた。

一方、映画界では、独立プロの最近の傾向として、裸と愛欲のマソネリズムを打破る意味か、大なり小なり、SMシーンが増加しているようである。「裏切の季節」「蛇肌の女」「骨まで縛れ」「猟奇の果」等の縛りシーンがすぐれている。この中で「骨まで縛れ」と「猟奇の果」の2作品は、皆様おなじみの団鬼六先生の脚本である。「裏切の季節」では両手吊りの拷問から後海老縛りなど、始めから終りまで縛りシーンの連続であった。女優（独立プロの人は名前が覚えにくく直ぐ忘れる）として裸体での後海老縛りのままで長時間スクリーンで演技しているのは最初の様に記憶するが、両手吊りの拷問の時も全裸であり、英才若松孝二監督ならではの作品であった。大御所小森白監督と共に今後の活躍を注目したい。

「蛇肌の女」では、半裸でしどきで縛られて盲目のヤクザに犯される場面があった。鈴をつけられている為に体をくねらす度に、チリンチリンと鳴るのは珍らしいアイデアである。又、妾になる女優がポリウムたっぷりで、裸にむかれて後手に縛られたまま逃げまわるシーン等目を楽しませてくれる。「骨まで縛れ」は大作「花と蛇」の続編であるが、ストーリー自体は何の関係もない。バーのママ静子が後半から裸で縛られなければなしの熱演を展開する。縛ってあるロープが黄と黒のビニロンロープの様であるから、縛られ役の女優には相当の責めであらう。「猟奇の果」は画家とモデルを描いた伊藤晴雨先生好みのSM作品である。前後5回に亘って見られる縛られている女性は、必ず日本髪が乱れ髪に長じゅばん姿で床柱に後手縛りという念の入れ方である。

以上が主だった作品であるが、ちょっとしたSMシーンは独立プロの作品には星の数の様にあるので省略するとして、映倫の影響だろうと思えるのだが、裸体の時は乳首を縄でかくす様に縛ってあるのが目につく。さしずめ縄ブラジャーと名付けてよさそうだ。ところが、その為我々SMファンを喜



ばせる事になっている。何故ならば縄がゆるくては（この基本的な事が我々に一番不満であった）縄がずれて乳首が見えて映倫さんから「カット」である。だから、全

体的に見て乳房に縄が喰い込んで緊縛感が十分なので、見ていて楽しめるという次第である。  
出演する女優の立場になれば、裸にされるだけでなく、きつい縛

りを要求されるので重労働であるうが、案外女の体内にひそむマゾが出演OKをしているのではないだろうか。ファンにとっては、映倫さまさまと云えそうだ。全く面

白い逆効果である。  
また次号には、新しいTV・映画を御紹介しましょう。  
〔挿入したスチールは東映「獄門坂の決斗」より〕



## 女体切腹「志士夫人の自害」

六角京之助

新選組の乱入を受けて夫は壮烈な斬死を遂げ、女ながらも必死の防戦を試みた夫人は、いまはこれまでと、小机の上にどっかとあぐらを組み、小刀を逆手に取って、最後の力をふりしほって、おすり

と左脇腹へ突立て、きりきりと右へ引きまわす。忽ちほとばしり血汐、たまらず背後にのけぞる志士の夫人。といった設定でカラーにて撮影しました。モデルは四十五才の女性です。

## 恋人の写真 阿波多助

今年の春、偶然知り合った私の恋人と夏休みを利用して一泊旅行をしたとき、始めて緊縛プレーらしいプレーを行ったときに持参した、カメラによって撮影したものを同封します。彼女は今年二十二

才、いささかポリウムに欠け、乳房なんかも余りふくらみがなくぺしゃんこです。しかし至って素直で私の言う通りになりますので、これからせいぜい飼育して身体の方も鍛えてやりたいと思っていますので先輩各位のご指導を心よりお待ちしております。





## サロンの展望台

〔目出鯛三〕

何か一つ当ると必ずと云って良  
い程、其の亜流が出現するもので  
ある。いわゆるブームと呼ばれる  
現象である。独立プロのピンク映  
画しかり、テレビ寄席に於けるド  
タバタコメディしかり、モード界  
は云うに及ばずと云ったところ、  
今日の巷間にはいくらでも見受け  
られ、枚挙にいとまがない。

出版界、読書界にもこの一種の  
ブームが適用されることもしばし  
ばである。否ブームというよりは  
時流といった方が適切かもしれない。  
さて余談はさておき、最近の  
ニュースを御知らせしよう。

元来、読書好きな私は奇クの発  
売日はもとより、暇さえあれば書  
店、古本屋、果ては駅の売店に立  
ち寄っては何か目新しい、それで  
いて奇クファン好みでマニア向き  
の新刊書、新聞記事はないものか  
とカメレオンの触角で探索するこ  
とを唯一の楽しみとしている。従  
って行きつけの書店主とも、すっ  
かり顔馴染となり、かなり打解け  
た話も出来る間柄、立読みの私に  
は何一つ文句をつけない昨今であ

る。昨夜のこと、同僚とグラスを  
重ね、ほろ酔い気分で一人書店に  
立ち寄った。

好色文学では其の名も高い清水  
正二郎の名前が挙げられる。奇ク  
ファンの中にも御存知の諸兄も多  
数あるうと思う軟派文学の大家で  
ある。彼の作品については、ここ  
では触れないが関連があるため、  
書きそえておくことにしよう。

いつかエロカ文学かで問題とな  
った伊藤整訳「マダムチャタレー」  
の同系として話題に挙げた渋沢竜  
彦「サド」の作品群がある。勿論  
作品の内容は前者、後者共に異つ  
てはいるが悪書の境地を逃れぬも  
のとして関係当局が黒い烙印を押  
したことは両者共通している。と  
は云うものの、現在桃源社版で渋  
沢訳サド選集が堂々と書店の書架  
を飾っているのも同好の士にはう  
れしい限りである。又、河出版も  
あり、このところ「サド」文学安  
泰といった感さもある。惜しむら  
くは、全てに削除割愛と訳者編者  
の苦心の墨跡があつて、オブラー  
ト包みの良薬化に、物足りなさが

## 「私のS画」

山岸三郎



十二月号に文とカットを載せて  
いただいた光栄に甘えて、ここに  
誌面を借りて同好の諸氏に見てい  
ただこうと再び私のS画を投稿い  
たします。

私の好みは責めに悶える女の悦  
虐の表情と姿態に溢れる美しさを  
描くことです。そして専らそれら  
の女が全裸でなくてはいけないの  
です。女の本来の姿がそれであつ  
てこそ一番美しいのだと自認して  
いるからです。女の羞恥が縄によ  
って女自身の意志では衆目から逃  
れることは出来ないという時の表

情をつとめて研究しているのです  
が、中々うまく描けません。

五年程前から女体を描く基本と  
して始めたヌードクロッキーも、  
すでに千枚余も突破して一応これ  
を分岐点として私の大好きなS画  
に没頭しているところですが。元来  
自分の趣味だけで描いているので  
すが、やはりどなたか同好者の方  
に観てほしいという気持が強い  
のですが、十二月号によってこの気  
持が満足させられて私自身大変嬉  
しく思っております。  
ここに描きましたのは、肉体の





残念であるが、これも法治国家の秩序の鉄壁を破壊すべきことではないからやむを得ない。

さて、名訳者と知られている沢沢氏のものが出たところで亜流？に新流社版「ソドムの百二十日」を紹介しておこう。おかしなもので氏のものより、どちらかといえば、この新流社発行の「ソドム」の方が詳細に訳され浅学乱読派の私には吞込みが早くて興趣を、そそられたものである。

はたまた昨夜のこと、酔眼をとらえた冊子に清水正二郎の「もっと強く打って」が目にとまった。ポケットサイズの美装本である。サブタイトルに「鞭の生涯、サド侯爵」とあり、巻頭に四枚の名画が入っている。特に私の目を楽ませ、財布のヒモをゆるめさせたのは二枚目の挿画であった。泉水

のはとりでクッションをしきつめた上に豊かな金髪の美女が全裸の肢体を惜し気もなくさらし泉水の中で顔だけのぞかせた男に足指をなめさせ乍ら美人は自らの手指で自らを楽しんでいる美しくも淫らな場面の絵であった。

本書の内容は一連の作品がどのような過程で創作されたかを書いたものである。例えば「ソドムの百二十日」は獄中、サド侯爵が投獄されたバンセンヌ城がモデルとされ、ここで自分の理想を記述したものと云われている……といった塩梅で、いわば楽屋裏を紹介した一種の時代考証書とも云える内容となっている。しかし清水氏得意の流麗な文体で要領よくまとめであり専門的ではないにしろサド侯爵の素描を知るには恰好の一冊ではなからうか。



### 私のイメージ画集「浣腸器」

室井亜砂路

門のマヤのリンチ場面からヒントを得たもので、両手を縄で吊り上げられて寒々とした廃墟のビルの地下室でやがて襲いくる魔手を苦痛をこらして待っている姿をハイアングルで描きました。責手を入れず、これから起りうる光景を皆様に想像していただきたいという気持を含んでおります。

次は三角木馬責です。すでに三角木馬に跨がせられて鋭角の苦痛に耐えつつも、男の持つ足首に吊るす石に向けて救いを求めている女の哀れさを描きました、実際に吊り下げられて呻吟する女の姿をこの絵の中から想像して下さい。

私はSのくせに、あまり残酷なものには好みません。だから、激しい責めが待っている、その一歩手前を描いて、それによって私は女の哀れさ美しさを連想しているのです。けれど本音は未経験の私には、本当の責めの境地は描けないのかも知れません。



## ヤコベッティと小森白

南方純

「さらば、アフリカ」はまことにショッキングな映画であった。それはリアリズムなどいう、やさしいものでなく、目をそむけたくなるような事実そのものを、これでもか、これでもかと、おしつけがましいまで、眼前に展開してみせる。

ヤコベッティ自身、拉致されたり、狙撃されたり、生命の危険にさらされながら、この映画を作成したド根性は美事なものと感じせずにはいられない。

暗黒大陸の独立にからんだ異民族の闘争の姿を、これほどすさまじく見せた映画がかつてあったろうか。切りとられた青黒い手首の山、銃殺の場面、ズボンをはいたまま白骨化した屍体、その白骨がさがさと自動車につぶされて行く光景、猛獣狩同様に殺戮されて行く白衣のアラビヤ人群衆——およそこの地上に今行われているとは信ぜられない現実が非情のレンズの眼にうつし出されている。そしてレンズ以上に冷静なヤコベッ

ティの眼と、その現実をとらえてはなさない執念には敬意を表さないわけにはいかない。

しかしヤコベッティのとらえた残酷は人をたのしませる残酷であろうか。そうではない。それは楽しませる残酷とは異質のものである。それでは楽しませる残酷では誰がこれに、対抗出来るであろうか。そこにわが小森白がある。

前作「日本拷問刑罰史」で新しいジャンルを開発し、大いに注目されたが、今度はその続編ともいうべき「拷問」を発表し、前回に劣らぬ反響をよんでいる。

前作が歴史という建前から、数多くの短篇をつづけた形になっているが、新作では三話にしばっていること、前作では黒白であったが新作では部分天然色としたことが大きな違いである。

天然色にしたことによって迫力が増加したことが認められる。責めや処刑の場面が白黒から天然色と変る効果も面白い。

第一話の生理めは余り面白くな

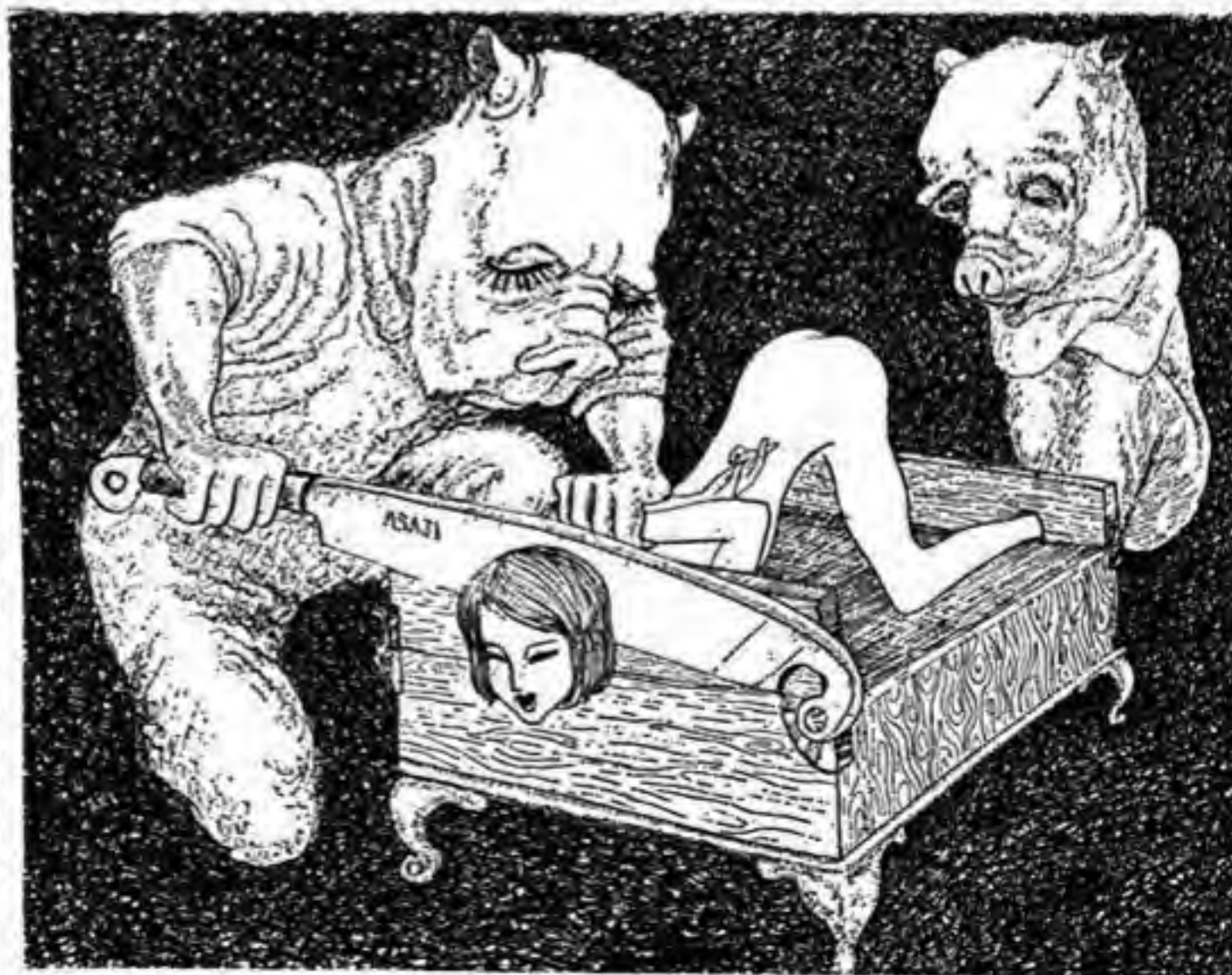
いが、女間者の責めがよい。第二話は、前作にもあるキリシタン物で、蛇責めなど前作同様だが牛裂き（実は馬を使ったが）場面は凄惨であった。

第三話は前作の三段斬りと似た六所斬りで裸にして腕を開きくくりつけた女体を、鼻、耳、腕、腰、首と切っていく光景を暗く遠くからではあるが見せている。裸にした時の乳首を、縄や髪にかくしたりして、映倫すれすれに、努力したところが見える。

封建制度の矛盾といったナレーションが入るが勿論つけたりで、監督自身大いに楽しんでいるのであろうと思われる。益々御自愛、楽しませる残酷ものの作成に御精

僕のイメージ画集

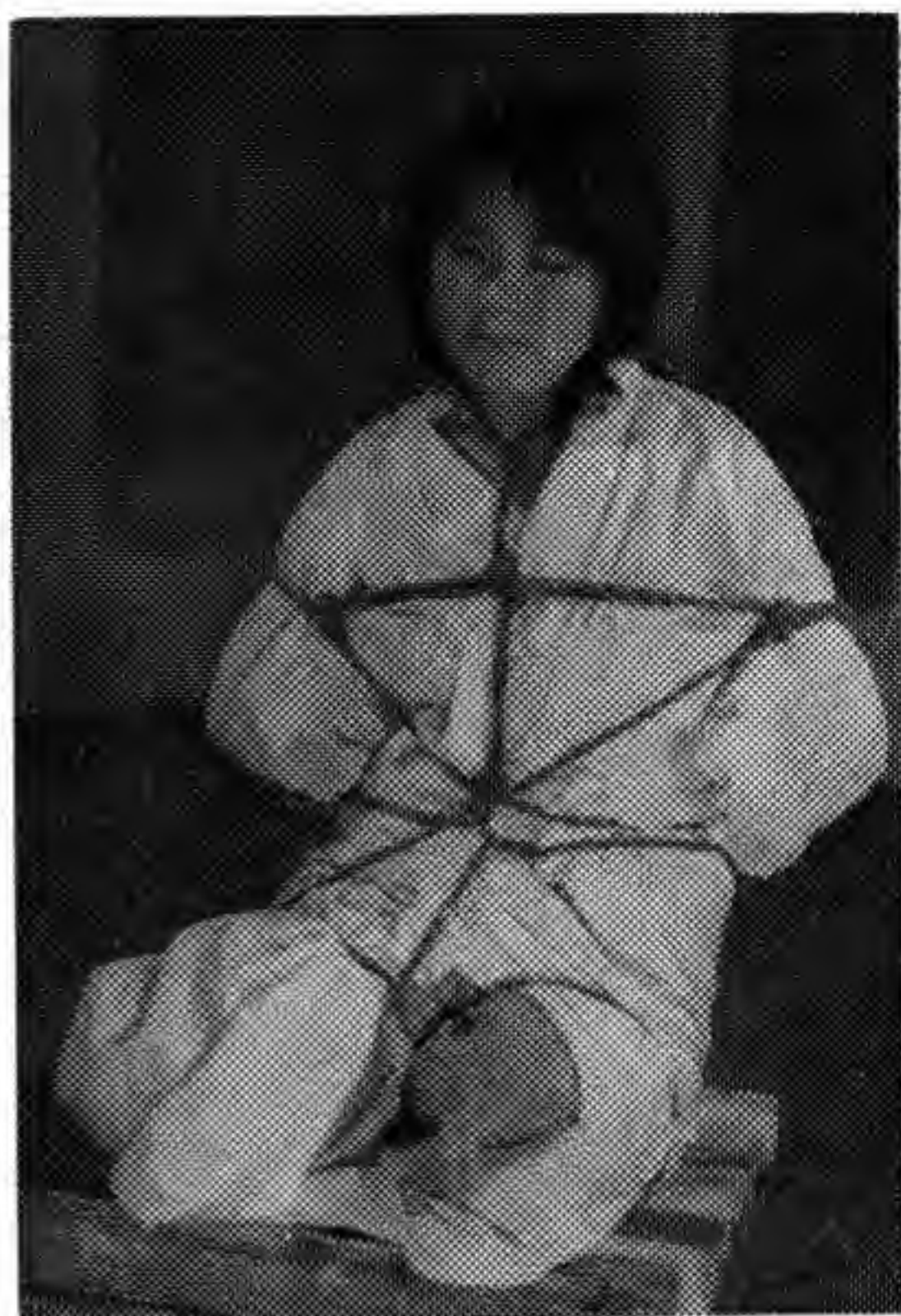
室井亜砂路画



進下さるよう期待いたします。

最近、雄山閣から名和弓雄という人が「拷問刑罰史」という本を発行されました。特に目新しいところはありませんが、よくまとめられております。同氏はあとがきで、資料転載は雄山閣版拷問刑罰





史よりとかけば自由とかかれており結構なことと思います。ところが同書の図版は殆ど出典を示しておりません。特に新しく書いたと見られる図版や口絵の写真には小森白監督「日本拷問刑罰史」によったと思われるものが多くあります。或は著者又は画家が同映画製作に従事した等の事情があったのかも知れませんが、出典としてあげるべきではないでしょうか。

ともかく小森監督の事業は西のヤコベッティに対抗すべき歴史的な重要性をもっていると推賞する次第です。

(写真は犬塚啓子)

## 縛りABC H・N生

○縛りは後手縛りに限る。  
○被写体は全裸か裸着用に限る。  
○菱縄は只単に引っかけるのは不可、結び目はきちんと結ぶこと。

○縄尻は必ず固定して始末する。結ぶところがなくとも写真の外にはみ出しておけばよい。  
○正面或は斜め正面でもよい。おとなしく正坐して縛られているもの。正坐の姿は可愛らしい。

## オムツ……マニア

宇都宮 武

どうしても本物のオムツをしてオムツカバーをしてみたい。そう思うと善悪の区別もつかず、散歩を装い、よその家に乾かされているオムツと赤坊のするオムツカバーを黙って借りてしまいました。今考えれば、よく見つからずに済んだと、つくづく自分の運のよさに驚いています。もちろん赤児用のオムツカバーは、合いつてありませんので、すぐ川へ捨ててしまいました。オムツはその後母に見つかってしまったので、家人の気づかぬところを転々と隠し、誰もいない時、こっそり股にあてがひ、時々濡らしたものでした。

こうなったのも、私が末子で甘やかされたからでしょう。しかし私のような人間が、この世で珍らしく末子はどの家庭にでもいるということを考えれば、やはりこゝろなつた理由は解らないのです。母に見つかってしまったからは何か人生が嫌になり、逃避的にもなりましたが、高校入試に失敗して三流校にまわされてからは、よし大学では負けないぞ、と勉強に励みオムツのことも二年間ほど忘れかけていました。そんな或る日母が読みかけていた婦人雑誌をめぐってゆくうちに「主婦の友売店案内」という文字が目につきました。そこで見つけたのが「病人用おしめカバー、家で寝たきりの御病人の方に、このおしめカバーは大変喜ばれています」という案内記事です。オムツへの情熱が再び心の中で火をふいたのは言うまでもありません。そうです、やっと見つけた自分にもピッタリのオムツカバー、そう思うと居ても立ってもおれぬ気持ちでした。しかし、それを買うに行くのは、大変恥しくてとても出来ることではありません。その上「主婦の友売店」は婦人の客ばかりで、男はほとんど店員だけという場所でした。そうこうしているうちに大学入試の試験日も近づき、再び第一志望は不合格でしたが、まああのとこに無事合格。浪人する気にもなれず、入学式を迎えました。が、その大学が主婦の友社に近く近いので、思い出すのは病人用オムツカバーのことばかり、とうとう意を決して買いに出かけました。



## サロシ楽我記

辻村 隆

(第三十一回)

友人のI氏から電話があつて、大阪のミナトダイコウミュージックで、スゴく面白いショウがかかっているから、是非後学のため見にかれたらと連絡して来た。いつまでやっているのだと訊ねると明日でお終いとの話。突然で、それじゃ無理だと思つたが、話をきいて見ると如何にもSM的興味にそそられる。

アブノーマル演劇と銘打って、サジスチック正統派という看板のみで、男女二人の氏名は覆面で伏せてある。何でも関西初公演らしい。I氏の見聞によると、パイントマイムの三十分間、さながら夫婦プレーをまざまざと眼前に見せつけられる思いだったという。

青木順子の亜流らしいが、女はそれよりもポリウムもあり、アクロバットダンサーらしく、アクロの踊りもたしかだし、男性も精力的だそうである。舞台にはマットレスが敷いてあつて、パイントマイムの夫婦のSMプレイめいたしぐさのあと、緊縛は後手の股縛りで、腹部を力一杯くびれるぐら

いにしめつけて、しかも片脚うしろ海老責めで、蠟涙を乳房から胸腹へと垂らしてゆき、内股へ押しこんで消してしまふという凄惨ぶり。鞭うちも本物で、ピシピシと体に突きささり、鈍く激しい音がまぎれもなく場内を圧しているという。パイントマイムの三十分で聞えるのは、女のその刹那の呻きと悶えと苦悶の叫喚だけだったという。I氏は次回には早速知らせるから、カメラ・ハントとして、彼等と逢つて欲しいと言う。明日打上げでは私も体がぬけず如何ともし難く、次の機会を約して、大休右のような内容のみを聞いておいた。御存知の方もあつたかも知れないと思うが、精しくリポートしていただければ幸いである。

× × ×

京都のT氏の懇望もあつて、岐阜の水野弘氏を紹介したら、早速遠路遙々訪問して、その夜忽ち、夫婦プレーも、T氏自身と水野夫人とのプレイに突入するという早業をやらかして来た。彼の行動的な性格にはいつもカブトを脱いで

いるが、友ありと聞けば、千里の道も遠しとせず出掛けてゆくT氏の土産は、腰の重い水野弘夫妻を岐阜の山奥から、近々引っ張り出してくると言う朗報だった。十一月中旬、どうやら私を初めて訪問することになるらしい。彼も奇くでは近頃は幾分忘れられた存在だが、強烈な生首フォトでデビューした頃は、新宮氏と共に嶄新な風俗を吹き込んだものだった。T氏も交えての三者三ツ巴のカメラ・ハント出来る日も、そう遠くはあ

× × ×

増田みゆき夫人の八カ月妊婦フォトは所要があつて、残念乍ら箕田編集長と同行出来なかった。八カ月に既に臨月近いふくらみに、増田氏は気掛りになつて、レントゲンをとったところ、双生児との事でびっくり仰天。喜んだり間誤ついたり、あわてたりで、バタバタしているらしい。ザ・ピーナツ内臓の妊婦フォトなんて、そうそうザラにあるものではない。又と得難い貴重なるフォトの資料ではなからうか。

× × ×

所要で京都へいったついでに、フト思い立って、久し振りに美木

代理部だより

○十二月号の目次裏で広告しました限定版グラビア写真集「緊縛美態代表作品一二〇葉」は予告の通り十一月四日に完成、直ちに予約お申込み方へお送りしました。

○待望久しい△花と蛇▽の臨時増刊号を愈々十二月上旬に発売いたします。四馬孝の十六頁の巻頭口絵を収載、本文は続篇第一回より現在に至るまでの決定版を掲載いたします。定価は五百円、予約お申込み下されば、送料負担の上、完成次第お送り致します。

○双生児を孕んだ増田まゆみ夫人の妊婦フォトは、異様なばかりに大きな妊婦腹として非常な評判を呼んでおります。現在までのところ、まだまだお申込みは軌道に乗っていないようですので、今後の御注文をお待ちいたします。

○最近郵便局留にて郵便物を受取られる方が増えつつあり、殆ど円滑に受渡されております。しかし中には指定の局名を思い違いで書いたり、或は途中で局の変更を申出られたりする方がありますがこれは困ります。尚、留置期間の十





私の「汝魔苦美帖」より 前川成雄

乃々子に電話したら、運よく在宅近く結婚するらしい口ぶりだった。私の方から切り出さない先に彼女からM性のある女友達を紹介しようかと言ってくれた。願ってもない幸いと、彼女から住所をき

き出して、早速手紙を出したら、昨日その返事がきた。安井千賀、年令は書いていないが文面から察してかなり教養がある。現在二条辺りの医薬品問屋の会計をしているとか。同時か夕方七時過ぎから

なら、お目にかかってよいのと。どうなるか未知数だが、兎も角カメラ・ハントのネタが又一つ出来た。近々一度当って砕けるつもりである。

△短歌▽「羞恥責」 高村初子

おそいくる尿意にひとりみもだえぬほくそ笑みつつのぞく眼知らで

無理じいに飲まされしビール今すでにそのきざし見ゆたえがたくして

必死にて耐ゆれど空し限界の女の生理いま行かんとす

縄尻をとられてまたぐそれすらも耐えがたきけりおみななりせば

冷えびえと腰にはい寄る冷たさはなおいや増せりゆばりのこころ

ざらざらとコンクリートの壁粗らくいましめの身の肌にあふれつつ

足首をみだらに開きくぐられぬ縄目の黒さちらと目に入る

目の前の便器を見ては今さらにさっきのビールくやみつついる

無理じいのビールは今や死にまさる羞恥となりぬ便器をまえに

悲しきはおみなな生理手洗いの行いすらも責めの手となる

おぞましき指指のいたぶりに無垢のむすめの悲鳴こだます

日間というのは、十日経ってから受取りに行くという意味ではなくその局に郵便物が到着してから十日間置いておくわけです。

○既刊号の在庫は順次減少し売切れが増えてゆきますから、御注文の際、第二希望品がありましたらお書き添え願います。以前の雑誌に広告しているからということでお申込みにならないで下さい。

○本誌の旧号御所持の方で処分してもよいと思われるお方は御一報願います。年月号と代金又は交換写真の御希望を御申添え下されば折返し御返事いたします。

○速達料を加算されます際、御留意願いたいことは、速達料は二〇〇瓦まで50円、五〇〇瓦まで70円です。雑誌一冊につき70円になります。雑誌と写真は第三種、第一種と別包となります故、従って速達料も別々に計算願います。

○切手代用にて御送金の節は一割増にお願いします。相変らず切手の一部を紙に貼りつけられる方がありますが絶対に貼りつけないよう少額切手にてお送り願います。

○雑誌の送料は、新刊既刊に拘らず一部につき20円御負担下さい。但し三カ月分以上予約御注文に限り当方にて負担いたします。



## マニア通信

## 走り書きのまま

夜乃探郎

すくなくとも小説とよべるものは、その数はK誌にあって僅かである。その中に、前よりばくは麒麟児久氏の創作を入れていた。初期の物には駄足がめだち構成もスツキリしなかったが（文章も荒けずり）、モデル小説をへて、物語性を重点とした最近作より、そこに大衆性と通俗性が、氏独自のエロ味と面白いという要素も、より発揮されて、ここに団氏の後継者としての成長株が濃厚になってきた。大衆席の一人でもあるべくにとって、実にうれしいことだ。

氏にとって、団氏のように大型作家となり「花と蛇」に迫るパンチのきいた長篇新連載を執筆する時こそ、氏にも作家としての関ヶ原であり、ばくの最も期待する所でもある。またそこに、K誌の小説陣の新しい白熱した展開と発展を見る。

◇

ようやく近頃になって、ばくの文章を本当に理解してくれるマニアが出てきたことはうれしく楽しい。十二月号では、「マニア通信」の麒麟児氏の一文は、ばくの孤独な気持をやわらげる。

天道公平氏へ

よく学生時代にいじめられた旧師は、大人になってみると懐かしいものです。

いま、読める雑誌になり、一層の発展がなされている時、ばくは乱文乱筆のあの頃の、氏のばくに對する鋭筆が懐しく思い出され、うらみは少しもございせん。

御健康と、いつまでもK誌の御意見番として御健筆を。

黒井珍平氏へ

最も公平なるエッセイなどを書かれていた良心派たる氏に、ばくの「SM的自殺論」をほめられたことは、心から感謝致します。あの「——自殺論」はヤブレカブレの文章で、とても立派な代物ではありませんが、その底に流れるばくのロマンをよみとって、そうほめてくれたものと受けとりうれしく存じます。

「コレクター」という映画、ばく



「逆さ吊り」にされたモデル

山本一章氏提供

も見ました。そして夜の街を、その感動のまま、さまよったことを覚えています。しかし、あのような異常美（詩）を、とても望んでも、ばくの創作に流すことが出来ないのが残念です。

木戸川健氏へ

「奇ク番外地」を見た。大兄の御健在を知って実にうれしい。相も変らぬ達者な文章一気に読んだ。

——この感激は、遠くを見つめる所か、いまばくの瞳はパッチリあいてる。カムバックをナミダが出るほど……。木戸川健氏のために、祝杯を捧げたい。ブラボー。

## 秋の香に誘われて

藤村美香

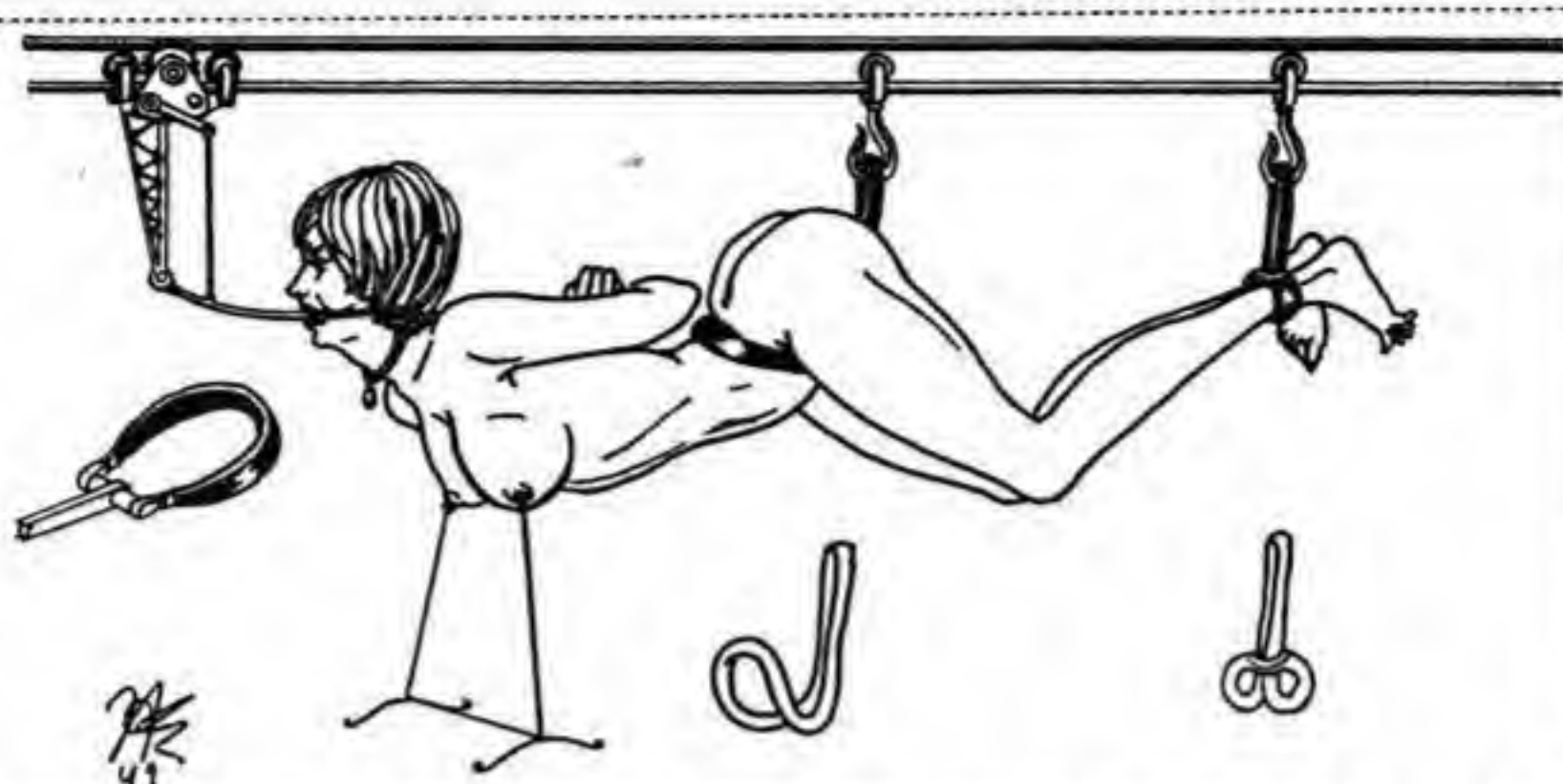
すがすがしい秋を迎えて皆様方にはその後如何お暮しですか。ご機嫌うるわしくお越しの御事と存じ上げます。長らく御無沙汰申し上げておりましたが、決して奇ク誌のお友達を忘れていたのではございません。いつも思い出しては本当に懐しく毎月愛読させていただいております。夏の間中は海水



浴プールと水泳ぎに熱中し、すっかり肌も陽やけしてしまい、只今

# 新案女体責具

千葉青鬼



レモンやタマゴパックでお肌の手入れに余念がない有様です。奇ク誌は手にとるなり、やはり読者通信に目が参ってしまい、勝手なことをいうようですが、誰方でも結構です、私の通信にご返信が欲しいのです。寂しいのです。今月号では、はからずも奇譚雑誌「夜の徒然草」の中宮栄さまがお話しかけて下さいましたことで、私にとりまして大変な喜びで一杯でございます。私は貴方さまがおっしゃる深夜は、ほとんど外出いたさないことにいたしており、残念でございます。連絡場所を良く御指定の方がございますが、私としましては余り芳しい気持ではございません。何にかもっと好ましい方法はないものでしょうか。今までにお友達に誘われまして二回バーへ入ったきり、勿論キャバレー、ダンスホールなど行ったこともございません。案外孤独な性格でございます。きっと私の浮き心はM性にあるのはまちがいないと存じます。その方がはるかに強いのではないのでしょうか。決して華やかな性格ではありません。これは一つには育った環境にあることはいまでもありません。継母でした母は、私の靴の脱ぎ方から襖の開け方、歩き方、と本当に

良くいわれる箸の上げ下しにまで注意いたしました。というより、それが折檻の材料になってしまっていたといつて良い位でした。京都の或る老舗育ちの母は、たしかにお行儀の良かったことは私も認めざるを得ませんが、私を責めるお仕置の厳しさと申しましたら、只今想い出しても母はやはりSだったと感ずる程です。又週に一度か二度しか帰宅しなかった父に対するヒステリックな気持も手伝っていたかと思われまします。恥しいことですが、いつも丸裸にされて腰紐で両手足を縛られ一尺差しでお尻をめった打ちです。本当に泣き止むまで打たれたものです。それとお灸です。あまり人目につかないところですが、その灸痕は今でもございます。その頃は小さかったもので手足の指と指のつけ根などにすえられる時など、本当に指がもげてしまいそうに感じたものですが、不思議に今ではその当時が懐しくさえ感じ、一種の悦楽となつて心疼くのです。「お灸に憑かれた私」を書かれた白浜律子さまがおっしゃられるように、あの熱さからくるしびれるような歎びは、到底お灸をすえて

みたことのない人にはおわかりにならないと思います。白浜さまはご病気からお灸がセックスにつながるMを芽生えさせ、私は全く反対にお仕置からM女性として成長いたしました。

東京のこんなマンションの片隅にもコオロギの声を耳にいたします。秋も虫の音とともに夜毎深まってまいります。私の大好きなカーメン・キャバレロも来日いたします。小さい時、ピアノのおけいこをサポートしてお仕置されたことも思い出されます。ミロ、ルソーの展覧会もでございます。秋は又読書の秋でもあります。誰方か何にか素晴らしいお便り下さらないでしょうか。レター書きましょう。奇ク誌の全国の恋しい恋しいお友達、せひせひお便り下さいませ。お願い申し上げます。そんなことめんどろ、そのものずばりで行こうとおっしゃる方もおいででしょう。誠実で紳士的なお方なら、私、いつでもお会いしても構いませんが、誌上に最良の連絡方法を、ご明記なさって下さるよう。都内近郊のお方ならば、これにこしたことはございません。

(東京赤坂・藤村美香)



## 「縛られてみたい私」

河森 真理子



前文ごめん下さいませ。先日ふとした機会に御誌を拝読し、こんな世界のあることを始めて知り、ほんとうに安堵しました。と申しますのは、私のような奇妙な性癖のあるものは自分では異常ではなからうかと、ひとり案じていたのでございます。

正直申しまして、私は高等学校を卒業した頃より、私のようなものでも、誰かうんと思いきり縛って虐めて頂けないものかと、そればかり考えていたのでございませう。手当り次第の乱読ですが、特に角田喜久雄の小説の中に出てくる、可憐な娘が、野獣のような男や非人、雲助などに責めさいなま

れるシーンをよみます時は、ジョンと体の芯までしびれるような陶酔を覚え、私自身あたかも、その小説中の女主人公にでもなった気持で、その小説の物語の内容をばみ出して、被虐のシーン許りを空想で際限もなく追いかけ、果ては自分のおしりをむき出しにしては紐やバンドで自分を叩いている私を発見する始末です。

カメラ・ハントでは、辻村隆様が、次々と美しい方を毎月縛っておられますが、若し私のようなものでもよかったら、一度で結構ですから、その仲間のハシに加えていただけたらと、はかない希望を抱いております。如何なものでこ

## 女のせり市 朝立ち

(三)

沼田 市郎

けちな金平は決して女達に情をかけて、こんな旅仕度をさせているわけではない。本なら一糸まとわず裸で送りたいところだが、売れるまでは大事な商品だ。傷つけては損をするので細心の注意を払い、その上安あがりにと考えたしたものだった。

年増のお米を先にしたのは、馬のすぐ後は途中、馬の小便や埃でよごれが一番はげしいからでありとにかく商品価値の一番低いものを先にするのであった。しんがりの太った女は、女郎あがりの妾で

あったが旦那が商売に失敗し、身代限りとなったため、金平から借りた金のかたになった女だ。齢もすでに三十六、目方は今迄のせいと暮しのせいか十九貫はたっぷりある。ただ歩くのさえ大儀そうで、歩き出す前から息をはずませている。これをしんがりにしたのは、道中一番早くへこたれるのはこの女と考えたからだ。遅れそうになれば、どうしても辰の青竹がとぶ。少々傷がついたって、年増だし、どうせ高くは売れまいという金平の計算だった。







ざいましょうか。

カメラ・ハントという、大それたものでなくとも、若し私のような者でもよかったら、皆様の中で一度私を縛って頂く方はいらっしゃらないでしょうか。

私の好みは縛られて、おしりの軽いムチうちも、少し息苦しくなるくらいのもつわをはめてもらって胸のふくらみを責めていただくことです。着衣でなくとも構いません。責める方の好みによって全部ぬいでもいいと覚悟致しております。

余り苦痛でなかったら、逆吊りや、宙吊りも辛抱出来るかと思えます。

お仕事のつごうで、月曜日は休んでおりますから体があいております。

身長一六〇センチ、体重五二キロで少し大柄でございます。容貌は自分ではまあまあだと考えております。年令はお許し下さい。

私の住所は堺市の宿院の近くですが、勤務先は大阪市ですので、お逢いするのは、なるべくは大阪市内の方が都合よろしいと存じます。私の方のお願いとしましては

- 1、体にあとに残るような傷をつけない事。
  - 2、相手の男性の方は、なるべく既婚の方。
  - 3、一切の費用を負担していただく方。
  - 4、写真をお撮りになった時、そのフォトを一枚宛いただくこと。
- 大体以上のようなことですが、編集部様にて辻村隆様か団鬼六様を御紹介下さるなら最高と存じます。何卒一日も早く私の願いをかなえていただけるとを祈っております。同封の写真は一カ月ばかり前に勤務先の屋上で撮ったものでございます。

△カット・

山岸三郎▽

先月のしんがりには四十すぎの女だった、これは途中で気を失うこと数回、遂に引きずったまま熊谷に着いたが全く売物にならず、金平は損をしたばかりだった。

中の三人は今日の上玉であり、齡は二十六と二十一、十八であった。若いのは宿場女郎として高く売れたが、年増となると精々飯焚き婆あか農家の手伝女がいいところだった。金平にしてみれば、この姿は最高のお仕着せというわけだった。

馬につながれた五人の女は大きく肩で息をしながら、赤いじゅばんに腰巻一枚、水色の手甲脚絆に白足袋をはき赤い緒の草履を足にくくりつけたあわれな姿で出発を待っていた。

見物人も次第に数を増し脂ぎった金平の顔は得意そうであった。

## 黒井珍平氏へ 編集子

本誌に始めて「僕の記録」を投稿された頃は紅顔の美青年であった貴下も、すでに二児の父親になられたとは転た年月の経つの早さを感じさせられます。私信いつも楽しく拝見しています。お求めにより誌上にてお答えいたします。

子分の辰も低い鼻をピクピクさせて笑っている。見物人の中には女の顔を見ようとして笠の中をのぞき込む者もある。まるで女囚の引廻しか晒であった。

金平が馬に一むちあてた。馬はゆっくりと歩きます。手錠が手首に喰い込んで思わず笠の中の顔が苦痛にゆがむ。痛みを少くするには、馬にひきずられないようにすることだった。こうなったら、もう恥しいも何にもあったものではない。しんがりの太った女の息づかいが、だんだん激しくなってきた。辰は背竹で背中をぐいぐい押した。

「いたた……ひいっ」

道の両側の家々からも人々が顔を出す。往来も夜明けとともに、行き交う人が次第に多くなった。

△次号は「中仙道」▽

新聞、週刊紙からの引用や転載は出処を明らかにさえすれば著作権法によっても認められておりますので、結構だと思えます。貴下の神経質とさえ思われる鋭い感受性に対しては、大いに敬意を表しており、十年前の如く本誌に新風を吹き込んで下さることを、心より期待しております。



## 映画通信

## 「続荒野の用心棒」

鈴木省吾

イタリア製西部劇「続荒野の用心棒」の試写会に招待され鑑賞してきましたが、西部劇特有の残酷な殺人シーンや凄絶なリンチシーンが随所に盛り込んであって、なかなか見てたえある映画でした。

元南軍のアメリカ人一派と革命運動を続けるメキシコ人一派の対立するメキシコ国境近くの小さな村がこの映画の舞台です。

まず冒頭から、マリアと呼ばれる白人とメキシコ人の混血美女の鞭打ちシーンがはじまります。組み合わせた丸太に荒縄で両手を万才の形に縛りつけられた上、着物を引き裂かれ、背中を剥出しにされて、先が細かく分かれた皮の鞭を受ける。白い肌に赤くミミズ腫れが出来るところなど、カラーがきれいなせいか迫力があり、マリアの苦悶の表情もまた一段と私を

楽しませてくれました。

この女優はロレダナ・ヌシアクといってイタリアのモデル出身です。だからスタイルがよいのは勿論ですが、特に見事なのは彼女の鼻です。ソフィア・ローレンとオードリ・ヘップバーンを一緒にしたような鼻といえば、あるいは想像できるかもしれませんが、鼻責めに興味のある方の喜びそうな、責めごたえのある立派な鼻です。もっとも、この映画の中では、そんな鼻責めなどある筈もなく、ただただ、息をつめてその偉大な鼻にみとれていた次第です。

その他、酒場の娼婦たちの、ぬかるみの中の泥まみれの取っ組み合いや、人種偏見を持つアメリカ人少佐が、年貢を納められない土民を捕えてわざと一旦逃がし、懸命に逃げようと走る彼等を、面白半分に、一種のゲームのようにして撃ち殺すといった場面があります。また逃げ遅れた牧師くずれの男が、メキシコ人達につかまり、耳をスッポリ切り取られた上、背中を撃ち抜かれて倒れるところや機関銃による大量殺人シーンなどスリル満点の連続ですが、圧巻はなんといってもラスト近くに、主人公早撃ちジャンゴが受けるリン

## 「ボクの責め方」

宝塚二三夫

ボクの事務室の一隅で、たわむれに手首と足首と口とを軽く括つてみたときのスナップです。



チシーンでしょう。

彼は昔の仲間であったメキシコ人一派のボスの用心棒となり、彼等とメキシコ政府軍営舎を襲撃し政府軍の貯えた黄金を掠奪するところに成功したが、約束の前金をボスが渡してくれないので、隙を見てその黄金を盗み出しマリアと一緒に逃げ出す。しかし結局捕えられ、二度とピストルを持たないよ

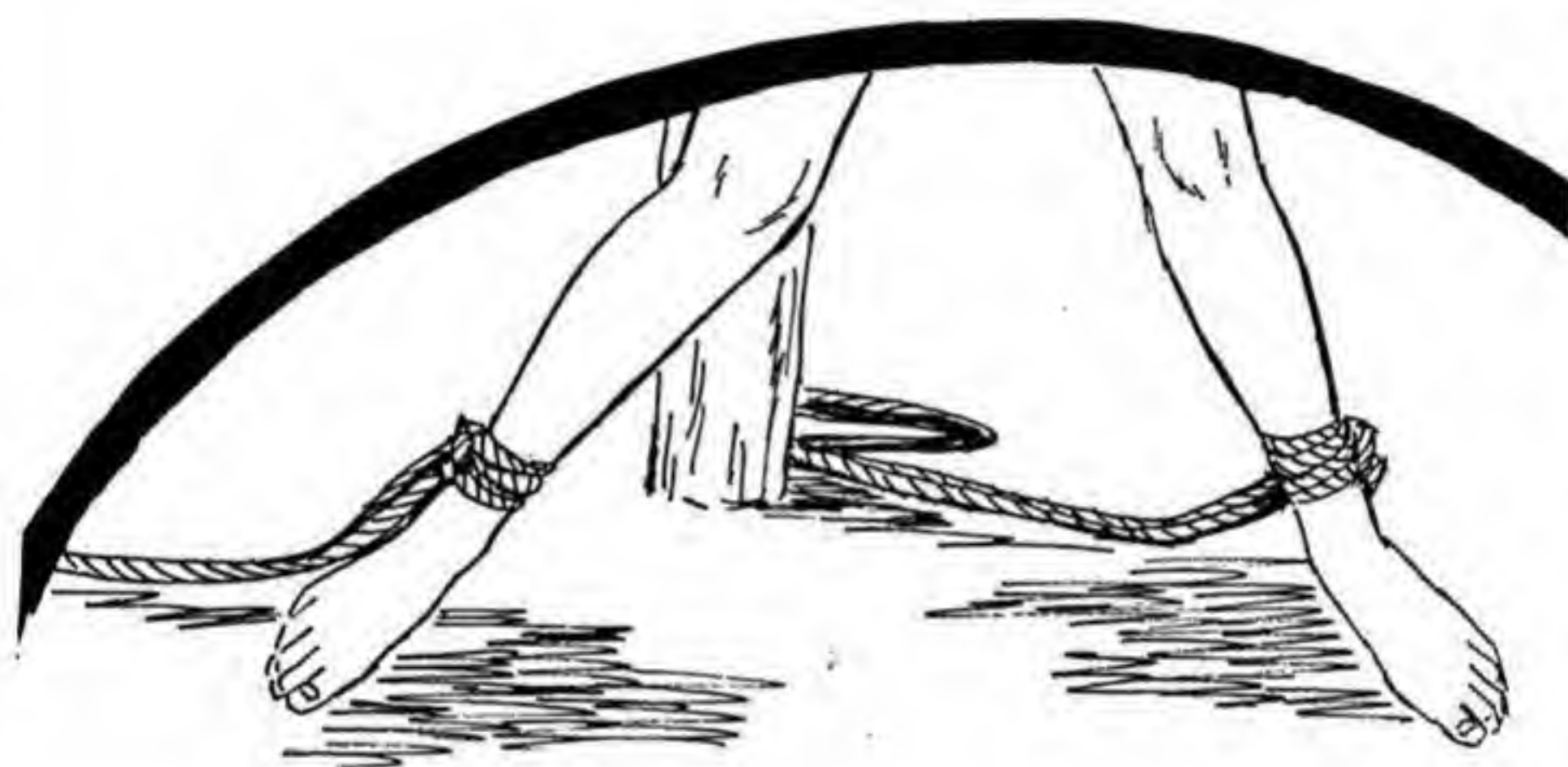
う銃の台尻で両手を砕かれた上、更に念入りに馬の蹄で踏みつぶされるのです。まったく残酷きわまりない場面ですが、いよいよこれから、この両手の動かないジャンゴと、それを知った彼に恨みを持つアメリカ人一派との決闘シーンが展開されてラストの緊迫感を盛り上げるというわけで、最後までハラハラのしどおしでした。



# 奇 譚 ク ラ ブ

昭和 42 年 新 年 号

(1967年・新年号<第21巻第1号・通刊第223号>)



## 本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



## 「可愛い悪女」

辻

村

隆

「可愛い悪女」

青木順子との出会いがきっかけとなって、筆をとり始めたカメラ・ハントの最初の意図は、連続のシリーズものではなく、謂わば私の興の赴くままに、気軽にカメラを愉しむつもりであったのに、箕田編集長が勝手に、毎月の連続シリーズにきめてしまった為、私はカメラ・ハントのためのハントに追い廻される仕儀になってしまった。勿論、私のハントだけでは、世間の女性群とてそうそう甘くもないし、いい話も転っている筈もない。編集長自身、大いに私に協力してくれて、奇クへ申込んできた女性も、私のために随分提供して貰っているから、余り文句のいえた義理で

もないが、それでも時によると、ポツカリと空間があいて、来月号のハントの締切りが近づいても、おいそれとハント出来そうにない時もある。箕田氏の再度の電話で、私も大分イライラしている。どうやら今月は果報は寝てまで式ではいられそうにない。私が余りバタバタしなかった理由のひとつは、今月初めに、東京から紫千鶴さんが、来阪するようになっていて、彼女の対談と、あわよくばカメラ・ハントを撮る気でいたのである。それが彼女の一身上の都合で、ここ数カ月見込薄になったので、急に予定が狂ってしまったのであった。ひとりの女性を毎月いろいろと角度

を変えて追及するのなら至ってらくである。それなら、小原真澄だって、増田みゆき夫人だって、伊吹真砂子だって、etc……いくらでもいるのだが、出来得る限り、毎月次々と新鮮な未知の女性発掘となると、そうそう容易なことではない。

そうだ伊吹真砂子——、ひとつ彼女に頼んでやろう。あの気のいい真砂子に頼めば、或いはうまくゆくかも知れない。天啓の如く瞬間ひらめいた、奇抜なアイデアに、私はもう待てしほもなく、彼女の勤め先のダイアルを廻していた。

奇抜なアイデア——。それは追々と分るで



しょう。釣師がエサを投げる、その方法についてであるが……。

× × ×

「急に又どうなったの。辻村さんの都合のいいときだけ電話かかってくるから、間誤つくないの。日頃はハナもひっかけず、お見限りのくせに……」

「そう言われると一言もないネ。いざとなると姐御を呼出さないと話にならないからネ」

「アネゴなんてなんよ、人を莫迦にして……」

ところで又何かたくらんでいるんでしょ、チャンと顔に書いてあるわ」

「お察しの通りだよ。まあ、どんどん喰べてくれ給え。いくらでも奢るからさ」

「オヤオヤ、その代りアトが怖いんでしょ」

伊吹真砂子の会社が退けた午後七時。ミニミの食堂ビル「ドウトン」の三階での会話。

例によって彼女は実に気のいい女である。

私の意図が薄々分っていたにしろ、口では何かといいながら既に協力態勢に入っている。

彼女の旺盛な食欲が、それを如実に物語っていた。私が今、心の中で考えている、奇抜な

アイデアの協力者は、おそらく伊吹真砂子以外には見当らないであろう。

「で、私、何をすればいいの？」

口の廻りをナプキンで拭いながら、彼女は満腹と共に、頬もほころばせてきいた。

「明日、土曜日だから午後から交際<sup>つきあ</sup>ってもいいだろう。実をいうとカメラ・ハントのタネ

切れで、お手上げなのさ。それでひとつ釣つてやろうと思つてネ、考えついたんだが」

「どんな悪だくみの、じらさないでスッパリと白状してしまいなさいよ。どうせ狂言廻しにしか役に立たない私なんだから」

「そうひがむんじゃないよ。じゃあ、思い切つて言うか。君にデパートのトイレに入つて

もらつて、私の撮つた、緊縛のフोटを二、三枚さりげなく落していつてもらうんだ」

「わざと？」

「そう、わざとさ。裏返しにしてネ。それで君は鏡に向つて、化粧直しをし乍ら、次に入る女性の動向を窺がついてもらう。女性が

出ると、間髪を入れずトイレに入つてもらつて、緊縛フोटがどうなっているか調べても

らうというわけさ」

「そりゃ誰だって、ヒョンなものが落ちていれば見るでしょう」

「そう、確かに見るネ、問題はそれからだ。仮に見たとしてだよ、元通り裏返しにしてお

いてあれば、その女性に脈はない。多少位置

は変わっているかも知れないがね。しかし、そのフोटが亡<sup>な</sup>くなっていた時は、エサに引つ

掛つたんだよ」

「エサに？」

「そう、フोटはエサなのさ。待ち去つた女性

性は、緊縛フोटに対して、大なり小なり関心を示したことになる。とすると、もう占め

たものだ。私に連絡してもらつて、二人でその女性のあとをつける。頃合いを見計らつて、君が声をかける」

「私が？ いやだわ」

「まさか、女性トイレで拾つたフोटに、男性の私が声をかけられないだろう。そこが協力して欲しいところさ。ネ！」

「それで、どう言うの？」

「うっかりトイレにフोटを落して、すぐとりに戻つたら、あなたが出て行かれました。

恐れ入りますが、私のフोटをお返し下さ

いて——」

「私の？」

「ウン、緊縛フोटは真砂ちゃん、君のスゴいのでやるつもりなんだが……」

「ますますケシカラン話ネ。それで素直に返えしたら？」

「それまでさ。そこから先きは、当ってみな



けりや分らんさ。要するに相手の出方次第だからネ。しかし、兎にも角にも、雑踏の路傍から、一人の緊縛に興味を覚える女性は発見出来るんだからネ。筋書はそこまで。それから先のことは、当意即妙、謂わば当って砕けるだよ。どう、やってくれる？」

「辻村さんのH思想も、ここまでくるとダブルになって、シンニユウがかかるわ。ようまあ、そんなこと考えつくわネ」

「勿論、君という、イダイなる協力者あっての可能なるストーリーなんだがネ。その女性の、その刹那の顔、これは見ものだぜ」

「分ったわ。外ならぬ辻村さんの頼み、OKしたげましょう。せやけど、こいつはタダではすまないぞ、うまくいったときは……」

「皆まで言うな、じゃあ明日、ナンバのTデパートの入口で午後一時、いいネ？」

× × ×

十月二週の土曜日、車をデパート裏の球場の駐車場に預けて午後一時。準備万端怠たりなく、私は黒いバッグを提げた背広姿で、デパートの正面に立つ。昨夜おそくまでかかって仕上げた、伊吹真佐子の強烈な緊縛のフोटが、失敗を慮んばかりで、五十枚きっちり入れてあった。しかし万一の場合を考えて、

内容の極端なものは一枚もない。せいぜい過去の奇クのグラビヤを飾った程度の安全なものだ。最初は露出の方が、より効果的とも思ったが、伊吹自身、幾らなんでも、自分の露出フोटを、他人に見られる恥かしさを思えば、少し残酷めいて、それはやめることにした。

五分おくれて、約束通り、伊吹真砂子はキヨロキヨロし乍ら、地下鉄の通路から昇ってきた。何しろミナミのうちでも、有名な雑踏と雑踏の場所柄だけに、こんなところを選んだで私自身、少し後悔していた程だから、伊吹真砂子も、私を探すのに随分骨を折るつもりでいたに違いない。運よく私の方が先に見つけて近づいていったから、私を素早く認めて彼女はホッとしたように、その場に立止った。デパートの食堂街で、慌ただしい昼食をすます。せせこましい猫の額程の店内では、碌々話も出来ないし、既に座席のない客が、私達の周辺で佇ずんでいるに於ておやである。早々に飛出すと、伊吹真砂子は、一寸情ない顔付になった。

「こんなに混雑しては、どの階のトイレもきつと満員よ。昨日の話のように旨くいけるかしら？ 私心配になったわ」

私も同感であった。このデパートは余りにも人が多すぎる。これじゃ、トイレも腰を振って尿意をこらえる女群で列をつくっているかも知れない。何しろ買物はしなくとも、デパートのトイレに駆け込む女性の多い当世である。河岸<sup>かし</sup>を変えるところ。

「日本橋のMデパートに行こうか。あそこなら空いているかもれない」

真砂子はうなずいた。家具問屋街をぬけて堺筋に出て、Mデパートに入る。Tデパートの雑踏にくらべて、ここは又いささか淋しすぎるくらい少くない。一階はそれでもかなり混雑しているがエスカレーターで階を上るに従い、客足はマバラになってくる。

女性用下着、ランジェリー、服などの売場の階を選んで、私達の怪しげなる作業はいよいよ始まる。

トイレはおきまりのように、紳士用と婦人用とに真中で区切られている。私は心を落付けるため、とりあえず紳士用にて用を足すことにする。体内の身慄いに似たコウフンが、さしてしたくもないのに尿意を覚えるとは、まさに初舞台に昇る人に似た、心のときめきでもあろうか。むき出しでは渡しにくからうと、あらかじめ五枚ずつ一組にして、封筒に





写真 A V

いれて封をしておいた。五枚一組の封筒を十組もってきている勘定である。同じものを十枚ずつ焼けば忽ち十組出来るが、それは私のSM的良心？が許さない。五十枚のフオトは全部真砂子の異ったポーズ許りであった。

一組の封筒をさりげなく手渡すと、流石に彼女の顔に真剣な表情が走った。いよいよ賽は投げられようとしている。エサにかかった女性が現われた時は、咄嗟の合図に後頭部を撫でることにしてある。ダメならアゴを二、

三度こする。これは口では言う間のない時のことであるが、混雑にまぎれて、折角かかった獲物を見失なわないためである。

真砂子は婦人用トイレに一旦入って、又すぐ出てきた。

「化粧中が二人、三人許り御使用中、あいたトイレは一番奥の一つ手前。いよいよ実行するわよ」

必要以上に声をひそめて、真剣な声で囁やくと、気負って彼女はトイレに再び消えた。

私以上に、彼女も緊張し、妖しい期待に胸を弾ませているのかも知れない。

中年の婦人が一人入る。若いBGが一人入る。つづいて女の子をつれた三十過ぎの奥さんタイプの婦人が子供連れて入る。女学生が一人出てくる。Mデパートの制服の若い娘が慌ただしくかけ込んでゆく。従業員専用がある筈なのに辛抱できな

いのか。

伊吹真砂子がチラリと顔をのぞかせて、眼顔で置いたと合図すると、忽ち顔を消す。

ドヤドヤと四人の若い娘が華やかな雰囲気なまきちらして入って行く。私はドキドキする。それ以上に真砂子は緊張しきっているかも知れない。

十分ぐらい待ったが、余りこんな場所ではんやり待っているとどうも恰好がつかない。少しイライラし始めた頃、彼女はアカンといった顔で、のっそり近づいてきた。

「どう、うまくいった」  
声を押し殺してきく。

「四人連れの女の子、化粧が長い。あのうちのひとりが、例のトイレに入ったので、出て来たあと、すぐ確かめにいったら、位置は変っていたけど、その俤放ってあったわ。あのあと、四十ぐらいの女の人が入ったのだけど、四人連れが出ないと見られないわ。いくら何でも、数分の間に二度もトイレに入られないもの」

運よくその時、四人の若い娘達はドヤドヤと出ていった。どの娘か分らないが、あのうちの一人が、フオトを見ていて、奇妙な気持ちにかり立てられたのは確かだ。しかし外見か



らは、その一人が誰であるかは、私には予測し得なかった。

すぐさま真砂子はトイレに入って、まもなく出てきた。

「どうだった？」

「こなごなに破って、トイレに捨てたらしいわ。きれっぱしが三つ四つ水に浮いてたわ」  
「あの四十才ぐらいの、眼鏡をかけたインテリ奴。破り捨てるとはケシカランネ」

「怒っても仕方ないやないの。どうする？」  
「河岸を変えてもう一度やろう。そのためドッサリもって来たんだから。そりゃ筋書通りは仲々ゆかないさ。さあ——」

第一回は見事失敗。大体女性もの売場を選んだのが拙かった。一番使用が多いかも知れないではないか。

二度目は家具売場。このトイレは矢張り閑散。むしろ真砂子は待つのに骨を折った。いくつもあるトイレのうち、目的のトイレをうまく利用してくれる確率は、閑散だけに極めて少くない。化粧を落したり、つけたり、彼女は実によく協力してくれる。まったく涙ぐましい努力である。

二十四、五才ぐらいの、素晴らしいスタイルの女性がトイレへ消えた。うまく入ってく

れよ——と、私は祈りたい気になる。

真砂子がスッと顔を覗かせて、後頭部を撫でた。よし占めた！  
この素晴らしい、一見朝丘雪路に似た女性が獲物とは——。私はゾクゾクしていたが、化粧中か仲々姿を現わさない。やっとトイレから長身の女が出て行く、と、真砂はニヤッと笑って、すぐあとから現われた。

「なかったわ。きっとハンドバッグに入れた筈よ。それに私の顔をジロジロ見ていったものの」

私達は勇躍して彼女のあとをつけ始めた。客足が少く見透しは至ってよい。彼女はスタスタと寝具売場に向って歩いてゆく。ダブルベッドの前で立止ると、あたりを見廻しツカツカと後姿の男性の許へ歩みよった。

(アレッ！アベックか、こりやまずい)  
そう思った刹那、件<sup>くだ</sup>んの女性は、男の耳許



写真 A B

で何か囁やきかけ、うなずいた男はジロリと私達の方を振り返った。女性は辺りを憚り乍ら、ハンドバックを開いて、男にそっと何か示している。間違はなくフオートであるに違いない。男は少し怒った顔で、立ちすくんでいる私達の方をにらみつけている。

早々に退散——。ウロウロしていると変な空気になりかねない。成程相手が同伴という条件もあったのだ。これで二組パーである。むしろフオートをしてやられた気が強い。



「うまくゆかないものネ」

伊吹真砂子はしみじみと呟やいた。すべて何事にしろ、筋書通りにはうまく行かないものであることを私は痛感した。

「もういやになったわ」

「そういわずにもう一度。三度目の正直だ。もう一度河岸<sup>かし</sup>をかえてやってくれよ」

うなずいたものの、彼女は最早氣乗薄な様子であった。そうそう一回でうまくゆけば、この世の中すべてに苦労はない。拝み倒してタクシーに乗って、今度はアベノのKデパートに走る。ここはターミナルでもあって、Mデパートにくらべて遥かに人は多い。

電器器具、家庭用品の売場を選んで、真砂子は三度目の僥倖を願ってトイレに入る。私のアイデアが、この三度目で実る様な直感を私はフト感じた。

混んでもいず、さりとして空いてもおらず、ほどほどにトイレの出入があったからだ。

真砂子が素早くでてきて、あごを撫でて又消えた。私の眼前をビニールの踵の高いサンダル・シューズをはき、ビニールの黒いハンドバッグをさげた若いややズベ公タイプの娘が通り過ぎて消えた。

数分後、その娘は慌てた姿で、そそくさと

出てきて、二、三度キョトキョト辺りを見廻し乍らエスカレーターの方へ歩いてゆく。

見送る私の背を後からトンと押して、

「あの娘よ！」

と、真砂子は言うなり、もう私の前に立って、ドンドン歩いていった。あわてて私もすぐさま彼女のとを追う。よりによって可愛い娘がエサに掛ったものだ。真砂子と精しく言葉を交す暇もない。獲物に向って私達は背後を、必死に見失うまいと追跡していたからである。

娘はデパートを出ると、眼の前の舗道を、青になって混雑の一团と共に横断し、再び右に折れて横断して、天王寺駅の陸橋を渡って天王寺公園の方角に足を向けていた。この素晴らしい公園も、釜が崎界限の連中が、ゴロゴロし出すようになってからは、余りアベックも近づかなくなったし、公園としての利用価値も年々低下しつつあった。さびれる以前の新世界への通り抜け道として私も若かりし頃、よくこの散策路を利用したものだ。最近殆んど公園に入り込む事もなく、今こうして伊吹真砂子と肩を並べて、十数米先を歩く娘を尾行するのが、実に久し振りの散策でもあった。

「どう、この辺りで追いついて声をかけましょうか？」

「いや、もう少し様子を見ていよう。下手に騒がれたりして、人ばかりでもしてくると、反ってこちらの方が不利だよ」

「それもそうネ。あぶれた連中が、あちこちでゴロゴロしているものネ。気味わるいわ」

真砂子は並んで歩いてきた私の腕に、自分の手を押込むようにしてかけてきた。

二、三度、娘はフト振り返えったが、私達の尾行には気付かなかった。可愛い二十才ぐらいの年頃の、幾分ズベ公めいた身のこなしである。真赤なトックリセーターに、縞のストラックスのスタイルは、フトかつての小原真澄たちの、小さな小悪魔の群れを連想させた。謂わば彼女も又マスミ達とは年頃も環境も幾分似た、この娘達特有の相似性があるのではなからうか。

私達に幾らかの余裕の気持が生じてきた。

「少し経過を話してくれない？歩き乍ら……」

「そう、私も言おう言おうとし乍ら、ついあの娘に氣をとられて、うっかりしていたわ。最初に入った人は、子供連れの四十才ぐらいの人だったわ。慌てて出てきて、顔を真赤にさせて、手も洗わず出ていったの。すぐ入っ



たら、表向いたり裏向けたりして、バラバラに散らばってあった。もう一度少し崩してウラ向けておいておいたら、次に入ったのが、あの娘よ。今度は仲々出て来ないじゃない。

私がさりげなく顔を直している振りで、横眼でチラッと見ると、そっと辺りをうかがうようにして、案外落ちついて、私の傍らで手を洗って、少し髪型を直して出ていったの。すぐトイレを開くと、なかったの。テッキリと  
 思って、辻村さんに合図したってわけ」

「君、気付かれなかった」

「そんな心のゆとりなかったようよ」

「破り捨てたということもなかった？」

「水の流し穴をのぞいたけど、全然——」

「いよいよ本ものだな。それにしても、若いな、あの娘」

「意外ネ。あんな娘が、SMに興味もつのかしら。分らないものネ」

「心臓に苔の生えたバアさんに持ってゆかれりゃ型なしだけど、思うツボだよ」

「俄然張りきってんのネ。だけどあたし、もう随分気疲れしたわ」

「そうだろう。うまくゆけばタダではすまないよ」

「ゆかなくとも努力賞ものよ」

真砂子は悪戯っぽく、私の腕をゆすった。娘は公園の坂をスタスタとくんだり、新世界へ向っている。どこへ行くのだろうか。

× × ×

まさか通天閣の Teppen で、くだんの娘に声をかける羽目になろうとは、私達も想像していなかった。えらいところまで引曳り廻されたものである。展望台には数人の見物客しか登っていなかった。ひとり離れて、娘は下界を見降していたが、辺りをうかがうと、ビニール袋から何かをとり出した。それは数米離れてさりげなく様子を窺う私達にも、はつきりフオトであることが認められた。

「今だよ、チャンスだ」

私は真砂子を押やるようにして、背中を叩いた。ゴクリと唾をのみ、深くうなずいて真砂子は若い娘に近づいていった。私もジリジリと一步一步、歩をちぢめてゆく。

「失礼やけどあんた、そのフオト、私トイレにうっかり落したの。返して下さらない？」

伊吹真砂子、懸命の名演技である。

ドキッとして娘は顔をあげ、一瞬色を失なったようであった。

「あの、うち、これ拾ったんです……こんなもの本当は……うち……」

まったく見ていて気の毒なぐらい、しどろもどろである。通天閣の Teppen で、そっと見ている最中、タイミングを計ったようにこう声をかけられては、娘としても、驚愕の余り咄嗟に返事もロクロク出来なかったに違いない。しかも真砂子は近づいて行く前、演技的效果を考慮して、サングラスをしている。こうなればまさに真砂子のペースである。

「そう、こんなもので悪かったわね。でも私にとっては、命より大切なものなの。このフオトがどうして出来たか、きかせてあげましょうか。よく御覧、私自身の縛られたポーズよ」

真砂子は静かにサングラスを外した。呀ッ／＼という声があつても娘の口から洩れた。魂を奪われて、放心したように娘は立ちすくんでいる。私のそろそろ出番だ。私はじんわりと娘の側面に近づく。

「こんなシャシン興味あるんですかね、お嬢さん／＼」

私も亦大いに芝居がかっている。Teppen 野郎、なる程、この地上の高いところ、こんな演出には誠に都合よろしい。

娘はあわてて首を振る。声が出ないのだ。「なら、どうして持ってゆかれたの？」





写真 A C V

真砂子はカサにかかって訊ねた。

「あのう、ただ何となくチョット」

「チョットではすまされないわ。私の最も恥かしいポーズを持ち去ったりして……」

「ではうち、どうすればいいの？」

娘は開き直ってきた。窮鼠猫をかむという奴か。真砂子は、一寸返事に困って黙りこんだ。私が助け舟を出す。

「いいですよ、お嬢さん。それくらい欲しければ、みな差し上げますよ」

「まあ、欲しいなんて言っていないわ」

「でも持ち去ったじゃありませんか。欲しいから持ち去ったのでしょ」

「それは、そんな気持では……」

「まあいいですよ。いくら押問答していてもキリがない。まあお嬢さん、ひとつ気を鎮めてゆっくり話合おうじゃありませんか。ねえ、君。君もトイレに落してくるなんて、こんな大切なものを……。君の不注意なんだよ。一応返しておいて頂いたらどう？」

「そうね、じゃあ返えしていただくわ」

真砂子も潮時と見て、あっさり引き退った。さて、この娘をこれからどう口説くか。何しろ相手の出方次第だから、これから先のことは、全然考えていない。娘は幾分ホッとしたようであった。何か怖ろしいことが起るような、そんな危惧に襲われていたに違いなかったが、私達があっさり引退ったので安堵の表情が急速に拡がって、驚愕

に見開いた瞳が、柔和になごみ出した。

「通天閣に、お嬢さんひとりで昇るなんて、珍らしいですね。大阪は始めてでもないんでしょう」

「ええ、大阪へ来て二年ぐらいになりますが、通天閣へ昇るのは今日が始めてなんです」

「何処かへお勤め？」

「ええ、まあね。でも昨夜マスターと喧嘩しちゃって、お店やめたの」

「マスターというと、喫茶店とかスタンドとか、そんなところ？」

「東住吉区にある純喫茶なんです。今日はどこか他のお店探す気で出てきたんですけど」

娘は自分から、ポツポツと我が身の境遇を話し出してくれた。エサにかかった獲物はどうも奇抜な方向に進展してゆきそうである。

喋べる娘の顔を、その時、私は始めてマジマジと見つめた。まだあどけなさの残る顔だが、喫茶店勤めだけに、化粧はかなりどぎつく思われた。喋べると少し唇が歪み、可愛い八重歯がのぞけて見える。睫毛をカールし、黒いアイシャドウのラインがかなり濃く入っていて、一寸その点が娘の清純さを消していた。

ドヤドヤと団体の人波がエレベーターから



降りてきたのをシオに、入れ違いに私達三人きりで、エレベーターは降下していった。

「これから、どうするの？」

「アベノ筋の喫茶店に住込むことにきめてきました。それで帰り途、デパートによったんです」

「すると荷物は前の喫茶店に置いた俤だネ」

「ええ、でもトランク二個ぐらいです」

「クニは何処？」

「尾道です。中国地方の？」

娘は素直だった。水商売になじんで、或いはこの俤で何年かしたら、都会の垢に染まっですり切れてしまいかも知れないが、上阪して二年の現在の彼女には、未だ純真さが残っていた。

通天閣下の喫茶へ三人で這入る。逃げようともせず娘はついてくる。勿論、真砂子と私で、娘を真中に挟んでいるから仕方ないのかも知れないが――。

「先程は驚かして御免ネ。別段怖がらなくてもいいのだよ。正直いって、これは私達の一寸スリルのある遊びだったんだよ。茲にいる彼女を私が撮って、それでそんなフोटに興味をもつ女性はいないものかと試して見ただけさ。それに君は見事に引っ掛ったのさ」

ズバリと言って、私と真砂子は顔を見合わせて大きく笑った。

「本当に、それだけですの？」

「本当だよ。それ以外は何もないのさ」

「よかった――。ほんとによかったわ。わたしは又、とんでもない暴力団のワナにうまうまと引っ掛ったのかと思って、今の今まで生きた心地がしませんでしたわ」

娘はやっと笑った。愛くるしい笑顔であった。八重歯が大きく覗けた。新世界という場所柄だけに、この土地の暴力団の手口と見てとったらしい。

「私も正直にいったのだから、君も正直に言ってね。さっきの話は本当？」

「ええ、あれは皆本当のことです。それで、今日一日夜までゆっくりしているから、かねがね一度あがって見たいと思っていた通天閣に昇って見たんです」

「そしてフोटを見ていた――」

娘は黙ってうなずいた。

「興味はあるの？こんなことに？」

うつむいて返事はない。いつまでも黙り続けてる。

「言い難いだろうね。この話よそう」

さて、これからが難攻不落、果してどうい

写真 ∧ D ∨



って娘を口説き落そうかと、私は思案を練ってみた。最初に少し脅しめいた言い方をしただけに、とっつきにくい。折角ここまで漕ぎつけ乍ら、あと一息押せぬもどかしさを痛感せざるを得ない。



「あたし、四時から人と逢う約束あるの。辻村さん、お先に失礼していい？」

伊吹真砂子は、氣拙さを払拭するように私に言った。勿論それは退場の口実に過ぎないことは充分知っている。

「そう、どうも気の毒したネ。何れ又……」

お礼しますと暗に眼配せする。心得て、役目果せりと、伊吹真砂子はチラリと複雑な微笑を浮べると、先刻の娘より取戻したフットを、わざと眼の前で私に戻し、どちらへともなく軽く会釈して、さりと消えていった。真砂ちゃんよ、どうも有難う。これだから君とは、切っても切れないんだ。何度でもいうが、伊吹真砂子は実に気のいい女である。

「少し早い、あんたも用事がないだろうから、何処か静かなところでメシでも一緒にくおうか」

娘はもじもじして、未だはつきりと去就をきめかねていた。何しろ奇妙な出会いである上に、こんな言葉で若い田舎出の娘をクイモノにする輩がうようよしている。娘とて警戒するのが当然であるかも知れない、私自身も猫撫声の狼野郎の態度に見えるのではなからうか。どうすれば彼女を安心させることが出来るだろう。私は咄嗟に迷った。そうだと

イブに誘ってやろう。それと共に箕田氏へでも電話して、私を大学の教授にでも仕立ててやろう。察しの早い箕田氏のことだ。あとでどんな釈明も出来る。そうしよう、それがいい。若い娘はドライブや教授という言葉には案外弱いものだ。

私は彼女をうながして兎も角も喫茶店を出た。フト用件を思い出したように、近くの煙草屋の赤電話に近づき、

「そうそう、一寸待って下さいよ。大学の用件で、箕田教授に電話しておかなくちゃ」と聞えよがしにいつてダイヤルを廻す。傍らで娘が耳をそば立てているのを充分計算に入れ乍ら……

「モシモシ、箕田先生ですか、私、ええ辻村です。今日の夕方の教授会の会合ですがネ、一寸私用が出来たものですから出席できないんです」

「ええ、何——、ええ？」

「ええ、そうです。分科会の教授のみなさん方によろしく。ええ、月曜日の講義には勿論出席しますよ。ハア、それから山下教授、尾上教授にもよろしくお伝え下さい」

「辻村さんだろ？ 何いってるの、全然分らないね、気が狂ったのかい」

「いえ、そうじゃないんです。いずれレポートを提出します。今、新世界の通天閣の近くからかけているんです。じゃあ月曜日、大学の方へレポートを持参します」

「フフ、何かやってるネ、ハントかい？」

「ええそうなんです。いずれ精しいことは、のち程、じゃあ」

待てよ——という声を耳に残して、ガチャリと電話をきる。箕田氏こそいい面の皮である。

「大学の分科会の会合あったのを、すっかり忘れていてネ。今日の主催の先生に断わっておいたから、もう大丈夫だよ。何なら私の車で少しドライブでもしようか」

「おじさんは、大学の先生？」

娘は驚いた様子で私を見上げた。

「まあそんなところかネ。心理学系統でネ。」

とくにSMのプレイの刹那における女性の衝動心理について研究しているところだよ」

(よくぬけぬけといったもんだ——)

「そうですの？」

娘は眼を輝やかせた。急に親しみと安堵感を抱いたらしい。

「ドライブもいいですわね」

と、暗に誘いかけてきたから、正に妙。



「時間も余りないから、そう遠出も出来ないが——」

「どうせお店を替るところですから、私、時間なんか構いません。おじさんさえよかったら」  
物凄く変りようだ。

「そうだね、私も明日は日曜で休みだから構わないが、いいのかねあんた」

私の言葉もいつしか、重々しい口調に変わっている。

「今なら、いくらでも体の都合つきます。先生さえよかったら、京都の方へいつて見たいわ」

と、娘の言葉も急におじさんから先生へと早変わりである。内心幾分後ろめたさを感じるが、娘にこう一変して信用されると悪い気もしない。プレイボーイのテクニックはこの辺りの換骨脱胎にあるのかも知れない。

ナンバ球場までタクシーをとばし、駐車場から車を引っ張り出して、娘を助手席にのせると、エンジンキーをさし込む。

京阪国道へ出るまで、土曜日の混雑で大変だろうが、ゆきつくところまで行く気で、私はレバーを握りしめた。迂かつにも私は未だに娘の名前すらきいていない。カメラ・ハントはやっと軌道にのった。それにしてもなん

と長い前戯であったことよ。  
諸賢よ許し給え——。

× × ×

上六—今里から左折して守口へ走る。このあたり、信号と停滞で余り進まない。守口をこえて国道一号線に入ると車のスピードが始める。寝屋川、枚方はまたたく間に、やがて名神高速道路の京都南インターチェンジを越える。目指す京都はもうすぐだが、市内へ入って扱てそれから何処へ行くかは、未だに当てもない。時計は四時半に近い。社寺巡りにしろ、そろそろ閉門の時間が迫っている。

彼女の名前は山田千代子という。平凡だがおとなしい名前だ。車の中の会話——。

「じゃあ、チョコちゃんだね」

ときくと、

「それが、変な呼び方なの。私チョコレートが大好きなもんだから、いつの間にか、みんなチョコと呼ばないで、チョコと呼ぶの。チョコレートのチョコよ」

「ふーん、チョコか、面白いな」

「面白いでしょう。先生のお名前は——」

「辻村——」

「どこの大学の先生なの？」

そらお出でなすった。嘘が嘘に重なってゆ

く。

「うん、私立の大学で、パツとしない先生だよ。大学の名はまあ勘弁してもらおうよ。チョコにあとでオドされるとこわいからな」

と何とか逃げる。話題を早々に切替えて、

「チョコ、ドライブ好き？」

「フーン——」

とこの返事、テレビの「おはなはん」の檜山文枝のフーンにそっくりで可愛いらしい。

「チョコ、あのフォト見て、本当にどう思ってた？」

しばらく沈黙がつづいたが、

「もう、びっくりしてしもて、いきなり眼の前にあったでしよ。どうしていいか分らんから思わず知らずハンドバッグに入れちゃったの。別に好きとか、興味あるとかいうことじゃなくて、夢中だったのネ」

このチョコの言葉は、地方弁、関西弁、標準語のチャンポンで、いたってややこしい。それが又年頃の娘だけに愛嬌があった。

「それが正直なところだろうネ。誰だって、咄嗟の場合、そんな態度に出たかも知れないよ」

「先生——」

「何だい……」





写真 A E V

「あのネ、私」

「うん、何だ」

「構わなかったら、もう一度、見せて欲しいの。かましまへん？」

「おや、今度は、自分から見たくなかったってわけ？」

「やっぱり、ちよっぴり興味あるの」

「私が、このフォトの人を縛ったんだよ」

「ほんと、先生」

「ああ、本当だとも」

「大学の先生が、そんなこと。信じられへんわ、私」

「だから研究の対象といったでしょ。S M プレイに於ける女性の衝動心理なのね」

「なに、それ？むつかしくて分りませんわ」

「サジスチックって知ってる？」

「いいえ」

「それが即ちS。マゾヒスチックは？」

「わかりませんわ」

「それがM。要するに、同性又は異性同志、相手を虐めたり、虐められたりすることを、

一種のプレイとして愉

しむんだがネ。だから

そのフォトの緊縛だっ

て、異性に対するプレ

イの典型的な一つのポ

ーズといえはいえるの

さ。そのプレイに対す

る能動と受動がそれぞ

れ女性の場合、如何な

る衝動にかられるか、

その心理を研究してい

るんだよ。分るかネ」

「判っきり判りません

わ」

そうだ分らないだろう。言ってる本人も判っきり分らないのだから。何となくこじつけて見たに過ぎないのだ。

私は車を国道の傍らによせて停車すると、更に数袋の封筒をとり出して破り、チヨコに渡した。私に顔を背けるようにして、チヨコはそれらのフォトを丹念に一枚一枚、くい入るように見つめていた。

さりげない素振りでは私は車を走らせる。

「京都市内に入っているが、何処へ行く？」

「何処でもよろしいわ。私、何処も知らない

んだから——」

「じゃあ、兎も角、円山公園から平安神宮の

方へ抜けて、岡崎の公園あたりで一服しよう

か」

「ええ」

私の言葉も上の空に、チヨコはフォトに見

入っていた。

「少し分って来たわ」

「えッ、何が？」

「ううん、自分のこと」

ハッとした様にチヨコは言葉を濁したが、

何かを知った様子であった。

「先生——、一寸訊ねますけど、こんな、縛



つたりして遊ぶこと、何処の夫婦もやりますの？」

「さあ、倦怠期克服の手段としても使うし若い夫婦でもかなりプレイしている様だし、一概には言えないが、世間には案外多いんじゃないだろうか——」

「私、それで思い当ることありますねん。やっぱり、そうやったんやろか」

「何が？」

「言うの恥かしいわ」

「じゃあ、聞かないよ」

「先生は、その方の研究家だから、いっそ言ってしまうかしら」

「聞いて私がアドバイス出来る問題ならネ」

「私、実は家出して大阪へ出て来たんです。その原因は、父が母をすごく虐めると思ってたから。でも、そうじゃなかったんだわ、きつと」

「最初から言っただけ」

「私の母は、私が七才の時、私を連子して、今の父の処へ再婚したんです。すぐ弟と妹が出来たんです。中学生になった頃から、時々両親の部屋で、夜中に母の激しい悲鳴や、何か叩く音が聞えて来て、ヘンに思ったこともたびたびあったんです。きっと父が母を虐じ

めているんだとてっきり思っただけです。でも朝になると、父も母もニコニコしていますし、とても仲はいいし、父は母の服や、装飾品を惜しげもなく買ってきたりします。私は何が何だか、さっぱり分りませんでした。でも父が二、三年前に、かなり無理をして立派な風呂を建ててから、母は私や弟妹たちと滅多に一緒に入らず、独りで入るか、時には父と一緒に入ったりしました」

「フン、フン」

「私が高校二年の冬の夜、生れて始めて、父と母との、言葉にも言えない様な怖しいシーンを見てしまったのです」

俄然山田チヨコの告白はSMめいてきて、面白くなった。私は岡崎公園で車を止め、話をそこで一応切り、夕暮れの公園に出た。ベソに腰をおろし、暮れなずむ東山三十六峯を遥かに仰ぎながら話の先を求めた。

話し始めてから、チヨコは頬が真赤にほてってきていた。パツチリ見開いた瞳は妖しくキラキラと光っている。

「学期末のテストで、その夜かなり遅くまで勉強していたんです。もう午前二時頃だったでしょう。突然階下の両親の部屋で激しい物音がして、母のつんざくような悲鳴が、静

かな家中の空気を乱して聞えました。ギョツとして思わず腰を浮かし、私はドキドキする胸に手をあてて、じっと物音に耳をすましました。それからややあって、母の断続する、押し殺したような呻きと悲鳴がきれぎれに流れてきました。と共に、ビシビシと何かを叩くような音が耳に入ったのです。私は母の安否が気になって、波打つ胸を押えながら、震える足に力を入れて、足音を忍ばせて階下の二人の居間に近づいてゆきました。襖の隙間から、うっすらと灯りが洩れています。息をこらし、静かに静かに二センチ許り襖を開いて、父母の姿を覗きました。瞬間私の息は止まるかと思いました。部屋の両側に二本の梯子を置き、太い三寸角の柱を梯子にわたしたそれに、母は裸で逆さに吊り下げられていたのです。口には手拭で声を立てぬ様に蔽い、両手は太い縄で後ろ手に縛られて、母の黒髪は長々とたたみに垂れて、頭はたたみから五十センチ許り上にありました。父は革のバンドで、母の胸の辺りや、おしりなど、ひとつひとつ気合をこめて叩いていました。そのたびに、母の体はユラユラと揺れて、苦しい悲鳴と呻きが、手拭の隙間から洩れていたのです。父も裸のようでした。私は見てはならぬ





写真 A F V

ものを見たように思いました。立ち去ろうとするくせ、体はじっと動かないのです。息を弾ませた父は、やがて梯子から角材をぬき、そっと母の体をたたみへ降しました。そして縛られた母の体に処嫌わず噛みつき乍ら、抱

きしめてゆきました。私はもうそれ以上覗く気力もなく、まるで這うようにして二階へ昇りました。私にとっては神聖な両親であるべきなのに、最も忌むらしいシーンを見たショックは大きく、勉強も手につかず、いつも考え込むようになってしまったのです。朝方ウトウトとまどろんで、真赤な眼をこすって階下におりてゆくと、母はもう父と一緒に食卓について、まめまめしく味噌汁を父についだりしていました。私が怒ったように黙っていたので、母は一寸心配そうな顔付になりましたが、夜更けのあの出来事については、気付かなかったようです。父は出勤してゆく時、辺りに気をかねながら、そっと母の背をさすってやっていました。母は何か父の囁やくのに頬をくずしてうなずいていたのです。私はもう大人の世界がすっかり分らなくなり、父と母がとてもまぐさく、忌むしいものに思えて来ました。お蔭で学期末の成績は散々で、普段でも余り出来のよくない方なのに、そんなため、全然出来ず、赤点が五つもありました。父も母も理由を知らずかなり叱責しました。その翌朝、私はほんの身の廻りのものだけをポストンバッグにつめて、家を飛出した

のです。そして大阪の喫茶店づとめして、二年になるのです。家にはまもなく居所だけ知らせました。最初心配した母も、その後余り言ってこなくなりました。今頃になって父と母とのそれがやっと少し分って来たような気がしたので。それもほんの今なんです。始めてお逢いした先生に、家のことすっかり洗いざらいおちまけてしまいましたわ」

私はさながら典型的なるSMの夫婦プレーの一コマを聞く思いだった。ここにも亦、私達の同好者が一組存在しているではないか。静かに私はチョコに言ってやった。

「お父さんは所謂Sなんだよ。虐める事に喜びを見出しているんだね。お母さんはMではなかったかも知れない。しかし賢いお母さんは、夫婦円満の秘訣を身をもって悟られたんだよ。夫唱婦随、夫の趣味に合うことが、最も仲良く暮せる方法だということを。それも最初は苦痛のみだったかも知れないがね。苦痛の中の悦楽、苦悶の底の歓喜、これは身をもって体験したものでないと分らぬ味かも知れないネ」

「そうだと思います。普段の父は、すごく母をいたわり優しくしますもの、それが夜になって、まるで人が変わったみたいに、狂人のよ



うになるのが、私には理解出来ませんでした。が、やっと分って来た気がします。もやもやしたとき、いっそ、父のような、あんな人に出逢ってクタクタにされて見たいような気もして来ましたわ」

「勇気を出して、その気になって御覧。私がいつでもお相手をつとめるよ」

「でも私、いざとなると、やっぱり怖いわ」  
「自分を試して見るんだね。君に母の血が流れているかいないか、一時間でいい、私はもう無性にチヨコを縛りたくなった」

チヨコはクスリと、うつむいて笑った。

「先生、やはり計画的なのネ。うまく私を誘導するのネ。いいわ。一時間だけ先生の試験台になってみますわ。その代り一時間キツカリよ」

「ああ、いいとも。一時間あれば充分だよ。但し正味プレイ時間が一時間だよ。タダでとはいわないよ、その代り」

「いいわ、そんなこと心配なさらくとも、そんな気持、毛頭もっていないんですから」  
「じゃあ、早速これから……」

善は急げと許り、夕食もとらず、直ちに車に戻る。有難いことにこの周辺、かなりデラックスなアベックホテルが林立している。そ

の一軒T荘へ車を乗入れた。どうも前置ばかり長くなって、いやもう申し訳ない。

× × ×

私達をどうとったのか、ホテルの女中は、スペシヤルクラスのデラックスな部屋に案内してくれた。応接間まがいな部屋の飾りはかなり凝っており、フロアはダンスが出来る程のスペースをとってある。飾り棚に数種の洋酒が並んでいる。突当りのドアを開くとガラリと一変して和風の寝室になっていた。トイレもバスもかなり広い。

「凄くデラックスねえ」

「そうだね、仲々豪勢だよ。君とのプレイにふさわしくていいよ」

とはいったものの、お値段の点を考えて少々心が寒い。

「お風呂へ入らない？」

「ええ、そうしますわ」

チヨコは案外素直にうなずいた。バスのカランをひねってくる。浅い浴槽だから五分もすると湯が埋まる。

設えつけの整理タンスを開くと、ガウンとネグリジェが置いてあった。洗いざらしの浴衣が通り相場なのに、これは又変っている。しかも別に薄い柔かい生地の上着も備え

てある。益々もって万端整っている。

いきなり一緒に入らうというのも気がひけて、私は遠慮することにした。

チヨコは寝室に入って赤いセーターとスラックスをぬぎ、肌着だけになって私の目の前をかすめてバスに消えた。

その間に私はカメラの準備をする。準備といってもストロボだから支度は早い。

湯上りのバスタオルを胸で巻いて、チヨコはバスから上ってくると、フロアのソファにゆったりと腰を降す。私はピンクのネグリジェを手渡した。私に背を向けて裸身にネグリジェを纏い、彼女はかわいた声で、  
「のどがかわきましたわ、何か飲まして下さらない」

私は冷蔵庫を開く。

「ああいいとも、何にする？、コカコーラ、サイダー、ジュース。それともビール？」

「コーラでいいですわ」

二本とり出してきて、冷蔵庫の上のコップ立てから二個のコップをテーブルに運んでついでやる。それを旨そうに一気にのみ乾すとホッとしたように彼女は願った。

「先生、時間が経つわよ。さあ、どうぞ」  
どうでもしてくれと居直られた恰好で、反



って少しやりにくい。先ず初手から始めるより仕方あるまい。私は無言の儘、ネグリジェの上から縄をかけて、両手を捻じ上げて後手に縛ると、かなり強くしめつけた。

チョコの豊かに盛り上った胸が大きく弾んでいる。始めての経験に心は激しく騒いでいるに違いなかった。

「先生——いたずらしないでネ」

縛り終って両腕の縄にくい入る加減を確かめていた私に、チョコは小声で呟やくように言った。

「ああ勿論だ。私を信じて呉れ給えよ」

自由を束縛された若い娘の不安は、その一点に凝固していたに違いなかった。

いきなり全裸にしての緊縛や、強烈な緊縛は、初手からは、相手に危惧を与える懼れもあるもので、ネグリジェとパンティのスタイルで始めた。チョコは我が眼で確かめたフォトが、大体この程度のものであることを知っていた。前面、側面、背面からの立ち姿を撮る。

(A) (B) チョコのポーズはぎこちなくもないが、さりとてモデルのように型に嵌ったポーズでもなかった。極く自然の儘のスタイルが反って快よかった。真珠の指輪が、後手の握りしめたこぶしの指で光って印象的だった。

た。

「チョコ痛くない？」

「フーン、ちっとも」

又、おはなはんのような返事がケロッと返ってきた。

「これでは一寸物足りないかな」

「……………」

それに返事はなくて、眼を閉じたまま、チョコは、それがクセの右上唇をちよっと歪めて軽く笑った。

ソファに坐らせ、転がし、数枚とる。二の腕に大分深く縄が喰い込んでいたが、チョコは一向気にも止めぬ風であった。こんな程度なら幾らでも辛抱するかに見えた。

一度縄を解いて、新しいポーズで縛って見ようかとも思ったが、私もチョコの雰囲気にもまき込まれたのか、意外にファイトが湧かない。その尻縄尻をとって扉を開くと寝室へ押し立てて行き、心持ち力を籠めて、敷いてある洋式布団の上へチョコを押し倒す。はずみでうつぶせに倒れた彼女は、私のこの一寸した乱暴さに、ハッとして、頭を拾げて、やや非難めいた顔を私に向けた。(C) 私は近寄り、ネグリジェの胸許を荒々しくはだけた。ポツチリした可愛いサクラランボのような乳房がのぞき、ブルンブルンと小さく揺れていた。

房がのぞき、ブルンブルンと小さく揺れていた。

「イヤーン、先生、乱暴しちゃいやよ」

「これもポーズだよ、それにホラ」

私はフロアに引返して例のフォトの封を切ったのを全部持ち、その時フト思いついて、今日の獲物がかかった時にプレゼントするつもりで準備してきた人造真珠の首飾りのケースをとり出して再び寝室へ戻った。

フォトをカメラに入るようにチョコのかたわらに、わざとらしくなくバラ撒き、ケースを開くと、首飾りをとり出して、チョコの首にあててやった。

「これをプレゼントしようと思ってネ」

「まあ、私に？」

「ウンそうだよ」

「最初から持ってきて来ていらしたのネ」

「勿論——。しかしプレイの対象が私の気に入らなければ出さないつもりだったんだ」

「私がお気に召したの？」

「そう、とてもネ」

「うれしいわ。でも、うまい事仰有って、その言葉本当？」

「本当だとも、とてもチョコが好きになったよ」



「私も——」

チヨコは俄然嬉しくなったように、愉しげに言葉を弾ませた。

私は首飾りをチヨコのかたわらに投出し、カメラに戻った。仰向いた儘、彼女は私を正視した。はだけた胸許から、蕾のほころび初めた感じのオッパイがのぞけている。(D) 数枚とってチヨコを抱き起す。抱き起す私に、心なしかチヨコは身を擦りよせるようにした。以心伝心、私の心はフト疼いた。坐らせて更にネグリジェの胸を一杯に拡げた。二つの乳房が惜しげもなく露呈した。(E)

この縛り方ではせいぜい、もうこれくらいのものであった。チヨコの縄を解いてやると、ありありと二の腕に赤い縄跡を残して、彼女はグッタリしたように、その儘、洋式布団の上にパッタリと倒れ伏した。(F) はりつめていた緊張がゆるんだのであろうか。

チヨコにとって、緊縛の経験、いやこうしたSMのプレイの経験など、おそらく生れて始めての事だったに違いない。数刻前までは未知であった私と、しかもその出会いすら、奇妙なるトイレから始まり、通天閣の驚愕、ドライブ、アベックホテルへと、余りにもめまぐるしかっただけに、心の安まる暇もなか

ったに違いなかった。撮り終ったと彼女は感違いして気がゆるんだのであろうか、私としてはこれはホンの初歩で、いよいよこれから本番へ入ろうというつもりなのに——。

私は心を鎮めようとピースに火をつけて、紫煙を吹き上げた。解いた縄を体に纏いつけた儘、チヨコは相変らず眼をつむって倒れ込んだ姿勢を崩そうとしなかった。この娘は一体今、何を考えているのだろう。

一本のピースの三分の二が灰と消える。それをゆっくり灰皿で揉み消して、私はやおら立上る。次の行動に移るつもりであった。

倒れ伏したチヨコの上にのしかかるようにして近づき、その右手に手をかけた途端、俄破とはね起きて、チヨコは私の首に二本の腕を深々と巻きつけ、いきなり唇を近づけてきた。呀っと思った瞬間、唇が重なって、ほろ甘い娘の唾液の香が、私の唇に泌み込んで来た。私はめくるめく想いに駆られた。私の首にぶら下るようにして、眼を閉じた儘、チヨコは布団に倒れようとした。その重みで私の体はドサリとチヨコの体の上にのしかかる。

無言のままのチヨコの突発的な行為が、私の計画を、すべて狂わせてしまった。私のシヤツの下にチヨコの胸の鼓動がじかに伝わっ

て来た。

「センセエ——脱がして……」  
喘ぐように言って、チヨコの体から力がぬけた。

× × ×

これは又一体どうなったと言うのだろうか。女の豹変に、唯々、とまどうだけである。私のフィルムは予定の三分の一、いや五分の一も消化せず、その儘空白を残して、部屋の隅に転がった儘だった。

けだるい空虚がヒタヒタと私の脳裡に急速に拡がり始め、もうカメラなど無用の長物といった想念が私を支配していた。

蹴散らかされた洋式布団が、白いシーツの彼方にねじれて丸くなっている。そのシーツにうつぶせになって、チヨコは全裸の儘、いつまでもじっとしていた。

(この娘も、バージンではなかった。しかし……)

私は反芻して、チヨコの情熱に自制を失って敗北したことを、認めずにはおられなかった。何が彼女をそれにかり立てたのであろう。首飾りのプレゼントにしては、チヨコは余りにも安易に許し過ぎたではないか。瞬間的に狂おしい迄に示したチヨコの激情は、所詮



私にはわからなかった。

「チヨコ、一時間半になったよ、そろそろ引揚げようか」

相手の気持を傷つけないように、そっと小声で彼女に囁やいた。

「いや。私センセと泊りたい」  
いきなり激しいぶつけるような口調が撓ね返えって来た。

「えッ、泊るって、ここで——」  
チヨコはうなずく。

こんなことは私の計画の予定に入っていない。いささか困惑めいた気持が走る。

「でもチヨコ、かまわないの、私と……」

「いいの、どうせ私なんか、どうなったって誰も心配してくれやしない。先生好き——だからチヨコ、先生と一緒に少しでも長くいたいわ」

「それはいいけど、実は腹ペコなんだ」

いいムードの折に、これは又不粋な言葉。

我乍らあきれたもの。チヨコは肌を惜しげも

なくさらして、ムクリと鎌首をもたげ、ピョ

コーンと踊るようにはね起きると、布団の上にキチンと膝を揃えて、

「ウン、私もペコペコ。ああ、おなか空いちやった」

激しい運動で尚更だ。なんて言おうとして益々野暮ったくなるので私は口をつぐんだ。

どうもいい時に、時々夢をブチこわすようなことを私は言うくせがある。

よく光る眼をクリクリさせて、チヨコはさつとネグリジェを纏った。

「ここで何かとってもらえない？」

「聞いて見ようか？」

私は室内電話で問い合す。とり寄せることも出来るそう。ビールは室内にあるので、とり合えず、スペシャルランチを二人前注文した。どれだけ要るか知らないが、こんなチャンスも、そうそうあるものでない。

ランチの届くのを待つ間も、チヨコは私の膝の上に体をのせて、私の首に腕を巻きつけ甘い言葉を囁やき、中年の私の気を惹くような仕ぐさを喃々と繰り返していた。純情と思っていたのは私の間違いで、或いは彼女はかなり男性遍歴があるのではないか——、そんな熱い思いが、愛撫をうける私の体の中で

限定版写真集  
グラビア印刷

## 美しき縛しめ

### 第四集

一〇〇〇円(送共)  
略号 八美4

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

### ◎縛られた美女ばかりのフオート八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)  
鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)  
ブロック石抱き責め (木村洋子)  
箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)  
両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)  
古墳後手吊り組写真 (木村洋子)  
両手吊りに悶える組写真 (山原清子)  
逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)  
猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)

革拘束具による組写真 (大塚啓子)  
柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)  
セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)  
野外に於ける晒責写真 (玉田・木村)  
刺青女体の柱縛り責め (山原清子)  
捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)  
入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)  
両足吊りの表と裏 (山原清子)

八以上緊縛写真 八十葉



渦を巻いた。

表の入口のノック、ノブを押えると扉が開いて、案内係の女性がランチを運び込んできた。そそくさと置くなり出て行く。部屋の乱れはなくとも、私の素振りですら既にそれと察していた。アベックホテルだもの、皆それが目的だから、乱れていて当然なのだが、若い娘と一緒に少し気恥かしい。

「先生、お風呂に入りなさいよ。少し汗くさいわ」

「そうだわ。じゃあ食事する前にザブリとつかってくるか」

私は隔てのとれた彼女の前で、遠慮もなく裸になるとバスの扉をあける。

戻ってくると、チョコは勝手に冷蔵庫からビールを二本とり出し、栓をぬいて、私と自第のコップについてあった。

彼女もコップに二杯くらいいので、大変な食欲で忽ちにランチを平らげてしまった。

ビールの酔いがいつになく、深く私の体内に沈潜していった。ビールをのむといつも睡くなる私であるが、今宵の眠むさは又格別だった。チョコの膝を枕にかりて、耐えしようにもなく、私は深々と睡魔に惹き込まれていった。

「ねえ、起きて、寝ちゃダメよ。ねえったら……。本当に寝たの、いやーねセンセ」  
遠く微かにチョコの呼ぶ声がしたが、もう私の意識はモーロウとなっていた。

× × ×

しきりにベルがなっている。眠むいのに仕事の電話のベルか……。未だ早いのにドイツだろう。こんなに早くからかけて寄起す奴は……。睡魔からさめて、無意識に受話器をとる。

「もしもし、辻村さんと仰有る人ですね。外部からお電話です。切換えますから」

やっと正気に還った。そうだこはホテルの一室なのだ。反射的に身を翻がえして傍らを見るとチョコは不在。刹那、厭な予感が脳裡をよぎる。さては……。枕元の時計をのぞくと午後十一時を少し廻っている。三時間許りぐっすり眠むりこけたらしい。

「おじさん、私、チョコよ。眼が覚めた？」

「どうしたの、一体……」

「フッフ、ちよいと眠り薬、ビールにいれておいたの。睡眠薬遊びでいつも持っている私の愛用品よ」

「何故、そんなことをしたの」

「おじさん、先生やなんてうそついたから」

「どうして分った」

「お風呂に入っている間に、上衣のポケットの財布におじさんの名刺入っていたもの。通天閣の下からの電話、あれみなお芝居だったのネ」

「ウン、どうもまずいな」

「大阪までの車代に三千円お借りしたのよ、黙って。すっかりいただいでいくつもりだったけど、それじゃホテルの御勘定払えないでしょ、だから勘弁したげるわ」

「チョコ、君は一体何者なんだ？」

「本職は喫茶ガール、でももうとくにやめて、今はガイドガール。だから私もウソついていたのネ。フフ面白かった」

「何が――」

「父と母のつくり話に、おじさん、とっても真剣だったんですもの」

「あれもつくり話？」

「フーン、本当は逆吊りされたのは私、逆吊りしたのは私の彼氏。彼とってもプレイが好きなの。おじさん見たいなお手やわらかなものじゃないわ。もっともっと凄くってよ」

「ウーン、参ったな」

「私、車の中で考えた物語、素敵だったでしょう。どうしたらおじさん喜ぶか、これでも」



真剣だったのよ。相手にうまく順応するのが私達の仕事のコツよ」

「見事にしてやられたネ。それなら、ギャラ払わなくちゃ」

「いいわ、おじさん無理して私を愉しませてくれたから。でもお土産に例のフォト全部いただいていたわよ、いいでしょ。彼を喜ばせてやるの。それからネックレスも……」

「いいとも、でも、それならそれで、もう一度是非逢いたいな」

「ダメダメ、私のような悪女のこととは、もう二度と思ひ出さないでチョーダイ。その方がおじさんのためよ」

「でも、あのチョココのサービスには、私は忘れようとしても、私の中の男が忘れかねているよ」

## 限定版 写真集 **△美しき縛しめ▽第七集 愈々好評!!**

山原清子 妖艶緊縛 **刺青の魅力を探ぐる**

一部一〇〇〇円 略号 **△美7▽**

### 全部最近撮影の力作!

### 未公開の秘蔵写真集

**刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版**（思わず息をのむ凄いポーズばかり満載）

このグラビア写真集の写真を撮影するために、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフォトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フォトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持つ

ております。一般市販はいたしておらず、今から直接発行所へお申込み願います。  
△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

「無邪気ねえ、おじさん。そうじゃないの。あれ以上、いろいろ縛られるのがうるさかったから、ちょっと奥の手出したただけなのよ」

「言うことなし」

「でしょう。じゃあバイバイ。大阪からの電話高くつくから、もう切るわ。チョコほんとに愉しかったわ。お元気でネ、サイナラ」  
ガチャン。

長距離輸送トラックが、デカイ目玉を皎々と光らせて飛ばして行く国道を、私は大阪目指して深更の一号線をまっしぐらに、カムバックしていった。

中天高い冴えた月が笑っていた。

見事にしてやられた私。そのくせ憎めない可愛い悪女チョコ。

被害は何もない。三千円もっていったにしろ、いずれやる気でおった私だった。

トイレのトリックで拾った女は、夜霧に消えていった。カーラジオを廻すと、深夜放送が流れてきた。『夜霧に消えたチャコ』

私は疼くような熱い想い出をかみしめて、その歌に聞き惚れていた。フランク永井の低音が入私の心に、しみじみと泌みこんでいった。



# ミ　モ　ザ　館やかた

睦　月　笛　一　郎

## ＼処　女　受　胎＼

(一)

喜久は、街はずれにある、産婦人科医院の門を潜った。

冷えたりノリユームの感触と、診察室から、時折り、聞えて来る単調な金属音が、待つ間の喜久の気持ちを、一層、落着かないものにした。息苦しいまでの鼓動の高鳴りで、放心状態になった喜久は、自分の姓を呼ばれても返事が出来なかった。看護婦が不審に思つて、その前に立つと、彼女は軽い眩暈を起して、失禁していた。診察を終った温厚な、初老の医師は、カルテを手にとって静かに椅子を廻した。

「奥様、お気の毒ですが想像妊娠ですよ。余

り赤ちゃんがほしいとお思ひに成ると、時にはこんな症状を呈します。結婚後間もない女性には、良く有ることですよ」

「でも、生理は、五カ月も御座居ませんし、お腹だって、こんなに大きく成って——」

「尿検査の結果も反応が無く、全然、妊娠の徴候が認められません。メンスが無いから、妊娠したと思ひ込んだり、妊娠したいという願望がメンスを止めたり、大抵の方は、医者に想像妊娠だと宣告されると、途端に、お腹が小さく成ってしまいますよ」

医師は、巻煙草を取り出すと、マッチで火を付けて、旨まそうに吸ひ込んだ。

「貴女も、これで二度の御来院ですが、症状

が重さなるようでしたら、神経科のクリニックを受けられるようにお勧めしますよ。それに不思議だ。外部から拝見したただけですが、貴女には、性交渉の経験が、全く、見受けられませんね。失礼ですが、御主人に、何か性的な欠陥でもお有りですか」

真うなじっ白い項を、真赤に紅潮させて、喜久は俯向いた。

「兎も角、一度、詳しく内診して見ましょうか。おい君、準備して呉れ」

看護婦に命ずると、隅の洗面台で手を消毒し始めた。看護婦は、無表情に、  
「スリッパだけに成って、内診台に載って頂きます」



言葉は丁寧だったが、極めて事務的に、追いつけるようにして、喜久を内診台に仰臥させた。

「怪を、左右のレッグ・ステージに挙げて下さい」

喜久の全身を、羞恥が火の塊りになって、突き抜けた。股を開けと言われても、体が硬直して、明るいライトの下では、更に身を竦くませるのが精一杯だった。

「口を大きく開けて、深呼吸なさい」

喜久が一呼吸終ると、突然、看護婦は両足の親趾を、女とは思えない程の力で掴み、片足ずつ思い切り上げた。手荒に、素早く、左右に突き出た固定脚に載せると、革のバンドで固く縛った。

台の下のパタルを踏むと、開脚のままの膝頭が、じわじわと、次第に目の前に迫ってくる。臀部が不安定に浮き気味に成った。喜久は喘いで、腰をずらすとすると、両肩の金具につかえて、恥かしい姿勢のまま、身動きが出来なく成ってしまった。

いくら固く眼を閉じていても、強く降りそそぐライトが眩しかった。生れたままの無防備の姿勢で仰臥した喜久の肌には贅りがなかった。

殊に、むき出しに成った脚は美しかった。妖しい戦慄が、際限なく、緊縛された体を駆け巡った。

昔、或る映画に主演した新劇の女優が——カメラの前で裸身を晒すことより、下穿きを著けても、婦人科のセットで検診台に載せられ、両脚を開いて固定された時の方が、女の肉体の奥の奥まで見透かされるようで嫌だった。もう二度と、あんな恥かしい姿勢はしたく無い——と語っていた事があった。

しかし、喜久の羞恥は、此の女優のそれとは全く異質のものである。羞恥の内に喜びの旋律が沸き起っていた。固定されて、こちこちになった体の片隅で心を揺する陶醉と期待が秘められていた。

「ハイ、拡張器」

冷い金属の嘴が触れると、喜久は反射的に腰を引いて、医師に臀を叩かれた。

「静かにして、もう直ぐ終わりますよ」

呼吸の出来ないような痛みが、下腹部に鈍く広がってきた。

「あっ痛っ、むー」

思わず喜久の白い歯の間からうめきが洩れて、腹を振るように波打たせた。

医師は、喜久の広げられた両脚の間に、頭

を沈めると、

「どうも不思議ですね」

ゾンデで触診しながら訝った。

喜久は、脂汗にまみれた顔から、涙をとめどなく流し、医師の独言を聞いていた。

「これであの方を恋し、愛の結晶を宿し、そして出産しようとした努力もお終まいね。私は流産したんだわ」

怪から革バンドが脱されても、暫くの間、喜久は内診台に体を預けたまま、天井の眩ばゆいライトから、眼をそむけようとしなかった。

「実は私、本当は、妊娠なんかしていませんの。それに、夫と呼ぶ人も居りません」

喜久は、小柄な真珠の体をワンピースで装うと、看護婦が診察室から出て行ったのを機に、医師に透き通った顔を向けた。医師の分別の有る齡と、自分の秘めた花園を覗かれた近親感から、天使長ガブリエルが現代の聖母喜久に受胎を告知した物語を告白する気になった。

☆

喜久の父親は、或る私立大学の理事をしていた。喜久が女学校を卒業すると、母親の熱心な慫慂に従って、父親の関係する大学の図



書館に勤めることになった。大学の図書館は思った程の暗さはなかった。

喜久の仕事は、研究室や各学部の教授達から、指定された専門書を届けたり、返って来た図書を書庫に収めるだけの単純な毎日だった。抜き出した書籍を、時々、拾い読んだが、退屈を紛らわすこと以外興味は薄く、只字づらに眼を走らせていただけだった。

薄いグリーン系のイタリアンモードに自然のまま長く伸ばした髪が小さな顔に良く似合っていて、図書館に來た人は必ず一度は、喜久の前で足を留めた。喜久の机の上に置かれた書籍の間に、ラブレターが挟まれていることも稀ではなかった。しかし、喜久は封のまま眉篋の中に捨てた。中に一週に一度位の割りで——長い間有難う、小妖精さん——とか、——何頁目を一寸汚して——とだけ書いて、無雑作に切った紙片が、挟まれた原書が目についてた。

紙片<sup>メモ</sup>を捉り上げると、必ずミセス・デイオールの優雅な香りが、ほのかに漂った。喜久は、その紙片の主を知ろうとは思わなかったが、香水には、喜久の官能を誘うものがあった。或る日の黄昏時、喜久が書棚に手を差入れると、反対側から軽く、喜久の手が押えら

れた。喜久は、驚きで胸が詰まり、卒倒しそうになった。相手の手首の静脈が、青く浮き上って波打っているのが、直接<sup>じか</sup>に伝って来る。白く水のように、冷たい指の感触は女性だった。

ミセス・デイオールの香りが夕闇に強く鼻を打った。無言のまま、手が放されると、喜久は、香水の流れる方向に、夢遊病者のように書棚を廻った。相手は、長い喜久の髪を指にからんで、強く背後<sup>うしろ</sup>に引いた。喜久の顔は宙に浮いた。のけぞった体は安定を失って、相手の腕の中に落ちこんだ。細い象牙色の眼鏡を掛けた、理智的な顔が、喜久の顔に迫って、未だ熟れない桃の実のような、喜久の唇を吸った。

「もっと強く吸って、お姉様」  
「お姉様でなくってよ。私は貴女の永遠<sup>ナイツ</sup>の騎士よ」

相手の軀のぬくもりと親密な愛撫は、喜久の血を昂ぶらせて慎みを失わせた。あの人は、喜久の喉の上から軽く接吻すると、更に強く抱擁した。

この日から、遅れ勝ちだった喜久の生理は周期正しく、豊富に流れるように成った。喜久の小柄な痩せた体にも潤が出てきたのを、

誰かが不思議がった。頼まれた書籍を間違えたり、書類のミスを冒すことが多くなったことを、祝福すべき恋をしている様に、むしろ人々は受け取り、喜久がレスボスの森で、妖しい遊戯に耽っていることには氣付かなかった。

喜久の下着は、皆あの人が、上品な凝った品を一流の店で選んで購入し、手ずから着せて呉れた。相手の下着は、喜久が全部、持ち帰って手で洗った。母親は、何も知らず、娘の豹変<sup>ひょうへん</sup>ぶりを、実社会で学んだ美德<sup>めいとく</sup>だとして、嬉んでいた。激しい恋は、喜久を益々、虜<sup>とり</sup>たけて美しいものにした。反対にあの人は、次第に痩せて、いらいだちが目立ってきた。時々、こんな言葉を<sup>うわごと</sup>讒言<sup>さんげん</sup>のようにつぶやいた。

「いつ迄も、こんな関係が続けてゆく事は出来ないわ」

或る晩、喜久の喉に蒼黒い隈が出来ているのを見ると、静かに喜久の体を抱きかかえてベッドに横たえた。喜久の腰から月経帯を脱がすと、汚れた下腹部を見て言った。

「貴女には、赤ちゃんを生む力があるわね。たとえ別れることがあっても、愛の証しに私は、貴女に、私の児を生ませたい。しかし、奇跡を信じて、これだけは不可能だわね。」



この指が、男と同じ働きを持って居れば良いのに。喜久の処女だけは誰にも渡したくない」

相手の為すがままにしていると、やがて、元のように月経帯を穿かせ、額に接吻してから黙って出ていった。冒瀆的な一夜が明けると、喜久は狂気のようにあの人を探し求めたが、消息が知れなかった。一カ月程して、青森県の八甲田山で、雪の中に埋もれて自殺していたあの人を、登山したスキーヤーが発見した。喜久は、一層無口になった。日がたつに従って、落着きは取戻したが、いよいよあの人言葉が鮮明に蘇ってきた。

「私もあの人愛の結晶がほしい。それが可能なら、あのマリアのように。若しそれが不可能なら、せめて懲罰の意味をこめて煉獄の責苦に甘んじたい」

喜久には、性も受胎の知識もなかった。しかし、その月から月経が流れを止めて、吐気を催した。悪阻も軽くは無かった。彼女はこの産婦人科を訪ねて、妊娠を確かめたかった。医者に、軽く想像妊娠だと笑われて帰る途、股間の異常に気付くと、一筋の血が脚を伝って流れ落ちた。しかし、次の月から、月経が無く、腹部が張ってきた。五カ月目に、又喜久はこの産婦人科医を訪ねたのである。

「矢張り、私は幾度でも産む苦しみを味わいたい」

喜久の頬を涙が幾筋も伝った。老医師は煙草を灰皿に捨てると、自分の娘に諭すように言った。

「症状は初めから分っていました。貴女は狂気と正常の平衡台に乗っています。同じ性慾から出発していますが、むしろ淫蕩女と言われた方が幸福だ。貴女は聖女であるが不幸です。仰しゃる通りでしたら、私が止めても、貴女は納得される迄続けられることと思います。この街の郊外にミモザ館<sup>ミモザ</sup>という屋敷があります。ミモザ館には、貴女のような苦しみを持った女達が、マダム・フランソワの世話を受けています。マダム・フランソワなら貴女の希望をきくと満ちたして呉れるでしょう」

## (二)

教えられた駅で降りると、喜久はパラソルを差して、駅裏に曲った。表通りの商店街の騒音が、嘘に思える程、静かな田舎道を歩いた。先刻の、医院での出来事が、もう永劫の彼方に消えた過去のよう、疲れた頭を明滅した。只、歩く度びに、棒を刺し込まれたような違和感が、僅かに、喜久の感覚を現実に戻した。木立を突き抜けると、正面に古びた

西洋館が、低い生垣に囲まれて建っていた。

屋敷内の緑樹も、盛りを過ぎて、鬱鬱と、夕方の太陽の光を跳ね返す力も無くて、茜色の中に沈んでいた。踏むとめり込みそうな土の上を歩いて、玄関に佇んだ。厚い羽目板の、ささくれ立った白ペンキを見て、喜久は、此のまま帰ったものか——と、長い間躊躇った。ドアを思い切って叩くと、寂まった邸内の空気を截るように木精<sup>こだま</sup>した。遠くから足音が響いて、ドアが開かれた。

「いらっしやい。喜久さん。お電話で承知して居りました」

「貴女がマダム・フランソワさん？」

「まあひどい。それはあの御医者さまが、私につけた愛称なんです。兎も角、お上りになって」

五十年配の、割りに大柄な、顔立の整った婦人だった。窓は、固く鎖されたままだったが、茂みが陽を遮えぎって、暑気を感じさせない、重厚な部屋に、喜久は案内された。ソファに招ぜられて、不安気に周囲を見廻していると、

「この建物は、貿易商だった父が、もう五十年も前に建てたのです。当時は、全くの森の中で、フランス人だった母の神経を休め、私



を安らかに生ませる為に、ブルゴニュー風に苦心して設計したそうよ。私は、混血児という宿命を背負って少女時代を横浜で過ごし、将来を案じた父の計らいで、T女子医専を卒業しました。戦前の日本では、混血児の住む世界は狭く、まして、女医として、病院に勤めても奇異な眼で眺められるだけでした。幸い、父が残して呉れた財産が、私の我儘を支えて呉れたので、こうして、喜久さんのお相手が出来る訳よ」

黒い髪も、顔立ちも、混血を思わせるものは無かったが、瞳だけが、時折り、碧玉の輝きを放った。

「さあ、此処が貴女の病室よ。貴女が此の館<sup>やかた</sup>に入ってから、もう人間では無いのよ。貴女は館の中の一茎のねむり草よ。ねむり草は私が大切に育てます」

彼女は、喜久を伴って二階に昇ると、一番端しの部屋のドアを開けた。檜の厚い壁板が洩く、脇に置かれた寝台は、大時代的なものでは有ったが、天井から吊されたシャンデリアと共に、豪華としか言い様も無い程、立派だった。落着いた部屋で、スウェーデン製の洒落れた三面鏡が、只一つ、華麗さを保っていた。

「御立派だワ。フランソワさん」

「フランソワって、あの御医者さまがつけて申し上げたでしょ。私が、フランスの女優、フランソワ・ローゼに眼元が生写しなんですって。さあ、マダムと呼んで下さい。此処が処置室です」

見ると、白色タイルで仕上げられた周囲の腰張りとは床は、館内の暗さとは対照的に、明るく、清潔に耀いていた。天井の反射ライトも、喜久が経験したあの内診台も、低い傾斜した分娩台も最新式の医療器械が並び、片隅には大型の浴槽や腰掛け便器迄設置されていた。

# ☆

「私、昔は医師でした。正確に言えば、今でも……。ミモザ館には、茨を背負った多勢のお客さまが訪ねて来ます。私はミモザ館の女主人として、皆さんの悩みを聞き、処置し満足させています。喜久さんにも、出産の喜びと苦しみを体力の限界迄味あわせて差上げます。此処では手の空いている人が、私の助手になります。喜久さんも」

喜久が身仕度を済ませて、羽根布団の中で一睡りしおわると、ドアをノックして、若い看護婦が入って来た。艶のある髪と、愛ら

しい眸は、白い看護服に良く似合った。しかし、どこと無く堅い体の線が不審だった。声も舞台上で聞くような、しゃがれた響を持っていた。喜久が警戒の色を示すと、看護婦は笑いだした。

「私は、本当のオンナなのよ。メンスが無いだけ。名前は麻美。性転換の手術をして、女のシンボルも有るわ。分娩や妊娠中絶の時は、私が介抱します。貴女、未産婦だから駄目だけど、経産婦なら優良児出産コンクールも有るわよ。さあ、分娩の準備をしましょう」

処置室に入る前に、麻美は、喜久の髪をお下げに編み、リボンを結んでから、マタニティドレスを装せた。マダム・フランソワは、診察着を着けて待っていた。

「其処にお掛けなさいな。貴女は、恋人の愛の結晶を宿し、今夜出産の予定ですよ。未経験ですから、出産前の教育を始めましょう」

ライトが消されて、用意されたスクリーンに映画が写し出された。分娩の学術映画らしく、系統的に医療処置を図解で説明した。腹式呼吸の講習を受ける産婦の臨月腹が、バスケットボール大に張って、腹壁の妊娠線がひどく印象的に写った。前駆陣痛が始まると、産婦は浣腸をされ、展示のため、両脚を挙げ



た姿勢で内診台に仰臥させられた。羊水が送り、新生児の頭が、軟産道から現われると急に膨らみ、弾き出るように看護婦の腕に産み落された。余りにもあっけなく、喜久が失望の色を浮かべた頃、次の一人は難産例で、産婦が縛られた膝頭を大きく揺するのを、看護婦がしっかりと、両側から押えつけた。クロースアップされた顔は、苦痛に歪がんで乱れた髪を左右に、激しく振った。

「恐らく、痛いようと大声を挙げて泣き喚んでいるのよ。きっと」

麻美は喜久の耳元で、そっと囁いた。下腹部が再び、大寫しに成ると、羊水が画面一杯に飛び散った。怒張した筋肉が、胎児を押し出そうとして、限界まで伸長し収縮した。医師が会陰切開のメスを入れたのを見て、喜久は貧血を起した。鉗子で頭部を挟まれた胎児と、胎盤の排出後、産婦のアヌスから出血して居るのを、薄れゆく記憶の中で、喜久は見つめていた。最後の一人は、産婦でなく、患者だった。手術台に臥えられ、注射器で静脈にゆっくりと麻酔薬を注入されると完全に意識不明になった。臍下中心線左側寄りに手馴れたメスが加えられた。出血は少なく、プツと血がふくれるのを看護婦が素早く拭った。

鉗子で開腹部を拡げると、藍紫色の妊娠子宮が、ゴムマリののように飛び出した。喜久はここで吐き、意識を完全に失った。強烈な映画の刺戟で、全身が痙攣し、嘔吐を繰返し、取罷めを哀願したがマダムは用捨しなかった。「喜久、今度は貴女の番よ。しっかり産んで頂戴な。月よりの使者さん、浣腸の準備をしてね」

麻美は分娩台にゴム引き布を敷くと、喜久を裸にした。喜久の尻に薄ゴムのマモリエブロンを当てて台上に仰臥させた。手首を頭上の紐にゆわえると、踵をペタルに乗せて固定し、膝に足帯布を掛けた。頤には、ゴムのバンドがはめられた。バンドは台の下でペタルに連結されている。妊婦がいきんで足を伸ばすと、頤バンドが引かれて頤が締まる仕掛けに成っていた。ハンドルが回るにつれて、分娩台が反対に傾斜して足の方が高くなった。ゴム製の太い留置カテーテルを挿入した。太い尿管が、アヌス一杯に拡がって、喜久は思わず呻いた。カテーテル内の枝管から圧搾空気を送ると、肛門内壁で、円盤型にふくらみ、汚物が洩れぬように内部からしっかりと圧迫した。一〇〇〇CCのイルリガートルが懸架に掛けられて、長いゴム管がカテーテル

に連結された。石鹸の微温湯が、イルリガートルに注がれて準備は整った。白濁した液が注入され始めると、イルリの目盛りは、泡を残して、少しずつ落下していった。

「何ンて、きれいな肌でしょう。まぶしい位。私など、三日置きにホルモン注射をしないと、肌が渴き切ってしまう」

麻美は接触部から溢れる液を拭きながら、溜息をついた。

#### ☆

麻美は、幼児の頃、身体が弱かった為に、女の児のように育てられた。小学校に上っても、男の子とは遊べなかった。姉の髪を結んだり、母の化粧品を塗ったりするのが大好きだった。或る時、姉の筆筒の中から、替ゴムの付いた黒いバンドを発見した。麻美には、バンドが姉のどんな目的に用いられるか知らなかったが、一人でこっそり穿いた時の感触は、震えが止まらない程だった。それから、姉のコレットやブラジャアを付けたり、下着を穿いて、倒錯の世界を愉しんだ。

中学二年の身体検査で、幾度も、彼の体を調べた校医は、仮性半陰陽だと告げた。医師の配慮からか、興味が無かったのか、何の問題も起きなかったが、麻美は始めて、肉体的



にも異常である事を知った。十六才の時、上京して、ブルーボーイに成った。最初の相手はアメリカの船員だった。獣のように麻美の体を散々に弄んだ。受動的な愛を知り、陰靡な喜びの淵に溺れた。女に成り切りたいという気持が、性転換を真剣に考えたが、勇気が無かった。翌年、フランスからブルーボーイ達が来日して、ステージに立った。彼女？達の醸し出す女らしさを見て、麻美は手術を決心した。

医師からは

「二度と男には戻れませんよ」

と、念を押されて、後日、問題が起きぬ様、誓約書を書いた。下半身麻酔で、睪丸摘出の手術を受けた時は、覚悟していたものの、怖かった。手術台に載って、体を強く縛られると、一層恐怖が募った。手術中は全身から、冷たい汗が流れ、歯の根が弛んだ。睪丸に派生している毛細血管を一本づつ、丹念に切り取って行った。一本取る毎に、脳裏に肉を削ぐメスの痛みが響いた。

「もう嫌や、止めて先生。痛いッ」

麻美は、絶叫したが、医師は冷静に手術を続けた。

「今更、手術を罷める訳けにはいかんヨ。君

は完全な女に成った方が良い。形ばかりの子宮も胎内で見つかったよ」

最後に、長い筋を抜き取る時、麻美は悲鳴を挙げて悶絶した。術後、ホルモン注射を打ち始めると、肉体的変化が目立ってきた。髯が薄くなった替りに髪が柔かく伸び始めた。尻の円みが男とは思えぬ程変った。バストに固型物を埋没させて、人工の美女が誕生した。「来年は、マダムの御世話でヨーロッパに旅行して、アチラの先生に最後の仕上げをして貰うの。注入量未だ二百ccね」

麻美は、イルリの目盛りを眺めると、嘴管の挿入部を揺って、指で弄んだ。耐え難い圧迫感が、上潮となって押し寄せた。太腿は小刻みに震えて止まらなかった。

「苦しいから止めて、麻美さん」

「駄目、少し重苦しいだけよ。未だ結腸の方へ液は入っていないわ。お腹を揉んで上げようか」

麻美は愉しむように、喜久の腹を両手で揉み上げた。背筋を戦慄が走り、太腿の痙攣が激しく成った。歯をががつと鳴して、喜久は声を挙げて呻いた。

「お小水を催して来たのでしょう。施術中は肛門に力が入っているので、案外、出ないわ

よ。いきむと、洩れるから、静かに排尿なさい。そろそろ五〇〇ccよ」

ガラスの婦人用尿瓶をあてがわれる。ちょろちょろと遠慮勝ちに洩れた。新鮮な尿の匂を発散した。

遂に、一〇〇〇ccの石鹼液は、喜久の腸内に余す所なく注入された。喜久の心臓は早鐘のように波打ち、がちがち歯を噛み鳴らした。いきむと腹の重圧感が激痛に変わった。

「むーッ、痛たいヨー、麻美さん、あっ、私もう駄目」

泳え切れなくなって、ペタルを穿いた足を力一杯伸ばすと、頤に掛ったゴムバンドが締って息が詰った。慌てて手を縮めると、足が引き上げられ、又元の開脚姿勢に還った。

喜久は、二三分置きに襲う腹痛の波に、足を伸ばし、頤を締められ、両手で紐を引き、足を引き上げるといふ繰り返しを数十回の果てに疲労で声もたえだえになった。

「喜久さん、勉出期(第二期)の産婦は、破水と同時に、陣痛も今以上の苦痛が続きます。排臨の場合、陣痛がやむと、胎児の頭が引込みます。頭が引見える発露までは、この新式分娩器が今のように、貴女の出産の補助をする訳です。貴女の場合ですと一〜二時間で胎





児の頭が出ますよ」

何時の間にか、傍に立ったマダムは、留置部の空気を抜き、カテーテルを外した。太いゴム管を結腸部迄挿入すると、麻美に命じてプラスチック製のハニー・ポットを喜久の尻に充てた。音を立てて進ばしる液体は、苦痛から快楽にと徐々に変化させながら流れ込んだ。恍惚とした陶酔が全身を包み、まぶしいライトも、白い看護服も、喜久の眼には写ら

なかった。

「苦しかったわ。けだるい感じが何とも言えないの。マダム」

「さあ、今夜はこれでお休みなさい。貴女の分娩は明日にします。明日は夫人達の優良児出産コンクールも有ります。麻美、浣腸の残物が未だ出ますから、びっちりとしメカバ―をして上げて。総ゴムのが良いでしょう。オムツは布でなく、病人用パットでね」

### (三)

喜久は、終日寝台に体を臥えていた。処置室から帰る途中、言いようのない空虚な疲労感が、身を苛いたんだが、今朝、眼覚めてみると、又昨夜の分娩台の自分がいとおしくなつて、夜が待たれた。外は、雨が朝から小止みなく降り続いて、窓外の木立も生氣を取り

戻していた。湿気こそなかったが、部屋の空気は、布団から体を出すと、鳥肌が立つ程冷え冷えとしていた。

懶うくて、マタニティ・ドレスのボタンの脱れを嵌めることさえ、煩らわしい。ドレスの下には、総ゴムのオムツカバーがびったりと、腰を覆って、ぬめぬめとしたゴムの感触が、絶えず素肌に不快な刺戟を与えた。真夜中に二回程、誰かが喜久のオムツカバーを脱して、パットを取替えて呉れたが、人の気配と、股間の肌寒さを感じただけで正体もなく、眠りこけて居たらしい。今も、すでに当てられたオシメは濡れそぼって冷たかったが、僅かに足を縮めて、遠い幼児の時代の追想に耽っていた。どの嬰兒も、濡れた襁褓に小さな足を曲げて、泣声を挙げるのかと思うと、喜久も赤ん坊のように、かすかに甘えた泣声をたててみた。遠い昔への郷愁が、喜久に大人の心を捨てさせた。

尿意を催すと股間を顫わせて、大胆に開放した。進った温い液が尻を伝わる快感と、ぐっしりと濡れたオシメが次第に冷える不快感が交互に喜久の官能を撓った。

「まあ、いい臭いなこと。今夜のお客様達がそろそろ到着しますから、お化粧に移りまし



ようよ」

今日の麻美は、サックドレスにボウをあしらった派手な服装で、化粧もどぎつく、濃艶な感があつた。布団を捲くると、蒸れた体臭が部屋中に拡った。伴われてバス室に入ると、部屋一杯に鏡が詰め込まれていて、あらゆる角度から喜久の姿体を、万華鏡のように捉えた。麻美は宝石でも扱うように鄭重に喜久の妊婦服を脱がせた。碧く澄んだお湯に、麻美が先に入って、喜久を抱き擁えた。二人が湯に浸かると、湯船から溢れたお湯が、タイルを流れて浴室を湯気で満たした。喜久は、熱いお湯が、綿のような総身を浸し、骨の髄迄泌みて夢心地だった。

「喜久さんの肌は、何度眺めても美しいわ。憎い位。こんな話知っている。唐の玄宗皇帝が楊貴妃に、西安の離宮で浴みを賜った時、宮廷詩人が、この情景を詠った中に、——温泉の滑かなお湯が玉のように貴妃の肌を滑って、貴妃は、只もう、ぐったりとして、介添の為すがままに体を任かしていたそうよ。今、こうしていると、喜久さんは楊貴妃みたい。私の侍女ね。貴妃は、玄宗の寵臣だった安禄山の乱の内に、馬嵬でくびり殺されるのよ。胡人だった安禄山は、寵を得るために貴妃の

養子となって、宮中に入るとき、豚のような体に、錦繡の襦袢を付けて輿に乗って来たそうよ。楊貴妃よりは、喜久さんの方が奇麗ね。或る人に言わせると、中国の美人の標準は、唐の時代はむっちりと肥った女が良かったというわ」

珍らしく饒舌になって、麻美は喜久の体を流した。麻美がゲイバーで聞いた客の受け売りも、喜久には別の感慨があつた。貴妃の魂を求める玄宗の心を詠った長恨歌は、そのまゝ喜久の心だった。喜久も麻美に、親しみを感じて背中を洗ってやった。しかし、何処となく女らしさがなかった。

階下のホールに降りると、四十前後の豪華な衣裳の女性三人が、ソファから立上った。一人は関西から飛行機で来たという。指に嵌めたダイヤや翡翠は、夫人達の身代を物語るのに相応しい品物だった。

「この方が喜久さん？。まるでローランサンの少女ね。貴女がいらっしゃれば、私達の楽しみも倍になるわ」

マダムに紹介されて、挨拶が終ると、マダムは三人に入浴を勧めた。すると、先程、後藤と紹介された夫人が急に周章てた。

「私、遠慮させて戴くわ。昨日からブルーデ

ーなのよ」

マダムと連れの二人、顔を見合わせて、にんまり笑った。

「今晚、最初の犠牲は、後藤夫人に決まったわ。分娩に血は、付きものよ。本当に楽しみだわね」

二人は急いで浴室に消えた。喜久と麻美はマダムに命ぜられて、処置室を消毒し、器具を煮沸した。

「出産コンクールって、一体どうするの？」  
「今に分かるわよ。後藤夫人は四十才。高校生のお子さんが二人も居るといふ話だわ。御主人の愛では刺戟がなくて物足りないのよ。妊娠中絶の手術で内診台に載せられた時、異常な興奮を示し、抓把のため、ラミナリヤ管を子宮に挿入された時、絶頂感に達したらしいの。以来、婦人病でもないのに、軒並みに産婦人科の内診を受けて歩くので、界限では有名だったらしいの。矢張り被虐趣味の一種なのね」

麻美は、分娩台を石鹼液で洗いながらにやにや笑った。喜久は女の業すら持つ事の出来ない此の美女を憐んだ。

突然、ドアが音をたてて開けられた。薄茶のスリッパ一枚になった後藤夫人の腕や髪



を掴んで、マダム達が入って来た。

夫人は、入口で弱い抵抗を示したが、三人に突放されて分娩台の横に転がった。三人は素肌に手術衣を纏っていた。夫人は跣足だった。

「恥かしいから今度だけはやめて、お願い」

夫人は、床に腰をペツタリと落して哀願した。他の二人は無言で、左右から肩を掴んで分娩台に曳ずり上げると、狂ったように暴れる夫人の体に馬乗りになって手足を押えつけた。

麻美が、昨夜喜久がされたように、手首を縛った。マダムがスリップの紐に手を掛けると、引きちぎった。高価な絹のスリップが無残にも三人の手で奪り取られて、素肌が現われるのを、喜久は息をつめて見守った。荒々しい手が加わる毎に夫人は悲鳴を挙げた。

「後山夫人はあれで随分とお楽しみなのよ」

麻美は、喜久に耳打ちすると、暴れる夫人の踝を押さえてペタルに乗せた。他の一人は、音のする程、頭を分娩台に押えつけて頤バンドを掛けた。夫人は腹を波打たせて大人しくなった。派手なフリルのついた月経帯が、少し黒ずんでたるみ加減の腹部を余計貧弱に見せた。腰や肩のあたりの贅肉は、中年肥り

の醜悪さを感じさせて、喜久の美しさとは比較にならなかった。夫人は薄目を開けると弱々しく言った。

「大事に扱ってね。ムードがほしいの。皆さんに見られるの恥かしいわ。一人にして」

マダムが大型の膿盆を下に置いて、手術用鉢を取り上げた。月経帯を切り放すと、蒸溜水で洗滌した。マダムは、イルリガートルの嘴管の先端に、外科用のバルーンを詰めて、挿入すると、水止めを握った。ゴムの管がふるえて、イルリガートルの水が落下するのがよく分かる。夫人は開けていた眼を閉じて口を噤んだ。

水位が三〇〇cc迄下った時、急に眼を開いた。

「苦しいッ」

「この間の赤ちゃんは、四五〇迄行ったでしょう。ね、我慢して」

腹の喘ぎが小山の様に膨れあがったかと思うと、谷底に落ちこんで、大腿部がせわしく痙攣し始めた。耐え切れなくなった夫人は、アーと糸を曳くように声をあげ始めた。マダムは止め輪を放すと、微細な穴のあいたゴム栓をバルーンの入口に嵌めた。

「今日は四二〇ccね。これなら立派な赤ちゃんよ。さあ、貴女は開口期に入った所よ。規則正しく、いきみを繰り返しましょうね」

マダムが、夫人の汗を拭き、頬を軽く叩いた。後藤夫人は、鈍痛が身を苛むと、緩慢に脚を伸ばした。腰が締まると、バルーンは圧迫されて、栓の穴から液が勢よく孤を画いて飛んだ。

麻美や他の二人は、その恰好が可笑しいと腹を抱えて笑った。

喜久は始めて、健康優良児コンクールの意味が理解出来た。夫人達は、注入された液の量によって優良児くらべをしていたのだ。彼女等の性の郷愁を満足させ、排出という異常な欲びを、模擬出産によって得ていたのだ。喜久には笑えなかった。次第に心が冷たくなってゆくのが自分でも分った。

——あの方達は悦楽の為に、分娩台を利用し、私は精神的な苦痛を追って分娩台に昇った。幻覚でも良いから子供が産みたい。あれでは神聖な分娩に対する冒瀆だわ——

夫人は全身から冷たい汗をしたたらせて、歯を喰いしばって、喜久と同じように、脚を伸ばしては頤を緊縛され、両手を引いて又開脚の姿勢になる動作を執拗に繰り返した。繰り返すことでバルーン内の液が減って下腹部



が楽になる。

羞恥と屈辱の前奏曲で性感を昂め、疑似分娩の動作によってエクスタシーを覚えるらしく、夢中でペタルを踏み始めた。

「大分液が減って来たわ。そろそろ排臨ってとこね」

マダムは、アヌスにタンポンを強引に挿入した。

「痛いよう、痛いよう」

夫人は節をつけて唄うように叫んだ。

陶酔で無我の境に入ったらしく、顔の筋肉が歪がんで、泣いているのか、笑っているのか奇妙な表情だった。

遂にバルーンが、多少の液を残して入口から黄色い顔を出した。夫人は残った力を振りしぼり、一際高く呻いて、この疑似分娩は終わった。

熱いタオルで局部を拭くと、夫人は泣くように呟いた。

「最高よ、素晴しかった」

興奮が室内に渦巻き、異様な空気を醸し出した。

「さあ喜久さん、今度は貴女の番です。支度なさい」

三人の眼が一斉に喜久に注がれた。喜久は

急に体中の塩分がなくなり、足が萎えてくるのを感じた。同じ責められるのなら雰囲気欲しい。これでは只の遊戯ではないか。マダムの刺すような視線を感じて、黙ってマタニティドレスを脱いだ。

「喜久さん、スリッパも取るのよ」

喜久は二つの固い乳房を手で覆った。

「まあ素晴らしい。私達には夢ね。まるでニンフみたい」

観念した喜久は麻美が水平に直した分娩台に左脚を下にして横臥した。麻美がイルリの尿管を差し込んで水止めを握った。冷たい液が直腸に侵入して行くのが感じる。結腸内に液が入り出すと下腹が徐々に重くなった。

「おや、今日は大変大人しいわね。お客様の故かしら」

麻美は冗談を言ったが喜久は黙っていた。

昨夜のとおり、分娩台に仰臥させられた時も喜久はされるがままになっていた。病院でも看護婦でもない人達の好奇心な視線が、喜久の入ろうとする幻想の世界の入口を遮った。――所詮、此の人達は、別の世界の住人だわ。たとえ私が、異常でも、この人達の矚りものにされるのは御免だわ。――

「喜久さんは未産婦だから」

マダムは、先刻の外科用バルーンを徐ろに挿入した。

喜久は殉教者のように冷たい顔を天井に向けていた。

液がバルーンの壁を通じて直腸内に送り、腸壁を圧するのが分った。徐々に圧迫感が激しく押し寄せて排出を促がした。四〇〇ccの容量が注入された時、喜久の冷たい心は昇華した。天使長ガブリエルは喜久に囁いた。「聖母マリアと同じように、貴女にも聖なる子が、お腹にいるのですよ」

――受胎告知だわ――

喜久の体から膏汗が流れ落ちて思わず呻いた。自然に足が動いて、いきみを繰り返して、ペタルを徐々に早く踏み始めた。

後藤夫人と同じように、身体が温まると、喜久の顔は上気し、泣顔とも笑顔ともつかぬ表情になった。

陶酔が訪れて、ぱたりと体全体の力が抜けた。足だけがリズムカルに痙攣していた。

――後藤夫人の二の舞は踏まないわ――と誓っていた言葉は自然に消えていた。そして泣くように呟いた。

「最高よ」

(この項終り)



# 幻まぼろしなる国ありて

夜 乃 探 郎



わが望は、所謂リアリズムの世界から逸脱するにある。空想的経験こそは、現実の経験に比して更に一層リアルである。

—デ・ラ・メイアの言葉—

碧血の迸るような太陽が街に残光を投げ、その死体ぬけがらを西の空に没すると、ネオンが点滅する夜の舞台が開幕される。そのことは自称、耽美派、夜尾氏に取っても放浪の第一歩をふみ出す、スタート・ラインを意味した。

だが、めまぐるしい忙がしい街の夜色は、

まるで匂いの無い造花を思わせ、ゼンマイ仕掛けで動く人形のような都会の雑沓の中で、夜尾氏はいつも孤独だ。しかし、そのような背景こそ、また「幻なる国」の入口を見つける旅でもあった。

——人間が居ながら、人間のいないような街の砂漠を旅せば、その果てに幻なる世界を浮出させ昔懐かしい景物の名残りがパノラマのようだ。あれはアセチレンの光に照らされた屋台、これは回転木馬小屋、大人用の二人乗りブランコ、哀愁をふくんで流れるジンタは曲馬団の天幕からだ。この世界で夜尾氏

は、やっと生きていることをたしかめる。

「貴方が来るのを待ってました」

二人の男から夜尾氏は声をかけられた。この国では、それだけでマニア同志ならすぐ何物か判るのだ。

「おや、川津氏と間御矢氏ですね」

夜尾氏は微笑しながら答えた。それから彼は、ちよつと照れた表情を見せて付け足した。「パノラマ島の後日譚では、すっかり僕はMにされてしまった。といっても調教師が、サディスティンの大姫御、春日ルミさんでは光栄のいたりですがね」

川津氏は「特にSなどと生意気を言っている男を誌上でフウフウ打ちのめす戯文（八月号）も、貴方のよくおっしゃられるパラドックス的な意味もあるのですよ。私なりのマゾヒストとしての親愛感です」といって、かたわらの間御矢氏に共感をうながした。

「そうですよ。SであれMであれ、この退屈な世の中で刺激あるロマンを求めることはマニアとして、共通した課題ですからね」

間御矢氏は言った。

「八月号の菊誌ではとうとうカメラ・ハントで辻村氏が浴槽の中で百合子にむかって、おじさんに彼と同じことをしてくれない」と、神酒奉戴論者の経験を実行して見たい衝動にかられる一節があったが、この所、M天下と



「書き続けなさい」と夜尾氏は笑った。

「それは……しかし、夢の判らないおひとも多いのでね。型にはまった無味乾燥な世界がどれだけつまらないか」

夜尾氏は吐意をもらした。

「アガメムノンの美しき子孫よ！ 汝が常に甚く讚美せるこの臀部を眺めよ」

その声に夜尾氏一行は、ふと立ちどまった。一つの奇譚、一つの博学、一つの善意、一つの個性そのものの黒附知氏が、馬上でよい氣持になって吟じていた。

「黒附知さんですね。ところで、そのお言葉は」

すぐ川津氏が質問した。

「美臀のヴィナスを知っていられるか。ギリシヤ末期のデメトリウス・ポリオルセット王の寵姫メビアは此のヴィナスに似ていたと噂されていたが、ある日、王がその肉体の秘密の美を見んことを願うと、裾をまくりあげメビアは直ちに恍惚たる愛嬌を以て王の方にふり向いて、ソフォクレスの詩の二行を作り替えて献じた。それがいま唱したもののさ」

「ぼくが王なら、その時、あア、その玉の如きおしりの前にぬかずき、……その高く丸々とした聖なる丘の頂点に静かにくちづけをな

し、その舌は、やがてやんわりとした腰えくばに」

川津氏は感極まって土下座して叫んだ。

「たしか、ナポリの博物館にあってヴィナス・カリピギスという彫刻で、これは『美臀のヴィナス』としてシラキューズ市の寺院に祀られていたもので、ヴィナスが裾をからげて右膝を軽く曲げ、自分の臀部に満悦し、これを誇示している立像である。まあ、この臀部の美ということが乳房や顔よりも、当時のギリシヤに於ては、女としての非常な名譽であったわけだ」

このいつも雲を見つめる天才の眼は、今宵ばかりは、別な所にむけられていた。そう、『美臀コンクール』会場に向って――。

舞台では、先着順に実に素晴らしいコンクールがニグロによるジャズ・バンドにつれて展開されている。出場者はすべて生れたばかりの姿でフラ・ダンスを踊るもの、おしりだけを流れるように四方八方にまわすものとか。戦前派には懐しい近代の踊り子、ジセフィン・ペーカーに似た若い娘が、その黒ッポイ出尻をコマのようにブンブン廻し、はては振り返って一儀の時のように溜息をついて見せたときは満場の男性総立ちになって声援した。「僕はあのように、くりくり動く尻を見ると思い切り、しなやかな鞭で赤い地図を描きた

くなるね」

いつのまにか観客席に現われた夜尾氏が、これまた立見している、間御矢氏にささやいた。

「あなたはSだから、そうでしょうが、私などは、やはり川津氏のようにお尻にキッスさせてもらう口です。そのとき、あのでっかいおしりにはねとばされたら、どんなにか嬉しいことでしょう」

間御矢氏は眼をまばたきつつ答えた。

「わたしのおしりを御覧下さい。ホラ、こんなに綺麗で汚点もなく純だわ。この股からおしりへかけての紅らみはどう。股は太りすぎでもないし、やせすぎでもないし、腰えくぼなども、よく見てちょうだいよ」

赤毛の女がセリフをのべると、その大きなお尻で私の顔中を色々に押しつぶしてくれ、もう死にそうだと、という叫びも客席からきこえるほどのさわぎである。

――ジャズが渦巻く、お尻が乱舞する世界の中で、夜尾氏の体を一瞬、影が横切った。そんな時、彼は遠くをみつめるようなポーズを取る。それは、かつて木戸川健氏が『小説・箕田京二』で描写した、夜尾氏独自の物だ。

夜尾氏は木戸川氏が活躍した頃を懐しく思い出す。木戸川氏の悲劇は、あえて喜劇とは云うまい。マニアと一般社会、文学との橋渡



しを考え、その地点でア・ロハしちゃった。苦汁をのんだ顔付で精一杯のユーモアを原稿用紙に書きとばした。かれはたしかに匂いのない造花ではなく本物の体臭を感じさせた。

芳野文学の必然性を問題（一月号「神酒」を酒の肴にした酔人醉談）にし、悪書とよばれる菊誌から芥川賞、直木賞が出たら、それこそ優雅な諷刺はないと。芳野氏を期待しつつ。

「どうしました」

間御矢氏が声をかけた。

「アチャラカきわまる、木戸川氏一派の文章か。菊誌は貴重な公共の広場。貴重とは、文部省あたりから推選されるような文章でも書いた方が、さぞかし読者にでもよろこばれるという、貴重とはそんな意味なんでしょうかね。へへッ。一般的な価値観からすれば菊誌の、どの頁をとっても、貴重な、などという頁はない筈で、ただ、みんなが楽しんでるにすぎない。それでよいのじゃないか。」

「奇譚」とは、けっしてノーマルでなくアンバランス的な所に反骨もあり、パラドックスな発言もある。そんな象徴さ。ためになる——などという言葉ほど、この世でつまらんことはないね」

夜尾氏はそれだけ云うと、大きなクシャミをひとつした。あっけに取られているマニアの仲間と別れ、夜尾氏は「夜」の世界に孤影

を引きずりながら、コンクール会場をあとにする。

× × ×

……そーらに—— さえずる とりのこえ  
—— みねよりおつる たきーのおーと。

あの胸をしめつけるような音楽が、いろいろな音や声にまじって、遠く切れ切れに聞えてくる。「分っちゃいないんだ」夜尾氏は、いま非常に悲しいのである。

△木戸川氏のバツカヤロー、なぜ、消えてしまったんだよう。おれは、アンタの残した言葉を守って書き投稿し続けているが、ときたま空虚な無気力さがペンをにぶらせる。やっぱり、アンタが居なくて、——おれは張合いがない▽

夜尾氏の頭上はるか、各会場の建物に取り付けられた色とりどりの豆電球が、夜空に映え、青い月光が、さながらフットライトのように地上を染め、幻の国はまるで竜宮城の世界でもあった。

○

めざむれば浮世は淋しく——夜尾氏はネオンが輝やく現実の街を、いまはちぎれやぶけたボロ布の如くさまようか。

エルミネーションが象徴する影絵芝居のような、どこかはかないショーのさまざま。それらは仮設舞台のものであり、にぎればとけてしまうような亡びの華やかさをただよわし

ているからこそ、夜尾氏の体を深い郷愁の波におし流してしまうのだ。

それはもう、幻なる国より他に、本当に息づいてくれないのだから。

◆参考、広橋梵「美臀のヴィナス」あまとりあ「二巻、第四号掲載

「あとがき」

この原稿は読物でも、ましてや小説でもない。現在のぼくの心境を「幻なる国ありて」にたくしたものにすぎない。実は六月号で間宮清満彦氏から「今晚は、間宮です」の中で「お願いします。必ず毎号載る様」と、ぼくのロマン・ファンタジックな文章を支持されたとき、すぐ何か書きたいと思った。しかし残念ながら、夜のシリーズ的新作は間宮氏の文を見てより一篇も執筆してない。先月の末頃か、発作的に「SM的自殺論」を書き「福田久文論」を仕上げた。まとまったものといってもこの程度投稿した位である。かつての多作家、いまは形なしである。なぜか、——その不満は少しくこの「幻なる国ありて」に投げ込んだつもりだが、とにかく、これが発表されたら、ぼくは何よりもまして、木戸川、黒淵、間宮、河津の各氏に捧げたい。

親愛の意味と、無断で横顔を拝借したが故に——。





既に全国的な販売組織の拡張と強力なセー  
ルス・システムによって日本の食品業界に独  
占的な地位を築き上げたユニヴァーサル・フ  
ッド、同様に全国的な販売網の強化によって

モ

ッ

キ

ン

バ

ー

ド

三 原 寛

飛躍的な発展を続ける資本金十億のドリーム  
・ベッド、日本の航空機業界を三分し、三次  
防予算枠の配分で談合のリーダー・シップを  
把るに至ったN飛行機、更に日本の三大ビー

ル・メーカーの一つであるライオン・ビール  
をも膝下に屈せしめ、富村梨枝子は今や、日  
本屈指のマンモス・コンツェルンの女王とし  
て君臨していた。

彼女の支配下に入り彼女の苛酷な強制割当  
システムに呻吟する全傘下の莫大な人数の従業員  
達が、先ず、実力のないものが淘汰されて脱  
落して行き、又、その苛酷な強制割当に堪え  
て実力を出して来たものも、遂には余りにも  
冷酷非情な苛斂誅求に骨の髄まで絞り尽され  
てやがては廃品と化した。

マンモス・コンツェルンに君臨する女王富  
村梨枝子、その輩下の女性支配者達、そして  
従業員は、これら女性支配者達の傲れる奢侈  
享楽の為の無限の富を絞り上げる為に利用さ  
れる消耗品であった。従業員の絶え間ない新  
陳代謝が要求された。全国個人所得の順位  
では、富村梨枝子を筆頭に上位十位を常にこ  
の女性支配者達が占めることとなった。

そして、この女性支配者達の飽くなき富の  
欲望の犠牲となった従業員達は、富村梨枝子  
の悪魔的な着想により、廃物利用に供せられ  
た。

モッキン・センターと殖畜舎ストーリー・ハウスの設立であ  
る。



☆

富村梨枝子が絶対権力を握るマンモス・コンツェルンには彼女の旧友、岡島啓子、それに、江川貴美子が重役陣に加わった。経営陣には女子大卒を身長一・六五米以上、容姿に基準をおいて採用した。採用のテストは、男を畜視し或いは消耗品視して、如何に有用に利用し得るかの能力を試めす簡単なものだった。

例えば、入社後の社員教育で、幹部候補の彼女達には次のような問題が課された。女性四名に男二人を乗せて大型遊覧船で航海中、船底に穴があき、海水が強烈な水柱となって噴入して来る。男の一人が咄嗟にその穴に片腕を突込んで浸水を塞いでいる。腕を抜けば忽ち水が凄い圧力で突入して来て船は沈没する。船には四人乗りのボートがある。こういう事態に遭った際、どう処置すればよいか。勿論穴を塞いで居る男は消耗品としてここで使い捨てねばならないだろう。愚図愚図していても、水圧が一人の力では抗しきれなくなり、人間の一人や二人吹き飛ばす位の勢で水が突入して来るだろう。急いで今一人の男にボートを下させねばならない。ボートは四人乗りだから女性四人が乗るのは当然である。

穴を塞いでいる男は本船と運命を共にする事になる。今一人の男には泳いでボートを後から押させるのである。先の見通しのつかぬ場合、余計な労力によるエネルギーの消費は出来る限り避けねばならない。男の体力の続く限り押させれば良いのである。男も必死だから、可成り使える筈である。男の力が尽き果てたら、却ってボートの推進の邪魔になるので、ボートに掴まっている男の手を払い除いてやれば良いのである。

☆

男共を直接に管理監督する女主任には、パリ、キャバレー、ナイトクラブの女給やトルコ嬢、或は盛り場の不良少女達を大量に採用した。彼女等にかかつては男共は雑巾を絞るようなものであった。女主任の基本給も月給五十万円以上の線に固定されていたが、それ以上は能率給となっている為、彼女達は配属された男共を、凡そ非常識に滅茶滅茶に絞り上げた。使いものにならぬとみれば即座に廃品として処分され、いくら必死に働いて実績を上げても、彼女等は益々図に乗って絞り上げてくるのだった。

男共は女主任の固定給の中から彼女の思召し次第でいくらかを割いて貰って養われる恰

好になっていた。女主任にとって、自分の収入の中から例え僅かでも自分に配属された男共に分けてやるのが、惜しくてならないのである。

彼女等が、毎日、朝礼と反省会を行って、男共を苛酷なしごきにかけている事は既に前稿で述べた通りであるが、それと別に毎月末、女主任達が集って、査定会が行われた。

査定室には、女主任達がずらりと机を並べる。男共が、一人一人呼びつけられるのである。

査定室に呼び込まれた男は、床の上に正坐し、土下坐して、自分の名を名乗り、それから、額を床に摺りつけて、自分を今日迄使って戴いた事に対し、繰り返して御礼を申し上げ、それから、今後も使って戴けるよう忠勤を誓い、寛大な御査定を哀願せねばならない。

女主任達は、先ずこの男の一カ月の実績表に目を通し、それから、男の哀願の仕方を検討して、又来月も従業員として使いものになるかどうかを査定するのである。

従業員としても早使いものにならぬと判断された男は、これから本格的な査定を受けねばならないのである。男は、先ず着ているものの全部を脱ぎ捨てよう命じられる。ずら



りと並んだ女主任達の前で、一糸もまとわぬ全裸の姿のまま直立不動の姿勢で立たされるのである。

女主任達の意地の悪い視線が一せいに股間に集中し、男は羞恥でいてもたってもいられぬ気持になるが、姿勢を崩すことは許されない。

値ぶみするような女主任達の執拗な視線が男の全身を這い廻る。それから、男は床の上で四つん這い、仰臥等凡ゆる屈辱的な怡好をさせられ、腕、脚、腹等の筋肉のつき具合、鞭に対する反応度、その他厳密に調べられ、生殖器、肛門に至る迄綿密な検査を受けるのである。

この検査によって、従業員として使いものにならなくなった廃物共は、モッキン・センター行きと殖畜舎行きとに仕分けされるのである。

検査の結果肉体的にも既に廃物の限界にきている男共が、殖畜舎の方に廻されるのである。殖畜舎というのは女主任達に運営を委せられた、彼女達の小遣い稼ぎの一方法であった。

女主任達には専用のデラックスなマンションが与えられていたが、そのマンションの裏

手に殖畜舎が設けられていた。殖畜舎の中には鉄檻がずらりと並び、一人一人仕切られた中に殖畜共が全裸で閉じ込められていた。

鉄檻の棚の所には夫々、その殖畜が曾つて配属した女主任の名札が下って居て殖畜の持主を示していた。従業員の新陳代謝が激しいので、大体一人の女主任が常時十〜二十人の殖畜を所有している。残飯で飼われているのである。ずらりと並んだ鉄檻の前に飼箱が樋のようになつて、一方から残飯がベルトコンベア式に流されるのである。豚小屋と同じで、排尿排便垂れ流しであるが、一定時間が来るとホースから噴出する水で殖畜の体から、床から洗い流し、傾斜したコンクリの床から汚物は下水管の方に流れ出す仕組みになつていて、割に清潔を保っていた。

月収五十万以上の女主任達であるが、もともと享樂的で贅沢に慣れた彼女達だし、或は中には貯蓄に精出す者も居て、一寸夜の外出、或は美容院代等という時には夫々の殖畜を利用するのである。女主任達はハンドバッグの中に常時、大きな注射器を携行した。

彼女達は、自分の所有する殖畜から血を抜いて売るのである。殖畜舎の入口の事務所には輸血センターの代理店が常時出向してい

ていつでも換金する事が出来た。

彼女達は夫々一人で二十の鉄檻を所有していたが檻が満員で新殖畜が補充されてくると古い殖畜から順に漸く放免されるのである。

放免、つまりこれで、愈々解雇される訳であるが、男共の健康状態等に情容赦ない女主任達が小遣いが欲しくなつては無暗に採血して行く為、放免される頃には、男は青白く、骨と皮に痩せこけて、足腰もたたぬ程の廃人となつていた。こうして、彼女等の美容院代、或いは一夜の歡樂の為に男共は文字通り、血の一滴まで絞り取られた末に捨てられるのであるが、この哀れな男共にも、認められた唯一の恩恵はあった。富村梨枝子が、面白半分に定めた規則であつたが、女主任も守らぬ訳にはゆかないのであった。

それは殖畜舎から放免される際、男共は女主任の足処理のお慈悲を乞う事が出来るというものであった。足処理は規定では、靴磨きの台のような処理台を前にして、男は、膝を八の字に開いて正坐し、それを、女主任は、一応、素足で処理する事になつていた。男はその間、両手を膝に不動の姿勢をとらねばならない。

散々、苛酷なノルマでこき使われ、揚句の



果てに、生血まで絞り取られて、類死の状態  
で捨てられようとする男共であったが、殆ん  
どがこの足処理を望んで女主任の前に哀願し  
た。

大抵の場合、規則で仕方なしに、女主任達  
は面倒臭がって、ハイヒールのまま土足で、  
処理するのだった。ガムを噛んだり、仲間の  
女主任と雑談しながら、乱暴に四、五回踏み  
躪るだけという処理が多かったが、それでも、  
男共にとっては、長い労苦に報いられる一生  
一度の恩恵で、涙を流して感激し、お礼の言  
葉を繰り返すのだった。極く稀に幸運な男が、  
じっくりと<sup>デイスボーズ</sup>処理を受ける恩恵に浴した。女  
主任同志の賭けの対象に、利用される時であ  
る。どちらが早く目的を達するかを競うので  
あるが、男共の衰弱した体力では刺戟に鈍く  
なっているの、そんな時には素足の<sup>デイスボーズ</sup>処理す  
ら行われた。その代り、<sup>デイスボーズ</sup>処理中身の程を忘れ  
て思わず女主任の<sup>おみあし</sup>脚に手を触れるような不  
遜を働らいたもの、或いは、このような素足  
<sup>アル</sup>処理を受けながらも、競争に負けた方の男に  
対しては残忍なしごきが待っていた。

☆  
インスペクション ストール・ハウス  
査定で殖畜舎行きを免れた男はモ  
ッキン・センターにやられた。

中央線沿線、都下、武蔵野の郊外に、広大  
な土地を買占めて、モッキン・センターが開  
かれたのである。女性専用の大遊戯場で、富  
村梨枝子のコンツェルンの女性支配者達は勿  
論、女経営者、バーのマダム、富裕家庭の女  
子大生、有閑マダム等、これ迄、乗馬クラブ  
やゴルフに凝っていた女性達が、こぞってこ  
のモッキン・センターの会員となった。特別  
会員になる為には高額の会費の払込みが要求  
されたが、一般女性の為にも安い入場料で開  
放されていた為、BGや女子学生達の間でも  
話題になっていた。

ライディング  
乗馬 コーナーの調教場には見物の女性達  
が群集していた。調教は特別会員によって行  
われる。引き出されて来た馬は、査定を受け  
て、馬としてこのモッキン・センターに廻さ  
れて来たばかりの生きの良い野性馬<sup>ワイルド・ホース</sup>である。  
これを従順な乗用馬として、調教するのであ  
る。

男は重量上げのように、両手で二輪車を支  
え、素裸で四つん這いになっていたが背中に  
は、乗手のお臀の当る所に股に喰い込むよう  
な革製の突起が出た鞍をつけられ、口には轡  
を噛まされている。

乗馬服に身を固めた中年の女性が鞭を手に

して颯爽と現れる。大柄の脂肪ののった豊満  
な女性で、バーのマダム・タイプの妖しい雰  
囲気がある。見物の女性達を意識して、見事  
な手つきで鞭をしゅっとしごいて四つん這い  
の馬の脇に立った。

「今日から妾が、お前の御主人様だ。お前は  
馬として、この女王様を満足させねばならな  
い。どうだ、嬉しいかい。お礼をいいい！」  
バシ、バシッと鞭が空を切って往復し、男  
の背中にはじけとぶ。

「ハイ、女王様、美しい女王様の馬として乗  
って戴くことは何よりの光栄でございます。  
ありがとうございます」

「ふん、それだけかい?! 痛い目に遭わねば、  
女王様に馬としての御挨拶もできないのか、  
それでは鞭の味をまず身に滲みて味わせてや  
るよ、それ！」

バシ・バシ・バシッノバシ・バシッノ

「う、うッ、うッ、女、女王様、お、おゆる  
し下さい。女王様の馬として御乗り戴けます  
なら、たとえ、乗り潰されて死んでも本望で  
御座います。何卒、私めをお気に召すまで、  
乗り潰して下さいませ」

「うふふ：そうかい、馬になって死ぬまで乗  
り潰されるのがお前の本望だというのね。そ



の一言をよく覚えてお置き、みっちり仕込んで上げる。この鞭や拍車の痛さをたっぷり思い知らしてやるから、お礼を言い！」

「ありがとうございます、女王様。何卒、私めにお乗りになって下さいませ」

マダムは男の背中にどっかとまたがって鞍から垂れた鎧あぶみに足をかけ、手綱をぐっと引き絞った。

手綱を引き絞ると男の背中が反り気味になり、鞍の突起がぐいと彼女の股に喰い込むのである。男の両手は二輪車を押す恰好になり、後脚は膝を曲げずに延ばしていられるので、マダムは本物の馬にまたがったように悠然と鎧をふんばることができたのだ。

それ／＼と拍車が男の太腿に突き刺さり、バシ、バシッと男の尻に鞭が鳴って男が走り出す。

「それ／＼もっと早くっ／＼何よ、このよたよた馬／＼もっと鞭が欲しいのか／＼はいどうっ／＼」

再び鞭が男の尻に鳴り、男は必死で走り出した。

広い馬場を一周して来た時、男の尻の皮は破れて蚯蚓脹れから血が滲み、太腿は拍車に刺されてずたずたに血が流れ落ちていた。

男の全身は汗みどろになり、吐く息は機関

車のように荒かった。

「それ、もう一周／＼走らないか?」

男は今にも崩折れそうに、彼女を背中に支えているのが、やっとの状態である。

「ようし、鞭が足りないというのね／＼それでは、鞭をとり代えて上げる。さあ、これでもかっ?」

ビュス、ビュス、ビュスンッ／＼

今度は助手に取替えさせた太い鞭が男の血みどろの尻に炸裂し、ううっと男の呻きは引き絞られた手綱でくぐもる。男は又、死物狂いの氣力を振り絞って動き出す。

「もっと早く、もっと早くっ／＼拍車が欲しいのかっ／＼」

上気して来たマダムは手綱を絞りに絞り、息も絶え絶えの男は首を大きくのけぞらしたまま、もう半ば意識もないまま這い続ける。

二周してきた時、馬は氣力で立っているのがやっとならった。

マダムの方は、益々上気し、興奮して、股でしっかりと馬の脇腹をはさみつけ、手綱を一杯に引き絞り、馬の上で上体を大きく後にのけぞらし、夢中で鞭をふるっていた。

「それ、もう一周／＼走るのよっ／＼もっと早くっ／＼弱虫／＼ああ、いい氣持／＼もっと、もっと

よっ／＼早く、早くっ／＼」

鞭が狂氣のように鳴り、マダムは馬をコースから外して、割石の並んだ脇道に乗り入れた。

二輪車が割石に乗り上げる度に、馬の背は大きく揺れ、後足が割石を踏む度に右に左に大きくよろける。

「ああ、ああっ、いい氣持だわっ／＼それ、もっと早く／＼早くよっ／＼」

男の両手は硬直し、後脚は膝が曲って地につかンばかりである。

「も、もう、お、おゆるし下さい。女王様、し、死にそうです／＼」

「何よっ／＼死ぬのは、本望じゃないのっ／＼とげのついた鞭を貸してっ／＼それっ／＼これでもかっ／＼」

鞭をとりかえたマダムは、それを狂った様に男の尻に打ち下し、男は堪えかねる激痛にぎゃあっと悲鳴を上げながら、割石の道をよろけ進む。

廻り道をして漸く三周して来た時、マダムは満ち足りた表情に輝き、男は精魂つき果てて死んだようにその場に崩折れた。見物の女性達からふうっと太い吐息がもれる。

氣息奄奄とのびている男の頭に乗馬靴の片



脚をかけてマダムは血みどろになった男の尻を鞭の先でつついた。

「まあ、これなら妾の馬にしてやってもいいわ。烙印の用意をして！」

ぐったりとうつ伏せになったまま身動きも出来ない男の背中を乗馬靴で踏みつけたマダムは、赤く焼けた右手の烙印を血みどろの男の尻にぐいと押しつけた。じゅうっと煙が上って異臭が立ちこめ、男はぐえーっと、此の世のものと思えない、断末魔の苦悶の絶叫を上げた。

「どうだ、これで妾の馬になるんだから嬉しだいだろう、お礼をお言いつ！」

「あり、ありがとうございます！」

「それ、こっちもよ！」

マダムはもう一方の尻にも烙印を押しつけた。再び男の断末魔の叫びが上る。

「痛い目に遭わせれば、まだそんなに元気があるじゃないのっ！この横着者！さあ立て！もう一度乗ってやるっ！」

こうして仕込まれた馬が、競争馬として、レースに出場し、莫大な賞金を競うのである。

勿論賞金は騎手である特別会員のものである。馬券が売り出され、一般の女性達がこれに賭けた。競争馬として使いものにならなく

なった魔馬は一般入場女性用として払いさげられ乗馬コーナーでBGや女子学生達の玩具として乗り廻された。

広いセンターの処々に公衆便所が設けられた。見た所、普通の女性用の便所と変りなかったが、個室キヤビネットの扉を開けると、中にはステイル・パイプ製の腰掛がしつらえてあり腰掛の下には漏斗じょうごを口に咥えた男が正坐しているのである。

ここでの排便の快感が味わいたくて、わざとわざとセンターに通いつめるBGもいる程であった。

ピッチング・コーナーがあった。正面には全裸の男が、恐怖に眼を引吊らせて直立している。

手すり越しに入場客の女性達が硬質護球トツブボールを力まかせに投げつけるのである。球が眉間みぞおちや水月に当たると一発で男は昏倒する事もあったし、急所に当たって男が奇妙な恰好で苦しむ廻る事もあり、彼女等は手を打って笑い興じるのだった。

ボーリング・コーナーでは、全身をみの虫のように緊縛された男が頭が床面すれすれになるように逆吊りされていた。十人の男が逆吊りされて、それに、こちらから転がしたボ

ールが当たると吊環が外れて落ちて行った。スライクを取って、一個のボールで、十人の男が次々に落ちて行くのは壮観だったし、又二人だけ残った男に巧みにカーヴしたボールがその頭をゴツン、ゴツンとパウンドして当って叩き落して行くのも、面白い遊びであった。

鞭打ちコーナーも人気の的だった。広い棚の中に全裸の男が目かくして放たれ、それを人間馬に乗って鞭で追い廻すのである。

特別会員の為にはハンティング・コースがあった。ゴルフ場を改装したこの広大なコースには小高い丘があり、川があり、鬱蒼と茂った森があって、森の中には洞穴まで用意された。このコースに哀れな犠牲者が放たれる。

銃や、弓矢、鞭、刀剣、槍等、夫々、申し合わせたその日の武器を手にした女性会員達が追い廻すのである。洞穴の中に頭からもぐり込んで、尻を出している男を、槍でぶっすり仕とめたり、森の中の高い木の上に隠れている男を一発で猟銃で打落してみたり、草原を必死に逃げ廻る男を遂に追いつめ、両手を合せて哀願するのを、弓で狙いをつける時、彼女達は最高の気分を味わった。川の中を逃げ廻る男を人間馬を禦して、追い廻す事もあっ



た。投げ縄で仰向けにひきずり倒した男の上に片脚かけて、剣で男の両頬をひたひた叩き乍ら男の恐怖の表情をのぞきみるのも一興だった。そして、ぶすりと男の腹に剣を突き刺すのである。

スラックス姿の若い女子大生達が、きゃあきゃあ騒ぎ乍ら、一人の男を追いつめる。男は額を地に摺りつけて哀願し、両手を合せて命乞いする。

「でも、折角、こうやって掴えたのに、どこ

か刺してみたいわね」  
「だけど、その前に馬にしてみない？ 何でも言うことをきいたら、ゆるして上げないこともないわよ」

こうして、男は彼女達を一人一人、気の済む迄、背中にして這いずり廻り、手と膝を血みどろにして遂に乗り潰されて崩折れる。  
「じゃあ、どこか一度だけ刺させて、どこが いいの?！」

男の腕は女子大生達によってしっかりと踏

みつけられ、一人の女子大生は男の髪を掴み上げて、その苦悶と恐怖の表情をじっくりとのぞき込む。男の指は次々に切り落される。  
こうして、モッキン・センターは男子禁制の女性達の大歓楽センターとして世界的に有名になり、外国婦人の入会者も後を絶たなかった。  
富村梨枝子は廿一世紀の女性上位時代への先鞭をつけたのである。

(完)

## 腰巻と女腹切

の

## 構想二題

長町 一郎



恋を諦めた女。一日、男を誘って思い出の

場所に遊び、交情の限りを尽くす。帰路、わざとふざけて男を立木の幹に赤い扱帯で縛り

つけて自由を奪ってから、夕暮せまる誰もいない山路で恋を諦めることを告げ、これから自分一人で死ぬから、一切を見届けてほしいと告げ、用意の風呂敷をとき草の上に毛布、更に白布を敷き広げて、その上に端座する。  
女は帯を解き扱帯をゆるめて、着物の両袖をスポリと脱いで諸肌ぬぎ、下は真赤な羽二重の長襦袢。更に細紐をシューと抜いて同様に諸肌を脱ぎ桃色ネルの襦袢姿となり、ついで膝を一寸うかせて着物と長襦袢の膝前を勢よくまくり開けると、着物と襦袢は尻に敷いた部分を除いて、完全に脱ぎ上げられる。

桃色ネルの肌着、千羽鶴を染めたモスリンの赤い蹴出しだけの姿になった女は、更に蹴



出しも後から手を回して、膝をうかせながら着物同様、尻のあたりまでパリりと脱ぎ上げる。ついで、その下にあてた桃色ネルの腰巻も同様に脱ぎ上げる。そして今度は桃色ネルの肌着を脱ぎすてると、真赤なネルの腰巻一枚だけの裸身となる。

女は最後の真赤なネル腰巻も、うしろから手を回して白いよしこみをパリりと解き、ゆったり解き払げると用意の短刀を引き抜き、腰巻の上前で刀身をつつみ、無言の目札を投げかけつつ、グサリと雪白の左下腹に切先を突込み、両手で力まかせに右脇腹へ一気に掻き切る。切先三寸位の深さで臍下四寸位を真一文字に掻き切ってから刀を抜き、膝の上に置く。血染めの赤いネル腰巻を再び締めなおしてから血まみれの短刀を持って男のそばにいざり寄り、縛った扱帯をプツリと切るや返えず刀で臍のクボミにグサリと突き立て、その刃にのしかかる様にして前に突伏すと、足を斜めうしろに投げだして、二、三度痙攣をしてからバツタリ息絶えた。

## 二

母校の名誉にかけて薙刀の試合に出たが、武運つたなく敗れた女学校の生徒たち三人が帰途につく。かねてより敗退したときは、三

人揃って潔きよく切腹することを申し合せていた彼女たちは、とある小高い丘目ざして進んでゆく。

三人は母校の見渡せる丘の上に一列に並んで座る。一同は袴の紐をゆるめて押し下げた後、帯を解き扱帯を抜きとり、着物を諸肌で脱ぐ。一人は桃色の薄羽二重、一人は真赤な緋縮緬、他の一人は千羽鶴を染めたモスリンの長襦袢姿で、それぞれ用意の短刀を右手に握り、長襦袢の上から下腹に突き立てようとしたが、一人の発議で三人とも長襦袢は着物同様、諸肌で脱ぐと、皆、娘らしく藤色やトキ色の襟のついた肌着一枚となる。

互いにうなずきあって胸許を掻きわけると一人は胸許まできっちり巻いた白いよしこみと、真赤なネルの腰巻が、一人はこれも新しい桃色のネルの腰巻と赤い紐。他の一人は赤地に柄入りのネルの腰巻と白い紐が見える。

やがて、三人は顔を見合せて呼吸を揃えてそれぞれのネルの腰巻の上から、左下腹に短刀を力一杯突込む。そして三人とも左手を添えて両腕に力をこめて、左下腹めがけて臍下四寸位のあたりを掻き切る。

切り進むうち、真赤なネルの腰巻をあてた娘は、十分に左下腹まで切ってしまうと、桃

色ネルの腰巻をあてた娘の傍にいざり寄り、声を揃えて互いの乳の下を突き違えて、どうと横に倒れて息絶える。他の一人は、右下腹まで掻き切るうちに、腹巻の紐を切ったらしく、赤い柄のネルの腰巻は下腹まで大きく解けている。

やがて存分に下腹を掻き切った最後の女は大きくはだけている血染めの真紅のネルを、形ばかり整えると、二人の後を追うように乳の下を突き立てて前に突伏して、二、三度体を痙攣させながら、左足を思いきり伸ばして息絶えた。

## 〔挿画〕参考

(一) 男を立木に縛りつけた前で白布の上に赤や桃色の襦袢、腰巻を払げて真赤な腰巻一枚、それもゆっくり脱いで刀を赤いネルに巻いて右手で左下腹に突込んだところ。左手は刀身の背にあてている。膝はやや開き気味で太腿が少し見える。

(二) 三人の娘一列になって袴を押し下げ、半裸体で二人の娘だけ向いあって差し違えようとするとところ。二人の娘は下腹は血汐で真赤。うしろは、それぞれ腰巻が見える。一人は前向き。胸許までの腰巻の上から一文字に掻き切ったところ。



## 創作

## 「帰路のない旅」

〈後篇〉

山

口

廣

「帰路のない旅」

## 目次

一、乗逃げの果て	1	24
二、継母と継娘	25	43
三、白百合で	44	59
〈後篇〉……十二月号		
四、だるま責め	60	74
五、仕込まれる智子	75	96
六、マリのたどった道	97	107
七、梅子の誕生	108	124

## 四 だるま責め

山陽本線、山陽電鉄、国道二号線が海岸の

防潮堤に守られてひしめきあっているのを見下す西須磨の、一の谷に近い崖の中腹にあるこのマンション。二階の東の端に六号室があった。南は切り立った崖の上にある眺めのよい場所に建っている。何でも山野が脅し取ったものだと言われる。

山野は、この六号室を別荘として使い、時にはブルーフィルムの撮影も行ったことがある。その為の設備は一応整っている。

六号室は二階の東の端にあり八畳の寝室と六畳の居間が二間、それにダイニングキッチンがついている。勿論バストイレも備わっている。恐らく家賃なら三万円を越すであろう。

久田とミチは智子を押込めたキャンパスの袋を床に置き、ソファに腰を降してこれから智子をどの様に仕込んで調教するかを相談した。その楽しみも大きく、またたとえ半月であっても、この様な豪華なマンションに住める事も一つの喜びであった。山野の氣に入られば、ここに長く住むことも許されるかも知れないからだ。

「ミチ、仕事にかかるとするか。まあこのアマはおめえの決めた手筈で仕込んで見るか。時に風呂はわいたかな。一緒に入ろうか」  
「先に行っててよ。あんた、私はこれの用意するから。ちよっとその前に手伝って、縄を



解いてやってよ」

「ふふふ。うまくやんな。俺はあそこから見物さして貰うからな。目を覚ますまで、あと一時間はたっぷりあるさ」

ミチは久田に手伝わせて、ごわごわした袋から智子を引きずり出した。頬がくびれるほど強く縛られた猿ぐつわは、しなやかな脚を包んでいたシームレスのストッキングであり唾液でべとべとになった詰物はフリルのついた小さなパンティであった。手足を背でまともに縛られながら、智子はまだこんこんと眠っていた。久田はすべての拘束を取り去られた全裸の智子の体をベッドに運んだ。

広い風呂でたわむれ、冷蔵庫にあったソーセージや卵などで夕食をとった後、満ち足り

た顔でミチは智子の眠るベッドの傍のソファで粗いカンバスを相手に、慣れない鉋や針を持った。テーブルの上には、しなやかな乗馬用の笥が置かれている。

「うーん」

怪い寝息が呻きになり、寝返りと共に智子は、はっと眼を開いた。がば、と上半身を起こして叫んだ。

「ここはどこ。電車に遅れるわ」

布団の下は一糸もまとわぬ体であるのに気付き、思わず布団を胸に抱きしめた。

「まあ、やっと目が覚めたのね。よく寝てたんで起こさなかったのよ」

作り声で愛想をふりまくミチに、智子は不審気な顔でたずねた。

「私どうしてたんです。バッグは？ 私の服

はどこ？ ここどこですか」

「あんた憶えてるわね。政につかまって、ひどい目にあうところだったわ。でももう安心よ。私としばらくここで暮せば楽しいわよ。

話は後にしてお風呂へお入り。タオルも貸したげるわ。さあ」

どこか崩れた感じの濃い化粧のミチに、何か表現できない怖ろしさを感じながらも、智子は、まだ夢うつつの体の前を小さなタオルで覆って導かれていった。タオルを押えた手の半分剥げかかったマニキュアが痛々しい。

タイルの美しい風呂は快い。縄の跡をこすり落すように、丁寧に香りの高い石鹸をたっぷり使う。シャワーの冷い水が、体中から三日間のみじめな想いを洗い流すようだ。しかし、ここが何処なのか。あの女の人は何者な





のか、これからどうすればいいのか、考えがまとまらない。

バスタオルで胸を覆って居間に帰った時、もう疲れも去り、伸々した美しい肢体に戻っていた。

「あの、私の服、なかったでしょうか。スーツケースは？」

「なかったわ。あんた、政の奴につかまっただでしょう。あいつにつかまったら、ひどい目に合うわ。私とうちの人が居なかったら、今頃はとんでもない目にあってるわ。服どころの話でないわよ」

「は、はい。有難うございました。何か着る物を貸して下さいませんか」

「ふふふふ。何も着なくてもいいわよ。裸が一番男を喜ばすんだから」

「……」

「そうさ、お前さん。もう服も着なくていいわ。私が手をとって教えたげるから」

「……」

「お前さんはね。私たちの商売道具になるんだよ。男を喜ばしさえすればいいのさ。その体を見たら、誰だって喜ぶよ」

「いやっ。帰らして。許して」

「アッ」

肩から火花が散った。ミチの手の筈が飛んだのだ。それでもタオルを放さずに、しゃがみこむ体を、もう一度筈がおそう。

「帰る所もないやさぐれのくせに。私の云うことが聞けないんかい」

智子は、もう一度振り下される筈を予想しながら首を振った。

「そうかい。いやかい。あんたあ。云うこと聞かないわ。あれ持って出て来て」

「アッ。あー。い、いやっ。帰して」

悲鳴は空しかった。胸を押えた手が一本ずつ背にねじ上げられ、縄がまといつく。バスタオルが体に沿って落ちる。上気した肌が、縄に締められる。

「今度は俺の出番だぜ」

久田の手は口よりもずっと早かった。一糸まとわぬ姿で、只でさえ羞しいあぐらを組まれ、足首が縛られる。ミチが大きなリュックサックを上げた。久田が智子の脇に手を差入れて抱き上げて、その中に押し込む。

「や、やめえ、や、むうう」

悲鳴も猿ぐつわに殺される。呻くだけの智子の姿は奇妙だった。リュックの口から首だけを出した智子は、リュックをもごもごと動かし、首を振るだけだった。

「あんた。ビニールを敷いたから洩らしでもいいわ。ふふふ。自分の体が汚れるだけよ」

「ダルマ責めに参らなかった女は居ねえからな。まあ、三日がええとこだな。おい。おめえ、何とか云ったな。ふふふ。野沢智子か。俺たちの云うことが聞ける様になったら首を振んな。それ迄あ、何にも喰わせねえぞ。早う観念するんだな」

智子の入ったリュックはベッドの正面に引きずられた。ソファの上からベッドに正対して縛られた智子の目の前で、レースをたっぷりあしらったピンクのネグリジェが床に落ちた。目をそむけようとしても目が放れなかった。袋の中の体がはてり息がはずんでくる。「ふふふ。これも修行の一つだわ。よく見るんだね」

口で嚙っていたミチもやがて我を忘れた。

翌朝、智子は、耐えられぬ尿意に目が覚めた。呻きも出さぬように体を遥すりながら尿意をこらえにこらえた。目の前のベッドには昨夜の狂態のまま、久田とミチがしどけなく眠っている。弛いと感じた手足の縄目は、いくら身をもがいてもそれ以上に弛みはしな



った。

「むうううう」

生理の限界が来て、足の縄目が暖い液に締ってゆく。袋の口から立ち昇る自分の匂いに包まれて、全身の力が抜けた。みじめな姿に意味のない涙が頬を濡らす。泣きながらも、おそってくる眠気に引き込まれていく。どれだけうとうとしたことか。コーヒーの香ばしい匂いにふっと眼が覚める。

わざと智子に見せつける様に、すぐ目の前のテーブルに遅い朝食の用意がされている。弛いとは云え、袋の中の後手はだるくなってきた。尻も、あぐらをかかされた膝も痛みさえ感ずる。

久田が智子の二重顎を持上げてなぶる。

「どうでえ。もう決心がついたろう。うんと云いなよ。ふふふ。いやかい。強情なアマだ。まあ頑張って見な」

弱々しく左右に振る頬に久田の手が鳴る。目の前の朝食に、心は拒んでも昨夜から何も入れていない胃が、ぐーと鳴り、痛みさえ感ずる。

久田が出かけた後、ミチは昨夜から放り出していた裁縫を続けながら、智子をいたぶった。

「お前はね。もう金持の娘でも学生でもないんだよ。私達の大事なタマになったんだよ。男を喜ばしてうんと金をもうけるタマにね。素直になりや大事に養ってやるわよ。ほほほ。私らの云うことが聞けるかい」

——いやっ。そんなのいやっ——

高く呻いて首を振る智子を冷い笑いで見ながら続ける。

「ふん、いやかい。まあいいさ。ほほほほ。」

男を喜ばす方法は私が教えてやるからさ。どうせ、お前の体は男を知ってんだから、おぼえは早いよ。いくら、いやだ、いやだって云ったって体におぼえさせるからね。それにお前にゃ、取っときのテクニクを教えただげるわ。男の中には変ったのが居てね、女を虐めたがるのが居るからね。ふふふ。男に虐められて喜ぶ方法を教えてやるわよ。今にその味が忘れられなくなるわ。え、まだ、いやいやして、憎らしいよ。この子って」

顔を落してすすり泣く智子に、更に追いかぶせる。

「そんなにいやならしょうがないわ。うちの人が帰って来たら、お前を若い者のごろごろしてる中に放り出して貰おうか。よってたかって腰が抜けるほど可愛がってくれるわよ。」

そんなになってもいいんかい。え。うんと云ったら、どうだい」

一つ狂った運命の歯車は、もう智子の小さい力で止らなかつた。疲労と空腹と喝きが、拒む意志に勝ち、遂に智子が屈伏したのは、その日の午後であつた。脅されて反抗の気力も失せた智子は、ミチに向って弱々しく、しかしはつきりと首を上下に振った。閉じた眼から涙が溢れた。縛られて押込まれている苦痛と空腹と喝きが、いやそれ以上に、何も損らされなかつたのに迫ってくる生理に負けて洩らしたものが、ビニールに包まれた下半身を冷く虐め、自分の匂いに包まれたみじめな屈従感が智子の心に勝つたのだ。

「やっと参ったらしいわね。ふふふ、もつと頑張れば面白かつたのに」さあ、はつきり聞かせておくれ。わあ、この臭い」何べんやったんだい」

わざと大げさな身ぶり、羞恥をかきたてる。猿ぐつわを外され、ふーと深い息をつく。智子に宣告でも与える様に、

「さあ、お前はもう私たちの持物になれるかい。一生懸命に男を喜ばすわね、え、大きな声でお云い」

涸れた筈の涙がまた溢れる。頬を濡らしな



がら、智子は嗚咽に変わりそうに声をふりしほった。

「お願い、もう許して。何でもしますから、早く出して、ほどいて」

「何でもするって、何をするんだ」

「は、はい。お、お、男の人を喜ばすこと、あ、あ、何でもしますから早く、は、早く」

「おう、臭い。ふふふ。自分で始末しな」袋の中を拡げ、ミチは大げさに顔をしかめて後手を解くと、雑布を投げつける。

智子はまだ感覚の充分に戻らない手で、濡れ切った足首の縄をさぐった。

「さあ早くしな。風呂場で、それを洗うんだよ。ぐずぐずしてると、又、その中に押込むよ。そしたら、もう出してやらないから。早くしな」

水道の蛇口に口をじかにつけて息もつかずに飲むカルキ臭い水が、今の智子には甘露であった。

ミチの答に迫立てられて居間に帰った智子は、昨日まで智子の物であった上等の仕立のワンピースをまとったミチに、始めて服を与えられた。とても服とはいえない物である。下着一枚も許されないで、幅の狭い粗いカンバスの様なごわごわした木綿の布でできてい

るミチの考案の服が与えられた。着け方の見当もつかないで呆然と立つ智子の尻に答をくれてミチが云った。

「何だい、世話のやける娘だね。こうして着るんだよ」

中央にあげられた穴に首が通され、両脇の二つずつの短い紐が結ばれると、正面から見れば肩の張ったノースリーブのワンピースに見える。だが体の横はびちびちした太腿から胸までが丸見えである。ごわごわした粗布にむっちりした肌がこすれる。膝上十五厘の裾はあまりに短い。ウエストに細引を二巻すると、両手首を再び背にねじ上げる。

「どうだい。これ。いい服だわ。え、お礼が云えないの。それとも素っ裸に剥いでほしいの。智子」

しゃがみ込むと却って短い裾が割れる。

「は、はい。有、有難う」

「何よ、その云い方は、もう一度やってごらん。私のことは、お姐さんねえってお云い」

太腿を答がしばく。

「は、はい。お姐様。いい服を作って頂いて有難うございます。うっ、うっ」

自分の物であったワンピースの裾にしゃがみ込む。

「泣くことないわよ。智子。智子っていい名前じゃないわ。良い名前を考えてやろうね。さて。この服のいい所を見せといてやるわ。さあ、お立ち。立つんだよ」

答の恐怖が智子を素直にした。

大きな胸ポケットに見えた布のホックに、翡翠の指輪をはめた手が伸びた。ポケットがだらりと垂れ下ると、丸くくり抜かれた穴から、お腕を伏せたような形のよい乳房が、ピンクの乳首を上向かせて顔を出した。

「ま、まあっ」

顔を赤らめて身をよじる智子は、もうしゃがんでも後手では、どうすることもできない。「バスの車掌みたいだよ。嬉しいだろう。ほほほ」

ミチのかん高い笑いだけが部屋に響く。

「何か喰わせてやろうか。お腹、空いているだろう」

「あの、あのー、お姐様、服を直して、直して下さい、お願い」

意外なポケットの効果に、ほくそ笑むミチの顔は嬉しそうだった。

後手に縛られながら、口だけでパンにかじりついて旺盛な食欲を見せる智子を眺めながら、ミチはこれからの調教の手はずをあれこ



れと考えていた。

## 五 仕込まれる智子

夜遅く、久田は帰って驚いた。玄関に出迎えた、着飾ったミチに従って、粗布をまとった智子が、今はもう後手も解かれて、板の上に正座して手をついている。

「ミチ、案外早く参ったらしいな。ふふふふ意外と素直になったもんだな。ふーん、もう仕込み始めにな」

久田の視線の交わる所に智子の揃えた手があった。智子の床についた手は、しっかりとにぎられていた。午後から答と言葉で強制されて、にぎりしめたこぶしの人差指と中指の間から拇指をつき出して挨拶することを、おぼえさせられた。

「だんな様、お帰りなさいませ」

この文句は家で好子が使っていただけに抵抗を感じた。

「ダルマ責めって、こたえるらしいわ。それに答を十もくれてやったかしら。ほほほほ」居間に引立てられた智子は、死ぬほど辛いと思った。午後からのミチの調教など、ほんの序の口であった事を思い知らされようとしていた。

「あんだ、この娘の名前を考えてやってよ。」

智子なんて呼び難いわ。それに里心を引き起すから、新しい名前をつけたら」

「うん、そうだな、何かいいのはいかな」

ミチに頼まれると亭主の手前、何か考えざるを得ない。しかし思いつくのは、彼が手がけた女たちの名前だけである。と、さきほどの挨拶をした、智子のにぎられた手を思い出した。

「えーと、そうだな。梅子にしろ。梅子が良いぞ。うわっはっはっは」

「梅子？ どうして、そんな名前が」

「梅子、ええじやねえか。おをつけて見ろ」

「？ お梅子？ ほっほほほ。いいわ、いいわ。これに決めるわ。お前の名は梅子にしたよ。いいかい。男の人の前に出た後には、おをつけるんだよ」

もう智子は、強いてあらがわなかった。

「さあ梅子、こっちへ来い。俺が作法を教えやる」

「あんだ、ちよっと。まだ梅子には早いわ。」

それより耳を貸してよ」

ミチは久田の耳に口を寄せ、ひそひそと何事かを相談した。

「梅子、ミチの云う通りだ。今日はこれで許

してやろう」

「はい、だんな様、有難うございます」

「梅子、さあ手を後にまわして、そうそう。今日は見学だけにしといてやるわ」

ミチの手の細引を見て、智子はあきらめてミチの前にしやがみ込んで両手を背に合わせた。ベッドの直ぐ前の床に敷かれた毛布の上に横たわった智子の足も、きっちり縛られた。

あの粗布の服のまま毛布を着せられた智子の目の前に、昨夜と同じようにミチは久田と愛しあった。

ミチの叫びが智子の体を熱くさせた。

翌日から智子はミチに本格的に責められはじめた。ミチの方は金もうけの投資であり、楽しみでもあったが、智子にとっては強制される事の一つ一つが体を虐め、心を傷つける責めであった。

ミチは智子につききりで外出もしない。智子が後手のいましめを解かれる時間は殆んど無かった。勿論厚い鉄のドアは外界とのつながりを完全に断ち切り、その鍵はミチが肌身から離さない。大阪湾の、淡路島の、そして往き交う船の景色すら、見とれるひまは与えられなかった。



智子はあの粗布のずん胴の服をまとして後手に縛られたまま踊りの稽古をつけられた。久田の女になる前はドサまわりではあったが中堅どころのストリップパーだったミチは、智子のものであったスーツを着たまま手本を示した。

「よく見るんだよ、梅子。こうして足をこれ位開いて、こう腰を振る。うんと大きく、ぐるっと廻すんだよ。そうれ、一、二、三、四、二、三、四。ターララ、ラツラ。ターララ、ラツラ。さあ梅子、やって見な」

「一、二、三、四、二、二、三、四。もっと足を開いて、一、二、三、四、膝を割る。そう。もっと突き出す。何だい。首を動かすからよめくんだ。ちゃんと首を据えて。そう。一、二、三、四、腰を男の前にうんと突出すんだよ。そうすりや喜ぶからね。ターラ、ラツラ。もっと早く、一、二、三、四、どうしたんだい。梅子。しやがみ込んだりして。ふふふふ。さあ、お立ち」

「立つんだって云ったら、梅子」

かん立いミチの声と共に答が空を切る。

こんな不格好な服でも剥ぎ取られるのは恥かしい。後手に縛られたままでは、いくら抵抗しても両脇の紐がほどかれると、頭からす

っぱりと抜きとられてしまう。羞恥の気持は捨て切れないどころか、却って強められる。

「さあ、梅子。裸で踊んな。よしと云うまで続けるんだよ。自分で号令かけて」

「一、二、三、四、二、二、三、四、……」

「ふふふふ。仲々うまくなったよ。梅子、乳の揺れもいいよ」

「一、二、三、四、……」

汗をにじませ、豊かな乳房をたわたと振りながら、大きく成熟した腰をまるく大きく振り続ける智子に、ミチは話しかけた。

「そうだよ。うまくなれるよ。梅子。お前ストリップ見たことないだろうけど、それが一番男に受けるんだよ。そう、グラインドのすごいのをやると、男なんて口をぽかんとあけて物欲しそうに見上るだけだよ。梅子、顔なんか見ている男は一人も居ないよ。ツンパはいてたって、あそこだけしか目に入らないらしいよ。ふふふふ。今のお前みたいに真裸でやったら、きっと目を廻すよ。そう、もっと大きく。一、二、三、四」

ミチの止めと云う声を待ちながら何分も汗びっしょりになって智子は尻を振り続けた。「よし、止めてもいいよ。腰のわりが良くなった所で、ベッドシーンとゆくか。知って

るかい」

声と共にへたへたと座り込んだ智子は、ミチの云うことが理解できなかった。

「知らないんかい、梅子。ふふふふ。お前ももう年なんだから知ってるだろ。自分で楽しむのを、ほら、何て云った手け。えーと、オナニとか云うわね。あれさ、ふふふふ。手を縛られてちや出来なかったわね。さあ、こっちにおいで。ほだいてやるよ」

背に高く縛られた腕をほだいてやると云われても、その行為の恥かしさに思わず後ずさりをする智子を見て、にやりとミチは冷たい笑いを洩らした。

「そうかい。いやならいいよ、ほだいてやらないから。だけどね。梅子。私はやれと云ったらどんなことでもやらせるからね。さあ、こっちへおいで」

むしろミチは智子の方へ近づき、部屋の隅に追いつめる。

「いやっ、いやっ」

悲鳴をあげるミチを押倒すとポケットから今一本の紐を取出して、悶える智子の足を組んで縛り上げた。痛さに膝が割れ、腿を合わせる事が出来ない。智子はなおも拒んだ。「待ってるんだ、梅子。いいものを着けてや



るから」

ミチはテーブルの上の箱から道具を取出した。ゴム管で繋がった端のゴム球を押えるとひくひくと動く。

「いやっ。いやっ。許して。そんなの」

「ふふふ。いやじゃないわよ」

「いやっ。あ。あ。は……」

ミチの手はゴム球を押し続けた。悲鳴は次第に呻きに変り、息がはずんでくる。智子は何度か押し寄せる大波に、遂に叫びをあげて気を失った。

眼を覚ました智子には、又してもミチの責めが待っていた。

「すごい娘だね。梅子。どうだい。手をほどこいてほしい」

うなずく智子の手足が、やっと久しぶりに自由を回復した。だがミチはそれに追いかぶせて命じた。

「さあ、自分でやって見な。ほら、梅子。これを待ったんだよ」

疲れ切った智子は答に強制されてゴム球をにぎった。ミチは冷やかに智子に教え込む。

「もっと派手に声を出すんだよ。お梅。大きな声を出せば出すほど、男は喜からぶんだかね」

「何だい、そんな所で止めたりして。お梅、かしな」

「あー、うーむ」

午後の強い日ざしの中で、智子は強制されて悶え続けた。

こうして智子は来る日も来る日も、ミチに手を取って教えこまれた。智子はもう何日になるのか、わからなくなってしまった。

答を振るわれ、言葉でも脅されながら、キスの練習だと云っては煙草くさいミチの口に唇を吸われ、顔をべとべとに唾で濡らしながら、舌を吸いあって技術を教え込まれた。

智子にとってミチは怖い先生であった。女であるだけにミチは羞恥の壺を心得ているので、智子はミチの手にかかる涙を流しながら咆えるような叫びすらあげさせられる。昼の間はミチがつききりで責め、そして責められる苦痛に悶える智子に、責められる技術を教え込む。

「お梅、このままで、部屋を三べん廻るんだよ。落さない様にしっかり締めて。それが女には一番大事だからね」

「あっ、あーっ」

体につけられた道具を落さぬ様に、全身の力を集中してゆっくり歩く後から、剥き出し

の大きな尻にミチの答が飛ぶ。

「駄目だわね。お梅、ちゃんと自分で直すんだよ」

「は、はい」

後手に縛られた体では、もう元のようにすることはできない。しかしミチの答とこの後に続くお仕置が恐ろしい。床にしがみ込んで、はかない努力を続けたが目の前が曇って、溢れる涙に誘われる。

「わ、わあ。あ……」

床に泣き伏す智子を冷やかに見て、ミチは答を振るいながら命ずる。

「泣いたって駄目だよ。お梅。することをしなきや休ませないわよ」

ごろごろと答を避けて転がりながら、智子は哀願した。

「お、お姐様、ど、どうか。あれを着け、着けて下さい。ゆ、許して」

夜になると、久田も加わって責め、羞しめる。智子はミチだけしか居ない昼間よりも、何倍か久田の帰った夜が怖しかった。

「さあ、お梅。今日はうちの人を喜ばしてくれない。昼間教えたのだろ。取っておきのスペシャルサービスをするのよ」



「は、はい。どんな様、お梅子が、お世話致します。うふううう」

「何でい。泣くこたあねえよ。お梅、どれだけ上達したか見せて貰おう。さあ来い」

服を剥がれた智子の体が、ベッドに引きずられた。後手のままの姿を折り曲げて、顔を久田のたくましい体に近づけた。久田の手は智子の痛めつけられても、みずみずしさを失わない成熟した体に延びた。

久田の手のあくどい動きに、ともすれば止りそうになる顔の動きを、止めたら次に来る責めの恐怖が余りにも大きくて、止めることができなかった。しかし女のさがの悲しさ。智子は次第に無我の境に引込まれていった。床にうつ伏した智子は、久田らの会話を耳にした。

「ふー。ミチ。こいつは物になるぜ」

「そうよ。あんた。あと一週間も仕込めば、山野の兄さんにも、きっと気に入られるタマになるわ。ほほほ」

こうして、おごり高ぶった無責任な金持ちの我がまま娘は、女子大生であった事も忘れて、次第に男を喜ばす為の女に生まれ変わりつつあった。あれほど心に傷をつける名前はないと思われる「お」をつけた梅子と云う名前

を呼ばれても心に抵抗なしに返事ができ、自分でも口にすることができるようになった。いや実際は体は加えられる苦痛と、心を引裂くような辱しめによって、久田とミチの思うままに働く女に仕立てられていった。

今日も智子は、ごわごわの服をまとっただけでミチにいたぶられている。新しいカンバスで作られたこの服も、数々の苦しい責めで智子がしたたせ汗と脂と、とめどもなく流した涙や、よだれや、そして転がされ、踏まれてこすりつけられた汚れで黒っぽい色に変わり、特に襟もとなどは黒くなっている。

「お梅、男の中にはね、女を縛ったり、いじめたりして喜ぶのが居るんだよ。そんな男にでも喜んでもらう為に、少し変った縛りを教えといてやるよ」

後手に縛られた上に、これ以上に縄をかけられるのか、と智子はあきらめの中に拒む心が起ってくる。

「さあ、お梅。まず手をほどいてやるよ。あっちを向くんだよ」

意外にもミチは背を向けてうずくまる智子の後手を解き放した。

「まず服をお脱ぎ。自分で脱ぐのは始めてだろうがね。お梅、早くするんだよ」

智子は両脇の紐をほどくと、首を服から抜いた。こんな服でも、体から外す時は一層の羞しさがつのる。

ミチは太いロープを二つ折りにして結び目を三つ作って智子の首にかけた。正座した膝に長いロープの束が落ちる。

「立ちな。お梅。足を開いて」

ミチの声のままに動く自分の姿を呪いながらも、智子は人形のように命令に従ってしまふ。

「あっ。あーっ」

背の中央でしばられたロープが体を縦に締め上げる。

「さあ手を後に廻すんだよ。お梅、まだ音を上げるのは早いんだよ。ふふふ。これからがこたえるんだから」

両脇を締め上げるロープが引かれるごとに体を縦に締めるロープが緊張する。上下をロープで締められた乳房が、大きく前に突き出す。ミチはロープに作られた結び目の効果をよく知っていた。

「さあ、お梅。お歩き。縦に縛られると、誰だって体が引き緊っていいものだよ」

答に追われて智子は歩き出した。しかし、体にあたる結び目の為に、膝ががくがくと震



え、部屋を一廻りしないうちに、横倒しになった。

「お、お、お姐様。これだけは許して。お、お願い」

身をもむことが、却って自分を責めることになった。

「何だい、お梅。こんなことでへたばって、どうなるんだい。ふふふ。ついでにもう一汗かいて貰おうか」

新しいロープが、体を動かせないでいる智子の足首にからんで、あぐらをかかせる。起された肩にまわったロープが後手に結ばれてぐいと引き締められる。智子は縦に縛られた体を、更にぐっと折り曲げてまろくなつてしまった。

「ぐ、ぐう、う、うーむ」

呻きが智子の苦痛を報せる。

「ふふふ。これが海老縛りだよ。お梅、股間縛りの上、海老にまでされたら、誰だって参るんだよ」

足首を肩口まで引上げられ、呻きだけしか洩らせない智子の体が後に転がされる。その苦しい体をミチは結び目を使つて意地悪く責め、もてあそぶ。

智子は苦しみの中に、汗をしたたらせなが

ら、呼鈴が長く短く、合図のように鳴るのか聞いた。ミチがあわてて玄関へ出て行く。

「まあ、これはこれは、山野のお姐さん、今あけますわ。まあ、マリをお連れになつて」

ミチの声を聞きながら、智子は意識を失つた。

「ミチも元気らしいわね。ふふふ、これかい山野の云つてた変つたタマつてのは。余り痛めつけるんじゃないよ」

ミチは汗にまみれた智子の体からロープを解きながら答える。

「今、汗をしばっていた所ですわ。もう直ぐ縛られて喜ぶ女になりますわ」

数分の後、智子は意識の戻った眼にバーのマダム風の冷い感じの美人を見た。ミチとそれほど年はちがわないであろう、面長な顔立ちで、ミチほどには崩れた感じはしない。

「梅子、山野さんの町子お姐さんだよ。御挨拶するんだ」

智子は体を起して、姐御の足を見ながら、にぎりしめた手について頭を下げた。

「お、お梅子でございます」

見上げる眼に、町子に従う女、マリがとまった。背はすらっと高いが、どんよりと土色と云つてよいほど色のあせた、しまりのない

肌、やせこけた顔、うつろな眼が、そして、しどけない服の下にうかがえるたるんだ乳房が、このマリと呼ばれる女の年令をかくしている。年の割にみずみずしい町子とは奇妙な対照である。

町子の手が、肌をさすり、唇をめくり、顎を持上げ、肉づきをしらべるその羞しさにも拘わらず、拒んだ時の仕置の重さが智子を動かさなかった。

「ふーん。仲々いいタマだわね。掘出し物をあてたわね。ミチ、それにしても、よくここまで仕込んだわね」

「お姐さん、もっと色々なことができますのよ。さあお梅、あれを持って来て自分でしてごらん」

ミチの顎が、テーブルの上の道具の箱を示す。

「は、はい」

智子が立上ったとき、それまで智子にさえ何の興味も示さずに、齒の抜けた口を大きくあけて生あくびを続けていたマリが、突然床に倒れてもがきながら町子の足もととは這い寄った。自分の体をかきむしりながら転げまわって悶えた。

「ヤク、ヤク。打って」



想像もしなかった恐ろしい光景に智子は立ちすくんだ。齒のない口から、ぼんやりした叫びが出る。

「ク、ク、苦しい。は、はやく、早く」

呻きながら引きちぎったブラウスの胸からだらりと垂れた土色の乳房が不気味だ。

「まあ、姐さん、ヤクが切れたんだわ」

「そうさ、いつもヤクが切れると、こうだから始末が悪いよ。悪いけどミチ、押えつけていてね」

消毒もせずに水道の水で、白い粉をとかし、慣れた手つきで町子は、注射器に吸い込む。まくれ上った太腿に点々としてっている注射の跡が思わず智子の眼をそむけさせた。

針が立てられたと殆んど同時にマリの顔にすーと紅味がさして来た。うっとりとした顔のどこからか、さきほどの狂態は想像できない。

「お姐さん、こんなの連れて来られて迷惑なすったでしょう。あそこに放り込んでおけばちゃんと若い者が世話しますのに」

幾分の非難を込めてミチが、さも同情した様な口調で云う。

「ふっふっふ。そうだったわね。一寸気が向いてね。こんなの連れて来て、お前さんに

も大汗かかせたわね。まあ、そのうちに埋め合わせをするからね」

「そんな、お姐さん。水臭いですわ。でもマリはすっかり変ってしまいましたわね」

「そうだよ。これもあんまりヤクを打ち過ぎたんでね。もう使い物にはなくなっちゃって。惜しいタマだったわ」

「まだ若いのにね。二十三でしたっけ」

「四になってるわ。ふ……」

二十四才と云えば、智子よりほんの少し年上であるだけだ。それが、あんなに潤れてしまったお婆さんみたいに、と智子は立ちすくんだまま目を見はって驚いた。

「ときにミチ、これはいつも素裸にしておくのかい」

「いえ、お姐さん。ちゃんと特製の服を着せてありますの。裸にしておくは慣れちゃいますもの。お梅、服を着てお見せ。お姐さん、脱した時に羞しがる様に仕込んでおけば男が喜びますもの」

やっとあの服を着ることを許されて、後手に縛られた智子の体にミチの手が延びる。三つのポケットを外されたとき、ほんの今まで裸であったくせに、強い羞恥が湧いてくる。ぽっかりとあけられた穴からこぼれ出した

大きな乳房に、町子の手が延びる。  
「ふふふふ、お前さんにはデザインの才能があるわね。ミチ」

ミチには、町子の突然の訪問の理由がわからなかった。町子は智子に、マリの悲惨な様子を見せつける様に山野に命ぜられたのだった。

町子は必要以上に詳しくマリの身の上を話して聞かせた。ミチに口を入れる隙も与えずに、縛られて立ちすくんでいる智子の表情の変化を観察しながら話し続けた。ミチは相槌をうつだけであった。

## 七 マリのたどった道

マリは一昨年まで、経験三年のファッションモデルであった。Aクラスの下のあたりにランクされて、これからファッション界に名を上げようとする少しは名の売れかったモデルとして、そこのサラリーマンなど足許に寄れないほどの収入を得ていた。

平凡な八百屋の娘に生れた恰子、——マリと云う名は山多会の手に落ちてから着けられた名前である——は普通の顔立ちの両親の何処を受継いだのであろうか、高校に入った頃から急に美しさが目立ちはじめた。卒業する



前に知人に奨められたミスコンテストに入賞したことが彼女の運命を変えたのだろう。卒業と同時に引き抜かれたファッションモデルクラブでの周囲の引き立てと、彼女自身の努力の結果、美しさに磨きがかかり、均勢のとれたスタイルと、鼻筋の通った冷いと云ってよい程の整った顔立ちが、八百屋の娘を華族の令嬢に見せるほどであった。

名前が売れ始め、収入が多くなると、恰子も他のモデルの例に洩れず、芦屋のマンションに居を移した。次第に生活が荒れはじめた頃に、山多会の中でも、それ専門の『こましの竹』の目にとまった。智子が引っかけた『半の政』のような使い走りではなかったのも恰子の不運であった。

その為にことさらに洗ひ服装をした竹は、バーで見かけた恰子を狙った。ファッションショーの度に大きな花束が誰からとも知れず贈られた三回目には竹はやっと恰子の前に姿を現した。余計な口をきかず、わかりもしないクラシックに耳を傾ける竹の様子にすっかり気を奪われた恰子が、次いで連れ込まれたのが山多会の息のかかった洋酒喫茶であった。

竹の目くばせを受けたバーテンの入れたカクテルを一息に飲みほして、恰子はそれまで

の社会との縁を切った。

飲み過ぎた女性を親切に介抱するナイトの様に振舞って、睡眠薬を盛られて夢うつつの恰子を助けて手洗いに立つかのような竹の様子に気付いたのバーテンだけであった。もたれの高いロマンスシートから見た客はなかった。自分達の楽しみの方が大切とばかりにうす暗い店内は熱気が充満していた。

竹はそんな為に作られた二階の小部屋に恰子を引きずり上げた。仲間の間では『こまし部屋』と呼ばれているその部屋に横たえられたとき恰子のハイヒールは階段の途中に空しく転っていた。

竹は忙しく立ち働いた。ぐったりと力なく横たわる体から、黒てんの毛皮を襟にあしらったコートが剥ぎ取られ、次々に身にまとうものを取去られて、生れたままの体になった恰子に、丁寧にも猿ぐつわを噛ませて、手足を縛り上げるまでに十五分とはかからなかった。縛り上げた上、智子が運ばれたのと同じような袋に恰子の体を押込んで、竹が下の店に帰れるまでの時間は、トイレにしては少し長いと思われる位に早かった。

閉店後に、集って来た若い者がとり巻く中で袋から引き出された恰子の全身に鳥肌が立

ったのは、決して春さきの深夜の寒さだけではなかった。

手足の縄を解かれ、自分で唇を割っていたストッキングを外し、口の中に詰められていたパンティを吐き出して、さきほどまでは頼もしいと思っていた竹や、バーテンの顔もまじる四人の若い男の手から逃れようと部屋中を悲鳴をあげながら逃げまわる恰子の姿を楽しみながら三人の男は、竹の命ずるままに恰子を追った。

追いつめられて前を両手で押さえてしゃがみ込む恰子の体が押し倒された。両手は大きく拡げて二人の男におさえられる。必死の力で合わせた脚も、竹とバーテンに拇指と足首を持たれて引っぱられると、めりめりと音を立てる様に拡げられてしまった。

俺の女になれと強迫されても、恰子は毎日続けている美容体操のおかげで見事にくびれているウエストをよじりながら当然のこと拒絶した。それから『こまし部屋』の中は恰子の泣き声と悲鳴がこだまし続けた。

若い者たちの暴力で花を踏みにじられてもなお、端麗な容姿と、冷いまでの美貌を誇る恰子は高ぶった心を捨てなかった。

竹が再び恰子も袋の中に押し込んでかつぎ



上げて自分達の安アパートに帰ったのは夜明けであった。

渋い竹の服装にまるでそぐわないうすっぱらな、何かが匂ってくる煎餅布団の上で、猿ぐつわを噛まされ、後手に縛られたままで怡子は竹の手で散々にもてあそばれた。

赤い答跡を体中に残しながら、あてがわれた尿瓶を使わせられる怡子の姿に非情なレンズが向けられた。あまりの羞しめに、怡子は理智的に見えるその端正な顔をみにくくゆがめて耐えたが、竹は生理の限界を気長に待った。この顔と体なら飛び切りの物になると確信している竹は決して焦らなかった。焦らずにしかも確実に怡子が屈伏するまで責めを続ける竹と、どのように辛い責めにかかけられ、羞かしめられても、あきらめない怡子との闘いが何日か続いた。

金持のお嬢さんとして、気ままに育てられた智子は、たとえその前にタクシーの運転手である前川にいたぶられ、それを理由に継母の千津に虐げられて平静を失っていたと云いながら、怡子の場合に較べればまだなまぬるいミチの仕込みによって、もろくも屈伏したのとは比較にならなかった。

表面は華やかに見えるが、隙があれば親友

であっても蹴落してのし上ろうとするみにくく冷たい斗いが渦巻いているファッション界で、僅かの期間にAクラスまでのし上った怡子は智子とは違って芯が通っていた。

後手のまま尿瓶や便器を使わされている屈辱の姿を写され、それを目の前につき突けられても、ビール瓶や、怡子には想像もできない色々の道具でもてあそばれて、気を失う寸前の写真のあられもない姿をばらまくと脅されても怡子は竹の要求をはねのけた。

遊び慣れた竹の技巧によって、意に反して反応を表す肉体を呪いながら、怡子は殺してくれとさえ口走るようになった。遂に竹は辛抱しきれなくなり、痛めつけられ疲れ切った怡子に麻薬を使った。

怡子は始めこそ頭痛と吐き気に悩まされたが、三本も繰返えして打たれると、麻薬の持つあやしい陶酔感に酔い、そのとりこになっていった。ヤクを打たれるのを待つ様になるまで一週間ばかりしか、かからなかった。

山多会きっての商品として売り出すのに二十日もかかり、竹の腕は幹部から一時は怪視されたが、高級コールドガールとして怡子は麻薬にあやつられながら稼ぎまくった。その働

き竹を山多会の実権者である山野の右腕にまでの上げた。

均勢のとれた姿態と、冷たいまでの美貌を売り物にして稼ぎまくった頃の怡子——その頃はもうマリと云う名をつけられていた——は若い男たちを顎で使うほど葉振りが良かった。だが稼ぎの大部分はピンはねされ、少なくなかった手取りもヤク代となって消えていった。

マリはやがて自分の運命に対するあきらめもあり、性格的にもそうであったのか、この社会でも異常だと云われるほど麻薬に溺れはじめ、一年を過ぎると、胃腸を荒し、食慾もおとろえ、以前のマリとは見違えるほどになってしまった。

次第に稼ぎが減って来たマリに対する竹の仕打は惨酷を極めた。体の容色がめっきりあせて魅力を失ったマリに、それを補う特殊のサービスを強要して、歯を一本残らず抜かせてしまった。さすがに、それだけは許してと泣いて哀願したマリも、麻薬で縛られた体の悲しさ、禁断状態の恐怖に勝てずに歯をすべて失った。

こうしてタマにした女の骨の髄までしゃぶりつくすのが組織の手であった。

僅か二年余りの間に身も心も廃人となった



マリは、立ちん棒をしている浮浪者からすら素面のときは相手にされない女になってしまった。

「もうこれも充分稼いだから、処分することになってるんだよ」

町子姐御は無表情に腰かけているマリの方に顔をしゃくった。

「そうですか。でも本当にヤクはこわいですわね。お姐さん」

「あんなにほんぼん打っちゃあ誰だって駄目になるさ。これ、梅子だったわね。これみたいに素直に云うことを聞いてりゃ、今頃は脂の乗り切ったいい姐御になってるのにさ。ほほほ。もともと少し位顔がきれいだからって、お高く止っていたのが悪いんさ。あと一年は持たないわよ」

「ほんとにそうですわ。こうなってはファッションモデルだったなんて思う人は居ませんもの。これを見たら誰だってヤクに手を出す気になれないですわ」

「けどミチ。ヤクを打ってあれをすると、とてもこたえられないらしいよ。それ以上の楽しみはないっていう話よ。ふふふふ。あんたも打ってみないかい」

「いえいえ、とんでもない、お姐さん、私は

どんなに良くなったって、ヤクには手を出しませんわ」

町子は麻薬の恐ろしさを智子に聞かせ、見せる為に、わざとマリのような足手まといを連れて来たのだった。

「お前さん。それはそうと、梅子をこれだけに仕込むのには、随分苦労したろうね」

「そんな、まだまだですわ。お梅はまだお仕置がこわくて大人しくしてるだけですわ。お姐さん。でも、きっと自分からすすんで何でもするタマに仕上がりますわ」

「そうかい。楽しみにしておくれ。まあしっかり仕込んでおくれ」

町子姐御が腰をあげるまで、智子は男を喜ばす為のセクシーな踊りから始まって、見るのさえおぞましいあの道具を、顔を紅らめながら使わせられた。いやだいやだと言いながら、次第に叫びまであげる智子の姿に町子もすっかり興奮して、ぐったりとなった智子を休ませもしないで緊縛にかかったミチを手伝って縄をしごいた。

へとへとになって床に後手のまま転がった智子を尻目に、あの智子の苦業にも何の感情も現さなかったうつろな目をしたマリを従えて町子は帰っていった。

## 七 梅子の誕生

本当にミチが町子に云った通り、ミチに、そして夜は久田も加わって、いろいろの技巧を仕込まれ、心の片隅にはお仕置を恐れる気持もあり、特に強い麻薬の恐怖の気持もあったが、智子がミチの命ずるままにすすんで責めに服する様になった或る朝、ミチは智子に入浴を命じた。而も常に縛られたままの後手が解かれた。

きれいなタイルの浴槽で伸び伸びと湯に浸り、自分でタオルの使える自由に、うっとりとなりながら、この浴室にまつわる二つの想い出にふけりながら湯を使った。激しい責苦でまみれた汗を流され、縄目を残し答跡をつけた体を洗われて、疲労を回復した場所であり、その反面、従順でなかった、命令を聞くんだ、と水責めにされ、浣腸まで行なわれた苦しみの場所でもあった。

朝湯を自由の体で使わされたのびのびした体を与えたのは新しい服であった。真赤な絹のすべすべした服であったが、形は長い間智子を辱しめた粗布のごわごわした服と全く同じであった。胸と下腹部のポケットは黒であり、後手に縛る縄を兼ねたウエストを締める



紐は純白の絹であった。

今日は、始めて手を使つての食事が許された。急にやさしくなったミチに感謝の眼ざしさえ送る智子には、やはり後手の緊縛が待っていた。

今日まで乱れるにまかせ、時にはつかまされたり、それで吊られたことさえあった黒髪に櫛が入られ、入念なセットまで施された。ミチは忙しく後手に縛られた智子のまわりを動いた。忘れられていた化粧が始まる。以前はストリップパーだったミチの手で厚くドーラが塗られ、首筋から背中、胸にまで白粉がはたかれる。眉を引かれ唇が濃く彩られる。胸ポケットのホックを外して、顔を出した大きな乳房の真中で、つんと上を向いている乳首にまで紅がさされる。

「あ、あー」

刺激がうめき声になって出る。

後手のまま手足の爪がきちんと切れ、マニキュアをされる。

すべての化粧をミチにゆだねて、智子はそれでもうっとりとなった。

鏡の前に立たされて、生れ変わったような自分の姿を見ながら、智子はミチの身仕度の終るまで、長い間待たされた。

ミチが体にまとう下着からワンピースまで智子の一番大切にしていた、最高の衣類であり、時計もネックレスも、そして冷たく輝やく翡翠の指輪も、みんな自分の体から剥ぎ取られたものであるのを見せつけられては、智子はすべてをあきらめた今でも思わず身を悶え、自由を取戻したい気持が湧いた。しかし手首だけでありながらも、後で縛られていることがどれほど無力なものであるかを体にしる知らされているだけに、あらがう勇氣すら出せなかった。

後手に縛られたまま、その上からレイコンコートををはおられると一見ただけでは、智子に自由が戻ったように見える。素足に、これだけは自分の物であったハイヒールをはかされて、人目を避けて階段を下り、久田の待つプリンスグロリアに押し込まれた。ミチに押されながら、どこに連れて行かれるのだろうと云う不安に智子の足は震えた。

「ミチ、梅子に、これを掛けさせな」

大きな真黒な、おまけに内側に紙まではったサングラスが視界をうばった。

両側から腕をとられた智子は大きな建物に連れ込まれた。視界を奪われた智子はそうでなくても勿論知らなかったが、山多会の幹部

の経営するホテルであった。

大きなダブルベッドのある部屋で、サングラスを外された智子は伏目になって見まわした。窓は夏の日中だと云うのに厚いどしりしたカーテンが引かれている。隅に押しやられたテーブルの上に、久田やミチに散々に責められ仕込まれた色々の道具やロープなどが積まれている。

頬に傷跡のある鋭い目つきの、がっしりした男が、智子に恐怖を植えつけた町子姐御と一緒に入って来た。久田とミチはソファから立上って姿勢を正した。

「山野の兄貴、姐御とお揃いでわざわざのお出かけ、有難うございます。今日がお約束しました日で、変ったタマを仕立てましたので是非見てやっておくんなさい。きっとたんまり稼げますから」

「うん、これだな」

「お梅、さあ、御挨拶するんだ」

後手の紐を解きながらミチがささやく。

智子はソファにそり返った山野の前に進んで、正座して拇指をつき出したこぶしを揃えて、頭を下げた。短い裾から太腿があらわにこぼれる。服の両側は脇の下まで肌があらわである。



「お梅子でございます。どうぞ宜しく虐めてやって下さいませ」

「ふっふっふ。可愛いことを云うぜ。ふん、お梅子、ええ名前じゃねえか。わっはっはっは。で、久田、このあま、何だったんだい。ミチみてえにストリッパーか」

「いえいえお兄さん。これ、金持の学生でしたの。これを見て下さい」

走り寄ったミチが、智子の学生証を差出した。貼ってある写真と実物を見較べる為に、うつむいた智子の顎をスリッパで持上げる。

「ふむ。たしかにそうだな。野沢智子、十九才か。化粧すりゃ顔もこんなに変わるわな。ミチの好みだな」

「あんた。仲々整ったいい顔だわ。それに休つきも申し分なさそうよ。ほほほほ」

町子が口をはさむ。

「さあ久田、変ったことを、何かやらせて見せろ」

ミチが前に出て命じた。

「お梅、さあ教えた通りに山野のお兄さんを喜ばせて差上げるんだよ。お兄さん、まず手始めに軽い所からやらせます」

久田がテーブルコーダーのスイッチを入れた。

手を縛られたままの智子は、流れる甘ったるい音楽に合わせて、山野の前で大きく腰をまわし始めた。しかしありふれた演技は山野の不興を買った。山野が何事か怒鳴ろうとした時、ミチの手が動き続ける智子の服のポケットを外した。

「ほ、ほう。仲々仕込んだな」

山野の視線は胸にくり抜かれた丸い穴からわさわさと、真中に紅も鮮かな乳首を上向かせた大きな乳房が揺れながら顔を出したのに注がれた。次いでハート形の穴から見える漆黒の茂みに引かれて、ぐるぐるとまわるのを追いかけた。羞恥を見せながらも、智子は以前にまして大きく腰を振り続けた。

「あんた。この服は、ミチが考えたんですって。面白いわね。ほほほほ」

町子までが笑い出した。ついで久田を口もはさむ。

「兄貴、梅子は、あの道具も上手に使いまっせ。ミチ、やらせて見な」

「あのロープは何に使うんだ。あんなに長いのを」

「はいお兄さん。あの縄で縛って責めるんです。お梅は縛られて喜ぶように仕込んでありますの」

「やって見ろ」

「お梅、さあ縛りだよ。どんな縛りが良いんだい。自分で云ってごらんよ」

「は、はい、あの、海老にして下さいませ」顔に血が昇るのが自分でも解った。

「手はどうするんだい。お梅」

「手は、手は、鉄砲責めが、苦しいです」

智子はミチの前にあぐらをかいて座った。やはり久田の男の力がこわかった。

ミチは麻ロープを手にした。智子は後手に体重をかけて足首を浮かせた。足がしっかりと縛られると、前に身に屈める。ミチは屈まった智子の体にロープをかける前に服を脱がせた。

「この服は、後手に縛ったままで、脱がせられる様に考えましたの」

ほどかれた手を前にまわそうとさえしないで、智子は左手を上から頭の後に、右手を下から背に高く差上げた。その手をしっかりと結び合せながらミチは説明を加えた。

「お兄さん。お梅には縛りを、みんな教えましたから、口で云うだけでポーズが取れますの」

鉄砲責めの上に、海老縛りにされた智子の口から、低く呻きが洩れ、全身から汗がにじ



みはじめた。

「ミチ、退け」

山野はソファから身を起して、身動きも出来ないで呻いている智子の体を後に倒した。

「私にもさせて」

町子も山野と一緒に汗をにじませる智子の、太腿で押しつぶした大きな乳房をまさぐり、脇腹をくすぐった。つばを心得た二人の颯りに、眼も開けられずに、

「あー、むー。む、む、う、はー、はー」

智子は苦痛と恍惚感に身をよじることさえできずに弄ばれ、遂に意識を失った。

ミチに介抱され、すべてのいましめを解かっているながら床に長々と仰向けに横たわる智子の意識が戻るのを待って、山野と町子は、ここまで仕込んだ久田とミチをねぎらった。

「お前ら、本当に上手に仕込んだものだな。」

ええ腕だ。こいつは、きっと稼ぐな」

「有難うございます。まだまだお見せする事はありますのよ。お兄さん」

「ふっふっふ。こいつは近頃にないええタマ

だ。羞しげな様子をするだけでも上等だ」

「あんた、ミチの仕込みが上手だったからだわ。それにしても、この服はいいわね」

「それに兄貴、こいつにゃ、あの方は勿論た

っぷり仕込んでおきましたぜ」

「ふっふふふ。お前に仕込まれりゃ一人前

になったろう。始めは喚いたろうな」

「姐さんの前で何ですが、何なら兄貴、どうです。飛び切りのオスベだって仕込んでま

っせ。上と下と両方使えるんですから、こた

えられませんか。ひっひ」

「お兄さん。お梅にはたっぷり仕込みましたから、きつとお気に入りしますわ」

「ちょっと、お前さん。立派なのをしてるわ

ね。どこでくすねたんだい」

町子がミチの装身具に目をつけた。

「これですか。お姐さん」

「それもだよ。お前さん、ちょっと見せておくれ」

宝石で飾った腕時計だけでなく、翡翠の指輪にも手が延びる。

「これは、お梅が持ってたんですよ。二重の儲けだと喜んでました」

久田が口を入れた。

「私の指にもびったりだわ。いいだろ、ミチしばらく借りるよ」

冷たく輝く宝石に頬ずりする町子の癖を知っているだけにミチは返事を渋った。

「はい、いえ、……」

「なあミチ。おめえより町子の方がよく似合うんだ。貸してやれよ」

山野に云われると逆らえない。貸せ呉れになる事はわかっていながら、ついミチの手が伸びる。しかし町子はもう取り合わない。

「おめえらの云う通り、こいつは、変ったタマに仕上ったらしいな」

「はい、お兄さん。もうお梅は何でも喜んでする様になりましたから、これからじゃんじ

ゃん稼がせますわ」

「そうだな。何でも喜んでする様になった女か」

「お見せしませんでしたけど、浣腸だって、一番羞かしがるので面白いですわ」

「おい、ミチ。何でもするタマになったか。それじゃ——町子、こいつにヤクを一本打っ

てやれ。ここだな」

この時まで、まだ恍惚の境に居た智子が、がばっと起き上って叫んだ。

「いやっ、いやです。ヤクだけは、打たないで。許して」

ヤクと聞いたとたん、智子の眼の前に町子に連れて来られたあのマリのみじめな、悲惨な様子を想い浮べて、両手で前を覆って部屋隅に走った。



「いやっ。いやです。お願い。お姐さん、助けて」

「なんだいこれは。何でも喜んでするタマがヤクだけはいやっ、か。久田、ミチ。まだ仕上ってはいなかったな」

「兄貴、怒らんで下せえ。こいつもやった事のないことは怖いんでっせ」

「ようし。わかった」

山野は内ポケットの厚い財布を取出すと、一万円札を数えてはいと十枚ばかり投げつける。

「これだけ持って行け。まあ今日は、これで引き上げろ」

久田とミチはこの言葉を誤解した。

「へい。梅子、お礼を云いな」

「お兄さん、姐さん。有難うございました」

「もう行け。二人とも」

久田とミチは揃ってぺこりと卑屈に会釈して、智子をふり返った。

「お梅、さあ、こっちに来るんだよ」

ミチがさきほど剥ぎ取った服を着せようとした。久田がテーブルの上の小道具類をとりまとめる。

「待ちな。そいつは置いておけ。俺の方で面倒見てやる」

「で、でも。はい」

不満を表しながらも山野にはそむけない。

ペコペコと頭を下げながら部屋を出る久田とミチを山野の太い声が追う。

「お前ら、まあ悪く思うなよ。あの部屋は当分お前らに使わしてやる。只でな。又新しいタマを仕入れておけ」

町子がわざわざマリを連れて行って智子に見せつけたのは、麻薬中毒の恐ろしさを見せつけておいて、智子を取上げる口実を作る為と、この後にも、より一層従順な商品となるようにする為であったことに気付かずに久田とミチが去った。

智子は自分の時計や、継母の千津からくすねた指輪がミチの手に移り、それがいとも簡単に町子の物になった様に、責められ弄ばれ男を喜ばせる道具となった自分も山野の商品として取引きされることを悟った。

「あんた。うまくいったわね。ほほほ。これは近頃にはない掘出し物だわ。きつとたんまり稼いでくれるわ」

「ふっふふ、おい、お梅子。こっちに來い。おめえ、俺たちの云うことを聞きゃあ大事にしてやるぜ。楽に暮そうと思ったら、変った芸をおぼえて働くんだ。ええな」

「はい」

「そうだよ。お前さんも、マリみたいになりたくなかったら、素直に働くんだよ。けどね。おぼえておおき。逃げようなんて考えたって駄目だからね」

「まったくだ。俺達の手から逃げられた女は一人もねえ。わっはっは。まあおめえは大事にしてやるから安心せい」

うなずきながら智子はつと手を伸ばした。山野が傍に置いた自分の学生証を取り上げると、じっとそれを眺めて、こまかく裂き破った。足もとに散るその破片がこみ上げてくる涙に曇った。智子は眼に一杯涙をためて、山野の前に進み出ると、くろりと背を向けてうずくまり、手をゆっくりと背に組んだ。

「ふっふふふ、おめえは感心な子だぜ」

山野の声を背に、自分に云い聞かせる様につぶやいた。

「智子、智子、さようなら。私は梅子になるわ」

これが智子の意志で行なう行為の最後になるであろう。涙が頬を伝わって落ちる。後手にまといついて、締め上げる紐が梅子としての世界の始まりを告げるかのように、彼女の体を緊張させた。



# 伊藤晴雨ノート (2)

斎藤夜居

伊藤晴雨の市井風俗考証画集として畢生の大事業『いろは引、江戸と東京 風俗野史』は惜しくも第六冊以下は、未完成におわったが、この遺線算段の自費出版は、発売当時その頒布には苦心惨胆たるものがあつたが、今日では古書価は鰻上りにあがつて揃本一万五千円というのが相場。それだけの価値のある特異な、風俗資料であるというばかりではなく、石版印刷美術書としても十分に鑑賞に堪えられる。最近複製本流行でこの書もその企画があると聞いたが、原本の持つ味は仲々出せるものではない——。この風俗野史奥附にある印刷名儀人は佐藤倫一郎で当時（昭和二年—昭和六年）晴雨家の内弟子だった。こ

の人は画家には成れなかったけれど、その遺髪を守るという意味で、今も尚晴雨翁を敬慕し其の遺作の蒐集・保存に努めて居られる。晴雨と日常起居を共にした数すくない門下の一人。翁の親任する所となつたが、のちに晴雨の膝下をはなれ室内装飾業を以って一家を成した。以下はその佐藤氏からの聞書の一部で、昭和四十年秋ごろ神田駅附近の酒場「わだち」にて対談中に採録した。

「もう今では伊藤晴雨の日常生活を知っているのは佐藤さんだけですわね。……主にどんな仕事をして居たのですか？」

「例の、風俗野史の石版印刷と、新国劇や曾

我廼家五郎一座の舞台装置の仕事を一緒にお手伝いさせて頂きました。このことが今の僕の商売の基礎になったのですから、先生のご恩は一生忘れることが出来ません。あんまり貴方みたいに責め責めといって、責めの晴雨ばかり強調するのは感心できません。舞台装置家として、演芸通としての晴雨先生のこととも調べたらどうですか……。まあ何でもきいて下さい、知っていることはお話し致しますよ」

「どうも、恐れ入ります。早速ですが、佐藤さんは晴雨氏が「責め」の実験をやっている所を見たとか、その手伝いつまり助手をしたことがありましたか？」





昭和36年1月  
晩年の晴雨翁（左）と佐藤倫一郎氏

「ない。全然ありません。あの頃は僕はまだ若かったし、先生は若い者にそんな所を見せたくないだったのでしよう。そういう時には、必ず何か用事を言いつけて、僕を外に出してしまうのです。画料の集金に行つてこいとか印刷屋や紙屋に行けとか、遠い所でたっぶり時間がかかる用事でした。それで、帰つて来ると、先生は火照つたような顔をしてニヤニヤわらっているし、傍には乱れ髪になった顔の知らない若い女がいたりしましたが、責めの現場は見なかった……それで思い出しまし

た、朝ですね、先生の寢床を上げに行くのです、すると布団の中から縄が出てきたことがあります。おかみさんを縛っちゃまうんです。はあ、昨夜やっただ、とそう思ったことがあります」

「佐藤さんが居られた時分の晴雨の奥さんは三度目の、あの後に脳をわるくされた方ですね？」

「そうです。だけど三度目だかどうだか。僕が知ってるだけでも、出たり入ったり幾人も変りましたよ。三日ぐらいで直ぐに出て行つ

た女の人もありました。でもアノ奥さんは実にいい人だった、親切だった、名前？ 知っています……えーと、何んと云ったかなあ、待って下さいよ、思い出します」

註。帰るまでには思い出すと云ったが対談を了るまで遂に思い出せなかった。

「どうして、晴雨の家をはなれて独立したのですか」

「僕が先生の所からですか。どうしてもこうしても無いです。全然食っていけないのですよ……画料が余分に入つた時はお小遣位くれましたが、給料っていう

のは一銭もないのですから。こんなことがありました、お正月のことですが、先生は出て行つたきり四日も五日も戻らないし、最もそんなことはしょつ中でしたが、腹は空るし、僕は無性に数の子が食べたくなくて、それで少しばかり持っていた自分の金で買って来ました。所が男のかなしさ。アノ干した数の子をどうしたら艶や艶やしたいいい色にもどすか知らない。今思えば馬鹿な話したが、ゆでれば良いと思つて、鍋に入れて煮たんですよ。

……数の子は全部真ッ白に、煮上つてしまつて、それじゃ勿論食べられる訳がない。悲しかったですなあ。まあそんなことで、とても先生には、ついて行けなくなりました。それに僕は一生懸命に絵を描く稽古をしたのですが、どうしても線がいけない。石版印刷の仕事や、舞台装置の背景を塗る仕事はできたのですが、画家になるための生命ともいふべき線がダメだったので、思い切りよく今の商売に、転向したのです。戦後になってからです。が、銀座のキャバレーの改装の大きな仕事をやって、これが自分でも会心の出来で、それで久しぶりに先生をお招きして、その店で一杯やっていたいたのですが、その時に先生は僕に言いました。佐藤さんよく出来た、



君はこういう仕事のほうが自分の天分を生かせるから、迷わないでこの道を行きなさいってね。随分きもち良く飲んでくださった……」

「晴雨先生は非常に言葉づかいのおだやかな方だったと聞いて居りますが……」

「そうです、そうです。絶対に僕みたいな小僧っ子にだって、呼び捨てにしたことがありませんでした」

「所で、女のひとにはどうでしたか？ 女性虐待では天下公認の人物ですから、乱暴だったですか、特にそのモデルにした女性などに對しては？」

「それがモウなんて云うか、猫撫で声なんか出しちゃって、兎に角やさしいんです。聞いちゃいられないような甘ったるいことを云うのですよ。それが手なんですなあ。そうやってだましている中にひよいと縛っちまう……所が、仲々どうしてモデルだって甘くないから、先生は失敗した話しはあまりしませんが、だまし損こなって、先生が女にぶんなぐられた所を見たことがあります」

「ハハア、責めの大家が、逆に女になぐられる、なぐられた伊藤晴雨というのは、一種の罪ほろぼしになりますね。……所で、風俗野史に就いて何か面白いお話しがあったら」

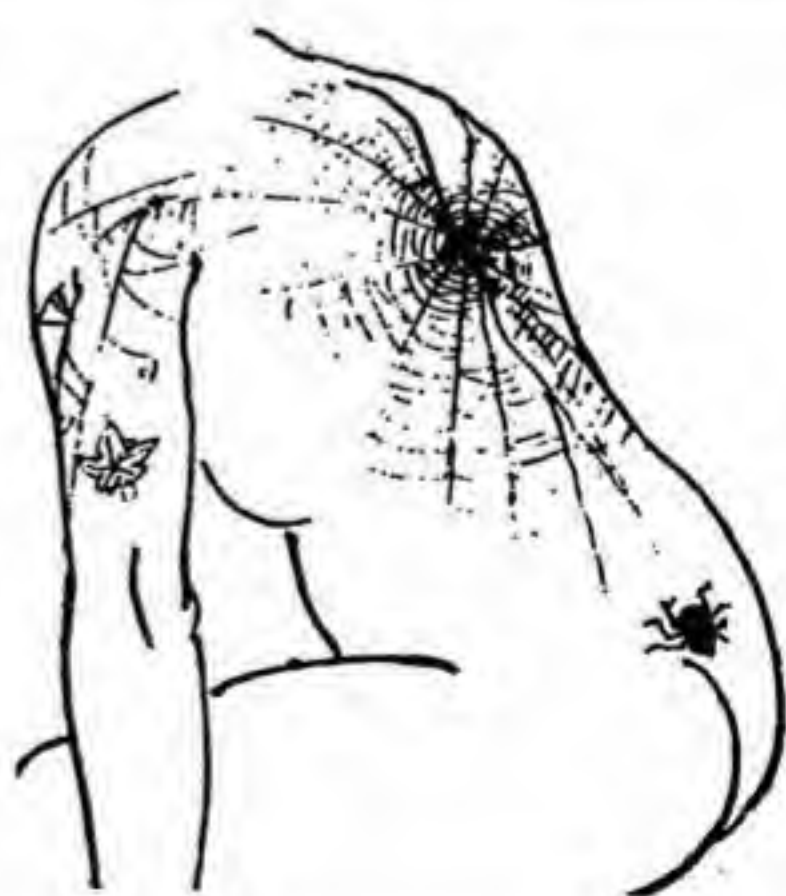
「風俗野史の第一巻ができ上がった時、先生は僕に大阪へ行って売ってこいと云うのです。

本を百冊先きに大阪駅留にして送り、先生は紐のついた大福帳を作って、それが奉加帳なんです。別に住所録を一冊、いろいろな人の住所氏名が書いてある。其処をまわって風俗野史を売って歩け、という訳なのです。何しろ僕は東京そだちで、その時が生れて初めて関西旅行、西も東もわかりません。先生は訪問先に対するいろいろな注意とコツを教えてくださいました……。先ず、有名人の所に先きに行き、名前を書いてもらって、寄附金をもらいなさい、そして本を置いてくるんだと云うのです。伊藤晴雨と云えば少しは世間に知られた名前だから、片道の汽車賃きりあげられないが、行っている間は腹がへるようなことはあるまい」

「それは大変な仕事を仰せ付かったものですね。野史は一冊定価いくらでしたか？」

「二円でした。二円といえば当時は大金で、とにかく高価な本でした。大阪に着いて、一番始めに、その頃は大阪にいた佐藤紅緑（ハチローの父、当時の小説家）のうちに行きました、直ぐに一冊買って十円くれました、次は同じく大衆作家の行友季風（代表作『修羅

「風俗野史」より



八荒」でこれも買ってくれました。それから毎日々々住所録にある、有名人や演劇関係者、古本屋、それから責めファンの旦那筋と歩き廻って、本は売れるしタンマリお小遣いは貰えるし、たちまち関西の遊廓通になってしまいましたよ。あちらこちらと遊んで歩いて、東京へ帰った時には、又もとの無一文でした」

「それじゃ晴雨さん、おこったでしょう」

「否え。先生はお金のこととは何も云わなかった。唯、本がみんな売れて良かったと云っただけでした。……それから話は違いますが、





オールド・ファンにはなつかしい、会員制『変態資料』は特殊文献雑誌として知られている。第四号に、有名な晴雨の逆さ吊り実験写真が口絵になっている。

『演芸画報』を調べれば分りますが、先生が舞台装置をした芝居の写真が出ています。又、五郎一座の芝居のプログラムもずいぶん描いておられます。浅草の活動写真の看板画も描いて居りましたが、段々古臭くなって注文がなくなりました。……こういうことがありました。新国劇の舞台装置の時でしたが、先生が下画をかき僕が塗るのですが、弟子に入ったばかりの頃は、いくら塗っても塗っても先生の気に入りませんでした。段々うまくなって、その頃はもう先生は僕にまかせて途中で飲みに行ってしまうのです。ある時、そうして又ブラリと戻って来ました。その時の画面は自分でも実に気持ちよく仕上り、先生も褒めてくれたのですが、ちょっと此処を直しましたよと、墨の大筆をとったのです。所が酔っているからたまらない、だから墨汁がこぼれて、画面が台無しになってしまいました」

「それはそれは、弱ったことになりましたね」

「まったく、もう泣きたいほどの気持ち

になりました。その時、先生少しもあわてず此処には松を描きましょう、と云って古松の幹を黒々と誠に力強く墨痕あざやかに描き上げました。僕は、真底から先生に敬服しました」

「そのほか、日常のことで、思い出すことなどを」

「そうですね、とにかく変わっている人だったから……。お金のことですが、先生は本の間によくお札を納って置く癖がありました。あるとき青梅の先きの田舎町の遊廓に居続けし金が無くなり、僕の所に連絡が来ました。本箱の何段目の何とかいう本の中に札が挿んであるから、というのです。確かに十円札が四、五枚入って居りました。よく記憶しているものだと感心したことがあります」

「服装などは……」

「いつも着物でした。夏は浴衣……。矢立と写真帳をふところに納れていて、何処へ行っても気の附いたものがあると、直ぐに写生して居りました。筆豆な人だったですね」

「それから、例の有名な逆さ吊りをした時、キセという奥さんはお腹が大きかったのですが、そのお子さんですが、生れて其後どうなったか聞いたことがありますか？」



「あの時のお腹の子供は、生れて間もなく死んだとききました。亡くなったことは確かです。ああいうことをしては矢ッ張り無理があったのでしょね」

「佐藤さんが居られた頃と思いますが、梅原北明の文芸資料研究会で、晴雨の責絵の頒布会をやっていたのですが、何か知っていることを」

「会員制度で頒布していた様子でした。写真を含め、見る人も居り、一部の人には肉筆ものや絵巻物を描き、素晴らしい作品があります。」

その頃の探偵小説家浜尾四郎や笹川博士が良いい物を持っていた筈ですが、今はどうなりましたか。けれども会として頒布したのは、石版画の一枚刷で、当時で五円でしたから、これは安いものではありません。その口の物がいちばん少なくなって、現在蒐集するのに最も困難ですね。むかし僕が刷った作品もあるのですがねえ。藤田嗣治さんも会員でした。渡仏する日に、横浜の船室まで僕がお届けに行き、大変よろこばれたことを覚えて居ります。古い挿絵画家で、よく人に知られた伊藤彦造も会員でした」

◇ ◇ ◇

この絵は私が敗戦翌年の秋、神田神保町の

書店で求めた。西田哲学流行の時代で、古本屋の片隅で埃にまみれている、このような石版画一枚刷などかえり見る人はいなかった。

これは晴雨自身が直接頒布した作品で、無彩色だが、その望みによっては手彩色を加えたものだと思う。石版刷画集の名作『美人乱舞』より少し以前の画風。晩年の草画風のラフな描写とちがって、流石に一枚刷として仕立てたものだけあって、精魂を傾注した構図で、この種の製作の発表がまったく不可能な時代と思い合わせて考えると、晴雨はひたすら自らの愉悦のみに浸るために描いたとしか思われぬ。上部の女の股間に刀刃が突きささっている、右側の石を抱かされた女は絶命の屍体である。けれども髪またの乱れやうねりには責絵としての極限の美が、キメの細かさが、美術家としてのサディストとしての晴雨の面目をよく保っている。画題を何というか、今では知る由もない。原図タテ34cmヨコ24cm。

◇ ◇ ◇

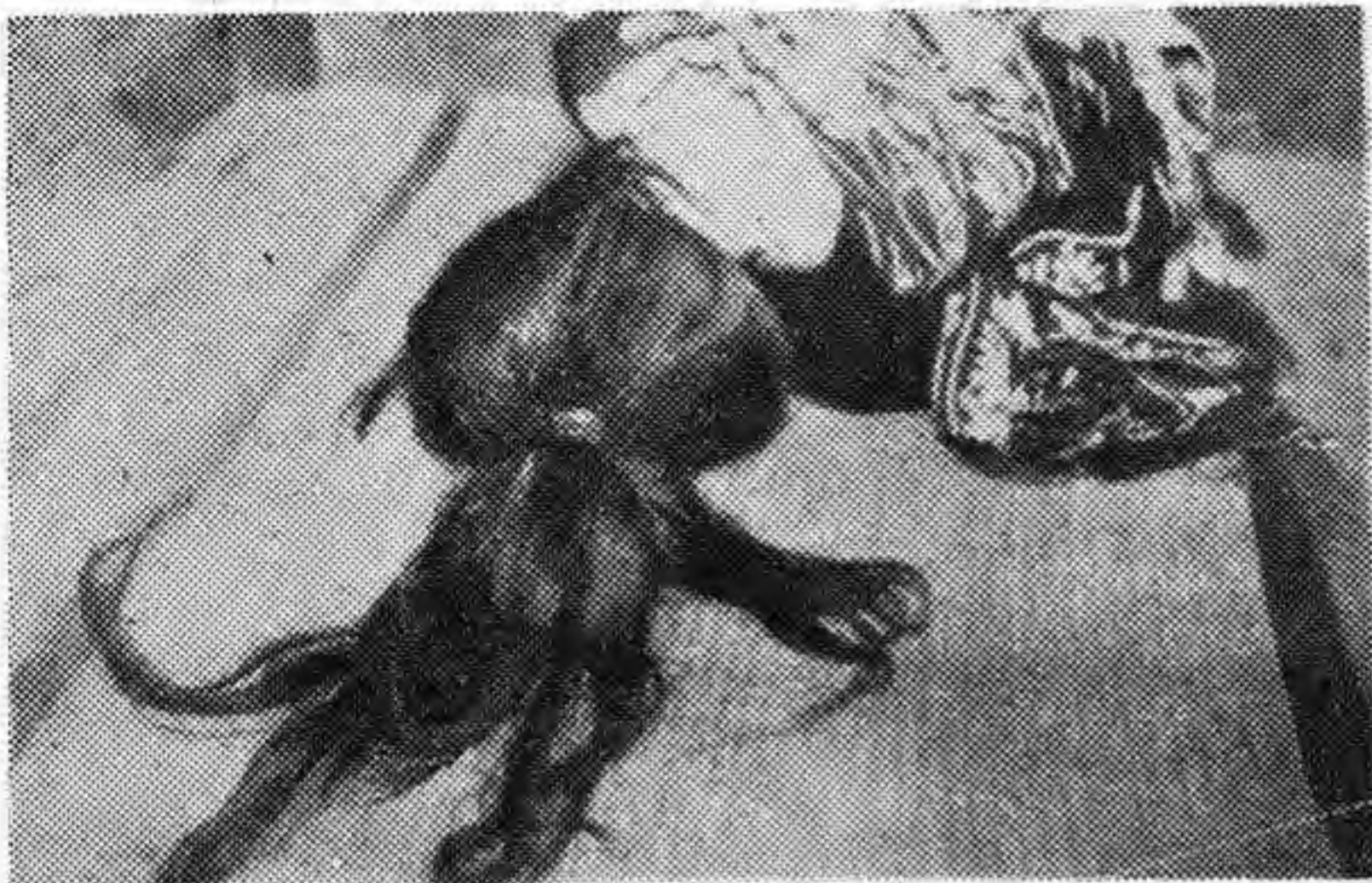
『変態・資料』Ⅱ註。特殊風俗文献雑誌、梅原北明主宰、大正十五年九月創刊、文芸資料編輯部Ⅱ第五号は大正十六年一月発行、昭和改元の年だが、この号は内容が充実している。口絵はグロースばりの柳瀬正夢の漫画と江戸



の媚薬商・四目屋忠兵衛の長命丸と朔日丸のチラシ。執筆は生方敏郎、藤沢衛彦、尾崎久弥、酒井潔、梅原北明、泉芳環、佐藤紅霞など。そしてこの号が長く資料価値を存している東京帝大教授杉田直樹博士の「マソヒズムの女のはなし」が載っている。

「サディズムとマソキズムとの定義に就いては、性学に心得ある者で之を知らぬ人は恐らくないであろうが、その実例に就いて詳しく記載したものは医学の文献に於てすら余り多く見受けられない。今茲に我国の精神病学文献の中から比較的珍らしい一例を掲げてみよう。之は珍しい女のマソキズムの例で、夫たる男を威嚇しては自分の身体に傷つけさせ、且同時に淫乱症を示した……ある機会から既に妻子まである今の夫といい仲になり、二人で新





世帯を持ち交情も至って濃やかだったが、不図したことから、又外の男と私通した。しかし、女はこの道ならぬ不義を内心では非常に心苦しく思い、その夫に対する謝罪の心持から、自分のからだを思う存分に責めさいなら

でくれといい、夫もそれに応じて妻をいろいろ折檻し苛責している間に、女の方では今まで内部に潜んでいたマソキズムの傾向が勃然として起るようになり……」という有名な小口末吉の妻ヨネの事件に就いて、小口が精神鑑定を行った三宅鉦一博士の記録を、杉田博士が整理し「本人の云うままを聞いたので多少重複はあるが、幾分私がよみよく直しておいた所もある」という全文が出ている。

ヨネはもと吉原の河内楼にいた女中で、娼妓ではない。——この調書の内容は各種の変態性慾譚に、部分的に引用されたり、全文引用と称するものもあるが、どういう訳か事件の輪郭を記載したものが見当らず、兼々私はその全容を知りたかった。武狭社版の犯罪科学研究同好会発行『刑罰変態性慾図譜』Ⅱ発禁、昭和五年三月Ⅱには、戸板上に淫虐死したヨネの全裸写真が三葉と着衣一葉が資料として掲載されている。これは各種の風俗読物雑誌などで、陰部を修正してボカしたものをよく見る——。伊藤晴雨は最初の研究書『責の話』（後述）の中で、この事件の起った大正六年三月四日附の各新聞の記事を記録に残している。当時の惨劇の生々しさをそのまま物語って居り貴重である。

#### 竜泉寺町の惨劇

◎妻の手足を切断して頭から硫酸を流す。  
妻の不身持を憤怒して一月以来。

◎弄り殺し責め殺す。被害者は絶命し、加害者は捕わる。

加害者は並外れた嫉妬で被害者に情夫が出来て以来硫酸や焼火箸で被害者の背中へ自分の名を焼きつけ、手足の指を切つて、数日前から弄り殺しにした。

昨夜、午後八時頃、下谷区竜泉寺町三七〇医師末広順吾氏が、同町百五十一番地Ⅱ牛肉屋の二階Ⅱ大工職、小口清吉方せいきちよりの急使に取敢ず往診すると、清吉（二八）の内縁の妻、矢作よね（三十）が全身に硫酸を浴び、手足を切断され瀕死の状態にあるので、直ちに応急手術を施すと同時に、其の旨坂本署に届け出たが、よねは同九時に死亡した。

#### ◎戦慄すべき自白

外出の出来ぬよう足の指を切り、両手の指を一本置きに切り取った。

小口の自白によると、彼が浅草区今戸八九竹内茂十郎方に同居中、内縁の妻よねは昨年（大正五年）十二月中、吉原貸座敷・鈴宝来楼の妓夫・山岸広次（二八）と情を通





じ、爾来夫の眼を盗みて関係を続けて居たので、清吉の悲憤やる方なく、本年一月以来、毎日の様によねを裸体にし、背中に硫酸を浴せた上、更に「小口清吉の妻」と背中に入墨し、更に真っ赤な焼火箸で「小口清吉の妻大正六年」と年号迄入れて烙印を押し、それでもまだ飽き足らずして、外出の出来ぬ様にするとして、両足の指を切落し、両手の指をも一本置きに切り去ったので、よねは遂に四五日前から生命危篤に陥入り、昨夜九時に至って到頭落命したのであるが、今日までの小口の行為は、実に稀有の惨を極めたもので、幾分精神にも異状を来し

て居るらしく、よねの死後平気で末広医師を迎えにやり、坂本署へ引致されて後も、蒼白い顔を振り立てて、石森警部に逐一罪状を自白した始末で、同署では警視庁の松井博士に犯人の精神鑑定をなさしめたが、別に精神に異状は認められなかった。よねの死体は、本日大学病院で解剖に附した。

#### ◎検診した医師の談話

こんな惨酷な他殺死体は始めて見た。最初に死体を検診せる末広医師は、自分は昨夜六時頃、小口清吉から家内が差込みが来たから来てくれと云うので、早速行つて見ると、あの始末。今迄私も惨忍な他殺死体も検察したが、あんなのは初めてで、局部迄焼け爛れて居て、創面から検案すると、五六日前に焼いたものと思われる。又、右の足の小指と第四指と二本切断してある。警察に出してある聴取書によると、被害者よねが、一月六日頃に一人で浅草の活動写真を見物に行くと、途中で三人の男の為に暴力を以て辱しめられたことがあり、その後も其の男に脅迫され、絶えず清吉の留守中に間男を家に引入れ、醜行を続け、その当時同衾中を夫に発見されて、その時の申訳に足の指を切られたものであると云つて居



るが、鈴木新吉Ⅱ同家の家主Ⅱの女房の話によると、足の指は清吉が切ったもので、おれにこういう事をしたのを忘れて、逃げて行ったり姿を隠したりすると、一思いに刺し殺してしようと絶えず脅迫されて居たらしかった。云々。

これではマソヒズムとサディズムが逆になっているが、事件発生当時のあわたしさがよく現れている。のちに千田左聞医博が記録を再調査した際に（昭和26・9）——陰部の

内部には別段異常なく、外陰部も異常形を呈していなかった——とあるから、この新聞記事に登場する町医者など相当あわてていた様子がわかる。この事件の女ヨネは、世界記録的Mで、海外にも珍らしい実例として知られている。夫の大工職小口清吉（末吉）は、未決監のまま肺病で死んだので、量刑の決定を見なかった、と晴雨は記録している。

前述の『責の話』Ⅱ伊藤晴雨著 孔版一八二頁 非売品 編輯兼発行者 坂本篤 温故

書屋発行 昭和四年九月 発禁Ⅱには、別刷附録の責め写真一袋二十三枚がついている。本当は全二十四枚だが、一枚は刊行者が内容見本に副えた。この写真版は熱心な責め物コレクターでも入手困難な稀品として知られている。今日の眼で見ても古さを感じない裸形姿態のものが数葉ある。又明らかに陰毛が写っているのは三枚、いずれも晴雨色の濃いもので、此処では代表的な作品三点をご紹介します。晴雨調の濃いもので、もはや古典的存在と称しても過言ではないと思う。

## 〔最新版〕女体責写真五十粒選

### A組五十集 大手札判印画紙（9×13型）焼付

A1	フミツケ汚辱縛り（新井）	一組一枚	一五〇〇円
A2	手吊り乳房責め（五月）	五組五枚	五〇〇〇円
A3	ハリツケ狼ぐつわ（新井）	十組十枚	九〇〇〇円
A4	全裸正面柱しばり（遠藤）	二十組二十枚	七〇〇〇円
		三十組三十枚	五〇〇〇円
		四十組四十枚	三〇〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇〇円

A5	亀甲強烈乳房縛り（遠藤）	全裸手吊りムチ打	（遠藤）
A6	豊満乳房いじめ（遠藤）	乳房責め股間縛り	（遠藤）
A7	鼻責鼻梁いたぶり（遠藤）	全裸後手高小手	（遠藤）
A8	膨隆臀部さらし（長野）	全裸正面強烈縛り	（長野）
A9	うねる緊縛裸身（長野）	色褪の開股しばり	（長野）
A10	正面縛蛙股ひらき（長野）	裸自慢縛りヌード	（長野）
A11			
A12			
A13			
A14			
A15			
A16			

A17	正面アグラしばり（長野）	正面大の字開股縛	（長野）
A18	遅ましき裸しばり（長野）	荒縄縛豆絞り猿轡	（大塚）
A19	両手前縛り髪首絞（大塚）	両手前縛り股間吊り	（桜井）
A20	亀甲股間しばり（関谷）	疼れんする裸身像	（関谷）
A21	両股縄掛け開股縛（大塚）	正面裸身強烈本縄	（梨花）
A22	乳房晒し肉体自慢（長野）	責衣にはみ出る肌	（東浦）
A23	投げ出した全裸縛（長野）	捕われの全裸緊縛	（梨花）
A24	羞らいの両股縛り（大塚）	猿轡乳房いたぶり	（遠藤）
A25	荒縄全身縛り豆絞（大塚）		
A26			
A27			
A28			
A29			
A30			
A31			
A32			
A33			

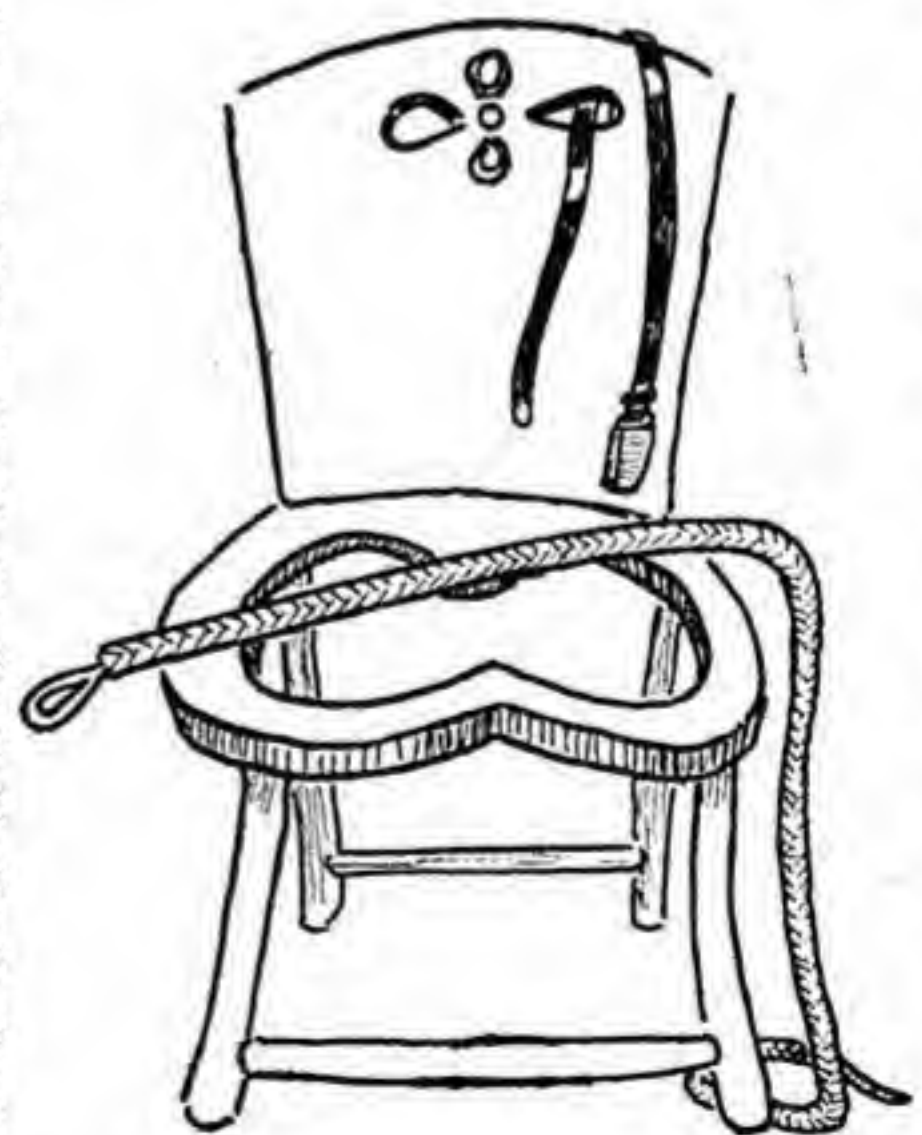
A34	盛り上る乳房縄目（長野）	亀甲本縄鼻いじめ	（大塚）
A35	ムチ打悶えポーズ（関谷）	椅子またぎ汚辱責	（東浦）
A36	縦縄股間縛り正面（関谷）	ゴム猿ぐつわ全身	（大塚）
A37	くさり乳房責め（長野）	強制片足挙げ責め	（大塚）
A38	正面乳房くびり縛（関谷）	鳴居正面ハリツケ	（梨花）
A39	手吊りパンティ落（絹川）	白バンド後手吊り	（東浦）
A40	豆絞り高小手呻（絹川）	裸縛り鼻いじめ	（梨花）
A41	ガンジガラメ立縛（愛川）	亀甲本縄股間縛り	（絹川）
A42	立木縛竹棒責め（桜井）		
A43			
A44			
A45			
A46			
A47			
A48			
A49			
A50			



# 心傷<sup>こころ</sup>たむ<sup>い</sup>遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

△第二十五章▽女囚ミシユリーヌ（五）

西 条 操



ヨーロッパの社会の基盤を形成する思想はキリスト教に負う所大である。そのキリスト教は、先ず、人間と人間以外のものを峻別することから発想している。でないと、肉食を肯定できない。人間と家畜との間には断絶した一線が画され、従って、家畜を屠殺して食卓を血まみれにすることに対して、彼等は何等の抵抗感をも持たないのだ。パリの中央市場では、ぶった切られた豚の頭部がずらりと吊られ、剥ぎ取られた犢の面皮が積み重ねられ、白エプロンのフリル優雅な御婦人たちが、平然とそれらを品定めして買って行く。

人間と家畜との峻別は、人間社会の中にも投影されて、近世までのヨーロッパの社会には、お互いに断絶された階層が積み重ねられて存在して来た。そして、現代においても、家畜に対する峻別は勿論のこと、人間同士の階層身分の断絶は、彼等の深層心理に根強く巢喰っているのだ。

その家畜にたとえられて、三匹の女囚は動哭した。人間中心の思想に育くまれて発展したヨーロッパの社会では、社会にそむいた者への制裁はきびしく、冷厳で残酷なものだ。ことにこの国は、ついこの間まで、ギロチン

死刑を広場で公開執行していた国柄だ。不埒な懲役囚を少しばかり苦しめたとして、革鞭の二、三発を喰らわせてやったとして、なんということもない。

三匹の女囚は深々と頭を垂れ、唇噛みしめて屈伏したのだった。

「分ったかいッ。じゃ、煉瓦を片付けな。テレーヌ、いま何時だい？ え？ 四時回ったって!! くたびれる筈だわ。こら、早くやるんだ。もう、お説教は済んだよッ」

女囚たち三人は涙してお礼を叫び、煉瓦を股間で拾い上げた。背中一面に火がついたよ



うだし、腰や腿は泣きたいほどだ。

片付け終えるや、ミルドレーヌが両膝をつき、肩ふるわせて哀願を絞った。

「——お、おねがい。もう、我慢できませんわ」と、腰をくねらせる。

「ふん。生理的要求なら仕方ないね。牛や豚でも垂れるわ、ところ構わずにね」

「で、どっちだえ？ え？ ハッキリおいいよ。前の環の方かい？ なに？ 後ろだって？ ガツガツ貫い喰いするからだわ。ジャンヌのケチンボ、よっぽどタンマリ貫ったのねえ、ケーキをタラ腹喰わせるなんて」

ミルドレーヌは隅にいざり寄り、便器のそばで身もだえた。蓋がしてあるのだ。

「こら、手で開けるんじゃないッ。開け閉めするものには、囚人は触れないんだよ。いくら三監がタルンでるからって、そのくらいのことは教えてもらっただろ？」

そうキメつけるマーゴットをマルタ課長が目顔で制した。女囚に対して監舎のことをけなすのはいけない。

ミルドレーヌは蓋をくわえ、一声泣いてハネ上げた。そして、跨いだ姿勢で身を揉む。

「——手錠——こ、この手錠、はずして頂けませんの？ おねがい——お、お願い」

ストップ錠を利かせた手錠は、いわば、二重に鍵がかかっている。ミルドレーヌは、切なくその手錠をガチャつかせた。

「寝呆けるんじゃないよッ。取調中の囚人の手錠をはずせると思ってんの？ ここは、検事局や裁判所じゃないのよ。いいから、そのままでおやり。出来る仕掛になってるの」

ミルドレーヌは両掌を内腿のそれぞれにぴたりと押し当て、顔歪ませて喘いだ。

「ど、どうしても解いては頂けませんの？」

腰の鍵さえはずして下すたら——ああ」

「やるのかい？ やらないのかい？ 鉄環をちゃんと当てがったかないと、汚れて、あとで困るよ。舐めたいんじゃないけど——」

便器の女囚は金具の音をみじめに鳴らせ、切なく腰をもだえ、悲鳴に近い呻きをあげ、肩ふるわせて足指をそり返らせた。

「おや？ 形がまとまったものじゃないようだね。あら、こんどは別口かい。そっちの方はお許しを受けてるの？ こら、ストップ」

「——す、すみません」

ミルドレーヌは涙をこぼした。

「済んだら立ちな。ちゃんと水を流して。蓋をしてッ。ホント、くたびれるねえ」

女囚はお尻をあげ、額で把手を押す。

「——あの、紙を——紙を下さいまし」

「甘ったれンじゃないッ。この糞ったれが。

課長さまのおっしゃったこと、何一つ分っちゃないんだねえ。始末させて欲しけりゃ、非の打ち所ない懲役女になって見せな」

ミルドレーヌは鳴咽し、蓋をくわえて閉めながら、股の付け根を切なく動かした。

「ほかの二人はどう？ 床を汚したら舐めさせるよ」

ミシュリーヌとクラリスも、大声で用便を願ひあげ、みじめな気持に涙ぐんだ。

「——あの、課長さま」

ミシュリーヌはおずおずといい、飛沫に濡れた両手を内腿に拭う。

「なんだい？ 毎月のものでもおっぱじまりそうなのかい？ 厄介だねえ、女てものは」

「い、いえ——。あの、何か着せて頂けませんか？ これじゃ、風邪ひいてしまいます」

「寒けりゃ足踏みでもしな。ひっくり返してやろうか？ 一汗掻くにはちょうどいい運動だよ」

「二、三時間そとで立たせてやろうか。そして、お家の中の有難味が分るだろよ」

「そう。すべて比較の問題だわ。相対性原理ね、フッフ」



「こら、チビ。懲役人てものは、裸一貫でお取調べを受けるの。昔から決まってるわ。ああ、そうそう。お薬つけてやらなきゃ」

鞭痕にヨードチンキを塗りたくられて、三匹は苦悶した。

「じゃ、明日まで、よく反省しなさい。分ったかいッ」

「——は、はい」

三匹の裸か身は観念し、いと悲しげに答えた。刑務所の中の刑務所の冷厳さと断絶とが骨身に沁みだした。

「だけどさ、独りでなくてよかったよねえ。」

仲間がいて心強いだろ。でも、しゃべくると反省の邪魔さ」

三人の口は、嵌口テープでピッタリ掩われた。口も利けなくなったのだ。心細さにミシユリーヌは鼻を吸った。

「なんだか臭いこと。早いとこぶち込んで帰ろうよ」

マルタ女史は欠伸をした。

三匹は独房に立ちすくんで、鼻から悲鳴を洩らす。後ろ腰を垂れ鎖に吊られるのだ。

「ここじゃ、段違い平行棒はないのよ。その代り、床運動と平均台の次には釣り環なの」「釣り環は男子の競技種目だけど、懲役人に

は男も女もないものねえ」

あまりのことにミシユリーヌは腰をよじつて、弱々しく捕縄を後ろ腰に拒んだ。そのお尻に平手打ちが鳴り、有無を云わせず、グイと吊られる。それでもう、股手錠の腰は一寸と下げられないのだ。

鉄格子扉が荒々しく閉じ、三人の制服と電灯が消え、闇の中に吸り泣きが断続した。

——エメリーヌは、さっと立ち上った。

ここはパリ法院の法廷——。マリアの公判が閉廷を宣せられたのだ。

「あーあ、五年か。ウンザリだわ」

エメリーヌと向き合って、マリアは大袈裟に嘆息した。

「あたし、このときの気持が一番嫌いよ。あんなには分らないだろうねえ」

マリアは両手をいやいやそろえながら、そっぽ向いて鼻を寄せた。

「せめて、こんなときだけは、静かに嵌めとくれよ。がっかりと打ちひしがれてるんだから——。ああ、錠の音と手ざわりが一しお身に沁みるわ。これで娑婆とはお別れか」

「仕方ないじゃないの。私だって、この瞬間は好きじゃないわ。でも、公正な裁判の結果だもの」

「ふん。そりゃまあ規則だし、これがあんたの商売だから、あんたを恨んだって仕方がないわね。逃がしたらクビだろ？ 手錠、もったきつくしていいわ、ゆるいわよ」

婦人看守エメリーヌは女囚を睨みつけ、後ろを向かせて革ロープを腰バンドに結んだ。

「なにが公正な裁判さ。弱い者いじめの片手落ちばかりじゃないか。あたしたちなんかよりずっと悪い奴らがゴマンといるっていうのにさ。ふん、高い所から見下ろしやがってもっともらしくいいやがる。懲役五年に処する——。ちきしょう、それでもうチョンか」

「お黙りッ。不服なら上告しなさい」

「上告？ あたしたちみたいなのが上告したって何になるっていうの？ あれは、金と身分のある方々がなさることよ。こちとらが真似したって、未決期間の割引だけ損。裁判なんて、お金なのよ、結局は」

幾多の法廷に臨んで来たエメリーヌには、マリアの暴言にも少しは真理があると思うのだった。

「ちきしょう。あいつら、家へ帰って行くのね。世の中で一番不幸なのは自分だって心地がするわ」

女囚は、立ち去って行く傍聴者たちを横眼



で見送り、手錠を引張って溜息をついた。

「荷造りは済んだんだろ？行かないの？」

「いま、廊下が一杯よ。ちょっと待ったら空くわ。おひるだってそうだったでしょ？」

「あんたって、ほんとに思いやりがあるのねえ。でも、いいのよ。あたし平気さ。初めてじゃないもの」

「そう。お前、たしか前科二犯だったわね」

「そうよ。最初は一年半、二回目はアンジェーで三年。でも、二年足らずで追っばられただけ。手錠かけられてる人間は運が悪かっただけ。受難者なのよ。見物してる連中の中には、もっともつと悪い奴がいるの。だから、あたし平気さ、そりゃ、口惜しいことは口惜しいけどね」

マリアはあばずれぶって云う。

「遠慮なく連れて歩いてよ。予審のときには面白かったねえ。ホラ、なんてったっけ、新米の若い制服娘——。あの子ったら、あたしがあんまり堂々としてるもんだから、かえって自分の方が恥かしがってさア、ロープ握ったまま顔伏せちまってオドオドしてたわ。あんなはまあ、ベテランだけあって、そんな弱気じゃなさそうだけど——」

「おいでッ」

エメリーヌは、手荒くロープをしゃくって曳いた。

まだ人目の多い通路を曳かれると、強がっていたマリアも顔を伏せた。十字路で、娑婆へ出る方を見やって足を停め、女囚は未練気だ。若いアベックが一組、こちらに背を向けて腕を組み、語らいながら去って行く。

「こっちょ。来なさいッ」

婦人法務事務官エメリーヌは腰ロープを張り、女囚はよろけて、アベックと反対方向へ脚を踏み出した。

鉄格子の仕切りを潜り、拘置所への地下通路で、女囚マリアは深々と溜息をついた。

「五年か——。長いわねえ」

と、手錠を悶える。鎖と金具が冷たく鳴った。引張りあげられる革バンドがきしむ。

「もがいたって無駄よ。痛いだけ。よく知ってるでしょ？逃げたいの？」

「無駄なことは分ってるわよ。でも、もがいて見たい気持になっちゃうの。分っちゃくれないだろねえ、あんたには、手錠で、ホントにいまましい代物だよ、ちきしょう。でもさ、こいつカマされたらお終いね。牢番女が安心するのも無理ないよ」

女囚は更に二、三度強く引張って音を立て

たが、諦らめて手首をずらせた。

「もっと一生懸命にやってみたら？」

「ちくしょう——」

「これ、ちょっと。お前、もうそろそろ、そんな言葉は慎しんだ方がよくはなかって？」

「そ、そうね。撲る？ あーあ、撲られても口返し一つ出来ない暮らしが初まるのねえ」

「悪いことするからだわ。法を犯せばふん縛られて牢屋に入れられるのよ。ひいおじいさんの頃から決まってるじゃないの」

「お説教は沢山だわ。ふん、法か——。あんたいい気持だろねえ。悪いことした女をひっ括ってショッ引くのは」

「そうとも。私たち法務事務官は正義の使者よ。口惜しけりゃ、悪魔を呼ぶといいわ」

「正義と来たわね。ま、どっちにしたって、いまはあたしの負けね。おねがいだから、お手柔らかにしてよね。おとなしくしますわ」

「突如として豹変しちゃったのね。結構なこと。でも、悔悛したかどうかは、こっちで決めてあげることなのよ」

エメリーヌも、ときには意地が悪い。

「はい——。どう？ この返事の神妙さ」

「駄目ね。これッ、おとなしく歩きなさい」

「だって、背中が痒いのよ。痒いところも搔け



ないなんて、ホントに情けないわ」

エメリーヌは立ち止まって、訊ねながら掻いてやった。グラマーの背はふくよかだ。

「ありがと。すみません。ねえ、あたしの身にもなって見て頂戴。この女盛りを鉄格子の中で暮らすのよ、五年も——。担当さまだって女でしょ？ 御亭主ある？ まだなのね。じゃ、好きな男はあるでしょ？」

「ええ、そりゃあってよ。えーと……」

エメリーヌは指を折って見せる。

「手の指だけじゃ足りないわ、ホホホ」

からかわれて、女囚は身を揉んだ。

「ねえ。もう十年したら、きっと来ますわ、こうして縛って貰いに。だから、刑務所行きを十年ほど待ってくれないかしら？ 同じ五年間でも、女盛りの五年間は身を切られるわよ。年取ってからなら、終身でもいいわ」

「ホホホ。お気の毒ねえ。色香の匂う間にやっときたいことは山ほどあるわね。でも、刑の執行はすべてに優先するのよ。なにを泣き言云ってるの。まじめに勤めりゃお慈悲もあるじゃない？」

「そうね。三年ほどで出してくれないかしら？ いま、女のムシヨの景気はどう？」

「バカ。すべてはお前の心掛次第よ」

エメリーヌはビシリときめつけた。

「お前、早く出たい出たいと云ってるけど、背の君の方はどうなの？ 自分だけ早く出たって淋しいだろ？」

「意地の悪いこと云わないで」

マリアは切ながって鼻を鳴らす。エメリーヌは、女囚の言葉使いが、気に入らないのだ。まだ確定囚ではないとは云え、一応は刑を打たれたのだから、その身分にふさわしい態度を示してくれなきゃ——。

「ねえ、あのひと、いくら打たれたの？ 教えてくれたっていいじゃないのよお」

「死刑じゃないわね。そして、お前より長いことは確かね」

エメリーヌは、ひる休みに獄庭で逢った男囚を思い出しながら、おくびにも出さずに肩をすくめた。

「ねええ。もうムシヨ送りになった？ まだだろねえ。いっぺんぐらいは逢わせてくれたってバチは当たらないわ。血も涙もないのね」

「もうお黙りッ」

女囚は、身検室の前で鼻を吸った。マリアが四つ這って腰をあげて見せたとき、泣き声とともに、一人の女が引き立てられて来た。血の気を失なって、蒼ざめた顔には化粧が残

り、娑婆との生き別れは今日だと分る。

「——かんにんして。監、監獄はいやよ。後生だから帰して——」

「いい加減にしなさいッ。見苦しいったら腕ねじあげられて突き放され、女は両手両膝を床についた。そのまま、肩ふるわせて鳴咽を絞る。眉ひそめて見やりながら、

「いいわ。お立ち。服を着て」

と、エメリーヌは自分の女囚に命じた。

「あら、ちょっと待って。そのままにしといてよ、エメリーヌ」

「どうして？」

「見本よ。さ、お前は立ちなさいッ」

聞いてマリアがふくれた。

「バカにしないでよ。寒いじゃないか」

四つ這ったまま口とがらせる裸検身の姿を見て、仕立のいいスーツの女は唇をわななかせた。顔掩う両手が手荒にひきはがされる。

「どういふの？ そのひと。直入？」

「ええ。ここへ直入」よ。今朝、参考人出局へ出頭、ひる前に逮捕、夕方には起訴、そして未決収監という段取り。さ、脱いでッ」

「——おねがい。いちど、家に帰らせて下さいな」

「なに云ってんの。当分ここに泊まるのよ」



「——ああ。主人に知らせなきゃ。心配するわ。それに子供たちにも——。クリスマスまでには帰して頂けますわね？」

女盛りの人妻風は両手を合わせた。手首には、手錠の喰い込んだ跡が見える。

「私にそんなこと訊ねたって知るもんかね。自分の胸に聞いて見るといいわ。御亭主には検事さんから報らせてあるわよ。お脱ぎッ。手荒な真似させないでね」

女は虚ろな眸をあたりに投げ、絶望を全身に浮べ、マリアの四つ這い姿によろめいた。

「——助けて、あなた——」

と、いきなり叫び、エメリーヌに取り縋ろうと脚をもつらせる。油断のない婦人看守は忽ち腕を引き戻し、靴下はだしの足が悶え、お尻に平手打ちが飛んだ。

「——ああ、監獄はイヤ。罰金ならいくらでもお払います。おねがいですから——」

「ここはまだ刑務所じゃないことよ。しっかりしなさいッ」

ついにビンタが頬に鳴り、顔を押えて女はよろめいた。

「オーバーな女。ヒューヒュー泣いてやがる」

マリアが腰を振り立てて嘲けた。

「なにヤラカしたのか知らないけど、お手本

の身にもなっとくれ。さっさと脱ぎなよ」

「お黙りッ」

突き出たお尻にエメリーヌの手が鳴った。

女はようやく観念したか、ぶるぶるふるえる手で、指を上衣のボタンにかけた。

「もういいだろ？ なんとか恰好だけはつけたわね、ギコチないけどさ」

と、横眼で見ながらマリアが云った。

「でも、思い出すねえ。初めてのときにや、

あたしだって死ぬ思いだったわ」

生まれ落ちておしめから離れて以来、光に照らされたことのない部分——それを高々と照明に晒して検査される女の裸か身は、彫像のように身じろぎ一つしなかった。

囚衣に着替えたマリアを曳いて監房区画に入ると、看守詰所の向う側あたりから、絞るような呻きが絶え絶えに聞えて来た。詰所の向う側の一面はいわゆる「責め場」で、嘗てミシュリーヌも、そこで正座のお作法を教えられたし、足錠の重さに打ちひしがれもした場所だ。

ふてくさくてのそのそし、同じ屋根の下にいる男のことを未練気に訴えるマリアを引き立て、独房へぶち込んだエメリーヌ又は詰所でソファに沈んだ。アネットは先に戻っていて

「お疲れさま」

と、ねぎらってくれた。

「あれ、どうしたの？ あんたにも似合わないことやったのね。大丈夫？ アネット」

エメリーヌは扉のガラス越しに「責め場」の床を見やった。体を二重に折ってうずくまる女囚は、顔は見えないが、アニエスだと分る。

「だって、稀なる兇暴性なのよ。言い渡しと同時に暴れ出して、傍聴席へ突進するんだもの。ホラ、恋しくも恨めしき殿御に向って。

すんでのところで取組み合いの巻よ。あの男だって恨み骨髓だらうしねえ。ベルと二人で大汗掻いちまったわ」

「へええ。ベルと一緒によかったこと。あの子、なんだかだと云われてるけど、そんなときには役に立つでしよ。すばしいし、ジュードーは初段だし。で、いくらだったの？ マリアは五年」

「相場ね。私の方のも五年よ。偽証罪の最高だわ。判事も怒ったのよね、馬鹿な女。もう騒がないって誓うもんだから、判事さんが手錠はずさせたのよ。なのに、陪審員に喚き立てるし、ちゃんと坐ってないし——」

「そうお。大変だったわね。でも、あの女の



「気持、かえって何だかこう、分って来るようじゃない？」

「エメリーヌはね、自分が担当しなかったから、そんなおセンチなこと云ってるのよ。私も、腹が立って腹が立って。ホラ、ね」

アネットが示す彼女の左手の甲は、法廷の柵に打ちつけでもしたのか、傷ついてはれていた。

「それであの始末なのね。でも、どれか一つ解いてやらなきゃ。どのくらい経つの？」

「まだ三十分よ。あの女は未決囚じゃなし、もともとから受刑者なんだもの、少々は痛い目に逢わせてやらなきゃ。思いやりも人によりけりだわ」

アニエスが息絶え絶えなのも当然で、胸部にはギッチリと革の搾衣、両手は背後で斜めに背負っての手錠、そして、あぐらの両足首を固縛したロープをさらに首にかけられ、深々と上体を折り曲げているのだ。

「でも、もうそろそろ——。首にロープかけたのはベルなのよ。ね、エメリーヌ。搾衣だけにして来てやってよ。私、そばへ行くと、なんだか——」

アネットもエメリーヌに劣らず心やさしい婦人看守だ。アネットは忽ち怒を和らげた。

「ホホホ。自己嫌悪なのね、アネット」

エメリーヌは立ち上って扉を押した。アニエスは息も絶え絶えに苦悶していた。

「——殺す気かい。殺せるもんなら殺せ」

見下ろすエメリーヌに、呟きが切れ切れに聞えた。つと手を延ばして、首のロープを解いてやる。笛のような声とともに、女囚は上体を起した。

「殺そうたって死ぬもんか。あの二人を呪って。呪い殺してからでなくちゃ——」

「二人って？ 一人はまあ分るわ。もう一人は誰のこと？」

女囚は血走った眸をあげてエメリーヌを見上げた。顔は、涙と涎れの垂れ流しという奴だ。女囚が答えてに窮したのも当然で、もう一人とは幻の女性なのだ。

「——ちきしょう。誰だっていいの、あの男とくつつく女よ」

女囚は齒がみして云い、搾衣の圧迫に喘いだ。エメリーヌは溜息をつき、黙って斜め手錠を解いてやった。こんな苦しみに呻吟しつつも復讐の呪いを誓う執念の凄まじさに、エメリーヌは更に吐息を洩らし、手錠を持ったまま見下ろすのだった。

革の搾衣が胸にきしきし、女囚はそろそろと

両腕を垂れ、よろめいた。あぐら縛りの上体を床に支えた。

「おや、あんたはエメリーヌね」

「呼び捨てにするのねッ。折角、解いてやったというのに——」

エメリーヌも気色ばむ。

「——すみません、エメリーヌさま——か」

「か——とは何よ。減らず口叩けるのは締め方がゆるいんだわ。少しは考えたらどう？」

「ハイ、ハイ——」

「かさね返事はいけないッ」

「ハイ。すみません——。でも、楽にしてくれたってお礼は云わないわ。ふん、よくやる手さ。誰かがひっぱたいといて、別口が現われて撫でるのよね。なんなら、元通りにしたら？ 死にゃしないから御心配なくね」

「お前は、どうしてそんなに——」

エメリーヌは嘆息しながら背後に回り、むごたらしい手首に後手錠をかけてやった。「どうして素直になれないのかしら？ そんなんじゃ、いつまで経ってもこんな物と縁が切れないことよ」

と、手錠をきつく締める。

「ふん。まじめに勤めりや、仮釈放のお慈悲があるってんだろ？ 罪を悔い改めて更生し



なさいっていうのね。お経みたい——」

「お黙りッ。そうよ。お前のためなのよ」

「立派な使命感ですこと。ああ、苦しい」

「苦しけりゃ、少しは考えなさいッ。悪いことしたんでしょ？他人を恨むことないわ」

「でも——口惜しいッ」

女囚は窄衣の革をきしませ、手錠を鳴らし、身を揉んだ。

「あたしだけが悪いんじゃないのよ。それなのに——」

「そんな歯ぎしりは何度も聞いて耳にタコが出来てるわ。いくら云っても無駄よ。ともかく、お前は罪人なんだからね」

「——悪いのはあたしで、あんたたちはみんな正しいのね。なによ、正義ヅラして」

エメリーヌ婦人看守もたまりかね、髪を掴んでしたたかにゆすぶり、ビンタ数発を喰わせた。アネットが怒ったのも無理はない。

「——ちくしょう」

「なんという口を利くのッ。ま、ここじゃこんなこと位だけど、ツーロンだったらどんなことになるか、よく知ってるだろ。本望を達しないうちにお佗仏うけ合いだわ」

「なかなか——。あたしゃ不死身だよ。あと二十年勤めりゃ文句ないだろさ。そんなときに

まだ生きてやがったら——いや、生きてて欲しいんだ。見てるがいいわ」

あるまじき言葉や口答えも、このくらい徹底すれば、むしろ爽快なほどだ。

「怒ったんだね？ 元通りにしていろったらさア。国中で寄ってたかって、裸一貫の女一人を苛めるがいいわ。革鞭でも何でもおくれよ。苦しめば苦しむほど、呪いは利くの」

エメリーヌは呆きれて詰所に戻った。

「どう？ 少しはこたえたようかしら。エメリーヌ」

「どうしてどうして。役者が変わっても駄目」

エメリーヌはアネットに肩をすくめた。ベルが戻って来てアネットを促がし、アニエスを引き摺って行った。

「案じてやることなんかないわ。エメリーヌったらおセンチもいいとこね」

主任が欠伸して云う。

「当分、懲罰房よ。当り前だわ。ところでエメリーヌ。すまないけど、二〇五号を連れ戻してくれない？ 事務所よ。総務課あたり」

二〇五号とはリリアンヌのことだ。

「独りですの？」

「いえ。えーと、そう、二二〇号と一緒にね」  
二二〇号はマドレーヌで、もう一週間ほど

で満期出獄の筈だ。貧しい元バス車掌のマドレーヌは、可哀想に八ヶ月を丸々勤めさせられて、未決を入れれば殆ど丸一年を鉄窓で暮したわけだ。しかし、主任ともなれば、念頭にあるのはリリアンヌのことだけらしい。

リリアンヌは娼婆に出れば、羽振りよき財閥の一族だ。彼女の下獄にはマスコミも同情を煽り立てているし、破廉恥罪ではないし、冷却期間をおけば、やがてまた社交界に復帰することだろう。だから、拘留所幹部が氣を使うのも当然で、独房にそっとしてやっている次第だったが、正義派の連中が面白くない顔をするので、ときどきは労役の真似事をさせている。

「へーえ。鎖つけてオフィスへ出したんですの？ まあ」

正義派に近いエメリーヌは痛快を押えた。「そうなのよ。ま、少しは刑罰のきびしさを示しといてやらなくちゃ。なんだかねえ、もう騒いでいるのよ、仮釈放だなんて」「早過ぎませんか？ まだ半分も済んでないですわ」

エメリーヌは肩をすくめて革バンドを腰に締め、手錠をもう一對、ポケットに納めた。総務課では、個人ロッカーの並ぶ一隅の床



に、リリアンヌとマドレーヌが脚折って坐っていた。そばのデスクに、下っ端の事務娘が坐って脚を組み、二人の女囚を監視がてら鼻を叩いている。

「やっと来たのね、バッジ組のひと」

「ええ。でも、私たちは忙しいのよ。紙切れとちがって生まの人間を取扱ってるんだものね」

エメリーヌの制服を仰いで、二人の女囚は身を固くした。

「おそれ入ったわ。ともかく早いとこ連れて行って頂戴。気が張って堪まらないわ。私はお道具を持ってないんだもの」

「すまなかったわね。でも、おとなしかったでしょ？ どんなことやらせたの？ お金の勘定かしら」

「冗談いわないで。その若い方は泥棒女なのよ」

聞いてマドレーヌが悲しがった。

「書類をそろえさせたり、綴じさせたりよ。」

子供でも出来るお仕事ばかり。でもさ、ジョセフィーヌや課長が居なくなつたもんで、みんなで相談して、囚人らしい仕事をさせてやったの。フッフ、私たちの靴を磨かせてやったわ」

「共同謀議ね」

「そうよ。だって、私たちにはさ、偉い人たちがあって関係ないもん。二〇五号がスターかなんかだったら別だけどねえ。そうでしょ？ さっき、やっと済んだとこよ」

帰り支度を整えた女性たちが、ロッカーの戸を閉めてハイヒールを鳴らし、コートの手ひるがえして去って行く。その姿を盗み見ながら、床に脚折る女囚二人は哀しげだった。

その二人の前にエメリーヌが立ったとき、年増娘がやって来て、バックスキンのハイヒールをリリアンヌの膝に投げた。

「綺麗にするどころか、汚しておくれだね」

艶消しがポイントのバックスキンの靴墨をつけられたのだから、年増娘が立腹するのも無理はない。豊かではない彼女にして見れば泣きたい気持でもあろう。

デスクの娘も口を添えて罵り叱り、女囚リリアンヌは涙をこぼして詫びた。腰の連鎖を床に鳴らせてマドレーヌが膝をにじり、靴磨き道具を取ってやった。

「ふん。元通りにはならないわね」

「すみません。あの——お名前を聞かせて下さいませ。いずれ、弁償させて頂きますわ」  
「なんだって!! 靴磨きも満足に出来ない癖

して、大きな顔をするんじゃないわよ。ホラ見るがいい。底に泥がついたままだよ」

「ねえ、バッジさん。撲つてもいい？」

「駄目。あなたたちが手をあげると、凌辱罪になることよ」

エメリーヌは女囚リリアンヌを庇ってやった。リリアンヌは泣きながら靴底を拭い、肩ふるわせて差し出す。

「気をおつけよ、ホントに。囚人らしく性根入れておやり。世の中は、お金だけじゃないんだ。分ったかいッ」

年増娘はこれ見よがしに靴下を直し、靴音高く去って行った。それを娘が呼び止める。

「ちょっと待ってよ。一緒に帰らない？」

「そりゃいいけど、あんたのお化粧は長いものねえ、フランシーヌ」

「もう済むんだってば」

フランシーヌはデスクに両肘ついて、唇の仕上げに取りかかった。

「さあ、戻るのよ。立って」

女囚二人はよろめいて立ち、腰の鎖を鳴らせて鼻を吸り、うなだれてエメリーヌに両手をそろえた。

マドレーヌが睫毛しばたたきつつ、手錠の光る両手を垂れた。可哀想だが、規則なのだ



から仕方がない。エメリーヌ婦人看守はポケットに手錠を探りつつ、こんどはリリアンヌの前に立つ。眺めて年増娘が咽喉で笑った。

「ごらんよ、フランシーヌ。両手そろえて待ってるわ、縛って下さいって。哀れなこと」「当り前じゃない？ 女囚は縛られて牢へ連れて帰られるのよ。不思議なことないわ」

フランシーヌはルージュの口金をパチンと閉じ、ガーゼの小片をハンドバッグに入れ、ふりむいて女囚を眺めた。

エメリーヌ婦人看守は、わななく両手首に手早く手錠をかけ、腕のあたりを軽く叩いてやった。まったく、思いやりのない娘達だ。

「さ、元気出して。お腹減ったでしょ？」

エメリーヌに曳かれて鉄格子へ戻る途中、リリアンヌは嗚咽した。

「辛抱しなさい。すぐにはずしてあげるわ」

「いえ、手錠じゃありませんの。縛られるのは我慢します。当り前ですもの。でも一身体検査だけはーあの検査だけは」

エメリーヌはそつと溜息をついた。無理ならぬこととは思うが規則は曲げられない。ことに、今日はオフィスからの帰りだ。ひとしおきびしく捜検しなければならぬのだ。

さて、エメリーヌとアネットは漸く勤務か

ら解放されて、二階の更衣室へと急いだ。

「私たちって、ほんとに働き者ね。もう、あらかた帰っちゃってるわ」

「勤勉な者は結局損ね。でも、こんな働き者の別嬪なのに、言い寄る男があんまりいないなんて。男ってメクラね」

二人は、今日もまた、何だかだと用があつて、定刻に退出できなかったのだ。

「そりゃそうと、今日入って来たジャリたちだけど——手古摺らせるわよ、きつと」

「そんなの？ なげかわしいこと」

「ともかく、体はもう一人前以上よ。それどころか、二人は妙な病氣を持ってるんですって。あーあ、近頃の若い者たら——」

「年はいくつなの？ アネット。ジャリもジャリだけど、私、明日のこと考えると気が重くなっちゃう」

エメリーヌは明日、夫殺しの女を引張って行く仕事がある。その女囚の子供たちが待つ家で実地検証があるのだ。

「休んじまったら？ おっと、そりゃ駄目だわ、私にお鉢が回って来ちゃう。あら、まだやらせてるわよ、エメリーヌ。こき使うわねえ」

アネットが窓外を見て云った。短かい冬の

日は暮れかけて、石炭置場のあたりの仄暗い獄庭に、ひる休みに見た男囚連中がまだ働いている。答を片手のムッシュウッだんひるが喫うパイプの火が、赤く光って見えた。

二人きりの更衣室で、エメリーヌとアネットは制服をドレスに着替え、いそいそと鏡に向った。化粧をちゃんとすれば、二人とも十人並み以上の女ぶりだ。

「まだ？ アネット」

エメリーヌは窓に寄り、

「ええ、もうちょっと待って」

とアネットが唇を仕上げる。

「明日のお天気はどうかしら？ 降りでもしたら、気が滅入っちゃうわ。いやねえ」

エメリーヌは窓外の夕空を仰いで呟く。窓の下には、本館から突き出て延びる一棟が見えた。獄庭を仕切る形になっていて、男囚区画と女囚区画の境界という恰好のその棟は、研修場やら会議室やら書類庫などが主だ。

「あらッ」

エメリーヌが声をあげた。

「妙なのが一人うろついてるわ、アネット。ちらと見えたんだけど、赤縞服のようよ」「まさか。よく見るのよ、おどかさないでね。まっげに口紅がついてるんじゃない？」



「たしかだわ、ホントよ。坊主頭だったわ」  
エメリーヌは真剣な表情で電話を取った。  
「出ないわ」

と、コートを腕からおく。

「定刻五分前には交換台は空になっちゃうのよ。気長に待つことね」

「ね、アネット。冗談じゃないのよ」

アネットもみこしをあげ、二人は顔を見合  
わせ、そろって窓外を覗き込んだ。

「ともかく、調べて見ない？ 二人いれば大  
丈夫よね」

「そうね、頼りない相棒。おっと、商売道具  
を忘れないで」

二人はハイヒールの音忍ばせて階下へ降り  
た。生憎と、誰一人通りかからない。

「現場はどの辺？」

「第一研修場と道場の境い目あたりね。呼子  
笛持ってる？」

アネットは両手ひろげて肩をすくめた。

「ちょっと待って」

エメリーヌは囁やいて立ち止まり、陰気な  
階段の下で眸を光らせた。薄暗い階段裏には  
書類の山が積んである。エメリーヌは、その  
階段裏へ回った。人の気配を感じたのだ。

堆高い書類の山の後ろを覗いて、彼女は仰

天してたじろいだ。両眼を光らせたクリクリ  
坊主がいたのだ。エメリーヌは叫びをあげ、  
男は身を翻えして飛び出した。矢庭に突き飛  
ばして逃げ出す。その男の行手にアネットが  
身構えた。男は上衣をパッと脱ぎ、アネット  
に投げつけ、横ッ飛びにすり抜けて駆け出し  
た。アネットが払い落した上衣は赤縞、もう  
間違いない脱走囚だ。下着をどうしたのか、  
男の上半身は裸体だった。革サンダルも履い  
ていない。

「待てッ」

と、エメリーヌが手錠を投げた。

夕暗の廊下に、彼女の投手錠は銀色に光っ  
て飛び、逃げる男囚の肩越しに落ちた。弧を  
描いて延びた捕縄は、更衣室からここまでの  
間に彼女が手早く結びつけておいたものだ。  
捕縄は男囚の首に辛ろうじてからみついた  
が、僅かによろめかせただけで、空しく床に  
音立てて落ちた。

追いつがったアネットの手が、赤縞股引の  
後ろ腰にかかった。股引の紐が前で切れ、ア  
ネットの指は革に触れて滑る。ずり落ちた股  
引に男囚は脚をもつらせた。

追いついたエメリーヌが利き腕を背にねじ  
る。しかし、両膝落とした男囚は死物狂いに

抵抗し、女囚の腕をねじあげるようなわけに  
は行かない。二人の婦人看守は、大汗かいた  
末、男の太い両手に後手錠を嵌めた。

「さあ、これでもう駄目よ。お立ちッ」

アネットが前に回り、男を見下ろしてきめ  
つけ、ベージュ色のドレスを繕ろう。エメリ  
ーヌも息を弾ませながら、男の背後で捕縄を  
短かく引き絞り、焦茶色スーツの身繕いを  
した。男囚は床に坐り込み、前後の女性二人  
を交互に見上げ、無念げに歯がみしている。

「あら、お前とは、おひるに逢ったわね？」

「そうね、えーと三九〇号だったわ」

エメリーヌも相槌を打ち、記憶力の良さを  
示した。男も思い出したのか、まじまじと眺  
め上げ、顔をしかめた。

「今日のお二人連れでやしたか。ドレスを召  
してお化粧なさるてえと、別人みてえにおな  
りだ」

男は坊主頭を振り立てて感じ入る。

「だけど、こんな別嬪に捕まってワッパかま  
されるたア、俺もヤキが回ったもんだ。トホ  
ホ。フェラールの野郎を笑えた義理じゃねえ  
やな、まったく」

男は口惜しがって、後手錠をひとしきり鳴  
らせ、裸の上半身と双腕を悶えた。



「——いい、いてて。こ、こりゃきつい——」

「そうよ。ジタバタおしでない。腕環バッチリで一巻の終りよ。いくらあがいたって無駄なの。お気の毒だけど、ホホホ」

「お立ちッ。どこから逃げたの？」

後ろ手を吊り上げられて、男は呻いた。

「ホラ、石炭置場からに決まってるじゃないの、エメリーヌ。やっと、タッタしたわね。」

あーら、ま。サポーター締められてる」

男囚の股引が足許にずり落ち、男は世にも情けなそうだ。喰い込む革サポーターの後ろ

腰に、鋼鉄の錠が冷たく光っていた。

「そうか。こぼしてたわね。そうと知ってりや、遠慮しないでタックルしてやるんだったわ。もう、よく拝見したから、ズボンをチャンとしてよ。胸と胫の毛が立派なもの、よく分ったことよ、ホホホ」

「そ、そんなことおっしゃったって——」

男囚は哀れっぽく足踏みした。

「できるったら。やるのよッ」

男は鼻を嚙り、凜然と命じるアネットの赤い唇を恨めしく見やり、のろのろと尻を床に

## 現在発売中／限定版グラビア写真集／在庫案内

女体緊縛グラフ集「豊満と清楚」

一部 一〇〇〇円（送共）略号「限二」

緊縛美女八十態「美しき縛しめ 第四集

一部 一〇〇〇円（送共）略号「美4」

凄惨「女性刑罰拷問持集」日本版

一部 一〇〇〇円（送共）略号「美5」

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」

一部 一〇〇〇円（送共）略号「美7」

二女緊縛「女斗緊縛競艶写真持集」

一部 一〇〇〇円（送共）略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇

一部 一〇〇〇円（送共）略号「美9」

緊縛写真集「責められる美女百態」

一部 一〇〇〇円（送共）略号「美10」

M写真集「女王様に飼育される日々」

一部 一〇五〇円（送共）略号「M特」

緊縛美態代表作品一二〇葉写真集

一部 一〇〇〇円（送共）略号「美11」

落とした。ままならぬ後ろ手で漸く股引をまさぐる。引張りあげようとして膝がつかえ、よろめいて悲鳴をあげ、指先から股引を放して両膝を落とした。そのおかしさに、二人の女性は笑い出す。逃走を計った囚人に対しては、一かけらの憫れみも不要だ。

笑いながらエメリーヌが背後から手助けしてやって引張りあげ、アネットが前に立って紐を結んでやった。紐が切れているので、アネットの指先はヒマがかかり、うつむく髪が胸に触れる。鼻先に立ち昇る匂いに、男は低く呻いた。

「結べたわ。あら、何を考えてんの？ 深刻そうねえ」

アネットは見上げて齒をこぼし、胸毛を手早くなでた。

「ところで、ズボンの下着を穿いてないのは分るけど——こんな分厚いのを締めてんだから」

と、股引の上から、革サポーターを軽く叩く。前袋を女性の手で押えられて、男囚は腰をもだえた。

「シャツは、どうしたの？ シャツは。え？」

「そ、それは——その——」

「お云いッ。破いて綱をこさえたのね。大抵



「そんなとこよ」

アネットは調子に乗って、男の乳首を両方とも同時にいじくった。逞ましい体がビクリとわななき、呻きが太く洩れ、双腕に力がこもって後手錠がガチツと張った。前袋がもう一度叩かれ、掌でやんわりと押えられ、軽くゆすぶれて、男は堪らず体を折る。

「か、かんべんしておくんなせえ。ああ」

「ま、それはあとで調べりゃいいじゃない？ シャツの綱は、ここにやないようよ」

革ロープを握るエメリーヌが口をはさむ。

「それよか、お前いったい、どうしようってつもりだったの？ 逃げ切れると思う？」

男囚は涙をこぼした。

「へえ——その、あっしは逃げるなんてこたアこれっぽっちも考えてねえんです。ただ、なんとかして一目でいいからマリアに逢いてえと思ったもんで——へえ」

エメリーヌとアネットは、男囚の肩越しに顔見合わせた。なるほど、この棟からは女監区画へ行けるわけだが、幾重もの関所を潜って忍び込めると思っているのだろうか。それにしても、考えればいじらしい男心だ。

「なるほどねえ。ほんとかしら？」

「ま、ともかく、逃走は逃走だわ」

「へえ。考えて見るてえと、無鉄砲なことをやったもんで。鎖を抜くときにゃ腰骨をすり減らしましたぜ」

男は嘆息して坊主頭を振った。

「スカートの旦那がた。パイプの旦那のここへショ引いて行って下せえ。ただその前に」と、いきなり床に脚を折る。

「——お、おねげえだ。一目だけ、一目だけでいい。マリアに逢わせて下せえまし。遠くから顔を見るだけでもいいんです。こ、このとおりだ。恩に着ますぜ。お、おねげえだ」その言葉と風情は哀れだが、法務事務官としては取り上げるわけには行かない。

「そうだわ。お前、一緒だった男はどうしたのッ。どこにいるの？」

「あら、そうだったわ。こら、立てッ」

二人の婦人看守は自分たちの迂闊さにあわてた。エメリーヌが革ロープを引張りあげ、男は悲鳴を洩らした。

男は悲鳴を洩らした。

「どこ？ 白状おしッ」

「へえ。い、いてえ。いてえなあ。そ、そんなにゆすぶらねえで下せえよ。うッ」

「どこ？ 云いなさいッ」

「云えばマリアに逢わせて下せ……う、う」

エメリーヌが手錠を更に縮めたのだ。

「マリアとかの件は駄目よッ。いくら泣いたって無駄。さ、白状しなさい。しないの？」アネットの手が頬に激しく鳴った。鎖仲間が行方を糾明するのは緊急事だ。エメリーヌがあたりを見回し、駆け出しそうにした。アネットの鉄拳が男のボディにめり込んだ。女だてらに荒ッばいが、最後の手段に訴えて、少々は痛めてやらねば吐かない男だ。

三発目がみずおちにめり込み、男囚は上体を折って苦吟した。

「こいつを泥吐かせた方が早いわよ」

「そうね」

と、エメリーヌも後手をねじる。

「——うッ。申します、申します。も、もうかんべんしておくんなせえ——ふうッ」

エメリーヌは腕をゆるめ、アネットも拳に

息をかけながら睨み据えた。

「ああ、見かけによらねえもんだ。なんと手

荒なことを——」

「お黙りッ。早くお云いッ。もう一発——」

「云いますよ。フェラールの野郎は塀を越えるつもりでさ、あっしとちがって、奴のスケは娑婆にいやがるんで。だけど、ノルマンディといや遠いやな。あっしのシャツもサンダルも、奴にくれてやったんでさ」



「そう。どこにいるの？　どこで別れたの」

アネットのビンタが鳴り、男囚は身をもがいた。痛いのも痛い、ドレスの女性二人に引っぱられて責められるのが情けないのだ。

「ご、ご案内いたしやす、へえ。フェラールの奴には済まねえが、こうなったら仕方がねえ。まだ段取りが済んでねえだろうなあ」

男囚は溜息を洩らし、二人の女性を恨めしげに見やり、先に立って歩き出した。

「ね、報らせた方が、よくなくて？」

「それには及ばないわよ、エメリーヌ。私たちだけで捕まえないこと？　スリルだわ」

「それもそうね。あら、ここから忍び込んだんだわ。鍵をかけ忘れてる。えらそうなこと云って威張ってるけど、保安課も駄目ねえ」

塀の内側の片隅、物置小屋の裏側へ回った二人は、そこに一人の男を見付けた。気の弱そうな赤縞服、その顔には見覚えがある。

下着を破いて結び合わせた綱を手に、おたおたとろたえ切っていた。

上半身裸体で引立てられて来た仲間の姿を見て、その男は虚脱したように坐り込んだ。

「おい、フェラール。諦めるんだなあ」

鎖仲間にいわれるまでもなく、フェラールは両手を前でそろえ、走り寄るアネットをふり仰ぐ。

り仰ぐ。

「ちえッ。やっぱりノロマだぜ。まだ鎖も抜いてやしねえ」

半裸の男は嘲けて唾を吐く。フェラールの腰には、相手のいない連鎖が垂れたままだった。

「うッ。寒うがすぜ、旦那」

「自分で脱いだんじゃないの。バカね。こらッ、じっとしてるのよッ」

エメリーヌは半裸を後手に引き絞り、アネットが手錠を取り出す。

「神妙なね。後ろへ回して」

「へえ——」

ガッキと後手錠を受けて、フェラールはホッと全身をゆるめた。

「まあ、番号布を千切ってるのね。立って」フェラール・ダンテスは腰を浮かせたが、そのまま再びへたり込み、アネットとエメリーヌを畏怖の眸で見上げた。

「あらま、腰が抜けたのね。ダラシないっただら。牢破りしようという悪党がねえ」

「——あの——お二人は婦人警官なんですか？」

「馬鹿野郎。こいつ、婦警にパクられやがったんだから無理もねえがよオ、まだウナされてやがら。しっかりしろい。今日、ひる飯前

にお逢いしたじゃねえか」

フェラールは腰鎖をジャラつかけて立ちあがり、高い塀を見上げて溜息を吐いた。地面には、半裸の男の革サンダルを先端に結んだシャツ製の綱が数米——。

「残念だったわね。でも、その恰好じゃ、すぐに捕まったわよ。ノルマンディどころか、セントラル駅までも無理ね、シャンとおし」

フェラールの腰に垂れる鎖が、半裸の男の首にもかけられた。さっき腰から折角抜いた状態のまま、輪になった鎖がむき出しの肩にジャラジャラ鳴った。

「ウッ、冷めてえ。なにも、こんな——」

「お黙リッ。鉄格子と鎖は冷たいもののなの」

「てへッ。情けねえ恰好だ。マリアの奴には見せたくねえザマだぜ。ねえ、スカートの旦那がた。今日のたたア、マリアには内緒に願いますよ。ああ、でも、逢いてえなあ——」

「お黙りしたら」

アネットの鉄拳がボディにめり込んだ。

「まだ、誰も気がついてないらしいわね」

「ああ、いてえ。スカートの別嬪さんのパンチにしちゃ、ずいぶんとこたえるなあ。フン縛られた男を撲るなんて——トホホ」

「こんなのは序の口よ。覚悟はいいわね？」



「そ、それなんで。ねえ、旦那がた。何とかお口添え願って穏便に済ましてもらえねえもんですかい？」

「まあ、なんと図々しい。アキれたもんね」

「でも、私たち、大手柄じゃない？」

「そうですとも。お二人ともクリスマスの休暇を三日ばかり余計に貰えますぜ。そこんとこに免じて、何とかお慈悲をかけてやって下せえな。寒いときの懲罰房は辛れえですぜ」

「バカね。自業自得よ。お行きッ」

二人の男はそれぞれに背を突き飛ばされ、よろめいて引立てられた。

「情けねえなあ、相棒よ」

半裸の男が鼻を吸る。フェラールも涙をこぼし、よろめきながらクク、クと泣いた。自分の所業の恐ろしさを漸く悟り初めて、その結果を思っただちひしがれたのだ。

「なんとかして下せえよ。まごまごしてるとえと半殺しだ。あっしは睨まれてるんでさ、どういふもんだか。男前のせいかも……」

「おふざけでないッ。お前は抵抗したじゃない？ そっちのは神妙に縛に就いたけど」

アネットは脚をあげて、半裸の男囚の尻を蹴った。ハイヒールの先がめり込み、男は大仰に飛びあがる。

「ほんの出来心で逃げ出したんだって？ い加減におし。罪人は誰でもそう云うわよ」

石炭置場の労役場でムッシュ、だんひるはやっと気付いた。彼はあわてて呼子笛をまさぐり、そして、夕暗の独庭を横切ってやって来る四人を認めた。

「ムッシュ、だんひる」の顔を見て見てよ、エメリーヌ」

「ホホホ。あら、自慢のパイプを落っこしてる」

「あの旦那には済まねえんだ、まったく」半裸が身を揉んだ。

「せめて一目でも逢ってたらなあ。思い残すこたねえんだが——」

「まだブツブツ云ってる。未練ねえ。男らしくしたらどう？ その胸毛に恥かしくはないの？ さ、ともかく、ひれ伏してお詫びするのよ。その方がお徳用だわ」

ムッシュ、だんひるは二人の男囚に、猛烈な往復ビンタをくれた。照れ隠しの笑いを浮べ、こんどはボディにパンチだ。フェラールが悲鳴をあげ、半裸が呻いた。

「いや、どうも有難う。お嬢さんたち」

「しっかりしてね。さ、たしかに引渡したわよ」

二人の女性は男囚の後手錠をはずし、背を突き飛ばし、手錠を片手に戸を腰に当て、意気揚々とポーズをとる。ちょっとばかりいい気分だ。他の赤縞男囚たちが盗み見て、複雑な表情をいましげに浮べた。

「あんまり囚人に当たり散らかさないでね」

「そうよ。ホラ、ひれ伏して謝まってるわ」半裸の男の坊主頭が蹴り飛ばされ、その腰に鎖がくびれ込んだ。再び後手錠が鳴る。

「すまないが、ワッパを一つ貸してくれよ」

「イヤよ。二つ持ってたきゃいけないことになってるでしょ？」

「ちえッ。そう威張るなよなあ。こら、この野郎。シナシナしてやがる癖に、飛んでもねえ野郎だ。立てッ」

フェラールは捕縄をひしひしと掛けられ、喰い込む縄目に涙を浮べた。

「この男は、そっちの威勢のいいのに誘われたのよ。いい？ ムッシュ、だんひる」

聞いて半裸が唸った。

「でもよオ、スカートの旦那。あっしは扉の外へ出ようと思っただけでねえんですぜ。その野郎はロープなんざこさえやがって」

「お黙りッ。告げ口は見つともないわよ」

「そうよ。見損なったわ。マリアとやらに云







体験告白

## マソ年代記

## 姫島痴人



その頃、私は満で五つであった。早熟だった私は、家にいた女中を幼な心にも、美しいと思っていた。毎日幼稚園へ出掛ける時に彼女が私の靴を穿かせて呉れたのだが、その度に私は逆に彼女の足許に跪づいて彼女の下駄を履かせて上げる場面を空想していた。

私のマソ的傾向は既にこの頃、芽生えていたわけなのだが、ひよわだった私は、たまに幼稚園で女の子にまで突き倒されたりしたことを憶えているが、その時は何の快感も憶えなかった。やはり大勢の中では面目なさが先

に立ったのかも知れない。或はその女の子の顔立ちが余りよくなかったのかも知れない。しかし、そのところは、今になっては、はっきりしない。

小学校一年になった。私の家には、その頃から私より二つ年上の英子という従姉いとこが同居していたが、彼女の友達の家へ時々遊びにきて、私を混えて三人でよくふざけ合った。

その友達の方の女の子が、いきなり私の後ろから組つき私の首に腕を巻き、抱くようにして仰向けに私をその場に倒した。色が白く

て目の大きい彼女は、その日から私にとって好きな人の一人になった。その後、日が経ってからも、彼女に押し倒された時の情景を思い浮かべては独り快感に浸ることが多かった。しかし、彼女は何故か、それきり遊びに来なかった。

四つ違いの兄が中学の受験勉強を始めて、家庭教師が来た頃だから、私が小学校二年の頃だったと思う。ある夏の日の夕方、家庭教師が帰るのを玄関へみんなが送りに出て、茶の間に英子と私と二人きりになった、ほんの



五分位の間、私は急に衝動的に彼女に馬乗りになって貰いたいという欲望を起した。

「ねえ、英ちゃん、僕とどちらが強いか試めに僕の上に馬乗りになってごらん。僕なんか、きつとすぐ跳ね返してみせるから」

畳の上に寝ころがって彼女を促した。お転婆な彼女は面白そうに、直ぐ私の言う通りに胸の上に跨った。私は快感を貪りながらも、みなが玄関から茶の間に戻ってくるのを心配して懸命の努力で彼女を下から揺さぶるようにして辛うじて押しつけた。

英子という女の子も瓜実顔で目元のパッチリした愛くるしい少女だった。恐らくその頃既に平常から女の子に馬乗りになれる場面を空想しては楽しんでいたのだろう。そして瞬間的に、この時その機会を見出したのに違いない。その頃読んだ三省堂発行の小学生文庫の『乃木大将』という本の序文に、大将の少年時代は全く弱々しく近所の同年の少女と喧嘩しても、いつも負けて馬乗りになられるのだった、と書いてあったが、これを読んで以来、私は女に馬乗りにされることを空想するようになったのではないかと思う。『乃木大将』のこの序文は、その後も屢々その部分だけ読み返すことがあった。

その頃、又私は英子と八やっつけっこVをして遊んだ。家族が割に多いので、家に誰もいなくなることは滅多にないことだったが、その日は皆出かけて英子と女中だけだった。

私と英子は学校から帰ってきてから一緒に遊んでいたが、私はこの機会をのがさず、私好みの遊びを實行しようと思ひ立った。

「英ちゃん、やっつけっこしようよ」

「どうするの？ やっつけっこって？」

そこは六畳と八畳とつづいた部屋で、互いに対角線の隅の一畳を自分の陣地として、二部屋の中央で組打ちを始め、相手を自分の陣地にひきずり込んで押さえつけた方が勝ちというのである。学校では全くおとなしくて意気地なしだった私は、そんな遊びをしたことも又見ていたこともないので、恐らくこれも私の英子に屈服するための遊びとして、自ら案出したものであったらしい。

英子は喜んで相手になって呉れた。勝負はきまっている。然し私は懸命に抵抗するふりをした。英子に捻じ伏せられ襟首をつかまれ或は足を持って引きずられ、とうとう彼女の陣地内に運ばれ、そこで馬乗りになり敷かれて、「さ、降参か」ときつく言われ、私は、「何んでも言うことをきくから、許してくれ

降参だ」と叫ぶ。彼女は、「手について謝るか」と私の願ってもないお仕置を条件に持ち出してきた。

「ああ、くたびれたわ」と言いながら、傲然として椅子に腰掛ける彼女の前に、私は額を畳にすりつけて土下座を繰り返えし、或は又彼女の股の下をくぐらせられるのだった。そういうえば、韓信の股ぐりの話を学校で聞いて以来、私はいつも女の股間をくぐらされる空想に駆られたものだった。

こういうお仕置も予め私が提案した条件だったに違いない。又この頃よくやった遊びで八手拭取りの天下取り遊びVというのを思ひ出すが、英子が勝って王様になると、私はわざと負けて手拭を取る方へ回り、王様になった英子の前へ行った。この遊びは王様の処へ行つて手拭取りの勝負をする時は、丁寧に辞儀をするのがきまりだった。五、六人で遊んでいて、みなに見られている前で英子の前へ行つて手をついて土下座するように、お辞儀するのが、私の目的だったのは言うまでもない。

私が小学校五年の頃、すでに女学校へ入っていた英子は、何んといつても以前程、私と一緒にこんな遊びをすることはなくなつてし



まった。たまに冗談に「相撲しようか」というと、相手になって呉れる位だった。勿論、そんな時も間違いなく私は寄り倒され、投げ倒されては彼女に笑われるのだった。

或る晩のこと、未だその頃は私達は同じ部屋に寝起きしていたのだが、初夏の頃で而かも湯上りで二人共暑くて眠むれずに立ち話をしていた。他の者も未だ寝室に来ていなかった。私は両手の人差し指をチョンチョンぶつけて、「これ喧嘩してるんだよ」と言いながら「さあ、抑さえつけちゃった。どっちが英ちゃん、どっちが僕だと思う？」と質問すると、英子は下になった方を指さして「そりゃこっちが私でしょう」と笑いながら答える。「ううん、上の方が英ちゃんさ」と、こんなことを三遍も繰り返えしながら、私は脚を英子の両脚の間へ入れて挟まれるようにしたり英子の片脚をかかえて、私の胸にからませてみたりする中に、英子も興にのって来たような表情をする。

私がいきなり組みつく。英子も直ちに応戦する。暫く揉み合う間に、とうとう英子が私を膝下に組み伏せ馬乗りになって首を締めてくる。「どうだ、降参するか」と、私の耳にささやく。湯上りののぼせ上った気持に、更

に胸の上に跨がる彼女の肉体の重圧の快感に興奮しながら、私は又彼女に打ち負かされる喜びを貪りつつ降参するのだった。

英子はいつも紺のズロースを穿いていた。例の初めての八馬乗りV以来、彼女と取っ組みあいをした時など、スカートのまくれたりなどして真白な太股とズロースの紺色が、チラリチラリと眼に入って、私にはたまらない刺激的な印象を与えるのだった。又、学校で彼女の体操時間に見た紺のズロースの運動服姿も私には忘れられなかった。それからというものは、私は何よりも紺のズロースに魅力を感じるようになった。

不思議なことに白には何の感興もない。桃色は普通の人には最も刺激的であるらしいが私には何か田舎臭さを覚える。黒は陰気臭くて品がない。ズロースはやはり濃紺に限る。女性の真白な太股とズロースの濃紺の対照、太股に喰い込むズロースのゴム……

私が中学に入った頃は、英子は別の部屋に起居していたし、もう彼女もお転婆の年頃も過ぎてしまったのか、以前のような八馬乗り屈辱する遊びVなど、する機会を見出せなくなってしまう。試みに彼女をその八遊びVに誘うような言葉や挙動を私が見せても、彼

女に背示したような反応を見せず、私を落胆させるばかりだった。私はただ空想の世界で彼女に組み敷かれ、馬乗りになられ、首を締められ、土下座して降参する光景を胸に描いては独り楽しみ、或は彼女の部屋の外にソツと忍び寄り、誰も見ていないのを見計って唐紙越しに土下座してみたりするだけだった。

その頃、私は平凡社の大百科辞典を持っていた、初めて「変態性欲」という言葉を知り「マソヒズム」という言葉も覚えた。百科辞典の説明内容は、私にとって十分刺激的であり、又余りにも私の性格と同一なので驚いた程だった。百科辞典も私にとっては、変態草紙のようになってしまったのだ。

私は「変態性欲」や「マソヒズム」の項を繰り返し読み、読んで楽しみ、又、「女相撲」「女山賊(狂言)」などの項を見つけては新しい喜びを味った。中でも、その「マソヒズム」の項で谷崎潤一郎の小説のことを知り、家の書棚にあった明治大正文学全集(春陽堂版)で「少年」「幫間」「刺青」「恋を知る頃」「麒麟」「秘密」「悪魔」等の作品を貪り読み、その中のマソヒズムとフェチズムが、私の生来の傾向と余りにも一致するのでそれが又私を強く刺戟した。



紺のズロース。私は英子がすっかり、私の  
へ遊び／＼から遠去かってしまったあとの不満  
をかこっていた頃だったが、ある日、私が夜  
遅くまで試験勉強していた折、雨の降った日  
なので、ふと隣の室を見ると洗濯物の干台に  
英子の紺のズロースがかかっていた。私は思  
わず生唾をのみ込んだ。口の中がベトベトし  
てくる程の興奮だった。もうみんな寝静まっ  
て誰に見られる心配もなかった。

早速、私は、その紺のズロースを手にとっ  
た。少し未だ湿っていたが、快い肌ざわり、  
洗濯後とはいえ、彼女の体臭がほのかに匂っ  
ていた。私は頭からスッポリかぶってみた。  
又、嗅ぎ、そして股の処をしゃぶる。ズロー  
スの股の処で自分の首を挟み締め上げる。感  
動に手をふるわせながら、私はズボンも申又  
も脱ぎ捨てて彼女のズロースを穿く。久方振  
りに彼女に接し得た歓び、胴を、股をゴムが  
ぎゅっと締める快感、興奮にわななきながら  
一睡もせぬままに、その夜は更けていった。

ミックスすると、又異様な刺激を感じるのだ  
った。その頃は、もう姉達は嫁ぎ、兄達は地  
方の高等学校、大学へ入学していて家人は少  
くなっていた。それに留守勝ちで女中だけの  
ことが週に二日はあった。この機会をのがさ  
ず、私はこの新しい独り遊びに熱中していっ  
た。殊に夜間になれば、私の遊びを妨げるも  
のは何にもなかった。

英子が私から遠去ってしまった以来、私は  
女性の紺のズロースのスポーツ姿に僅かに慰  
めを求めている。女学校の校庭の体操を見え  
る処、或は女子のバレー大会、陸上競技等を  
見に行つては、彼女達の活潑な姿を見ながら  
「あのズロースの下に組み敷かれてみたい」  
などと、せめてもの想像にかられてゆくのだ  
った。それで私は自分が紺のズロースを穿き  
グッと股をひろげてみたり、座布団をまるめ  
て、その上に跨ったりして活潑な恰好をして  
は、鏡に映して満足を求めるのだった。

例によって、家に英子と女中だけなのを見  
計って、紺のズロースをソツと取り出し、そ  
れを穿いてシャツとズロースだけの姿で庭へ  
飛び出した。庭の鉄棒にぶらさがって、尻上  
り、足掛け上り等を試みた。努めて自分の腰  
の辺り、紺のズロースを眺めるようにしなが  
ら――。

その頃は英子はまだ女学校の上級で、部屋  
に籠り勝ちだったが、私はひよっとすると、  
何かの用で、ひょっこり部屋を出てくるかも  
知れない、そして窓からこの私の姿を見るか  
も知れない、と、そう思うと、何か余計強烈  
に刺激を覚えるのだった。見られたら大変だ  
見られるかも知れない、見られてみたい、そ  
ういう矛盾したスリルが快感を愈々昂じさせ  
るのだった。足掛け上りで鉄棒の上上がり、  
更に腰を捻じって鉄棒に跨ってみた。紺のズ  
ロースを眺める。グーッと下腹部の内側に何  
か奔流するようなものを感じた。余りの快美  
感に鉄棒に跨っていらなくなり、いそいで  
降りた。降りるか降りないかの中に、私の体  
がグーッと伸びきって、自然に爪先立ちにな  
り、虚空を掴むような感じから、次の瞬間、  
私はその場にしゃがみ込んでしまった。

その後、私のこの独り遊びの楽しさとマソ  
ヒズムの空想は、昼も夜も激しくなるばかり  
であった。英子の紺のズロースを穿いたまま  
谷崎潤一郎の小説を読み返していた。

その頃、ニュース映画館で「世界レスリン  
グオンパレード」Vという短篇を映していたの  
を見つけて、ひそかな期待を持って入った処



案に違わず、女性のレスリングも一場面あった。私はそれを四、五日つづけて見に行っては暗い館内の一隅で独り満足するのだった。

この頃から、私は毎夜、床の中へ入ると、紺のズロースを穿いた英子に捻じ伏せられ、組み敷かれ馬乗りに跨がられる場面を空想しその空想を夢に見られることを願いながら、眠むりに落ちるのだった。

中学五年の頃、どういうわけか、英子の下着類の抽出しの中から、紺のズロースがなくなり白いものばかりになっていた。私は白では殆ど魅力を感じなかった。試みに白いズロースを穿いてみたのだが、やはり余り快感を覚えぬのだった。それ以後というものは何年間も、私はよく夢の中で例の英子の抽出しの中に思いがけず、何日振り何月振り何年振りかで紺のズロースを見つけて、一瞬、強い興奮に駆られながら忽ち眼覚めて夢と知り、烈しい落胆に突き落されることが度々あった。

幼い時からの英子との「屈服の遊び」から彼女が遠去ってしまった以来、私と英子の唯一つのつながりであった紺のズロースも、こうして、とうとう私の手から失われてしまった。英子が田舎にある実家へ帰っていったのは、それから間もなくのことであった。

(その後、一時、私は同学年の男子と同性愛に陥り半年近く熱中したもの、今の私には思い出しても余り興味もなく、書くべき場面にも乏しいので割愛する。現在の私は同性には全く関心を持たない)

英子も去り、紺のズロースも失われ、こうなっては私は今は新聞やスポーツ誌の女子運動選手の紺のズロース姿を眺めたり、切り抜いたりして満足する他に欲望を満たす途がなくなってしまった。勿論現実の女性と接触を持ちたくても、私には未だ思い切って踏み切る術も知らず、商売女は恐ろしかった。

当時は紺のズロースの運動服姿で練り歩く程で、女学生の軍事訓練、明治神宮大会の女学生の柔道体操等は私を随分刺激もし満足させて呉れたものだった。又その頃は逆に映画や雑誌というものは、戦後のような官能的な場面や記事はなく、ストリップなど思いもよらぬものではあったが、それでも仏映画「禁男の家」「背信」「白鳥の死」「格子なき牢獄」米画「砂塵」独画「早春」邦画「愛の世界(高峰秀子主演)」等で女性同志の激しい取っ組み合いの場面を見つけては、何回も見に行ったものだった。

しかし、女性対男性の争い、而かも女性の

勝に終る場面は全く見られはしなかった。それでも短編文化映画「女性の柔道」で女性が男を投げ倒すシーンを漸く見つけ、僅かにマソ的欲望を満足したこともあったが、ただ一つ昭和十七年春頃封切られたと記憶する仏画「恋愛交叉点」では、はっきりしたストーリーは忘れたが、要するに家出娘に扮するダニエルダリュウが、ある大きな家にまぎれ込みその家の主人に手練手管を用いて、とうとう泊り込み、主人の留守中にお転婆の大暴れをして、その家の執事格の男を困らせ、挙句の果ては彼女が何かの拍子に、その男を押し倒して殆ど無抵抗の忠実な男が、彼女に組み敷かれ馬乗りになられて、無茶苦茶にいじめつけられるシーンが大分長い時間に亘って映されたことがあった。

この映画は終戦後、外国映画再開の折も、真先に上映され、私はこの映画を恐らく十回以上も見に行ったであろう。しかし、この時代は戦争中でもあり、私は自分のマソ的性欲と一方これを抑えんとする心理的苦悩との相剋に大変悩まされたものだった。だが、私はやがてある境地に達した。いかにその気持を抑えんと苦しみ悩んだとて、同じこと、繰り返すだけであることは見え透いているので



あり、無駄な心理的葛藤はさけて、楽しむべきは楽しむに如かずと観じたものだ。

私の性格が世間一般より異常であるという意識により、この苦悩相剋も又余計烈しかったともいえるが、今や私は先天的に与えられたこの変態性欲という普通の人の味わえぬ快楽を堂々と貪るべく決心したのであった。

終戦後、私は初めて八痴人の愛Vを読むことができた。男性マソとしてお恥しいながらそれまでは谷崎潤一郎の初期の作品の中で、最高の力作と聞き知りながら、家にあった春陽堂の全集には、収録されておらず、且つ戦時中の書籍入手難で手に入れることが出来ぬままに、これまで一度も読む機会に恵まれなかったのだった。この作品程私を魅了したものは未だ嘗てなかった。繰り返えし繰り返えし読み耽り、この作品の主人公譲治が、ヒロインナオミに完全に屈服させられ、彼女の足下に四つ這いになって、「せめて貴女のお馬にしてくれ」と哀訴し彼女がその背中にどっかりと跨って傲然と「さ、どうだ、これでいいのか」と言い放つ処までくると、私はもう最高のエクスタシーに浸るのだった。

もう一つ、私のマソ的性格から妙なことはこれまで私は女性に組み敷かれ馬乗りになら

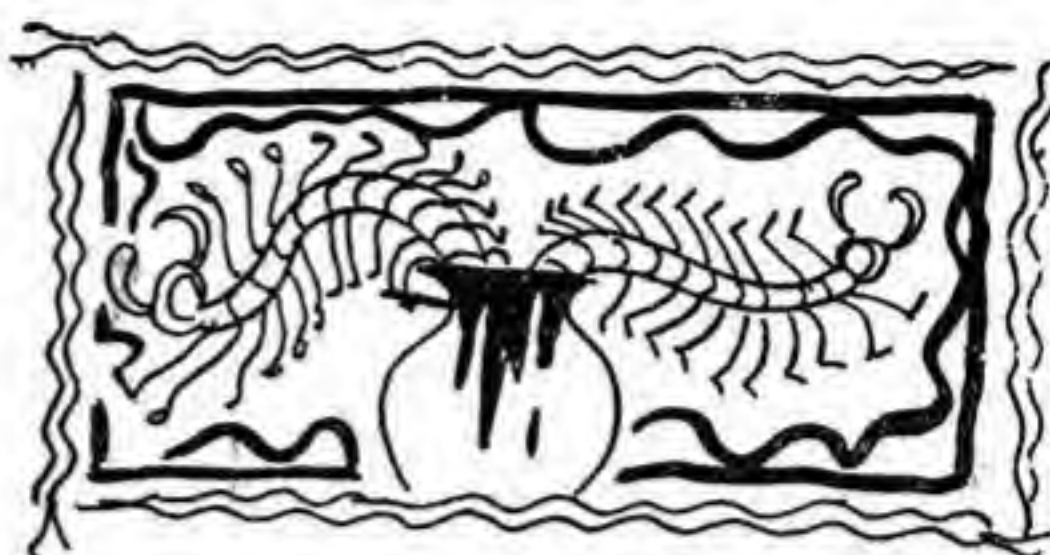
れることは何よりの念願であったが、女性の馬になって這い回るという構想は、これまでに考えついたことがなかった。それが、この「痴人の愛」を読んで以来、私の最上のマソ的願望は女性の馬になって、鞭打たれつつ這い回ることにあるようになった。考えて見ると、これ以前に有楽座で「サーカス団のロツパ」というロツパ喜劇で、三益愛子が渡辺篤を、高杉妙子がサトーロクロを、それぞれ四つ這いにさせて乗って歩く場面を見たことも記憶に甦ってきたのだが妙なことに、その時からこの「痴人の愛」まで余り馬になることには魅力を感じなかった。

戦後は映画、ストリップ、雑誌等にも男性マソを満足させるような場面、記事も多少見られるようになった。勿論私はそういうものを漁り貪り歩いた。ライフ誌の表紙に女性が男の上に肩車に跨っているもの、余り変化がなく谷崎の初期文学より面白くなかったが、「マゾッホ情艶小説集」「毛皮を着たヴィーナス」等。然し映画やストリップには所謂看板に偽りありで、映画「十代の性典」「続十代の性典」のように、南田洋子扮する女学生が男の学生を馬乗りに組み敷いて腕を組んで威張ってドッカと跨っているシーン、又若尾

文子扮する女学生が、乗馬の稽古だといって男（根上淳）を四つ這いにさせて手拭の手綱をしぼって乗り回しているシーン。又「魚河岸の石松」で島崎雪子が男達と喧嘩して片っ端しから投げ飛ばしている処、又、日野明子が男を尻の下に敷いたまま焼酎をおおっているシーン等、このようなスチール写真に惹かれて入ってみては、そんな場面など一齣もなくて落胆の余り、スチール写真を引きはがしてやりたいと思ひながら出てきたことも度々あった。

殊にストリップの世界では、女が男の上に跨るなんて茶飯事のように私等には思え、看板のスチールに、そんなシーンを出すのなら実際のショーの中でも、当然その通り演じてくれるものとはばかり期待して入るのに、やはり看板にだまされた結果に終わったことの方が多かった。それでも浅草のストリップで二回程、女が男を四つ這いにさせて背中に跨ってハイドウハイドウと歩かせる乗馬シーンを満喫させて貰ったこともあったし、女レスリングの上演など、女ばかりでなく男をも相手にして中々見事な試合を演じ、私達マソ人種を満足させたものだった。





## 幕末切腹史

中 康 弘 通

### 一、高山彦九郎正之

徳川八代將軍吉宗が、江戸幕府中興の英君と云われたのもしばらくで、次第に衰微の徴を見せた。十一代家齊の名老中松平定信が世を去ってからは、水野忠邦の天保改革を以てしても、怨嗟の声を高めるばかり、世は次第に騒然となった。

そのころに先立って、海国兵談の著者林子

平、山陵志の著者蒲生君平と共に、高山彦九郎の名は「寛政の三奇人」の一人に数えられている。

彦九郎は上野の郷士。十八才のとき京にのぼり、中山大納言の知遇を得た。尊王の志が篤く、公卿の間に出入りして国事を憂えた。

北方にロシア人の侵入を聞き、水戸の学者藤田幽谷らと交わり、蝦夷松前にも渡って実情を探った。一旦は京都へ帰ったが、また西国をめぐり、久留米に至って友人宅で滞在中

に白刃してしまったのである。

京は三条の大橋に端座して御所を拝し、その衰微を嘆いたとか、緑毛の亀を天覧に供し感泣したとかいう逸話は余りにも有名だが、その最期もまた、憂国の余りとは云え、凄然きわまりないものであった。

寛政五年六月二十一日未明、彦九郎は森嘉膳宅で主じと対談するうち、嘉膳がちよっと席をはずした間に腹を切った。

急のことで、肩をも脱がず、朱に染まった刃を手にしたまま端然と坐っている。驚く嘉膳に向って彦九郎は、

「日ごろ忠と思ひ義と思つたことも、すべて不忠不義と解り申した。はじめて智慧のなきに気付いたゆえ、天も我を責めて、こうも狂わしたもののよ。天下の人人に告げて下され、この体たらくを……」

そう云いつつ容を崩さない。

彦九郎が手当てを拒むので嘉膳も時刻を過ぎたが、九つごろになって、医師万年寿仙、橋本道記を招き、療治を依頼した。

しかし医師らが来てみると、彦九郎は五寸ばかりも腹をかき切っており、その切り口から傷つき破れた腸が溢れ出している。あまつさえ脈も絶え絶えである。治療おぼつかなし



と断わらざるを得ない状態である。

嘉膳の強つての頼みで、二人は古賀路庵、江口恭哲をも招き、立会いの結果は同じ診立<sup>みた</sup>である。もっとも、難病奇病でない、腹を切った者にそう変った診立てがありそうはずもない。さすが気丈の彦九郎も、その宵に至って気力も衰え、倒れ伏したまま死を待つ状態となった。

薬など飲ませたがとうとう、羽二十八日朝八時ごろになって絶命したという。当年四十七才。

林子平が兄の林嘉膳宅で死んだのが前年、仙台と久留米の違いはあるが、同じ嘉膳という人の家で病死したのは奇縁と云えようか。それにしても、破れた腸が溢れ出すほど深く腹を切っているながら、一昼夜も生きていたのだから、さすがは志士と云われるほどの彦九郎らしい最期と云える。

## 二、有村兄弟の母

雄々しくも君に仕ふる武士<sup>もののふ</sup>の

母てふものはあわれなりけり

安政元年十一月、薩摩の人、有村蓮寿尼の作である。蓮寿尼は薩藩士有村俊齊、同じく

雄助兼武、同じく治左衛門兼清の母である。

当時江戸にあった勤王の志士兼清に宛てた書信に、この歌が記されている。

手紙は兼清の無事を祝したあと

江戸表は何かとむずかしい世の中となるようですが、何ンにせよ大事に当っては一步も引かぬとのお言葉、嬉しく存じます。

と記したあとで、この歌を書きつけている。

時の大老井伊直弼は、近ごろ再認識されて広大の氣宇と高邁な識見を以て違勅開港に踏み切ったと評されている。しかし、安政の大獄で多数有為の志士を失ったのは、たしかに相当の理由はあったにしても、その後の国歩に少なからぬ悪影響を与えたものと思う。ましてや当時にあつては勤王志士たちの憤激は大変なものであった。破局は来た。

万延元年三月三日早朝、水戸浪士を主体とする一団は、桃の節句の祝いに登城する直弼を桜田門に待ち受けて襲った。

折から降り積もる雪を蹴散らした十八人の浪士は、柄袋でおおった刀を抜きまどう井伊家の家臣を散乱させて、左右からそれぞれ一直線に直弼の駕めがけて迫った。

こうして乱闘のうちに浪士福田重蔵が、深

手にもめげず、一の大刀を直弼に付ける。続いて海後磯磯之介、佐野竹之介が駕ごしに刺す。その間に兼清は、駕の扉を引きむしるように開けた。引きずり出された直弼は、もう虫の息である。兼清は一刀で刎ねた直弼の首を刀の切先に貫ぬいて、叫んだ。

さて、目的を達した一同は、自訴する予定であつたが、重傷のまま落命するもあれば、また刺し違えるもある。兼清も、首をかついで日比谷辺りを歩く内、背後から切りつけられて深手を負った。一つ橋近くまで来て路上に坐り、直弼の首を前に腹を押し寛ろげた。逆手に執った刃で臍の上を切ったが、さすがに力が入らぬ。やっと四寸ばかりを横に割いた。右へ一寸ほど切り上げたところで力が尽きた。享年二十三才。

兄の兼武は、別働隊として事の成るのを待っていたが、成功を知り、首領金子孫次郎らと次の行動に移るべく、上洛した。しかし四日市で縛につき、薩摩へ移送された。

蓮寿尼は、

「士たるものは、下民を斬っても切腹して責を負うもの。ましてや天下の大老を殺害してそのままに相すむはずもなし、藩のため君侯のため、どうするが道か、知らぬはずは無か



ろう」

と兼武に屠腹をすすめた。兼武また母の命を受けて、従容と腹を割いた。時に三月二十四日。享年二十八才。

もう二十余年の昔、「有村兄弟の母」と題するBKのラジオドラマがあった。登場人物は兼武とその母、妹の三人である。

ある朝、身を潔めて幽囚の身が解けたかと思ふ兼武の前に、妹が腹切刀を運んで来る。

そして驚いた兼武と母との一問一答――

ムザムザと詰腹を切りたくない、という兼武に、母は、若し幕吏に囲まれたら何うするかと論ず。そのときは力の限り戦って男らしく立腹切るまでのことと、兼武は潔きよく云い切った。

しかし母は、急ぎ腹、万一切り損じては末代までの恥辱よと、君侯のための切腹をすすめる。

妹の忍び泣きを背景に、緊迫した会話は今も耳朶にあるようだ。昭和十七年の秋ごろだったかと思う。

こうした背景を考慮に入れて先の歌を読み返すと、志士の母の嘆きが、いかに深いかを察することが出来よう。

### 三、四天王寺の立ち腹

高橋多一郎愛諸は、天保の初め水戸中納言齊昭の侍衛に任ぜられ、歩士目付から奥右筆まで進んだ。齊昭が幽囚の身となると書を呈してその苦衷を慰めた。そのため、時の家老から忌まれて禁錮されたが、齊昭の幽閉が解けてからは、矢倉奉行、寺社郡奉行を経て奥右筆頭取ともなった。もとより勤王の士である。桜田門の変に際して、多一郎、莊左衛門の父子は、別働隊として、事の成就を待たず木曾路を経て大阪に向った。

しかし彼らが大阪に着いたときは、幕吏の追求きびしく、三月二十日未明、彼らの旅宿を囲んだ。父子は囲みを衝いて逃げたが、四天王寺境内に至り、逃れる能わずと見て取った。やむなく走り込んだ茶店で腹一文字にかき切った父子は、みずから布で傷口を巻き、血刀提げて捕手に仔細を述べようとした。

しかし捕手は恐れて近付かない。父子はそのまま寺侍小川欣司兵衛俊直の宅に至ると、「我ら水戸の浪士にて、桜田のことにかかわり、運尽きてここに進退きわまり申した。武士が最期の場所、しばしお貸し給わりたい」

俊直は驚いたが、

「武士は相身互い、いざ尋常にご最期を遂げられたい」

と奥の間に通した。

多一郎は俊直に腰の一刀を差出し、

「是はわが祖先小松大和守が、甲斐の入道武田信玄より軍功の賞に賜わり、子孫代代秘蔵の品。われら最期の後は、故郷へお返し下さるか、さもなくば長くお寺の庫にお納め下されよ、われらが今生の望み是に過ぐるなし」と述べたのち、筆硯を乞うて辞世を記し終ると、腹を寛ろげ傷口を巻きしめた布を解いた。おもむろに多一郎は腹十文字に切り下げて果てた。享年四十七才。

莊左衛門諸徳もまた、父の最期を見届け、その血で辞世を認めた上、同じく腹の布を解いて自刃しようとする。俊直が、  
「父君は是非もないが、君はまだ若い。もう少し世情を見ては如何？」  
とすすめたが、諸徳は、

「お言葉かたじけのう存じますが、父の遺訓もございますれば……」

固辞して、やはり腹十文字にかき切った。時にわずか十九才。

文章を能くし、惜しむべき好青年であった。



昔、と云っても昭和の初めと思うが、「四天王寺の切腹」と題する、映画があったと思う。この父子を描いたものであったろう。

#### 四、長州の国老たち

幕末の怒濤のような世情転変の中で、尊王佐幕の抗争のため、藩内、血で血を洗う悲劇を起した例は大小となくある。しかし長州のように、国老たちが藩論変転の都度自裁を余儀なくされているのは、大藩だけに目に立つものがある。

たとえば長井雅楽は、公武合体を唱えて失敗し、朝廷に不都合ありとの廉で、藩主毛利敬親(忠正公)のもとに断罪案が提出された。文久二年八八十五日のことである。

十一月十五日に至って切腹との裁断下り、藩主より拝領の名「雅楽」も召上げられて、長井右近に返ったのである。たまたま忠正公の生母逝去のことあり、翌年まで執行は延期された。

右近も大勢を察し、親戚の福原又四郎を招いて、  
「お上から割腹を申し付けられるやに存ぜられる。ついでには立派に腰を切って死なねばならぬ。介錯は貴様に頼むが、決して人手は借らず、一人で立派に死ぬから、そのつもりでいて貰いたい」  
そう申し付けた。又四郎は当時二十才を超えたばかりの青年で、右近の依頼を欣然と受けた。

文久三年二月六日、右近が水色がかった白装束を身につけ、白羽二重の座蒲団に坐ると検使国司信濃以下席について、いよいよ切腹の刻限になった。

白木の三方から短刀を執った右近は、そのまま弓八幡という謡曲を謡った。屋外まで聞えるほど朗朗と謡ったあと、静かに腹を寛ろげ、スーッと一文字に切った。決して浅くはない、したたかに深く切ったので、血が白い袴にザーツと流れた。

右脇で引き抜いた刀を逆手に持ち直し、咽喉へ当てて刎ね切ったが、血が溢れるばかりで絶息しない。又四郎が手を添えてもう一度咽喉へ突込もうとするが、右近は左手を振ってみせる。人手は借らぬ心意気であろうが、又四郎は無理に手を添えて、頸の骨も切れよとばかり深く突込ませた。すると右近は、みずから左手で咽喉笛を刎ね切って絶命した。

このとき検使に当った国司信濃が、翌元治元年には幕府に謝罪の切腹をしている。つまり幕府の長州征伐と四ヶ国連合艦隊の下関砲撃で、進退きわまった長州藩では、三家老の切腹を以って幕府と講和したのである。

十一月二日、益田右衛門介は徳山の総持院で切腹した。当日右衛門介は、白無垢の衣服に浅黄の袴を着け、畳二三枚重ねた上に、白羽二重の座蒲団を敷いて坐った。

また双肌ぬいで帯を下へ引き下げ、白木の三方から短刀を執って押しいただいた。白紙で三度び刀身を拭ぐい、その紙で切先五分ほど残して刀身を巻いた。

彼は腹を見ごと一文字に切ったのち、紙を払って逆手に持ち替えた短刀で、咽喉を三度まで突刺したとき、益田与一郎が介錯した。

国司信濃も澄泉寺で切腹した。まず腹を切り、逆手に持った短刀で、右から咽喉へ突込むと、左手で刎ね切って俯伏したとき、国司助次郎が介錯した。

福原越俊も同じ日、岩国で切腹した。

#### 五、土佐勤王党の人人

文久二年四月八日夜、土佐藩参政で公武合



体派の吉田元吉（東洋と号す）は、下城の途で斬られた。藩論のまにまに国老たちを屠腹せしめた長州藩の、一応は法を楯に取ったやり方と違って、土佐における尊王佐幕の抗争は、いきなり血で彩られた。

「いごっそう」と叫んで人を斬る、という土佐の士風に由来するものであろうか。

殊に勤王党は主として長曾我部氏の遺臣たる輜輳や郷士たち、公武合体派や佐幕派は土佐転封以前から山内家臣たる上士であったから、身分関係も加えて、対立は激しかった。

元吉暗殺の命を下したのは武市半平太、端山と号し、少壮ながら勤王党首領である。十月、京洛守護に土佐藩が参じたとき、半平太は三条木屋町に宿を取った。そこに岡田以蔵（土佐）、田中新兵衛（薩摩）らが集まって来た。そして彼らは、佐幕派の人人を暗殺して行った。

翌三年八月、会津と薩摩は手を結び、京洛から長州を追放した。隠居していた山内容堂も、三条実美公の要望で公武合体に乗り出した。容堂は吉田東洋を重用した人であった。

それより先、平井収二郎、弘瀬年定、間崎哲也が、四月に、藩政改革を企て、青蓮院宮の令旨を秘かに請うた責めで投獄された。六

月、罪科決定して何れも切腹。

収二郎は八日、刑場に辞世を吟じたのち、双肌ぬいで短刀を逆手に執り、我とわが腹に突き立てた。そのとき介錯の平田亮吉が背後から刺し貫ぬいたが、収二郎は振り返って、「まだまだ」

と叫んだ。再度刺されて絶命した。

同じ日哲馬は、好物の酒を飲んで切腹したと云われている。

年定は、平常、屠腹の法について、

「まず切先を浅く左の下腹に突き立て、キリと右の腹へ一文字に引き廻し、そこで斜めに刎ねあげて、一息に左乳下を刺せば、腸を破らず、出血も少く死ねるのだ」

と語っていたが、その言のとおり見ごとに腹を割いた。

半平太も己が身辺を危ぶんだが、すでに運命の齒車は逆転をはじめていた。九月、遂に半平太も投獄されていた。きびしい取調べが続いた。

足かけ三年、最後に取調べに当たったのは後藤象二郎、吉田東洋門下の逸材であった。かつて半平太が、人斬り以蔵こと岡田以蔵に命じて暗殺させようとしたが、失敗して以蔵は脱藩した、という因縁の相手である。

象二郎の背後には容堂の眼が、半平太を睨みすえているように思えた。もとより象二郎も、師東洋の仇とばかり、取調べは酷烈を極めた。半平太は健康を害し、断罪に対して抗弁すら出来なかった。

慶応元年五月十一日夜、半平太は切腹の場に呼び入れられた。南今町の広庭北隅に、板を敷き新しい藁が延べられている。

縁者小笠原忠五郎と島村寿太郎が両脇に坐り、正面からは大監察後藤象二郎以下が見つめているところへ、半平太は着席した。

宣告が象二郎から伝えられて、「ありがたくお受けつかまつる」

と答えた半平太は、白木の四方から腹切刀を執り、心しずかに切先を左下腹部に突立てた。ぐっと右腹へ引き廻したと見る間に、

「えい、えい、えいッ」

三度び裂帛の気合いが半平太の唇を割ってほとばしった。

下から上へ、横に三文字の割腹を遂げた瞬間、鮮血は検使の袴に散りしぶいた。

半平太が血に染まった刃を四方に戻し、両手を前についたとき、忠五郎と寿太郎が左右から脇腹めがけて刺し透した。

享年三十七才。



昭和の初め「月形半平太」が、映画説明の名調子に乗ったのは、行友季風氏原作の小説

によるものであったが、この主人公は創作で長州の月形洗蔵、土佐の武市半平太、この二

限定版写真集 美しき縛しめ △第五集▽

△日本版▽  
女性刑罰拷問特集

頒価一〇〇〇円(送共)

略号〔美5〕

モデル……美木乃々子……山原清子……

待望のグラビヤ印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る

印刷紙焼付による分譲品として美木乃々子嬢出演の「日本拷問刑罰集」並に山原清子嬢出演の「入墨女賊拷問刑罰集」の二集をキヤビネ判にて企画分譲しましたところ熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、いち早く多数のお申込みを頂き迫力ある「刑罰写真集」Vとして好評を賜りました。その頃よりアート紙に対するグラビヤ印刷の「女性拷問刑罰写真集」の刊行を強く要望されました。ここにアルバム「美しき縛しめ」限定版写真集の一卷として、前記印刷紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミリカメラにて撮影した写真（従って内容も全然違います）を「日本版」「西洋版」と二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子嬢による「日本版」を八美しき縛しめV（第五集）として刊行いたしました。純白の特アート紙に對する極めて鮮明なグラビヤ印刷による迫力のある写真集是非お残め下さい。七十四葉の「女性拷問」写真がぎっしりと全紙面を埋めてファンの方々の御一見を得ております。売切れになりますと絶対に入手できません。どうか未見の方は今すぐお申込み願います。

△アルバム（写真集）の内容▽

(刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集)

○木馬責にあつて苦悶する女囚八葉  
 木乃々子○白州の上で非人の勵りものにな  
 る女囚八葉連統四葉(美木乃々子)○牢内にて  
 折檻を受ける女囚海老縛りと答打ち。八  
 連統四葉(美木乃々子)○非人に縛り上げ  
 られる哀れな女囚八葉連統十二葉(美木乃々  
 子)○海老責めに放置され全身蒼白となつた  
 女囚八葉(美木乃々子)○非人に不浄繩  
 を掛けられいたぶられる女囚八葉(美木  
 乃々子)○荒蕪の上にて荒縄の緊縛に泣き悶  
 える女囚八葉連統八葉(美木乃々子)○算  
 責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する  
 女囚八葉(美木乃々子)○荒縄で乳房も  
 くびれるまで縛られた女囚八葉三葉(美木  
 乃々子)○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚  
 四葉(美木乃々子)○算盤責めと石抱きの  
 拷問八葉(美木乃々子)○囚衣を剥がさ  
 れ竹のささらで打たれる女囚八葉(美木  
 乃々子)○刺青を晒して木馬責にあう女囚  
 三葉(山原清子)○海老縛りでムチ打ちに  
 喘ぐ女囚八葉(山原清子)○海老責に苦  
 悶する女囚八葉(山原清子)○竹の棒に  
 て折檻される女囚八葉(山原清子)○全  
 裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚  
 葉(山原清子)○礫合に括られた人墨姐御  
 八葉(山原清子)○足首を上にして逆さ  
 吊りにされた女囚八葉(山原清子)  
 以上合計七十四葉

## 六、岩亀楼の喜遊

人の名を取り合わせて、月形半平太なる勤王浪士が創造されたのである。月形半平太も、洛北の地で幕吏に囲まれ、斬り死に寸前に我とわが腹かき切つて、壮烈悲痛な最期を遂げることになっているが、是も武市半平太の最期を写したものと云えようか。

開国で紅毛碧眼の異人が、来り住むようになった横浜港崎に、岩亀楼という遊廓があった。品川の岩槻屋の分店で、楼主は佐藤佐吉と云った。ここに喜遊は抱えられていた。

喜遊は、もと神戸柳原に住んでいた蘭法の外科医、箕作周庵の娘喜佐である。母にこそ早く死に別れたが、女芸一ととおりをたしなみ、柳原小町とした名高い喜佐が、十八才という花の盛りで、嫖客に白珠の肌を委ねるようになったのは、何故であらうか。

周庵の友人の紹介で訪ねて来た、長州脱藩の志士、久原晏女正が遠因である。彼は有村治左衛門の知遇を得たが、有村の説得で井伊大老襲撃には加わらなかったものの、彼を匿まったことから、周庵は桜田門の変以後きびしくなった志士取締りの網にかかった。



志士を匿まったばかりか、キリシタンとの密告もあって、周庵は医業を禁じ、江戸より追放の刑を受けた。そのころ品川にいた佐吉は、品川の長屋に、貧窮の父娘を知り、新遊廓開設を機に、異人の席に出さぬという約束で、喜佐を買い入れた。

皮肉なことに、今は失意と重病に苦しむ周庵の生活と治療のために、喜佐も悲しい決心をしたのである。

文久二年正月、彼女は喜遊の名で出た。たちまち喜遊の嬌名は市中に高く、追々と外人の耳にも入るようになった。しかし異人には接しない約束だから、豪商政商と云っても日本人しか相手にしない。そこを、亜米一という商館の、鉄砲火薬輸入主任アボットというのが、幕府の外国方の役人に、喜遊を抱かせると迫る。

もちろん佐吉は役人に云われても首をタテには振らない。元来、日本館と異人館に棲を二分して、外人の席には日本館の女は出ないことになっている。その日本館のピカ一だから、喜遊は異人館へやるはずがない。

そこで、アボットと佐吉の板ばさみになった役人は、奉行所へ話をつけて、同心から佐吉を口説かせた。今度は佐吉が、喜遊と奉行

所との板ばさみ。

「わしは腹を切らねばならぬ」

喜遊に暗い顔を見せた。喜遊は、もう鬼籍に入っているとは云え、父の貧と病いを一時でも凌がせてくれた恩人として、佐吉に腹を切らすわけには行かない。

「お顔の立つようにいたしますわ」

色よい返事をした。

佐吉をはじめ、役人連中は愁眉を開き、アボットは有頂天で、サア早くわがものに、と矢の催促。それに対して喜遊は十月十日と日を限った。文久三年の秋である。

さてその夜、アボットは岩亀楼に豪遊の宴を張る。そして刻限も移り、いよいよ喜遊を迎えに立った女が、彼女の部屋を覗くなり、悲鳴を挙げた。

「た、た、大変、喜遊さんが……」

「どうした？」

ハッとして佐吉が棒立ちになった。

「咽喉を切って……」

震える足を踏みしめて入った喜遊の部屋、香煙にまじって、血の匂いは、哀れ薄命の美女が守り刀に伏したためである。

抱き起してみれば、女ながら腹一文字にかき切って、咽喉まで断って、悲愴な最期であ

る。机上に遺された遺書には、筆跡も清く哀しく、

はかない黄金というものであるまに、この世に苦界の絶ゆることなし。この金、遊女の身を切る刃にて候らえば、その刃の苦界を離れ、弥陀の利剣に帰し参らせそろ。

まことの道を急ぎ候まま、わが無念の最期、今宵の客人に見せ下され、賤しき浮かれ女にさえ、日の本の心は侍りと、お知らせ給わりとう、

露をだに　いとう倭の　女郎花

ふるあめりかに　袖はぬらさじ

箕作喜佐女

惜しや芳紀二十の名花は、桐の一と葉よりさわやかに、散って天下の秋を深うしたのであった。

喜遊の自刃は、攘夷の思想を父から受け、異人にだけは肌ゆるさじと決心したものである。また同時に、ヒューズケンを斬殺し京へ逃れた愛人久原安女正が、八月天誅組に加わり、武運拙なく討死を遂げたからであったろうか。才子佳人、ついに世を短かく終えた憾みは、永久に幕末哀史の一コマとして、伝えられて行くであろう。





「拝見したところ、特に悪いところはないようです。後でお薬を作らせますが、もし、それでも良くなければ少し検査する必要があるですね。その前に、あちらで浣腸しましょう」

国電東北線O駅で私鉄D線に乗り換え、二つ目のT公園駅を降りて、そのあたりの町名と同じY診療所を訪ね、もの心ついて始めて浣腸された時の思い出です。

今から五年前のことです。十九で横浜の短大に入学した年で、姉の家に遊びに行っていたのですが、行く二、三日前から続いていた頭痛がますますひどくなり、お薬をいただいても、うつらうつらするだけで止まらず、食欲もなくなって、思い余った末、姉により

## 浣腸の思い出

力丸 康子

無理やり近くのY診療所に連れてゆかれたのです。

たしか日曜日の夜だったと思います。この診療所は二階が病室になっており、二人乃至三人の医師が勤務しているそうですが、夜は大学から若い先生が交替で当直にいらっしゃるとかで、日曜の夜でも必ず先生がいらっしゃるといふことでした。五日間もお通じがないのに気づいたのは、先生がたずねられる迄自分でも知りませんでした。やがて

「用意が出来ましたから、診察室の方へ来て下さい」

と三十位の看護婦さんが迎えにきて、先ず目に入ったのは、赤っぽい太い管のついたガラスの容器でした。浣腸の知識も経験もありませんでした。本能的にこわくなり思わず

義姉にしがみつきました。

「だめだめ、やんなくちゃね」

と看護婦さんは中々厳しく、仕方なく私はベッドの上に横になりました。義姉は気を利かせて先に外で待っていると云って出て行きました。この時は壁の方を向いて、左側を下にした姿勢で膝を曲げた時、お尻がまくられ「口を開いて、お腹の力を抜くのよ」

という声をうわの空で聞いているうちに挿入が行われ注入が始まりました。ひんやり冷たいレザーのベッドと、いろんな薬品の棚のことなど、この時のことは今でも鮮やかに思い出すことが出来ます。

いざ始まって見ますと、浣腸は手慣れた看護婦さんの手にかかる、そんなに気持ち悪いものではありませんでした。ところで途中で生憎、電話が受付にかかってきて看護婦さんが呼ばれました。そして注入の途中で、先刻の先生が入ってこられ、イルリガートルを受け取られ

「動いちゃいけませんよ、もうすぐですから楽にしてらっしゃい」

とやさしくいわれ、更に深く管が挿入されたようでした。多量の排出のあった後、逃げるようにして、お薬を受け取って帰りました



が、気分がすっきりして苦しみが一ぺんに去ってしまい、もとの元気な自分を取り戻すことが出来ました。大変お恥しいことですが、この時をきっかけに、浣腸が秘かな私の楽しみになってしまったのです。

夜、床について、この時のことを思い出すと仲々寝つかれないことがありました。時々いろんな婦人雑誌の附録などで浣腸の記事を読むことで心を満していましたが、自分で薬局へ行って器具を買ってくるなど思いも寄りませんでした。又、姉の家について、あの診療所に連れて行ってもらおうかと思いましたが、恥かしがり屋の私には、もし同じ先生が出て来られたら、何と言おうと思うと、とても実行に移せるものではありませんでした。

## 二

二度目の機会は、意外に早くめぐって参りました。それは大学を出て、ある商事会社にお勤めして健康保険を使えるようになってからでした。ある日ふと、土曜の午後、暇をもてあまして家へ帰る二つ手前の駅で降りて、ぶらついているうちに、小児科内科と書いてある小さな医院が目にとまりました。

この時、何か、思いつきのように保険証を

使ってみようという気になったのです。狭いのですが清潔な待合室には誰もいなくて、すぐ診察室に通され、若い女医の先生が（小児科を主にしているせいか、とてもやさしい方でした）診て下さいました。そしてガラスの浣腸器で処置していただいたのです。この時は始め注射かと思いましたが、うつぶせで、お腹に枕を当てた姿勢でした。

女医の先生は、とてもやさしく丁寧に御自分も同じだということをおっしゃって、生活上の注意までして下さい、ただどうしても駄目の時だけはいつでもいらっしゃいね、とおっしゃいました。その後、二、三度行ったことがありますが、浣腸されたことはなく、坐薬を渡されただけでした。待合室に待っている人が沢山いたせいかも知れません。

## 三

三度目の体験はすばらしい思い出です。それは父が転勤になり、今のアパートに一人で暮すようになってからです。今でも自分で浣腸をするという気持は全くありません。やはり浣腸は人に、出来れば異性のお医者さまにしていただかなくてはと思います。

夕方、近所のN内科の先生にアパートのおばさんを通して往診をお願いしたのです。意

識的にそうしたのではなく、アパートのおばさんが心配して下さって往診ということになったのです。そして浣腸をしていただいたしまいました。自分のお室で、お医者さまに浣腸をしていただくなんて、後で考えても全く夢のようでした。

こんなことが重なって浣腸の味を覚えてしまった私は、浣腸をせがんで方々の医院や病院をさまようようになってしまいました。失敗のことを思い出しますと顔がほてりますが実際に浣腸をしてもらうということは、そんなに簡単ではありません。会社の医務室の保健婦さんや先生では、まず駄目でしょう。

大病院の外来も人でいっぱい、それに医学生の好奇心に充ちた目に囲まれ診察されるなんて考えただけでも気が遠くなります。

大きな病院は夏でも冷房が入っていたりムードとしては最高ですが、患者さんが多く、やはりお医者さんにコネクションがないと軽い病気ではていねいに診て下さらないようです。それに何かというと、ろくに診て下さらないのに、すぐ検査、検査です。繁華街の診療所では保険を取り扱っていないところもあるようなので、途方もないお金を請求されることもあります。その代り、大抵の患者の要求を



素直に満たしてくれるようです。そして取り扱いには鄭重を極めます。一方、患者の一番ごったがえす街の医院や病院では、沢山の患者を一度にさばく必要と保険診療ということもあってか（浣腸は注射に比べものにならない位、安いらしいです）まず不可能で、そういう話をもっていても

「そんなにしたければ、自分でイチジクを買ってやりなさい」

と大声で言われ、ほうほうのていで逃げ帰るのが関の山です。ムードを期待してゆくのには、「必要がない」「薬でよい」「自分でやって下さい」とか「変った人だなあ」という目つきで見られた時のことを想像してみ下さい。受付で「どんな具合？」ってたずねられる時もあることがあります。大きい病院の急患室（夜間）も結局あまり期待出来ないのに反し、下町の界限では患者のせいもあってか、ざっくばらんに「浣腸して下さい」といって通じることもあり、スリルを楽しむことが出来ます。

しかし場末の夜の診療所は危険で、腹痛を訴えると、あやふやな手つきのインターンに「下ばきをとって下さい」と、言われたりすることがあります。小児科を一番先に書いて

あるような医院では、私達が行っても前に書きましたように、「通じがない？では、浣腸しましょう」と割合スムーズにゆくようで、これは子供が浣腸される機会の多いことを物語っています。でも、子供連れの方が待合室にいらっしゃる時、大人が一人で入ってゆくのは気おくれがします。気おくれといいますと、待合室で呼ばれる時と処置が終わって、或は処置室へ行く廊下で待っている人に見られるのも恥しいものです。

他人のお見舞に行った時感ずることは、入院すると割とよく浣腸が行われるようです。これは結局、すぐその場で処置出来るからで外来などでは殊に女性となると終るまで随分時間がかかること、カーテンで仕切ったりする準備のいることなど面倒なので病院の外来での浣腸が余りやられないのだと思います。

#### 四

羞恥心を快く刺戟し、排出後の快適さ、まして下着を下げられる時や顔を赤くして断ったり、浣腸をなぞにかけて訴える時のスリルなど、浣腸は私にとって最高の楽しみです。

保険証さえあれば全国どこでも使えるのですから、地方旅行では欠かしたことがありません。女性の方で私と同じひそかな楽しみを

味わいたい方には是非、患者さんの少い時間を見計って診療所に出かけられるよう、おすすめしたいと思います。私達若い女性には、病院以外本当に安心して浣腸を施してもらえるところなどある筈もないのですから。

往診によって自分のお家で浣腸されるということはムードとしては最高の部類に属すると思います。病院ですと、あとで看護婦さんを寄こされる先生もあります。看護婦さんは事務的にするので私の心を満たしてくれません。意地悪く立て膝の姿勢で処置する方もありますし嫌いです。往診の時は、大抵先生お一人ですから、どうしても男の先生御自身でなさることになるのです。

私の只今願っておりますことは、注腸検査や直腸鏡検査です。それに七月号にありました女子大生のように診察していただき、一回だけ導尿の経験をしてみたいものだと思っております。私のささやかな体験をとりとめもなく書き綴って、まことにお羞しい次第です。男の方には何の参考にはならなかったかと思いますが、同好の女性の方に役立つことがあれば幸せに存じます。終りに二年前から拝見しておりますK誌の御発展を祈ります。



# 緊縛映画あれこれ

春 風 春 太 郎

## 【まえがき】

最近の「奇ク」には緊縛映画の紹介や、感想文が余り多く載っていないので、一沫の寂しさがします。

ほんの僅か、辻村隆先生や東山映史氏がチヨッピリ書いておられるだけー。

読んでばかりおられないので、久々に書いて見ました。団鬼六先生の鬼六談義（十一月号）は読者の大勢の人達が思っている意見を述べられている様で嬉しく読んだ次第です。私は学がなく、文も思う様にかけない一人ですが、なんとか一つ秀筆を馳せて、見たま

まを書いてみようと思います。

○

最近の映画はテレビ攻勢にあおられて、一般の劇映画を観る人達が少なくなりました。ピンク映画は大分緊縛映画にこってきた様ですが、大会社の方も結構素晴らしい責め場面がある事を読者の方にお知らせして置きましょう。

奇クの「花と蛇」の作者、団鬼六先生の様なお方が映画のシナリオを書いておられるので、私は心の中で喜んでいゝんです。日活映画カラー「俺にさわると危いぞ」原作、都築

道夫、では松原智恵子のスチュワーデスが、悪者にさらわれて地下の倉庫の様な所でシュミーズ一枚で両手を縛られて吊り下げられています。悪人共に責められてシュミーズをはぎとられ、ブラジャー（白）とパンティ姿にされて、身体一面と顔に白い塗料をぬられる素晴らしい責め場面がありました。

白のブラジャー、白のパンティの半裸にされて、両手を縛られた姿は何んとも言えない魅力でした。カラーが実に美しい！シュミーズをはぎとるところなど、心憎い程のうまい演出の仕方である。松原智恵子の裸体姿の緊縛場面は珍らしく特筆すべきところでしょう。内容は子供だましでしたが、奇クファンなら誰もがとびつきたくなる様な素晴らしいコマでした。ピンク映画とは違ったお色気が漂っていました事を第一番目にお知らせして置きます。この緊縛場面をカメラが長い事よく撮してくれたし、若々しい松原智恵子の裸体姿はほんとに珍らしい。

東映カラー、原作 林不忘、監督 五社英雄「丹下左膳、飛燕居合斬り」タイトルに腰元が両手を縛られて、矢がすりの着物をはぎとられ、弓折れで責めたてるシーンが出てきます。その上にタイトルの字が出る変った趣向





白映プロ作品  
「情炎の私刑」より 八車新子

の迫力のある責め場面で、フジテレビジョン監督、五社英雄氏の大胆な演出で私は素晴らしいアイデアと思った。腰元の絶叫とうめき声

と弓折れの音がすさまじい。ピンク映画にはとうてい出せないと思いました。「絶倫」「赤いしごき」「裸女山脈」「毛」「花と蛇」「私は見られてる」決して悪くありませんが、ピンク映画のよさは又違ったアイデアが面白く責め場面のお色気が取得と言えましょう。タイトルの字が邪魔になるくらいの見応えのある責め場面でした。淡路恵子も縛られるシーンが一寸ありました。

東宝カラー「大冒険」団令子が洋服の上から縛られ猿轡をはめられて誘拐される場面がありました。短いシーンでしたが、これも見逃せない。ラスト近くで銃殺刑にされて後手に縛られるシーンがありました。縄目がはっきりしないので、一向に面白くありません。

同じく東宝で脚本坪島孝、監督山本嘉次郎「狸の王様」団令子、草笛光子、でギャング団に襲われて、猿轡をはめられて、両足を縛られて、胸も縛られ、押入れの中に閉じこめられるシーンがありました。団令子の赤い洋服、草笛光子の着物の上から縛られ、大きな猿轡姿がとても素敵だった。和服姿で草笛光子の現代

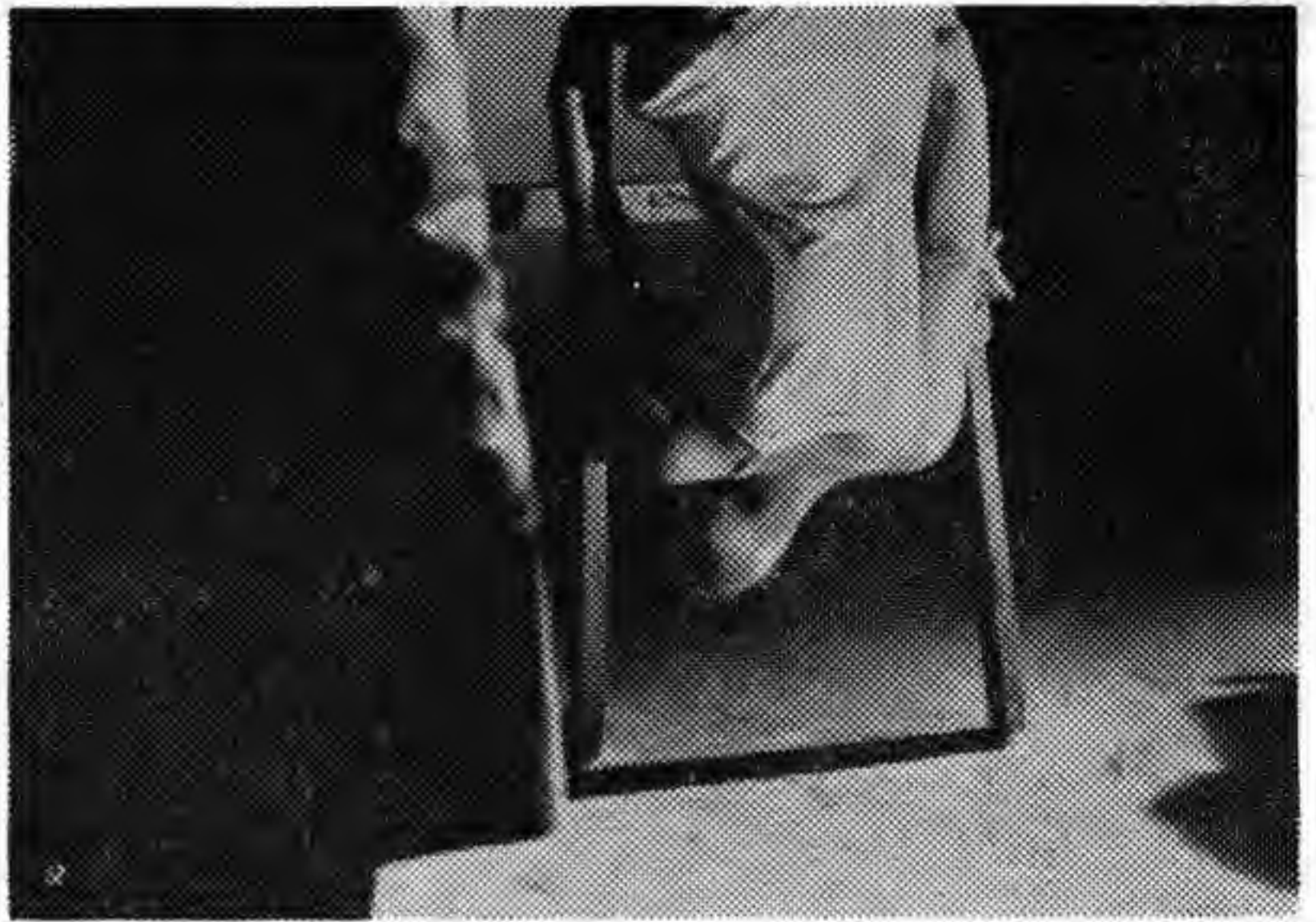
劇で縛られる姿をよく写してくれたので、カメラマンに感謝したい。松竹でチャンバラ時代の緊縛場面、伝七捕物帖で縛られた彼女とは違ったお色気がホンノリにおって、読者の方も気がつくと思いますが、私は見直した次第。東宝カラーは実にきれいです。

緊縛場面には、もってこいの色彩感覚が出てるので、白の猿轡や模様入の手拭の猿轡姿は天下一品かな。狸の王様の縛り場面、和服好みの縛りの好きな人達には喜ばれそうな場面でした。帯もいいのをしめていたし、あくどい縛り方でなかったし、スカッとした感じの緊縛場面でした。これは未封切作品で東宝作品「殺人狂時代」に団令子が縛られて、責められる場面がある事を附記して置きましょう。

近々封切されますので、ご参考までに——日活映画カラー「あなたの命」原作川内康範（女性セブン連載）踊り子（浜川智子）が悪者にさらわれて、柱に縛られてしまします。乳房の上と下に二つのいましめと、足の所に縛られ姿が長くカメラが前と横からよく撮してくれました、思いがけない収獲でした。

大映カラー「大魔神怒る」脚本吉田哲郎、監督三隅研二、藤村志保がラスト近くに捕え





白映プロ作品

「情炎の私刑」より 八車新子

られて磔にされて火あぶりにされる素晴らしい責め場面がありました。引き立てられてきて白の着物姿で後手をきつく縛られる姿がは

っきりわかります。磔にされる乙女の横には柱に立ったまま縛られてる女性の姿が二人程まざっていました。火がつけられて、炎が上がり磔姿で白装束姿の藤村志保の縛られ姿がとても素晴らしいの一語につきる。帯の色がとてもきれいで白装束の上に引き立っていました。最近の大映カラーがよくなってきたのと、色彩感覚が優れてきた点、特殊撮影も堂に入ったものです。火あぶりにされるシーン、後手にこずかれて引き立てられてくるシーン、よくカメラが捉えて、ラストシーンをもり立てて長く最近にない緊縛映画の秀逸とつけて置きましょう。

東映カラー大忍術映画「ワタリ」原作、白土三平、監督船床定男、女忍者（本間千代子）が悪者の忍者に足を縛られてお城の瓦屋根の軒下に逆吊りにされてしまっています。本間千代子のあどけない可愛らしい忍者姿も御愛嬌、ほんの一カット、なかなか子供向映画なのに、大人が見ても楽しくなる映画でした。

大映（白黒）作品、脚本寿々喜多呂九平、監督田中徳三「雄呂血」昔の映画を再映画化（八千草薫）の武家娘を縛って駕籠に乗せ

て描くするシーン！これはほんの僅かな縛りシーンで期待していただけに残念無念。昔の映画化というので楽しみにしていましただけに――

松竹「人肌観音」原作小島政二郎、挿絵志村立美、主婦之友連載。長襦袢姿で柱に縛られてる素敵な描写が詳しく原作に書いておられました。髪は乱れ柱に立ったまま縛られて、その姿をみながら酒を飲んでる所が挿絵にきれいに描かれていました。後に松竹で映画化されましたが、原作の描写をカットしてしまいましたのでホントに残念でした。坂東好太郎・伏見信子主演でした。昭和十一年頃の作品と思いました。同じくその頃好評の読物としてキング連載「乳房祭」小島政二郎、中一弥挿絵、勤王の武家娘が火薬の秘密のありかを白状せぬかと、これ又髪をふり乱して、牢屋の前の柱に縛られて、ローソクで乳房を責められる場面が原作に詳しく書かれていました。牢屋に捕えられた父親の目の前で着物の前をはだけられ、処女のはずかしさを描いてありました。

その頃の中一弥画伯の絵は現代の画き方と違って丁寧に縛り場面を画いていました。私は映画化になるのを期待していましたが、内



容が内容だけに今の時代と違って、着物の前をはだけて乳房をローソクで責められる場面はとうてい出せないと思いましたが、時代劇

白映プロ作品

「情炎の私刑」より 八車新子



全盛時代だっただけに、日の目もみずにお流れになった事は、かえすがえすも残念に思いました。せめて牢屋の前で責められる武家娘の物語を縛られるだけでもいいからと思っていました。

報知新聞連載「隠密縁起」前後篇、大都映画、映画化、原作野村胡堂、挿絵中一弥、阿部九州男、大乘寺八郎、水川八重子、東竜子主演。原作では女間者が捕えられて、責め場面があった様ですが映画化ではそれをカットして上映したのには原作を無視していると思いました。

雑誌名を忘れましたが、角田喜久雄原作、岩田専太郎画「黒潮鬼」前後篇大都映画化に時代劇の責め描写の上手な角田喜久雄氏の作品だけに、映画をみて、これもカットされていたので実に口惜しかったものです。

日活多摩川作品、監督島耕二、杉狂児(二役)轟夕起子(二役)主演「電撃二重奏」この映画程全篇にわたって縛られている映画は珍しい。現代劇、時代劇を織りまぜての全員二役で一寸趣向が面白い。内容は現代劇ですが、昔の人はこうだったんですよと話してる内に、時代劇

に物語が一変して、轟夕起子のお姫様が山賊に襲われて猿轡をされて縛られ、駕籠で連れ去られるシーン。城中の悪侍に誘拐されるシーン。この映画程何度もくり返して縛られたり、猿轡をはめられたり、緊縛映画としては申し分のなかった作品。若かりし轟夕起子のお姫様の豪華な衣装とチャミィングな顔が懐かしい。私は今迄の作品の中では特に印象に残っています。

最後にピンク映画に女優が責められ縛られている作品を御紹介して置きましょう。

「情欲の洞窟」「悪のもだえ」「女犯の掟」「黒白黒」「情事の履歴書」「制服の女豹」「情炎の私刑」「変態」「白日夢」「艶説四谷怪談」「異常者」「日本拷問刑罰史」「絶倫」「赤しごき」「裸女山脈」「毛」「拷問」「花と蛇」「かどわかし」「私は見られてる」「玉ころがし」「魔性の人妻」「性に泣く女」「ギラついた裸獣の群れ」「くされ縁」「情婦」「女高生のふるえ」「骨まで縛れ」

右に記した映画は、私の観た作品の一部ですが、その外にまだたくさんにある事を一附記して置きます。

ハスチールVは白映プロ「情炎の私刑」監督大滝翠(小森白)縛られているのは八車新子。



# のおと・あと・らんだむ (九)

千 草 忠 夫



## 十八 おわりに

研究社「世界文学辞典」の「唯美主義」の項に、次のようなことが書いてある。

「耽美主義ともいい、広くは一種の世界観あるいは人生観として美的享受及び形成に最高の価値をおく立場をいう」

ついで、それが文芸にあらわれた特徴とし

て

「一、精神や心情よりも感覚を、作品の内容よりも形式や技巧を重んじること。

二、自然と人生から超脱して芸術独自の世界を創造し、写実を斥けて空想に生きようとすること。

三、類型や習慣を廃棄して個性を伸張せしめ、嶄新奇抜な意匠を試みること。

四、非美的、特に倫理的価値の規準を超絶して美の実現に徹し、往々好んで悪のうちに美を求めることなどである。

更にこれが実生活の上に及ぼされるとき、個人主義や貴族主義と結びついて、いわゆるダンディたることを理想とし、生活そのものの美化をめざすものとなる」

一方、先だってカップ・ブックスから出た波沢竜彦の「快樂主義の哲学」の中に、快樂主義者となりうる条件として、次の四つがあげてある。

一、高い知性

二、洗練された美意識

三、きっぱりした決断力

四、エネルギーな行動力

そして、これを具体化する方策として

一、誘惑をおそれないこと

二、一匹狼も辞さぬこと

三、誤解を恐れないこと

四、精神の貴族たること

五、本能のおもむくままに行動すること

六、「労働」を遊ぶこと

七、レジャーの幻想に眼をくらまされないこと。

さて、こうやって並べて見ると、文芸上の



唯美主義Ⅱ耽美主義が、実生活においては、渋沢竜彦のいう快樂主義になることは、ほとんど説明を要しないであろう。

この快樂主義の原則には、おそらくフロイトの精神分析学における「快樂原則」が根底として意識されているように思われる。以下少し長くなるが、フロイト学説を継承するマルクーゼの「エロスの文明」(紀伊国書店刊)から引用してみよう。

「本能のさまざまな姿は、文明における心的構造のさまざまな姿である。動物にもみられるような動因は、外界の現実に影響されて、人間の本能となる。本能が生体のなかでしめる本来の「位置」と、その基本的な方向は、変らないが、その目的と、あらわれかたは、変っていく。精神分析のあらゆる概念は、本能が変化することを、意味づけようとしている。しかし、本能とその要求および満足を左右する現実、社会的・歴史的世界である。動物としての人間は、その本能が、根本的に変えられるとき、はじめてひとりの人間という存在になる。そのばあい、本能の目標だけでなく、その目標に達するための、原則である本能の「価値」も、変化をこうむるのである。その支配的な価値体系の変化は、仮に、

つぎのように定義できるだろう。

即座の満足から遅延された満足へ

快樂から快樂の制限へ

喜び(遊び)から苦しみ(仕事)へ

受動性から生産性へ

抑圧の欠如から安全の保障へ

フロイトは、この変化を、**快樂原則から現実原則へ**の変化として記述した。(中略)快樂原則に支配される無意識は、「より古い本能的な過程、つまり、それだけが唯一の心的過程であった発達段階の名残りである」。それは、「快樂を得るために」だけ追及をつづけ、「心的活動は、不快(苦痛)をもたらし、どんなことから、退却する」。しかし、無制限の快樂原則は、自然の環境、人間の環境と衝突するようになる。ひとは、自分の欲求を完全に、苦痛なく満足させることは不可能であるという、痛ましい事実がつかようになる。そうしてこの失望を経験した後で、新しい心的機能の原則が、勢を得るようになる。現実原則が、快樂原則を凌ぎ、人間は、一時的で、不正確な破壊の快樂をあきらめ、遅延し、制限するかわりに「安全を保証された」快樂を選ぶようになる。フロイトによれば、あきらめと制限を通じて得られた、この

永続する利益のために、現実原則は、快樂原則の「地位を奪う」というよりは、むしろそれを「防衛」し、それを否定するのではなく、「変容する」のである。

(中略)

「快樂原則のもとでは、人間も、動物的な動因の束にすぎないが、現実原則の確立とともに、組織された自我が生まれる。自我は、自我とその必要とする環境をそこなわずに得られる有用なものを、探し求めてゆく。現実原則によって、人間は、理性の機能を発達させる。理性は、現実を「テスト」し、善と悪、真実と虚偽、有用なものとは有害なものを区別することを学ぶ。それによって、人間は、注意、記憶、判断の能力をもつようになり、意識を持った、考える主体として、外界の現実から課せられる合理性に、自分自身を合わせていく。しかし、思考活動のうちでただひとつの様相だけが、心的構造の新しい組織から「分離され」、現実原則の支配をまぬがれている。空想は、「文化による変容を受けないように保護され」て、快樂原則に委ねられている」(文中の「」はフロイトの原文からの引用を示す)

更にマルクーゼは後章において、人間の性



的快楽が性器の結合にのみ制限され、他の肉  
体の箇所を用いて快楽を得ることが、タブー  
(変態) 視されるようになったのは、人間本  
来の心的機能である快楽原則を制限し、現実  
原則を強制することによって自己の利益を増  
加しようとした搾取(支配)階級の政策にも  
とづくものである。即ち、肉・体・より・引き・出す  
快・楽・の・箇・所・を・極・度・に・制・限・す・る・こ・と・に・よ・っ・て・  
快・楽・に・必・要・で・な・く・な・っ・た・箇・所・(手・足・そ・の・他・)  
を・す・べ・て・生・産・に・向・け・さ・せ・る・た・め・で・あ・る・と  
述べている。(このことは、マルキ・ド・サ  
ドがその著作において、肉体のすべての箇所  
へ脇の下から乳房までVから快楽を引き出す  
情景をこまかに述べている点と考え合わせ  
ると、まことに興味深いものがある)

以上ながながと引用ばかり続けて来たが、  
これは、これまで私の「のおと」の基調のほ  
とんどすべてが、以上の引用の中に包含され  
ているからに外ならない。これに実存主義的  
な自他の関係に関する考えをプラスすれば、  
私の発想のすべてはここから発してここに帰  
着すると言えるであろう。九回にわたってな  
んとか続けて来たこの「のおと」を閉じるに  
当って、まだまだ言い足りなかった事は山ほ

どあるような気がしてならないのだが、大体  
が他人のふんどしで相撲を取るような恰好の  
エッセイであった関係上、どうしても表現に  
自由が得られず、今になって失敗だったと思  
っているわけだけれど、このまま筆を置くの  
も心残りなので、ネタの一切をさらけ出して  
しまったようなわけである。

実を言うと、私はプレイをあまりやった事  
がない。辻村氏のようなベテランにくらべれ  
ば、「やった」といえるようなほどの事はや  
ってないと言ってもいい。誌上に夫婦プレイ  
の写真などを堂々と発表される方を見ると、  
「愛しあっていたらっしやるんだな」と、うら  
やましくなる。

子供を三人も生んだ女を、なおかつ素っ裸  
で縛りあげて楽しもうという気が起る人がお  
られたら、よほどのマニヤに違いない。少な  
くとも私はそんな気が起らない。たるんだ腹  
やしなびた乳房を眼にするよりは、奇クに登  
場する若々しい美女たちの物語に空想をはし  
らせていた方が、よほど楽しい。

そんな人間である私でありながら、空想の  
中においてさえ女を縛りしいたげること、  
或る種のうしろめたさを覚えずにはいられな  
い程の道徳家(?)でもある。あれやこれや

がまざりあって、ひとつには自己弁護、ひと  
つには自己確立のために、こんな「のおと」  
を書く気になったのだ。だらしない自分の現  
実をふり返って、「あるべき姿」を書こうと  
したわけである。私がいつかこの「のおと」  
は私の「外」にある、と書いたのも、この意  
味に外ならない。いわば、私の「思想」は、  
私の弱さを支える「柱」なのである。

しかし、これだけのことを書いたからとい  
って、私が安心立命の境地に達したわけでは  
決してない。むしろ、お手あげの恰好なので  
ある。しかし、今更なに言っても繰り言に  
なるばかりだから、後は成りゆきにまかせる  
という以外にはないであろう。家庭を破壊し  
てまでプレイを深化するほどの決意は、はじ  
めから持ち合わせていないのだから――

最後に私がこれまでに提示した問題点を要  
約しておきたい。というのは、この疑問点を  
なんらかの足がかりとして、奇ク誌上に論議  
の花が咲けば望外のさいわいだし、私もまた  
ポロポロの「のおと」を開く機会にめぐまれ  
るかも知れないからである。

一、自分のSは幼年期における何らかの体  
験の固着によるものなのか(即ちどうしても  
いやしがたいものなのか)それとも、現代社



会における性的疎外の結果として生じたものなのか？（言いかえれば、過度の現実原則に圧迫された快楽原則の反逆なのか？）

二、将来も妻子を養ってゆかねばならない自分として、現在の職を奪われる事は致命的である。だから、いやいやながら現実原則の下に働かねばならないのだが、一方においてやみがたい快楽への欲求が（それも世に異端

視されている快楽への欲求が）根強くわき起っている。このようなあり方は当然自己の二重性（二重人格）を生む。果してこの二重性を統一する方策はないのか？果してこの二重性を死ぬまで抱えて耐えてゆけるのか？求める快楽が大衆的なレジャーに乗らないものであればあるほど、この苦痛は大きくなり、この結果は更に大きな疎外を呼び起すことが

考えられるが、果して如何？  
そして最後に、これまで取り上げようと思いつた事柄。  
三、サジ・スムは、果して洗練に耐え得るものなのか？

（おわり）

#### 両手吊りにもかく女

大手札二枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号「むさ」

#### 後手吊りのもたえ

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号「むれ」

#### 強烈縛りにうめく女

大手札五枚一組 六〇〇円

木村 洋子 略号「むそ」

#### 顔を凌辱される女

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号「むよ」

#### 後手柱宙浮き縛り

大手札二枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号「むか」

#### 大の字縛り逆さ吊り

大手札二枚一組 三〇〇円

増田みゆき 略号「むの」

#### エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 五〇〇円

一宮百合子 略号「やこ」

#### 股間首縄縦縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号「やひ」

#### 後手首足首連結縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号「やせ」

#### 淫らなる開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号「やす」

#### 縄目に悶える裸身

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号「やく」

#### 強烈羞恥責あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号「えめ」

#### 驚つかみに責める乳房

大手札三枚一組 四〇〇円

東浦、大塚 略号「えう」

#### 縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一二〇〇円

大塚、東浦 略号「えの」

#### 女を縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円

大塚、東浦 略号「えわ」

#### くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円

東浦、大塚 略号「えな」

#### 強烈くすぐり責め

大手札四枚一組 五〇〇円

大塚、東浦 略号「えぬ」

#### 手吊り股間縛り責め

大手札五枚一組 六〇〇円

東浦、大塚 略号「えお」

#### 美しきポリウムを縛る

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号「ひか」

#### 両手吊りにあえぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号「ひお」

#### 後手垂直厳重しほり

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号「ひけ」

#### 一糸まとわぬ裸身緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号「ひく」

#### 豊胸をくびる強い縄目

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号「ひき」

#### 鼻責め縛りに苦悶する

大手札七枚一組 八〇〇円

木村 洋子 略号「むる」





## 虚飾よりの脱皮

—より自然な人間的生活—

高 野 原 美

### (一) 砂漠の中のオアシス

人間の中で最も動物的、原始的な欲求として食欲と性欲があげられる。人間は、その欲求を満足させるために、あらゆる手段を弄する。

しかし、人間社会は、その欲求のおもむくままに行動することを許さず、社会秩序を保たせるために道徳であるとか、規律を人間に對して厳しく要求し、真善美を求める理想的精神面であらゆる動物性を昇華せよと訴ふる。この理性的立場が極端に過ぎると、勿論

自由な人間味が失なわれ、人間としての楽しみも欲びも失うことになり、人間が人間としての喜びを味わうためには理性も適度でなければ、かえって不幸を招くことになる。

現代においては、このような理性的要因とともに、社会の文明即ち近代化が進み、人間が機械的になり、そのために人間は、人間らしさを取り戻したいと云う自然的欲求が高まり、原始生活の昔に復帰したいと云う赤裸々な人間性の解放を求めるようになって来た。ヌーディストクラブ、ヌード・スタジオ、ストリップダンス、等々が誕生し、素人の娘さ

んまでが僅かに胸と腰部を覆いかくすビキニ水着をつけ、性の解放とともに温泉旅館の群立とブルー映画の盛況、そうして遂にはサディスト、マゾヒストの心理が潜在的立場から陽の目を見ることになって来た。これらは、合理主義的な機械文明と人間の都市集中が、自然な人間性を奪い去り、人間が動物であり感情や自然に湧き起る欲望等々を無視し、自己の存在が完全に抹消しつくされようとすることに對するギリギリの抵抗として考えることができる。

我々は、血のかよった温かい肉体をもった



動物—生体—なのだ、必死になって叫んでいる姿ではなからうか。

人間が、いかに人間らしくあるかと云うことを考える時、もう我々の眼前に横臥るものは奇譚クラブの世界しかないことを知る。この世界こそ、カラカラに乾き切った砂漠のような社会における唯一のオアシスである。我々は、砂漠の中で迷った時に、ある者は疲労を恐れてそこにうずくまるか、又は最後の力をふりしぼって、あてもなく泉を求めてさまよい歩くだろう。奇ク誌の読者は砂漠の中を悪戦苦斗、そうしてオアシスにやっと辿りついたものに相当する。

奇クの世界ノ そこには力と勇氣、生きる光を与える光明がある。

そこには、何もかも忘れさせて溺れきれぬ温かい血の通った生身の人間、全ての虚飾を脱ぎ去り赤裸々な姿になった人間像を鮮明に見出すことができる。思わず人間万歳ノ を唱えたくなくなるような歓喜を覚えさせる。

人間は動物である。これは動かし難い真理である。ただし、理性が人間をして動物と一線を引かしめ、人類特有の秩序ある人間社会を形成させているにすぎない。それ故に、人間社会の秩序を破壊するような行動は好まし

い。しかし、奇クの世界が、直ちに秩序の破壊と連なると云う考え方には賛成しかねる。

お互いの夫婦プレイとして家庭での幸福を求め、また同好者が集まってお互いに楽しみをわかち合うのは好ましい現象である。こう云う小グループが、夫々の自然な形での赤裸々な人間性を追求して行くならば、人間社会でのストレスも解消し、また斗争や角突き合いも自然に解消して行くのではないかと思われる。

## (二) 排泄と浣腸の歓び

人間が動物であるために食欲がある。

ところが、食べると云う行為は、自然なものとして認めるが、当然その結果生ずる排泄と云う生理現象については醜いもの、恥しいものとして考えられている。これは何故なのだろう。

尿や糞便が汚ないものと云うことから来るものだろうか、又は、排泄する場所が肉体の下部にあり、常に隠されたものであり、自然に見えるものでないため、その部分を他人の前に見せることに羞恥を覚え、その羞恥心を尊重するためのものだろうか。確かに虚飾的文明社会では、この考え方が一般的なもの

して成り立つようであるが、全ての人間が同感するとは云い切れない。自然的原始社会においては反対の立場も見られる。

少くとも食べると云うことが自然であり醜や恥でないならば、排泄と云う尊い生理現象も同じ立場で考えられるべきである。

便秘に苦しむ女性をみよ。排泄から見放された人間の苦痛、それによる、肉体の不健康さ、排泄できぬと云うことは、苦痛極まりないものであり、おおらかに排泄することの歓びは何ものにも代えられぬものがある。尿においても同じことである。食べたものは必ず出さねばならない。入口があれば必ず出口があるのは、自然の原理である。

排泄は、何ら恥じる行為ではない。堂々とやればよい。そこにこそ人間としての芽生えがある。

奇ク誌上では、ネクタールが花咲き、花と蛇においては浣腸や排尿の羞恥責めが読者を楽しませているが、これこそ人間の動物的な自然にかえった像を描ききったものとして貴いものと思っている。

羞恥に全身を震わし、排尿や排便を齒を喰いしばって耐える全裸の美女には、まだまだ虚飾がある。人間的であろうとする間は、苦



しみ悩み羞恥に身悶えしななければならない。動物としての人間を自覚し、自然の欲求に素直に身を任せる気持ちになった時こそ、人間としての真の欲び幸福が見られるのである。花と蛇において調教された静子夫人には、愛すべき生々しい人間味が現われ、そこに精神的なすくいと安らぎが生れて来ている。その点、芳野眉美氏にネクタールを吞ませた女性達のおおらかさは愛すべき点がある。堂々と股を開いて顔面にまたがり、放出するムジャ気な姿は最高のものである。

バスタオルを巻いたまま、香はタイルに寝た男の顔をまたいだ。仁王立ち。

見下して、「かけてあげる」とぶっそうなことを云った。

「しゃがんでよ」「だめ」「それじゃ胸をまたいだ方がいい」

香の顔が赤くなった、一歩うしろに下る。

—略—

タオルの裾がはねかえった。放射線が視界を奪った。

(眉美氏より)

一度吞ませると「トイレに放出するのが惜しくて」とは当然のことだろう。

放尿の生理的行為を男性の眼の前に堂々と

見せながら、自分の美しい体内で変化した液体を男性の口に投げ与える欲び、男性を征伏する欲びが味わえるのだから……。

浣腸とても同じことである。脂肪による量感豊かな双丘を割って菊花(美しい魅力的表現である)に滑り込む嘴管、やがて襲い来る激しい便意に脂汗を流して耐える。灼けつく様に、その豊臀に吸い付けられた男の眼の前であられもない排泄の姿を見せるとは、女体にかせられた羞恥地獄ノ四つ這いになり、又は脚を吊られて男性の手で施される浣腸、苦悶、排泄こそは人間的な、あまりにも赤裸々な人間の姿である。女性は、羞恥と苦痛にその身を虐げられながら、マゾの境地を快く楽しむ。排泄の欲びは、こうしてこれを痛めつけるサド心理とともに施され見られる女性のマゾ心理を満足させるところに意義を見出す。その如何にも動物的な臭いのする行為を愛するところに貴重な意義が見出されるのである。

### (三) 妊婦臨月腹と蛙腹

人間のもう一つの欲求として性欲がある。これはプラトンによると、二つに分けられた生物が不完全な肉体を完全な肉体に復元しよ

うとして相い寄り求め合い、結合しようとする行為だという。

これから考えても、肉体的結合は人間の完成されようと云う崇高な行為であり、交わりをもった女を「女になった」と云うのも、こいう云うところから来ているのではないかと思う。人間は、男女の結合によって心の慰安を求め充足感を味わう。これは至当な道理に適った現象として理解される。

昔から戦場では「女狩り」が盛んに行なわれ、この欲びを求めて兵達は戦意をもやして戦ったと云う。特に戦国時代の落城の際における女達は、野獣と化した男の性欲の前に息も絶え絶えの状態で白い肉体をもてあそばれる悲劇に見まわれたという。これこそ赤裸々な動物的人間の姿があった。

しかし、落城の悲劇は、飽くまで悲劇であり、人間性の追求と云う奇く本来の使命に反するものであり、これは小説の世界、空想の世界に範囲を限るべきものである。これが、「花と蛇」の世界であり、羞恥責めにも通ずるものとなる。

男女の結合の前段階である恋愛は、性欲を基として肉体の結合を前提としたものであるが、古今東西の文豪の手により人間行為の最



美のものとして讃美されて来た。次に、続く肉体の触れ合いも男女双方を夢幻世界に行かせ、歓喜にのたうつ最高の快楽を与えるものとして筆舌を尽して讃美している。しかし、当然その結果として生ずる妊娠と云う現象についてはタブウとして触れようとするしない。勿論、大きく膨れ上った動物的な肉感をもった腹は、ものうい妊婦の姿は、讃美されようとしていない。これほど片手落ちな男性のエゴイズムは他にないだろう。この点を、追求しようとする奇ク読者の人間性は尊重されるべきものである。

妊婦の膨れたお腹が醜く感じられるためなのか、余りにも動物的すぎるためなのか、または愛わしく思うあまりにか、いや、それ以上生命創造と云う女体の神秘に畏怖心を抱いたためなのか。

## △新版Mフォト紹介▽ M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△まく▽

男性Mモデル募集に応じてきた新しいモデルによって作成した豊満なひかるの臀部の下に喘ぐ幸せなM男の有様をこちらに入れます。

女体の最も美しい時は、妊娠初期であると云われ、泰西の名画も多くこの時期の妊婦の姿を描いている。そればかりか、臨月の大きなお腹をした裸体のヴィナス像も残されている程である。これは過去のある時代には妊婦の裸身を正しく評価して鑑賞していたことを意味しており、また妊婦も堂々とその大きな臨月に近い腹を露出して進んで観覧に供したと云う記録も残されている。

今日では、裸体鑑賞、性の解放はピークに達した感があるが、この神秘的な、しかし、いかにも動物的な丸く膨れ上った小山の妊娠腹が、衣装の陰にかくされて陽の目を見ないのは惜しまれてならない。丸い小山のような臨月腹は、分譲フォト等によって鑑賞するのに美しく裸身を彩り、美——絶対美そのものであり、男性にとっては、その神秘性と女体のもつ動物的な宿命の生理と生命創造の偉大さに頭の下る思いをする。妊婦は、何故堂々と、その雄大な張りきった腹部を露出して誇らし気に見せようとするのか。

動物としての最も自然な生々しい女の姿——人間性の追求と云う立場に立つ時、裸身の妊婦ほど条件のととのった理想的なものはない。動物的な快楽、自然な、最も自然な男女

の結合の結果としての誇らしい腹である。女性性は、人間性を求めるならば虚飾を脱ぎ去り羞恥を脱却し、堂々と膨満した小山の腹を露出して鑑賞に供すべきである。

妊婦の膨満腹は、奇ク誌の努力によって、児玉さんが始めて読者の前に、その臨月腹をヌード・フォトで見せ、妊婦裸体鑑賞の先鞭をつけ、その後、引続いて二・三の妊婦ヌード・フォトが公開されたが、まだまだ理解されていないのは、残念である。最近ではA・T生氏の妊婦ヌードは、その膨大な小山のような妊娠腹を下方から撮ったため、より美しいポリウム感を出し傑作であった。これは、奇ク誌に発表されただけに意義深いものがある。この妊婦の、特異な妖美は、増田みゆきさんが妊娠されたことにより、あらゆる角度から精細に鑑賞する機会を得られるのではないかと期待するところ大である。この機会に、小生の作「妊娠腹観賞会」の妊婦の如く、妊婦の浣腸や切腹フォトが増田御夫妻のご好意により我々の前に展示されるなら幸せであるが、望みが過大すぎるだろうか。

妊娠した女の腹を美しく感じ魅力的に思うとき、代償としての、蛙腹を愛することになる。蛙腹は女の豊満な腹部の代償でもある。



肥満女性では、皮下脂肪によって妊娠六カ月の豊かな膨らみを見せるものであるが、人工的に、この妊娠腹をつくろうとする行為は楽しいものであり、一種のマゾと責めでもあらう。

温水の大量、イルリガートル浣腸や空気強圧灌注等は、浣腸の楽しさと同時に、腹を異常に膨らませる興味が加わり、妊娠腹の強制と云う征服欲も加わる。

腹は、意外によく入るものである。浣腸によって次第に膨らみを見せる腹は、腹特有の弾力を失ない硬くなり、腹壁に痛みを感じ出す。特に空気浣腸は、腸壁が伸びる特異な痛みが下腹を刺戟する。

蛙腹については、数年前に論議の花が咲いたが、次第に下火になっている。浣腸の赤裸々な動物的行為と膨満腹と云うエロチックな魅力は、その女体を全く動物的魅力で包み隠してしまうものであり、人間的である。今日では、実際の臨月腹ヌードが現われた為でもあるが、均斉のとれたグラマーの腹を大きく膨隆されるのは楽しいものである。妊娠とは、また異なった妖美があり愛されるべきものである。

#### 四 女体とマゾ・サド

女性の羞恥心は、人間の尊厳である。

羞恥心は、人間と動物の間に一線を画するものであり、これを保護し尊ばねばならないとされている。それだけに奇ク族にとって、これほど邪魔な存在はない。人間の最大の虚飾であり見栄である。

羞恥とは何なのか、これは女性の肉体の中で最も重要で尊い部分を守り保護しようとする本能である。しかし、自然であり、人間性を追求する奇ク族の前には保護手段は不必要である。人間性を追求するためには羞恥からの脱却は必須条件である。

人間は、本来は裸体であった。しかし、聖書の教えるところによると禁断の木の実を食べることによって羞恥を教えられる。自然のままの動物的人間は羞恥を知らないし、裸身であることに不安を感じない。衣装を着ることとは化けることであり、飾ることによって異性を魅力的に惹きつけようとする技巧の一種である。技巧を弄することは、自然なものは云えない。自然なままの裸体ほど魅力的で美しいものはない。芸術家が、最高の造型物として讃える裸身を何故隠そうとするのか。

この裸身は、男性にいろいろな欲求をおこさせる作用をもっている。動物的な自然な欲求として、人間的なものを投げ出して野獸的なよからぬ想像が、次々と湧き起ってくる。この欲求は、男性をしてサジスチックにすると同時に、女性にはマゾヒスチックな情感を催させる。これは決して異常心理でなく、変態心理でもない。ただ、人間と云う存在が、即ち理性が抑圧しているだけで潜在的には人間誰もが保有するものである。われわれは、今日まで不当に弾圧され悪の権化のように教え込まれて来ただけであり、これも解放しなければストレスの解消にはならない。これはマスターベーションが、悪であると決めつけられて来たのに似ている。

昔から、女性の処刑の場合には、多くの男性——女性も同じだが——が一眼みたいものと群がり集まって、刑場周辺は、まるでお祭り騒ぎになったと云う。フランス革命で断頭台に上ったマリー・アントアネットの断首の時は、さしもの広い革命広場も身動きもできぬ程の観衆であった。人々は、絶世の美人が血を流し首が胴とはなれるサジスチックなドラマに胸をときめかせて見物したと云う。美しいものを虐げ痛めつけたいと云う心理は誰



しも持っている。虐げるものは、美しければ美しいほど演出効果は上る。女性とても同じことで、異性の手によって虐げられたいと云うマゾ的気分は大いにあり、美しいマリ・アントアネットの首が血を噴いて転がる時、自分自身を女王の身とおきかえ異性の前で処刑される様を想い描いて妖しく心をときめかせていただろう。

緊縛と云うマゾとサドは、奇クの開拓した女体責めの初歩的なものと云えよう。その責めは、現実には異性の男女間において実施可能であり、空想の世界にとどまらぬ具体的な現実性が魅力的である。まずこの初期の段階では、縛られた裸の女体の縄目が柔肌に喰い込むことによって描き出す肉体美の変化を楽しむことから始まる。女体は、その豊かな皮下脂肪によって乳房の隆起と量感豊かな腹部、臀部等をつくり出している。この脂肪と縄との織りなす変化美とも云えよう。女性特有の皮下脂肪で丸味と弾力性のある肉体が縄によって、より一層の丸味と弾力性を与えて、妖しい女性美をかもし出す。勿論、ここには緊縛の程度によって、女性に与える苦痛がともないマゾとサドの交錯した、責めが介入してくる。この緊縛は、女性が静止したものであ

り、徹底的に受身のものとして扱われるが、女性のフンドシ美は、股間縛りの要素をも加えた能動的・躍動美として愛されることになる。豊かな双丘を割って食い込むフンドシ、これはフンドシにより女性の豊かな臀部の豊満さがより強調されると同時に、躍動による弾力美が描き出される。

この縛り責めも、股間縛り、開股縛り等となると、前段階に羞恥責めと云う要素が加わり一層魅力的となる。勿論、緊縛には、女体に対する征伐と云うことも無視することはできないが、その上に羞恥に身を震わせて耐える女体の動物的なあきらめの姿は、完全に征伐しつくした満足感を伴い、ますます胸を高鳴らすものがある。

最後には、緊縛が女体責めを強調したものであるとして吊り責めがある。海老責め、逆吊り、両手首吊り、逆海老吊り、磔等々は、女体に徹底的に苦痛を与えることにより苦悶する緊縛女体の責め絵をサジスチックに楽しむ。女性には、徹底的なマゾの境地を味わわれることになる。女体は、自らの耐え得るギリギリの線まで痛めつけられることになり胸をかきむしられるようなマゾ感に陶然となることである。

女体の縛り責めは、いろいろな要素をもって、男女を妖しく、楽しませるものであるため、女体緊縛は、それぞれの好みによって種々の変化ができてくる。私等は、緊縛による腹部膨満が好きで大塚啓子の腹縄をかけられたフォートブを大切にしているが、このようにあらゆる奇クファンの好みに何らかの形で適合する点に普遍性が認められるものである。

女性を責めると云う欲求は、一度火がつくと、秋の枯野に火が点じられた如く、とどまるところを知らない。先程も述べた戦場での「女狩り」は、この好例と云えるだろう。女体は余りにも美しい。そのため、その美を汚したいと云う男の欲求の前には、白い脂と肉の塊りと化して、男の前にひれ伏す運命にある。これから逃げると云うのは、まだまだ偽善的な仮面をかぶった人間であり、動物的な牝であり得ない。

奇クモデル嬢のように、「生贄となる幸せ」を自ら求める境地にならなければ、真の人間にはなりきれない。個性のある文明に害されない人間になるためには、男の奴隷であり、野獣と化した男の暴風の如き激しい痛めつけ虐めにも耐え、自ら身を投げださねばならない。この豊かな白い肉体は、男の思う



がままに処刑される運命にある。一体、私は生贄としてどう云う運命のもとにおかれるのであろう。どう云う処刑が私の肉体を襲うのであろうかと、やがて襲いくるであらう白く光る冷たい刃を胸をときめかせて静かに待つ。処刑はできるだけ女性の魅力を發揮するものであり男の眼で注目され羨望されるものでありたい。裸で絞首台に吊り下げられ、痙攣とともに小水の虹を描くと云うのは実に微笑しいものである。磔も裸体で大の字に開股されてなければおもしろくない。大の字での逆張付は尚更よい。股裂きは最も望むところであらう。斬首、田楽刺し等々。

生胴や試し斬りもよい。土台の上に豊満な腹をむき出して寝かされ、腹を輪切りにされるのを待つ女体等は、最も魅力的な構図である。しかし、マゾの本領としては生体解剖が最上のものであろう。自分の運命と今はあきらめた女性が、冷たい台上に裸で縛りつけられ、やがて冷たい非情の刃は柔肌を切り裂いて行く。女は苦痛に悲鳴を上げ身悶えるが、次第に切り開かれて内臓までも露わにされて行く。異性の手によって解剖されたいと云う幾人かの女性の切々たる通信文を見たが、女のマゾは、ここにおいて最高の花を咲かせるこ

とになる。生体解剖も、豊臣秀次を初めとする戦国大名のように臨月腹を断ち割ると云うことになる、女の腹の子に対する愛情も手伝い、よりマゾ心理は高揚することだろう。女の、いや牝としての宿命的な生理現象の小山の白い腹を、空に向けて膨隆した妊娠腹、白い腹、青い静脈の走った小山を無惨に切り裂く喜び、ゾクゾクと身震いする。

もう一つのマゾは、自虐の徹底した女性切腹であらう。自らの手で愛しい豊かな腹を思い切り裂き、腹膜を開き腸露出の切腹、苦痛と苦悶、これについては、小生の作「女体切腹」を参照とされたい。

### (五) ま と め

奇クの世界は、いろいろな動物的本能を公然と掻き立てて、人間の中に眠る悪魔性を醒らせて行く。

しかし、これは人間本来の自然的な欲求であり決して嫌悪すべきもの、醜なるもの、害悪なものではなく求められるべきものである。時代によって人間行動の規制は異なる。昔の刑罪、磔や斬首、股裂きの刑が今日、公開で宮城前広場において行なわれたらどうであらう。しかし、昔は当然の刑罰として誰も異

論を唱えるものはなかった。善悪は、時代的背景によって、左右されることが多い。しかし、絶対悪と云うものはある。殺人は、如何なる型で行なっても絶対悪に違いない。だから、女斗ファンが、裸女同志を力でもって斬り合いさせ、そのグラマーの肢態から流れる血汐を美として眺めて満足することは許されない。そこに奇クの世界にも限界がある。

この限界の中で、時と場所、対象を選んで人間——生のままの人間性を追求することは許される。奇ク誌によって、どれ程の人間が力を得、生きる希望を見出したことだろう。

昔、キリスト教の悪魔思想は、黒ミサを生み出した。しかし、黒ミサは、祭壇を裸身の女体に変え、ブドウ酒を血汐に変えてお祈りが行なわれたが、これによって多くの迷える魂が救われ、人間としての生きる価値を見出したことであらう。この意義は、看過することができない。

われわれの奇譚クラブは、ギリギリの人間の欲望を追求する中で迷えるものに人間としての自信と友を与え、赤裸々な人間像を描き出すことによって、社会のストレス解消の一助と人間としての価値を認めさせて来たのである。



# 【最新版】女体悦虐写真集印画紙版

## G組百姿集

大手札型印画紙(9×13種)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G12	全裸しぼりと浣腸器	(玉田)
G11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G10	恐怖のいたぶり	(新井)
G9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G6	縄に羞らう裸しぼり	(長野)
G5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G2	アグラで縛られる	(玉田)
G1	顔面から全身嚴重縛	(東浦)

G13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G18	諦観の後手しぼり	(玉田)
G19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G21	二つの乳房アップ	(長野)
G22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G26	机の脚に縛られる女	(新井)
G27	革の猿轡で責める	(新井)
G28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G34	典型的な股間しぼり	(大塚)
G35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)

G39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G40	女囚哀歎	(宇治)
G41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G42	オシメカバー縛り	(大塚)
G43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G44	トイレを前にして	(大塚)
G45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G51	全裸胴絞め首縄猿轡	(木村)
G52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G55	椅子に跨がされた女	(新井)
G56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G57	色魔に脱がされる	(新井)
G58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G63	強奪されたパンティ	(大塚)
G64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G67	目かくしのハリツケ	(大塚)
G68	首枷のさらしもの	(大塚)
G69	木馬責め斜め後姿	(大塚)

G70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G72	火あぶりにあう女	(大塚)
G73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G76	縄にもだえる美女	(絹川)
G77	美貌をいためつける	(絹川)
G78	首吊りの責め	(新井)
G79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G80	全裸後手足首連繋縛	(玉田)
G81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G88	美麗の全裸に嚴重縄	(玉田)
G89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G92	六尺権巨大臀部虐め	(大塚)
G93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)



# 倫子と都子 の決闘記

原 口 慎 一



以前小生が長野県のある山村に旅行しました時に、大変興味ある出来事を耳にしましたのでお知らせしましょう。

山村の旅館で一人旅の徒然から夕食后ビールなどを持ってこさせて、仲居とさしつさされつ種々と世間話に興じておりました。仲居の話では彼女は未亡人で子供無し、四十五才で顔立ちも整い、まあ豊満な美人というほどの所でしたが、次第に酔いが回りまして、女

だてらに横坐りになって、まるでどっちがお客か段々判らなくなりそうな様子となりました。

他に宿泊者も無いらしく、今夜はお客は私一人ということで、酒のさかななんかを帳場も通さず持って来たりして、楽しくやっておりましたが、そのうち大分御馳走になったから面白い打明け話をしてあげるということになりました。その話をかいつまんで少しお話

しましょう。

彼女が二十七才の時、今は亡くなった夫との間に三角関係になっていた女がいたのとことです。彼女も夫とは恋愛時代のことと、お互いに大変悩み、しばしば二者択一を夫に迫ったのですが仲々ラチがあきません。彼女の方は山奥の家の娘でやはり旅館の下働き、その女の方は酒場の女給とのことでした。

かれこれ一年余りもモタモタしているうちに、業をにやしたか、その女の方から彼女の許に一通の手紙が舞いこみました。

さて親展としてあるその書状の内容は、早く云えば果し状で、場所、日時を定めて一騎打ちで勝負をつけ、勝った方が男を独占するとしたいが宜しいかということでした。未婚とは云え彼女の方も、既に夫とは肉体関係を持っておりまして、勿論応諾の返書を書き記したそうです。

丁度秋も深まった頃で、年に一度の大祭も終わった山の中腹の神社内の神舞殿を無断借用することに話がきまりました。

決闘日は十月二十六日、午後十時頃、月明かりの参道を登って行きました。手には毛布を一枚丸めて小脇に抱え、淋しい山道ですが興奮しきっている為でしょうか、少しも恐し



くなかったとのことです。

丁度十時半に到着して暫く待っておりますと、コト、コトと山道を登る下駄の音、ああ来たなと思うと覚悟はしていても、思わずゾクッと武者振いのような身体の震えが起こって困りました。

神舞殿には格子戸が打っておりますが、一個所、小さい潜り戸の通り口が仕切っております。その敷き石に坐っておりますと、やはり毛布を持った若い女が進んできます。相手の女は都子といって二十六才、彼女は倫子と云うそうです。

神舞殿の前で倫子も都子も堂々と立ちはだかりました。

「一人でしようね」

「そうよ、一人よ」

「やる気、それともあやまるの」

「モチロンやる気ヨ。堂々とね」

それではと二人が神舞殿にはいります。内は真っ暗かと思つたのに、月夜のせいもあるのを格子の間から洩れる月の光で、かなり明かるいのです。八畳は充分あるでしょう。床は硬い桧板で、掃除したばかりですので、あまりほこりありません。

その中央に毛布を敷きました。そして二女

とも格闘の身仕度にかかりました。といっても要するに二人とも一糸も纏わぬ素っ裸になつた訳です。櫛、こうがいの類は全部脱して、髪は後ろで束ねました、チラチラと見え隠れする格子間をすかして見える都子の体格は実に豊満、しかし倫子の方だって發育ぶりでは引けをとらないグラマーぶりです。組打ち勝負でと、とりきめただけあって、お互い体力には自信満々という二女でした。

さて潜り戸を内から閉め切り、この神殿の内で、都子と倫子の二人妻が女の肉体を賭けて決闘するという訳です。二人きりですから行司もありません、レフリーもない。しかも彼女達の取りきめた勝負のルールは、兎に角どっちか一方が女としての止めを完全に刺されるまで相争うということだそうです。一体どうなったら女としての止めになるのかハッキリしません、彼女の言葉では、

「まあ、お互い憎み切つてゐる女が素っ裸かで対決するんだもんね。女の急所の責め合いになるのは当然でしょう。どっちかの女が駄目になるかで極るのよ」

と云うことでした。

毛布の中央で倫子と都子は、背中合わせて立ちました。それから一、二、三と五歩離れ

てサッと振り返りました。同時に都子のクルリと回る髪の毛がサッと横にナビいたのを、ハッキリ覚えてゐるとのことです。

ムンズと取っ組んでモリモリ押し合い、押し合いです。何しろ素っ裸で掴む所がないのですから、すぐ手を回して首を抱きこみ、髪をグイグイ引き合つて、体をしゃにむにブツケ合います。もつれて揉み合つてゐるうちに、都子がイキナリ倫子の乳房を襲つて来ました。揉まれてグニグニされて、ギョッ、ギョッと搾られます。

「畜生ッ」と倫子も掴もうとしますが、仲々取れません。しかし都子も大乳房でとても防ぎきれません。指をジリジリ入れて、ガツとシボつて、激しい乳房相撲です。爪は剪つてありますが、乳首をプリップリッと摘んでコネ回し合つての熱闘です。

揉み合いながら倫子は脚を飛ばして都子の支え脚に掛けました。ギリギリと締めつけて倒そうとします。しかし都子の足も強く、倒れる所か逆に倫子の支え脚に脚を絡ませて来ました。

今にもギクリといいそうに、白い脚を絡みジッと締め合いあつた二人は、動かなくなりました。もう汗ミドロです。





て必死で争います。

倫子の方が上になって、都子の首をギュッと腕で捲いて締めました。

首を捲かれても都子は仲々敗けません。ジッと首をすくめ顎を引いて強烈な締めを耐えながら、イキナリ倫子の下半身を襲って来ました。

二転、三転、床をトドロと響かせての寝業の勝負は互格のまま、いつしか二女は横臥位で太腿と太腿とを絡み合わせ、急所への攻防となっております。

都子の厚い女腹が上から圧しかぶさって来ますと、まるで重しにかかった漬物のように身動きできません。体の前面を密着させ、ユスリ合わせ、手の効きを有利にし合う決死の揉み合いです。

のたうつ髪は結び目もとけてザンバラとなり、紐のようにねじれた足は空を蹴り、腰ごと、尻ごとそり反ってあがいて女体が伸縮し合います。

何度かの上下の回転の後、都子の首がグツと伸びたと思うと倫子の胸にかぶさって来ました。ジーンとする胸底をえぐる苦痛が彼女の全身を貫きます。もう駄目と思ったそうですが、都子が止めを刺そうと大きく回った瞬

間に、彼女の乳房がブルンと無防禦で飛び出しました。

そこに倫子は全身をはねつけてガツと噛みついたのです。

ヒドイ噛み合いです。痛さのため、二人とも動けなくなったのか、格子戸の隅で絡らみ合ったまま死闘を繰り返します。

意識が薄れそうになりながらもギリギリと噛んで放しません。都子も倫子も時々苦悶の声を洩らしながら勝負を続けます。

その際受けた創というのを見せて貰いましたが、左乳房の上下にかなりの創で、乳房は横にクビレ込んでヒドイひきつれになっておりまして、当時の死闘の凄絶さが偲ばれるものでした。

こうして彼女達は、お互いの左乳房に噛みつきながら、空いた二本の手を使って倫子の言葉による「女同志の三所攻め」にはいったそうです。

噛んで、引っ掻いて、突き上げて、掴みこねる、この体力をフルに使った女体急所の各部分への相責めは、実に長い時間に亘って続けられ、体中の血が荒れ狂って、どうにも判らなくなってきたそうです。

転がりに転がって責め合ったまま格子戸の

「ウアッ」

「ギャオッ」

悲鳴が流れて絡みついた二ツの女体は、ドスンとばかり一つになって倒れました。

倒れても足はシッカと絡んだまま、二女はゴロゴロ転がり合って、上になり下になりし



隅につまったところで都子が大きく一声あげると凄じい猛攻をしかけて来ました。倫子は戸に押しつけられて体をブツツけられガクガクしておりましたが、キューツと来るような頭の芯まで透る痛さに、もう駄目だッと目の前が暗くなって行きかかりました。

しかし倫子の死物狂いの反撃も十二分に都子の急所に極まっております。

男の顔を薄れかかる意識の内に浮かべながら、「ここが勝負だ。ここが我慢のしどころだ」と心に云いきかせて相手の猛撃をジッと耐えながら、都子の女体を満身の力を指にかけて責めつけます。

身体中を、ピンとする様な痙攣が貫きます。しかし都子の女体も苦悶にのたうっております。女の意地をかけた我慢比べです。相手を仆すか仆されるか、生きるか死ぬかの攻め合いが続くのです。

もう危い、もう駄目よッという苦悶を男への愛を胸にこめて耐えておりますが、とてももう我慢も限界です。やられるなら相討ちでと死力を振って攻撃に出ました。

都子も激しく応じて来ました。目の前に火花が散って体中が煮えたぎって思わず腰が伸びます。両女が中腰で動かなくなりました。

一刻、二刻、……その時です、

都子の女体が、急にガクツとしたかと思うと、口を離して、はねのけようとしします。

「しめたッ」と思うと急に力が出て、都子の上からのしかかりました。

もがきにもがくのを抑えつけて攻撃にかかります。顔を都子の胸に埋めておりますが、その耳もとで、「マッ参いたッ。降参ヨッ。

ウアッ」という都子の悲鳴が響きます。

しかし、もう離すもんですかと充分に痛めつけにかかりました。死物狂いの力で突き離されましたが、しかしすぐに絡みついて行きました。その時の苦悶に満ちた絶望的な都子の表情が夜目にも白く浮かびまして、格子戸に手をかけてモタれるように胸と腹をきしめている姿が目には焼きついたことでした。

そのあと背後から抱きついて首と胸を締めあげ、更に足を首にまきつけて締め圧えました。うつ伏せになった都子の後髪を掴んで締めて行ったそうです。

バタついていた足がグンナリして尻をピクピクさせる半死半生の都子。それを再びヒックリ返えして、倫子の恨み思い知れと十分に止めを刺してやったとのことでした。

その後、創は間もなく治ったとのことですが、都子の女としての機能は充分でないよう

になったそうです。それ以来、倫子と男とは晴れて夫婦になったということです。

その夜すっかり酔った倫子のために、小生は介抱はさせられるやら、床はとらせられるやら大変な目にりましたが、兎に角、女というものは実に徹底的な勝負をするものと思いました。大体都子が降参した時、勝負はついたのでから中止しないのかと訊ねますと、「生娘じゃあるまいし、一人の男を張り合った女同志が納得ずくで勝負したのよ。どっちかの女が奪られるか奪るかしなきや納りがつかないわ。だから立合いをつけない勝負にしたのヨ。まだ充分相手に余力があるうち別けられたのじゃハッキリしないものね。あの相責めで都子ももう十秒も続けば、倫子の方が参っちゃうのヨ。そうすれば都子はきっと同じことをするでしょう。またそうしないとハッキリしないものネ」と云うことでした。

夜又になった美女二人が、女の命を堵けて対決する凄絶さは、その残酷さと共に実に妖艶なものでありましょう。その後も何か見聞することがありましたら、また筆をとることに致しましょう。



# 貴重な体験

宇都宮 宏

貴重な体験

「池袋のRというトルコ風呂へ行ってごらん  
なさい。ユリという少々Sッ気のある娘が居  
ます。あなたみたいなマゾヒストを大歓迎し  
て呉れますよ」

こう教えてくれたのは、あるホモの組織を  
主幹しているKという男でした。

「ユリに私から聞いてきたと云えば、すぐ判  
ってくれますよ。前にもあなたのようなマゾ  
のお客さんを紹介してやったことがあります  
からね。そのかわり半殺しの目に会ったって  
私は知りませんよ。女のサドはこわいって  
いますからね」

そう云ってK氏は、経験の浅い私を冗談半

分におどかすのでした。

先輩諸兄には笑われるかも知れませんが、  
早くも小学生時代にマゾヒズムに目覚めた私  
ですが、以来十五年というものは、S女性に  
めぐり会うこともなく、SMブレイの経験は  
その日まで一度もなかったのです。勿論その  
間、私なりにあらゆる方法でS女性をさがし  
求めました。何度か機会らしいものはありま  
した。知人のマゾヒストに教えられて、そう  
いう女が居るというトルコ風呂へ行ってみた  
こともあります。しかしそういう女にかぎっ  
て、私の理想とかけ離れたあまり美しくない  
女であったり、サジスチンには縁遠いおとな

しそうな女であったりで、女と話を進めてお  
きなながら、いざという時になって自分から逃  
げ出してしまったのでした。

私の理想が高すぎたのかも知れません。し  
かしハドナミは美しくなければならぬ。美  
しければこそ奴隷を持つ権利があるのだVと  
いう、かたい信念が私にはあるのです。美し  
くない女や、性格的にその行為を好まない女  
とプレイするのは、私にとってむしろ不快で  
我慢出来ないことなのです。それに私が未經  
験なればこそ、処女がヴァージンを大切にす  
るような気持で、最初のプレイの相手を慎重  
に探していたとも云えます。ですからK氏が



らその話を聞いた時も、正直に云って大した期待を持ちませんでした。

しかし、今日こそはユリというその女を訪ねてみようかと決心すると、いやでも心が期待にふるえてまいります。いよいよ今日こそ、守りつづけたS女性に対する童貞？を捧げる日になるかも知れない……そう思うと仕事も手につかず、その日の暮れるのが何とおそく感じられたことでしょう。

Rというトルコ風呂はすぐにみっかりました。ドアボーイのバカ丁寧なお辞儀に迎えられ、カウンターで「ユリさんを」と指名した時、私の声は上気してかすれてしまっていました。今や私をいけにえとして捧げるべき、女神の出現を待つばかりです。

「いらっしやいませ」

小おどりするようにして現れたその少女を見た時、私は自分の身体中が歓声をあげるのを聞きました。

「そうだ、この人こそ、僕の今まで捜していた人だ！」

やや小柄ながら均整のとれた体、浅黒く引きしまった肌、少年のようなスラリと伸びた脚、そして今にも私にいどみかかってくるようなキラキラ光る豹のようなその眼。彼女こ

そ私の理想のタイプだったのです。いいえ、その時まで私が心にいだくドミナのイメージは、漠然としていて、はっきりした形をもっていないませんでした。しかし彼女によって、私の理想のタイプを教えられたと思いました。今にして思えば、女優の緑魔子とか中村晃子などのタイプに属するように思えます。

「あなた、はじめてね」

個室に入り、私の上着を取ってくれながらユリ嬢が聞きます。

「あたしのこと、誰に聞いてきたの？」

「ウン、Kさんって知ってるだろう」

そう答えて私は彼女の反応を窺います。

「あら……」

上着をハンガーにかけようとしていたユリ嬢の手が一瞬とまったようです。

「それじゃ、あなたはマゾなのね」

そう云うと彼女は、口もとに意味ありげな微笑を浮かべて私の顔をのぞきこみました。

「そう……それじゃ勝手にやんなさい。あたしは、ここで見てあげるから」

持っていた私のシャツをポイト、その場にほうりすてると、彼女はサッサとベッドへ行ってドッカと腰をおろしてしまいました。

「それじゃ、本当にきみはボ、ボクを虐めて

くれるの？」

「いいわよ。はやく身体をきれいにして、あがってらっしゃい」

やはりK氏の言ったことは本当だったので。一人で服を脱ぎ身体を流し始める私を、ユリ嬢はベッドに寝そべって煙草をふかしながら無表情にながめています。女性の視線をあびて入浴するのは、何とも妙な気分です。

「あなたは、どうされるのが好きなの？」

「どうって？」

「同じマゾでも縛ったりぶったりしてほしいっていう人も居れば、あたしのことを、お嬢様お嬢様っていつて奴隷みたいに世話したがる人も居るし、お小水飲ませてくれている人もいるわ。あなたは、どのタイプ？」

口ぶりからすると、彼女は相当マゾヒストについての知識をもっているようです。

「そうだね、今、きみが言ったこと、きみがしてくれるなら、みんな好きだよ。だけど僕からきみに注文することは何もないんだよ。きみの好きなように、僕をおもちゃにしてくれればいいんだよ」

そうです。これが私のマゾ思想なのです。奴隷の分際で主人に向ってあれこれ注文をつけるなんて、おかしい話ではありませんか。



ドミナの命令なら、どんないやなことでも喜んで服従するのが奴隷というものです。

「わかったわ。それじゃ、あたしのお友達つれてくるから待っててね」

そういうとユリ嬢はプイと部屋から出ていってしまいました。私は意味がわからず、キョトンとして待っておりますと、しばらくして彼女は、もう一人トルコ娘をつれて戻ってきたのです。

「この子、カオルちゃんていうの。私の妹分よ。二人であなたをシゴいたげるわね。いいでしょう」

カオルちゃんと呼ばれたその少女を見て、私は再びショックを受けました。美しいのです。月並な表現ですが充分女優として通用する容姿です。こんな美人のトルコ娘が、この世に存存するとは、その時まで私は思っていたことありませんでした。

ユリ嬢も美しい女です。しかしユリ嬢の美しさは個性的で（なればこそ、私にとっては理想的だったのですが）一般的な見地からは美人としては資格からはずれる点もあるかも知れません。だがカオル嬢の場合は、おそろく万人がその美しさを認めるでしょう。タイプで云えば少女歌劇の娘役が似合いそうな、

むしろ純情可憐な感じで、もし私がこの様な特殊な状況下で彼女に会ったのでなければ、私はとうてい彼女に対してマゾヒスティックな想いは抱かなかったであらうでしょう。

それなのに彼女は自分からすすんで私とプレイするためにやってきたのです。ユリ嬢にしてみれば、一人で私の相手をするのが照れくさく心細かったたのでカオル嬢を応援にたのんだのかも知れません。しかし私にとっては、複数の女性によって虐げられることは最大の願望でした。けれども、これはあくまでも夢にすぎないことで、実現の可能性はないものと思っておりました。それなのに今、現実にこんなにも美しい二人の女性が私の目の前に、立ちほだかっているではありませんか。私は感激のあまり二人の前にくずれるようにひれまづいてしまいました。しかし感激するのはまだ早かったのです。もっともっと素晴らしいこと、がこれから起こるのです。

「さあ、サッサと手を後に廻しなさい」

ユリ嬢の鋭い命令にハッとして身を起すといつの間にか彼女の手には細引のたばがにぎられています。二人の女性の縄さばきは、おぼつかないものでしたが、それでもやがて私はキツチリと後手に縛られてしまいました。

こういうのを高手小手というのでしょうか。

その時です。ドヤドヤという足音とドアの開く音に驚いてふり向くと、大勢のトルコ娘達が次々に個室の中に入ってきたではありませんか。五人は居たように思いますが、恥しさでまともに顔をあげることが出来なかった私には、人数を数えるゆとりさえありませんでした。ユリ嬢が呼んだのはカオル嬢だけではなかったのです。先刻も書いたように、複数の女性によって虐げられ、恥しめられるという空想が最も私を興奮させる夢でしたが、まさかこんなに大勢の女性を前にしてプレイが出来ようとは……。今思い出してもまったく夢のようです。

「さあ、立ち上って、みんなに、ご挨拶なさい」

ユリ嬢が命令します。そういわれても、先刻から私の身体のある部分は醜く変形してしまっているのです。恥しくてとても立ち上れたものではありません。

「今さら、なにを恥しがってるのさッ」

ユリ嬢の怒声が飛びます。縄尻を持って引きずり起されるようにして、遂に私は観念して皆の前に立ちました。クスクスと笑い声が起ります。皆の視線が私の身体のある一点に



注がれているのを感じて、私は顔から火の出るような思いです。

「起立！」

「礼！」

まるで小学校の級長のようなユリ嬢の掛声に合わせて、お辞儀をする私に対して爆笑が聞こえます。

「みんながプレイを見たいっていうからつれて来たの。でも安心して、実際にあなたをシゴクのは、あたしとカオルちゃんだけ。この人達は見物するだけよ。一ペンにこんな多数

でシゴいたら、あなた死んじゃうものね」

こうして私は、大勢の女性の前でブザマな痴態を演ずることになったのです。

「さあ、こっちへ来て、あたしの足にキスしなさい」

いよいよプレイの開始です。私はベッドに腰かけたユリ嬢の前にひきすえられました。

ああ、私は何度このような場面を夢に描いたことでしょうか。今こうして美しい脚が現実の眼前にあるのです。矢も盾もたまらず、私はむしゃぶりつくようにしてユリ嬢の足指をス

ッポリと口にふ

くみました。生れて初めて味あう女性のへおみ足Vの味、それはむせかえるような、官能的な香りで私を刺激し、しびれさせました。

「そうそう、指の股を舌で掃除するのよ。足の裏を、そおと

なめて……コラッ、そうじゃないったら、もう少し強く……」

私は無我夢中で彼女の言葉に従います。

「フフフ……ああいい気持。今度は、こっちの足」

掃除の終わった方の足は、私の頭の上にのせられます。

「そうそう、だんだん上の方へなめて、上ってきていいわよ。ウッフン、何だか変な気持になってきちゃった。よし、そこまでッ。コラ、よしなったら、今度はカオルちゃんの足をなめなさい」

私の舌はユリ嬢の足をはなれて、白くてきやしゃなカオル嬢の足に移ります。

「どう、カオルちゃん。どんな気持？」

「なんだか、くすぐったくて変な気分よ」

頭の上では見物の女の子のクスクス笑う声に混って、こんな会話が交わされています。こうしてかわるがわる二人の足をなめさせられたのですが、一度見物の女の子のあまり美しくない足をなめろというユリ嬢の命令を拒否した時は、いきなり顔を足でふみにじられて悲鳴を上げてしまいました。又、彼女達の履いているスリッパの裏をなめさせられた時は流石に閉口しました。





「カオルちゃん、こいつのズボンからベルトを抜いてきて頂戴」

私の口の中の水分が彼女達の足によってすっかり吸いとられてしまった時、ユリ嬢は私を鞭打つことを思いついたようです。

ピシリッ、

第一打は何の前ぶれもなく、私の背中を襲いました。私が生れて初めて女性から受ける鞭です。

「頭を床につけてッ、お尻を高く上げてッ」

私に縛られたままの不自由な身体で、彼女の鞭を甘受するポーズをとりました。

「覚悟はいいわね。今さら泣いたって、あたしは勘弁しないわよ」

ヒュッピシリッ、

「ウッ」

パシリ、

「グッ」

打撃は矢つぎ早やに私の背と尻に飛んできます。そのたびに奇妙な呻き声が、私のくいしばった口からもれてしまします。

「だらしないわねえ。カオルちゃん、こいつの口を、そこにあるタオルでふさいじやってちょうだい」

カオル嬢の手によって私の口はビショビシ

ヨにぬれたタオルでさるぐつわされてしまいました。

もっとも、このさるぐつわは、不完全なものでしたか

ら、私の呻き声を

小さくするのは役立たず、マゾヒ

スチックな感情を

さらにもり立てる小道具にしかありませんでした。

刑は続行されます。今や見物の女

達も、シンとして私の悶える姿を観察しているようです。

「マゾヒストにとって△鞭打ち▽は空想しているときこそ素晴らしいが、現実に行なわれた時はただ苦痛あるのみである」と何かの本で読んだことがあり、私も鞭打ちに対してはあこがれと同時に一種の恐怖感も抱いておりました。こうして現実に鞭打たれてみると、確かにすばらしいというにはあまりにも

のすごい痛さです。けれども中学生の頃、ド



イツ人の男の教師から受けた鞭打ちとはちがって、何か甘美な快感が、鋭い痛み混じって私の脳の中を流しびれさせます。でもそう感じる事ができたのは、彼女達がかけんしてくれたせいかもしれません。とに角、鞭打ちが終わった時、私は助かったと思う一面、もの足りなささを感じたほどです。

「さあ、このくらいでカンベンしてやる。一服しなさい」

ユリ嬢は私の縄を解いてくれると、タバコ



注がれているのを感じて、私は顔から火の出るような思いです。

「起立！」

「礼！」

まるで小学校の級長のようなユリ嬢の掛声に合わせて、お辞儀をする私に対して爆笑がおこります。

「みんながプレイを見たいっていうからつれて来たの。でも安心して、実際にあなたをシゴクのは、あたしとカオルちゃんだけ。この人達は見物するだけよ。一ペンにこんな多数

でシゴいたら、あなた死んじゃうものね」

こうして私は、大勢の女性の前でブザマな痴態を演ずることになったのです。

「さあ、こっちへ来て、あたしの足にキスしなさい」

いよいよプレイの開始です。私はベッドに腰かけたユリ嬢の前にひきすえられました。

ああ、私は何度このような場面を夢に描いたことでしょうか。今こうして美しい脚が現実の眼前にあるのです。矢も盾もたまらず、私はむしゃぶりつくようにしてユリ嬢の足指をスッポリと口にふくみました。生

れて初めて味あう女性のへおみ足Vの味、それはむせかえるような、官能的な香りで私を刺激し、しびれさせました。

「そうそう、指の股を舌で掃除するのよ。足の裏を、そおと

なめて……コラッ、そうじゃないったら、もう少し強く……」

私は無我夢中で彼女の言葉に従います。

「フフフ……あぁいい気持。今度は、こっちの足」

掃除の終わった方の足は、私の頭の上にのせられます。

「そうそう、だんだん上の方へなめて、上ってきていいわよ。ウッフン、何だか変な気持になってきちゃった。よし、そこまでッ。コラ、よしなったら、今度はカオルちゃんの足をなめなさい」

私の舌はユリ嬢の足をはなれて、白くてきやしゃなカオル嬢の足に移ります。

「どう、カオルちゃん。どんな気持？」

「なんだか、くすぐったくて変な気分よ」

頭の上では見物の女の子のクスクス笑う声に混って、こんな会話が交わされています。

こうしてかわるがわる二人の足をなめさせられたのですが、一度見物の女の子のあまり美しくない足をなめろというユリ嬢の命令を拒否した時は、いきなり顔を足でふみにじられて悲鳴を上げてしまいました。又、彼女達の履いているスリッパの裏をなめさせられた時は流石に閉口しました。





「カオルちゃん、こいつのズボンからベルトを抜いてきて頂戴」

私の口の中の水分が彼女達の足によってすっかり吸いとられてしまった時、ユリ嬢は私を鞭打つことを思いついたようです。

ピシリッ、

第一打は何の前ぶれもなく、私の背中を襲いました。私が生れて初めて女性から受ける鞭です。

「頭を床につけてッ、お尻を高く上げてッ」

私に縛られたままの不自由な身体で、彼女の鞭を甘受するポーズをとりました。

「覚悟はいいわね。今さら泣いたって、あたしは勘弁しないわよ」

ヒュッピシリッ、

「ウッ」

パシリ、

「ゲッ」

打撃は矢つぎ早やに私の背と尻に飛んできます。そのたびに奇妙な呻き声が、私のくいしばった口からもれてしまします。

「だらしないわねえ。カオルちゃん、こいつの口を、そこにあるタオルでふさいじやってちょうだい」

カオル嬢の手によって私の口はビショビシ

ヨにぬれたタオルでさるぐつわされてしまいました。

もっとも、このさるぐつわは、不完全なものでしたか

ら、私の呻き声を

小さくするのは

役立たず、マゾヒ

スチックな感情を

さらにもり立てる

小道具にしかなり

ませんでした。

刑は続行されま

す。今や見物の女

達も、シンとして私の悶える姿を観察しているようです。

「マゾヒストにとって人鞭打ちVは空想して

いるときこそ素晴らしいが、現実に行な

われた時はただ苦痛あるのみである」と何か

の本で読んだことがあり、私も鞭打ちに対し

てはあそこがれと同時に一種の恐怖感も抱いて

おりました。こうして現実に鞭打たれてみる

と、確かにすばらしいというにはあまりにも

のすごい痛さです。けれども中学生の頃、ド



イツ人の男の教師から受けた鞭打ちとはちがって、何か甘美な快感が、鋭い痛み混じって私の脳の中を流しびれさせます。でもそう感じる事ができたのは、彼女達がかげんしてくれたせいかもしれません。とに角、鞭打ちが終わった時、私は助かったと思う一面、もの足りなささを感じたほどです。

「さあ、このくらいでカンベンしてやる。一服しなさい」

ユリ嬢は私の縄を解いてくれると、タバコ



に火をつけて渡してくれました。床に正座して背中、鞭のあとをなでている時、

「あんた達ばかり楽しんでないで、あたしにやらせてみなよ。こいつみたいな奴、くしの後のとんがったところをケツの穴につっこんでガタガタいわせてやるからさあ」

見物の中の年増の女がガラガラ声でそういうと、ワッと喚声が起りました。

「ジョ冗談じゃない。そんなことカンペンして下さいよ」

私はこの時ばかりは、本気で恐ろしくなりましたが、幸いにその残酷な刑は行われずにすみました。そのかわり休憩が終ると、今度は犬のように四ッんばいにされ、皆のスリッパを口にくわえて運ばされたり、彼女達をかわるがわる背中に乗せて狭い室内をグルグルはい廻らされたり、床がよごれたからといって、口にくわえた雑布で、掃除させられたり次々にさまざまな恥しめを受けました。

その間、私が何か失敗したり、彼女の気に入らないことがあると、ユリ嬢はタバコの火を私の裸の尻におしつけるのです。勿論軽くふれる程度ですが、その度に私は悲鳴を挙げて飛び上らねばなりませんでした。

ハタバコの火責めとは、今までマゾ小説

でも読んだことがなかったし、私自身空想

したこともなかった責め方ですが、今思い出してもゾクゾクする程、快く感じられたのは、我ながら意外です。今さらながら、自分のマビズムを再確認させられました。(タバコの火をおしつけられた箇所は小さな火傷となつて、一週間ほど私の肌に残りました)

こうして一時間以上も責められ続けたでしょう。苦痛と興奮の連続に私も流石に疲れはてて、床の上にながながとのびてしまいました。

「今日のショーは、これまで。あんた達はどう出て行ってよ」

ユリ嬢の声に見物の女たちは口々に不満そうなつぶやきをもらしながら、ゾロゾロと部屋から出ていってしまい、室内には又、ユリ嬢とカオル嬢と私の三人だけが残りました。

「フフフ：大分まいったらしいわね。どう、こんなことされて、あんな嬉しいの？」

私の身体を足先でつつきながらユリ嬢が聞きます。

「うん、とっても。もう死んでもいいくらいだよ」

「フン、やっぱり、あんたも相当のマゾね。それじゃカオルちゃん、二人でこいつにアレ

飲ませてやろうか」

そういつてユリ嬢は、カオル嬢に目くばせしてみせます。

「ウン、あたし先刻からトイレへ行きたいの我慢してるのよ」

モジモジしながら小声でカオル嬢が答えます。彼女達が私に飲ませてやうといっているもの、それは……申すまでもありません。私にとって憧れの聖水ハネクタールVのことだったのです。

「どう、変態さん。欲しい？、それとも欲しくない？」

「ほ、欲しいとも。ぜひ飲ませてください」私は心から彼女達に懇願しました。

再び私を後手に縛ると、二人はイソイソと扉に鍵をおろし、のぞき小窓も私の上着などで嚴重に掩い隠してしまいました。

彼女達が下穿を取り、ビキニのブラジャーだけの姿になって湯舟で軽く身体を流して上ってくるのを、私はまぶしい想いでながめました。正座した私の背後に、ユリ嬢が立った気配を感じたとたん、

「さあ、いくわよ」

ユリ嬢の掛声もろとも、私はグッと髪を後に引張られて後へのけぞりました。生温いシ



「ワッ」を顔中に浴び、私は夢中で、その慈雨に咽喉を鳴らしました。ユリ嬢が済むやいなや、待ちきれなくなったカオル嬢は、コントロール悪く、私の頭といわず胸といわずビショビショに濡らして終わりました。

こうして私は、生れて初めてのネクタールを一度に二人の女性から心ゆくまで拝飲することができたのです。諸先輩方の手記等と違って、彼女達が立ったままだったのには、面くらいましたが、これはこれで、いかにもドミナらしいポーズではありませんか。

「どう、おいしかった？」

私の顔をのぞきこむ二人に、私は感激をかみしめながらコックリをくりかえしました。「それじゃ最後に特別サービスしてあげる。

本当だったらマゾの人には、こんなこととしてあげないのよ。だけど、あんたは若くていい男だから特別よ」

私は今度はタイルの上におお向けに寝かされ、ユリ嬢は腿の上に、カオル嬢は胸の上にドッカとまたがりました。

あまりにも強烈な刺激の連続に頭の芯がジンとしびれてしまつて、夢うつつの内に、そのトルコ風呂を出、どこをどう歩いたのか地下鉄に乗って初めて私は我に返りました。

何と、私の家に帰るには国電に乗らなければならなかったです。その後一週間程は、頭の芯のしびれたような感じは続き、夜も昼も、その時の情景が眼の前を去らず、何かの拍子に口の中にネクタールの香りを感じました。「世の中には、こんな思いがけないすばらしい出来事があるのだ」

何度も一人でこうつぶやきました。あの時ユリ嬢は、こんなことを云っていました。

「今日はカオルちゃんが、あたしのアシスタントだけど、一昨日はカオルちゃんのところへマゾのお客さんが来たから、あたしが助手になってあげたの。いつもお互いにそうしてやるのよ。だから、あなたはあたしがプレイした六人目のマゾヒストよ」

してみると、彼女達とプレイする光榮に浴したマゾヒストが、私以外に少くとも五人は居られるわけです。その後もきつと増えていくでしょう。その方達には私のこの感動がきつとわかっていただけるでしょう。出来ることなら、お目にかかって共通の思い出を語りたいものです。

一ト月程して私は再びトルコRへ出かけました。ところが私の指名で出てきた「ユリ」という女は、あのユリ嬢ではなくまるで知ら

ない女だったのです。ユリ嬢とカオル嬢はもう二週間も前に、そろってここを辞めたことを私は知らされました。

「あら、あの時の彼氏じゃないの」

面くらっている私に一人のトルコ嬢が話しかけてきました。私は顔をおぼえていなかったのですが、それはあの時の見物の中に居た女の一人だったのです。

「ユリもカオルも辞めたけど、あたしが相手になってあげるわ。虐めてあげるからいらっしゃいな」

女は私の耳にそうささやきかけるのです。

残念ながらそれ程美しい女でもなく、この女とプレイすることは私の「マゾ哲学」が許しません。しつこく誘う女をふり切って私は帰って来たのでした。K氏に聞いたところによるとユリ嬢達は、地方都市に開業した新しいトルコ風呂に看板娘として引き抜かれたらしいとのことでした。あの時、ユリ嬢がいつていたことが思い出されます。

「あたし、もうじきマゾヒストの秘密クラブを作るつもりなの。そうしたら、あなたも入れてあげるわ。ただし入会金は十万円よ」

あるいはそのクラブがもう完成して、多勢の男達を相手に彼女達は君臨しているのかも



しれません。いずれにせよ、ユリ嬢はあのキラキラ光る眼で、カオル嬢はあの可憐な手つきで、今もどこかで男達をいたぶっているに

ちがいありません。私のマゾ遍歴は、これから一生続くことでしょう。しかしあれ程素晴らしいサジスチン

とめぐり会うことは、そしてあれ程素晴らしい体験をすることは、もう二度とあり得ないようです。 挿絵も筆者

## ☆増田みゆき夫人双胎八カ月作品分譲

### 八カ月妊孕腹鑑賞

大手札四枚一組 略号(ほち) 五〇〇円  
増田みゆき

### 懐胎八カ月の大写

大手札四枚一組 略号(ほり) 五〇〇円  
増田みゆき

### 受胎女腹の妊娠線

大手札四枚一組 略号(ほぬ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 妊婦の乳房と腹部

大手札四枚一組 略号(ほる) 五〇〇円  
増田みゆき

### 後手縛りの妊孕婦

大手札四枚一組 略号(ほか) 五〇〇円  
増田みゆき

### 八カ月の菱縄縛り

大手札四枚一組 略号(ほわ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 妊婦の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 略号(ほよ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 岩田帯をする妊婦

大手札四枚一組 略号(ほた) 五〇〇円  
増田みゆき

### 懐妊の生態を採る

大手札四枚一組 略号(ほれ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 全裸の妊婦鑑賞

大手札四枚一組 略号(ほそ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 股間縛に喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 略号(ほつ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 八カ月腹を誇張す

大手札四枚一組 略号(ほろ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 便々たる初産婦腹

大手札四枚一組 略号(ほま) 五〇〇円  
増田みゆき

### 羞らしいの妊婦媚態

大手札四枚一組 略号(ほこ) 五〇〇円  
増田みゆき

### 初産妊婦開股縛り

大手札四枚一組 略号(ほえ) 五〇〇円  
増田みゆき



## 連載小説

はなとへび

花<sup>はな</sup>

と

蛇<sup>へび</sup>

団

鬼 六

## 続編(第二十五回)

## カメラと令嬢

義雄にとって、それは、長年、夢に描いていた光景でもあり、正しく、勝利の一瞬であった。

その物凄まじい光景に、義雄は、ギラギラと眼を輝かせ、相ついで放出されるそれを、じっと観察しつつけるのである。

如何にも、深窓の令嬢らしい華奢な雪白の肩先や、高く吊り上げられているスベスベした象牙色の内腿あたりが、その発作の都度、ブルブル小刻みに慄えるのである。

縄にきびしく上下をしめ上げられている柔かい胸の盛り上りが、切なげに大きく息づき始める。

「——ああ、あつ、あ——」

放出の度に、小夜子は、火のように燃えたった美しい顔を大きく円を描くようにして、くねらせつつけ、舌足らずのうめきをあげるのだ。

ようやく、発作は、おさまりかけたが、小夜子は、もうどうしようもなくなかったよう、のけぞると艶やかなうなじを見せた。その時、羞恥の極の後産でもあるかのようにすさまじい勢で放水が始まったのである。

小夜子は、紅潮した横顔を見せながら、身動きもせず、そして、もうこれで、一切が終りだというような悲しい感懷をこめて、遂に女の羞しい生理のすべてを、堂々と義雄の眼前にさらけ出してしまったのだ。

「いいんだよ、小夜子。夫婦じゃないか、そんなに羞しがる事はないさ」

最後の一滴が落下するまで、つぶさに観察した義雄は、ニヤリとして小夜子の首の方へ這っていき、熱気を帯びた小夜子の両頬に手をかけて、その美しい顔をじっと見つめる。

「愛しているよ、小夜子」

義雄は、うっとり眼を閉ざしている小夜



子の顔を愛撫しながら、そっと、唇を近づけていった。

義雄の唇が、小夜子の羽毛のように柔かい紅唇に触れる。すると、小夜子は、小さく口を開いて、舌をのぞかせ、義雄の口の中へ、そっと差し入れるのだった。

とうとうこの男に、魂までも、もぎ取られてしまったのだ、といった諦感が、小夜子の全身を包んでしまったのである。

義雄は、そっと、唇を離すと、小夜子の線の美しい繊細な鼻を指でつつきながら、  
「ね、小夜子、僕は、君の肉体の何から何まで、一切、この眼で見ってしまったんだ。親にも、恋人にも見せられない小夜子の秘密を僕だけが知ったようなものだ。わかるね」

小夜子は、軽く瞑目したまま、上気した顔を小さくうなずかせる。

「もうこれで、誰が何といおうと、小夜子は僕の妻だ。そうだね」

小夜子は、顔を伏せるようにして、再び、消え入るようにうなずいた。

「そんなに、モジモジしてばかりいず、僕の顔をはっきり見て、返事するんだ」

義雄に、頬をつつかれた小夜子は、夢見るように、そっと眼を開き、黒眼がちに澄んだ

キラキラする美しい瞳に、羞恥の感情を濡らさせて、義雄を見上げるのであった。

「小夜子は、もう、あなたのものですよ」

小さく、ささやくようにそういった小夜子は、初々しい羞恥の紅をさっと耳たぶにまで浮かべて、視線をそらせてしまうのである。

「よし、これで、僕も一安心だ。じゃ、きれいに掃除してから、足の縄を解いてあげるからね」

義雄は、楽しそうに口笛を吹きながら、再び………を取り上げて、徹底的に責めあげたその二つを丹念に掃除してやる。

小夜子は、綺麗に揃った柔かい睫毛を、くすぐったそうにしかめながら、義雄のするがままに任せている。

義雄は、仕事が終わると、上体を起して、高々と吊り上げられている小夜子の足首にかけられた皮紐を解き始めた。

どさりと、美しい両肢は、夜具の上に落下したが、小夜子は、すぐに、肢をちぢめたり閉じ合ったりする気力もなく、あられもなく、八の字型に投げ出したまま、しばらく静止してしまっている。

やがて、深く息を吸いこんだ小夜子は、徐々に、肢をひき、小さくちぢめようと動かし

かけたが、義雄は、その華奢な、それでいて官能的な曲線を持つ小夜子の肢をやにわに引きつかみ、足首を押さえて、力一杯、左右へ押し拡げるのであった。

小夜子は、義雄にされるがままである。

義雄は、子供が積木遊びをするように、陶器のように白い、形の良い小夜子の肢を拡げたり、ちぢめたり、折り曲げたりして、ふざけ出したが、小夜子は、まるで骨のない体操人形に化したよう義雄の手で、自由自在にあやつられている。

もう為す術はないといった敗北感に身をさらしているのか、小夜子の美しい顔は、仰向いたまま、放心したように、ぐったりとなっていた。

義雄は、ようやく、立上り、小夜子の肩に手をかけて、彼女の上体を引き起し、抱きしめるようにして、耳たぶや、首筋、咽喉、そして、縄に締めあげられている乳房、乳首にまで、柔かく口吻しながら、  
「じゃ、小夜子、いよいよ君を、完全に僕のものにするよ。いいね」

小夜子は、すすりあげつつ、小さくうなずいて、義雄の胸に頭を埋めるようにするのだった。



女として、耐えようのない生恥をかかされたあげく、この卑劣漢に、いよいよ純潔を奪われるのだという口惜しさ、と同時に、みじめな自分に対するあざけりとで、小夜子は、たまらなくなり、義雄の厚い胸に顔をすりつけるようにして、泣きじゃくり出したのである。

「は、はずかしいわ。小夜子、死にたい程、はずかしいのよ」

絹糸のように、小さなすすり泣きをつづける小夜子の房々した黒髪から、甘ずっぱい香水の匂いが、プーンと匂って来て、義雄の胸を切ないばかりにときめかす。

義雄に抱きかかえられている艶々と光った冷たそうに見えて、暖い小夜子の雪白の肌。

義雄の胸の表皮をくすぐる、ふっくらした白桃のような乳房。象牙色のスベスベした背中の中程に麻縄で縛り合わされている可憐な白い手首と、白魚のように美しい華奢な指先。

義雄は、そんなものを見ているうち、息苦しいばかりの高ぶりを覚えて、ほんのりと翳を作っている、柔かそうな……眼を向けるのだったが、そうだ、その前に、と口の中でいい、身を起すと、カメラに三脚を取りつけ、セルフタイマーを装填するのである。

小夜子は、涙にうるんだ美しい黒眼をふとその方に向け、不安な表情をする。

「楽しい夫婦プレイに入る前に、二人の仲のいい記念写真をとっておこうと思うんだよ。この写真さえとっておけば、鬼に金棒、僕はいいよ安心出来るというわけさ」

といいながら、義雄は、小夜子の背後へ廻って、縄を解き始める。

「いいかい。君と僕とが、熱烈に愛し合っているというポーズを、はっきりカメラに撮っておくんだ。さ、僕の膝の上に、お尻を乗せてごらん」

義雄は、柔かい小夜子の肩を抱き寄せるようにして、後向きに膝の上へ乗せあげようとする。

「ど、どうして、そんな写真を撮らなきゃならないの」

小夜子は、義雄に抱きすくめられ、腰を義雄の膝の上へ落としたが、眼の前に配置されているカメラを見ると、はっと顔をそらせ、両手で乳房を抱いて、前かがみに上体を伏せようとするのだ。

「駄目だよ、そんなに固くなっちゃ。もっと体を柔らかくして、肢を開くんだ。それからおっぱいも、ちゃんと見せなきゃ駄目」

義雄は、乳房を押さえている小夜子の両手を外させ、自分の肢を使って、小夜子の肢をからめ取るようにし、強引に開けさせて、色々ポーズの演出にかかるのである。

「そ、そんな——嫌、嫌」

義雄が、小夜子の華奢な白魚のような指先に……せようとすると、ぞっとする衝動が体の内部から吹き上げて来て、小夜子は、首を振り、義雄の膝の上で、がたがた慄えるのである。

「こういう写真を撮っておこうというのはだね、小夜子の、僕に対する気持を決定的にするためなんだ。この写真が僕の手元にある限り、小夜子は僕を裏切るって事は、まず出来ないからね。それに、小夜子のパパだって、同じ事さ。この写真がある限り、君のパパから、いくらだって、お金を引き出す事が出来るってわけだよ」

小夜子は、義雄が含み笑いしながら語るそうした言葉に、憎悪を覚えながらも、反撓する気力はもうなかった。

義雄のねばりつくような動作に抗し切れず人形使いにあやつられる人形のように、左手をねじ曲げるようにして、義雄の首にからませ右手でそのおぞましい……りしめ、極



端な位に肢を開かされてしまう。

「そうだ。きっと、すばらしい作品が出来るよ、小夜子」

義雄は、小夜子の頬に自分の頬をびったりと当てがった。

「このまま、カメラにしっかり顔を向けるんだ。悲しそうな顔しちゃ駄目だよ。幸せそうに、ニッコリ笑うんだ。いいね」

セルフタイマーの長い管は、からみ合っている二人の傍にまでのびている。それに義雄は手をのばした。

「さ、ニッコリ笑うんだ、小夜子」

ジーとタイマーは音をたて始める。

義雄は、左手を小夜子のふくらした乳房の下へ、右手は小夜子の敏感な――。

「笑うんだよっ、小夜子」

頬を小夜子の耳もとにすり寄せるようにして義雄は声を大きくする。

小夜子は、はじかれたように、うるんだ美しい黒眼を開いて、真珠のような白い歯をのぞかせ、ひきつったような笑顔を作るのであった。

シャッターは切れた。

その瞬間、小夜子は、いよいよこれで、義雄の奴隷になったのだというクサビが音を立

てて打ちこまれたような気分になったのである。

義雄の力がゆるんだので、小夜子は、義雄の膝から滑り落ちるようにして、その場に身を伏せ、肩を震わせる。

義雄は、片頬に薄ら笑いを浮かべて、小刻みに震えつつける、小夜子の雪白の肩と、ゆるやかなカーブを描くヒップの線を眺めつつける。

さまを見る、これでお前は、もう日の当る場所へは出られねえのだぜ、と義雄は、復讐を成功させた喜びを、ぞくぞくした思いで噛みしめているのだ。

冷やかなうちに気品を漂わせた美しい深窓の令嬢は、卑劣なペテン師、義雄とからみ合って、醜悪無残な写真をうつされ、その一生を微塵に打ちくだかれてしまったのである。

小夜子のきらめくような肌の色と華奢で、しなやかな、それでいて、むっちりとした成熟した肢体に、じっと眼を注ぎつづけていた義雄は、ふと、冷酷な表情になって、泣き伏している小夜子の肩に手をかけて、上体を引き起す。

「ね、小夜子。せっかくの機会だ。一枚だけじゃつまんない。以前の小夜子の恋人やボー

イフレンドにも進呈しようよ。色々なポーズのやつを撮ってね」

それを聞くと、小夜子は、わっと、義雄の膝に顔を埋めて、号泣し始めた。

「御生ですっ、それだけは許して。これ以上小夜子に生恥をかせしないで、お願いです」  
「あそこだけの写真や小夜子の体から出たもの送ったぐらいじゃ彼等は満足しないよ。やっぱり、本格的なものが必要さ」

「嫌、嫌、そんなものを送るのなら、小夜子は、舌を噛んで死にます！」

小夜子は、義雄の体に取りすがるようにして、激しく泣きわめくのである。

「夫の命令する事に、さからうのかい、小夜子」

義雄は、急に語気を強めていった。

「小夜子が、そんなに嫌がるってのは、まだ内村春雄に充分未練があるという証拠じゃないか」

泣きすぎる小夜子をわざと突っ離すようにして立上った義雄は、カメラの所へ行き、フィルムを巻いて、再び、セルフタイマーの支度にかかるのである。

おどされたり、叱咤されたりして、小夜子が再び、義雄とからみ合う事になったのは、



それから、三十分後であった。

ここまで来て、静子夫人や文夫達の救出をあきらめるのか、という義雄の切札がやはりものをいったのであろう。

人間的感情の一切をかなぐり捨てたような冷淡な表情をつくった小夜子は、催眠術にかかったよう義雄の命ずるポーズを、さしてためらいもせず、とるようになったのである。

小夜子の顔は、克明に写すのだが、義雄は「僕はお尋ね者だから、顔が写るとまずい場合がある」

といって、シャッターが切れる直前、小夜子の頬へ顔を隠すようにするのである。

「次はね、小夜子、ちょっと、…………みようよ。リアルなものも必要だ。彼等が一番、期待しているやつだ」

小夜子は、もう意志を失ったロボットのよう、義雄に命じられるまま、彼の膝の上に………た。

………せると同時に、義雄の首に両手を巻きつけた。唇も合わせた。

シャッターが切られる。

義雄の膝の上に、前向きに跨がったり、後向きに跨がったり、そして、小夜子は、凄惨なばかりの冷淡な表情と、悲しく研ぎすまさ

れた黒眼をカメラのレンズに向けるのであった。

そうした色々なポーズを義雄に強制されていくうち、小夜子は、辛いとか苦しいとかいった気持は何時しか遠ざかり、一種の倒錯心理に落入って行き、転落していく女のみじめな心地良さといったものがわいてくるのである。

——お許し下さい、神様、小夜子は、とうとう地獄の底に落ちてしまいました——

カメラのシャッターが、パチリと非情な音をさせて切れる毎、小夜子は、心の中で祈るようにつぶやき、カメラに向けて、無理に作った笑顔を悲しい表情に変えるのであった。「ご苦労だったね、小夜子、これ位でいいだろう」

義雄に、ようやく解放された小夜子は、彼の膝から、降りると、両手を交錯させるようにして、乳房を抱きしめ、立膝を組んで、消え入るように身をちぢませるのであった。

「ま、しばらく、一服しなよ」

義雄は、こちらへ背を向けている小夜子に向かって、口元を歪めていい、煙草を口にしないで、火をつける。

未だ処女である小夜子にそうしたポーズを

とらせて写真をとったという事が、義雄は、楽しくて仕様がないう風であった。

世間広しといえども、処女をモデルにしたこの種の写真はまずあるまい、と義雄は、煙草の煙を吐きながら北叟<sup>ほくそ</sup>笑む。

それよりも、これで、この大家の令嬢が、今後は何でも自分の思いのまま、つまり、生かすも殺すもこちらの自由になったという思いが痛快なのである。

こういう写真が俺の手元にある限り、このお嬢さんは、一生、俺の傍から離れる事が出来なわけだ。と義雄は、なめし皮のように艶々光っている小夜子の肌の見事さを凝視しながら、楽しい空想にふけり出す。

この写真を何百枚、何千枚と焼増しして、小夜子の学校時代の友人から、現在に至るまでの交友関係の一切を調べあげ、送ってやったとしたらどうだろう。恐らく小夜子は街を歩こうという気持さえなくなるに違いない。人前に顔を出す気力もなくなり、人の眼のどこかぬ穴倉のような所で暮す事を望むようになるだろう。

こうした考えが浮かんだ義雄は、満足げに大きくうなずくのであった。その奇抜な着想を義雄は実現する気になったのである。



小夜子の交友関係を調べるのは簡単だ。小さな興信所へ頼んでも、喜んで調べるだろうし、小夜子の卒業した学校へ行けば、卒業者名簿というものがある。その他、小夜子が、内村春雄などと一緒に遊びに行ってた赤坂のナイトクラブ、麻布の酒場、そうした場所のホステスやバーテンに至るまで、バラまいてやる——。

そういう風に公開をはばかる羞しい自分の写真が、交友関係の隅々にまで行き渡ったと知った時、小夜子は、どうするだろうか。何とかして、この屋敷から逃げ出したいという気持は喪失し、逆に、この屋敷内に永遠に住みつく事を望み出すだろう。小夜子は、今までの大金持の令嬢としての派手で豪華な生活とは完全に訣別し、俺の奴隷として一生、奉仕せねばならなくなる。

ま、あわてる事はない。それよりも、まずとどめを刺すことだ——と義雄は、煙草を灰皿にねじこむと、猿のように身をちぢませている小夜子の肩に両手をのせるのだった。

「さ、小夜子、これで、すっかり自信がついたろう。何時までも、娘のままじゃ可哀そうだ。じゃ、本格的なプレイを開始しようか」  
乳房を両手で覆いながら、一層小さく身を

ちぢませる小夜子に、義雄がそういった時、ドアをノックする音。

「誰だい」

燃えさかり出した炎に突然、水をぶかけられた思いで義雄は不快な顔つきになった。

「銀子です。大阪の岩崎親分からの、お電話ですが」

そうかと、義雄は、あわてて立上り、下着をつけ始めた。

岩崎親分なれば仕方がない。義雄は、ランニング姿のまま、ドアを開け、立っている銀子に、

「すまないが、小夜子嬢を、お風呂へ入れてやってくれないか」

そして、義雄は、銀子の耳に口を当てるようにして、

「まだ本番はすましちやいないんだ。浣腸をしてやったりして、時間をくっちゃまった。しばらく、彼女のお守りを頼むよ」

と、いい残し、廊下をかけて行った。

## 女 奴 隷

小夜子は、ガラス窓から、田代邸の広大な芝生や美しい築山が見通せるタイル張りの浴

槽にぼんやりと浸っている。

義雄に気も狂うばかりの羞しい責めを受け綿のように疲れ切った体を、銀子と朱美に抱きかえられるようにして、この豪勢な浴室へ連れこまれたのだ。

「よく体を洗うんだよ。とくに浣腸された個所なんかをね。フッフ」

銀子は、浴室へ小夜子突き入れるようにすると、手拭を投げて、そんな事をいい、ピシヤリとガラス戸を閉めたのだ。

今、小夜子は、浴槽の中で、艶々しい首筋に手拭を当てつつ、うつろな瞳を窓外に向けている。

小夜子は、もう、何を考える気力もなかった。ただ、はっきりした形をとって、小夜子の心の中を占めている事は、義雄に対して、自分は完全に屈服、魂までも、もぎ取られてしまったという事である。

それにしても何という卑劣な男であろう。骨も肉も、バラバラになるような、羞しい責めを加えておきながら、まだ、それだけではあき足らず、ああした写真まで——。

小夜子は、もうそれ以上、想い出す勇氣はなかった。

この浴室を出れば、再び、義雄の手で、今



までもまして、恐しい責め苦の中に立たされるのだ。いや、それよりも、義雄は、たった今、写したあの恐ろしい写真を、本当に、内村春雄のもとへ送る気にいるのだろうか。考えるまいとしても、冷静になればなるほど自意識が戻って来て、小夜子は、一そ、舌でも噛み切りたいほど、苦しい、羞しい思いになるのである。

急に浴室の外が賑やかになった。

銀子、朱美、義子、悦子、マリなど、葉桜団のズベ公グループが、何か、大声で話し合い、キャッキャツと笑い合っている。

彼女達は、今まで、鬼源の調教を手伝っていたらしい。

「でもさ、日本髪姿になった静子夫人、すごく綺麗。水もしたたるいい女っつのは、ああいうのをいうんだろね。見ていてポーとなっちゃった」

密室で、静子夫人を調教中の鬼源と川田に手伝って来たという悦子とマリが、仲間にしゃべっているのである。

「じゃ、いよいよ静子夫人、捨太郎とおっぱ



じめるわけね」

「そう。土蔵へ監禁されたお静が、お尋ね者に扮した川田さんと捨太郎の二人に、無茶苦茶にされるってわけよ。鬼源さんが、脚本を書いてさ。お静も、お尋ね者も台白があるんだけど、捨太郎の馬鹿は、全然、覚えられないの。ありゃ、やるだけしか能のない男ね。」

やっぱり」

「それで、捨太郎と静子夫人、やったの」

「馬鹿ね。稽古中にそんな事しちゃ本番の時いう事がきかなくなるじゃないの。そっと、表面を……すだけよ」

ズベ公達は、どっと笑った。

「あたいはさ、美津子と文夫の方をのぞいたんだけど」

と、朱美が、今朝方、鬼源に調教されていた若いコンビについて、しゃべり出す。

「こっちは、ぴったんこと、本格的さ。お尻の振り方も、上手になってね。それに、美津子が、とても可愛い。髪に可愛いリボンなんかつけちゃってさ。ねえ、あなた、美

津子、今が最高に幸わせよ、なんて、甘い声を出してんの」

「あら、そっちの方も、やっぱり、台白があるわけ」

「そうさ。規定の十五分間、ただ、ギッコンギッコンやってるばかりじゃ面白味がないんで、鬼源さんが、二人に交互に台白をいわせ



るようにしたのよ」

「そりゃ、傑作だわ。でも、文夫が十五分もがんばれるようになったとは大した進歩ね」  
「途中で駄目になりや附根のあたりにヤイトをするっていう罰則をつくったのよ。それよりも、文夫が、がんばれるようになったのは美津子の内助の功ってわけね。文夫の様子から、危いと感じると美津子は、………めてあなた、お願い、がんばって、と文夫の肩に噛みついたりし、いじらしい位に夫に尽すのよ。見ていて、感心しちゃった」

そうした、ズベ公達の話は、嫌でも、小夜子の耳に入ってくる。

小夜子は、あまりにも、ショッキングな彼女達の会話に、たまらなくなつて、耳を手で覆った。

ガラガラと浴室のガラス戸が開いた。

五人のズベ公は、異様に光る無気味な瞳を一せいに小夜子に注いだ。

「のんきに、何時までも入ってるんじゃないよ。さ、出ておいで」

朱美がスリッパをひっかけ、浴室へ入ると、他のズベ公も、そろそろ入ってくる。

小夜子は、新たな恐怖に頬を硬張らせ、浴槽の中で後退した。

「出るといってるんだよ」

朱美は、険しい眼つきになっていた。

朱美にせよ、銀子にせよ、こうしたズベ公達は、金持の娘や器量のいい女に対しては、妙な敵愾心を持つ習慣がある。

とりわけ、小夜子は、資産家の娘であり、天性の美貌を備えているのであるから、ズベ公達は、一様に陰険な眼を光らしている。

小夜子は、ズベ公達にせかされて、浴槽から上った。

片手で両乳房を隠し、手拭を前へ当てながら、小夜子は、ズベ公達の邪惡な眼に射すくまれたようにして、その場に立っている。

乳白色の高貴な艶を持つ肩から胸元、むっちりとした肉の突った、それでいて、透き通るような色の白さを持つ腰部から、太腿あたり、そうした美しい小夜子の肢態を、ズベ公達は嫉妬と羨望のこもった瞳で、じっと見ていたが、悦子が、横から、いきなり、ひったくるようにして、前を隠している手拭をもぎ取った。

小夜子は、はっとして、ほんのり翳<sup>かげ</sup>をつくられている………隠し、ベソをかきそうな表情で、周囲を取り囲むズベ公達に眼を向けるのであった。

「体をあたいた達がふいてやろうってんだよ」

と悦子がいい、

「でも、あんた、本当に、綺麗な体をしているわね。ちょっと、両手を頭のうしろで組んでみな」

と朱美がいう。

こうしたズベ公は、時には、男達より、残忍な狂暴性を発揮するものである。

それがわかっていているから、小夜子は、嫌惡の戦慄に身を慄かせながらも、静かに、両手を頭のうしろへ廻していく。

「小娘じゃあるまいし、ガタガタ震えるんじゃないよ。ちゃんとポーズを組んでみな」

朱美は、大声で、小夜子を叱咤する。

やがて小夜子は、外国のヌードモデルがよくとる排発的なポーズを、ズベ公達に組ませられ、命じられるままに、うっとり眼を閉ざし、唇を心持前へ、突き出すようにして見せる。

ヒヤーと、ズベ公達は、声をあげて拍手する。

「じゃ、次は、バレリーナのように、爪先で立ち、片足を上げてみな」

朱美は、次に、そんな事をいい出した。

小夜子は、こらえ切れなくなつて、朱美の



方へ、冷たい視線を向けた。

「貴女達にまで、どうして、私が、いじめられなきゃならないんです。ね、どうしてなんですか」

小夜子は、齒を喰いしばった表情で、はね返すようにいったものの、あまりの口惜しさに両手で顔を覆い、わっと泣き出すのであった。

朱美は、鼻に小じわを寄せて、

「ずいぶんと生意気な口をきくじゃないか、え、お嬢さん。資産家の娘か財産家の御令嬢か知らないけれど、今のあんたは、犬や猫も同然さ。そんな生意気な口がきけなくなるように葉桜流のお仕置を受けさせてやろうか」と、泣きじゃくる小夜子を睨みつけるようにして朱美は凄む。

「ちょっと、お待ちよ、それには、まず、津村さんの許可がいるよ。今日一日は、このお嬢さん、彼のおもちゃなんだからね」

と、銀子が手をあげる。

「だって、銀子姐さん。この娘、ここへ来た日から、何となく生意気じゃありませんか。一つ、ヤキを入れておかないと、葉桜団の名折れですよ」

などと、朱美は口をとがらして、銀子にい

った。

「じゃ、あたいが、津村さんの所へ一足先に行つて、相談してみるからね。あんた達は、あとから小夜子を女中部屋へ連れて来な」

と銀子はいい捨て、小走りにかけ出して行った。

「朱美姐さん、面白いものがあるよ」

と、チューインガムをぺっと吐き出したマリが、ジープンのうしろポケットの中から、

犬の首輪をとり出した。

「このお屋敷で飼っているセパートの首輪だけど、どう、このお嬢さんに似合わないかしら」

マリは、今朝方、犬の首輪と鎖を表で買って来いと田代に頼まれ、それをまだ田代へ渡すのを忘れて持っていたのだという。

「そりゃ、傑作だわ」

朱美と義子が、マリの手から、それを取つて、小夜子の首にはめこもうとするのだ。

「な、なにをするんですっ」

小夜子は、左右から、悦子とマリに、両手をかいこむように抱きこまれてしまい、激しく首を振つたが、朱美と義子は、小夜子の黒髪をひきつかむようにして、嫌がる小夜子の首に犬の首輪をまきつかせてしまった。

「フフフ、よく似合うわよ、お嬢さん。さ、次は、四つん這いになって、ここから、部屋まで歩いて行くんだ」

もうどうともなれとばかり、その場に茫然と立ちすくんでしまった小夜子の首輪に、長い鎖を通しながら朱美が調子づいていう。

「ぼんやりしてないで、四つん這いになるんだよ」

朱美が、再び、耳もつんざくばかりの大声を出して、どなる。

その声にはじかれたよう、小夜子は、ふらふらと、身を低め、胸の中に、こみ上ってくる口惜しさと悲しさを噛み殺しながら、膝を折り、両手を前についた。

「駄目よ、肢を曲げちゃ。ちゃんと膝を上げて、お尻を上へ持ちあげるようにして歩きなよ」

悦子が、小夜子の尻を足で蹴った。

小夜子は、屈辱の口惜し涙を流しつつ、膝を上げ、両足を踏んばるようにして、四つん這いになる。

朱美は、鎖をぐいと引っ張って、

「さ、歩くんだよ。お仕置場までね」

小夜子は、鎖で、首輪を引っ張られ、すすり上げながら、両手と両足を使って、ゆっくり



り歩き始めたのだ。

「黙って歩くなんて、芸がなさ過ぎるわ。雌犬らしく、ワンワンと吠えながら歩きな」

義子が、屈辱の極にあえぎつつ、かたく眼を閉ざして歩きつづける小夜子の横顔をのぞき見て哄笑する。

「さ、吠えないか」

朱美は、ぐいと鎖をひき、義子と悦子は、小夜子の背や尻をスリッパで、引っ張たく。

「——ワ、ワン、ワン」

小夜子の心臓は、口惜しさのあまり、張りさけそうになり、血の気は消え、美しい額からは汗がタラタラと流れ出た。

風呂場のガラス戸を開け、ズベ公達は、四足になって歩く小夜子を愉快そうに引きずりながら、出て来る。

女中部屋までの長い廊下を、ズベ公達は、小夜子を四つん這いにさせたまま、歩かせて行こうというのだ。

小夜子のむっちりとした肉の突った白い尻の動きを後から眺めつつ歩いていたマリは、急にプツと吹き出して、

「ちょっと、悦子姐さん、ここから見てごらんよ。大事なところが丸見えだわ」

どれどれ、と悦子や義子がのぞいて、クス

クス笑い出す。

「まあ、いやーだ」

朱美も、のぞいて哄笑したが、小夜子は、もう気持が顛倒してしまって、そうしたズベ公達の嘲笑や冷笑も耳に入らなかった。

「そら、吠えるのを忘れちゃ、駄目じゃないの」

「ワ、ワン、ワン」

小夜子の閉じ合わせた眼尻から、とめどなく涙が流れ落ちていく。

「さ、次は、こいつをくわえて歩きな」

悦子は、何時の間に取ったのか、自分のパンティを四足で歩みつづける小夜子の前に投げ出した。

「フッフ、見覚えがあるでしょ。それは、最初、あんたがはいっていたものさ。あんたにはもう必要がないから、あたいが頂戴しておいたのよ。さ、それをくわえな」

小夜子は、そっと開いた眼を物悲しげに細めて、それを見たが、ズベ公達に再び、尻を蹴られて、せき立てられると、小夜子は、屈辱をぐっと呑みこみ、それに唇を近づける。

深窓に生まれ育った、真珠のように美しい肌を持つ小夜子は、遂に、こうしたズベ公達にいたぶられるまま、パンティを口にくわえ

犬のように四足となり歩き始めたのである。

丁度、その頃、二階のホーム酒場では、義雄が、田代と森田二人を相手に、ウイスキーを飲みつつ、ひそひそと密談していた。

カウンターのの上には、先程、小夜子の様々なポーズをとったカメラと、テープレコーダーなどが置いてある。

「なるほどね。そりゃ中々面白い思いつきですよ。わかりやした。それじゃ、今夜中に、うちの専門家を呼んで、二、三百枚も焼付けておきましょう」

と、森田は、義雄のグラスにウイスキーを注ぎながらいった。

義雄は、小夜子を社会的に葬むるため、このカメラにおさめられているフィルムを大量に焼増ししてくれるよう森田と田代に頼んだのである。

「なかなか思い切った復讐ですな」

田代が、赤ら顔をさすりながらいった。

自分を裏切った女に対する復讐だと義雄はいうのだが、いわば、社長令嬢に、社員の一人在横恋慕したただけの話、小夜子の純潔を奪うだけでは満足せず、小夜子のヌード写真や秘密写真などを彼女の知己へバラ散くという義雄の異常さには、さすがの田代も舌を巻く



のであった。

「僕は、小夜子一人に復讐するのではなく、彼女の父親が経営する宝石商会に対しても復讐してやるんですよ。あの会社は、僕を横領犯人として告訴しましたからね。小夜子の傑作写真が会社の取引先などへ送られたとしたら、会社も社長も、全く世間へ顔向けが出来なくなる。信用も何もあったもんじゃない。万一、小夜子が、それを辛さに自殺したとしてもですよ、この写真のネガがある限り、僕は、あの宝石商会を何時までもガタガタ揺すりつづける事が出来るというわけです」

義雄は、得意になって、しゃべりつづけるのだった。

たしかに、この男は、悪にかけては、天才的だと、田代と森田は顔を見合す。

たとえば、小夜子が自殺しても、このネガがある限り——というその恐ろしいばかりの割り切り方、悪党としては、俺達より数倍も上だと田代も森田も、義雄に対し、畏敬のようなものを覚えた。

「よろしい。協力致しましょう。俺も、小夜子の父親には、大いに恨みがある」

と田代は、何時であったか、小夜子の身代金一千万を受取りに行き、危く、その筋の者

に捕縛されかけた顛末を語った。

「一千万とは安い。あの娘は、少くとも、一億の価値はありますよ」

と義雄はいつて、グラスのウイスキーを一息に飲み、

「しかし、人間、金に眼がくらんで、一気に事を起そうとすると、とんだ失敗をしますからね。誘拐犯罪が失敗するのは犯人が身代金を奪おうとするからです。それよりも、あれだけの美貌と美しい体をした娘なんですから静子夫人同様、大いに磨きをかけて、安定した商品に作り変えた方が賢明だと思います」

何だか、この若いペテン師に、こんこんと意見をされているようで、田代も森田も苦笑いするのだったが、

「それじゃ、お説に従って、小夜子は商品として、明日から、鬼源をつけ、徹底的に調教する事にしよう。ところで、小夜子の水揚げはすんだのかね」

田代は、ニヤリとして、義雄の顔を見た。

「楽しみはこれからですよ。さっき、一寸、小夜子の感度をテストしてみたんですがね、びっくりしましたよ。大体、深窓の令嬢ってのは、見かけとは逆に早熟なんですね。……がすごいんですよ」

そんな話を義雄は、顔色一つ変えず、すましてこんで語るのだった。

「それに、小夜子は明日になれば、この屋敷から僕に連れ出してもらえると甘い希望をつないでいるんですよ。それがこっちのつけ目です。僕は、それを口実にして、彼女に極端なポーズをとらせ、あらゆるテクニックを使って、女の悦びを徹底的に教えてやります。明日から、鬼源さんの調教に耐え得るような肉体に作り変えてやりますよ」

「明日になって、君にだまされた事がわかったら、あのお嬢さん、さぞ、君を恨むことだろうな」

田代は、笑いながら、葉巻をとって、口にする。

「フッフ、あとの祭ってやつですよ。可哀いそうだが、だまされる方が悪いんだ」

そういつて、義雄も紙煙草を口にしたが、ふと、思い出したようにいった。

「そうだ、すっかり忘れていた。さっき、岩崎親分から電話がありまして、今夜、十一時頃、ここへ着く予定だそうです。それから、ショーの見物は、明日でいいから、今夜、いい女の世話だけは忘れるな、という事です」

「よし、わかった。岩崎親分の趣味は、よく



わかってますぜ。親分のお好みは、何てたって、日本髪や和服のよく似合う年増美人だ。となりや、やっぱり、静子夫人」

と、森田がいそいそとして腰を上げ、田代の顔を見る。

「その通りだ。じゃ、森田親分、静子夫人を調教している鬼源に、稽古はそれ位で打切つて、夫人を風呂へ入れさせ、入念に化粧させるよう伝えてくれないか」

「へい、かしこまりました」

森田が出て行くと、それと入れ違いに、銀子が部屋へ入って来た。

「なんだ、津村さん、ここにいたの。ずいぶんと探したわ」

銀子は、ほっとしたようにスタンドへ近づいて来る。

「小夜子は、風呂から上ったかい」

義雄が腰を上げようすると、銀子は、それを押しとどめるようにして、

「その事なだけでさ。あたい達に一寸、小夜子のお仕置をさせてくれない？」

「お仕置？」

「そう。あの娘、とても傲慢なのよ。あたい達が体を洗ってやろうとするね。私は、村瀬宝石商の娘よ、あんた達のようなズベ公と

口をきくのさえけがらわしいわ、なんていっちゃって、風呂の湯をぶっかけたりすんの。朱美がカンカンになって怒っちゃったのさ」

ああいう生意気な鼻は、今のうち、へし折っておかないと調教する時、色々と面倒が起る、などと銀子は、しゃあしゃあとした顔でいうのである。

スタンドに坐っている田代が、皮肉な笑いを口元に浮かべて、

「嘘をつけ。あの御令嬢が、そんな事をいうもんか。お前達は、何のかんの理屈をつけて処女をおもちゃにしたいんだろ。女のくせに悪い趣味だぞ」

という、銀子は、頭に手をやって、舌を出す。

「だってさ、あの御令嬢、体の線がすばらしく綺麗だし、あれがまた、こんもりとして、いい艶を出しているでしょ。朱美は、ああいう娘を見ると、どうしても一度、さめざめと泣かせてみたくなるのね」

義雄は、興味深げに銀子のいう事を聞いている。

「朱美はうまいのよ。どんなお堅い生娘でも指先一つでワンワン泣かせてしまいうし、それだけじゃなく、あれから、せせらぎのような

素晴らしい音楽をひき出す事が出来るのよ。処女泣かせの名人さ。どう、津村さん、見物してみない？」

朱美は昔から同性愛にふけていたそう一度、朱美の技巧を受けた女性は、なかなか彼女から離れられなかった、と銀子は、義雄に説明するのだった。

女が女にほどく技巧、それは、どんなものか義雄には想像出来なかったが、大いに興味はそそられたし、責め手が女であるという事は、ふと、陰微な物凄さが想像出来る。

義雄は、カウンターの上のテープレコーダを取って、銀子の方へ押しつけるようにし「今、君は、せせらぎのような音楽を引き出せるといったね。それが、これに録音出来る自信があるなら、小夜子を貸してもいいぜ」「あるわ」

銀子は、いたずらっぽく笑って、テープレコーダを受取った。

「じゃ、どうぞ、こちらへ、フッフ」

銀子は、鼻唄を歌いながら、先に立って歩き出した。

「社長、のぞいて見ませんか」

義雄は、田代を誘う。

田代は、二つ返事で立上った。



「とにかく、あの令嬢は、肉体的には非常に敏感です。レスポスのベテランのズベ公が、それをどんな風に責めるか、後学のために、拝見しようじゃありませんか」

## 口惜しき陶醉

女中部屋の前まで来ると、中から、レコードのジャズ音楽が流れて来た。

電気ギターを主にした、馬鹿に賑やかな音楽である。

田代と義雄は、小首をかしげて、そっと、ドアを開けると、小夜子が、生まれたままの姿で、モンキーダンスを踊らされていたのである。

ズベ公達が手をたたいて、拍子をとる、その中で、深窓の令嬢は、涙も涸れ果てた顔を正面に向けつつ、レコードのリズムに合わせて体を揺りつづけているのだ。

「そんなおしとやかなダンスは駄目だよ。もっと、リズムに乗って、ケツを振るんだ」

ズベ公達は、声をかける。

ナイトクラブなどへ、ボーイフレンド達とよく出かけていた小夜子は、サーフィンにせよ、モンキーダンスにせよ、流行のダンスは

一応身につけていた。それをズベ公達も知っていたから、面白がって、そんな姿のまま、小夜子にモンキーダンスを無理やり踊らせたのである。

ズベ公達に号令され、犬の鎖でムチ打たれた小夜子は、ベソをかきそうな表情で、急テンポなリズムに合わせて、尻を振り肢をあげ、柔軟な白い腕をうねらせる。小夜子の柔かい二つの乳房と美しい腰の線が、揺れ動き、ズベ公達の間からは、吐息と興奮が渦巻き上るのだった。

全身を羞恥と屈辱に波打たせながら、小夜子は踊りつづけるのだったが、その泣き濡れた瞳に、ドアの所に立って、こっちを眺めている義雄の姿が写る。

途端に小夜子は、それが自分を地獄の底へ突き落す悪魔である事も忘れ、いや、今の小夜子にとっては、悪魔に救いを求めるより方法はなかったのであろう。矢も楯もたまらなくなつたよう義雄の所へ走り寄り、

「義雄さん、お願い、助けてっ」

と叫ぶや、義雄の胸に顔を埋めるようにして、わっと泣き出したのである。

同性の者にいたぶられ抜くという事は、相手が男であるよりも、小夜子の場合、辛く、

口惜しい事なのだろう。

「お願いです。この人達を、この部屋から、出して下さい。ね、義雄さん」

小夜子は、心底から哀願するように、涙でキラキラ光る黒眼を義雄に向けるのだった。

「僕は、君の夫だよ。義雄さんてな呼び方はやめてくれないか」

義雄は、そっぽを向くような調子でいう。

「あ、あなた、お願い、小夜子を助けて！」

小夜子は、義雄の体に取りすがるようにして、必死に哀願をつづけるのだった。

義雄は、そんな小夜子が、ふと、いじらしく、思わず抱きしめてやりたいような衝動にかられたが、わざと冷淡な表情を作り、小夜子から視線をそらせるようにしている。

「助けてあげたいのは、山々だけだよ。小夜子が、この連中を怒らせるような事をしたんだから、仕様がなさい」

「何を、何を小夜子がしたとおっしゃるの」  
小夜子は、おろおろした顔つきになつていう。

「何をしたって、とぼけるんじゃないよ、お嬢さん」

銀子が陰険な眼つきをしていた。

「あんた達のようなズベ公と口をきくのは嫌



だなんて、大層な啖呵を切ったじゃないか。その上、私達に唾までひっかけてさ」

銀子のそうした出鱈目をきくと、小夜子は恐怖に、わなわな唇を慄わせて

「そ、そんな事、私した覚えはありません。出鱈目をいわないで下さい」

「出鱈目だって」

朱美、悦子、義子などが眼をつり上げて近寄って来る。

「津村さんの前でもよくも私達に恥をかかせてくれたわね。一寸、こっちへおいでよ」

「嫌っ、嫌です」

小夜子は、義雄の体に取りすがるようにしズベ公達の手に搦め取られまいとする。

「あ、あなた、御生です。助けて下さい！」



必死になって、義雄を見上げる小夜子。しかし、義雄は、そのように、せっぱつまった小夜子の顔を今度は面白そうに見て、「いくら君でも、嘘をつくって事はよくないよ。君の口から、よく葉桜団のお姐さん達に詫る事だな」

朱美と悦子が、小夜子の乳白色の肩をひき

つかみ、力一杯、引き戻す。

「やめてっ、やめて下さいっ」

小夜子は、悲鳴をあげながら、ズベ公達の手で、窓端の柱の傍まで引きずられて行くのであった。

「大げさに騒ぐなよ、お嬢さん。葉桜団がこれから、あんたにするお仕置は、なぐるとか蹴るとかいった殺風景なもんじゃないんだ。とっても楽しくなるものらしいよ」

田代が葉巻の煙をくゆらしながらいった。

小夜子は、組み敷こうとするズベ公達の手の下で、ひきつったような声を出して叫ぶ。

「わ、わかったわ。お仕置を受けるから、手を離してっ」

「よし、それじゃ、柱を背にして立ちな」

朱美が、仲間達を制している。

小夜子は、悲壮な決心を顔に現して、柱を背にして立つ。

「一体、私に、何をなさろうというの」

小夜子は両手を、乳房に当てながら、憎悪のこもった瞳をキラリと光らせて、朱美を始め、周囲を取囲む、ズベ公達を見るのであった。大家の令嬢にあり勝ちな気性の強さを顔に現わし負けるものか、といった風に唇を噛みしめてはいるものの、ともすれば、胸をつ



いて出てくる慟哭を必死に小夜子は、こらえているのである。

「私達に赤恥をかかせてくれたお礼に、あんなにも生恥をかかせてやろうってのさ。美人でござい、御令嬢でございといったって、一皮むきゃ、あたい達と同じ只の女であるってことを思い知らせてやるんだよ」

朱美は、鼻の頭を指でこすりながらいう。と同時に、悦子と義子が、あらかじめ用意しておいた麻縄を柱のうしろから拾い上げて小夜子の横へ立つ。

「両手をうしろへ廻しな」

小夜子は、自分の両手の自由を奪ってからこれらのズベ公が、どういう私刑を加える気なのか想像は出来なかったが、もう毒喰らわば皿までの心境である。我と我が身を焼き亡ぼしてしまうような悲痛な決心をし両手を乳房から離して、うしろへ廻し、首を垂れる。「フッフ、そういう風に柔順しくしてくれると、こっちも張り合いが出て来るわ。じゃ悦子、そのお嬢さんに菱縄をかけな」

と朱美がいうと、菱縄か、ずいぶんと面倒だな、とぼやきながらも、器用な悦子は、義子と二人で、うしろへ廻した小夜子の白い両手首をとって、ぐいと背中の中程までねじ曲

げさせ、ひしひしと縄がけにかかる。

艶々と光る小夜子の華奢な首のまわりには麻縄が二巻きばかりかけられ、乳房の一つ一つに輪をはめるように縄がかかったので、その柔かい盛り上りは、一層の肉を実らせるのであった。

小夜子は、軽く瞑目したまま、顔を伏せ、ズベ公達の手にかかり、首から胸、胸から臍の所まで、きびしく縄がかけられていくのである。

「どう、朱美姐さん。こんなもんでいいですよ。これだけ、きびしく締め上げりゃ、どんなに身悶えしたって、びくともゆるみませんよ」

朱美は、小夜子の背後へ廻って、小夜子の手首を締め上げている縄を点検したり、胸を緊めている菱縄を検査したりしていたが、いいだろ、とうなずき、小夜子の背を柱に押しつけ、別の麻縄を使って、かっちりと縛りつけてしまうのだった。

小夜子は、すっかり観念したように、硬く引き緊めた頬を冷ややかに見せ、ぴったりと両腿を閉じ合わせていたが、銀子が、小夜子の足の前に置いたテープレコーダを指さして含み笑いしながら、朱美の耳に何かひそひそ

話していたり、朱美が、義雄と田代の所へ行って、何か、ふざけ合うように話していたりするのを、ふと、眼にすると、何か、得体の知れない、ぞっとするものが、身内の中を走り出すのであった。

義雄は、わざとこれらのズベ公に自分を責めさせようとしている——それに気づいた小夜子は、義雄の卑劣さをいよいよ思い知らされた思いになり、血の出る程、唇を噛みしめるのだった。

その義雄が、ニヤニヤしながら、田代と一緒に小夜子の前へやって来た。

「ね、小夜子、君が明日、この屋敷から出るためには、もう一つ、試験を受けなきゃならないんだよ。この葉桜団の連中の気嫌を損じちゃいけないってことだ。どんな風に小夜子を責めるか僕は知らないし、そのテープに何を録音するのも僕はわからない。しかし、何といったって、今日一日の辛抱さ。がまんするんだよ。いいね」

義雄は、うなだれている小夜子の肩に手をかけて、ささやくようにいうのである。

小夜子は、そっと眼を開き、義雄の顔に、うるんだ視線を向ける。涙が一滴、小夜子の白い頬を伝わって、流れ落ちた。



「わ、わかりましたわ。でも、でも、本当に明日——」

「わかってるよ。ただし、銀子や朱美の気嫌を損じると、元も子もなくなるって事になるよ。何でも、ハイハイと柔順になって、お仕置を受けるんだ。いいね」

義雄は、ふと、何かに気づいたよう狡猾な笑みを口元に浮かべて、

「小夜子が、葉桜団のお仕置を逆らわずに受け、そのあと、僕と、夫婦関係を結んでくれれば僕は、小夜子の奮闘努力に免じて、さっき、写したあの写真、ネガを焼き捨ててやってもいいんだよ」

えっというように、小夜子は顔をあげた。

「あんなものが僕の手元にある限り、君は正直、生きた心地もしないだろう。また、ここから、出られても、ちよっと、表を歩く事が出来ないものね。それじゃ、可哀そうだと思うんだ。僕も、それ程、悪い男じゃないからね」

小夜子は、明らかに、感謝の気持を眼の色に浮かべていた。そして、ほっとしたように眼を閉じ、

「御恩は忘れませんわ」

と、羞らいをこめた横顔を義雄に見せてい

うのである。

一種の安堵を覚えて、力が抜けたように、うなだれてしまった小夜子の象牙色の頬や、柔かい羽根のような美しい肩、線の綺麗な鼻筋などを義雄はじっと見ながら、こういう自分の口から出まかせの嘘を信じて、感謝の眼差を向けた小夜子をふと、痛ましくも、哀れにも思うのだったが、初志を曲げようという気持にはならない。

——フッフ、そう信じられるうちが幸せだぜ、お嬢さん。もう、あんたは、永久にここから出られっこないんだ。明日になりや、あの写真は何百枚と焼付が出来て来て、あんなの学校時代の友人にまで送られる事になるんだ。それだけじゃない、これから、朱美達がテープにとろうとする口じゃいえない羞しい音だって、うんと複製して、これと思う奴の所へ送ってやる。テープの箱に、音をとられてる小夜子の写真をびったりとはりつけてな——

そんな事を口の中でいった義雄は、銀子と朱美の方に顔を向け、

「いさぎよく葉桜団のお仕置を受けると、小夜子はいってくれたよ。ただし、いっとくけど、小夜子は僕の花嫁なんだからね。あんま

り、手荒な真似をしてもらっちゃ困るよ」

わかってますわ、と朱美が近寄って来ていう。

「あたい達のお仕置てのは、体に傷をつけるような乱暴なもんじゃないわ。一寸、むつかしいいい方をするなら、そうね、女としての感受性を高めてやる、とでもいうのかしら。小夜子嬢の肉体を鍛錬してやるのよ」

つづいて、銀子が、

「人妻となるために申し分のない教育をして津村さんにお渡ししますわ」

一体、この女達は、何をたくらんでいるのか、小夜子は、義雄にそんな事をいって、ニヤニヤ笑っている銀子と朱美の横顔を見て、非常な恐怖を覚えた。

「それからね、真に申し兼ねるんですが」

と、朱美は、相変らず、えへらえへらと口元を歪めながら、

「社長さんも津村さんも、一寸の間、この場を外して下さらない。殿方がニコニコして、近くから眺めていると、お嬢さんの緊張がなかなかほぐれず、あたい達の仕事もやり難いのよ。川音が鳴り出せば、お呼びしますからそれまでここは、私達葉桜団だけに任せておいて欲しいのよ」



銀子や朱美は、女が女を責めるという一種独特なムードやその秘密を男達の眼にさらしたくはないようである。と同時に、この深窓の令嬢を男を混えぬ自分達葉桜団の手で、いじめ抜き、心底から屈伏させてやるのだという意気込みもあった。

それだけに、何か鬼気迫る凄惨な感じさえして、田代と義雄は、ふと、近寄りがたいものを感じとった。

「いいだろ、じゃ、俺達は、ホーム酒場の方で待機している事にしよう」

田代と義雄は、うなずいて出て行く。

男二人が部屋から出て行くと、朱美は、ドアに内鍵をかけた。

心の底まで、しみ通るような恐怖を覚えて小夜子は全身を針のように緊張させている。

「お嬢さん、あんた、明日になれば、この屋敷から、出て行けるそうだね。よかったわね。フッフ」

銀子は、義雄が小夜子をだまして、明日に希望をつながせ、それを利用して、今日一日散々いたぶり抜く気である、という事を知っていたから、片頬に皮肉めいた微笑を浮かべていった。

「——私、ここを出ても、貴女達を恨むよう

な事は致しません。警察へ訴えたりも致しません。で、ですから——」

小夜子は、黒眼勝ちの美しい瞳を哀願的にしばたかせて、邪悪な銀子と朱美の視線に向けるのだった。

「だから、あんまり、無茶な責めはしないでくれというわけなのね。フッフ、甘いわけ、いい所のお嬢さんって。第一、あの津村さんが、本当にあんたを——」

ここから逃がす気ではないかと思うのか、と、朱美は、危く、しゃべりかけ、あわてて、口をつぐんだ。

銀子が、櫛を取り出して、額の上に、ほつれている小夜子の髪をすき上げながら、

「とにかく、今日で、私達は、あんたとお別れだからね。今日は、私達から、あんたにたっぷりプレゼントしてあげようというのさ。

というのも、この朱美が、実は、あんたに惚れちゃってるの。同性愛って言葉、知ってるでしょう。朱美は、あんたのお姉様になりたがってるのよ」

「——わかりません。そ、それは、どういう事ですの」

小夜子は、一層、不安な表情になって、悲しげな眼差を銀子に向けるのだった。

「そういういい方したって、この御令嬢にや通じないわよ、銀子姐さん」

悦子が、横から身を乗り出して、  
「いいかい。これから始めようっていうお仕置はね。あんたのその綺麗な体にムチ打って傷をつけようってもんじゃないの。朱美姐さんが秘術をつくして、葉桜流のすばらしいスベシャルサービスをしてあげようと、おっしゃるんだよ」

ズベ公達は一せいに哄笑した。  
「ね、まだ、わかんない。朱美姐さんが、あんたの……をかいてやろうというのさ」

そんな卑語が、小夜子に通じる筈はない。ただ、自分が想像していたお尻をぶつとか高い所に吊りあげるとかいった単純な折檻ではなく、この鬼女達の考えている事は、もっと隠微で残忍なものである事が何となくわかってきたのである。

「フッフ、今に、こいつが、どんな声を出して泣き出すか、楽しみだわ」

義子が、身をかがめて、そっと手を差しのべた。

「な、なにをするんです！」

小夜子は、電気に打たれたように、ビクと体を震わせ、腰を振って、義子の手から身を



よじる。

今にも、ペソをかきそうな小夜子の顔を、銀子は横から面白そうに眺めて、

「駄目よ、義子、いきなり、そういうムードのない事するんじゃないよ」

と、いい、義子の手首を押さえる。

「成程ね。大家の御令嬢ともなれば、……を……やるにも、ムードが必要というわけか」

義子は舌を出して立上った。

ズベ公達は、小夜子を何時までも、疑心暗鬼の状態にはしておかなかった。

「銀子姐さんと朱美姐さんは、しばらく、見物しててよ。あたいた達、三人が、ムードを作ってみるからさ」

## 女性写真モデル募集

### 分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

悦子、義子、マリの三人が、慄えおのの小夜子の周囲を取囲んだ。

この娘は、これまで、栄耀贅沢に暮し、ハンサムな男達に、チャホヤされて暮して来たのだという一種のひがみ、そして、人の手のとどこかめ海底で自然と作り上げられた真珠のような輝きを持つ美貌に対する羨望、そうしたものを彼女達は憎悪に変え、小夜子に対して、最も辛い、羞しい責めを加えてやろうという気分になったようである。

悦子は、ポケットから、ガリ版刷りの怪しげな本を取り出し、ペラペラめくって、その一節を小夜子に読ませるべく、彼女の鼻先へ突きつける。

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部△

「さ、お嬢さん、大きな声を出して、ここから読み上げるんだ。あたいた達の命令を聞かないと、何時までたっても、このお屋敷から外へ出る事は出来ないんだよ。津村さんも、その事は承知してるんだからね」

小夜子は、今や、義雄だけではなく、このズベ公達に対してさえ、抵抗の気力は完全にそがれてしまったのだ。

物悲しい瞳をそっと、悦子の向ける本に向け、唇を震わせつつ、それを音読し始めた。

読むうちに、進むうちに、小夜子の頬は、次第に充血し始め、ようやく、その本に書かれている内容がわかって、忽ち、眼をそらせ首筋まで赤く染めて、狼狽の態度を示した。

「誰が途中で止めろといった。勝手なことすると承知しないわよ」

義子が、麻縄に緊め上げられている小夜子の乳房を指ではじく。

おどされ、小突き廻され、燃ゆるようになって赤くなった顔を本に向け、必死な思いで、音読を再び始める小夜子。

小夜子の美しい額から、熱い汗がタラタラと流れ落ちる。

「いいわね、そこ。お嬢さん、その所、も一度、くり返して読んでみてよ」



本の内容が、ずばりそのものの描写になる  
と悦子は、声をかけ、幾度もその場面を小夜  
子にくりかえさす。

悦子だけではなく、義子もマリも、腰をお  
ろして煙草を喫っている銀子や朱美まで、自  
分の気に入った個所を告げ、小夜子に、くり  
かえさすのである。

——今、自分が、この女達にさからえば、  
この屋敷に捕われている人達を救う事は出来  
ないのだ——と、小夜子は、息づまるような  
屈辱をぐっと呑みこみ、

「——次郎は、頃はよしとばかり、指先にべ  
っとり唾をつけ——」

その稚劣極まる醜惡の描写を、くり返し読  
みつつける。眼もくらみ、気が遠くなりそう  
だった。

男女の発する奇妙な嬌声まで幾度も演じさ  
せられる小夜子は、あまりの情なさ、舌で  
も噛み切りたい衝動にかられ、すすり泣きつ  
つ、読み始め、それをズベ公達は、かえって  
気分が出て、面白い、と互に顔を見合わせ、  
笑い合うのである。

間もなく、小夜子は、ズベ公達の掘った罌  
に、足を踏み入れ始めた。

そんな醜惡な読物を幾度となく、くりかえ

し、読まされつづけているうちに、自分では  
判断の出来ない奇妙な陶醉に全身を揉みぬか  
れ出したのである。雪をあざむく白い脂肪を  
透かした太腿が、しきりに、モジモジ揺らぎ  
始めたのだ。

こういう愚劣な読物を眼にしたとはいえ、  
そんなもので、はしたなくも、女の性の斜面  
をのぞかせるという事は、小夜子自身も想像  
出来ない事であったが、また、事実、そうし  
た潔癖さを心にも体にも持っている小夜子で  
あったが、ズベ公の一人が、鳥の羽根を使っ  
て、乳頭をくすぐり出すに及んで、小夜子は  
肉体のどこかに、ふと、火を点じられた思い  
になったのだ。

さっき、義雄に、油を注ぎこまれた肉体だ  
けに、もろく、くずれ易くなっていたのかも  
知れない。

火を点じられ、次第に燃え立ち始めた小夜  
子は、そんな自分を恥じ、ズベ公達の叱咤や  
折檻は覚悟の上で、思わず、本から眼をそら  
し、火のように熱くなった美しい顔をのけぞ  
るように横へねじ伏せた。

それを待ち受けていたように、先程から、  
柱のうしろへ廻りこんでいた義子が、両手を  
背後からまわすようにして、しっかりと小夜

子の両乳房をかかえこんだのだ。

「ああー」

小夜子は、艶やかな、透き通るように白い  
うなじをくつきりと見せ、眉をしかめて、嫌  
々、と首をゆるやかに揺り始める。

愚劣な読物を音読させて、小夜子を何合目  
かに押し上げ、突然、切って落したように、  
ズベ公三人は一せいの攻撃を開始し始めたので  
ある。あざやかといいたくなるくらいに、す  
ばやいズベ公達の作戦であった。

柔かい、暖かそうな胸の白いふくらみが、  
義子の巧妙な手つきで揉みほぐされるように  
……され、柔軟な白蠟のように白い太腿は、  
悦子の手で、その引き緊った筋肉を柔かくマ  
ッサージされ始める。

「——小夜子を、小夜子を、どうするおつも  
り。ね、お、教えて」

小夜子は、あえぐようにして、眼を閉ざし  
ながらいった。

女達が、自分の身に、まさか、こんなみだ  
らな責めを加えようとは、最初、想像もしな  
かった小夜子であるが、この女達が、初めに  
いった生き恥をかかしてやるという意味が、  
今になって、臆けながら、わかって来たので  
ある。



「どうするおつもりだって。カマトトもいい加減にしてもらいたいね」

小夜子の可愛い臍のあたりを羽根で、くすぐりつづけていたマリが、吐き出すようにいい、

「……を……ってのはね。こうすんのさ」

と手を差しのべようとしたが、

「そこは駄目だよ、マリ。朱美の受持ちなんだからね」

と、銀子が笑いながら制した。

「おっと、そうだったけ」

と、マリは舌を出し、悦子と並んで、腰をかめると、小夜子の太腿を片手で抱き寄せるようにし、わざと……さけるようにしながら付根のあたりに指圧を加えるのだった。

小夜子は、段々と感情が高ぶって来たらしく、薄眼を開いて、力の無い瞳をぼんやりと天井の方へ向け、もどかしげな身悶えをくりかえし出す。

憎みても余りある義雄の眼前に、みじめな敗北の姿をさらし、その涙も乾かぬうち、今度は、これらのズベ公の最只中で——小夜子は、自分のあまりのみにじめさに、激しく泣き出したが、一方、そんな心とは、うらはらに燃えさかってしまった肉体の方は、ズベ公達

のもつ特殊な粘着力のあるリードで、五合目六合目と、どうしようもなく、追い上げられていくのである。

始めは、必死になって、高ぶりを押さえ、受太刀をつづけていた小夜子であったのに、段々と心の備えも忘れて、攻め手の中へ、引っぱりこまれ出した。

気持を誘発させておきながら、わざとそれをさけるようにして、……つづけるズベ公達が、ふと、もどかしくなり出して、思わず、やる瀬ない吐息をつき、小夜子は、艶めかしく、下半身を悶えさせるのだ。

そんな小夜子の気持を察知したのか、悦子とマリは、顔を見合わせて、クスクス笑い、なおもしつこく、スレスレのところに軽い指圧を加えつづけ、小夜子の両肢を左右へ引き始める。

小夜子は、もうどうともして、とばかり、両肢の力を悦子とマリに完全に預けてしまった形で、堂々と開け出したのである。

月の滴を受けて育った白い美しい花のような深窓の令嬢が、今や、見るのも息苦しいばかりに官能的で大胆な肢態を組み、今までとは打って変わったぶんぶん匂う女臭さまで感じさせたのであるから、じっと眺め入っていた

銀子と朱美は、同時に驚嘆の声をあげた。

「朱美、そろそろ始めてやんなよ。このままじゃ、お嬢さん、気が狂っちゃうわよ」

銀子にいわれて、朱美は、立上り、セータとジーパンを脱ぎ、ブラジャーとパンティだけの姿になると、鼻の頭を指でこすりつつ、舌足らずの……あがっている小夜子の前へ進み寄る。

小夜子の乳房を背後から責めていた義子が小夜子の耳元に口を寄せて、

「そら、あんたのお姉様が、お出ましになったわよ。御挨拶しな。さ、元気を出して」

義子は、くすくす笑いながら、ふくらみの頂点をやんわりと指でつまみ上げていう。

小夜子は、熱い息を吐きつつ、真赤に火照った美しい顔を、そっと前に立つ朱美の方へ向けた。

「——お、お姉様」

小夜子は、朱美が、はっとする位の、妖艶な、ねっとり濡れた眼差を向けたのである。

これまでの小夜子のどこに、そんな凄い色っぽさが隠されていたのか、朱美は、不思議な気持になった。

小夜子は、もう、その次には、再び、顔を伏せ、齒を噛みならして、肉の悶えに耐えて



いる。

「あんた、あたいの事を、お姉様といってくれたのね。嬉しいわ」

朱美は、体を海草のようにくねらせて、耐えている小夜子が可愛いくてたまらなくなり思わず、小夜子の肩を強く抱きしめる。

「ね、小夜子、キスして」

身も心も、バラバラにされた思いになっている小夜子は、熱い息を吐きつつ、充血した頬を朱美の頬にすり合わせ、顔をさっと正面に戻すと、ぴったりと朱美の唇に唇を合わせるのだった。

朱美の今までの同性愛の経験から見ても、これほど、感じ方が敏感で、接吻の上手な女は見た事がなかった。恋人の内村春雄との間に体の関係はないにせよ、かなり、抱擁の経験はあった筈だと朱美は、察知すると共に、嫉妬めいたものが胸にこみ上って来たのである。ようやく、小夜子の口から唇を離れた朱美は

「それじゃ、小夜子、今、お姉様が、すばらしい事してあげるからね。内村春雄の事なんか、きれいさっぱり、忘れちゃうのよ。いいわね」

そういって、腰をかかめる。

今は、もう何のためらいも………さも示

さず、堂々と朱美の眼前にさらしたまま、小夜子は、齒を噛みしめて、料理されるのを待っているようだ。柔かい、艶のある、………さとしたそれは小夜子の汚れを知らぬ、どことなく弱々しい美貌とは、一寸、不似合なくらいに、貪欲さと冷酷さと挑戦的なものを備えた見事なものであった。

「うっ」

小夜子は、唇をわなわな震わせ、のけぞるように仰向く。

朱美の仕事が始まったと知るや、義子は、再び、ゆっくりと、押し上げるようにして、手を動かし始める。

「待、待って、嫌、嫌、——お姉様っ」

小夜子は、キリキリ舞いをしながら、獣のようにうめいた。

朱美の………は、巧妙を極めていた。女であるだけに女の弱さを、すべて心得ているような刺戟をゆるやかに、また激しく、くり返し出したのである。

義子、悦子、マリの三人に、長い間、揺さぶられつづけて、小夜子は、かなりの所まで追いつめられていたから、朱美の行為が始まると、忽ち、ゴールに向かって、かけ足を始

めたのである。

——嫌だ、嫌だ、こんな、下等なズベ公達の見守る中で——小夜子は、狂ったように首を振り、齒の間から、咆哮に似たうめきをあげた。

まだしも、義雄に………た方がましだ。後手に縛られた身を柱にかたく固定され、そんな風になった姿を野卑なズベ公達の眼にさらした場合を想像すると、小夜子は、気が狂いそうになる。だが、そうしたズベ公達に対する敵意や反感も、あふられ、巻きこまれ、全身が、得体の知れない………しびれ切ると、全く、消え失せて、最後の瞬間を待つ気持ちになってしまったのである。

行………ける朱美は、ふと、上を見上げて優雅な身悶えをくりかえしつつ、絹糸のようにか細い、可憐なすすり泣きをつづける小夜子の顔を見る。

小さく唇を開いて、熱い吐息をしながら、必死になって、自分に耐え抜こうとしている小夜子は、ふるいつきたい位に美しく、朱美の眼に映るのであった。

「いいのよ、小夜子。お姉さんに一切任せてごらん。ね」

朱美も、何か気が遠くなるような甘い陶醉



に浸りつつ、ピッチをあげ始める。

その深い甘美な吸引力、水中の藻草が揺らぐような、ねっとりした感触など、二十一、二の若さで、しかも、男と行為のなかった小夜子に、これほどの情感があったとは、朱美は何か信じられない気持ちになった。

朱美の横に、腰をかがめ、同じように、それを凝視している銀子も舌を巻く。

「いい所のお嬢さんといったって、最近じゃ皆んな早熟<sup>ませい</sup>てんのね。すごいじゃないの」  
小夜子が、名状出来ない声を発して、悦子と義子にかかえられている……を、ぶ

## 限定版グラビア写真集 八美しき縛しめⅤ 第八集

山原清子 大塚啓子  
鈴木晃子

### 女斗緊縛競艶写真特集

一部一〇〇〇円  
略号(美8)

「女性対女性」の激しい女斗場面と女斗美の躍動！  
女性が女性を縛る緊縛プレイの見事なフォト化  
動きのある女性と女性の相互縛り場面の美しい展開

長い間の皆様マニアの御要望にこたえて、女性対女性の女斗美、女斗場面、並に女同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって、ここに集大成いたしました。六尺禪或はパンティを着用した美女の裸身が組んずほぐれつ縦横に画面狭ましと展開し筋肉を躍動させておられます。いずれも動きのある連続動作によって三女の裸身の美しさが、いきいきと目の中に飛び込んできます。数十枚の女斗美、女斗写真女性相互の緊縛写真が、この一冊にて、皆様のもとなるのです。この新しい企画はまことに画期的なもので、この機会を逸すると絶対に入手できません。今すぐ、お申込み下さるよう、お待ちいたします。

△内容▽ 啓子の裸身を厳しく括くる清子、あえぐ啓子。緊縛して押さえ込まれる啓子の連続被虐姿態。清子に縛られてゆく過程の連続写真。縛られて身動きできない裸身を清子にいたぶられる啓子。縛られた刺青の裸身をいじめる晃子。晃子が清子に対して猿ぐつわを噛ます連続写真。馬乗りになって清子はいじめる晃子。清子を逆エビに責める晃子。清子白を縛り上げて逆エビに責める啓子。黒禪と禪の清子と晃子の女斗美、女斗シーン。晃子を寝業で押さえ込む清子、晃子の逆転劇。晃子を縛り責める清子。後手縛りの清子が啓子に翻弄される。その他女性と女性の緊縛プレイシーンの数々。

るぶる震わせ、ぐっと体を弓なりにそらせるようにしたのは、それから、一、二分後であった。それを知ると、朱美は、ほっとしたように立上り、柱に、頭や背を押しつけ、汗びっしょりになりながら、切なげに眼を閉じ、全身に波打たせている小夜子を、しばらく満足げに眺めるのだった。

悦子や義子も立上り、絶え入った風情を見せている小夜子の火のように熱い頬や鼻筋を指でつつきながら、からかい始める。

「フフフ、よかったわね、小夜子。あんた、一段と美しくなったようよ」

「顔に似合わず、あんた、こういう事が好きなのね」

そんな事をいって、二人のズベ公は、キャッキヤツ笑い出す。

「あんた達、つまらないおしゃべりはやめて録音の支度にかかってよ。体の熱いうちにかからなきゃいい音が出ないんだよ」

と、朱美が、口をとがらせていう。

あいよ、と悦子と義子は、テープレコーダを持ち上げ、小夜子の足元に置いた。

悪女達の邪悪で、陰惨な責めがまだ続行するの知らず、小夜子は、柱を背にしたまま口惜しい陶酔の余韻に浸っていたのである。



妖<sup>よう</sup>靈<sup>れい</sup>城<sup>じょう</sup>黒<sup>くろ</sup> 湊<sup>ぶち</sup> 賀<sup>か</sup> 集<sup>ず</sup> 子<sup>こ</sup>

一、昭和四十年四月二十八日 水曜日

午後七時から九時までの事

天霧峠に登りきると景色が一変します。

私はブレイキをふみました。

山陰と山陽を区切る山脈が遥か北に屏風のように立ち、その横腹から太古の準平原が高原となって、ゆるやかな傾斜を見せながら、瀬戸内海へ下っています。

西の雲も、北の空も、山の峯も高原も、真紅に燃えています。雄大な夕焼けです。太陽は今、西の高原に沈んでゆくところです。

真赤な地表が一部分だけ黒くなっています。

た。神の剣が大地を真二つに断ち割ったような崖が私の足元から南北に伸び、北は脊梁山脈に、南は瀬戸内海に続いています。綾瀬川は此の谷底にあり、眼の下一千尺を銀蛇のように流れているのです。

高原の表に瓢箪の形で開いた大穴。

綾瀬川が曲って掘り上げた赤萩盆地です。

綾瀬川に沿って赤萩の町並が見えます。富裕と伝統を誇るような、白壁の多い昔の城下町です。その白壁もすべて赤く映えています。

天霧峠で道は二つに分れています。

右の道は山々の峯伝いに北へ。

左の道へ西へ下って赤萩町の中へ。

四方の山は赤萩盆地を囲んで城壁のように見えます。天霧峠は東の大手門に当たります。西の壁を形造る山々の頂上が赤く染まり、黒い影が盆地に落ちています。赤萩町の赤く映える白壁が少しづつ黒い影に吞まれて行くようにも見えます。

天霧峠から北へ、赤萩盆地の東側を囲む山の峯が連り、その端は急に高くなって、老松に掩われた大きな山塊に終わっています。

錦繡山です。

今日これから行こうとしている天籟寺はあ



の山の西斜面中腹にあります。

錦繡山から西に向って陵線が直角に折れ、比較的大きな谷を隔てて、もう一つの大きな山に向い合っています。一塊の山みたいですが、よく見ると、大小二つの峯に分れています。

東の大きいのが浩月山。

西へ突き出し、綾瀬川に麓を洗われているのが霊曜山。

此の二つが赤萩盆地の北を包む城壁を成しているのです。

浩月山の頂上には弦月城と呼ばれるお城があると聞いていました。櫓も塀もない廃墟だそうです。松林の中に黒い石垣のようなものが見えるような気がしました。

錦繡山の西斜面にある天籟寺。

浩月山の頂上にあった弦月城。

此の二つは谷を隔てて向い合っています。皆様。此の位置をよく覚えておいて下さいませ。

中世の恐ろしい伝説を秘めた古城。

最近、薄気味悪い噂の立った山寺。

この二つは、私が立っている天霧峠からは真横に並んで見えます。

夕方の風が右窓から左窓へ吹き抜けると同

時に、私は何か起りそうな予感に襲われて思わず身ぶるいしました。

「ずいぶん眺めているね。早く行かなければ日が暮れるよ。何か見えるのかい」

感傷は破れました。後席で横になっていた嬰一が、待ちきれなくなったのか、運転席の横へシートを乗り越えて這入ってきました。

「なんにもないの。だから見ているのよ」

あたりは薄暗くなりかけ、人の気配もなく静まり返っています。

「そんなに見たければ出てみよう」

嬰一は乱暴に私を引き出しました。

「なぜ天霧峠と呼ぶか知っている？」

言葉だけはやさしく問いかけながら、もう

私の両手首を背に重ねています。

「濃い朝霧が立つからでしょう」

私も調子をそろえて体を預けながら答えました。彼のプレイはいつもこうです。理由も動機ありません。

日の出前に天霧峠から下を見ると、霧が白い海のように低く溜り、山の峯が島のように浮んで見える。と嬰一から聞いていました。

「赤萩の町は小さいけれど、四百年前は山陰山陽八カ国を領有する大帝国の首府だった」

嬰一は暮れてゆく山々を見ながら、彼独得

の近代語を使う古代史解説を始めました。

「赤萩町のある城辺郡。東の早崎郡。鎭矢銀山のある北の神酒郡。赤萩の町と弦月城は本来此の三郡の中心で、小さいが農業と鉱産に富む山奥の都だった。それが突然歴史上の大國となり、そして急速に亡びた」

私は手首の上を走る紐を感じながら、おとなしくしていました。

なぜ縛るの。

そこに女性がいるから。

と言った人がいたように思いますが間違いかしら。

「力の統治。弾圧。幾多伝説に残る暴虐の末赤萩帝国は周囲の小国家群に分割されて亡びた。内部の緊張が過ぎた為に自滅したと言えるだろう」

峠の脇に黒松の大木があります。太さ二抱えはあるでしょう。嬰一は私の背をその大木の方へ押して行きました。何をしようとしているのかは明らかです。でも私は嬰一の話を聞きながら黒松の下へ歩きました。

「二年にわたる攻防戦の後、城中の水が尽きた。浩月山は高さ四百メートルあるだろう。充分な水が汲めない。城兵は体に泥を塗り、本丸の石垣から白米を流しながら雨を待った



が」

黒松の太木には私の頭より少し高い太枝が出ています。嬰一の私は後ろ手首をその枝に高く吊り上げました。

「余り痛くないでね。運転が出来なくなるから。でも、なぜお米を流したりしたの」

「遠くから見ると水に見える。城内に捨てる程の水があると見せて時を稼いだのだ。もっとも米を流して水に見せた落城伝説は日本中に沢山あるから信用できないが」

私は両手を背に縛られた上、松の枝に高く手首を吊られています。続いて両足首も縛られてしまいました。前かがみの姿勢から顔だけ上げて嬰一を見上げるばかりです。

「城内の滝が水ではなくて白米だという秘密を天籟寺別院の尼が内通した。雨は降らず、弦月城は遂に陥ちた。この尼は後になって城方の残党に斬られた」

勘のよい私は、ここでやっと嬰一の目的を悟りました。天霧峠は尼斬峠に違いありません。併しもう遅い。私は動けないのです。

「もう止めて。解いてよ」

嬰一はいじわるです。わざとゆっくり、はなれて行きます。

「天霧峠の語源がわかったね。尼が縛られた

松はその木。斬られたのは賀集子が立っているあたり。丁度そのような姿勢だろう。斬りやすいからね。時刻は夕方。つまり今頃」

「許して」

嬰一は枯枝を一本拾いました。刀のように曲っています。あれで私の首を斬って、あと死体をさらして置くつもりなのでしょう。

「この松は確かに樹齢六百年は経っている。四百年前も一人吊るせる木だったろう」

「泣くわよ」

嬰一はポケットからハンケチを取り出しました。彼はいつも大小二つのハンケチを持っています。私の口に封をするようです。

「若しも魂があるなら賀集子を見て、出て来そうなものだね」

私は僅かに首を振って少しでも免れようと思いました。私の顔は赤萩町へ下る坂道の方に固定されたようになっていきます。首を振った途端に異様なものが見えました。天霧峠の一番高い所から少し下りたあたり。すでに暗くなった樹かげで何か動いたのです。それは確かに人の形をしていました。

「出たわよ。髪の毛の長い女の人。あそこに」  
私が余り恐れたので嬰一は押し入れかけたハンカチを引き出してくれました。

「なんにも見えないが」

山の斜面の最後まで残っていた明るい部分が急速に消えて行きました。視力の弱い嬰一には無理かもしれませんが、私は暗くなる前にはっきり見ました。下半身は灌木の茂みにかくれて見えませんが、上半身は間違いなく女の人でした。併し、尼の幽霊ではありません。髪は長く、洋装でした。その姿が一度だけ見えて又、闇と灌木の中に消えたのです。

「行ってみよう」

嬰一は私を疑いません。手足を縛った紐をすぐといてくれました。

「違っていたら、もう一度縛られてもいいわよ。早くこっちへ来て」

私は道のない斜面を走り下りました。

「本当だ」

暗くなった中を手探りで進んでいると、灌木の中で寝返りでもするような気配がしました。闇を透かすと、女の人が下向きに伏せているのが見えました。顔はわからないが、背の高い、髪の毛の長い人でした。

「これはひどい」

嬰一が抱き起こそうとして言いました。  
動いてはいるが意識はないようです。足だけ曲げたり、伸ばしたり。夢の中で走ってい



るみたいです。

その婦人は不思議な服装をしていました。身体にぴったりくっつく黒の上着とタイツ。バレリーナの練習着のようなものを着ています。足には黒の半長靴。手には黒の手袋。西洋に忍者がいたら、こんな服装をするでしょう。黒の三角帽子とマントがあったら魔女そっくりです。

その婦人の両手は背で縛られていました。私は解こうとして驚きました。縛ってある材料は針金なのです。

逃げて来たのでしょうか。服は裂け、血がにじんでいます。

嬰一が婦人を抱き起しました。私はその顔を正面から見て又驚きました。際立った彫の深さは日本人のものではありません。明らかにヨーロッパのどこかの国の人です。

年令は三十才半ばでしょうか。若造りしているが眼尻にしわが見えます。眼は閉じ、唇を固く嚙んでいます。

「針金が解けないよ。照明と道具のある所へ運んで行こう」

嬰一が頭の方を、私が足を持って坂を上りました。

自動車の照明で顔が見えました。髪は暗色

だが根本から縮れています。頬にも掻き傷があります。しかし際立って美しい顔でした。

嬰一はプライヤーで針金を切りました。私は水筒の水でタオルを濡らし、女の人の額を拭きました。

「気がついた」

大きな黒い瞳でした。それが何かにおびえたようにくるくると廻りました。

「なぜ、こんな恐い目にあわされたのかはあとで聞きましょう。とにかく此処を離れようではありませんか。行先はどちらです」

嬰一が聞きました。中年の美しい婦人は彼の方を向きました。聞こえたようです。だがかすかに首を横に振りました。どうやら日本語はわからないようです。

私は水筒の蓋に水を注いすすめながら、同じ事を英語で尋ねました。女の人は奪うようにして水を飲み、ていねいに頭を下げましたが返事はありません。私の英語は余り下手ではないはずですが通じないようです。

私はもう一度、得意でないフランス語を使ってみました。しかし反応なし。

更に怪しげなドイツ語。これも駄目。

それでも諦めず、片言しか話せないイタリア語で繰返しましたが結果は同じ。

冷汗もののスペイン語も出しました。

最後に、まさかと思いつながらロシヤ語も。

そして、呆れ果てました。日本という外国のそれも片田舎に来ていながら、文明国の言葉が一つもわからないヨーロッパ人なんて、あり得るでしょうか。

「仕方がない。どこか寝具と食物のある所へ連れて行こう。赤萩の町へ下りるか」

嬰一は天霧峠から、灯の輝いている町並を見下しました。

「天籟寺の方が近いわよ」

私は運転に疲れていました。早く目的地に着いて休みたい気持でした。女の人の傷に、毒虫用の薬を塗りながら答えました。

すると、おとなしくしていた婦人が突然中腰に起き上り、私の手を掴んで早口に叫び始めました。どうやら天籟寺という固有名詞に特別の意味がありそうです。

私は、この婦人が唾でない事を確かめました。併しその言葉は私の全く知らないものでした。婦人の、哀願するような、せき立てるような言葉と態度を理解できずに戸惑っている内に、急激に体力を使い尽くしたのか、女の人は私の腕の中に倒れてしまいました。「天籟寺の和尚さんは元々坊さんではなく、



お医者さんだったのよ。行けばなんとかなるでしょう」

女の人を後席に寝かせ、私は夜の山道にアクセルをふみました。

「坊主で医者か。殺しても生かしても金になる。いい商売だな」

嬰一は冗談を言う余裕を取りもどしていました。

山門の下に自動車を停めたのが九時少し前でした。長い石段が上っています。百段は有るでしょう。自動車は寺内に入れません。

「すばらしい」

嬰一が山門を見上げながら言いました。

「来てよかった。天籟寺は寺の形ちをした城だよ。弦月城の詰城に当るのだ」

土塀は崩れかけ、建物は貧弱です。電燈は一つしかついていません。併し立派な曲面を持つ高大な石垣は城のように、星空を背景として、くっきりと浮き上っていました。

嬰一はお城やお寺が大好きです。併し芳野眉美様のような正統派趣味ではありません。お城なら石垣だけの廃城。お寺では山奥の荒寺、そんなゲテモノばかりが好きなのです。そしていつも「天守閣や五重塔は素人が見るものだ」と玄人ぶった事を言っています。

ここ一と月程、嬰一は公務の負担で疲れ果てていました。軽いノイローゼでしょうか。

身体の方は丈夫なのに精神は弱いようです。

「頭が疲れたら身体も疲れさせて平均する」

とは嬰一がいつも言う事です。これを実行するため、連休にかけて休暇がとれた時、私は旅行先に天籟寺を選びました。住職の孫に当るお嬢さんが同じ大学にいた事を思い出して手紙を送り、承諾を得ました。そして私の撰択は正しかったようです。嬰一は山門を見たときに元気になりました。

私は後席の婦人がよく眠っているのを確かめて車のトランクを開けました。中には土産の日本酒一升瓶六本入りダンボール箱が入っていました。嬰一は二十キロほどあるその箱を抱えて百段を走り上りました。精神力は弱いくせに、すごい体力です。「疲れを知らぬアリアドネ」は或る程度彼自身がモデルのように思います。

石段を登りきった嬰一は遅れている私を振り返りました。そして驚いて叫びました。

「賀集子。あれを」

石段の麓に私達の乗って来た自動車が停めてあります。そのヘッドライトが突然動きだしました。

私は嬰一の後を慌てて追ったのでエンジンにキーを掛け忘れていました。運転しているのは後席に眠っていた婦人か、それとも他の何者か。とにかく熟練者です。石段下のせまい空間で自動車を一回転させると見る間に、一間幅の山道を五十キロぐらいのスピードで飛ばせて行ってしまいました。私達は百段の頂上から呆然と見送るばかりでした。

## 二、午後九時から真夜半までの事。

「こんな山寺をよく訪ねて下さった。お若いのに珍しい。それなのに来る早々車を盗まれたとは、何ともお気の毒じゃ」

白いひげの老僧が晩酌のハンニャトウを傾けながら言いました。余程好きなようです。七十回は越えているでしょう。併し老衰という感じはしません。鋭い眼。通った鼻すじ。とがった顎。何か恐いような顔です。坊さんよりは老將軍みたいでした。

「自動車は盗まれた時に一番得をしますよ。」

保険会社が現金で全額払ってくれますから」  
嬰一が微笑しながら答えました。でも車の中には着替えや道具類が全部積んだままだったのです。

「浩月山の城、赤萩の城下町、見るものはたくさんある。幾晩泊ってもよいから見て行き



なさい」

和尚さんの姓は寺名と同じ天籟寺。名は観山。だが本名かどうか、わかりません。孫娘のお嬢さんから想像していたのは丸で違った印象の方でした。天籟寺家の次男。医学をフランスで修め、長い間外国に居られたそうです。お兄さんの住職が、あと継ぎを残さずに亡くなられたので天籟寺を継がれたとか。お子さんは男一人。やはりお医者さんでしたが、お嬢さん一人を残して夫婦共、戦災で亡くなられ、観山和尚さんの奥様も早く死なれたので肉親は孫娘一人だけなのです。

「坊主で医者と言えば、もうかりそうに思われるじやろうが、この寺には四百年前に亡びた赤萩家の墓があるだけで一軒の檀家もないし、以前に軍医をしていただけで今は開業していないからこの山奥では来る患者もない」和尚さんは山林を切ったやせ地に畠を作っていました。今、私達の前に並べられている精進料理は和尚さんの手作りが相当入っているようです。

「精進と粗食は同じではないようですね」

嬰一が和尚さんに聞きました。

「不殺生戒を守るため、と言うが動物性食品を嫌ったのではないようですね。昔の坊主は

チーズを醍醐と呼んで好んで食べ、旨いものを醍醐味と言ったようじゃ。親鸞上人は若い僧の肉食を認め、精進日を設けて年をとると精進食をすすめたが、栄養学的にも道理にかなっておりませんぞ」

ナスがしぎ焼き。コンニャクがたぬき汁。トウフがきじ焼き。どうも精進らしくない名前がつけられたものです。

「この玉子焼きも精進料理に入りますか」

「当山では牝鶏だけを飼っておりますな。

無精卵を食べても殺生にはなりませんわい」

老僧はなかなか開けた人でした。

「よい奥様になられましたこと」

私に話しかけたのは和尚さんの孫娘。

仁視。字だけ見たら、線香くさい、男か女かわからない名前と思われそうですが、ヒトミさんと読むと急に可愛い感じがするでしょう。当人は固い字体に似合わない、日本人形のようなお嬢さんです。六年ぶりにお会いして今年二十五才のはずですが大学一年の頃と幾らも変っていないように思いました。独身で髪も天然のまま長くたらし、お化粧もうすい口紅だけしかぬっていません。併し自然の美しさがにじみ出るような、和服のよく似合う美人でした。（私と正反対です）

私は在学の頃の仁視さんが魚貝や肉類を決して食べようとしなかった事を思い出しました。お好み焼きにも行かず、カツオブシの汁さえ使わなかった仁視さん。多分子供の頃からずっと精進食を続けていたのでしょうか。

私とは三才違い。大学では一年間いっしょだっただけで、性格は反対なのに強い印象を残しました。天籟寺仁視という珍しい名前以上に忘れられない人でした。何よりも趣味が理解し合えたのが、嬉しかったのです。一年の交際の後、私は或る商社に勤め、更に三年後、仁視さんは故郷の赤萩町に帰って中学校の先生になりましたが、文通は六年続きました。

赤萩町は嬰一が公務の出張で時々来る町です。併し山一つ越えた場所に天籟寺のようなお寺があるとは知らなかったようです。仁視さんは毎日五軒の山道を通勤しているのだそうです。

「この大きなお寺に二人だけで、さびしくないのですか」

私は仁視さんに聞きました。

仁視さんは先生になってからまだ三年。充分な収入があるとは思えません。和尚さんには軍医の恩給があるでしょうが多いものでは



ないでしょう。天籟寺には山林などの財産もあるとかですが楽な暮し向きではないでしょう。それで広いお寺に二人だけなのでしょう。一番近い農家が一軒以上では私など一日も暮せそうにありません。

「さびしいけれど子供の頃からなれていますし、全く二人だけでもありませんのよ。猿に猪。兎や鹿。それに赤萩氏と天籟寺氏の先祖などが月夜の晩によく出て来ます」

私はここでもう一つ思い出しました。仁視さんが手相や占いをやり、それが実によく当たった事。私にも手相の見方を教えて下さいました。けれど私のは当りません。

どこか神秘的な感じさえする仁視さん。

先祖が現れる、と言った時も冗談らしい色は全然見えませんでした。

「仁視。かたづけと寝床の用意をなさい」

和尚さんが話を中断しました。

「今日はもうおそい。風呂に入っておやすみになるのがよからう。明日は仁視も休みの日だし、当山をゆっくり御案内しましょう。荒れてはいるが開山が古いだけに、見るものは有りますぞ」

嬰一はお風呂の方は遠慮しました。私は時計を見ました。十時半でした。汗は余りかか

ず、疲れているので眠たくなっていました。「おそれ入りますが寝る前に本尊だけは拝ませてください」と思います」

嬰一が申しました。和尚さんは、なぜ困ったような顔をしました。

「よい心がけじゃが本堂に電燈がなくてな」「お寺に来て本尊を拝まずに横になっても眠れません。私の宗旨も、このお寺と同じ真言です。それに本尊は人工の照明で見るより、ろうそくの光で仰ぐ方が尊く見えます」

天籟寺の電燈線は電柱三十本分ぐらいの遠くから引いてあります。山の上なので強い風の晩にはよく停電し、一度消えると電話がないので翌日までなおらないそうです。そのせいか電燈があるのは台所に近い幾部屋かに限られているようでした。他の部屋は、夜は使わないが、石油ランプを用いるようです。

「本尊は薬師如来ですね」

和尚さんは、ろうそくをつけて本堂に案内して下さいました。嬰一は本尊の前に坐ってお経を誦えました。

「磐若心経を御存知とは感心じゃ」

「仏教が好きですから一通りは知っています」

嬰一が和尚さんを引きつけている間に、私は宿泊料代りのお布施を紙に包んで本尊に供

えました。あとで嬰一が申しますには、和尚さんはこれに気がついたけれど、見ないふりをしていたそうです。

もう一つ、気になる事がありました。

本堂の壁に、和尚さんの家族らしい写真を収めた額が並んでいました。和尚さんの若い頃らしい軍服姿。お子さん夫婦と思われる二人。赤ちゃんは仁視さんらしく見えます。その一番はしに、和尚さんがもう一人の軍人と並んだ写真がありました。嬰一が写真を見ようとして立ち止った時の和尚さんの顔は何か当惑したように見えました。そのような感じがしました。ろうそくを持って嬰一の背後を通り過ぎたので、写真の列は暗くなってすぐ見えなくなりました。どうやら見せたくないものが、あの中にあつたようです。

「寝る部屋は本堂裏の二階じゃ。下は庫裡に使っておる。私と仁視はずっと向うに寝るから遠慮せずに朝寝坊されるがよからう」

本堂南側廊下が東に行き当った所は三尊来迎図になっていました。今は色あせていますが昔は美しかったのでしよう。私の背より少し低いぐらい。ただの絵と思いましたが、よく見ると扉でした。注意しないと出入口とは思えません。かくし扉ではないかしら。



どうも天籟寺は、ただのお寺ではないみたいです。

扉の中は窓のない石倉のような所でした。天籟寺全体が山の斜面に建っているので建物の東側は一階が半地下式になり、二階は東から入ると平家になるようです。

石倉のようなこの部屋には立派なコレクションが雑然と置かれてありました。

大将が着たであろう、よろいとかぶと。

美しい貝がらで飾った馬の鞍とあぶみ。

うるし塗りの弓と白羽の矢一とそろい。

私の背ほどもありそうな太刀。

きれいな具足箱。短刀。槍。旗。陣羽織。

その他、私の知らない革や金属の道具類。

観覧料をとって公開したらよさそうな品々

だと思いました。私はよくわかりませんが、

売れば相当高値になるでしょう。これほどの

寺宝を売らなくても今まで来られたのですか

ら、天籟寺には私などにはわからない財産か

収入があったに違いありません。

「よろいとは戦国時代のものではないようです

ね。鎌倉期か、或はそれ以前か」

嬰一は古いものが大好きです。そしてこのコレクションの中には、見ていけないものはなかったようです。和尚さんはろうそくを上

げて部屋の隅々を照らして下さいました。

「たしかに桶側胴ではありません。赤萩氏に遥か昔から伝えられた家宝の武具類が当山へ納められたのだから非常に古いものでしょうな。天籟寺の住職はいつも赤萩氏の一族から出ることになっていましたが、赤萩氏は熱心に当山への寄進を行い、それが赤萩氏滅亡後に残ったという次第です」

私にも次第にわかって来ました。赤萩氏が浩月山に城を構えた頃、大切な場所に当る錦繡山に城基のようなお寺を建て、一族を住職とし、武具やお米も貯めておいたものでしょう。嬰一は詰城と呼びましたが、これは本城が陥ちた後、最後に立てこもる所という意味です。それとも戦国の習いで、本家滅亡の時にも祭りが絶えないよう、早くに一族を住職とするお寺を用意しておいたのでしょうか。

「この箱は何に使うのですか」

嬰一が暗い方に指しました。和尚さんが、ろうそくを持って進み出ました。丈夫な木柱で組み立てられ、中が透けて見えるような箱でした。大きさは人一人、体を折り曲げれば入れるぐらいあります。私は思わず声を立てるところでした。この箱は嬰一から書物の絵で見せられた事があります。使う目的も知っ

ていました。もちろん嬰一自身も知っていないが、わざと聞いているのです。

「若い方は御存知あるまい。これは拷問の道具じゃ。箱責めと言うてな。赤萩氏が弦月城から山陰山陽を支配していた頃、使ったそうじゃ」

和尚さんは得意そうに説明しました。嬰一は箱のふたを開けました。

「どうやって使うのですか」

私は、そら来た、と感じました。

「人を縛って中に正坐させ、上体を前に倒し背中の上にふたを閉める。箱の底は算木になっているし、脇は透いているから外から色々な道具を突き入れる事もできる。箱ごと吊り上げて水につけてもよい」

嬰一は始めて聞くような顔をしています。

「賀集子。ちょっと来てごらん」

とうとう嬰一の病気が出ました。これをしたかったのでしょうか。二三の問答の末、私は嬰一に抱き上げられて箱の中に正坐させられました。

「いたーあい」

箱の底は三角のとがった木が、鋭い部分を上に向けて並んでいます。私は余りの痛さにびっくりしました。



和尚さんが見ている前です。まさか本当に責めたりはしないでしょうが。

「手を後ろに廻して」

縛られるのかと思って驚いたけれど、嬰一も、そこまで横暴ではありませんでした。私が手を背中に組んで前かがみになった上へ、ふたを半分だけ閉めて止めました。

「何も悪い事をしてないのだから、ひどい事しちやいやよ」

「もういいよ。どんな感じ？」

短い時間、坐っただけなのに、足には赤い縞が幾重にもついてしまいました。

「昔の人は恐い道具を考えるのね。五分坐ったら歩けなくなるわよ」

嬰一は他の道具類も同じくらい熱心に観察しました。少くとも、そのようにしてみせました。弦のない弓でねらってみたり、研いでない刀を抜いたり、かぶとを私にかぶせてみたり。

私はナギナタを持って、重いのでびっくりしました。昔の女の人こんな重いものを、本当に水車のように振り廻したのかと疑いました。

「余りすばらしいので驚きました。明日もつとゆっくり見せていただきますよう」

十一時を少し廻っていました。私達は石倉から急な階段を上りました。八畳の客殿のような所で、二人分の寝具が用意してありました。和尚さんは石油ランプに灯を入れて出て行きました。

南側の障子を開けると和尚さんらしい影がろうそくを持って渡り廊下を通って行くのが見えました。和尚さん達の寝室らしい灯は中庭ぐらゐの空間をはさんだ向うに見えます。本堂の大屋根は西側、眼の下にあり、山門はずっと向うでした。天籟寺は錦繡山の西側に広大な敷地を占め、その方々に余り大きな建物に建物が散在し、その一部は渡り廊下で結ばれ、四方を松林で囲まれているようです。そしてすべては闇の底に黒々と沈み、静かに眠っていました。

二人だけになると嬰一は早速、就寝前の慣例になっているプレイを始めました。私には拒否の自由がありません。四月末の山上はまだ寒いのに、仁視さんから借りたゆかたは剥ぎ取られてしまいました。縄や紐は自動車に積んだままでした。材料は二人分のゆかたの紐だけです。併しそれで充分でした。

嬰一が私の腕を突きました。プレイの要求です。私はおとなしく向うを向き、両手を

背に廻しました。縛られるのは好きではありませんが別段重大な負担だとも思いません。嬰一は私の両手首と両足首を縛りました。

「賀集子が箱にはいった時、和尚さんの眼が光っていたよ」

「まさか」

「すぐ止めたら、つまらなそうにした」

「どうだって」

「いいんだらう。だけど箱のふたに、これが着いていたよ」

髪の毛でした。こげ茶色で縮れています。

「賀集子の一番長い毛よりも長いよ」

嬰一の言おうとしている事が、わかりました。

「仁視さんのでもないわ。真黒でウェーブがかかっていないはずだもの」

嬰一はこの一本の髪に気附いて、私を箱に入れ、私の髪にほしいものを手早く織りこんでいたのです。

「どうもおかしな寺だ。見ていけないものもあるようだし」

「一週間、泊めて下さいと書いたら、歓迎しますという返事がすぐ来たのよ」

「取って喰うため？」

「こわい事、言わないで」



私は手足を縛られたまま嬰一の方へ転がりました。掛けぶとんが乱れました。嬰一は石油ランプを消しました。

「さっきの外国人の女。天籟寺という言葉がわかったようだ。あわてていたよ」

「そして山門の下から逃げだしたわ」

「すると、この髪は」

「あの女の人が、あの箱に？」

「論理の飛躍だよ」

## 山原清子嬢の仕置図

### 入墨女賊拷問刑罰集

キヤビネ版印画紙焼付

各組 三枚一組 五〇〇円  
八組 全部にて 三五〇〇円

女賊仰向け木馬責 略号 (よひ)

全裸の入墨女賊折檻 略号 (よせ)

入墨女賊笞打ち糾問 略号 (よゆ)

女賊ハリツケ拷問 略号 (よめ)

凄絶海老責め拷問 略号 (よす)

全裸四つ這い木馬責 略号 (よも)

逆さ吊りのお仕置 略号 (よき)

大の字磔女賊処刑 略号 (よさ)

私は明日からでも箱に詰められそうな気がしました。

「本堂にも見ていけないものがあるそうだ」

「写真の中の、どれか一つ？」

「そっと見て来る」

「ほどいてよ」

突然、嬰一が私の鼻まで掛けぶとんを引き上げました。静かにしろという合図です。

嬰一は視力は弱いが敏感な耳を持っています。何かを聞いたのでしょうか。

息を殺していると静かに動く気配を感じました。人のようです。下の石倉らしい。私達の寝息を確かめているみたいです。私の背骨がふるえ始めました。

間もなく、人の気配はそよ風よりも静かに消えて行きました。立ち去ったのでしょうか。

「何をしていたのかしら」

私は掛けぶとんの下から顔を出しました。

「和尚さんだろう。さっき本堂に置いたお布施がほしくて、そっと取りに来たのだよ」

これは嬰一の気休めです。

「寝たかどうか、調べていたようよ」

「……………」

嬰一は神経質なくせに大胆なところがあります。こわいという事を知らないようです。

「あなた」

返事がありません。眠ったようです。

とにかく眠る事にかけてはナポレオンみたいな男です。ナポレオンは夜通し作戦を練り早朝に兵士を配置し攻撃を命じると「これで勝った」と言つて大砲が鳴り始めると同時に眠ってしまったそうです。嬰一は、それほどではありませんが、

二人で飛行機に乗った時、嵐になって着陸できず、何度も行く先が変わり、飛行機はガタ揺れているのに嬰一は「なるようにしかならない」と言つて私のひざを枕にして本当に眠ってしまった。決して酔ったものではありません。とにかく、そのような男です。

私はいつもの通り自分で後ろ手の結び目を解き始めました。縛るのは彼の仕事。解くのは私の役。不公平な分担です。でも、五分もあれば解けるでしょう。併し眼が開ききって眠れそうにもありませんでした。そろそろ真夜半です。私の血には迷信深い北方種のもものが幾らか入っているようで、この時刻に言い知れぬ恐怖をおぼえました。信頼できる嬰一がそばに居る事だけが心丈夫です。

どこか森の奥で、ふくろうが鳴きました。

(続く)



## 【奇譚雑談】

夜<sup>よる</sup>の徒<sup>つれ</sup>然<sup>づれ</sup>草<sup>ぐさ</sup>

中 宮 栄

## 【コレクターはこわい】

余り具体的には書けない事柄だが、自戒と警告的な意味を含めて記述しよう。

この場合の「こわい」は自分自身が受ける恐怖と不信についてである。

ふとした機会、知人の紹介、奇ク読者欄で得た交歓の相手などと「変った写真」「興味ある資料」の交換の話が出ると大抵一対一の割合で「資料交換」の条件が成立する場合が多い。文通による場合は特に、誠意を見せるつもりでこちらはキャビネ版などに伸した鮮

明なフォトを「極秘」「他出不用」と念を押して送付しても、折返し郵送されてくる先方の提供品は手札であったり名刺版の小型印画で誤魔化され、失望する事の方が多いのである。然しこの程度の事なら見えない相手に対して「あの野郎……」と独りつぶやけば済まされる。が、そのあとが問題なのだ。コレクター達は次ぎ次ぎと蒐集欲が湧くから、手許に交換物品がなくなると、自前では間に合わなくなって入手した「資料」をコピーしだし、「門外不出」の誓約もいつしか破棄され

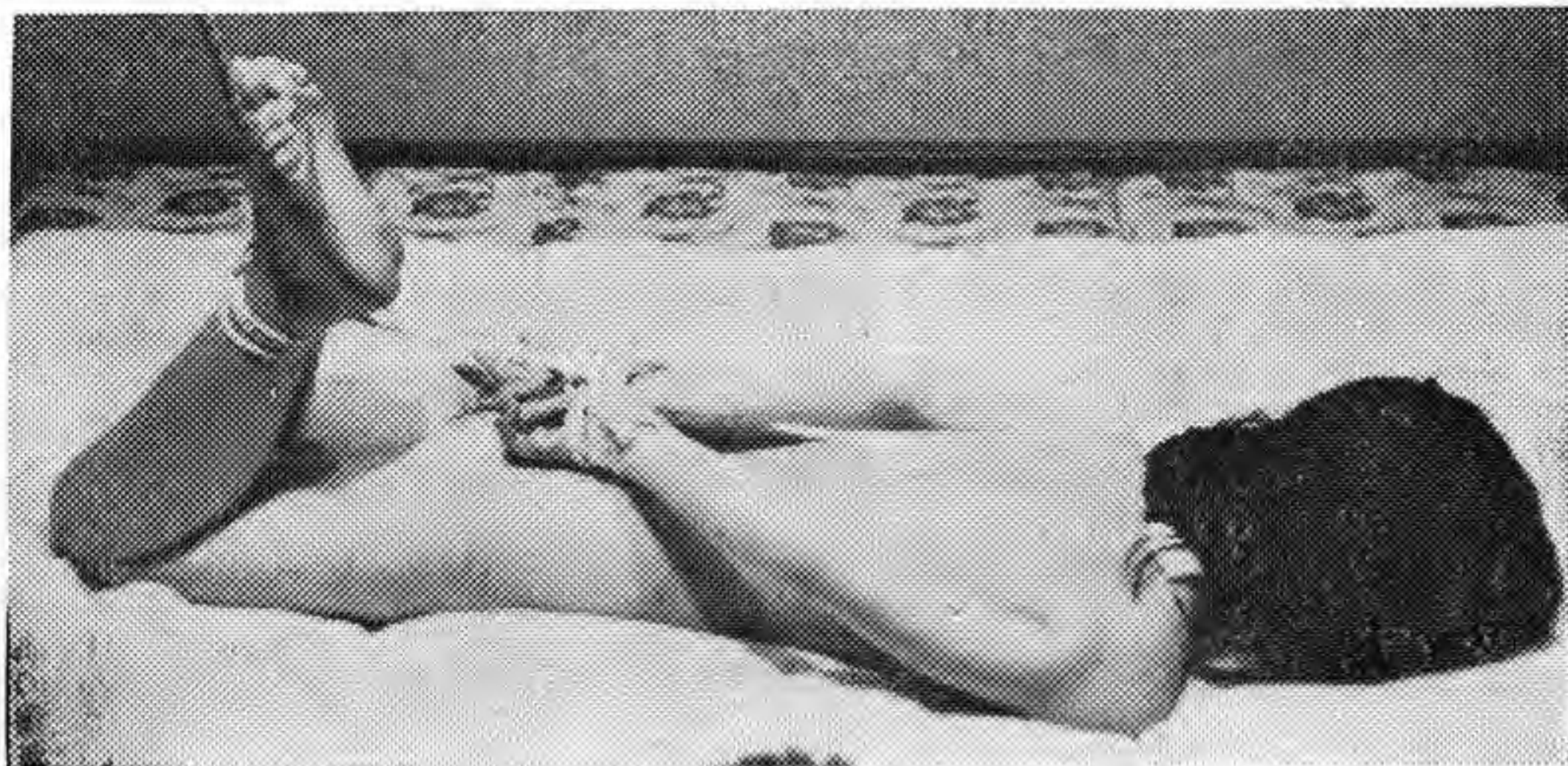
て行く。どうせ彼奴に判るまい……と思うのである。どうか、恰好な「自分で撮った写真」であるかのような前宣伝と共に新しい交換用の品を作ると、それを利用しだす結果となる。(勿論この事は予め考えておくが)これが露見した時の不快さは例えようがない。と同時に「こわさ」を感じるのだ。

風紀関係の官憲の目は厳しい。思わぬ時、思わぬ事で不祥事に巻き込まれるかも知れないのだ。一人のコレクターの不祥事から、それこそ大変なとばかりを受け取った人が現実にいる。そして芋づる式に「呼び出し」を受け苦い思いを……しなくてもよかった筈なのにさせられた人も多い筈だと思つと、人の誠意とは何だろうか、と疑わざるを得ない。コレクター同志、よく相手を選ぶ事が、必要である。

何故今更の如く改めて、こんな事柄を特に採り上げたのか――

過日、ポカンとスケジュールのない日が出た。かねてから訪問し積る話をしたいと考えていた先輩の家に、チャンスだとはかり足をのばした時に、この怖れざるを得ない事実につかつたのである。氏も有数なコレクターである。そのせいかも知れない。豊富な蒐





集品の中に私のものが混っていたのは、但しそれは彼に直接提供したものではなかった。話を聞いて行く内に、徳島の某氏は云々、札幌の彼はこれこれしかじかと前歴が曝露されたのには衝撃であった。以下教訓として「蒐集狂」には手を出すなという事であろうか。

#### 【文弥節】

誰がつけたのか知らないが、亦、具体的に何を称しているのかも正直な所知らない。然し私なりの解釈では、女性の行為のプロセスと終了までの音声を云っているであろうと思う。「ボクの責め方」でユニークな記事を「奇クサロン」に提供している宝塚二三夫氏が使用する度合いの多い表現である。

小型テレコの発達で、玄人筋の作品でないものを聴く事が多くなった。

「まあね、辻村さんお察しの通りですよ。いずれはポツポツ声を取りだめて行くつもりですが、私達のプレイ最中の生々しい声も、いつかは聞いて頂くつもりですよ」

『いのちふくらむ』（十二月号、辻村隆氏の関係記事文中より引用）の中での増田喜代司さんが語った言葉である。毎秒四・七五糶往復録音二時間のテープレコーダーの出現（もつと低速で長時間のものもあるが——）は愛

情行為の全貌を余すところなく記録する。

子供の成長記録を声で——というもつともらしい使用目的で買い込んだテレコを、専らこの方向で活用されている人がいる。ついでに類似のテープを蒐集しているのであるが。

「私設マスターズ研究所だなァ」と笑った事だが、彼氏は自分の妻女の声が足りないと思っている。一体どうなればいいと思っているのか、と質問すると、「堪能の極限」のものだと云って聴かせてくれたのが凄かった。日本家屋の構造上、余程「他人に見られる、聞かれる」の二大不安要素を排除しなければ考えられないハーモニーである。チーズと栗の花の香が、まさか耳から嗅がされるとは思っていなかっただけに、「声」が愛情の尺度を表わす事になるのかどうかは疑念があるが華々しさが羨しかった。

この話、オチがある。彼氏同僚の同じ不満居士にテープを貸したら、その相手の細君は「安心」したのか「よくハモる」ようになり御当人の方は「みっともない」と指揮者不在のオーケストラに転落したとの事。罪なテレコの発達である。

#### 【夫人を囲んで】

肝心の香山玲子嬢からは現在何も音沙汰な



いが、私の指定した局留で或る日一通の親書を入手した。西武池袋線の江古田に住んでいるという若いIさんからである。

江古田には古くから日大の芸術学部があるし、詳しい事は聞かないが彼が話に出す「学校」とはどうやら其処のようである。

I君は学生結婚して二年目、駅前のU喫茶店でおち合ってから訪れた彼の住居はマーケットの二階が貸室になっている六帖一間のアパートであった。

先客があった。A君とその女友達——彼等は開口一番、「Nさんみたいな、おっかなびっくりな大人を刺戟してやろうと思って……」呼んだのだという挨拶である。

大学生四人と三十路を越した私と、そこには十年もの年令差があった。

ドアの裏側のカーテンと、小さなキッチンと部屋との境いのカーテンを閉めると、廊下からは二重に遮蔽されることになる六帖の間で、「シェア」も「マット」も経験済みという二組の恋人たちが「ヘルス・ペルソナ」というティーンをするのを参観する恩恵に浴することとなったのである。ペルソナなラテン語で人、または人体という名詞である。「少年サンデー」から「朝日ジャーナル」ま

での巾広い週刊雑誌群を積み重ねて乱読する彼等は実に話題が豊富だったし、聞いていて面白い。しかも穴居時代の人類の如く、すべからく大らかなのである。

「こうやっているよね、不便なのはトレイへ行く時です」——I君の述懐である。そのアパートは外に共同のものしかないから。

I君にしてもA君にしてもセックスは消耗じゃないという考え方をしている。

「よく青春の生き方とかなんか云う本で、欲望を抑えるためにスポーツをしるなんて書いてある。医学博士が得々と説教している……あんなの、性生活の悪知恵」の最たるものだ。若い内の行為は肉体的には未熟かもしれないけど、心の融合には適切な手段だと思うな。僕なんかそれで随分オナニーから受ける不快感や罪悪感が救われてると思うし、すかつとした気持で本も読める、これ（I夫人のこと）ともうまく行ってるもん」とI君は自画自讃である。

I夫人は温和しい人だ。

「Iのためだったらと思って何んでもして上げちゃうんです。その方が大事にもしてくれますし、いたわってってくれ……愛の深さ、強さを感じます。私、シナリオ書いているんで

す。原稿用紙に向っている時でも、この人自分の事で邪魔して来るんです、平気で。そんな時、十分ばかり貸してやればいいんだって割りきっちゃって、すっかりまかせちゃうんですよ。こちらは小休止のつもりでもIにとっては充実した満足が得られるんですもの……別にセックスだけが生きる欲びで、それに耽ってばかりいる訳じゃないし、きちっと価値や意義を規定することないと思います。……私の方でIが欲しくなったら、その時はこの人一生懸命になります。恍惚感が去ってから、『ありがとう』って離れて、創作の続きたり、手芸したりですわ」

仲のいい夫婦は、それでいいのだと思う。I夫婦の影響を受けたA君は、彼女と結婚はするが野暮な書類上の夫婦にはならないんだと力説する。

「私はね、君たちの考え方を間違っていると非難したり否定したりはしないよ、いや出来ないんだな、何故って、そういう生活に憧れているから。この世の中に生れて来たのは私の意志じゃない、どう良く解釈したって親の快楽の副産物だ——民族保存の本能というやつで理解をおしつけられているけど——つまり親たちのために生命を与えられちゃった体



だよ。しかも戦争という大変苦しい期間も経て来て、やっと今自分の意志で「何かしてやろう」と思うようになった。生きる価値、生きて行く欲びを知ろうという欲が生れて来たといえるのじゃないかな、これは金持になつて楽して暮して行きたいと考える願望とは違ふもんだ。徹底した利己主義に生きてみたい、夫婦の、愛する人との生活に喜びと安らぎを満したい、自分の生活が満ち足りたもの

となつた暁、他人の生活の是正への感化力となつて現われる信念を創りたいと考えているんだ。芸術家たらんと志すなら、その位の氣力が欲しいと思う。だから自分の生活、利己的に見える珍な風習だつて芸術的萌芽の土壤にしたいんだ。妻をとことん愛せなくてな

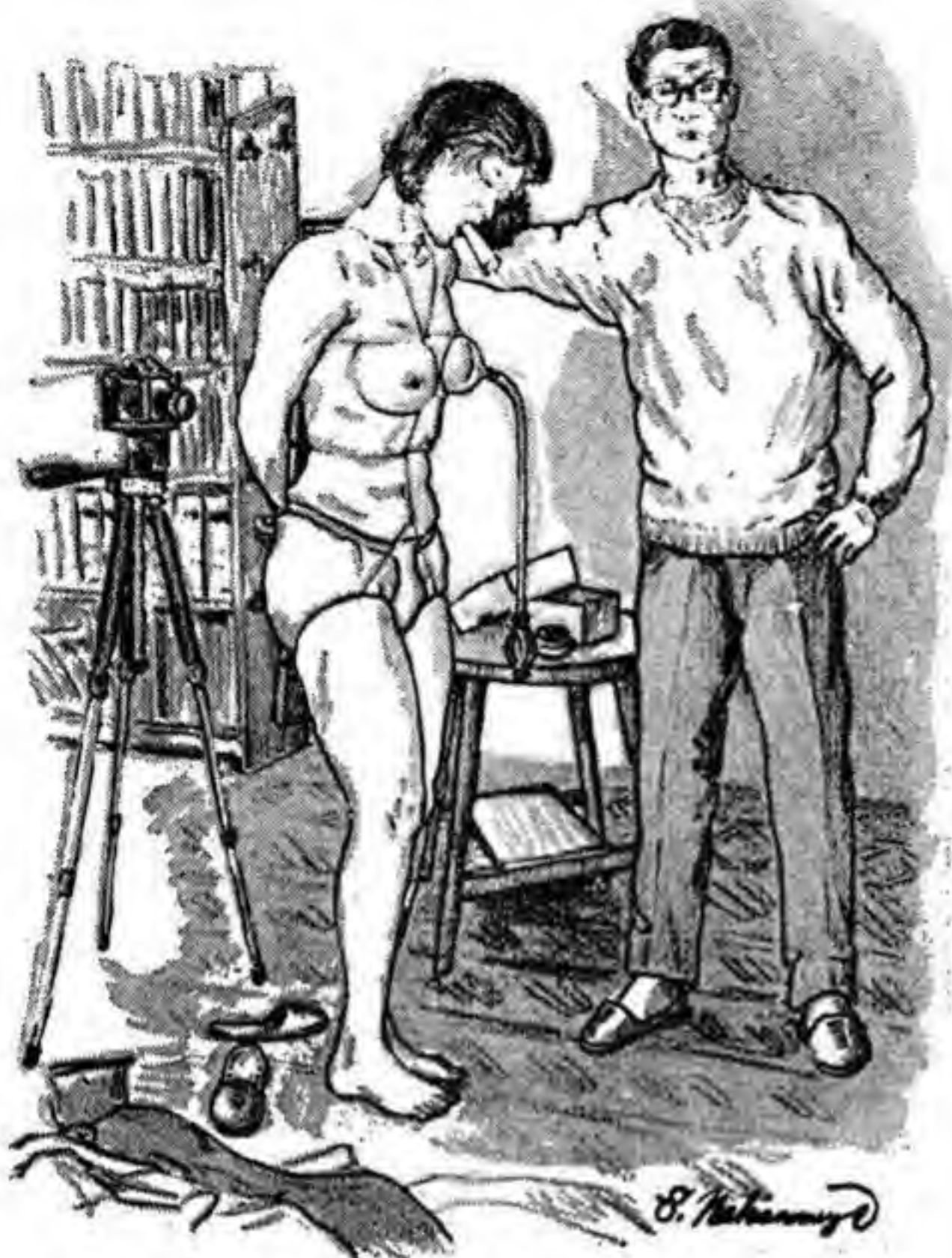
よ。さて、そこ

に本来のSM芸術論へと進む意義があるのだ」とは、私の自論ぶちまけの一席があつて、I夫人緊縛へ移行。

起立してもらふ。短い綿ロープで膝上十センチに、三重の縛り、一方を長く余す。次いで一旦正座してもらつてから、乳房

を合わされた太腿の両外側へ分けるようにして上体を胸腹部が太腿部と密着するように押しつけて首繩を掛ける。下腹部がベッタリ畳の上に落ちる所まで正座の両足首を左右に広げ、別の綿ロープで背面渡し連縛とし、両腕を背中中組重ねて縛り、中央に結び目をこしらえて、両足くくりの背臀部のロープに交わして絞り上げる。踵がぐつと上つて足の裏が空を蹴る——三点セットのテーブルの上に二人がかりでのせると、海亀を眺めるような観賞品となつた。I君は盛んに「いいな、いいな」と繰り返すが、それは緊縛のテクニクに対しての歓声ではなく、完全束縛の「知られざる愛妻の女体美」に対してであり、一種の羞恥責めに耐える妻への慰めとはげましかつたであらう。A君が三十五耗の広角レンズでI夫婦のプレイを撮影する。I君はその日初めて妻に残された最後の処女地を統治したのである。呻吟と歓喜のあとに來た静寂の中で、夫婦の熱愛の抱擁が、崇高なまでに見えたのであつた。

恐らく、I夫人にしては、「ヘルヌ・ペルソナ」のプログラム外のミサであつたに違いないし、I君にしても危惧とためらいがあつての上の事であつたらうが、慰めは夫人の心





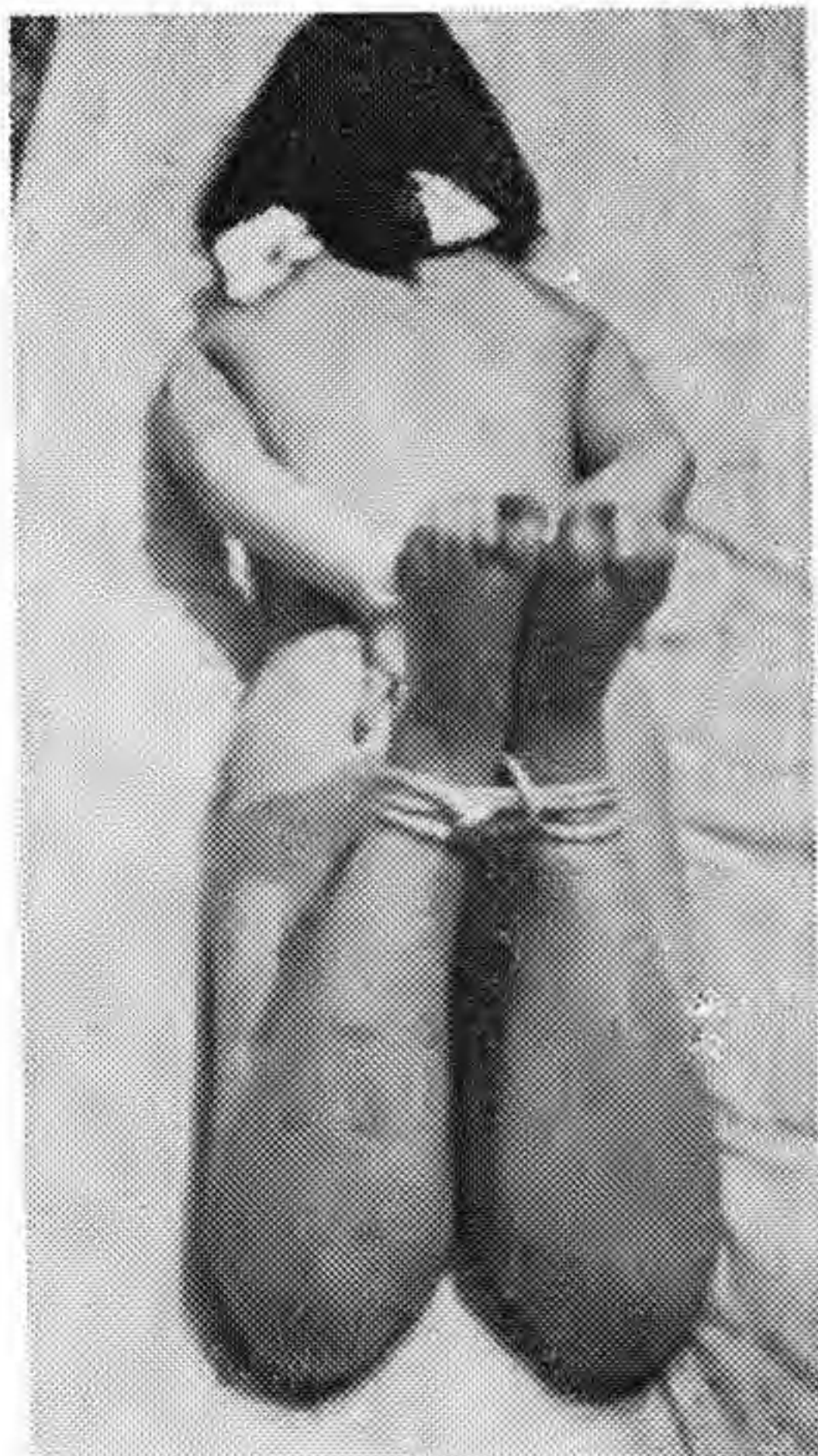
を和らげたようであった。

「柿を沢山食べる人は冬でも風邪を引かないのよ、ビタミンCが豊富だから……」と云いながら皮をむく夫人、その初めての体験も、前衛的なオリジナル・シナリオの中に生かされて、ひょっとしたら卒業課題の映画製作へと企画化され、アンダーグラウンドフィルムとして脚光浴びるかも知れないなどと、思いながら、武智鉄二論へと進んだティティーンに夜の更けるのも忘れていた。

# 【フランスにエロダク誕生】

平凡パンチ10/31号の「ズーム・アップ」の紹介――

黒タイツにブーツ、腰に巾広い、皮ベルトを締めた女性が、木の枝から吊った半裸体のブロード娘を責めている写真が、「仲間よ、オッス」という映画の一シーンだとして掲載されている。映画の内容は、△実際におこったある騒動▽に材をとったとしているが、フランスのエロダクとは「セックスのヌーベルバーグ」を意味するようになったと



紹介文は云い、「語源は日本からの輸入とはへんな話である」と結んである。「ワリコウ」が字源にのったと広告に利用している銀行の例もあるが、そのうち「エロダク」もそんな解釈を残して辞典にのるかもしれない。

映画通信を寄せられる東山映史氏も見落されたのか、「蛇精の肌」という映画のサディチック・シーンは話題にのぼらなかったが面白い。温泉町でアンマをやっている失明の兄貴分の所へ、拉致した女を売りに来た舎弟たちが、売買が成立すると犯しやすいように裸にむいて縛り上げ、鈴のついた紐を輪にし

て首にかけて去って行く。その後で盲人と鈴の女とが狭い部屋の中で追いつ追われつのゲームとなるのだが、割と演技に工夫をこらす山本昌平の怪奇な表現力で、シネスコ画面はよくその薄気味悪い臨場感を出していた。

香取環という女優さん――彼女の出演する映画はピンクものでも安心して観られるから不思議である。「情炎」という映画では女流箏曲家で「永遠の処女」と賞讃されながら、仮面を剥ぐと男を鞭打して欲望を遂げるS女性を演じ、「炎の女」では根は清純なズベ公で、男の為に二重三重の殺人を犯してしまう

不幸な娘を演じていたが、自首して行く前に刑務所の中でも愛する男と一緒にいるのだと思いたいという願いをこめて、腿に彫らす刺青シーンでは、よく情感が出ていた。

忙しい人らしいが、機会があったら逢って話し合いたい人である。

【新しい水着をデザインする集い】

四十一年の夏は、前の年の「トップレス」騒ぎより落着



を取戻した水着（女性モード）であつたが、それでもビキニ隆盛のプールサイドで、ヌードロックやら宇宙モードまで仲々勇しい新鮮な水着がお目見得し、男性諸氏を驚嘆させたり保養の薬を投じてくれた。行きつく所まで行ったという女性モードだが、エンタプライズイングな連中が乗って「四十二年の水着モードを創る会」を開こうという相談がまとまつた。

海辺やプールサイドの華がどうせ若い娘なら、大いに太陽の子らしく楽しく跳ねまわつて貰いたいものだという趣旨から、新しい水着をデザインし女友達に着てもらおうという訳である。開催予定日はクリスマスの前に。クリスマスがキリストの誕生日なら、宗教に無関係な我々までが他人の誕生日の祝いをする事ない、美女を誕生させてムードを楽しむうじゃないかという便乗的な考えもあって発表会はクリスマス・イヴという事にしてあるが、参加を希望される方は歓迎します。成果はいずれ発表してみましよう。

奇クの読者なら、ゴムやビニール布製の、風変りなモードも出現するかも知れないし、レザーやエナメルクロスを使う新型も飛び出しそうだ。

### 【ベルガーモ式の錠前】

十二月号の雑誌で「深夜の来訪者」としてK夫妻の事を書いたら、読者からお問合せが届いた。佐X氏からは「護渡してくれるように頼んで欲しい」X藤氏は「施錠している写真を是非見せて欲しい」という依頼である。

恐らく市販前の本誌を入手して関心を持たれた方であろうから、定期購読者か出版元から奇クを贈られた寄稿者の方であると考えられる。K氏にその旨伝える――

「いやあ、照れ臭いですねえ……結論は、お断りして下さい」との事。

「あんなもの、御自分で工夫して細工なさればいいですよ。『貞操帯』といったって、昔と違い今はどんな頑強なものを作ったつもりでも、鋭利なペンチや硬質鋸さえあれば簡単に外されちゃうもんです。ただ、大人の玩具でしかありませんからね……製作日数は三日でした。でも丸々三日かかったという訳じゃありません。ひまを見ていたずらした作品です……ああ、今もワイフはしています。でも、真鍮ですからね、輝きを保つためにアレ、随分苦労しているらしいです、アッハハハ」

K夫人は和服で現われた。だが何処となく

着付が野暮ったい。お茶を置いて去った後、K氏が照れながら話し出す。

「ワイフ、今使役中なんです」

「ホウ、何か失敗でも？」

「車を電柱で擦っちゃって……尾灯は割っちゃうし、後のバンパーは曲げちゃうしの大損害なんです。で、懲罰ですワ」

着付はK氏がしたのだという。呼び戻された夫人が「お父さん、今日は堪忍して」と拒むのを「駄目ですノ」と一喝しながら帯を解くK氏。ウールの着物の下は何もない。背中に巾七寸、長さ三尺の棚板用のラワン板に八カ所穴をあけ針金でとめてある。身長五尺三寸位の夫人の座高では、一尺以上もピップから下に板が出ている。座る事は出来ない。夫人が開陳を拒んだ理由は、丁度「周期」に当たっていたからであつた……と後になって思ったが、迂闊にも氏も知らなかったらしい。

針金は深く肌に食い入り、赤い溝を作っている。夫人が笑ったのかと思つたのは嗚咽のはじまりであつた。

「もう本当に赦して上げて下さいよ」

思わず、場違いかも知れないが第三者の私もいたたまれずに声をかける。

「泣いたりすると、また罪が重くなるぞ」



とK氏は脅す。アッと云う間もなくキナキナ人形を口に押し込んでしまった。バストが余り大きくない夫人に対してK氏はかねてから不満だったが、婦人雑誌の通信販売で取り寄せたという乳膨真空吸引器のセットを出して、美素クリームでマッサージしてから、カップを当ててゴム球を押し続けた。

美容を兼ねた責めというものであろうか。しかし、空恐しいような好奇心で吸いつけられるような、複雑な思いが交錯するひとときであった。

### 【愛のお荷物は重いのか？】

ほほえましい写真が「女性自身」一〇月二四日号の今週のユーモア賞として掲載されている。臨月近い美しいママとオチビちゃんの反身になったお腹のくらべっこである。カメラはパパの手になるものであろう。そのパパは増田氏のように奥さんの孕み腹を全裸では撮っていないかもしれない。しかし愛情の記録は楽しみながら残していることだろう。羨しいカメラ・アイである。

インテリ程見たがる……という記事が女性週刊誌にあったのを覚えている。出産の光景は美と醜と、苦と楽とのスペクタクルなシーンだという。滅多な事では産院は夫の立会を

許可しないというが（衛生本位との事だが）理解出来ない。

我が子の出産を目撃出来る方法は街の中の助産婦さんと呼んだ場合に限られる——例外として可能——らしいが、その助産婦、助産所の看板も余り見掛けなくなった。私達の小さい頃、とうに引越してしまって其処は他人の住居となっていて家の前を、偶然通りかかったりすると、「ここで僕が生れたんだ」となつかしげに、友達同志で話合ったものである。今じゃ世の妊婦共、日赤産院じゃなきゃ気が済まない口振りだ。バックヤロウノ 白い壁の中に情緒も養もあるかよ。妹や弟の新しい出現に、心をときめかせながら産湯を湧した時の感激、新しい妹弟の元気な産声に、快哉した幼き日——それらは仲のよい兄弟愛の芽生えであったものを。閉された手術室のドアは、愛情の断絶の象徴でしかない。「仲間よ、オッス」——生と死のある世界じゃなく、「生れたからには生きて行く」世界を最大限に活用しようじゃないか。あらゆる可能性を求める事は生きる信念のある者に許された特権でさえある。ヘルス・ペルソナ——いぞ。

### 【九十九の会】

自己宣伝じゃないか、と編集に当る方からケズラレルかもしれないが——

今度、標題の如く命名した会を作ります。正式にはナイティーンナイの会、略して「ナイナイ会」と呼びます。人間的にも、社会的名声、地位にも程遠い未熟ものたちだが、純金と称される金塊ですら「99.999」と刻印がある位——つまり一〇〇%に近く成長しようという希み、しかも現在は「なににも無い」我々だが、という意欲の象徴として九十九という数字を尊重して行きます。また二十世紀も余すところ三十三年、現在の年に例を私にとると六十余才になった時は世紀も変わるし、その頃には或る程度独自の地位、生活の基盤の確立も果せる事でしようし、三十三年後には自然消滅してもいいんじゃないかという考えもあって、九十九の会の存続は今世紀に限る……としています。未知なるものには、食欲に、伸したい技量には相互扶助を、と理想を描いているのですが。但し、「ウィッチクラフト」を期待する向きは失望を与えます。

前節で「バックヤロウノ」と云ったような事柄も、憲法で保障されている。「言論の自由」の下に、大いに論じ且つ発表して行けるだけの、絵画でいえばイラストに関心ある人



は痛烈なる諷刺画をものにし、詩では新しい形の吟遊詩人の生誕を仲間のうちから希うような「結社」をと願っています。

### 【中原久美子嬢】

お希みの品、お希みの事柄、どうぞお申し

出下さい。お待ちしております。

### 【こんな物いかがです】

芝居で使う「刺青」の肉襦袢。江戸時代の火焰（火消し人足）役のもの。東京の河内屋へ発注すると、大変高価なものです。某名題

役者が使ったもの、珍らしいので護り受けましたが、大塚啓子さんに着用してもらって写真撮りたいたなどと空想していましたが果されませんでした。活用して頂ければ幸甚。〔掲載写真は筆者の提供です〕

## ☆特殊趣向の最新撮影フォト分譲品☆

ゴム衣とゴム猿轡	大手札三枚一組	四〇〇円
木村 洋子	略号△なと▽	
ゴム衣緊縛悶悦姿	大手札五枚一組	六〇〇円
木村 洋子	略号△なへ▽	
黒ゴム衣後手縛り	大手札三枚一組	四〇〇円
木村 洋子	略号△なほ▽	
首枷手枷に泣く女	大手札三枚一組	四〇〇円
美木乃々子	略号△みき▽	
六尺襷のはじらい	大手札五枚一組	六〇〇円
横屋 峯子	略号△ふけ▽	
双臂に喰い込む襷	大手札五枚一組	六〇〇円
横屋 峯子	略号△ふく▽	
前袋をさらす羞恥	大手札五枚一組	六〇〇円
横屋 峯子	略号△ふか▽	
可憐な牝犬の調教	大手札四枚一組	五〇〇円
足舐めをたのしむ	木村 洋子	略号△めあ▽
足舐めを強要する	大手札四枚一組	五〇〇円
木村 洋子	略号△めく▽	
足舐め訓練の牝犬	大手札四枚一組	五〇〇円
木村 洋子	略号△めゆ▽	
愛玩用牝犬の生態	大手札四枚一組	五〇〇円
木村 洋子	略号△めや▽	
足首縛りの表情美	大手札三枚一組	四〇〇円
一宮百合子	略号△あひ▽	
美しき足首の縛り	大手札三枚一組	四〇〇円
一宮百合子	略号△あは▽	
足を縛られる快味	大手札三枚一組	四〇〇円
一宮百合子	略号△あふ▽	
生ゴムの猿ぐつわ	大手札四枚一組	五〇〇円
木村 洋子	略号△むこ▽	
白晒フンドシ着用	大手札四枚一組	五〇〇円
一宮百合子	略号△やに▽	
相撲マワシ着用	大手札四枚一組	五〇〇円
一宮百合子	略号△やは▽	
自刃血まみれ屍体	大手札十枚一組	一二〇〇円
東浦ひかる	略号△えめ▽	
血まみれ女斗場面	大手札十二枚一組	一五〇〇円
山原、東浦	略号△えみ▽	
浣腸とオシメ装着	大手札四枚一組	五〇〇円
大塚 啓子	略号△ひそ▽	
股間縛り恍惚表情集	大手札五枚一組	六〇〇円
一宮百合子	略号△るね▽	
鼻責めいたぶられ集	大手札四枚一組	五〇〇円
一宮百合子	略号△るえ▽	
首縄股間膝頭縛り	大手札五枚一組	六〇〇円
一宮百合子	略号△るそ▽	
逆エビ責め強烈縛り	大手札四枚一組	五〇〇円
一宮百合子	略号△るれ▽	
変型後手縛り麗美裸身	大手札七枚一組	七〇〇円
一宮百合子	略号△るた▽	
柔肌に喰い込む股間縛り	大手札五枚一組	六〇〇円
一宮百合子	略号△るよ▽	
股間縛り苦悶表情集	大手札五枚一組	六〇〇円
一宮百合子	略号△るり▽	
緊縛による悦虐表情集	大手札三枚一組	四〇〇円
一宮百合子	略号△るこ▽	
開股強烈股間縛り	大手札三枚一組	四〇〇円
一宮百合子	略号△るぬ▽	
緊縛感放心表情集	大手札五枚一組	五〇〇円
一宮百合子	略号△るわ▽	





(読者原稿)

怪<sup>かい</sup>奇<sup>き</sup>の島<sup>しま</sup>

(殺人マニヤのイメージ)

黒 田 寿

これは私の夢のなかの物語です。何か恰好をつけたければ、太陽系外の一惑星が舞台であると言ってもよいし、この地球上でも、あまり核実験をやりすぎたため、どこかの島で実際に起ったとしてもよい。

むずかしい話はよしませう。空想の有難さはここにあるのです。私はヘソまがりだから、大塚さんたちはあまり殺していない(僅

か五、六回しか)。私のひそかに殺している女性、すべて映画女優から引っぱりだしています。

それも、この顔ならこんな殺し、あの身体つきならあんな殺し方が面白いだろう、といった調子、さぞかし彼女たちにとっては災難だろうが、私は気にしない気にしない。

なぜなら、彼女らは奇クなんか(失礼)読

まないだろうし、もし愛読者がいたら却って喜んでくれるでしょうから。

ともかく、若く美しい女性たちを主役にした、世にもメチャクチャなものがたり……こんな愚文を高い金をだして読むファンが気の毒だ、なんて言う奴には言わしとけ。SM幼稚園生のツヅリ方です……彼女らの服装だっ

て? そんなものはどうでもよろしい。全裸で



もビキニでも、HUNDOSIでも。

○

世界一周旅行を志した彼女たちの船は、突然起った暴風のために、地図にはない不気味な島に打ちあげられた。この島は何から何までスケールが大きかった。海岸に立つ木は数十メートルから数百メートルにも及んでいり、花でさえも直径十メートル位のはざらにある。波打際の砂もまるでジャリのように、何か突然変異でもおきたのであろうか。

森の入口に真赤なバラに似た花が咲き、巨大な葉が地上すれすれにのびている。葉子はその上によじのぼり、はうように進むと、直径二十センチ位の腰掛のようなものがみられた。

“この上で休めというのね”

英子はおどけた調子で腰をおろしたが、とたんに真上から同じ大きさの葉が舞いおり、同時に葉の周囲の太い針のような繊維が逆立ち、これらが組合って、彼女をはさみこんでしまった。

“あっ！ 助けて！”

悲痛な叫び声があがる。皆はあわててその傍にかけより、なんとか境目をこじあげ、ひっぱりだそうとしたが及ばなかった。

葉の表面は吸盤となって英子の皮膚に吸いつき、体液をぐんぐん吸いとっている。食虫植物ならぬ、食人植物であったのだ。

“身体がとけてきたわ、早くだして！”

ようやく片腕だけが隙間から外にでたが、悲鳴は次第に弱くなり、やがて全く絶えてしまった。皆が呆然としている間に、突きでている腕もみるみるやせ細っていく。

十分もすると、重なっていた上の葉が静かにひらき、次いで下の葉がゆれ動いて、英子の死体がコロんとこがった。哀れ全身の養分を吸いとられ、カラカラにひからびていではないか。文字通り骨と皮、それに毛髪が残ったにすぎない。

もとの位置に返った食人植物は、心なしか葉も花も、ずっと生き生きとしたようであった。

寿子が泣く泣くその首を斬り落す。せめて首級だけでも、しかるべき所に埋葬しようというのである。生首は案外重いものと知っていたが、予想よりもずっと軽く、出血さえ殆んどみられなかった。

○

仲間の思いもよらぬ最期をみた女たちは、一刻も早くこの地域からぬけだそうとあせっ

た。リーダー格のお富士を先頭に、上方に注意しながら進んでいく。

お富士がおそろおそろの一步ふみだし、続いてもう一步、そして三步目……だが最初の脚は何か強力な接着剤でもつけたかの如く、ピツタリと葉の表面にくっついて動かない。

“どうしたの！”

あとに続く女たちが口々に叫んだが、おそろしくて近づくことができない。

“脚がうごかないの……キャア！”

さすがのお富士も悲鳴をあげた。脚の下からジュクジュクと液がにじみでたのだが、これこそ獲物の肉を簡単に溶かしてしまう、強力な消化酵素の液であった。

すさまじい激痛と共に、足首がズルズルとくずれ、お富士はどっと葉の上に仆れた。たちまちあふれでる液が彼女を浸してしまう。

“いやよ、いやよ。私をたすけて、私を引っぱって！”

けんめいにもがいたが、身体はビクともせず、そのうちにも肉体がドロドロに溶け、みるみるうちに葉の表面から吸いとられ、お富士の生命が消えていく。

“だめだわ、もういいの。私は食べられてしまっけど、皆さんの無事を祈るわ。さような



ら

次第に消えていく意識のなか、お富士は必死に首をもちあげ、最後まで顔を溶かされまいとしていた。これこそ女性の本能か。

「ゆるしてね！」

お富士の意志をみてとった幸代が、大刀をふるってその頸すじを打つ。パシャッ！とぬれ手拭をはたくような音がして、美女お富士の首は噴血と共に三メートルもとんだ。

くずれおちた身体を、無情の消化液は容赦なく溶かしてしまい、青々とした葉の上に残ったのは、女体の完全な骨格標本と毛髪だけであった。

お富士の生首は幸代がかかえ持ったが、英子のそれに比べるとズッシリと重かった。

○

全くとんでもない所に来てしまった。虎や蛇の餌食になるのならまだ話はわかる。人間が植物に食われるなんて……。

「とにかく、葉を刺戟しないことね。ツルや茎なら安全かも知れないわ」

そう言っていたマツエ自身が足をすべらし葉の上に仆れた。

「ウアア……アア……」

思わず恐怖の叫びが口をついてでる。葉の

上をコロコロとこころがったマツエは、その先にある袋状のものの中に、頭からスポリとおちてしまった。食虫植物にはパネ式、トリモチ式、おとし穴式の種類があるが、ここには全部がそろっているらしい。

マツエは上半身を袋の中に、両脚を空に向けてバタつかせながら、必死ではいあがろうともがいている。袋の中にはもちろん消化液が入っていた。前のものより弱いようだが、時がたてば溶かされて餌食にされるし、第一その前に溺死してしまう。

皆が両脚をひっぱってあげようとしたが、袋の入口には直径三センチ、長さ二十センチもある剛毛が密生していて、逆に生えているため入る時は抵抗がないが、中からはいだすことはできぬようになっていた。引きあげようとした時、これらは鋭い刃となって、マツエの肉体につき刺さった。

遂に両脚の力がゆるみ、ぐんなりとくずれおちた。哀れ顔を溶かされて絶命したのだ。皆が放心したようにみつめるうち、身体はジリッ、ジリッと袋のなかに沈んでいく。佑三子がかけてよって、せめてものの形見にと、足の小指を切りとった。それと同時に身体はストンと袋の中に落下し、再び仲間の前にあら

われることはなかった。

○

たちまちのうちに三人の仲間を失った女たちは、互いに顔を見合せたが、まだ恐怖よりも驚きの方が先に立っていた。

「どうしたのかしら、きつと何か恐ろしい力が働いて、すべてのものが何十倍かになったのね。あの花から見れば、私たちは虫ケラくらいにしか見えないのよ」

話をしているうちにも、地上をすばやく動く長さ五十センチ位の動物があらわれた。

「あら、アリだわ。沢山集まると虎やライオン、象でもかなわないんだもの、私たちなんかイチコロだわ。仲間を集めないうちに退治しない」

彼女たちはそれぞれ武器を手にとびかかったが、アリの身体は予想以上に固く、かよい腕の力では、その黒い鎧をつき破ることができない。しかも、彼女たちは重大なことを忘れていた。アリは動物のうちでも一番の力もちであることを……。

突然、蟻の方から反撃にでた。玲子を苦もなく押し仆し、身体の上にはいあがり、両手をふって抵抗するのをものともせず、その雪白の柔かい咽喉ぶえに、強い顎でもってガッ



キとかみついた。

“ウ……ッ”

悲鳴ともつかぬうめき声がひとつだけあがったが、一気に食道、気管、それに頸動脈までかみ破られ、玲子はパッとあがる血しぶきのなか、四肢をピンとのばし、二度三度ブルブルとふるわせただけで、あっけなくこときれてしまった。

何と簡単な勝負だろう。立ちすくむ女たちをしりめに、悠々と頸をかみちぎった怪力のアリは、自分よりも大きい玲子の首のない胴体を軽々とかつぎあげ、血汐を滴らせながら巣へとはこんでいく。

あとを追っていくと、直径五十センチ位の穴があった。これがその巣なのだろう。アリはいったん獲物をおろすと、自分が先にもぐりこみ、前脚を玲子の腋の下に入れ、ズルズルと引きずりこむ。胸が、次いで腹部が穴の中に消え、最後に二本の脚が逆さにピンと立った。ここで、はじめてわれに返った女たちが、両脚をつかんで引きあげようとしたが、アリの力にはかなわない。さきのマツエと同じような恰好は、悪夢のくりかえしではないかと思わせた。

新手の蟻が顔をだした。女たちはあわてて

逃げだす。玲子の生首は別なアリがゴロゴロとところがしてくるのをみたが、もはやどうすることもできない。

哀れな玲子、目をみひらき、口をポカンとあけて、自分の運命がまだ信じられぬような表情であった。胴体はもう食われているだろうか、それとも珍らしい動物だということで、特に女王の前にささげられたろうか……。

○

“アアッ”

克子が驚きの声をあげる。またか！ ソツとした仲間がかけよってみると、彼女は殆どすきとおった、カスミ網に似たものにひっかかっていた。

手にも足にもピッタリとくっついて、力まかせに引きちぎろうとしても、なかなかはがれない。短刀で切ろうとしてもだめ。

その時、上方の枝から音もなく怪物がすべりおちてきた。毛むじやらの、おおよそ醜悪極まる顔をもった、仔ブタ位の大きさのもの、即ちクモであった。

“キャア！”

あまりのおそろしさに、女たちは克子をみすてて逃げだした。

“いやよ、逃げちゃいや、たすけてくれない

の！”

克子はブラン、ブランゆれながら叫んだが誰も引き返してこない。いたしかたなく、たったひとりで短刀を握って身がまえる。

だが、クモは遠くから糸を投げかけ、よけるすべもない克子は次第次第にからまれて、遂には身うごきもできなくなった。それをみこしたのか、クモは克子の背後からおそいかる。

何とも言えぬ不気味な感触に、克子の全身が寒気だった。腰のあたりに痛い痛み、と同時に何かが注ぎこまれたよう。

“やられた、もうだめだ”

しびれが全身にひろがる。しかもこの毒液は運動神経をマヒさせるだけで、意識は最後まではっきりのこるのだ。

“いやだわ。生きながら、それもクモに食べられるなんて、頭からかしら、おなかからかしら”

みちよがおそろおそろ引きかえしてきたとき、克子の身体はまだ糸にかかってゆれていて、その胴体は内臓すべてを食い破られ、なかはカラッポ。わずかに一部に血液が附着しているだけであった。無念の歯を食いしばったその顔には、この世のものとは思われぬ



ほどの、苦痛と恐怖の表情がいったいにあらわれていた。

○

晴子は逃げる途中、ブーンという強いうなり声にふりかえると、何匹かの蜂が彼女を追っていた。蜂といっても、体長一メートルもあろうか、彼女めがけて襲いかかる姿はおそろしかった。もう、この島のすべての生物が人間をエサとしかみていないことは明かである。

「玲子がアリ、克子がクモ、そして私は蜂に殺されるのか」

覚悟をきめた晴子は、大刀をふるって見事先頭の一匹を斬ってとった。だが息をもつかせず新手が次々とおそいかかる。尾部の針は鋭い短刀のように思われた。

右の肩先を一刺しされた。チクリ、などいうものではない。ジーンとくる激痛に思わず刀をとる手がゆるむ。

一匹が正面からぶつかってきた。あおむけに突き仆されたところを、まるでねらったように乳首をズブリと刺しとめられた。女性にとって最も敏感な場所だ。蜂は尚も次々とおそいかかり、晴子は急所の針をぬく暇もないまま、地上をころがって逃げまわったが、胸

を、ふくよかな腹部をと、全身いたるところを刺しつくされた。

抵抗力のぶつたのを知った蜂は、一匹がその太い針金のような脚を晴子の右脚にからみつけ、そのままびあがろうとする。蜂の力もかなり強く、晴子の下半身がぐうっともちあがった。

晴子は最後の力で大刀をふりあげたが、その腕は空しくたれた。続いてもう一匹が左脚をつかみ、二匹がかりでとびあがると、晴子の身体は逆吊りとなって宙に浮いた。

ほかの蜂が凱歌をあげるようにまわりをとぶなか、まだ死にきらぬ晴子は、空中をジタバタともがきながら、はこばれていった。

○

小百合は仲間とも別れ別れになり、心身共につかれきった身体を、ただひとりとする洞穴のなかで休めていた。何というおそろしい話だろう、いずれ自分もあのような悲惨な最期をとげねばならぬのか……。

純情の乙女小百合を苦しめるのは、克子をみすてて逃げたことであった。生きながら、それもふくよかな下腹をさきに、ガブリとかみちぎられていく、どんなに苦しかったろうか、せめて首を打ってやればよかった。

ウトウトとした時、またもブーンという怪音、ハッとめざめれば何かがのしかかっている。夢中で短刀をうちふったが、敵は身軽にこれをおかわす。蚊の襲撃であった。

一匹や二匹ではない。前から後からも、手で払った位では逃げる筈もなく、短刀でも容易に討つことはできない。

全身とくろきらずむらがつて、五寸釘のような口ばしをズブリ、ズブリと突き刺しては血を吸う。蚊にくわれるかゆさは一種の快感を伴うし、それに血を失ったためか、ねむ気もついてきた。

「この死に方なら良い方だわ」

と、あきらめ、なかばふてくされて地面に大の字にころがった。その顔の上に一匹の尾部がのっている。小百合はぼんやりとその尻をみつめた。頸静脈にでもつき刺しているのか、輸血をする時のように、どんどん血が吸いとられ、尾部がみるみるふくらんでいく。

次第に赤い色がはつきりしてきた。小百合自身の血液によって。だが、それを追う力はいまなかった。

小百合は人間が血液の四分の一を失えば危険となり、三分の一で瀕死、半分以上失えばいかなる手をつくしても死ぬことを知っていた。



る。彼女の体重は四十五キロ、血液の量はその十三分の一だから三キロ半。すると死ぬためには。これ一匹だけで五〇〇グラム位吸ったかしら。ぼんやりとこんなことを考える。身体が寒く感じられ、ねむ気はますますひどい。たっぷり血を吸った蚊群は次々とはなれてゆくが、小百合には、もうわからなくなっていた。

なかば無意識でかゆいところを爪でかく。四肢も背中もだが、まるいかたい乳房、処女の誇である乳房が最もかゆい。両手でもみ、けんめいにこする。まだ誰にも触れられていない乳房を。

まだ十分でない。短刀が目に入った。いっそのこと、えぐりとしてしまいたい位。刃をあててはみたが、さすがに、それ以上はできない。

「そうだ、自害すればよかった」

刃を喉におしあて、上からのしかかるようにしたが、刃がすべってそのままくずれおちる。この努力が彼女の最後の力であり、間もなく深い、二度とさめることのないねむりに入り、やがて呼吸も心臓もとまっていく。

朝がきた時、小百合はすべての血液を失って、まさに白蟻のような姿を横たえていた。

○

幸代は四人と共に逃げたが、その一人ミエが前方にあったスリパチ型の穴を認めたものの、急にとまることができず、ころがりおちてしまった。

はいあがろうとしたが、ズルズルと周囲の土がくずれてきてなかなかあがれない。やつと半分までのぼった時、底の方でもぞもぞと何か動いたとみるや、巨大なハサミがニューとあらわれた。

その振動で壁がゆれうごき、ミエは底へすべりかけ必死でしがみついた。だが、あせればあせるほど土はくずれる。まさにアリ地獄ならぬ、女体地獄であった。

上の四人は何とか助けようとしたが、危険で傍によれない。無理に近づこうとした幸代は、足をふみはずして落ちそうになり、仲間が腕をつかまえたので危く助かった。しかしその間にミエは、断末魔の悲鳴と共に巨大なハサミで胴体をはさまれ、そのまま土中にひきずりこまれるのだ。

四肢をバタつかせての抵抗も空しく、ハサミと共に女体が消えていく。わずかに恐怖と苦痛の目をいっばいにみひらいた首だけが、穴の底からのぞいている。間もなく最後の絶

叫と共にその目がうつろになった。息が絶えたのだろう。おそらくこの瞬間、胴体を両断されたのではないだろうか。

見守る四人は何となくホッとした。いずれにせよ、ミエはこれ以上苦しむことはないのだ。自分たちは今後どうなるかわからないというのに。続いてもう一度、ハサミがのぞいたと思ったら、彼女の首が鮮やかにチョン斬られ、胴体すべてが地中にひきずりこまれた。あとも、穴の底にチョコンとのこっている。この生首は髪の毛を棒にひっかけることになって、辛うじて仲間の手に収容された。

○

その夜、幸代はおそろしい夢をみた。彼女自身が巨大な怪人に食われる夢であった。

大きな手、起重機のような二本の指で簡単にはさまれ、もがきあばれるのもかまわず、口とおぼしきところにもっていく。

「あっ、あっ、わああっ！」

ポイツとまっかな口に投げこまれ、柔軟な舌で奥の方へ、そこには直径一メートル位の石臼が並び、幸代の身体はその上にのる。上からも同じ石臼がおりてきて、彼女を強い力で押し潰してしまう。

プツとはきだされた身体をみると、首は殆



んどちぎれんばかり、胴体もズタズタになっていて、とうてい女体とは思えない。

怪人は二人であった。幸代には、その話の内容がわかった。

「かんでほだめだ。生きたまま丸のみにすると、胃の中で苦しがつて分泌物をだす。それが身体にきくんだ」

こう言いながらエミをつかまえ、パクリとくわえるとぐっとのみこむ。他の一人もユミを捕えて同じように一気にのんでしまった。あの二人は仲よしだったから、おそらく同じ奴にのまれたかったろう。いまごろ、女体から脂や汗や、涙まで流して苦しんでいるだろう、それがどんな風にきくのかしら。幸代はこんなことを考えていた。

夢だったか、幸代はあたりをみまわした。たしかに自分は生きている。食われたりはしなかった。しかし、エミとユミのことは本当かもしれない。途中で姿を消して以来、どこにも見当らないんだもの。

朝がきた。幸代は仲間と共に友の遺体を葬ることにした。遺体といっても、マツエのは足指だけだし、玲子や晴子は何も残していない。生首も完全なものは、お富士とミエのふたつだけ。洞で死体を発見した小百合は、ど

んなわけか血の色がまるでなく、胸を切りひらいて心臓をぬきとって見たが、なかには一滴の血もなかった。

穴を掘り、ひとつひとつおさめていると、突然いくつかの死体がふってきた。探し求めていた秀子や美智子、それにユミ、エミたちが、首をちぎられ、ズタズタになった姿で投げつけられた。

ふりかえった幸代は蒼白になって立ちすくんだ。夢に見た怪人が立っていたのだ。正確に言えば夢にでたのはもっと大きい。これは三十メートル位だから子供だろう。

「ユリシーズの冒険に、こんな怪物がでてきたわね。木材の先を尖らしたものを眼に打ちこんで逃げただけど、私たちにはできそうもないわ。あきらめましょう」

怪人は佑三子を大きな手でつかむと、いきなり空中高く放りあげる。百メートルもあがったか、ヒトデのように四肢をひろげた恰好で、一瞬とまったとみるや、手足をバタつかせながら落下してくる。

途中、木の枝にしがみつくような動作をしたが、目をカッとみひらいたまま、大地にグシャッとたたきつけられた。まるで蛙のように——即死！

佑三子はもう身うごきもしない。怪人は死体をつかむと、首だけがはみでるようになっていたのか、これだけで彼女の首は簡単にちぎれてふっとんだ。

次に寿子をつかまえる。爪楊子、といっても彼女からみれば、大い竹をとがらしたものだ。その尖い先をグサリと背中突き刺される。たまぎる悲鳴と共にもがきあばれるのをおさえつけ、ギリギリとねじこんでいくうち、先端がちょうどおへソのあたりを破ってつきでてきた。

更に両手で両脚をつまみ、逆さにぶらさげて反対側に引っばる。股裂きの処刑は昔からよくあるが、人間の身体はそう簡単には裂けぬという。それが見事に彼女は二片の肉と化してしまった。幸代はこの無惨な最期をみながら、いたずらっ子が蛙をいじめている姿を思い浮べた。

四肢をひろげて釘で打ちつけ、天井にあてて干物にしたり、ストローを肛門につっこんでふくらまし、破裂させたり……ひどいものになると皮を剥いで食べてしまうこともある。幸い、夢とちがつて食べられることはないようだ。蛙並みの殺され方は有難くない。



蛙の足をひもでくくって、釣竿の先にぶらさげておくと、いつのまにかモズなどがもつていくこともあった。これはみちよに對し加えられた。

それも脚でなく首であつた。竿を徐々にあげると糸がピンと張ってきて、みちよの首がキュウと締められ、その身体は宙に浮いてくる。怪人にとってはただの遊びであるが、彼女にとっては間違ひなく絞首刑である。

みちよは両手で喉をかきむしりながら、プランプランとゆれもがいていたが、あまり長い間ではなく、やがて両腕も力なくダランとなれ、安らかな死顔をみせた。

怪人が竿をふりまわすと、糸の先端の彼女もぐるぐるとまわり、やがて首がちぎれて、胴体はどこかにふっとんでしまった。

「だけど、あんたがいちばん幸せな死に方だつたわ」

鮮血の尾をひいてころがる首をみつめながら、最後の一人となつた幸代は、うらやましそうにつぶやいた。

○

幸代は四肢を大きくひろげた恰好でおさえられ、先には大きな石をのせられた。身体をふるわせてもがいてもビクとも動かず、重量

に耐えかねて手足の骨はミシミシ音をたて、無理に動かすと折れるかもしれない。

幸代の美しい肢体はジリジリと陽にあてられ、喉はカラカラにかわいてくる。蛙並みの遊びはまだ続くのか、いっそのこと石かなにかで潰してくれれば有難いのに。

どの位たつたろう、石がとり除かれホツとしたが、それも束の間、今度は裏がえしにされ背中をあふられるのだ。このままでは完全に女体の干物になってしまう。どうやら一番の貧乏くじを引いたらしい。

翌日、やっと石が除かれ、彼女は怪人の掌中につかまれた。一方の手にもっているのは細長い筒状のものだ。先端を口にあてて軽く吹いたが、幸代にとっては暴風以上の強さに感じられた。

「冗談じゃない。どこまでも蛙なみだ。あれをつっこんで、おなかを破裂させるつもりなのだ」

身もだえするのにもかまわず、体内にギリギリとおしこめると、口でもって空気をおくりこむ。

幸代の体内にもものすごい圧力がかけられたが、思うようにふくれず、業をにやしたか、更に力を入れてつっこんだ。鮮血があふれて

棒をつたわって流れだす。直腸をつき破り、腹腔内にまで達したらしい。

幸代はこのすさまじい激痛に耐えねばならなかった。というのは、まだ死ぬことができないのだ。続いて送られた空気は、彼女の腹部をすばらしく膨張させた。

人間の皮膚というものは、案外に伸びるものである。腹腔の圧力は、心臓や肺臓を圧迫し、これだけでも彼女の息の根をとめんばかり。

幸代が絶命する一瞬前に、遂に皮膚の伸長の限界がきた。

「ギャァー！」

美女が二十才を一期としてこの世に残す最後の悲鳴。同時に「ボン！」と異様な音がして、彼女の内臓がバラバラになってとびちった。

怪人は高らかに笑うと、血しぶきを指でぬぐいとり、何のつもりか、ころがった死体から首をちぎると、掌の上でコロコロところがしながら、いずこかへ去っていった。

あとにちらばったいくつかの死体は、鳥やアリがむらがって、きれいに片付けてしまった。

(おわり)



# 責セメの戯タワムれ

早 木 夢 二

1

私は、これまで、K子を縛って色々な責めをする話ばかり書いてきたが、きょうは、これと裏がわのことを書かねばならない。

出来れば、それは秘密にしておきたいことであるが、私たちの生活のことを、これほどあからさまに書いてくると、もう私たちの生活には、秘密にしておいてよいことは、ないのではないかと思う。

私にとって、恥しいことであるが、思い切って、書いてみたい。K子に話すと、「そうね、もうそろそろ、あなたも白状しなくちゃね」といって、それから「私のことばかり書

いてきたから、一寸いい気味ね」と、ひやかした。

私は家に帰ってくると、何時ものように、洋服を脱ぎ、シャツをとった。そして、ゴロリと畳の上に寝そべった。

彼女が、冷い水を持ってきてくれた。私はゴクゴクと飲みほすと、コップを返す序に、彼女の手を握って、

「ねえ……」

それだけで、彼女には判るものがある筈だった。然し、彼女は、

「なあに？」と、そらとぼけていた。

「あれ、かけて……」と、私がいうと、彼女

は尚とぼけて、

「あれって、なに？」

私は面倒くさくなって

「縄ふんどしさ」と、ズバリいった。

私たちの間では、その頃、私の股間に縄を廻すのを、縄ふんどしといっていた。

彼女は、やっと判ったような顔をして、縄をとり出してくると、私の前に坐った。

私が腰を持ち上げると、彼女は縄を前後に廻して、へその辺りで結び目を作った。その二筋の縄を縦に下すと、又、左右に振り分けて、股間を割り、背中の方で縄止めをした。「いいか知ら？」と、彼女がきくので、



「ああ、いい気持ちだよ。ありがとう」と、私は縄のとげが、チクチク触ってくるのを避けるように、体を小刻みにゆるがしながら、答えた。

私が、縄の感触を楽しみながら、ボンヤリ天井を眺めていると、彼女が私の顔を覗いて「あれ、入れていい？」

そして、返事を聞く迄もないという風に、彼女はチリ紙をとり出すと、器用な手付きでコヨリを二本作った。出来上ると、先ず一本を手にした。

柔い粘膜に、チリッチリッと、鋭い感覚が走った。鈍い、かすかな音が聞えるような感じで、時々つかえつかえしながら、それは半分ほど姿をかくした。

「痛い？」

「ううん。痛くないよ」

「じゃ、もう一本入れるわよ。辛抱出来るわね」

彼女は素晴らしいながら、残りの一本も、苦心しながら入れ始めた。

痛がゆい快感が、ズーンと縦に、私の身内を貫いた。

私はいつの間にか、責めを受ける罪人のように、哀れっぱい言葉を口走っていた。

彼女も、熱っぽく上気した顔で、片手を縄ふんどしにかけると、ギョツとしぼった。

私は、たまらなくなつて、時々、アツとかウーンとか、呻きながら、上半身を反らす度に、段々しおれて行く二本の紙が、チラッチラツと、私の眼の中に飛び込んできた。

## 2

私は彼女の前に坐った。両手を後に廻して合せると、軽く頭を下げて

「お縄、頂きます」

私が縛られるのは珍らしいことだったが、偶には、そうするようにしていた。

私だって、時には、大好きな菱縄をかけられ、股間縄を受けてみたいのだった。その時の彼女は、今こそ平素の恨みを晴らすのだといわんばかりに、意地悪く、強く私を緊縛した。縄をかけ始める前には、必ず、罪人が牢役人の前に引き出されたように、畏って「お縄、頂きます」などと、恥しいことをいわせるのだった。

彼女が縄をかけ始めた。縄を二つに折ると私の首にかけた。のどの下で結ぶと、左右に分けて二の腕にかけた。

そして、またその縄を前に回して、菱形が出来上ろうとすると、突然、彼女が

「ああ、私が縛られたいわ。ねえ、あなた、いけないか知ら。あなたを縛るの止めて、私を縛って欲しいわ」

私はおどろいた。

縛る手をやめたので、二筋の縄が左右の二の腕から、ぶら下って、私の膝の上で、とぐろを巻いていた。

数日前、私は湯上りの体を型のように縛られて、鏡の前に曳かれていって、さまざまに責めを受けていた。それから余り日時は経っていないが、何かその日の私は燃えていた。それが悪かったのかも知れない。私が燃え立って、彼女の責めを受けたいと、勇めば勇むほど、彼女の心は白けていった。自分こそ責めを受けて、燃えたいのにと、怨んでいるのかも知れなかった。

私の小肥りの裸身に、縄が喰い込んで行くのを見ている内に、しつとに似た慾望が、むらむらと彼女の身内に燃え上って、その縄を自分の体に、奪い返したいと、身も心も、うずいてきたかのようであった。

私が仕方なく承知すると、彼女はイソイソと縄をといた。そして

「じゃあ、お願いしますわ」と、はずんだ声でいった。



私は時々、彼女の留守を見計らって、自分で自分を縛ることにしていた。

私は、彼女の手前上、口には出さなかったが、縛りたい欲望が、はげしく頭をもたげる時があった。

彼女にそういえば、彼女だって適当に処置してくれたであろうが、何か気恥しい感じがあった。実際、時には彼女は、私を縛ってくれていたのだから、何か私の欲望が、際立って猛々しいと思われはしないかと、妙に気が臆した。

私は、全裸になると、縄を持って、鏡の前に立った。

首から二の腕へ回し、菱形を胸に作ると、余縄を股間に回した。縄はしっかり締らず、体を曲げたりすると、だらしなく弛んだ。私は精々胸を張り、縄をピシリと体にまっわらせて、鏡の中へ写る緊縛姿を、様々な角度から眺めて楽しんだ。

五十センチ四方位の台の上に、窮屈そうにキチンと坐り、彼女に抱かせたことのあるブロック石を自分の膝の上に乗せてみた。

グラグラと台が不安定に動くので、正座した私は、時々ビクツとしながら、鏡の中をウツトリと見入った。

ひとりでは、どうしても背中の方に、縄をかけることが出来ないで、それが非常に不満だった。誰かが書いてるように、あの手この手でやれば、出来たであろうけれど、いつ彼女が帰ってくるかと思うと、その程度で満足しなくてはならなかった。

それだけに、私が彼女から縛られる日は、背中の方にも菱縄が、キチンとかけられるので、嬉しくて、何度も何度も鏡に写して見ている私に、彼女が、

「そんなに縄、嬉しいの」と、ひやかす程であった。

いつか、私がうっかり

「ひとりでは、こんなにうまくかからんからね」と、いったら、彼女がトタンに、変な顔をして私をにらんだ。

### 3

例によって、股間に縄を回したK子と、私は、うっすらと汗ばんで、宿に帰った。

縄をとってやると、それまでが、シットリと汗ばんでいるようだった。

彼女が部屋を出ようとするので、私は

「いけないよ」と、とめた。

「えっ」と、彼女は軽く驚いた様子で、私をふり返った。

「溜めといってくれよ。きょうは飲みたいんだから……」

「まあ」

彼女は、そういうと

「本当に飲むの？」

「そうさ。前から、君にいつていただろう。

きょうは、どうしても飲むから、その積りで……ね」

「恥しいわ」

「なにが恥しいものか。君はいつものようにしていればいいのさ。僕が旨くやるから」

彼女は、渋々納得した。きょうこそ永い間の願いを、たっぷり満たしてやるのだと思うと、待っているのが段々もどかしくなった。

「行こうよ」

私たちは風呂場に入った。

彼女の腰のくびれた周りが、ほの赤くすれていた。

ザッと湯を体に流すと、彼女は私の前に立った。

「これでいい？」

私は適当な高さに身をかがめて、顔を持っていた。

両手を腰の辺りにおいて、上半身をやや反らし気味に、突っ立っている彼女の体が、少



し震えていた。

「怖いのかい？」と、聞くと

「うーん、怖くはないけど……旨くゆくか知ら？」

私は、こわばって来ているらしい彼女のお尻を、軽く叩いた。

「そんなに堅くなるなよ。何でもないんだから……」

然し、そういう私の方が、期待に胸を戦かせて、堅くなっているようだった。

いつか、私は彼女と旅行の途中、ある宿で彼女に求めたことがあった。

「まあ、嫌らしい！」

彼女は、はき捨てるようにいった。然し、私はしつこく食い下って、到頭彼女に承知させた。その日、近くの料亭で、会合があったので、帰って来てから、と約束が出来て、私は出かけた。所が、私は、その夜遅くなって宿に帰った時は、階段もやっと昇れた位に酔っぱらっていた。

酔ってジーンとしびれた頭の中でも、彼女との嬉しい約束が、こびりついて、少しでも早く、その瞬間を持ちたいと、ワクワクしていたのだが、いざ彼女の傍に帰って見ると、もう寝巻に着かえるのがやっと、という

有様で、とても約束を果す所ではなかった。

「どうしたのよ」などと、彼女に、けしかけられながら、どう仕様もなく、それから機会がなく今日になっていた。

私は顔を、段々彼女に近づけた。

「どうしたの？」

私は、見上げるようにしてきいた。

「うーん、仲々来ないのよ」

彼女は息ばったような声を出した。

「楽にして、楽にして……」

私はそういいながら、根気よく、待っていた。やがて、彼女の腰が、ぶるっとゆれるのが判った。私はあわてて、姿勢を直した。

アッという間のことであった。

私は、顔をすぐ傍まで寄せたが、それは唯それらしい臭いと感触を残して、すっと去っていった。

白々しい、空しい思いが、急に二人の間を襲ってきた。

「ご免ね」

彼女はポツンと、そういうと、俄に恥しさがこみ上げてきたように、タオルを掴むと、湯舟の中に飛び込んだ。

私は、なお唇の端に、かすかに残っている香りを、両唇でなめながら、静かに彼女の傍

に、身を沈めた。

4

ある晩。

いつものように菱縄をかけ、後手に縛り、股間縛りを施し終った時に、彼女がこういった。

「私、馬に乗って見たいわ」

私は、びっくりして

「馬？ 馬に乗りたいって」

「ええ、そう。裸馬に乗りたいの」

「裸馬？ ますますわからんね。奇妙なことをいうな」

「あら、鈍いのね。私が、こんな恰好で、裸馬に乗りたいていっていったら、どんな意味か判らないの」

やっと、私にも少し判ってきた。然し、それはいかにも突飛な思い付きだった。

要するに、彼女は、縄をかけ終った所で、囚人らしく、裸馬に乗せられて、引回しを味ってみたい、ということなのだ。

「引回しをされてみたいんだね」と、私がいうと

「やっと判ったの、鈍いわね」と、又彼女はいかにも、私を軽蔑するようにいった。

「昔の女囚の方が、よく裸馬に乗せられて、



引回しを受けてるでしょう。私も、折角、こんなに、あの方たちと同じような、お縄を受けているんだから、一度、裸馬に乘せられて引き回される感じを味って見たいということなの」

私は、彼女を、いつか、こんな裸縛りのまま深夜の町で、引回しの真似事のようなことをしたことがあったが、裸馬に乗ってみたいという彼女の申し出には、一寸驚かされた。

「だって、裸馬って、馬なんかいないぜ」と、いうと

「あら、いるじゃないの」と、いたずらっぽい顔で答えた。

「えっ、馬がいるって？」

「バカね。本物がいる訳ないじゃないの。つまり、あなたに乗り度いということよ」

ああ、そうか。やっと私には、納得がいった。彼女は裸馬に乗った積りで、私に乗って見たいのだ。

「それで、引回しの感じが出るか知ら？」

「ええ、結構よ。私、せいせい、その積りになるから……」

「それにしても、僕が馬になるなんて、ひどいね」

「あら、そうか知ら？ 私、本物の馬じゃ怖

くて、とても乗れないけど、あなたなら、安心して乗れるわ」

「いよいよひどいね。びっくりしたなあ、もう、だよ」

話は決った。裸馬という以上、私も裸にならなくてはならない。

彼女は不自由な、緊縛の体を、壁に持たせかけて、私が着物を脱ぐのを見ていた。

パンツ一枚になる

と、私は

「さあ、始めるよ」と、いって、両膝をついて、四つ這いの形になった。

「それもとって……」

彼女は、私に寄ってくると、不自由な体なので、軽く片足をあげて、それを転した。

「へえ、これもとるのかい」

「そうよ、裸馬でしょう。パンツをはいた裸馬なんて、あるか知ら。第一、私、それじゃ気分が出ないわよ」

仕方がない。パンツをとった。



再び膝をつき、両手を支えたと、すっかり馬の感じになった。彼女に旨く持っていかれたという感じであった。

彼女が、両股を拡げて、私の上に跨った。ズシッと彼女の重みが、私の背中へのしかかって来た。

柔い、ふっくらした両股の内側で、私の横腹がくすぐられた。

彼女の体がピッタリ喰ったので、そこに這っている二筋の縄が、背中にくすぐった



く、ふれていた。

彼女は、胸を張って、いかにも引回しの、女囚の感じを出そうと、努めているようだった。

「さあ、出発するよ」

私が、下から声をかけると

「ハイ。お願いします」と、馬上の女囚が答えた。

私は、重い彼女の体に乗せて、ゆるゆると壁に沿って、部屋の中を動き始めた。

「感じ出る？」と、きくと

「ハイ。引回して、こんな感じが知ら？」

「どんな感じ？」

「判らない」

私には、判っていた。豊満な肉体の女囚が最後の晴れ舞台とばかり、菱縄縛りをされて馬上から誇らしげに、見物の人たちに誇示する、そんな気持もないとはいえないのだ。いまの彼女は、そういう気持を味わいさえすればいいのだ。

私は以前に、ちょいちょいさし画などで、女の裸引回しを見ていた。腰巻一枚で、菱縄をかけられて、裸馬に跨っているのや、一糸纏わぬ姿で、菱縄をかけられているのもあった。

鏡の前になると、彼女が

「一寸待って。鏡でよく見たいわ」と、いうので、私は彼女の正面が、鏡に写るような姿勢で、止まった。そして、私も顔を上げて、鏡の中をみると、馬上で、菱縄をかけられた女が、グッと上半身を反らせて、豊かな肉体をしげしげと見入っているのが判った。

いつか、彼女の体も、汗ばんでくるのが、私にもよくわかった。

「どうだ、気持は？」と、声をかけると、ウツトリ鏡の中の緊縛姿に、見入っていた彼女は、ハッと我に返った。

まもなく、私は鏡の前を離れて、再び部屋の中を動き出した。

すっかり、彼女の体が重くなった。裸馬は疲れてきたようだ。

私たちは、しばらく黙ったまま、モソモソと動いていたが

「さあ、刑場についたよ」と、私がいつて、止まると

「ハイ」と答えて、彼女は、不自由な体を起すと、私から離れた。何かベッタリとした感じが背中に残った。

彼女はホッと虚脱したように膝を崩して、グッタリした恰好で、畳の上に坐っていた。

私は彼女の傍によると、縄の間に手を入れて、引っぱって見た。

「引回しの途中で、縄が弛んで、又かけ直さなくちゃならんこともあるそうだよ」

「どう、私のお縄？」

「いいね。弛んでいないようだよ。さて、引回しがすんだから、こん度は、お処刑だね」

「そうね。どんなお処刑？」

「どんな、お処刑が好きかい？」

彼女は、しばらく考えてから

「やっぱり、ハリツケがいいわ」といった。

その晩、私は、引回しに疲れた全裸の女囚が、大の字でハリツケ柱にかけられて、やがて無惨に、ヤリで突かれてゆく処刑の図を想像しながら、いつものように、彼女をしっかりと抱いていた。

# 5

午後三時ごろの、都内のあるデパート。私が、休憩室でK子を待っていると、隣の席にいた女が声をかけてきた。

「つき合ってくださいませんか？」

私はすぐ察しがついた。K子と待ち合せているのに、これは又何という皮肉なことだろうと、内心可笑しくなったが、同時に、ムラムラと、アバンチュール精神が、頭をもたげ



てきた。

「いいけど、一寸人と会わなくちゃならんだよ」

「いいわ。それが済むまで、ここで待ってます。済んだら来てね」

K子と会って、用件を済ますと、五時に近かった。まさか、と思いながら、元の席にいてみると、女は、所在なさそうに煙草をふかしていた。

嬉しそうな女と連れ立って、デパートを出ると、すぐ車を拾って、有名な連れ込み宿の多い町へ走らせた。

宿に入る前に、まずお茶を飲もうと、喫茶店に入って、向い合って、初めてよくよく女を眺めた。相当年がいているらしい。顔の皮膚も商売柄、ツヤがなく、かさかさした感じで、濃くぬったお白粉が遊離している。然し、人の良さそうな、黒い大きな眼が気に入った。二、三年前からこの商売をしているそうで、前に一度結婚したことがあるという。宿に入ると、女は物慣れた態度で、すぐ風呂に誘った。

女の体は予想通り、余り肉付きがよくなくて、乳房も貧弱で、K子の方がずっと豊かだった。女は私の背中を流しながら

「ねえ、お願いがあるの」と、ささやくようにいった。

「なに」と、きくと

「私、あなたの仰有ること、なんでもするから、一万円くだらない？」と、いうのだ。

一万円はバカに高いと思ったが、なんでもするというのが、気に入った。

何となく承知した形になると、女は非常に喜んで、私の全身を隈なく洗ってくれた。

後から上った私が、部屋に帰ってみると、女は湯上りのままで、机の前に坐って、ビールを飲んでいた。どうせ裸になることだし、

女はサービスのつもりでいるのだろうから、私も女につがれるままにビールを飲みながら

「さっきの話だけど、なんでもするって、具体的にどういうこと？」と、きくと

「なんでも、あなたの仰有ることなら、なんでもするわ。どんどん仰有って」

私はふと、女は体位のことをいつているのかと思った。然し、次の瞬間、私の頭の中に

ふっと考えが浮いてきた。

「縛ってくれるかい？」

女は、一寸驚いた風で

「あなたを縛るの？」

「そう。君が、僕を縛って、苛めてくれるか

ということだよ」

「あなた、変態なのね」

女は、チラッと笑った。然し、それは決してあざけた笑いではなかった。

「いいわ。そんなお客さんも、今までにちょいちょい、あったから、やり方は判っているわ。でも、あなた、お縄持ってるの？」

きかれると、私は縄など持っている筈はなかった。彼女も勿論持っていなかったが、彼女は、帳場できいてくるわ、といった。

「帳場なんかにあるのかい？」

「ええ、この頃の旅館はね、そんなお客さんが、ちよくちよくあるもんだから、用意してある所もあるのよ」

そういえば、部屋に縄や色々の責め道具を備えているホテルが、近頃は東京にもあるという話を私は聞いていた。

女は浴衣を羽織ると、帳場へ下りていったが、まもなく、景気よく帰ってきて

「あったわよ」と、手にもった縄を私に示した。

「帳場で、変な顔したろう」

「慣れたもんよ。そうですか、すぐこんな新しいお縄、出してくれたわ」

それは、まだ真新しい、誰の肌もくぐって



いないような縄だった。

「さあ、早く、あなたも裸になって」

私は、女にせき立てられると、最後のビールをグッとあふって、宿の浴衣をぬいだ。

「これもとる？」と、女にきいた。

「勿論よ」

女は命令するような口調でいった。

女は、全裸になった私の両手を、背中に回して縛ると、縄を首から胸へグルグル巻きにギューギューしぼった。私は、K子との時はいつも菱縄だったが、きょうは違った縄も一興と思って、女のするがままに任せていた。

「これでいい？」

と、女がきくので、私は、余縄を、股間に回すように命じた。

女は、いいつけられた通りに、縄を下腹から股間に回し、両手を縛った縄にくくりつけて、縄止めをした。

「まあ、ふんどしっていう所ね」

女は、さも可笑しそうに笑った。そして

「もう……じゃないの」と、いいながら、ピンとはじいた。

「痛い！」

「ご免、ご免。あとで、ゆっくり可愛がってあげるから……」

女は私が、窮屈そうに体を起して、彼女の

前にキチンと膝を揃えて坐ると

「これから、どうするの？」

と、きいてきた。

女は、私を寝かせて、ビールの空瓶を、私の胸から腹にゴロゴロと転した。冷いガラスの肌触りと、彼女の手によって加えられた圧力には我にもなく呻きながら、体を前後左右にゆすぶった。

私は、後手に縛られたまま、四ツ這いになると、尻を高く持ち上げ、両股を上げた。顔はグシャッと、彼女が当ててくれた座布団に潰れたように埋っていた。

女は私の間に坐ると、ふふと、笑った。

「笑うなよ」

私が苦しい息でいうと

「でも、可笑しいわ。男の方の四ツ這いの恰好、初めて見たのよ。でも、一寸可愛いわね」

女はそこに這っている縄を、面白そうに引っぱった。引かれると、縄は上半身につながっているの、グッと体が締った。

「ああ」

私が呻くと

「いいの？」と、女はまた、今度は前よりも

強くひいた。

「あっ」

同時に、女のもう一方の手が、私の上げた股の外側から、内側へ回されて、先の手を持ち添えた。

「疲れたでしょう。私の膝の上にお休みなさいな」

女はそういうと、両手を私の胸の辺りにさし込んで、グッと体を起してくれた。

私もやっと不自由な体を起すと、女のままに後ろ向きの姿勢で、彼女の揃えた両膝の上にベッタリ尻を下した。私の両膝はつい今まで、しばらくハアハアと息をついた。汗ばんだ体が、女の体に喰っついて、気持ちが悪かった。

「よかったでしょう？」

女が、両手で私の体を支えながら、耳許でささやいた。

「とってもよかったよ」

「そう、よかったわね。でも、あの恰好、あんまりよくなかったわよ」

彼女は、クスンと笑った。

最後の所だけは、K子には内緒である。

(おわり)





# 花 中 水

(三)

美 眉 野 芳

## 金 の 輪

離れの廊下に鬼頭老人が立っている。白砂

老人の性格が、あらわれているのかもしれない。二郎の仕事に満足そうに老人は見つめて

を敷いた洲を眺めているらしい。京都の白川から運ばせた白砂だという。

二郎は、素足になると、敷砂に散った落葉を拾い集めた。夜半に一雨あったのか、しっとりと濡れる白砂の感触が心良い。

白砂にまじった異物を丁寧にとると、二郎は簞で敷砂をならしていく。京都の竜安寺の石庭は、虎の子渡しの石組を囲んで、波状の紋様がえがかれているが、老人が二郎に命じたのは、ただ一直線に簞目をつけることであ

った。

自分の生活に徹な

美しく簞目のついた白砂に、朝日が輝いていた。掃除を終えた二郎は、裏の自然園との境の小山に登っていった。鬼頭老人の屋敷は、街路とは石塀で遮断されているが、自然園とは有刺鉄線で区切られている。庭と森との境が小高い土塁であり、森林と笹藪であれば鉄線だけで十分であった。

土塁に沿ってくねる有刺鉄線に、やっと一人ぐり抜けることのできそうな小さな穴を二郎は見つけていた。野犬が食いちぎった穴かもしれない。気がむくと、二郎はその穴から自然園に入ることになっていた。自然園の森も老人の庭の一部のようであった。

鉄線の穴は、自然園を一周する森の小道からかなりはずれていた。露が二郎の素足を濡らし、地を這う様に茂った笹がかすり傷をつける。振り返っても、うつそうと繁った森の樹木にさえぎられて庭は見えない。

笹の群をかきわけて小道に出ると、眼下にひょうたん形の池が広がった。不整形な日本庭園の池らしく、これも中世の豪族の遺産なのかもしれない。

池のほとりに子供連れの一組の夫婦の姿が見えた。開園時間は過ぎていたらしい。和服の婦人は可愛い小犬を抱いていた。ふさふさ



した白い毛が顔をおおい、眼がまるきり見えない。マルチーズである。

その小犬に頬ずりしているのは、香葉夫人であった。

香葉夫人が寄り添っている中年の人は、夫の勘解由小路伯爵に違いない。もっとも、戦後、貴族の称号は消滅してしまったけれど。元伯爵はその細身にしゃれたサマーセーターがよく似合った。

父親と同じ柄のセーターを着た少女が二人ひょうたん池から少し離れた湿地帯を覗き込んでいた。エビガニでも見ているのかもしれない。香葉夫人が小学生の二児の母親だとは意外であった。

二郎がそう思ったのも無理はない。

昨夜、九時頃訪問した香葉夫人を、鬼頭老人は離れの寝室に案内している。老人の寝室では、一糸もまとっていない寿美麗夫人が後手に縛られて、老人の奇妙な愛撫を受けていたはずであった。

二郎は一度は自分の部屋に戻ったものの、胸が高鳴って落ち着かず、すぐ部屋を飛びだした。主人夫婦の寝室を窺うことは許せない行為であろうが、それどころではなかった。老人の行動が全く不可解であった。

偶然が重なって、物置や、寿美麗夫人の居間や、老人の寝室で、二郎は老人の異常な性癖の一端を覗いている。しかし、それは二郎の意志とは関係の無いことであった。

二郎は母屋おもやの廊下から庭に下りた。離れの渡り廊下を歩く勇氣はなかった。植込みの間をぬって、母屋の廊下づたいに離れに近づいた。息を殺し、足音を殺し、二郎は危険な冒険に熱中した。

離れの雨戸は閉められていて、障子に二つの影がうつっていた。老人と香葉夫人と思われた。寿美麗夫人はきつと夜具に横たえられているのだろう。

二郎は渡り廊下の下にもぐりこみ、離れの寝室の側にある松の太木に身体をかくした。近寄るのはここまでで精一杯であった。二郎は身体をこわばらせて寝室を仰ぎ見た。

「香葉さんが遊びに来たのに、顔をそむけているのか」

老人の声が、闇に響いた、老人の声は大きい。

「裸だから、恥かしいのか」

「――」

「それでは挨拶することも出来ないな」

やはり、老人は寿美麗夫人を全裸にしたま

ま、香葉夫人を寝室に導いていた。

「猿ぐつわがきつそう」

香葉夫人の声であった。

「皮だ。わたしが作った。口の中にハンカチが詰め込んである」

「ハンカチでは物足りない」

「そうだな。それでは香葉さんのを借してもらおうか」

「何を」

二郎は耳をそばだてた。老人の声が急に小さくなり聞きとりにくい。次の瞬間、軽やかな香葉夫人の笑い声がした。

「わたくし、着物ですから、穿いておりませんわ」

「それは残念だ」

「まあ」

二人の声がとだえた。二郎は寿美麗夫人の呻めき声を聞いたように思った。老人と香葉夫人は二人して寿美麗夫人に何をしているのだろう。

「それはなにかね」

しばらくして、障子の二つの影が動いた。

香葉夫人が老人に何か見せたらしい。

「指輪にしては太いような気がするが」

「指輪ではありません。舌輪ですわ」



「舌輪」

「ええ、猿ぐつわにしようと思って」

「猿ぐつわに」

「この金の輪の中に……」

くすつと香葉夫人は笑った。

「……奥様の舌をはさむの」

「そんな小さな輪に入るかな」

「舌を丸めれば入るわ」

「面白い。してみよう」

「さあ、奥様」

障子に寿美麗夫人の顔の影がうつった。香葉夫人が抱き起こしたのだろう。

「苦しい」

という寿美麗夫人のかぼそい声がした。皮の猿ぐつわをはずされたいらしい。老人が作った皮の猿ぐつわとはどんなものなのだろう。わからない。

「少しやすませて」

「だめ」

香葉夫人の声は楽しそうだ。

「さあ、お口を開けて」

「――」

「お鼻をつまむわよ」

「――」

「ほら」

「――」

「そんなにいやいやをなさらないで、舌をおだし遊ばせ」

「――」

「もっと」

「うっ」

葉香夫人は金の輪を寿美麗夫人の舌にはめたらしい。

突然、寢室の障子が開き、老人が顔をだした。庭を見廻し、二郎はもう寝たか、と一人言を云った。

老人の顔はすぐ引込んだ。が、障子は開かれたままだった。二郎はあわてて渡り廊下の下に飛び込んだ。足音を忍ばせ、植込みの中まで後退した。ここで発見されたら、老人がどんなに憤怒するかわからない。

身体をかくす間もなく、離れの廊下に寿美麗夫人が姿を現した。眼に泌みるようなまっ白な肉体であった。寿美麗夫人は何も着ていなかった。

後手に縛られた寿美麗夫人は、美しい金の輪で舌を締められ、犬の首輪をはめられて、鎖で香葉夫人に引かれていた。なやかな寿美麗夫人の肢体はいまにもくずれそうであった。羞恥が寿美麗夫人を、包んでいるのだらう。

う。

端正な顔をほんのりと上気させ、美しい眼をしつとりと潤ませながら、寿美麗夫人は香葉夫人のなすがままにされていた。

二郎の想像外の光景が、そこに展開していた。離れの寢室を囲んでいる廊下の隅の柱まで来ると、能の舞台でいえば目付柱というのだらうが、

「お坐り」

と香葉夫人は甘くささやいた。

柱を背にして寿美麗夫人は坐った。首輪の鎖が柱に巻きつき、寿美麗夫人の顔を固定した。犬の首輪の役目はそこにあったらしい。鬼頭老人は種々な責め具を用意しているらしい。

「可愛い舌」

香葉夫人のしなやかな指が、寿美麗夫人の丸められて突き出た舌をつまんだ。

「恥かしいことをさせてあげますわ、奥様」

香葉夫人は寿美麗夫人の前に立った。寿美麗夫人の顔は、香葉夫人の帯の下あたりにあった。寿美麗夫人は眉をひそめた。

鬼頭老人が柱に近づいた。これから始まる香葉夫人の責めを見るために、二人の側にぐいと寄った。



と、古典模様の着物の裾がひるがえり、寿美麗夫人の顔に、香葉夫人のまっ白な柔肌が押しつけられた。肉づきの豊かな優美な下肢があらわに寿美麗夫人を責めつけた。

香葉夫人が考えた金の輪の目的は、思い切り舌を突き出させることであつたらしい。淫靡な責め具であつた。

香葉夫人は着物の裾で、寿美麗夫人の顔を包んだ。その眼は熱く濡れ光っていた。着物の下で、舌に金の輪をはめられた寿美麗夫人は、香葉夫人の猥らな責めにあえいでいるのに違いない。

深夜、柱を抱く伯爵夫人は妖しいまでに美しかった。

古典模様の着物の裾は微妙に動き続けた。

## ネ ッ ク レ ス

二郎はひょうたん池に下りず、そのまま鉄線の穴に引き返した。香葉夫人に会うのがなくなつたためらわれたのである。昨夜の今朝では、香葉夫人の印象が、あまりにも強烈すぎた。

穴をぐぐり抜け、庭に下りて来ると、浜形の池のほとりのトンに、鬼頭老人と寿美麗夫人が腰かけていた。二郎はおもわず俯いた。

「二郎さん、いたの」

寿美麗夫人が髪のはつれをかきあげながら二郎に云った、寿美麗夫人が髪の乱れを気にするときは、老人に無体なことをされたときに多い。この浜形の池のほとりで何かあつたのかもしれない。老人の性慾に夜昼は無い。

「電話があつたのよ、今」

「ぼく、にですか」

「ええ、リリとか、エマとかいう女の子からよ。おかしな名前ね」

電話番号をなんで知っているのだろうと二郎は思った。誰にも教えていないのに。

「二郎のガールフレンドか」

着くずれも気にしないで老人が云った。

「意外に手が早いな」

老人は愉快そうに笑った。

「予備校の同級生です」

二郎は怒つたような顔で弁解した。

「ほほう。女でも予備校に行くのか」

リリやエマなどという名前だから、老人は水商売の女だと思つたのだらう。二郎にしても、リリやエマが本名かどうかは知らない。リリは試験用紙に名前など書いたことはないのである。二人とも、平凡な本来の名前にあきて、自分で勝手につけたのかもしれない。

寿美麗夫人は、二人からの伝言を二郎に伝えた。

「そうか、今日は日曜日だったな」

老人は頷いた。

「たまには外で遊んで来るのもよかろう」

「お掃除もすんだことだし、そのリリとかエマとかいうオジョウサンと、デートでもしていらっしやいな」

と寿美麗夫人も進めた。

老人が数枚の紙幣を、二郎の前に突き出した。老人らしい愛情の表現だった。

「おこづかいよ、戴くといいわ」

寿美麗夫人が言葉を添えた。

二郎が二人に呼ばれた喫茶店は、予備校のある駅から一駅と離れていなかった。パーやキャバレーが密集している繁華街の真中にあつた。予備校をサボつては二人は喫茶店やボーリング場などでトグロを巻いているのだらう。目印の劇場を見つけ、二郎はその喫茶店をさがしあてた。

ドアを開けると、ボーイが胡散臭そうな顔をして二郎を見た。男一人では拒絶されそうな雰囲気であつた。二郎はボーイにリリとエマの名を告げた。

「こちらへどうぞ」



ボーイが二郎に云った。二郎は安心した。二郎が来ることをボーイに話してあったのかもしれない。

仕切りの高いボックスが並んでいた。これでは立ち上っても隣りの席は見えない。それにしても暗すぎた。

「何をキョロキョロしているんだ」

二郎は不意に声を掛けられた。リリであった。ボーイが二人のボックスに案内したのに気がつかなかったのである。それほど暗かった。

「すぐ眼が慣れるよ」

「変な喫茶店だな」

「個室喫茶っていうのよ、ここ」

とエマが説明した。

「電話番号を、よく知っていましたね」

立ったまま二郎は云った。

「あら、牧クンの定期の裏に書いてあるじゃない」

エマも眼が早い。二郎に興味を持っている証拠かもしれない。

リリもエマも、ぴったりと身体を寄せている。二人とも原色の花やかなブラウスに、膝上十糎という短かいスカートであった。そして、エマだけが、膝まである長い皮のブーツ

を履いていた。

「早く坐れよ」

とリリが二郎の手を握った。リリの舌は少しもつれている。

「坐れっていったって」

ボックスは、ロマンスシートで、三人で坐るところではない。リリが立ち上った。二郎はエマの横に坐った。窮屈なボックスであった。いきなり、リリが二郎の膝の上にまたがった。二郎の首を抱き、顔を寄せた。二郎がさけるひまもなく、リリの唇は二郎の口に吸いついた。いや、リリの舌が、二郎の顔を舐めまわした、といったほうがいいかもしれない。

「リリはラリっているのよ」

おかしそうにエマが云った。

二郎は齒をかみしめ、侵入してくるリリのなまあたたかい舌を必死に拒絶した。

「ちえっ」

とリリが舌打ちした。

「舌ぐらいだせよ」

ふっと二郎は嘆息をつき、水を一息に飲んだ。

「気持が悪い」

エマが大声で笑った。

そこへ通りかかったボーイにリリは飛びついた。リリとボーイは立ったまま接吻している。ボーイの両手はリリの短かいスカートを捲りあげて、尻の割目に食い込んでいる小さなパンティを撫で廻していた。

「驚いたでしょう」

エマが二郎の手を握った。汗ばんだ掌がエマの感度を示している。仕事をしたことのないような綺麗な柔らかい指先だった。のぼした爪の真珠色のマニキュアも美しい。エマは二郎の指をまさぐった。エマが二郎を求めている。

ボーイが去ると、

「リリ、お坐り」

とエマが語調を強めてリリに云った。リリの身体が床に崩れ落ちた。

「正座しなさい」

「手をうしろに廻して」

「早く」

呆氣にとられている二郎の前で、リリは操り人形のようにエマの命令に従った。

エマはブラウスのポケットから一本の紐を取り出した。あやとりの紐である。エマはその紐で、うしろに廻して組んだリリの手首を器用に縛った。リリの眼は半分眠っている。



エマは錠剤を二つ、リリの口に押し込んだ。睡眠薬だろう。エマはまだリリを酔わせるつもりらしい。リリの上体がゆれ始めた。

「これから面白いことを、お見せするわ」

エマは白い箱からケントを取り出すと火をつけた。ケントを口にくわえ、勢よくリリのブラウスを剥いだ。ブラジャーは、していない。小さな乳房がやけに青白かった。エマは火のついたケントをリリの顔に突きつけた。

「つけるよ、リリ」と平然と云った。

「うれしいかい」

エマはリリの乳房にタバコを押しつけた。

「うっ」とリリが呻めいた。エマはゆっくりとリリの胸にケントの火をつけていく。

「気持がいいだろう」

エマの言葉使いまで変っている。リリは頷いた。

「気持がいい」

リリの舌はすでに廻らなかった。かろうじて聞き取れる程度であった。

「リリに、ネックレスをあげる約束だったわね」

リリの胸に十数箇所のタバコの跡が真珠のように並んでいる。リリの乳首が突起した。

「火のネックレス、これなら、絶対に無くさ

ないわ」

「キスして、エマ」と、リリが叫んだ。叫んだようであった。叫んで、そのまま床に倒れた。軀がリリの口からもれた。

「寝てしまったわ」

エマはケントの火を、リリの背中で無造作に消した。

「残酷なことをする」

と二郎は云った。

「残酷なこと、好きよ」

とエマは云った。大好き。

「リリはね、エマの奴隷なの」

エマはブザーを押し、ボーイを呼んだ。リリと接吻したボーイが飛んで来た。エマはボーイにチップをわたし、ボーイの控室でしばらくリリを寝かせてくれるようにたのんだ。

「裸にしてもいいのよ」

とエマはボーイに云った。

「何をしてもらわないわ」

ボーイがリリをおぶって控室に消えると、

「リリ、ボーイたちにマワされるわよ、きつと」

リリの足から落ちたパンプスを蹴飛ばして楽しそうにエマは笑った。

二郎がエマと食事をして別れたのは午後三

時頃である。エマはこれから人と会う約束があるのだと云った。誰か男と会うらしい。父親か、恋人か、ボーイフレンドか、そのところはわからない。長い皮のブーツのエマは、見るからに行動的な少女であった。

エマと別れると、二郎は遊びもせず家にもどった、意外な事件の連続で、このところ勉強が予定より遅れていた。たまには部屋にこもって入試問題にとりくもうと思った。

M駅を下りると、二郎は入園料を支払って自然園に入った。自然園を通り抜けて、家との境の鉄線の穴から庭に入ったほうが近道であった。それに、たまには入園料を支払わないと悪い気もしたのである。日曜日なので自然園はかなり混んでいた。池のほとりや森の木陰のベンチには、かならずアベックが坐っていた。二郎が前を通っても、組んだ腕や手を離そうとしない。森の木立は、静かに話をしたり、ひそかに愛撫をかわしたりするのに適している。二郎は笹の群をかきわけて鉄線の穴にたどりつき、軀をこごめて通り抜けると、庭に向かって山道を下りた。その足が浜形の池を見下せる地点で止まった。白砂の洲に一糸もまといない女が横たわっていたのである。

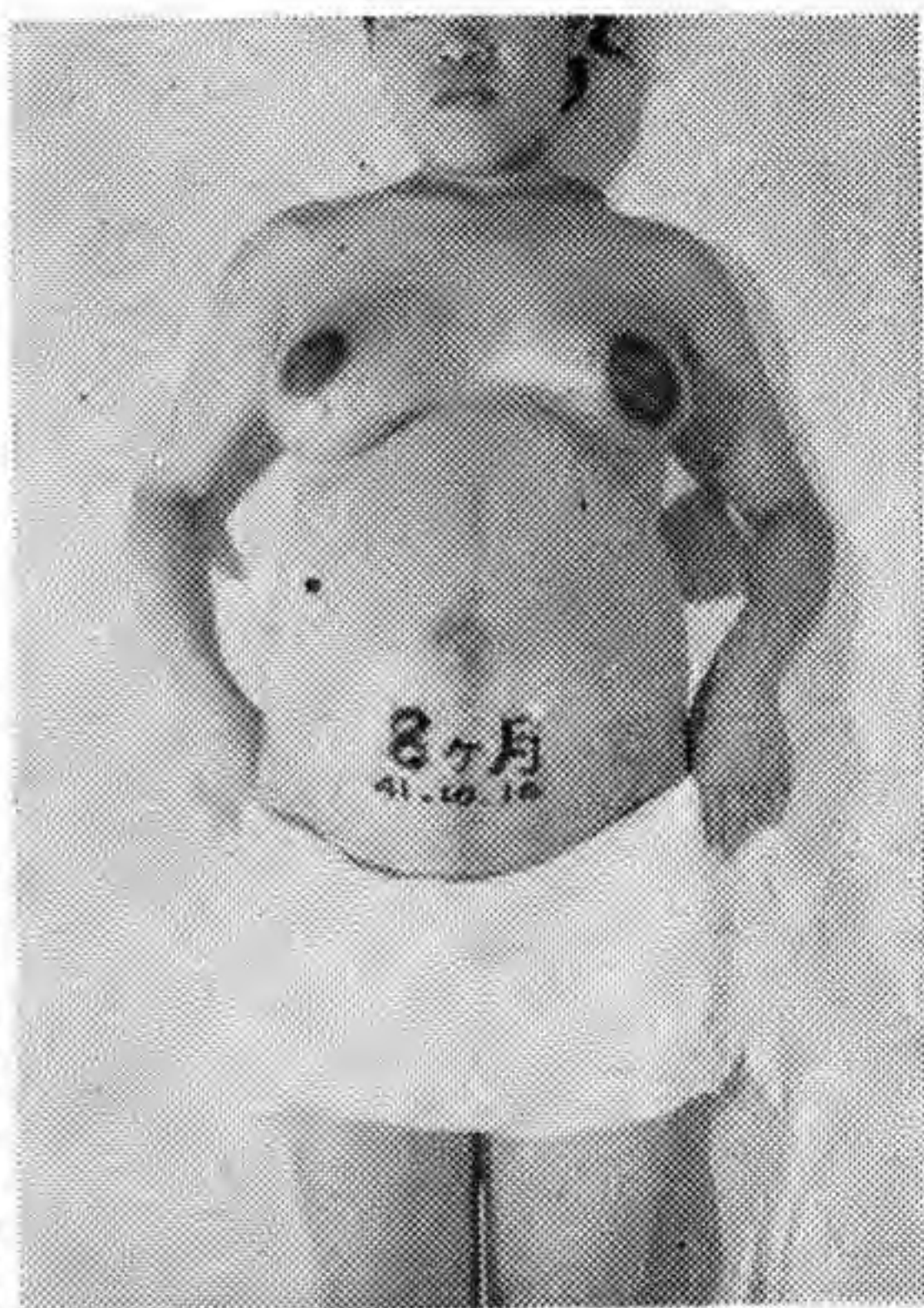
(続く)



## みゆきの妊婦シリーズ

## 「妊娠八カ月」

増田喜代司



いつもながらのタドタドしい文で、読みづらいつと思ひますが、どうも下手で恐縮です。十月十六日の日曜日、約束通り箕田編集長が一カ月ぶりに訪問されました。辻村さんは是非ない急用で来られず編集長ひとりです。家内の八カ月のフォトを撮される目的で来られたのは勿論ですが、今回大分趣向を考えて来られた様です。

ボクはみゆきの腹部の膨張ぶりが、余りにも異常に大きいので、心配になって、数日前阪大でレントゲンなどの精密検査をしてもらった処、意外にも妻の胎内には二つの生命が宿っていることを知らされて、本当に驚いて

しまいました。ボク達の今住んでいる会社のアパートは、いわゆる二DK式のもので、一ぺんに二人の子供が殖えるとなると、忽ち狭くなります。いずれ出産後は少し大きい部屋に移転させてもらうつもりでしたが、それにしても大変です。何しろ一人分の衣類しか準備してありませんし、それに最初の子供だからというので、ボクなりに少々ハズんで、上等のものを買い溜めてあったのですが、もう一人前となると、そうそう良いもの許り買ってもおられません。ボクの給料では破産してしまいます。妻と二人で男と女の場合の名前もあらかじめ考えてあったのですが、二人と

なると、根底から命名は変ってしまつて、改めて考え直します。

そんな気持の落着かない時の、箕田さんの訪問でした。ボクが双生児のことを告げると箕田さんもビックリしました。そして、こんな双生児妊婦をとる機会なんて、恐らく空前絶後だろうと、ズグく張切り出しました。

辻村さんとの約束もあるので、ボクもカメラをとり出し、編集長のフォトをとる邪魔にならぬ程度に、妻のフォトをカメラと一緒に納めることにしました。

最初は妻の妊婦の切腹シーンです。箕田さんの持参された刀で、妻は注文通り、切腹のいろいろのポーズをとりました。ついで猿轡の股縛りを取り終り、物凄く突出したハラに荒縄をかけ、あらゆる角度から、直立したのや横臥したのをとりました。

箕田さんが一休みした時、フト冗談に編集長の腹廻りと、妻の腹廻りを巻尺で計ってみましたら箕田さんの方が一米以上もあって、すごく突き出たように見える妻の方は九七センチで、未だ編集長の太鼓腹には叶いませんでした。妻は小柄な方ですから、大きく見えなくても、やはり男性の肥満したハラには及ばなかったようです。休けい後は、ボクの製作した黒革のバンド責めを行ないました。腹部はさすがに以前に開けた穴がはまらず、大急ぎで三つ許り、かなり距離をあけて穿ち、やっ



と、腹をしめつけることが出来たのでした。箕田さんは、やや言い難そうに、そっとボクの耳に口を寄せて、あることを囁やきしました。それは浣腸でした。ボクは妻にそのことを告げると、今日の日を覚悟していた、みゆきは、案外あっさりとうなづいて許しました。

早速瞬間湯沸器の湯を、洗面器に汲んできて、箕田氏の持参した浣腸器や、ボクのエネマシリンで準備をしました。判っきりした露出は都合わるいので、箕田さんはどうもとりくくそうにして、さまざまに苦勞して、無難なポーズを選んで写していましたが、それが

ボクにとっては、どうも歯痒く思われたのですが、無理もないと知りつつも、早くズバリと浣腸器をみゆきに挿入したい欲望にかられました。

フィルムを入れ替える箕田さんを横眼に見て、ボクは本当に三度許り注入してやりました。チラリと横眼で見ていた編集長は何も云わず、眉間にしわをよせて耐える妻の刹那の顔を大寫しにとったりしていました。

縛った俵で、ボクはみゆきをトイレにつれていってやり、おナカに差し支えないよう、介添えしてやりました。

全裸で、足を組み合らし、膨大なるおなか

強調した、フォトが終り、最後に前月と同じように妻の腹部に妊娠月を示すマジックインキの、八ヶ月という字を書きこみ、これをとって、今日のカメラは終わりました。

妻も流石に疲れた様子でしたが、それは口に出さず、最後まで気持よく協力してくれていました。

夕食の準備にかかろうとする妻を押しとど

めて箕田さんはボク等夫婦を車にのせて大阪まで走り食事を御馳走してくれました。しばらく都心に出なかった妻は、大きく膨れ上ったおなかも構わず、喜びにはしゃいでいました。狭いアパートの一室での毎日の退屈で単調な生活に飽きかけてた妻にとって、編集長の御好意はとても嬉しかったようです。別れ際、箕田さんは、無事出産のあかつきには、二人の幼児と共に一家全部をのせてドライブに連れていってやると、約束してくれたのです。

双生児のお産はなるべく早く産まないと、母体がえらいそうです。予定日は来年正月そうそうですが、もうこうなっては、ひのえうまもくそもありません。例え師走の忙がしい時であっても、ラクに産んでもらいたい気持で一杯です。ボクの心にもどうやう父性愛が生れつつあるようです。臨月になったら、おなかパンクしやしないか。小柄な妻だけに、そんなコツケイな笑えぬ心配すら抱く近頃のボクです。

毎朝かかさず見るテレビの『おはなはん』で皮肉にも、貧乏の子沢山の経師屋の家に、双生児が誕生するシーンがあつて、笑えぬ悲喜劇に、ボク達は見終って顔を見合せ苦笑しました。どうぞ無事にうまれますように——日頃は不信心なボクも、近頃は何か神に祈りたい気持で一杯です。





## サジスチック・ストーリー

## 山小屋の怪

## 町陽一



山に秋が訪れるのは早い。街に半袖やノースリーブが溢れている頃、山ではすでに秋の息吹きを感じるようになっていた。山好きの人々にとっては季節感など無いが、都会人達は、高山は夏、冬はスキー、秋は近郊の山へハイキングと決めてしまっているようだ。そのせいでもあろうか、夏山の名残りを楽しもうと、初めての山路をたどった路子と加奈江のまわりに人気は全く無かった。

高校時代、演劇部に籍を置いた二人は、社会に出て、別々の勤めを持っても、よく時間

を都合して、お茶に、映画に、山にと顔を合わせた。二十一という年齢からして、男性に興味を持っても良いのだが……とまわりの人は不思議がった。二人はいわゆるSの関係である。レスビアン、同性愛。だが他人に気取られないよう細心の注意を払った為、誰も二人を仲良い友達として以外考えてみもしなかった。

「ぜんぜん人気がないわねえ」

先になった路子がつぶやいた。夜行で発った為、歩き始めた時はまだ薄暗かった。

「一寸した秘境じゃない」

加奈江は明るい声で応じた。色の白い小柄な娘だ。

「道は大丈夫なの」

「大丈夫よ、これ一本しかないもの」

「だけど、こんな所、よく知ってたわねえ」

「ガイド・ブックにも載ってないのよ。知ってる人は、ほんの僅かですって」

「宿は大丈夫？」

「すごいお城だそうよ」

「お城？」



「西洋風のお城なんだって」  
「そんなの、日本にあるの」

「らしいわ」

揃いの紺のズボンに、キャラバン・シューズ。路子は荒い格子模様のシャツを腕まくりし、可奈江はピンクのシャツを同じく、二の腕迄巻き上げていた。

「まだ暑いわね」

可奈江の丸い頬に、汗が筋を引いていた。

「まだ夏よ」

「朝晩は冷えるそうよ」

「カナちゃんはセーター持って来た？」

「勿論。ミチは」

「言うまでもなし」

山路に明かるい笑声が響いた。雑木林の間を通る細い路が、鋭い角度で曲がると、視界が急に開けた。

「あら」

「あっ」

二人は息を吞んで立ち止った。

空間の断層というのがある。SFの産んだ物であるが、突然、ある世界から他の世界へ移動してしまうテーマに使われる。

二人の前に表われた風景は、まさしく、空間の断層のようであった。日本の山の中にそ

びえ立つ西洋風の古城。一面、蔦におおわれた姿は、まさに西洋の、それも中世のものであった。

「あれが」

「宿ね」

二人の言葉は溜息のようであった。

「すごいじゃない」

「中世ね」

「騎士やお姫様よ」

矢張りロマンチストである。

「お姫様は私達」

「お城が嫌って言わないかしら」

「判らないぞ」

二人の視線は古城に釘づけになっていた。

「早く行こう」

「うん」

殆どかけ足のようである。日はようやく真上に来た。たちまち二人の体は汗まみれとなり、古城の前に着いた時には、二人共胸のふくらみを強調しながらあえいでいた。

「えるむ荘」と読めた。入口にかけられた古ぼけた板である。

「ロマンティックな名ね」

路子は何故か声をひそめて首をすくめた。

「今日は」

「お願いします」

乙女の澄んだ声は、山の静けさを破った。すぐに応えはなかった。遠くから、足音が静かに近付いた。

「お泊りですか。これはこれは」

中老の男が城内の闇から現われた。

「そうです。お願いします」

「不便な所なのに、よく来られましたなあ。まあ、どうぞ」

男の後について入った二人は闇に目がなれずしばし佇ずんだ。薄暗い廊下を通り、ようやくまわりの物が見え始めた頃、三人は二階の一室にいた。山の宿には不向きな程の豪華な家具類だ。木わくのベッド、大きな鏡。

「お昼はどうなさいますか」

男は鍵をベッドの枕元にある台の上に置きながら言った。

「持って来てますから結構です」

可奈江が靴の紐を解きながら言った。男は軽く頭を下げて出て行った。

「すごい所ね」

可奈江は宿帳に記入している路子の方を向きもしないで言った。

「山の宿にベッドがあるなんて。だけど寝る時、どうしよう」



「スリッパだけで良いじゃないの」

路子は手を休めずに言った。

「いつもこうして書いていると変に思うの、二人共八月二十六日生れて、嘘みたいね」

「だから仲が良いのよ」

可奈江は着替えの為シャツをぬぎ始めた。

「一寸変った感じね、あのおじさん」

やっとペンを置いた路子は、急いで靴の紐に手をかけた。

「こんな山奥に一人で住んでいると、変にもなるでしょう」

二人は小さな笑い声を立てた。スリッパを取る時、可奈江の薄い腋毛が金色に光った。

「カナちゃんの肌は相変らずきれいね」

上半身裸になった路子はスラックスを下ろしながら視線は可奈江に向けられていた。興奮を押し殺したような声だ。

「そうかしら」

可奈江は、ちらとむき出しになった自分の胸元に視線を落した。

「うらやましいわ」

路子は可奈江の丸い肩をつかんだ。

「ミチ」

「カナちゃん」

路子の燃えるような唇が、可奈江の白いう

なじに近付いた。



宿の傍に巾の狭い谷川が、清らかな音を立てている。その河原にくつろぐ二人の乙女。

二人共、ノースリーブのブラウスに白のショート・パンツ。路子は大柄な花模様、可奈江は白のぬい取りのあるブラウス。ショーツは

二人共極端に短く、太もものつけ根迄しか無かった。浅黒く引き締った脚線美を見せる路子。白くぼつちやりとした可奈江の脚。可奈

江のは、脚線美とはいいいかねるが、丸く脂肪がのり、頬を押しつけたくなるような親しみのある脚だった。

「カナちゃんは本当に夏になっても、陽灼けしないわね」

「そうなのよ。嫌だわ」

「良いじゃないの」

「でも、今は白いの流行らないわ」

「カナちゃんの肌は綺麗よ」

事実、むき出しになった可奈江の腕は、二の腕にかすかに区別出来るような境があるが殆ど陽灼けしているとは見えない。

「こんな質<sup>たち</sup>なのね。一寸灼けても、すぐに元に戻ってしまうの」

「良いわ」

いつしか可奈江の手は路子の両掌の間で、もてあそばれていた。

「ここ温泉ですって」

「本当？」

「さっき、あのおじさんに聞いたもの」

「信じられないみたい」

「本当に」

「素晴らしいわね」

「他人には喋らないわ」

「絶対に」



山の夜は不気味な程静かだ。耳をすませると、音にならない音が、体を押しつけているようだ。可奈江は、ふと目を覚ました。風呂に入って夕食が済み、部屋に帰ると急に眠くなり、パンティ一枚の上からスリッパを着てベッドに横になった迄は憶えていた。睡魔は急に襲ったらしい。窓から洩れる星明りに隣を見ると路子の姿がない。可奈江は何故か、急に不安になった。

「ミチ」

声を小さくして呼んでみた。何だか大きな声を出すと恐いようだ。

トイレは部屋についているので、これでも



聞えるはずである。返事はない。可奈江はベ

ッドに上体を起こした。灯の消えたランプ、二人の懐中電灯、二足のスリッパ。可奈江は床に下り立つと懐中電灯をつかんだ。山の中の一軒家、しかも深夜、可奈江は恐さも忘れて部屋中探した。路子の影もない。鍵を外してドアを開け、廊下にすべり出る。広い闇が一瞬彼女の足を止めたが、別の恐怖心が、可奈江を階段に向けた。素肌に夜気が冷たく可奈江はむき出しの腕を抱いた。一階にも人の気配はなく、灯りもない。地下室に下りる小さな階段をしばしのためらいの後、可奈江は下りて行った。小さな地下室があるだけである。ふたたび階段に足を向けようとした時、彼女は視野の片隅に小さな光を感じた。懐中電灯の光を後に向けて彼女はふり向いた。闇の中に一点、光のさし込む穴がある。その穴にそっと目を近付けた可奈江は、思わず手の電灯をとり落とし、息を飲んだ。懐中電灯は、闇に大きな音を響かせて光を失った。

穴の向こうには美しい地獄絵がくり広げられていた。板張りの、それも美しい艶を持つ高価な材質を使用してある壁を背に、一人の娘が、裸身をさらしていた。一条まとわね身は両手足を思い切り拡げて縛られ、締った胴

中にも一本の縄が喰い込んでいる。口には何か布を押し込まれ、その上から、さらに布でおおわれていた。健康そうに伸びた小麦色の裸身を強烈な光が捉えている。ランプが唯一の光源であるこの宿にしては、おかしいことだった。

「ミチ」

その娘が路子だと覚った時、可奈江は信じ難い様子でつぶやいた。

「ミチ！」

現実引き戻されたように、可奈江は叫んだ。だが、厚い壁に妨げられてか、路子の耳に入った様子もなかった。

だが、まるで可奈江の声が合図でもあったかのように、限られた彼女の視野に、一人の男が入って来た。上半身は裸で、不気味なことに、目のまわりだけを覆う黒いマスクをしていた。男は手にした短い棒で路子の胸をついた。乳房の谷間を、そして乳首を中に押し込むように。路子は手足の縄目をきしませめき声が洩れていることだろう。可奈江は自分が責められているように、自分の胸を抱いた。薄いスリッパを通して、大きな鼓動が手に伝わって来る。

「ミチ、どうして！」

悪夢にうなされるように、可奈江はつぶやき続けた。

男の手にした棒は路子の臍を責め、さらに責め所を求めて下って行った。

「ああ」

可奈江は正視出来ず目を伏せた。目は伏せても、もがき、うめく路子の裸身が目について離れなかった。

ふたたび目を穴に当てた時、すでに男は視野から消えていた。路子は先程と同じ姿勢で縄目につながれたままだ。

レスピアンである可奈江は、今迄に何度となく、路子の裸身を見た事があった。だが、今の路子の姿は、今迄とは全く違う感じだった。いつものスタイルの良さは変る所がなかったが、何か別の魅力が加わったようだった。

しばらくみとれていた可奈江は、ふと我に返えり、路子を助け出さなくては、と思いついた。穴から目を離れた途端、可奈江は、後から強い力で押えつけられ、口に布を押し当てられた。闇の中で、白い体が抵抗を見せたが、すぐに意識は遠のいて行った。

田村泰次郎氏の『肉体の門』に次のような



文章がある。

「マヤは裸のまま、牛の肢をくくった麻縄で手首をくくられた。浸みこんだ牛の血が乾いて、縄が固くなっているの、手首の肉に食いこみ痛かった。くくりおわると、せんたちは麻縄を広間の天井から覗いている鉄骨にとほし、端をにぎって、「よいそらつ、よいそらつ」と声をあわせてひきだした。マヤの両腕は垂直にひきあげられ、やがて身体もそれについて真直ぐにひきあげられ、そして両足さきが床から離れた。宙吊りである……」

可奈江はまさに、このボルネオ・マヤのよくな恰好にされていた。彼女は裸身をさらし両手を上からぶら下がるようにして縛られていた。気がついた時には両腋腹が引き伸ばされ、裂けるような痛みを憶えていた。

「気がついたか」

マスクの男が前に立っていた。可奈江は本能的に太ももに力を入れた。

「むむ」

可奈江も、路子と同じように、固く猿轡が噛まされていた。

「二人共、良い体をしているな」

男の視線は可奈江の裸身をなめまわした。程良く脂肪ののった体は、丸く親しみ易い曲

線を描いていた。だが、可奈江の体を最も美しく見せているのは肌の美しさだった。あく迄も白く、肌理細かい肌は真珠のような輝きを見せていた。それだけに胸を彩る薄紅の乳首は余計美しかった。

「どうだろう、この胸の美しさ」

男は棒で可奈江の乳首を突いた。体中を電撃が走り抜けるようなショックで、彼女は身を引いた。手首に縄が喰い込み、脇腹が引きつれる。

「ここも、ここも」

棒は順に下って行った。そして終点にたどりついた時、可奈江は半ば気が遠くなるような気がした。

「二人揃った所で訳を聞かせてやろう」

男は棒を下ろすと、椅子を持ち出して二人の前に腰を下ろした。可奈江は改めて全身を桃色に染めた。

「もう一昔も二昔も前の事だが……」

男の視線は可奈江の腹の辺りにあったが、光を失って遠い過去をさまよっていた。

「私には可愛い妹があった」

男はつぶやくように話し始めた。

「五つ年下の登茂子は、とても可愛い娘だった。それにスタイルも良く、色も白かった。

親のない私達は、お互に助け合い、愛し合って平和に暮らしていた。所が高校も二年になった時、登茂子は不良グループに引きずり込まれた。強制的に。そして冬のある日、登茂子は夜遅く、ふらふらになって帰ってくると玄関に入るなり気を失った。ベッドに寝かせて着替えさせると、体中に生々しい傷跡が残っていた。グループを抜きたいと言った為に私刑にあったそう。小雪がちらつこうという寒い日に素裸にされて一日中、それこそ口にも出せないむごく、恥しい目に会わされたという。登茂子はそれから一カ月後、肺炎がもとで死んで行った、まだ十七才の、人生もこれからという時に」

二人共縄目の感覚はなくなっていた。全身がしびれてしまい自分の体ではないようだ。「その不良グループのボスが八月二十六日生れた。俺は必ず復讐すると誓った」

男の目に鋭い光が戻り言葉付き迄変った。

「だが、その女はいち早く学校を止め行方知れずになった。俺は八月二十六日生れが憎くになった。この山奥に来た八月二十六日生れの女に復讐すると決めた。だが今迄にそんな女は一人しか来なかった。その女は男と一緒だった。それで狙う機会はなかった。帰って行く後



姿を見てどれだけ俺がくやしかったか判るか判るまい。だが一度来たものならきつと又、誰か来る。そう信じて俺は地下室に拷問用具を揃えながら待っていた、見るが良い。この道具を」

初めてみるおぞましい道具の数々。だが、今迄に聞いたことさえない二人には、その本当の恐さは判らなかった。

「良いか。これから思いのままに、二人を責めさいなんでやる」

そんな馬鹿な事、誕生日が同じだからというだけの女に復讐するなんて、氣違いよ。と路子は怒鳴りたかった。だが口の中につめ込まれたパンティの為に声にはならなかった。

「まず、お前からだ」

三角の柱を横に渡したような台を部屋の中奥に押し出すと男は路子に近付いた。その物の怪にとりつかれたような視線に彼女は鳥肌立った。

長い間、大の字に磔られていた路子にとって、急に体が自由になっても抵抗する事は出来なかった。しばし自由になった両腕を、今度は背にまわされ、後手に縛り上げられて行った。両手首を縛り合わせた縄は二の腕を締め上げ、乳房の上下に喰い込んだ。いつも可

奈江がうらやましく思っている路子の豊かな乳房が、上下に喰い込む縄目の為、若さを強調するように高く盛り上った。後手の縄を引かれて路子はよろよろと立ち上った。

木馬の両脇には台が置かれてあるが、路子は、その台にのって木馬をまたがされた。男は、むっちりとした路子の腰を木馬に縛り付けた。

「良いか、うんと苦しめ」

足の台が外された。路子は全身をけいれんさせた。痛みが体を縦に走る。自分の体重が呪わしい。押し殺された悲鳴が口から絶え間なく洩れる。

「そうそう、もっと苦しめ。上を丸めてあるのが、俺の慈悲だと思え」

全体重を、最も神経の敏感な場所で支え、路子は氣も狂いそうであった。

男は細い鞭を手にとると、苦しんでいる路子を尻目に可奈江の方に向った。路子のすさまじい苦しみ方に可奈江の顔から血の氣が引いて行った。

「お前も一緒に泣くんのだ」

空を切る鋭い音と共に、可奈江は胸が引き裂かれるような痛みでのけぞった。手首にさらに縄目が喰い込む、白い胸のふくらみの上

に、一筋赤い筋が走った。

「妹も、こうして泣いたのだ」

腹、腰、太もも、さらに背中、可奈江の白い体は鞭跡で縞横様に彩られた。体中が汗でぬれ、腋毛がびったりと肌にはりついた。可奈江は、口中のパンティを噛みしめ、うめいた、声にはならなかったが、うめく事によって、少しでも苦しみが減るような気がした。

「そうだ、登茂子の乳首も、こんな色をしていた」

男は可奈江の薄紅の乳首をつまんだ。

「よくこうしてやったものだ」

兄が実の妹の胸を愛撫する。仲の良い兄妹と言っても何か異状なものが感じられる。

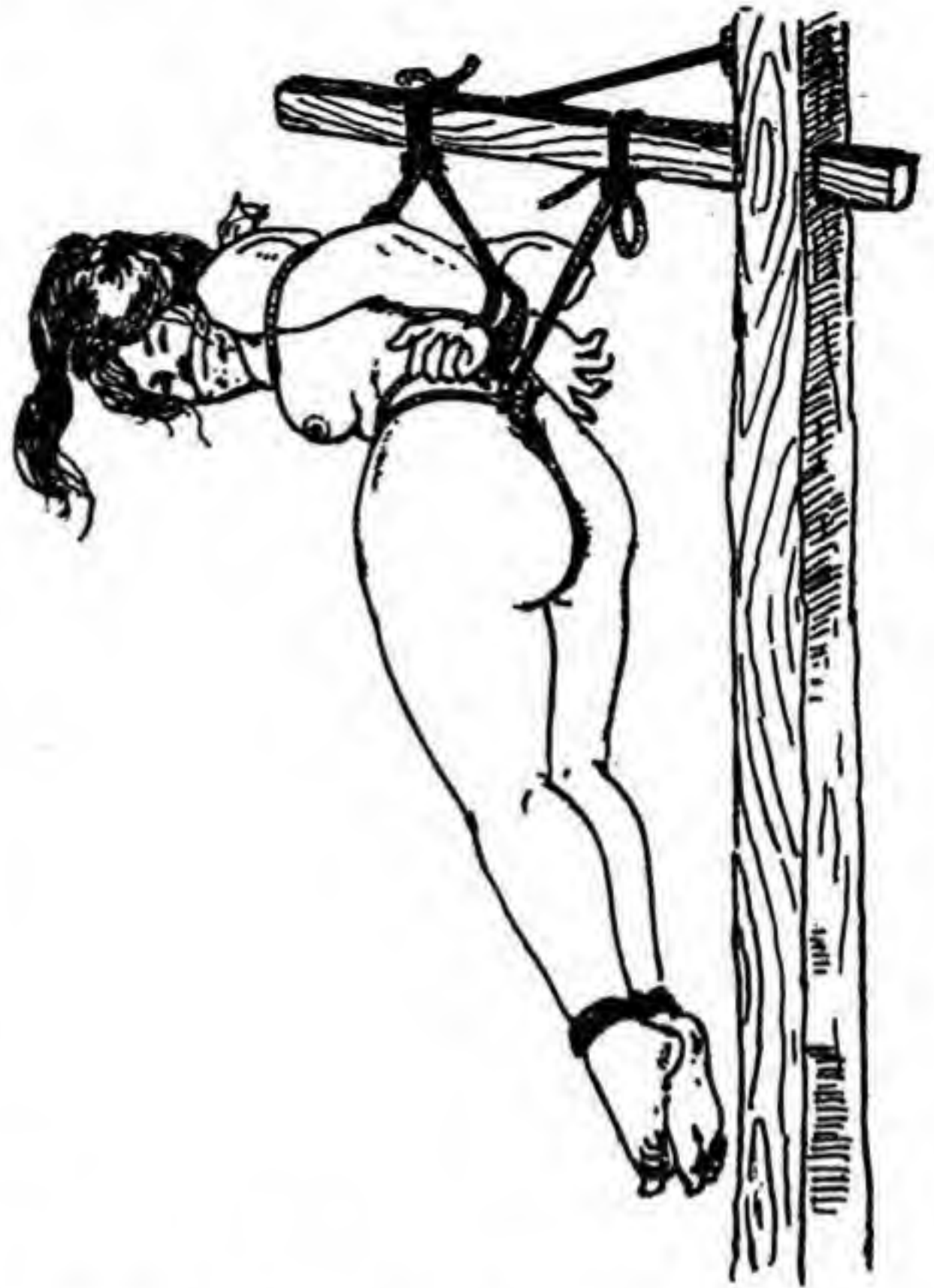
「そうだ、登茂子に見せてやろう」

男は二人をそのままに出て行った。可奈江は縄にぶら下ったまま、路子は木馬に乗せられたまま。路子の全身は汗に光り、均整のとれた体が彫像のように美しかった。お互に励まし合おうにも声は出ず、その上、自分の苦痛に耐えるのがやっとだった。

「登茂子、今見せてやるぞ、あの二人の苦しみ方を見て成仏してくれ」

大きな額が男の手で二人の見える所におかれた。いかにも高校生らしい初々しい少女が





横たわっている。だが、少女は、全裸であった。しかもカラー写真である。実の兄に自分の裸身を撮らせる妹、矢張り異常である。

「どうだ、良い妹だろう」

男の言葉通り丸顔の少女は愛らしく、体も美しかった。路子の均整と可奈江の肌を持っている。豊かな胸には可奈江のと同じ薄紅の引き締った乳首が見えた。

「さあ交替だ」

からなかった。縄目は体重を支えて、ますます深く、肌に喰い込んで行った。路子の爪先が床から一米位離れた所で機械は止った。男は次に可奈江の縄目に解くと、路子と同じように後手に縛り上げた。木馬は新たな犠牲者を迎えた。

可奈江の白い体は無残に歪み、乳房が汗に美しく光った。一方路子も宙で鞭の風に弄ばれていた。下から打つ為、鞭は殆ど下半身を

路子は木馬から下ろされた。彼女は床に崩折れた。体の力がすべて抜けてしまったようだ。男は路子の体に天井から下っている縄をさらに巻きつけ、部屋の隅に行った。機械の動き始める音がすると、路子の体は徐々に、浮き始めた。力を失った裸身が、宙に浮くのそれに程時間はかからなかった。縄目は体重を支えて、ますます深く、肌に喰い込んで行った。路子の爪先が床から一米位離れた所で機械は止った。男は次に可奈江の縄目に解くと、路子と同じように後手に縛り上げた。木馬は新たな犠牲者を迎えた。

可奈江の白い体は無残に歪み、乳房が汗に美しく光った。一方路子も宙で鞭の風に弄ばれていた。下から打つ為、鞭は殆ど下半身を襲った。張りのある腰、引き締った太ももが燃えるようだ。路子の体は僅かに鞭打たれる度にけいれんするだけだ。

「一寸やり過ぎたかな。まだ死ぬのは早い、まだまだ苦しんでもらわないと登茂子が喜ばない」

男は二人を責めから解放した。

「おや？」

何を聞きつけたか、男は耳を傾けた。

「めずらしく客だな」

二人は夜通し責められて、すでに日は高いらしい。

「そうだ。しばらく休んで面白いものを見てもらおう」

二人は最初に礫られていたのと反対の壁に向って座らされ、一本の柱に一緒に縛りつけられた。

「これも取ってやろう」

充分に唾液を含んだ下着が、二人の口から引き出された。

「今に面白いものを見せてやるからな」

男は出て行った。

「カナちゃん」

路子がかすれた声で行った。

「ミチ」



可奈江も声が出ない。猿轡の為に口の中の水分がすっかり吸い取られてしまったのだ。

「どうしよう」

「痛いわ」

「私も体中が、燃えるようよ」

「どうなるのかしら」

「今の所は仕様がないわ。逆らわないようにするしかないさそうだわ」

板壁に向って座らされた二人は、丁度宿題を忘れた生徒が壁に向って立たされているようなものだった。

「待ってろよ。今に良い物を見せるから」

しばらくして戻って来た男は二人に声をかけると壁の横の装置に手をふれた。すると、どういう仕掛けになっているのか、板壁はたちまち透明になり、向うに浴場が展開した。

「驚いたか、向うから見れば唯の石壁さ。良いか、どんなことがあっても目をつぶるな。つぶると鞭を喰らわすぞ」

男は、二人を縛りつけてある柱に鞭を鳴らした。

待つことしばし、入口が開くと、タオルを手にした裸の男女が入って来た。パントマイムを見るようだ。

「おっと声も聞かなければ」

スイッチが入ると驚く程明瞭に浴場の音が聞こえて来た。

「すごいお風呂ね」

「本当だ。山の中にこんな所があるなんて」  
二人は向い合うと、抱き合い唇を求めた。

◆「これ！」

可奈江の丸い肩に鞭が鳴った。

「目をとじるなど云ったはずだ」

「だって」

「文句は許さん」

「カナちゃん」

路子の声には苦しくても我慢しろという感情が含まれていた。

「美世ちゃん。洗ってやろう」

浴場の男は女の背にまわった。

「良い体してるね」

「あら、そうかしら」

「見事だよ」

泡だらけの男の手は、女の腕の下から胸のふくらみにまわった。

「逸郎さん、駄目」

女はふり向いたが、その目は言葉とは逆の感情を表わしていた。

「美世ちゃん」

◆「逸郎さん」

二人は泡にまみれて床をころげまわった。体も心も一糸まとわぬ自然の姿。

◆路子と可奈江の肩に背に、鞭は次々とふり下ろされた。

「ううう、許して」

「見るんだ、目を開けろ」

「駄目、駄目、ヒーツ」

浴場の歓喜の声と相和して二人の悲鳴が響いた。

「もっと面白いものを見せてやる」

男は鞭の手を休めると、別のボタンを押した。浴場が一瞬白い霧に包まれたが、それが晴れた後には二つの裸体が横たわっていた。

「コ、殺したの？」

「いや、まだ殺しはせぬ。待っている。あ、そうだ。お前達も来い」

二人は柱から解かれ、男に縄尻を取られて外に出た。責めを受けている時と違って、後手の縄尻を取られた裸身は妙に恥しかった。自然と伏目勝ちになる。そうすると自分の哀れな姿が目に入ってたまらない気持になる。どこをどう通ったか判らないうちに二人は浴場に入った。男女は床にのびたままだ。



「見ていると良い」

男は二人の縄尻を、浴場の隅の柱につないだ。一度脱衣場に出ると、二枚の下着を持ってあらわれ、レースの飾りのあるのを男の口に、白いブリーフは女の口にねじ込んで猿轡をした。さらに二人をうつ伏せにしてから後手に縛り上げ、一人ずつ足をひっぱって可奈江達の正面につれて来ると棒に両脚を思い切り拡げて足首を縛りつけた。片隅の縄を引くと、二人は脚を上にして、Y字型にぶら下がった、あさましい男女の姿であった。

「悪魔！ 気狂い！」

路子の口から激しい言葉がついて出た。男はつかつかと近寄ると、いきなり路子の両頬に平手打ちを喰わせた。激しい音に路子の頬はたちまち赤くはれて来た。

「悪魔というなら云え、妹は、登茂子は、も」とむごい目にあって死んだのだぞ」

「だって、私達には……」

言葉半ばで可奈子の白い頬が音を立て赤く染った。

「矢張り、お前達にも猿轡が必要だ」

男はふたたび脱衣場に戻り犠牲の男のシャツを持ってくると二つに裂き、二人の口にねじ込んだ。男臭さが、吐き気を催させた。

「ああしてぶら下げておくと頭に血が下って目や鼻から血を流して死んで行く。お前達が来てくれたので、この城の役目も終わった」

男は冷たくつぶやいた。

やがて逆吊りの二人の意識が戻り始めた。初めは一体自分達がどういう状態にされているのか判断がつかなかったようだ。女が体を動かした。白い内股に緊張した線が見え、前後にゆれた。男がうめいた。顔はすでに紅潮していた。自分達のおかれていた状態を知った時、徐々にせまり来る死の影におびえた。浅間しい裸身が苦痛と恐怖にゆれた。犠牲者を目の前にして二人は自分達の脚が拡げられているかのような気持になって目を閉じた。たちまち二人の肩に背に胸に鞭が鳴った。

可奈江は声にならない声で

「嫌、嫌」

と叫び続けていた。背中で縛り合わされた両手をしっかりと握りしめて鞭の苦痛にもだえた。柔い体に縄目は深い窪みを作って喰い込んだ。乳房が歪み、可愛い乳首が上を向いた。白い肌は無残にはれ上って行った。それでも二人に目を開かなかった。逆吊りの二人の意識はゆっくりと遠のいて行った。

路子と可奈江は自分達の部屋のベッドに横たわっていた。だが体には一糸もまとうことが許されず、両手足には五十糎位の長さの鎖でつながれた枷がはめられていた。二人は燃えるように痛む体をベッドに横たわっているだけだった。若々しい肌には縄目や鞭の跡が一面に残り、痛々しかった。

「カナちゃん、大丈夫？」

体つきからして抵抗力のありそうな路子が苦しさをこらえて顔を上げた。

「死にそうよ」

可奈江の声は細かった、肌が白く柔いだけに責めの跡はむごかった。所々肌が破れて血がにじみ、又、ある所では赤黒くはれ上っていた。

「ミチ」

「どうしたの、大丈夫？」

「私達、殺されるのかしら」

横向きになった可奈江の白い乳房の上下には、赤い筋が刻まれていた。

「そうらしいわ。あの二人見たでしょう」

「止めて、もう、あの顔が浮かんでくるの」

可奈江は布団に顔を埋めた。二人が浴場をつれ出された時、犠牲者はまだもがき続けた。



路子は鎖を鳴らしながら、可奈江の肩を抱いた。可奈江の体が小さくけいれしてする。路子の手の下になった鞭跡が痛むらしい。

「カナちゃん、可哀そうに」

路子は可奈江の裸身を強く抱きしめた。

「ミチ」

顔を上げた可奈江が、路子の豊かな胸の谷間に顔を埋めた。路子とて可奈江と同じ位、いや、それ以上の責めを受けているのだ。だが路子は唇を噛みしめて、痛みを殺し、可奈江を抱きしめた。路子の胸の谷間が可奈江の涙でぬれて行った。

「死ぬのは嫌、だけど、ミチと一緒になら我慢するわ」

可奈江は少女のように泣きじゃくった。

「ねえ、カナちゃん。逃げましょう」

「逃げられないわ」

「やってみるのよ。失敗しても、もともと、じっとしていても殺されるのよ」

可奈江は路子の胸で顔を上げた、髪の毛が可奈江の傷跡にふれて痛い。

「どうするの」

「窓から逃げるのよ」

路子は思いついたばかりの考えを云った。

「このままで？」

可奈江は路子から体を離し、手足の鎖を示した。

「裸は我慢するのよ。鎖は気をつけて行けば良いわ。そうするよりないのよ」

「見付かったら」

「あいつをやっちゃいましょうよ、二人で急にとびかかれば案外勝つかもしれないし、それにこの鎖が役に立つわよ」

路子は上半身を起こして、鎖を引っばってみせた。

「だけど、あの窓からどうして下りるの？」

「こういう時に映画や小説が役に立つわね。ベッドのシートよ。手伝って」

やがて窓からぶら下った布に一つの裸体がぶら下った。鎖が鳴らないように、不自由な体で下りることは骨の折れる動作だった。星明りに路子の体が浮かび上がり、地面の冷たさと、外気に路子は体を縮めた。路子よりも時間をかけて可奈江が下り立った。

「さあ、早く、音を立てないように」

「ささやいて二人は足を踏み出そうとした。」

「お散歩かね。裸では風邪をひくよ」

後から男の声が異様に大きく聞えた。二人の足は凍りついたように動かなくなった。

「体に毒だから、さあ、中へどうぞ」

男の声は不気味な程鄭重だった。あきらめてふり向いた二人に男はかすかに笑みを浮かべて後を向いた。追いつめられたねずみ、そうまさにそれであった。路子は男にとびついた。手首をつなぐ鎖が男の首にかかった。しめたとばかり路子が力を入れようとした時、男の体が沈んだ、路子の体が、弧を描いて飛び、背中を地面に叩きつけられ、息が吐き出された。

「馬鹿な真似はしないことだ」

可奈江は動けなかった。男は路子の二の腕を握って立たせると、二人を先にして家に入った。

「一人ずつで寝てもらうより仕方がないな。」

ゆっくり寝ておかないと明日が辛いぞ」

男は路子を別の部屋につれ込むと、足の鎖を片方外し、ベッドの柱にはめた。

「心配するな、生きた女には興味がない」

脚をベッドにつながられる時、体を縮めて男から出来るだけ離れようとしている可奈江に男は冷たく云うと部屋を出て行った。生きた女には……可奈江はその言葉の意味が判ると愕然とした。今頃はすでに絶命しているであろう浴場の女……その光景を想像して可奈江は総毛だった。そして、自分達が殺された後



も同じ事を……死後の自分が犯されるということに、たまらない恥しさを憶えた。

◆ 「朝飯だよ」

可奈江の部屋に男が現われた。マスクは外した普通の宿の主人の姿だ。恐怖と苦痛にうなされながらも、いつの間にか、うとうとしていたようだ。可奈江はとび起きて体の前を隠そうとする無駄な努力を試みた。

「いいよ、いいよ」

男はせせら笑った。

「せいせい隠しておくんだな、又、後で充分に展示してもらうからな」

男はベッドの上に朝食をおくと、そそくさと出て行った。

◆

地下室、いや、拷問室に二人の娘は連れ込まれていた。朝食の終わった後。二人に部屋で枷を外され、縄で後手に縛られた上、引き立てられて来たのだ。一夜の責めと恐怖に疲れはしていても、若々しい乙女の肌は、いささかの艶も失われていなかった。唯昨日の責めの後が無残にもくつきりと残っていた。

「逃げ出そうとしたむくいは覚悟しているだろうな」

「一体、いつ迄私達を、こんな目に合わせる気なの」

「妹の登茂子ほほえが微笑むまでだ」

昨日と同じように高校生の裸像が二人を見詰めていた。

「写真が……」

可奈江の頬が鳴った。

「写真ではない、登茂子はそのにいるのだ」

男は写真に近付き、本当の女が、いるように、手をふれた。顔から胸へ

「登茂子が微笑むと分るんだ、俺には」

「もし微笑んだら」

「その時は、お前達の魂を山に捧げる」

「微笑まなければ」

「微笑むまで責めるのだ」

どちらにしても、二人の助かる道はなかった。男は可奈江に近付いた。嫌がる彼女を無理に座らせて、足を組ませ、足首を縛り合わせ、さらに両肩が足首にひつつく位曲げて縛り上げた。海老責めである。柔い可奈江の体は驚く程よく曲った。

可奈江は白い肌を染めた。

「今度はお前の番だ」

路子は床にうつ伏せにされた。乳房が床で押し潰される。路子の形の良い脚は膝の上と

足首を縛り体を弓なりにさせると足首と手首が殆ど一つになるように、縛り合わせた。天井から下りている縄につながれる。縄が上ると、路子の体は両端から床を離れて行った。体重が縄目にかかり始める。肩の膝が離れ、乳首の先も浮いた。縄目が刻一刻と皮肉に喰い込んで来る。太ももが浮き、腰が浮き、最後に腹が床を離れると路子の体は縄の縊りでくるくるとまわった。床から一米ばかり浮いたところで上昇は止った。

「ううむ、く、苦しい」

「苦しいか、もっと、うめけ、うめけ」

男の手は止らなかった。縄のよじれにつれて路子の裸身は床を離れて行った。

「よし」

最後の一押しを加えると男は手を離した。

路子の体は逆にまわり始めた。初めはゆっくりと、徐々に早く。

「うわう、ぎゅう」

路子の体は独楽こまのようにまわる。

「ひいっ」

いつの間に手にしたのか鞭が鳴る。回転を迎えるように鞭がふり下ろされる。恐るべきカウンター・パンチ。

右まわりが終ると反動で左にまわり、又右



に路子の平衡神経はとっくの昔に平静を失っていた。鞭の痛さもさることながら、逆海老で吊られ、回転を加えられた苦痛は言語を絶するものがあつた。いつの間にか男は可奈江の傍にひざまずいていた。その手にする硝子器具を見た時、路子は自分の事のように顔が赤くなつた。可奈江は海老縛りのまま背を床につけた恰好にひっくりかえされた。後手の手が痛い。

「嫌、嫌」

可奈江はたえ入りそうな声を出した。こんな姿にされては、可奈江ならずとも消え入りたいように気にはなるであらう。

「いやあ」

冷い感触が腰を襲つた時、可奈江は一声高く悲鳴を上げた。無防備な下半身から冷い液体が体内に注ぎ込まれた。

「いや、いや」

可奈江は夢中でつぶやき続けた。そうすることによって、恥しさが半減でもするかのよう。

やがて脚の縄が解かれた。曲げられていた背骨が痛む。だが、体内ではすでに浣腸液に対する反応が始まっていた。

「いや、いや」

それを押えつけるかのように可奈江はつぶやき続けた。体内のうねりは高まつた。

「ああ、嫌、駄目」

「そろそろ行くとするか」

男は可奈江に抱き起こした。可奈江は動かなかった。動けば、我慢出来なくなりそうだった。白く柔い乳房が男の骨ばった手の下で歪んだ。立たされた可奈江は太ももをびったりと閉じ、体を前かがみにしたまま引き立てられて出て行つた。背中で強く握りしめた両手が哀れだった。

路子の体は、もうばらばらになりそうだった。その昔、ぶりぶりと呼ばれた拷問の方法だが、背中に重しをつけられていないのが、まだしもの救いだった。それにしても路子の背骨は折れそうに痛んだ。痛めつけられた心とはうらはらに、胸のふくらみは、体を反らせているために、余計、美しさを強調していた。

路子にとって無限とも思われる時間が流れた。体は美しい曲線を描いているのに反し、首はぐったりと垂れていた。

「早く行かないか、仲間が待ってるよ」

男の声に路子は目を開いた。可奈江が縄尻を取られてうなだれながら入って来た、顔色

が蒼ざめている。丸い顔立ちが、神々しいような美しさである。

可奈江は柱に立ち縛りにされた。路子が下ろされ、体内にのろわしい冷い液体が注ぎ込まれたが、路子にはもう抵抗するだけの力も無かつた。浣腸液が体内にしみ込み、恥ずべき時が来ても、路子は操り人形のように引き立てられて行つた。個室での秘密、誰に見せられない秘密、それを今路子は、見知らぬ男の前で行なわねばならなかつた。しかも全裸の上、後手に縛しめられた姿で。

「もう一つ、ここにはどうだ」

「ううう」

二人は柱に立ち縛りにされ、その前には男の妹の写真が置かれてあつた。

「ここなんか良いだろう」

二人の体のあちこちにはクリップがぶら下げられていた。素肌に喰い込むクリップの痛さ。その範囲が狭いだけに苦痛は余計激しかった。乳首をはさまれた時の苦痛は、木馬責めのそれに匹敵するものだった。両乳首に、肩に、腹に、そして、最も……に迄クリップはぶら下つた。クリップが一つふえる度に悲鳴が高くなって行つた。今迄の責めに比



べれば、静かなものだったが、その苦痛は勝るとも劣るものではなかった。

「登茂子、見るが良い。着飾ったこいつらの姿を」

ふり向いた男の視線が止った。

「あ、笑った、登茂子が笑った」

男は悲鳴に近い声をあげた。

「登茂子、満足してくれたか、よしよし、それでは、こいつらの魂を捧げてやるぞ」

二人は柱から解かれ浴場に連れ込まれた。

昨日の二人の無残な死体を予想していた二人だが、浴場にはそんな凶行の跡は少しも伺われなかった。二人は両手をY字型に挙げて、手首をぶら下げられた。さらに二人の口の中には吐き気を催しそうな布が詰めこまれた。

「最後の瞬間には、きれいになっていなくてはね」

男はつぶやくと、二人の肌に、ていねいに何か軟膏状のものをぬりつけ始めた。責めの激しさに似ず、男の手は意外にこまやかに動き、二人の体の、それこそ隅々迄塗り付けて行った。頭と顔だけを除く全身、ていねいにぬられて行った。吊られた手の指先に迄葉を塗り終ると男は出て行った。何も刺激もない葉だが、二人は不安になった、責め抜かれた

後とは云っても、両手を上げた姿は、二人を激しい不安感におとし入れた。それだけに責め手である男が入って来た時の安堵感自身でも不思議な位だった。男は手にした真新しい荒縄の束を置くと、ホースを取った。

「気持よくしてやるぞ」

まず可奈江に近づき水を出した。左手でホースを持ち右手でたんねんに葉を洗い落す。素肌を這いまわる悪魔の手に、可奈江は身もだえした。だが男の手は彫像を洗うかのように冷静に動いていた。可奈江の体から男が離れた時、路子も驚きの目を瞞った。可奈江の体から生毛さえも、きれいに取り除かれ、肌は輝きを増していた。男は満足そうな溜息を洩らすと路子にとりかかった。やがて二つの美術品が浴場に並んだ。

「さあ、出来た。いよいよ終りだ」

男は荒縄を手にする、嫌がる可奈江の体に縦縄をかけた。新しい荒縄の激しい刺激。腰を縦に割った縄は、細腰に巻きつけられて締められた。男は可奈江の手の縄を解くと後にまわし、腰の後で手首だけを縛り上げた。今迄の縛り方から考えると随分簡単な縛り方だ。路子も同じ姿で縛り上げられた。

「さあ外へ出る」

男の引く縄尻に二人はうめいた。

古城の裏、少し離れた所に小さな空地があった。そこに四本の若木が梢を地に接する位曲げて縄をかけられていた。梢を引きつけた縄は地に埋められた環を通して二本ずつまとめて柱に結ばれてあった。男はその二本の木の間に娘を一人ずつ仰向けに寝かせた。腰に押し潰されて、後手にされた手首が痛む。一本の木に一本の脚、二人は両脚を開いた姿で足首を梢につながれた。

「こうして縄を切ると、木が元に戻る力で、脚は両方に引かれて裂け、体は宙にとぶ」

男は研究者のような冷静さでいった。その残酷さに二人は総毛立った。インディアンの刑罰である。男は斧を手にした。二人は観念の眼を閉じた。もう、どうあがいても逃れる術はない。清らかな体のままで、死んで行く。この死に方なら死後の体を汚されることもあるまい。斧が陽にきらめいた。

「あ、登茂子だ」

最後の瞬間迄最愛の妹に娘達の苦しみを見せようというつもりか、斧を置くと男は家に走り込んだ。

中に入るのが合図のように、突然、天地の神は身震いした。遠くから起ったうなりが急



激に押し寄せ、大地をゆらした。仰向けの二人の目に梢が、そして天が大きくゆれるのが見えた。

この古城は何年の寿命を保って来たのであろうか。その寿命が今尽きようとしていた。古びた壁が落ち、亀裂が走った。映画のセッ トでも見るように、ゆっくりと壁は崩れ落ちた。土煙、騒音、生きた心地もない一時が過ぎた。ゆれは突然治った。跡型も無くなった古城。

だが何たる生命力か。どう助かったのか血

まみれになった男が、妹のそれも半分にしぎれた写真を持って這い出して来た。

「登茂子、今、今見せてやるぞ」

男は斧の所迄這い寄った。精神力だけで生きているような姿である。やっと伸ばした手に斧がふれた。斧の柄がしっかり握られた。だが、その指は徐々に力を失って行った。そして妹の復讐の為に半ば正気を失った男の力が抜けて行った。唯、妹の写真を抱いた手だけに力が残って。

一路子はもがいた、荒縄のとげがこんなに痛

## 四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

### 女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

この八緊縛女体アルバムは、若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさ最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚

にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。この一冊にて四人の美女の裸身のすみずみまでが、八縛りVというアクションによって、ファンの皆様方の目の前に極めて鮮明な印刷によって展開されています。どうか一冊を机上にお飾り下さい。

いものである事は想像もつかなかった。手首の皮がむけ、荒縄は一層、激しい刺激になった。後手に縛った場合、手首が腰の後辺りだと、割合、縄はゆるみ易い。手首を真赤にして、路子は自由を得た。体から最後の縄が落ちる。たった二日のことではあるが、責めに自由を奪われた体にとって、突然得たこの自由に路子は何か信じられないような気になった。すりむけた手首を撫ぜ、胸をかかえて路子は地面に座った。傍には今解き放ったばかりの、のろわしい荒縄が落ちている、裸の恥しさも責め跡の苦痛も、今は全然気にもならなかった。只自由になれたという、幸せを、山の気を吸い込むように、充分体内に溢らせた。この自由のことを考えると、もう決して我儘なんかいつていられない。

我に返った路子は、可奈江の傍に寄った。

可奈江は、気は失なってはいるが、何処にも怪我はしていないようだ。路子は可奈江の傍に座り込んだ。責めに疲れ果てていても、白い肌はいささかも衰えを見せていない。それどころか、生毛もない肌は輝くばかりの艶を見せている。可奈江の薄紅の乳首をそっと唇に含んでから、路子は童女のような体から、縄を解き始めた。

ハカット・宮城昌子V



私のマゾヒスチック・イメージ

大女と小男の  
コントラスト

久我万太郎



二十年程前、ある雑誌の口絵に、世界の珍奇写真が掲載してあった中に、今でも私の脳裡から離れることの出来ない思い出の一つがあります。その雑誌は既に消失して手元にありませんが、その口絵は、はっきり記憶して

おりますので、以下其の写真の印象を極めて正確に描写してみる心算です。

常夏の国マイアミ海岸をバックにした砂丘で、二人の若い男女の、新婚記念の立像写真です。これだけなら普通の事ですが、其の女

性は、ブラジャーとパンティの裸体姿で、素顔の俤黒味がかったふさふさとした頭髪を、無難作に両肩に垂し、顔立は線のはっきりしたコケチツシユな容貌で、視線を斜め横に注いでいる表情は、何処かきかぬ氣のする美しい女性です。

セックス女優ジェーン・ラッセルには及びませんが、大体あ言った感じの、性的魅力の溢れた印象を受けました。豊満な乳房を、小さ目のブラジャーで包み、パンティは偉大なピップに密着し、上部は、ウエストに喰込み、見るからにボリュームのある、堂々たる肉体の持主でした。肩の広い肉の盛り上った所など、一寸男性的な感じさえします。尚愉快な事に、身長が六呎三吋以上も、あるので

片方の背広姿の青年は、どうかと言うと、丁度彼女のステッキの代用品的な恰好で、彼女の左の腰の辺りに、くっつく様に立っています。子供かなあと思いましたが、口絵の説明で大人と分りました。少年の様な愛嬌のある顔は、微かに笑みを湛え、優しい視線を投げています。この腰布着の様な、四尺そこそこの小男の身長は、女性のお臍の辺りしかなく、右手を水平に伸ばし、女性の偉大なヒッ



プの後に廻わしている恰好は、丁度子供が大木に、しがみ附いていると言った、至極珍奇なコントラストの写真です。

この気の弱そうな小男と、偉大な肉体のヤンキー娘を見て、私は直感的に或る種の想像を逞ましくしました。マゾヒストたる私の好みから見れば、確かに完全無欠な理想のコントラストを構成しているのです。というわけは、外面的に倒錯的な配合は、内面的にも同様のものを包含していると思われるからです。新婚後二人で、営むであろう夫婦生活が、必らずや妖しい形態に発展するに相違ないと考えて、私の夢を描いてみたいと思います。

彼女、名はS子、幼少から裕福な境遇で何不自由なく育ちましたが、唯一つ淋しく不幸な事は、少女の頃優しい母と死別した事でした。しかし父が充分の愛情を注いで呉れるので、せめてもの不幸中の幸でした。S子は父に似て、体格は学生時代から群を抜き、実に堂々たる女偉丈夫で、男性も及ぶ者がなく、スポーツは多方面に亘っていました。又母に似て美貌で、気立は優しく、明朗な性格だったので常に学校内の人気者でした。反面きかぬ気のヤンキー娘でもありました。州立の力

レヅを卒業後、父の経営する会社で秘書として働き、此処でも美貌の社長令嬢として、社内にな王然として君臨したのです。

彼女の誕生日が訪れ、社から多くの男女が招待されました。席上お互が、相手を指名して、指名された者は彼女の為、何か一席披露する事になりました。順次指名された三人の男女は、一様に彼女の美貌と秀れた才能を讃美し、幸福を祝福しました。四番目に指名されたのがKでした。彼は日頃から秘かに彼女を慕っている一人でしたが、余りに境遇に開きのあることを思い、淋しく諦めていたのです。彼は同僚の社員の中で、格別に小さく、甚だ見栄えのしない存在でしたが、口数は少く、物静かな人懐っこい柔和な眼差しの持主でした。

静かに立ち上ったKは、やや羞らう様に彼女に向って、ペコッと一礼しました。其の恰好が一寸滑稽だったので口の悪いのが「イヨ、ピグミー君、頑張れ!」と言ったので皆どっと笑いました。益々堅くなって

「私の申上げたい事は先程の諸君が、皆代弁しましたから、私の言う事は、何にもありませんでした」

そして暫らく考えてから、思い切った様に

棚の上を指し

「あのヴァイオリンを、お貸し下さいませんか、代りに何んか弾きます」

一同の見守る中で、彼はヴァイオリンを取り、静かに弾き始めました。

一瞬彼の顔から、羞らいの影は消え、冥想的な眸は何物かを凝視するかの様でした。ドルトラ作、ヴァイオリン独奏曲、スーベニーです。低いリズムから始まり、アンダンテに流れ行く美しいメロディーは、ロマンチックな哀愁を帯びて、次第に高い調子から、やがてラルゴオに高潮する時、冥想的な音色は、聞く人の心を、優しく柔らかな感傷に包みます。

美しいベールの彼方に思い起して、うっとりと聞く彼女の眸には、涙が滲みしました。やさしい母への思慕。数々なる母の思い出の涙でした。彼女の母はこの曲が好きで、よく弾いて彼女に聞かせて呉れたものです。ヴァイオリンは母の形見だったのです。

彼女はその夜、Kの境遇を知りました。幼くして両親に別れ、孤独と貧困と、逆境に戦い、将来弁護士になるべく、法律を勉強している事、又大変純情な青年である事等を——此の日からKに対して抱いた、彼女の同情と



親愛の念は、いつしか淡い恋に変わりました。彼女は父にすべてを打明けKを幸せにする道は、自分以外にない事を強調し、結婚の許しを求めました。父はKの勤勉と、真面目さを知っているので、異論なく承諾しました。二人は友人達の好奇と、羨望に囲まれつつ、晴れの結婚式を挙げたのです。新婚生活を営むべき家は、父の邸宅から一哩程離れた、小高い丘の上にある美しい庭園に囲まれたスマートな家でした。

扨て読者の皆様、大変序文が長くなりましたが、本文はマゾヒストの夢を描くのが目的ですので、次文から作者自身が小男のKとなり、お話しを進めて行きたいと思ひます。

新婚の甘い数日は瞬く間に過ぎ、私は新しい希望と喜びで、毎日元気に父の社に通勤しています。彼女も昼間は、普通の家庭の主婦と同様、まめまめしく家事にいそしみ私に仕えてくれます。社から帰宅して、楽しく二人で夕食を済ませてから就寝迄は二人にとり一日中で、最も楽しい待望の時間なのです。

夫婦生活の極致は、夜は正に「サタン」たる事に尽きます。性格と肉体の然らしめる為でしょうか、次第に彼女はアクティブに、反対に、私はパシィーブに——見事に倒錯的な

コントラストを、現出致す様になりました。こうする事がもう極めて自然で、少しのぎこちなさも感じないのです。彼女は私を、小さい弟か、子供位にしか思われないうらしく、彼女の言う尽にされるのです。こうされる事を私は大変望む様になり、彼女も又大変楽しい様に見えるのです。思えば嘗てのヤンキー娘も、弟の如く、子供の如く、私に優しい愛情を、注いで呉れました。溢れるばかりの彼女の愛情が原動力となり、私の昼間のビジネスの能率が、どれ程向上したか申す迄もありません。

親子の様な夫婦の、世にも睦まじい喜びの幾日かが経ちました。刺激は更に次の刺激を求めて止みません。ノーマルな、愛情生活にも、漸く倦怠が訪れた様です。お互がもっと痺れる様な刺激を得たいとの熾烈な願望は、遂に私達にいと容易にアブの道が、最大の歓喜と絶対の法悦とを与えて呉れる事を教えました。アブ性は私達の五体に、以前から潜在した内奥の叫びだったのか。それとも二人の対照的な性格が、至極珍奇なコントラストに結び附いた結果、必然的にアブ性に向わしめたのか、其の何れかだと思います。

ノーマルな愛情生活に、到底満足し切れな

い所まで来た或る夜、ピンク色の下着に匂うばかりの豊満な肉体を包み、私の傍で、寝ていた彼女は、突然頭を起し、私の顔を覗き込む様にして、

「ねえ、あんた、このお家素敵に思わない」  
目を輝やかして言うのです。期待外れな問いに、げんな顔で天井を見ていた私は、  
「うん、そう、素敵さ。しかし、一体それがどうしたというのさ？」  
と優しく問います。

「ううん、別にどうって事ないけど、フフ」  
「おかしいね、君、笑ったりなどして」

天井から目をはなした私は、睨む真似をして、彼女を見上げました。彼女は急に、真顔になり、私の右手をぐっと握り締め、  
「私ね、こんな素敵なお家で、うんと素晴らしい事したいと思うの。だって、このお家、静かだし、誰にも遠慮や気兼ねはいらないんですもの、折角こんなお家に住んで、おとなしく静かにしているなんて、意味ないわ。もっとうんと素晴らしい事しなきゃ、ほんとに惜しいわ。どう、あんた、どう思ってる？」

彼女の眸に一瞬激情の光が掠めました。私はギクツとして、すかさず  
「うん、そうさ、だって君、毎日素晴らしい事



してるじゃないの、此の上一体どんな事しようという気なの？」

私はいとも、とぼけ乍ら、内心もしやと、或る種の期待をもって、躍る胸を押えつつ、努めて平気を装いました。私の顔を、燃える様な眼差しで瞬きもせず、視詰めておりましたが、わざと、眼を壁の一点にそらせ、急に含み笑いで、

「私の思っている事、どんな事だか知ってるの？ さあ、当てて御覧よ！」

いたずら悪戯らっぽく言うのです。

「さあね、一体どんな事だろうね」

思案に余る風をしていると、彼女は片方の手で、私の頭を抱え、耳に口を当て、

「きつと、あなたが喜ぶ事よ、きつと喜ぶに違いないと思うわ」

暫らく口を噤んでいたが、急に私がはつとする程、乱暴に、私の顔を両手で抱え込みます。

「わたし、あんたが可愛い。可愛いくて仕方がないの。だから無茶苦茶にしたい、あんたを無茶苦茶に苛めたいのよ。もう嫌だと言う迄苛め抜きたいのよ。どう？ きらい？」

少し上ずった声で、堰を切った様に、言い続けるのです。シュミーズだけの、厚い豊かな

な胸は、大きく波打っています。私は柔かな双丘の谷間に、顔を埋め、蒸せ返える様な甘美な体臭に包まれ乍ら、妖しい情炎の叫びを聞きつつ、嬉しさで五体は打震う様です。

「私の言った事、どんな事だか分って？」

「うん分るよ！」

強く言った心算でしたが、声はかすれた様です。

「僕も君からうんと苛められたいんだ。うんと苛めておくれ。君がどんな事をしても構わない。僕は君の言う通りになるよ。殺されたって、いいんだよ」

私の声は興奮で、もうすっかり上ずっています。

「まさか、可愛いあんたを、殺しちゃしないわ。だけど、よく言って呉れたこと。嫌と言う程苛めてやる。弱音をはいちゃ駄目よ」

うっとり彼女を見上げます。其の顔は妖しい迄美しく輝いています。両手で私の両頬を挟みます。

「ホホ、可愛い坊や、さあ今夜はこれで、許してあげましょうね。その代り明日から、うんと可愛がってあげるわよ」

優しく睨んで、燃える様な熱い唇で、私の口を覆いました。私は狂おしく夢中で、豊満

な背に、両手を伸ばしました。

翌日出社してからも、前夜の情炎の余烬が消えず、私の耳に囁やいた。

「無茶苦茶に苛めたいのよ」

あの甘味な声。あの燃える様に熱い、香氣に匂う強大な肉体。私は息もたえだえに、苦しめられるのだと思うと、物狂おしい程の興奮を覚えます。思わずはっとして、誰も私を見てやしないかと、周囲をきよろきよろ見廻わすのです。大分前から、マゾヒストとして熾烈な願望が、胸に疼いていましたが、とてもそんな事を、彼女に告白出来るものではなく、若し告白してどんな軽蔑を受けるかも知れない。折角幸せな結婚生活に、最も不幸な事態が訪れるかも知れない。到底出来ないとすっかり諦めていましたのに、単なる杞憂に過ぎないと分って、私はどんなに嬉しかった事でしょう。彼女はやはり、サディスティンだったのだろうか——と途々こんな事を考えつつ、妖しい期待に胸を躍らせて、家路を急ぎました。

其の夜はいつもより早く、ベッドに就きました。私達の寝室は、入口から廊下をカギ型に曲った所にある十畳の室です。サンルームの境だけが窓で、窓にはピンク色の地に、淡



いグリーンの縞模様のカーテンが下りています。ダブル・ベッドは、カーテンの窓辺にあります。三方の壁を隔てて、トイレット、書斎、台所に囲まれていますので、少々大きな声でも玄関迄には届きません。

彼女はベッドから降り、入口のドアに行き、錠を下しました。いつも錠は掛けた事はありませんのに、今夜に限ってなぜだろう。私は一寸ためしてみたくまりました。

「錠など掛けなくても大丈夫だよ。誰も這入って来る事もないんだから……」

「でも、掛けておく方がよいわ、万一つて事もあるから。あんたが、逃げ出さない為にね」

やはりそうだったのか、私は妖しく戦おのきました。彼女はドアから引返すなり、着ていたガウンを脱ぎ捨て、ブラジャー、パンティだけになりました。張ち切れんばかりの立派な身体を、夜光に輝やかせ乍ら、突立っていましたが、やがて、さっと身を翻えすと両膝を折り、しゃがむ様な恰好で、私のお腹の上に、跨がるなり、自分の両足で、私の両手と胸を、いっしょに動けぬ様に挟み込んでしまします。私の胸から下部にかけて、密着した彼女の巨大な太腿の、生暖かい感触が、パ

ジャマを通して、滲しみ込む様に伝って来るのです。

お腹の上にどっかり腰を据え、直立した、見上げるばかりの素晴らしい巨大な上半身。

「もういくらじたばたしたって駄目。これから、うんと苛めたげるから」

嬌然えんと私を見降しつつ、素早くブラジャーを取り外しました。輝やかんばかりの見事な双丘は、大きくゆれつつ私の面上に近づいたかと思うと、目も、鼻も、口も、顔中一面、豊満な乳房に埋もれてしまったのです。

彼女の強大な肉体の圧力は、緊縛以上の効果を發揮して、完全に自由を拘束します。私の全身は、巨大な肉体に蹂躪され、重圧下にあえぐのです。唯両足だけが、彼女の巨大なヒップの間から、ニョキッと出ているに過ぎません。私は息詰まる様な、乳房の圧迫から逃れ様としますが、彼女の両肘は既に私の頭を固定していますので、動きがとれません。それでも、色々と空間を探って、懸命に呼吸を続けます。呼吸は益々切迫し、重圧と息苦しさに、全身はカァーとなり、鼻や口から熱い息を、ヒイヒイ吐きつつ、苦悶に絶叫した末、やっと頭から上体をはなします。

「何よ、弱虫！ これ位に悲鳴をあげたりし

て、苛めるのは、まだまだこれからよ」

異様な光を帯びた目で、睨んだかと思うと両手で私の首を、ギュッと、締め掛かります。キラキラ光る、彼女の目を、うっとりとして見上げ乍ら、痛みと苦しみと身悶えます。更に手に力が入り、愈々苦悶にあえぎつつ、頭を左右に振り、かすかな抵抗を試みますが、力を弛めません。段々苦悶の色が深まる頃、彼女はこれでもかと言わんばかりに、最後の力をぐっと手に込めました。瞬間、目の前がカッと真赤になり、痺れる様な感覚が絶頂となって、意識が消えるかと思われた頃、やっと手を弛めました。

「どう、苦しかった？ もう少しね、天国行きは……」

興奮に堪えぬかの様に豊満な胸は波打ちます。

「アア、愉快なこと。若し言う事を聞かない時は、こうして苛めてやろうかしら、これから何んでも私の言う事聞く？ どう？」

返事に依っては、又締め兼ねない様に、手は首に廻わした儘です。

「う、うん、何んでも聞くよ」

やっと全身は彼女の重圧から、解放されました。感覚は痺れた様です。



「さあ、着ているものをお脱ぎ！」

私はパジャマを脱ぎ、シャツとパンツだけの姿になって、ベッドから降されました。彼女は戸棚の抽出しから細い皮紐を取り出し、立っている私の両手を、前で縛り、そして両足首にも巻きつけるのです。一寸でも小突かれたらヨロヨロと倒れそうな、不安定な状態の一本足です。彼女は股を開いて、私の前に仁王立ちになりました。

「さあ、私の股を潜るのよ。一分間の間に、倒れたりしても許さない事よ」

「ア、何がなんでも君、そ、そりゃ無理だよ。それだけは……」

私は足首の緊縛を、無念そうに見る。

「私の命令よ。さっき私に言った事、もう忘れたの」

「……」

「さあ、早く！」

仕方なく、決心して、ピョンと跳る。いくら小男の私でも、直立の俛跳では潜れない。腰を一寸屈めて、ピョンとやる。今度は彼女の太い両腿に、首を突込んで、又ピョンと跳る。両肩が腿に突き当たり、ヨロヨロとして、彼女の足下にとっと倒れる。

「何よ！其の態は。そんな事位出来ないの。」

さあ、お立ち！立って、もう一度おやり」

起とうと焦るのだが、思う様に立てない。「何よ！立てるくせに、わざと立たないんでしょ？早くしないと、承知しないわよ」

手と足で体を支えつつ、お臀を浮かせて、懸命に立とうと努めます。やにわに私は、はっしとばかりにお臀を蹴られ、もんどり打って、床の上に、頭を打って倒れました。彼女は片足をあげて、ぐっと私の頭を、ぎゅっと押えつけるのです。

「何うか許してくれ。もう一度、君の言う通りにするから」

私は悲痛な声で、哀願し乍ら、必死になって、もう一度先程の要領で、手と足で体を支え、やっと起き上がりました。今度こそはと、ピョンピョン跳ると、足がじゅうたんにきしんで、トットトと前にのめる様に倒れました。冷然と見下していた彼女の美しい顔に、残忍な陰影がさっと掠めた様です。床に落ちている、皮紐を拾い上げるや、私の上半身を荒々しく引き起し、顔と首を両腿に挟み込んで、私の体を処嫌わず、打ち据えるのです。狂わしい答打は続きます。私はヒイヒイ呻きつつ甘美な苦痛に、全身をのた打ち続けるのです。苛められ、虐げられる者のみの、味う

歓喜の絶頂。絶対の法悦。やがて答打を止めた彼女は、軽々と私を抱き上げ、半ばグッタリとした私を、ベッドに寝かせました。そして私の顔の上に、両足を開いて跨がったと思つた瞬間、巨大な腿と臀部が、私の面上にクローズアップしたかと思うと、私の顔は彼女の股間で、ぴったりと塞がれました。

苛責は終り、ぐったりした私の頭を、軽く撫ぜます。

「可愛い私の坊や、苦しかった？随分痛かったでしょう。御免なさいね。でも私、あなたが可愛いので、可愛いから苛めたくくなるのよ。わたしって、変な女ね」

「いや、僕も君が大好きなんだよ。好きな君から苛められるなんて、僕の最大の喜悦なんだよ。これからも苛めておくれね」

「苛めたげるわ。ウンとね。ホホホ」

今後も、彼女の愛の苛責は、続くであります。しかしそれは、飽くまで愛情に根ざしたものととして、明日の私達の仕事に、差し障りのない為にも、私は彼女の愛情を信じつつ、喜んで苛責を受ける心算です。

サド女性を求めて止まぬ、私の願望は、肉体の内奥に、虹の様に、七色の光彩を描いては、儚なくも消え去るのです。



## &lt;告白&gt;

「或る浣腸マニヤ  
の誕生」

茂 野 礼



私は今年三十八才になる会社員であるが、私が熱烈な浣腸マニヤとなった動機を告白しよう。

五年前の事であったが、突然腹痛を起したので医師の診察を受けた処急性虫垂炎（俗に盲腸の名で知られている）と診断されたので直ちに入院した。

手術室では看護婦が器具の消毒など、盲腸手術の準備に忙しく立働いている。

その間、看護婦が静養室に精神安定剤を注

射されて寝ている私の血液型を調べたり、下腹部の毛を必要な部分だけ安全カミソリでそったり、手術着に着換えさせたりしている。

ややあって、液体の入った二本のビンとゴム管などの付いた用具を乗せた大きな盆を持って室内に入ってきた。

ベッドに近付くと「浣腸しますから左側を向いて下さい」と命令的に言い、私の足を曲げさせ着物の裾を大きくまくり上げ、有無を言わず臀部を露出させた。

尻の下に、ひんやりとしたゴムのシートを敷かれた。

「口を開いて腹の力を抜いて下さい」と言われたかと思うと、肛門になま暖かい感触が走って、二本の指で押し展げられ、嘴管が挿入された。思わず体に力が入ったが、「固くなると入り難いですから楽にしていして下さい」と言い乍ら尚も嘴管を深く挿入して来る。

やがてグーグーッと音を立て乍ら浣腸液が二連ゴム球を交互に握られる度に腸内に圧入される。

「ああー、ふうー」

「苦しいですか」

「まだ仲々ですか」

「そうですよ、盲腸手術は、よく洗わなければなりませんからねえ」

グーグーッと、なおも圧入が続き、大腸は一杯になり、やがて小腸にかけて流入している液体で、胃が突き上げられる様な感じがして来る。

肛門部から腸内深く流入する浣腸液の刺激に、下腹部のあたりに急に動き出す気配を感じたので、胡魔化すためあわてて腹部をなでて、はずかしい事にならずに済んだ。時々肛門が収縮を起すのを止めることが出来ない。



この動きは二連球を握る看護婦にもよく見える筈である。太った大柄の看護婦は、私の背中側にいるため顔を見る事が出来ないが、人間なら、いや女性なら、この場合に心を全く動かされずに済むものだろうか。私には看護婦の体を流れている血液の脈動は力強さを増し、従って息は熱っぽさを増して来ている様に感じられた。

「ううーん、まだ入れるんですか」と肩で息をするようにして聞いた。

「もう少しですよ、すぐ終わりますよ、苦しいんですか、我慢出来ないんですか」と目をそらせる様なそぶりで答える。

浣腸の終るまでが一時間もかかったのではないかと思ったが、やっと終わった。

器具を片付けシートを持つと

「五分位そのままにしておいて下さい。それから便所に行って下さい」と言い残すと出て行った。

看護婦が出て行くと、たちまち便意の刺激が突き上げる様に全身を走り、これに耐えようと全身が痙攣をする様だ。

今にも漏れそうになり、腰をもむ様にゆする。思わず粗相しそうになり、息を弾ませ、お尻を手でおさえながらトイレへ走る。時計

を見れば、たった一分も経っていない。

便所へ入るなり尻をまくると、もう排便しても良いとの安心感から、しばらくは、我慢が出来そうな気がしたが、次に襲ってくる刺激に抗し切れず、どっと堰を切った様に排泄が始まる。安堵してよい状態になったにもかかわらず、全身の緊張感が尚も続き、時々身ぶるいさえする。

腸内深く入った液は簡単には全部排泄しきれず、身をよじる様にもむ。肛門のまわりでは粘液が泡状になりしずくとなっている。しばらくすると又おじゅ、おじゅと残っていた液が新たに排泄されて来て、更に泡状の花びらが広がって行く。

突然シューと暖かいものが肛門を走る。痔からの出血だ。指で触ると膨隆した疣が浣腸液に洗われて粘液を失い、摩擦抵抗を増した状態で厚い肉の花びらを肛門のまわりに隙間なく並んで咲かせている。便器が真赤になりわずかに流れる水に沿って流出口の方へ血の流れを作っている。静かに押込んでやると、しばらくして出血も止まる。

緊張が緩むと虚脱感が全身を包む。急に全身の筋肉が細く固くなった様な感じがし、個室へ戻るのも大儀に感ずる。

手術にかかる前に看護婦からもう一度御手洗へ行く様に指示され、行くと未だ残っていた液が排泄される。水を全く飲んでいないのに小便も可成り出る。これは浣腸液が腸から吸収されたものであろう。肛門の周囲は丁度柘榴の熟れた様にむくれ上っている。いつもする様にオロナイン軟膏を塗って押し込む。

普段ウィスキー等のアルコール分の強い酒を飲んでいけるせいか脊髄麻酔がよく利かず、腹壁切開から腸管引出し、虫垂摘出位までの間は痛みに呻き声と油汗を流して耐える。

人から盲腸位は病氣の中ではないよ、眠っている内に済むさ、などと聞いていたのとは大違いである。

医師からハアハアと小刻みに息をなさいと命令されてハアハアと肩で息をする。

腸が引き出されたのであろうか胃を突き上げられた様な感じがして嘔吐する。嘔吐と言っても、その様な筋肉の動きだけで、内容物が無いので小間物の店開きまでは行かない。然し何も出ない嘔吐をするのに全身から口へ力が集中して来るのは、普通の嘔吐の数倍も苦しい。

「ハアハアゼーゼー」と全身から息を吐く。大腿部のリンゲル注射と、麻酔の補助の精



神安定剤の補給注射か、ももの部分からの痛みも感ずる。

ガクンと体がゆれて全身から急に力が抜ける。麻酔が利いてきたのである。唸り声も無くなる。

焼鑊で切断部を焼いているのであろう。ジリジリと言う音と、するめを焼いた様な匂いを感じ乍ら縫合も終る。

「あなたの盲腸は、これですよ」

ピンセットの先につつまれた美しい桃色の細長いものを見せられたが、視覚神経も麻酔の影響を受けているのであろう、視線がしっかりと定まらないが「ウワー」という様な声を出して、「先生、どうも有難うございました」とたどたどしいながら答えた様だ。

脊椎麻酔も利きさえすれば、殆んど痛みとして感ずる程の事は無いと言う事が、この時始めて分った。病室へ運ばれる。両足の神経が全くしびれている。湯タンポを入れて両足をマッサージしてもらっても暖かさの感覚が全くない。

もうろうとした感覚にも、すぐそれと知れる緊迫した声が隣室から聞えてくる。

「頭の毛が見えて来ましたよ、頑張って」

「アッ、ヒィーッ、ウウン、ググッ、グッ」

唸っているのか叫んでいるのか、泣いているのか、鼻汁が出ているのか、圧倒されそうな悲痛な声だ。

「アアッ、焼けそう、痛いッ、いや!! 洩れる」

「もう一頑張りですよ。いいんですよ。もう股へはさみましたよ。さあ、大きな息をしてハイ吸って、ハイ吐き出して、ダメ! お尻を持ち上げないで、それ、いーちー、にーいよ。それ硬い大便だと思って、力んで下さいよ。ハイ」

「ヒィーッ、痛いよッ、苦しいッ」

「足をここへ入れて、その輪をつかんで、それ力んで」(これは私が回復して歩ける様になって、分娩室の中が通りすがりに見えた時に鑑状の足具に引き手の付いた様な革製のふんばり具が壁際に二つぶら下っていた)

「グッッ、ゲッ、グッー、ああ」

「いいんですよ、だからさっき浣腸を充分して置けば、今苦しまないで、きれいなお産が出来たんですよ。はずかしがらずに浣腸をした方がよかったですよ。普通は、病院へ来た時と、いきみ間隔がまだあった、さっき頃と二回以上浣腸し、それから導尿も行なった方がよいんですよ。でも、しっかりするんです

よ、お母さんになるんですよ、もうひとふんばり、それッ」

「ウウン、ビリビリ」

鼻汁のたまった鼻から力強い息が通るので異様な音と呻きが続く。

私は出産には前から興味を持っていた。

最近紹介された出産場面のある映画もいくつかあるが、実際の出産を直接撮影したものは殆んどなく、出演者による演出や、演技、或は無痛分娩の指導風景や、麻酔のかけられた帝王切開場面が多く、実際に陣痛にさいなまれているものは非常に少い。時に排臨場面があっても映倫の都合か、局部的に映写される程度で、或る映画のその場面は全部暗黒となっていた例がある。

分娩にも世界各国で種々なる方法が行なわれているが、エスキモーの氷上における膝位の分娩、南アメリカのある部族の樹の枝による立位の分娩などが紹介されているが、これとても現今では普通分娩法が行なわれる事となっておりであろうし、大部分は室内で普通の分娩が行なわれているのであろう。

いずれにしても、人間も動物である運命に変わり無く、産みの苦しみと言われる陣痛を経て、身分の貴賤、立場の如何を問わず



べての人間は誕生して来ているのである。

突然「ギギッ」と言う悲鳴が上る。

「ハイ、頭が覗いていますよ！ 頑張って、それ！」

「痛い、ギョッ、痛いよ、ウウン、アア、ハ、ウウンッ、痛いよ。ハッ、ハッ、ウ、ン、痛いッ、ググッ、ギッ、焼けそうに痛いよ、大丈夫なの、ギョッ」

「頭が出ていますよ！ 腰を上げないで、腰を上げると時間がかかりますよ。そう腰を下げて、そうそう、大便をして、それ、いkindで、大便をするんですよ」

「ギョッ、ググーン、痛いよ。痛い。うう痛たたッ、ギギッ、ゲゲッ、ググッ」

この時、がたがたとベッドがふるえる様な振動が伝わって来る。

「ハイッ、頭が出て来ますよ。力を抜いて、抜きなさい！！ 息を吐き出して肩でハアハアと小刻みに息をして、ハイッ、力を抜いて、かんじゃいけない！！もうすぐですよ。サア、ハアハアをして……」

「ハア、ハア、グッ、ヒィ、ウウン、ハアハア、ヒィ、ギギッ」

びちびち、じぶじぶ……と鈍い音がする。

「頭が通って肩が出ていますよ。力を抜くんですよ。ハアハアですよ。ハイッ」

「ハアハアハッハッヒィ、ハッハッアア、ハアハアアアングッ、エーン、ハアハア、アアアッ、ハッハッ、アレッ」

「生まれましたよ」

急に静かになる。さっきまでの騒ぎが嘘の様に静かになる。器具の触れ合う音がする。

後産の始末であろう。

麻酔のかかっている私には、この辺から記憶が無くなって来た。

麻酔が切れて神経が通う時の痛みにびくりさせられ、思わず悲鳴を上げる。

医師の手でガス漏れの有無を調べ、通っているのを回復の順調である事を告げられた。ガスが通っていないければ腸を刺激する注射で運動させる予定であったと言う。

看護婦は「先生、浣腸はどうします」と聞いた。

私は浣腸と聞くと、手術前の不安な思いでされた浣腸の事を思い出した。

しかし、今は縫合部に痛みがあるので動く事は容易ではないが、手術は無事に終って回復期にあり、気分は明るいので、あの時の記憶が生々しく蘇えってきた。

それは何となく、もう一度味ってみたいと言う気持ちの濃いものであった。

医師は

「いいだろう」と素気なく答える。

「そうですか」と頷いた看護婦の顔には、やらない事になった事に失望した様な気配が見えた。人がよく、女は取り澄ました顔をしているが、あれで加虐性の強いものなんだ、特に中年頃からは相当露骨になるものなんだと話をして聞いたのを、ふっと思ひ出す。

順調な回復から、数日ならずして退院する事が出来た。

退院する時に隣りの部屋の婦人の顔を見掛けたが、お嬢さんタイプのぼちゃぼちゃとした人であった。麻酔の利いている時に耳で聞いた、あの最も赤裸々な女性としての姿を思い浮かべて変な気持であった。

私は、この事以来、膨満した腸に尚も薬液を圧入する高圧浣腸の興味に取り憑かれると共に、はち切れそうな腹部から胎児が誕生する出産に、たまらない興味を感じており、浣腸マニヤとしての道を辿り始めたのである。

水道浣腸などについては、又機会を見て紹介する事としよう。



# 四馬孝妖美画集

## 女体切腹図絵

略号 (しせ)

### △時代物女体切腹図▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、若き姫君の凄艶切腹美態
- 二、介錯を受ける覚悟の美しき娘
- 三、落城の哀史、切腹する美女
- 四、夫の眼前で切腹する若妻
- 五、愛人の手で介錯を受ける娘

## 浣腸美媚態

略号 (のゆ)

### △女体浣腸の極美图▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸場面
- 二、女事務員の浣腸を覗きみる
- 三、女学生に対する浣腸の私刑

## 浣腸責め図譜

略号 (しき)

### △強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸する
- 二、いちじく浣腸の恐怖に悶える
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女の痴態
- 四、硝子シリンドラーが乱舞する
- 五、イルリガートルが責道具

## 羞恥責め絵巻

略号 (しい)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、灌水による人工妊婦腹製造
- 二、浴槽の全裸の美女を責める
- 三、三角木馬で美女を責める
- 四、全裸のグラマー柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

## 浣腸責め図譜

略号 (しえ)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、美貌の踊子へのイルリ浣腸
- 二、ヒマシ油による強制下剤
- 三、进出する緑の浣腸液
- 四、女体浣腸用責衣を応用する
- 五、両足吊りイルリにて浣腸

## 女性切腹風俗

略号 (ゆい)

### △時代風俗女体切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、座敷牢の美女切腹を賜わる
- 二、介錯にて果てる切腹の美女
- 三、塗駕籠の中の姫君切腹す
- 四、男装の美女小姓姿の切腹
- 五、美貌の腰元裸身の切腹

## 倒錯美緊縛画

略号 (えと)

### △美女のいけにえ▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女体解剖台上に晒らす裸身
- 二、嫉妬に狂う夫と美貌の妻
- 三、美女の鼻料理に興ずる男
- 四、女体を真二つにする股間縛
- 五、山小屋の一夜、処女の受難

## 「花と蛇」画集

略号 (えに)

### △傑作S小説の絵画化▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、京子に珍芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人へのあくなき汚辱
- 三、擦り責めに泣きぬく美津子
- 四、片足挙げ縛りに悶える桂子
- 五、排泄を強要される京子の窮地

## 女体吊責画集

略号 (えほ)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、弓吊り女体にローソク責め
- 二、エビ縛りのままの宙吊り
- 三、股間縛りの吊責め
- 四、美女の舌の先縛り
- 五、股間縛りにて鼻孔吊り

## 浣腸排泄画集

略号 (えい)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸台で美女の浣腸

- 二、浣腸のあとのお楽しみ
- 三、百CCのグリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで無理に飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女の表情

## 美貌汚辱鼻責

略号 (えは)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女の美しい鼻をいたぶる
- 二、一本一本女の鼻毛を抜く
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた美女の顔
- 五、顔にラーメンを食べさせる

## 美女の責痴態

略号 (しお)

### △責められる美女波津子▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸責め今展開す
- 二、柱抱きアグラ縛りの責め
- 三、庭園のハダカ責めシーン
- 四、全裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チエン・ブロックの女吊り

## 美少女羞恥責

略号 (しる)

### △可憐な美少女加奈子▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、蠟燭の火責めにある美少女
- 二、ヨチヨチ歩き的美少女責め
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り責め
- 四、股間縛りに絶叫する美少女
- 五、鑑賞用美少女の緊縛美体



## 〔代理部新版分譲品一覽〕

光沢印画紙極鮮明焼付写真

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(四〇〇円)

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(あけ)

責め衣縛り

梨花悠紀子 略号(いの)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねむ)

椅子またぎの責め

玉田美佐子 略号(ねへ)

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

全裸アグラ縛り

長野 良子 略号(てい)

全裸屈伸縛り

長野 良子 略号(てへ)

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まとも)

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

股間縛り法悦境

関谷富佐子 略号(やり)

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

月経帯のまま縛り

絹川 文代 略号(ぬこ)

縄目に悶える夫人

遠藤百合子 略号(ゆす)

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほく)

膨満正面縛り

関谷富佐子 略号(ほむ)

マニヤ全裸緊縛フット

長野 良子 略号(へな)

強烈エビ縛り

栗本 ミチ 略号(いな)

乳房責の苦悶

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もい)

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(もろ)

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(わあ)

双胸の強調縛り

大手札四枚一組 略号(四〇〇円)

動感海老責地獄

関谷富佐子 略号(せら)

色禪の開股縛り

長野 良子 略号(そう)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

乳房しぼり

大塚 啓子 略号(はす)

鼻責めと緊縛

長野 良子 略号(うは)

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

椅子責めの果て

大塚 啓子 略号(うい)

檻に入れられた女

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(もの)

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)

鼻責め万華鏡

山原 清子 略号(はね)

碧玉裸身緊縛

大手札八枚一組 略号(一〇〇〇円)

くすぐり責め地獄

山原・鈴木 略号(はた)

灼熱の蠟涙責め

大塚 啓子 略号(きす)

豊満な乳房を責める

大塚・東浦 略号(きせ)

女奴隷を飼育する

大塚 啓子 略号(きそ)

凌辱されるマソ女

大塚・東浦 略号(きと)

鼻責め悦楽

大塚 啓子 略号(きな)

全裸強烈羞恥縛り

大塚・東浦 略号(きな)

猿ぐつわにあえぐ裸女

大塚 啓子 略号(な)

全裸の緊縛姿態開陳

大塚 啓子 略号(なむ)



## 〔女相撲女斗美と禪美〕

光沢印画紙極鮮明焼付

裸女レスリング

大手札四十枚一組 三五〇〇円

大塚・山原 略号(れす)

第一回湖畔女相撲第一組

大手札二十枚一組 二五〇〇円

大塚・東浦 略号(すや)

第一回湖畔女相撲第二組

大手札二十枚一組 二五〇〇円

大塚・東浦 略号(すや)

第一回湖畔女相撲第三組

大手札二十枚一組 二五〇〇円

大塚・東浦 略号(すよ)

裸女砂浜での格闘

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(すえ)

叢で止めをさす

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(すう)

松林の中での裸女死闘

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(すき)

マワシを締めあう

大手札十五枚一組 二〇〇〇円

大塚・東浦・木村 略号(うみ)

女相撲好取組三番勝負

大手札十枚一組 一五〇〇円

大塚・東浦・木村 略号(うむ)

迫力実戦女相撲

大手札十枚一組 一五〇〇円

大塚・東浦・木村 略号(うめ)

相撲マワシ姿の三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円

大塚・東浦・木村 略号(うや)

女相撲を取組む三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦・木村 略号(うゆ)

室内女相撲熱戦譜第一組

大手札六枚一組 一〇〇〇円

東浦・大塚 略号(すも)

室内女相撲熱戦譜第二組

大手札六枚一組 一〇〇〇円

東浦・大塚 略号(すみ)

室内女相撲熱戦譜第三組

大手札六枚一組 一〇〇〇円

東浦・大塚 略号(すわ)

女斗美争闘シーン八態

大手札八枚一組 一二〇〇円

大塚・東浦 略号(ろか)

女相撲攻防取組場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(ろぬ)

女相撲迫力実戦場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(ろお)

女相撲投業応酬場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(ろり)

湖畔女相撲連続スナップ

大手札十枚一組 一五〇〇円

大塚・東浦 略号(すな)

湖畔女相撲連続スナップ

大手札十枚一組 一五〇〇円

大塚・東浦 略号(すふ)

湖畔迫力実戦女相撲 (1)

大手札六枚一組 一〇〇〇円

東浦・大塚 略号(むく)

女相撲組打ち

大手札八枚一組 八〇〇円

木村・大塚 略号(すか)

女相撲投げ業

相撲マワシ着用

大手札八枚一組 八〇〇円

大塚・木村 略号(すね)

禪裸女の斗争

白晒六尺禪着用

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚・木村 略号(めん)

禪裸女の寝業

白晒六尺禪着用

大手札五枚一組 五〇〇円

木村・大塚 略号(めき)

禪裸女相搏つ

白晒六尺禪着用

大手札八枚一組 八〇〇円

大塚・木村 略号(えく)

女相撲の四十八手 (1)

大手札六枚一組 八〇〇円

大村・大塚 略号(すは)

女相撲の四十八手 (2)

大手札六枚一組 八〇〇円

大塚・木村 略号(すむ)

一斗美立業の応酬

大手札六枚一組 八〇〇円

大塚・木村 略号(すち)

立業の攻め合い場面

大手札六枚一組 八〇〇円

大塚・木村 略号(すた)

寝業の女レスリング

大手札六枚一組 八〇〇円

大塚・木村 略号(すほ)

女斗美攻撃連続場面

大手札九枚一組 一〇〇〇円

大塚・木村 略号(すく)

禪美に驚くらう

大手札六枚一組 八〇〇円

玉田美佐子 略号(こん)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦・大塚 略号(ろみ)

白禪 奔放姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円

刑部 典子 略号(ろて)

白晒六尺フンドシ着用

大手札五枚一組 五〇〇円

刑部 典子 略号(けす)

黒六尺フンドシ着用

大手札五枚一組 五〇〇円

刑部 典子 略号(けせ)

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円

栗本 ミチ 略号(ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円

栗本 ミチ 略号(ふな)

フンドシの変わった姿

大手札三枚一組 三〇〇円

栗本 ミチ 略号(ふに)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚・玉田 略号(のか)



## 実戦迫力女相撲第一組

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
大塚・東浦 略号(すに)

## 実戦迫力女相撲第二組

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
大塚・東浦 略号(すぬ)

## 実戦迫力女相撲第三組

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
大塚・東浦 略号(すの)

## 実戦迫力女相撲第四組

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
大塚・東浦 略号(すつ)

## 相撲輝着用女艶姿

大手札十二枚一組 一〇〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬわ)

## 六尺輝着用女艶姿

大手札七枚一組 七〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬお)

## 黒輝奔放露出姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
刑部 典子 略号(ろち)

## 女四つ相撲連続写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(めれ)

## 女相撲投げ連続写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(めよ)

## 投げ業極め業女相撲

大手札十二枚一組 一二〇〇円  
山原・大塚 略号(めわ)

## 黒フン白フン女斗美立業

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
大塚・山原 略号(めた)

## 黒フン白フン女斗美寝業

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
大塚・山原 略号(めな)

## 黒フン白フン女斗美固め業

大手札十二枚一組 一二〇〇円  
山原・大塚 略号(めそ)

## 髪のかみ合い女斗場面

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(めか)

## 押さえ込み合い女斗場面

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(めね)

## 女レスのング首絞め業

大手札十二枚一組 一二〇〇円  
山原・大塚 略号(めつ)

## 女レスリング押さえ込み

大手札十二枚一組 一二〇〇円  
山原・大塚 略号(めお)

## 白晒六尺輝

大手札四枚一組 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(しは)

## 白晒六尺輝

大手札四枚一組 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(しろ)

## 黒輝の女

大手札三枚一組 三〇〇円  
遠藤百合子 略号(くま)

## 黒輝の女

大手札三枚一組 三〇〇円  
遠藤百合子 略号(くう)

## 相撲輝を締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(すい)

## 変形六尺輝

大手札三枚一組 三〇〇円  
細川アヤ子 略号(ふい)

## 六尺輝開股

大手札三枚一組 三〇〇円  
細川アヤ子 略号(ふは)

## 六尺フンドシ

大手札五枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(ろい)

## 六尺輝の女性像

大手札四枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号(くろ)

## 相撲輝着用

大手札十二枚一組 一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号(すま)

## 股に喰い込む黒フンドシ

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(とし)

## 股を開いた黒フンドシ

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(とひ)

## 白フンドシ

大手札四枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ふん)

## 黒フンドシ

大手札四枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(くふ)

## 黒ふんどし入墨姿

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(くの)

## 黒ふん媚態の魅力

大手札五枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号(くな)

## 黒輝背面模様

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(くこ)

## 黒輝刺青女体美

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号(ひね)

## 六尺輝をするまで

大手札二十枚一組 二〇〇〇円  
山原 清子 略号(ひは)

## 晒六尺ふんどし

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろと)

## 白六尺輝一本の姿

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろに)

## 黒輝を誇る

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(いか)

## 六尺輝のはじらい

大手札五枚一組 六〇〇円  
横屋 峯子 略号(ふけ)

## 双臂に喰い込む輝

大手札五枚一組 六〇〇円  
横屋 峯子 略号(ふく)

## 前袋をさらす羞恥

大手札五枚一組 六〇〇円  
横屋 峯子 略号(ふか)

## 六尺輝の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円  
長野 良子 略号(てに)



## 〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬへ)

真紅腰巻着着縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (つま)

柱縛り全裸晒し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (つま)

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さは)

柱抱擁全身厳重縛り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さけ)

足挙げ全裸正面縛り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さこ)

柱縛り臀部晒し

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さき)

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬと)

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 略号 (八〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (つふ)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (さふ)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (いら)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (いさ)

凄艶乳房責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
四方 清美 略号 (きよ)

哀婉美貌女囚独居

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
柳 初子 略号 (はつ)

両手吊りの美女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
絹川 文代 略号 (けい)

一本棒宙縛り晒し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (らま)

猿轡豊満をくびる

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (らむ)

全裸の立柱しばり

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (らめ)

縄股くぐり綱渡り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
木村 洋子 略号 (らち)

首縄つなぎ引返し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大村 洋子 略号 (らぬ)

股間縛り引返し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
木村 洋子 略号 (らる)

雁字搦目吊り上げ

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (らお)

全裸椅子開股責め

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (けな)

全裸後手強烈縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (けの)

強烈縛り悶悦姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
刑部 典子 略号 (けそ)

黒褌着用猿ぐつわ縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
刑部 典子 略号 (けた)

強烈海老縛りの苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (えふ)

乳枷貞操帯着用

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (もや)

落ちた下着と後手吊り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (ろよ)

浴槽内荒縄強烈縛り折檻

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
山原 清子 略号 (ろる)

二女をいじめる啓子

大手札十枚一組 略号 (一二〇〇円)  
東浦、木村、大塚 略号 (きい)

股裂きと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚、東浦、木村 略号 (きう)

膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (なに)

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚、東浦、木村 略号 (きお)

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚、東浦、木村 略号 (きさ)



## 〔最新緊縛資料写真一覽〕

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円  
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 三〇〇円  
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 六〇〇円  
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 三〇〇円  
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
村井知可子 略号(こり)

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 五〇〇円  
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(おき)

六尺揮縛り

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 一〇〇〇円  
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円  
水本 茂美 略号(えい)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円  
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと櫛ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 六〇〇円  
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 三〇〇円  
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 三〇〇円  
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフォト

大判三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判五枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判五枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判五枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円  
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号(いね)



☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円  
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円  
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円  
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号(かる)

浣腸に興する女

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(けか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(けき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(けく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(けし)

浣腸後オシメ着用

大手札五枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(けこ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 三〇〇円  
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円  
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
山原、東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
山原、東浦 略号(かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
山原、東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円  
山原、東浦 略号(かち)

アィヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円  
山原、東浦 略号(かの)

浣腸に興する清子

大手札四枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 五〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 五〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ると)



## M資料分譲品一覧

## ○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足趾と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円

足趾めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まで) 五〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円





初めてお便りします。小生、十三才の独身です。何年か前の奇クに繃帯や眼帯をしあう御夫婦の手記が載っていました。非常に羨ましく思いました。小生、女性の繃帯姿を見るととてもいとおしくてたまらず、体中ゾクゾクしてしまいます。若く美しい女性が中耳炎でしょうか耳に湿布をして耳帯をしていたり、物もらいで眼帯を当てていたり、湿疹でしょうか顔中真白い薬を塗られ、ガーゼと油紙をあてて、純白の繃帯でグルグ

ル巻きにしている姿などを見た時は、可哀想なような羨ましいような、自分もあんな姿になってみんなからジロジロ見られたい慾望にかられたりします。こんな趣味の方っているのでしょうか？もし、女性の方でいらしたら、あなたのその美しい顔に薬を塗り真白い繃帯で包ませて下さい。そして小生にもお願いします。二人で病気ごっこをしようではありませんか。お便り下さい。お待ちしています

(東京・港区浜松町・沢井実)

夜野探郎さまへ。12月号でその独特なペンネームと文が見あたらず何か淋しく(代りに木戸川氏の懐しい文があり、相変らずのご健筆を知りましたが)やはり自分でも気づかないのに、貴殿の型破りの文に心ひかれていたのに気づきました。それに11月号の「侏儒」確かに読ませて頂きました。こびとの美少女とでぶちんとの取り合せは大変面白く、いつもながらのご文才には感じ入りました。探郎氏曰く式の挿話入りの創作も独得のもので。溢れるばかりの文才に恵まれておられ、小生などのように無識とは反対に、博識でもある貴殿です。どんどん型破りの創

作、エッセイをものされて下さいと祈るのみです。但しサービス過剰的性向も私なりによく判るつもりですが、やはりマンネリは避けられたらもっと素晴らしい(と私如きがつい余計で生意気なことまで書いてしまいました)が、あしからず)もともとS・Mなどというものは非常にとらえにくく、当人でもよく判らないものと思われ、何でも起承転結が判然としていないては駄目だ、などという乱暴な論は好みません。もともと同一誌の中の創作、エッセイ等型にはまりがちです。又泰平的ムードであった奇クに新風をもたらした貴殿の功績は大きいのです。今後とも奇クの誌面に何篇も貴殿の独得な名作を飾って下さい、と思う者は小生のみでは決してないのです。小生は乱歩の一要素である、畸型趣味が好きです。「芋虫」「地獄風景」中の「おそろしきランニング」のシーン等々わざわざ書く迄もないですが、すぐにいくつかあげられます。とりわけ庄巻は「孤島の鬼」で、中でもシャム双生児製造のために秀才児を医学校に入れてその研究に従事させる計画をたてる、などという、遠大なアイデアにはその昔全くうなる他なかった

ものです。それに小生の大好きな「闇にうごめく」その中でも食人の話が出て来ましたが、実に猟奇的な名文と思います。又エンターテインメントですが、ロバート・ブロックなるミステリ作家の「こぶ」などは非常に、そのアイデアには感心致しました。又最近遠藤周作氏の「白い人、黄色い人」を再度読みかえしてみ、氏がカトリシズムとS・Mを結晶させることに成功した珍しい日本人作家だと、今更の如く感心致しました。もしS・M文学というものが今後発展するとすれば、ああしたように思想と結合してこそ、一層素晴らしいのではないかと考えた次第です。小生のような無識の人間がこんなことを書くのはいささか恥しいのですが、S・Mの文献専門誌を以て任ずる奇クにたまには思想(と云っても定義は難しいが)をバックボーンにしたS・M小説が出現してもよいのではと考える者です。と云って小生は決してエンターテインメントとしてのS・M小説(又は読物)を否定するものでは毛頭ないのです。例によってとりとめもなく書く癖から脱却出来ず恥しいのですが、この駄文を以て貴殿へのお礼への一端とさせ



て頂きます。尚12月号では黒田氏の「西洋犯罪奇譚」が大変面白かった私です。それと奮斗士氏「花の女斗美たち」の素直な文と内容は毎号楽しみです。(須渾朔)

○ 十二月号のカメラハント、一宮百合子さん、本当に美しい人ですね。早速彼女の分譲写真を買って、益々彼女が好きになりました。こんな美しい人を私も一生に一度でいいから直接自分の手で縛ってみたいというはかない念願を

抱くとともに、百合子を親しく縛る辻村様が、羨ましくてなりません。今迄本誌のモデル嬢として活躍された中で、梨花悠紀子、五月亜紀子、それにこの一宮百合子をベスト・スリーに推したいと思えます。それに誌上で彼女のスナップがのっているの、一層身近かに親し味が感じ、まるで自分が彼女と一緒にドライブしているような気分になります。彼女の鮮明な映画紙焼付のフォトを手に入れることが出来たら、せめてものうさ

晴しになると思います。誌上にのったものは、もう一つ鮮明さを欠きますので残念です。「花と蛇」「痴人の糧」は益々快調でよろこびにたえません。殊に「痴人の糧」は今月号では頁数も多く工事場での私刑は、全く手に汗を握る思いをしました。これからの進展がきわめてたのしみです。団先生、山本先生の、今後の御健筆を祈ります。(滋賀・村中正)

○ 近刊十二月号、有難く拝見、十

月号で値上げ増頁以来、小説に読物に充実の一途を辿り愉快に存じます。殊に最近には身辺雑記のような記事が少くなり、大いに結構な傾向だと考えます。一時期、そういう傾向の内容になるということも決して悪いことではないのですが、それがいつまでも、だらだらと続いているようだったら困ります。その点速かに転換されたことはよかったですと思います。今月号では、やはり読みごたえのある「花と蛇」「痴人の糧」それに山口広

### 毎月確実に入手されるために

#### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、天星社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎にお申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。○予約金が切れましたときは、封筒の上へ本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。



氏の「帰路のない旅」「うぐいす色のビル」がよかった。こういう力作を載せる限り、薄っぺらな身辺雑記の存在価値がうすれてくるように思う。次にバラエティに富んだ八奇クサロンVがよい。これは毎月のことであるが、この際更に増頁して、豊富な読者の声を誌上に反映させてはどうだろうか。麒麟児久氏の「誘拐魔」はこの人としては、もう一つ消化不良のようない気がする。筆の立つ人らしいから、今後どのように進況されるかたのしみでもあるが。

(三重・忍頂寺生)

○ 長らく御無沙汰いたしました。奇クサロンをかざるにふさわしい数多くの皆様の作品が発表されているのを見て私達も大いにハッスルして居る次第です。しかしながら私達のプレイが何かマンネリになっちゃった様でこのところ皆様に気おくれしてしまってます。トの発表もひかえておりました。今回も止めようかと思いましたが思い切ってお送り致しました。A SAを間違えてしまって見にくい写真になってしまいましたがお許し下さい。今までにゆう子を緊縛するのにすべて最初に両手を上げ

させ乳房を充分にしめ上げ背中であとめてその後、両手を後へまわさせ背中に残ったひもで両手首を交互に縛り、続いて腹にひもをまわして股間縛りに終った、というものはかりでした。フोटでおわかりになる様に今回は初めに両手を後にまわさせ、緊縛しました。この方が感じとしては、良い様に思います。皆様のいかがでしょうか。股間縛りもいつもより相当きつめにしたつもりです。ゆう子は今までより痛いと言っていました。が、乳房を主に緊縛する私にとつて大分もの足りなさも感じます。このままかにもいり吊ろうとしましたが吊り方がうまく行かずに、あまり痛がるので止めてしまいました。長田実氏の革を利用しての緊縛は非常に素晴らしいと思います。私も前から考えていたのですが作り方がうまく行かずにそのままになっちゃいましたので、この機会に長田氏の御意見もうかがって革具で大きいゆう子を責めて見たいと思います。山田育男氏のアイデアも面白く拝見致しました。お便りをいただき度々思います。次回には色々アイデアを変えて妻の緊縛フोटをお送りするつもりで居ります。

(東京・新田英雄)

○ 先日書いた黒淵さん等からのギリシャ神話への傾倒いよいよはげしく、ついに二十冊の本をこえましたが、まだどんどんふえそう。いよいよ上には上があり黒淵氏の偉大さ、底の知れない知識に、ギリシャ神話にふみこめば、ふみこむほど、その深さを知ります。私は私なりの好みで入っているものでそれだけに一字一句おろそかにせず凡て本格派の黒淵氏には富士の麓に立っているようで頭が下る。さて一般につとめ先の女の子(大学を出た)にアプロディーテとヴィーナスは、どう違うか、と十人ばかりに問うてみました。同じ神と答えたのはたった一人。それもまぐれでした。まあ日本人のギリシャ神話(外国文学好きの人々でさえ)の一般の認識のあり方が如何に浅いか一寸なさない位。遂にいくつも買ったギリシャ神話の中からアポロドノロスのギリシャ神話みつけ、ゼウスがヘラーをオリュンポス山上から吊した一句が何としてもみつけたくて八黒淵氏の文に書いてあったので、V岩波文庫の同書から第二巻第六章、四、ヘラクレスのトロイア攻撃の項から——ヘーラクレスが

トロイアから海を航行している時にヘーラーがひどい嵐を送った。それを怒ってゼウスはオリュンポスから彼女を吊し上げた。——の一句をみつけ、それをもとにしてヘーパイラスその他いくつもの同場面を見つけました。またいずれにしても、SMその他エロティシズムの宝庫、ギリシャ神話にはこれから何カ月、いや何年も七十の手習いを続けてゆくつもり。ところで毎号「花と蛇」に心奪われて隅から隅まで読んでいたつもりの奇クで「花と蛇」につぐ「痴人の

〔最新撮影Mフोट〕

パンプスの下にあえぐ

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフोट 略号ハわそV

首の股責め十態

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフोट 略号ハわよV

緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフोट 略号ハわたV

臀部の下にうごめく

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフोट 略号ハわれV



奴隸捨札開股縛り

両の太股から足首にかけて厳し  
 い繩が情容赦なく掛かり、もうこ  
 れ以上は開くことができないとい  
 う位大きく開けられて固定。そし  
 て正面には「奴隷」という捨札が  
 前を掩って貼られて、いる奴隷女  
 の哀れにも奇妙な生懸。

菱繩強烈開股縛り

繩が胸に柔肌にぐっと喰い込むまで  
 つけ、その縄尻が両股を大の字に  
 開け、閉じさせない。口には  
 上の歯を割って豆しぼり。  
 がむごたらしく頬をくびる。

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 四〇〇円

柱宙縛り苦痛表情

木村洋子  
略号／＼きみ

太い竹の柱に後手しばりで括られた裸身に縄目は素晴しい縞模様を描いている。素肌を晒す羞恥と緊縛の痛さを耐える顔面には豆しぼりの猿ぐつわが美しいアクセントを添え絶妙のムードを展開。

木村洋子  
略号／＼きみ

大手札三枚一組  
四〇〇円

木村洋子  
略号／＼きめ

痛ければ痛いほど更に一層それに耐えうるファイトを燃やすといふ、このマゾ女性にして初めて易々と出来るのである。

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村洋子 略号△きも▽  
口に押し込まれたパンティ、股  
間縛りの縄目の痛さに喘えきなが  
ら、両膝と額とでよろよろ歩かさ  
れる女奴隷が、遂に耐えきれずし  
て、どうと横転してしまふ有様を  
スナップしたプレイフオート。

集」12月号へ読者からVの様に紀元節に反対した位で、大日本殉皇会、不敬言動審査会とやらから脅迫状がくる位ですから。関係のないような事乍ら。一〇・三一の新聞に受刑者待遇改善（監獄法規則改正）一月一日から施行中、戒具の緊急使用「所長の許可がなければ使用できなかったが、緊急の場合使用できるとする」（前に小説で女囚の事よんだので）身体捜査（捜検、捜身）を行なわず（内股のほくろとか〇〇の刺青とかが、どうしても今まで調べられた由）バスガールのチャージ、身体検査と共にこうした事が現実世界で少なくなった事は私の少年時代、後手に犯人を警官が縛ることが今や夢物語であるように、結構なことです。11・1読売に「岐阜で娘さん誘拐される」記事あり「花と蛇」を連想。10・31読売に「映画館のトイレでおどし。まるっきり麒麟児氏の小説に、そっくりでにやにや。もっとも未遂、女の子がトイレから出ようとしたところサルグツワをしようとしたが、女友達が探しにきたとのこと。

(東京・黒井珍平)

三原寛様。最後にお目にかかつ

て以来既に一年の月日が経ってしまいましたが。あい変らず誌上にてご活躍のご様子、いつもながら名文に感心しております。最近のハードボイルド調のM派小説等前代未聞、実に痛快です。実生活の方もさぞやと想像しております。あれ以後私の方も、駄文「貴重な体験」に書きましたとうりの出来事があり、貴兄に会ってお話したいと思ひながら、連絡先もわからぬまま今日を迎えてしまいました。私、人なつっこいたちで、貴兄にかぎらず、こんな体験を話し合ったり、資料や情報を交換したり、フランクに付合えるM派の仲間をさがしています。理想のS女性を探し求める為にも、一人一人が孤立している現状を打破し、M派同志の横の継がりを強めるべきだと思います。尚、かねてお探しの谷崎潤一郎著作「富美子の足」は、私、学生時代に神田の古書店で見し現在も所蔵しております。もしご希望でしたらお貸します。但し同書は最近中央公論社より刊行される潤一郎全集にも取上げられる模様ですが。では今度お目にかかれる日を楽しみにしております。

(東京・宇都宮宏)

(東京・宇都宮宏)



しばらく見なかった四馬孝氏のものと思われるさし絵が見受けられるようになった事は嬉しい事です。グラビア写真がなくなりまして、たからさし絵のよいのをどしどし入れて下さるようお願いします。読者通信欄で女性の浣腸マニアの方が意外に多い事に喜びを感じました。私も勇を鼓して、最近知り合った女性をなだめすかして浣腸を施しましたが、緊縛より一層程度の高い責めとして私も彼女も強い刺戟を受けました。後手にまた菱縄に縦縄に、むごき縄目にあえぐ唇。縄かけてうごめく裸身押し開き、薬液させば静かになりぬ。あらわには生理の苦痛云いかねて、腰ふるわせて助けを求む。

(東京・大久保新)

○ 中原久美子様。十二月号のお便りを拝見してその卒直なご希望に敢えてペンをとりました。私も浣腸については大変興味をもっており、日頃、マニアの方と心おきなくプレーをしてみたいと願願しておりましたが、はからずも貴女のお便りを拝見し、是非貴女とプレーをしてみたいと思っています。私も過去に数度経験があり、その時の感激が、未だに忘れられませ

ん。幸い器具については、薬局や製造元に知人がおりますので、ご希望のものは大低入手出来ます。私自身も時々器具を扱ってみたりしますが、やはり女性にしてみたいという気の方が強いようです。おくれましたが、私は三十五才の会社員で妻がおりますが、プレーの方はその気がなく味気なく思っています。私の身長一・六七米、体重六二キロ。趣味はギターと剣道を少々。詳しいことは、お目にかかれた時に致します。

(東京都千代田区・田村敏男)

○ さすが夜とも成ると肌寒く感じる今日この頃ですが、奇クファンの皆さんいかが御過しですか、初めてお便りします。私は来年の一月二十三才に成る浣腸に興味を持っている男性です。浣腸の魅力に取付かれてから七年近くたち、今では少なくとも週に一、二度はイチジクを使用しております。多い日には一日に二、三度使用する時もあります。そして私のカパンの中か背広の内ポケットの中には、いつでも二個のイチジクを封筒に包んでそっと忍ばせております。しかしこの頃、奇クを読み、又色々空想したり、一人でプレイす

### ☆傑作迫力Mフोट☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円) 略号(ふそ)

臀の下に呻吟する

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円) 略号(ふた)

二女の股賣地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円) 略号(ふぬ)

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 略号(三〇〇〇円) 略号(ふち)

ムチで仕込むズベ公

大手札十枚一組 略号(二五〇〇円) 略号(ふよ)

口中の汚水処理器

大手札九枚一組 略号(二三〇〇円) 略号(ふり)

顔を玩弄する

大手札八枚一組 略号(二〇〇〇円) 略号(ふわ)

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 略号(八〇〇円) 略号(ふる)

臀臭をかかされる

大手札六枚一組 略号(六〇〇円) 略号(ふお)

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 略号(一六〇〇円) 略号(ふね)

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 略号(四〇〇円) 略号(ふつ)

顔を素足で踏みつける

大手札三枚一組 略号(一〇〇〇円) 略号(ふな)

るだけでは物足りなく感じて、だれか同好の女性の方と一緒にプレイ出来たらと思う様に成ってまいりました。奇クを知り始めてからは五年程たちますが、その間、大学入試の為や、その他色々の理由から意識的に奇クから遠ざかろうとした事が再三ありましたので、とは言え形式的には遠ざかる事が出来ても浣腸の魔力から遠ざかる事は出来ませんでした。ですから、その間そうとうのブランクが有り浣腸プレイ等についてもまだまだ知らない事の方が多く色々な事を知りたいと言う気持ちでいっぱいです。だれか同好の女性の方と話し合いながら、又教えていただきながらプレイする事が出来たなら、どんなに素晴らしいだろうと胸のときめく思いに駆り立てられます。どなたか私の願いをかなえてくれる女性の方おられますか。年令等問いません、お便りお待ちしております。尚、お互の秘密は絶



対に厳守いたします。

(大阪吹田市・野坂浩)

麒麟児久さんへ。貴方のことについて、サロンに投稿した「走り書のまま」に、若干かきました。が、もう少しザックバランによび

かけてみたいのでこのランを拝借することになりました。ぼくは、ヤジ馬的存在のまま、かつてはけっこうジャズったもんですが、貴方とくらべて、文章に少し神経質な位それでも気を使かった方です。だから、ぼくの云わんとして、云

## ☆増田みゆき夫人妊娠七カ月作品分譲

### 膨隆七カ月腹鑑賞

大手札五枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にひ▽

### 七カ月腹の妊娠線

大手札五枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にほ▽

### 豊かな乳房と腹部

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号△にま▽

### 後手縛りの妊娠婦

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号△にさ▽

### 全裸身妊娠腹鑑賞

大手札二枚一組 三〇〇円  
増田みゆき 略号△にえ▽

### 首枷手枷の妊婦

大手札三枚一組 四〇〇円  
増田みゆき 略号△にゆ▽

### 七カ月妊娠腹大写

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号△にも▽

### 乳房強調菱縄縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号△にめ▽

### 膨満腹部強調縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号△にく▽

### 緊縛猿轡妊婦虐待

大手札五枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にけ▽

### 妊婦腹誇張しぼり

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号△にき▽

### 動物的妊婦の生態

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号△にな▽

わざることを、ズバリと吐き出してくれる貴方の発言は、読んでも楽しい。十二月号の△読者通信▽は、まったくウレシクなっちゃった。実は団氏の「三文マニヤ文士」をよんで、ぼくも何か書きたかった——書けなかった。そんな矢先なので、特に興味深く拝見したわけです。大方読者だって、ハラの中では「団鬼六という偉大なワイ本書きをつくづく羨ましいと思うのである」位、しかし奇譚クラブと賭けて制約と解く、その心は、△△△のデリケートなために発言はアイマイになってしまふ。友よ、貴方の偉大な無神経のためにはパンザイしようか。昔、風俗出版界に梅原北明という大型の大バカ者がいた。そのバカ振りは、生きていながら、伝説的存在にまでなったほどだ。ぼくは小バカである。貴方の発言をよむと北明を思い出すのだ。しかし、本当のことを云うと、どこからか「敵」が出る。その「心」は……「花と蛇」も、たしかにクライマックスシーンを重点としたワイ本書きの手法を応用しているようだ。しかし……まア、云ってしまえばそれまでよ、云わない内が花なのよ、一九六七年度のK誌は、大型作家が、

それこそ、SMと無関係なエロ好みをも感心させるような、巾広い作品をひっさげて登場するか、どうか。そこに大きな話題があると思う。団氏の「花と蛇」は、おそらくこの年はラストになるだろうか？とすれば、それに匹敵するような大小説の連載が要望される。その作者の第一番候補にぼくは麒麟児久という男を上げ、それに賭けている。この男は、必ず巾広い愛読者層をつかむ力量を持っている。ただし、作中人物の会話と、ストリーリ的ムードの、さらに御研究を願いたい。(形容の新鮮さも)その男、麒麟児久さんよ。ガンバッテ下サイヨ。(夜乃探郎)

私は四十三才の熱心な本誌の愛読者です。特に八月号の麒麟児久氏の「百合子屠腹」は前後篇とも息をもつかず一気に読みました。全身が思わずふるふる程の感激を受け、二度三度となく読みかえしました。今度は安達ヶ原の鬼婆が胎児を食う所を先生の麗筆で書いて頂きたいものです。(茨城・福原堯児)

○ 幼児の頃から奇行の数々を、自分一人の秘密として秘めていた



所、ふとした事で奇クを知り私と同じ様な方々が、この世の中に沢山おられる事を知り驚いたり、うれしく思ったりしました。又或る反面、自分一人だけの特別な性向だと秘かに思っていた事が、案外世間に同類項が多いという事を知って、少し失望した様な気持も味っています。しかし、とにかくそれ以来、複雑な心境で毎月愛読しております。奇クには浣腸責めの場面などがのっているのが最初に読んでいる程ですが、成人してから経験は皆無であります。それだけにそういう経験を持ってみたいという念がしきりで日夜私の心をいためつけています。プレーの相手を誰か願えませんか。どうか。まだ始めてです。で最初からこんな要求は無理でしょうね。又時折便りを書いてみます。私の便りを読み、少なからず興味をおぼえた方、奇クの批評なり文通なり、させていただければ光栄の至りです。

(東京・赤羽富夫)

私は三十四才、夫は三十三才、或るお客相手の商売を営んでおります。結婚以来八年、夫婦生活もともすれば何か変わった刺激を求めたく奇クを愛読しても、いざとな

ると実行力がともなわずペンをとることさえ覚つたなく、今に至っております。私達と同じような境遇の御夫婦の方があれば、文通御指導願えれば幸いと存じます。今年の夏の事です。永年の親しいお客さんのSさんのお座敷で一寸浮気をして、何にくわぬ顔で夫と床に就いたのですが、夫に問いただされ、とうとうかくすことが出来ず白状しますと、怒るところか、かえって燃えて許して下さいました。夫は以前から私を後手に軽く縛ることを時折りしていましたが、それ以来、乱暴に縛るようになりしました。私も浮気をした弱味で夫の暴力を耐えているうち、私もそんな夫を見ると変な気持ちでたまりません。産婦人科でリングを挿入してもらってからは、月一回見えるSさんと遊んでくるように夫から言われ、公然の浮気を続けていました。九月の異動でSさんは他県へ転勤になり、この交際も絶えてしまいます。思えば恥しいことなのですが、このことが、かえって私達の夫婦生活を親密なものとなりました。Sさんと浮気したあとの夫との生活の感激を忘れることが出来ません。奇ク愛読の御夫婦の中で理解ある方との文通

と写真による御指導を、お待ちします。交際頂けるとしたらなるべく中年の御夫婦の方を望みます。

(長野県大町市・吉沢頼子)

最近、貴誌へ夫婦のプレー写真が幾組も発表されるのは誠によい傾向だと思えますが、できれば、そういう「夫婦プレー集」の写真帖を第何集の美しき縛しめとして至急刊行して下さい。各氏へそれぞれ連絡すれば貴誌のためならば更に秘蔵写真を出してくれることでしょう。ぜひなるべく沢山の夫婦(又は恋人)プレー写真の一大集成をお願いします。尚又、限定版写真集で「吊し責め特集」のアルバムを早く出して下さい。必ず後手吊りの構図で、後手のみと後手と足で両方吊り、後手と股間と足の三方吊り、木馬の上での後手吊り等、いくらでもあると思います。必ず背面と前面の両方を出して下さい。前の限定版写真集の何集かにあった、巨岩の間への吊りは、構図もよく素晴らしい吊り責め写真でした。(静岡・真鍋慎吾)

小生、先日、古本屋で貴誌の旧号、去年の12月号を買って読みました。その中で万田不仁氏の「初

天然色(カラー)

△女相撲▽写真

雪崎京人氏直接指導

モデル△大塚啓子  
モテル△東浦ひかる▽

迫力投業連続動作

略号(なる)

カラー大手札印画紙焼付

十二枚一組 五〇〇〇円

◎御希望の方には、御注文次第早速焼付の上お送りいたします。雪崎京人氏の直接により、大塚啓子、東浦ひかるの二モデルを煩して、実際に各種の投業を仕掛け業のきまった動きのあるポーズを早いシャッターによりカラーで撮影しました。今までにない迫力が出たと雪崎氏も喜んでおられました。特に女相撲フアンの方々のために、お求めに応じてお譲りいたします。

陣(悦庵絵灯籠)その十五を何回となく読み、印象にのこりました。小生、女武者に首級をあげられる女武者の様子を絵に描いてみました。鎧その他の風俗については全然知識がありませんので、でたらめかも知れません。少し誇張して女武者と少年武者と裸体でかきました。大変まずい絵と思いますが、万田不仁氏に進呈いたします。



## ☆最新撮影△総天然色▽写真分譲品☆

両手吊りに悶える

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△てき▽

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 一二〇〇円  
大塚啓子 略号△てか▽

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 一二〇〇円  
大塚啓子 略号△てく▽

豊麗裸身の縄目

大手札四枚一組 一二〇〇円  
大塚啓子 略号△てこ▽

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△てま▽

長襦袢緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てみ▽

緋腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てむ▽

猿ぐつわに呻く

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てめ▽

柱宙吊り縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△ても▽

ポリウムを縛る

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てん▽

縄の苦悶を狙う

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てる▽

真紅の腰巻着用

大手札二枚組 八〇〇円  
大塚啓子 略号△うお▽

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円  
東浦ひかる、大塚啓子 略号△うて▽

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一二〇〇円  
大塚啓子 略号△うこ▽

す。

(東京・一読者より)

私は貴誌の十年來の愛読者で、毎月購読している十数冊の雑誌の中の一冊として、熱読しております。月毎に内容が充実してくるのには敬意を表しております。私な

トで、この筆者は前者より大分大人であるということがわかる。私は今迄只読むだけで初めての投書が毒舌になってしまいました。貴誌の発展を祈ることにやぶさかでないつもりであります。

(東京・東林生鳥)

○

最近、題名、表現にまでクレームを、つけるようになった映倫の規制とやらのお陰で「エロダクシ

ヨン」ものも、このところ、すっかり面白さがなくなり、いつも見終ったあと失望させられていたが先日見た「拷問」は凄かった。題材上、三話からなる内容が、いずれも時代劇だったが、一番印象的だったのは、第一話の女間諜が捕えられるシーンで腰巻一つの姿で後手にくぐられ、完全な逆吊りにされたうえ相当力を入れて叩かれるシーンで、音は疑音かも知れないが打たれる度に逆さ吊りの裸体が激しく揺れ、身をのけぞらして苦悶する表情がまことに迫真的で生つばを呑み込む程だった。縄も稍太目であったが首から胸へぎっちり緊縛したものであった。さらに第二の責めとして矢張り腰巻一つの半裸体を後手にくぐり、手足を大の字に伸ばした形で、それぞ



れ竹の棒に縛りつけ背筋の上にも一本通した棒で、水平に吊した場面で、縄目はこの時の方が首から乳房、腹と完全に菱形にくびり上げたもので実に素晴らしいものであった。第二話では、キリシタンを邪宗として女信者を蛇責めにするシーンで、蛇が蠢き廻る四斗樽の上に腰巻一つの裸で後手にくくり吊し上げた裸身を徐々に降し樽の中へ突込む場面で、もそもそする蛇の動きと、樽の上に首縄から乳房を、しぼりあげ、さらに腹へ喰込む本縄のきびしさ、腋の間や股を棒でこじり廻したり、打ったり、苦痛にのたうつ女体の表情とともに美事だった。また主演の香取環が牢内でリンチとして、四つ這いにされ尻をめぐられてキメ板で打たれるシーンがあり、これが執拗な程長く27回程打たれていたが、そのたびに激痛に身をふるわせ、おえつする場面も熱っぽい演出とともに相当なもので、また、この香取環が女牢名主に「地獄縄で一寸喜ばしてやりな」といわれるところが、牢格子に手を縛られて板で腋の下や乳房をこじり廻される場面も美人だけに着物を大きくはだけ苦悶に喘ぐ表情が妖しい程魅了的だったが、肝心の地

獄縄は見られなかったのが甚だ残念だった。さらに今度はこの牢名主の女(少しヤセギスの美人)が役人に責められる場面も相当なもので腰巻一つの裸体に首縄、胸から腹とかけた菱縄で半逆吊りにされ後手にくくりられた腕、腋、胸、太股を打たれたり、こじられたりするときの縄目が肉に喰い入る程きつく、女の態度が伝法調な反抗をするため一層責められるといったシーンはまことに凄絶このうえもないものだと思う眼が画面に吸い込まれるようだ。第三話は、武家の内儀が不義密通して責められるもので、少し衣裳などに綺麗ごとのようであったが、然し土蔵での責めは相当なもので、内儀(新高恵子)を上半身裸にして後手にし、首、乳房、腰と縛ったうえ、足首と頭が水平になった吊し責めで、これまた打たれたりぐりぐり乳をこじられたりされるが、とにかく全編を通じて、すべて乳房をあらわにした裸体とそれにかける首縄、菱縄の本格的な縛りで、それも決して真似事のようなユルイ縄目のものなどは殆どなく、そのうえこういったシーンになると天然色で写されるので一層凄まじい。さきに上映された残酷刑罰拷

問史も相当なものと聞いているが残念乍ら見ていないので、今度の「拷問」との対比を得ないが演出が同じ、小森白であることを思えば、前作が評判どおりのものであったことが容易に想像できる。

(東京・荒川弥一)

私は飯坂の或る旅館の番頭をしている者です。それで奇巧のフアンとして、いつも思うのですが、SM専門の旅館があると楽しいと考えております。室が全部で十室ぐらい。地下室が続きの四室、三階か四階の鉄筋コンクリート建のホテルで、東京から東北方面へかけてのSMの方々の楽しめる殿堂です。私がそのホテルの支配人であつたら、と夢に見ております。奇巧編集部の手で、建てて下さるか、或はフアン有志の出資で建設の上、私を支配人にして下さいませんか。旅館の経営については及ばずながら経験がありますから。

(柴田孝明)

私はKKの大ファンです。十月号で新しく、登場されましたカメラ・ハントの菊田アツ子様。これから毎月先生方と一緒に仕事をされると思うと、菊田アツ子様の

# 使用済生理帯(バンド)

## 分 譲

若い女性の使用された中古のメンスバンド(黒メリヤスその他)若干入手いたしましたので御希望の方に、お譲りいたします。数に限りがあります故、返信料同封の上、一応御照会下さい。代理部小倉宛へ

責め役になりたくて仕方ありません。責めの時はなるべく無残な責め方にされて下さいね。反面、そんなにされるアツ子様は可哀そうでなりません。アツ子様、誌上でお顔を拝見しましたところ、和服のよくお似合になられる方だと感じりました。全身の肉づき体格がとてよくて、可愛い表情はたまりません。着物に長い黒髪はきつとよく和服に似合うことでしょうね。お身体大切にお仕事にお励み下さい。「痴人の糧」毎月面白く拝見しております。女性側の主人公セツ子様、アケミ様、百合子と大山という男性との二人で心ゆくまで責めぬかれる無惨な役です。現在の一般女性は平均して身体肉つきが良く、この素晴らしいお尻を力いっぱい平手打ちされる



## 総天然色刺青写真

大手札三枚一組 カラー・プリント  
モデル……山原清子……

## 極彩色刺青

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 刺青色模様

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 刺青の全貌

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 全裸の刺青

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 前面の魅力

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 化粧中の女

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 奔放の姿態

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 豊かな臀部

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 三面鏡全裸

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 大鏡の刺青

大手札三枚一組 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

## 総天然色緊縛写真

大手札三枚一組 一〇〇〇円

## ○ 高山 清子 略号 (やか) 大手札三枚一組 一〇〇〇円

## ○ 緊縛に映える入墨の肌 山原 清子 略号 (やき) 大手札三枚一組 一〇〇〇円

## ○ 脱がされた着物の中で 山原 清子 略号 (やく) 大手札三枚一組 一〇〇〇円

## ○ 縄にのたうつ入墨裸身 山原 清子 略号 (やも) 大手札三枚一組 一〇〇〇円

## ○ 腰巻一つで縛られる女 山原 清子 略号 (やみ) 大手札三枚一組 一〇〇〇円

## 天然色湖畔女相撲

モデルⅡ大塚啓子、東浦ひかる

## ○ 湖畔の砂上で四つ相撲 大塚、東浦 略号 (うに) 大手札六枚一組 二〇〇〇円

## ○ 大自然の中で取組む女 大塚、東浦 略号 (うひ) 大手札六枚一組 二〇〇〇円

## ○ 砂浜での必死の女相撲 大塚、東浦 略号 (うほ) 大手札六枚一組 二〇〇〇円

## ○ 吊り合いと投げの応酬 大塚、東浦 略号 (うと) 大手札六枚一組 二〇〇〇円

## ○ 砂まみれの大業の応酬 大塚、東浦 略号 (うち) 大手札六枚一組 二〇〇〇円

責めはたまりません。

(京都市・前川下)

北海道で会社の社長さんが誘拐されて殺されたという事件がありました。その社長さんが、建設会社をやっている遠山さんという方で、静子夫人ならぬ一郎氏でした。が、その犯人というのが雇われていた自動車運転手の川田ならぬ山内某とのこと。要求金額やら誘拐成功やら警察が後手にまわったところなど、偶然の一致というには、あまりにも見事なものだと感じました。先日久々に阪神方面を訪れましたが、せっかく大阪へ出ながら事前の御連絡ができなかったため御拝見もできませんしたので東映会館の近くの知り合いのホステスを訪問しただけで三宮へ出ました。翌昼さんちかタウンを歩き夕刊を買って興行案内を見て三宮の太陽会館という小屋を覗きました。腕に環状のあざのある気の強そうな若い踊り子が、一人いました。長門湯本温泉の覗き機のショーには「女犯の夜」というタイトルがついていました。観光ホテルの宿泊客らしい若い男が二人ほど見ていましたが、初めの大塚啓子梨花悠紀子の被縛美に少なからず

興奮したようでした。元赤線地帯のバーのホステス何人かと友達になりました。博多の中洲とか別府とか、山口の湯田あたりはプロやセミプロの肉体派が盛況のようですが、暴力団の搾りが強くて、話としてはSM好みの好しいものも多いようです。(山口・望月生)

東北の山崎様、私の拙い文に目をとめられ、有難うございました。揮愛好二十年の、貴男様を知り、これからが楽しみです。私は六尺禪の赤と白を愛用していましたが浴場へ参るのが恥しくて現在は白の越中禪を用いております。一本だけモッコ禪があります、六尺禪に似て良いものです。赤の越中禪も一本あります。これは締めて恰好がよくありません。赤は六尺に限りません。夏中は白クレープの越中禪を、用いております。肌ざわりのよいものです。外出の時はブリーフを用いております。すが、貴男様にならい、ブリーフの下にガーゼの禪をしてみましよう。禪を締めていないことには気が落ちつかなくて困ります。以前私が自作して使用したのは、水禪というので、赤、白、黒等の布で前布を15センチ位の三角布で後の



立みつは巾三センチ位で、真中が継目で一センチ位の紐でつくりま  
す。貴男様の自作のに似たもので  
かさばらず動きが楽でした。編集  
室の皆様、毎号楽しい記事を多数  
のせて下さり有難うございます。  
一つ不満なことは襪に関する記事  
の少いことです。山崎様、喜多様  
など襪愛用者がありますが、女性  
襪美ばかりでなく、男性襪美の写  
真、絵を一枚位のせて下さい。襪  
愛好常用者を多数つくるために襪  
の種類、作成の解説記事等又愛用  
者の意見等をのせて下さい。襪に  
関するアンケートもよろしいと思  
います。日本古来から伝統ある下  
着、襪をより多くの方々に愛用し  
て頂きたいと思っています。こん  
なすばらしい下着があるのに西洋  
から入ってきたパンツ類を使用す  
るのは、おかしいと思います。今  
東光さん、デザイナーの長沢節氏、  
中村乃武男氏等皆さん襪愛用者で  
す。奇クの読者の男性の方々、大  
いに愛用常用して下さい。又編集  
室の皆様も愛用して下さい。

(静岡・越中輝二)

○  
奇クの旧号に分譲写真のアイデ  
ア募集の広告がのつていましたの  
で、かねて考えていた事を一筆し

ます。別に珍奇な着想ではありま  
せんが、最近女性同志の責め写真  
が広告を賑わしていますので書い  
てみます。モデルは女性同志。基  
本ポーズは四つん這いの女馬の背  
中に、もう一人の女性が馬乗りに  
またがり、(一)、女馬の口に手綱を  
かけ這いまわらせる。(二)、同じポ  
ーズで髪を手綱にする。(三)、馬乗  
りのまま女馬の乳房を驚つかみに  
して弄ぶ。(四)、同じポーズでくす  
ぐり責める、etc、又これを発  
展させて二女対一女で「二女の馬  
にされる女」としたら変化も富み  
MS両傾向の人を満足させ、写真  
の購入者も多いと思います。又、  
両股をMの女性の首にまわして肩  
車のポーズをとり、Mの女性の髪  
をぐつと驚つかみして得意になっ  
ているS女性のポーズ等は如何で  
すか。

(奈良・元山生)

○  
M七〇生です。奇ク愛読者の皆  
さん、秋の夜長を如何お過ごしで  
すか。私も孤独の寂しさを切り抜け  
ようとステを購入し大好きなFM  
ステレコードで悩みに耐えており  
ます。しかし一旦プレイに入ると  
張り切っています。鼻孔は穿孔の  
際、余りにも手前に施し失敗しま  
した。4ミリの時穿孔に夢中にな

り焼火箸で孔の縮小を防ぐ意味で  
焼きました。鼻翼を火傷したり涙  
と鼻汁の中で経を変え、新考案の  
ゴム製鼻栓を挿入、最大8ミリ余  
にもなりましたが、最近漸次縮  
小し、4ミリの位置でストップで  
す。男女いずれでも美しく若い方  
を望むのは当然ですが、私なんか  
最高四十五才前後までの方、健康  
で商業又はお勤めの方。文通OK  
になりましたら、色々私の詳細  
データを差し上げます。では誌上  
でのお呼びかけを、お待ち致しま  
す。

(名古屋・M七〇生)

○  
貴誌の購読をしばらく休んでい  
る中に、値上げのことも知らず失  
礼しました。八月号から十二月号  
まで一気に目を通してみて、特に  
最近の十月号、十一月号、十二月  
号と充実しているのを感じ大変う  
れしく存じました。読む雑誌とい  
うことが提唱されてから、もう久  
しくなるようですが、最近号を拝  
見した限りでは、成功しているの  
感じました。好評のS小説「花と  
蛇」にも比すべきM小説の傑作が  
毎月一篇ぐらいあったら一層楽し  
めるにあと思いましたが、しか  
しこれも望みの望みで、私達の好  
みの内容の文章をこれだけ集めて

# 浣腸地獄の妊産婦

大手札四枚一組 五〇〇円

増田みゆき 略号(ほな)

妊婦はいよいよ分娩の前には  
浣腸されるといふ、その予行の  
ために夫の手によって施される  
待望の妊婦の浣腸フォトである。

## 妊孕腹の凄愴切腹

大手札四枚一組 五〇〇円

増田みゆき 略号(ほら)

現実的には臨月にも比すべき  
豊満な孕み腹をドキドキとする  
白刃によって今まさに切り裂こ  
うとする凄愴な妊婦切腹の実写  
は又と得難い資料を提供するで  
しょう。

下さる努力だけでも有難いです。  
私は本来M傾向の人間と思ってい  
ます。どちらかというと、美しい  
女性に精神的に凌辱されたいとい  
う願望を抱いているものですが、  
それでいて女性Mの記事、特にS  
写真にもひかれています。分譲品  
も嘗ては大分集めたものです。ど  
ういうわけか、理由は存じませ  
んが、自分の求めている心にぴった  
りの記事、挿絵、文章をこのよう  
に心にくいまでに集められるとい  
ことは、並大抵のことではないと  
思います。若し一般の雑誌や単行  
本の中から、自分で集めるとすれ  
ば、もう大変な努力が必要だなあ



と考えたりしています。途中休んで少し抜けた分も今回の注文でどこおりなく、拝見できて嬉しく思い、今後は引続き毎月愛読させて頂きたいと願っております。

(福岡市・阿川山人)

私はここ一年ほど前から御誌を愛読させていただいておる女性でございます。この頃は小野田順子様はじめ勇敢な女性の方々が誌上で名のりをあげておられて、同性としてほんとうにうれしく心づよ

く感じている次第です。私は心からSMの好きな女でございます。高校二年のとき一度縛られたことがあります、そのときの経験が決して悪いものでなかったことが、今になって思いだされるのです。しかし御誌を拝見するまでは、そんな気持は少しももっていなかったのですが。この世の中に、ほんとうに他にも私と同じような気持をもつておられることを知って、何だか自分の気持がひとりでは燃えてくるような気持で、とうとうペンを

☆一宮百合子△総天然色▽緊縛写真☆

可愛い小悪魔一宮百合子のビ  
チビチとした若々しい肢体に厳  
しく掛かる縄目と悶える表情を  
そのままにあらわすカラーブ  
リントによる美しいフォト。

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るむ▽

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るの▽

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るお▽

真紅の腰巻姿緊縛

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るま▽

羞らしいの正面縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るけ▽

若肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るふ▽

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るや▽

持った次第でございます。私は身長一五八センチ、体重五二キロ、バスト八九、ウエスト五八、ヒップ九十で、中肉中背というところ  
です。読者通信などでこういうマ  
ニアの方がたくさんおられること  
を知り私も一度心ゆくまで縛られ  
てみたいという気持がわいてきま  
した。それでいろいろ考えあぐね  
た末、ペンをとりました。「出演  
或は参加御希望の方は編集部宛御  
照会下されば、報酬その他詳細お  
返事いたします」という募集要項  
を見てこのお便りをしたためまし  
た。申しおくれましたが年令は二  
十才です。只今は滋賀県におりま  
すが、いつも大阪にある叔母の家  
へ一週間か十日泊りがけで遊びに  
行くので、お返事があれば大阪へ  
参ります。叔母は子供がなく私を  
養女にと望んでいますので、四人  
姉妹の末っ子の私は、或は大阪住  
いになるかもしれません。叔母は  
小唄のお師匠さんをしていますが  
死んだ御主人の残された財産が何  
千万とあるそうで、広いお家に一  
人で住んでいます。もし私の気持  
にぴったりのマニアの方がござい  
ましたら、ご紹介いただだけませ  
んか。叔母の養女になった上で結婚  
してもいいと、最近はいはじめ

ています。でも平ぜいの私は、女  
だてらにスポーツカーに乗って名  
神高速道路を大津から名古屋まで  
ぶっ飛ばしたりしているオテンバ  
で通っていますから、私の本当の  
心を知っている人はおりません。  
父が土地では一寸名の知れた会社  
を経営しておりますので、釣りあ  
った境遇でSM好みの方がいらっ  
しやられたら、と考えたりしてい  
ます。私の今お逢いしたい場所は  
京都、名古屋、大阪、神戸の順で  
す。名神を利用して車ですぐ行き  
ます。私の家は天津インターのす  
ぐ近くです。東の方で行ったのは  
箱根、熱海迄です。それから本誌  
の古い号をお持ちの方、見せてた  
だけないでしょうか。三十八年か  
ら以降の分は全部集めました、  
それから以前の分がどうしても見  
たくって仕方がないので。お礼  
に私の大好きな、中華料理を京都  
で御馳走します。では、よろしく  
ね。(滋賀県大津市・中河恵子)

○ 暫らく離れておりましたが、皆  
さんお元気ですか。秋とともに、  
灯下奇クを読むにもよい季節とな  
りました。さて私、九月に東京か  
ら北の国郡山へ転勤になり、アパ  
ートの広い住居で自炊生活に入り



ました。福島県も広いし、東北他五県へも始終出張するので旅の多い生活ですが、自然美に恵まれた東北を楽しんでいます。あの溪谷の中に縛った女性を立たせたら、などと思うことが沢山あります。読者、同好の方の中に東北の方もおられるだろうと思ひながら独り旅をつづけております。最近、といつても半年程前、ある女性大衆雑誌の相談欄に次のような記事がありました。「夫はまた勤め帰りに週刊誌や雑誌を買ってきて、こういうようにしろと云います。その本には縄でしばられている女の写真や、さるぐつわをされて転がされている絵が載っています。そして夫はその本にある通り真似させ、私が痛みと苦しみでもがくとおもしろがってだきつきます。：不安ですがどうしたらよいでしょう」と、それに対し某先生の答が我意を得ました。「貴女は結婚ということについても少し勉強する必要があります。ご主人の気持は異常でも変態でもなく、貴女がついて行けないだけで、女に対する性愛の正常な表現であり、夫の愛のしるしにおおわれる妻の恍惚の情愛を描いた、ローベル、グーレの『幸せな結婚』をよくお読み

なさい」とありました。また別の婦人の「……いつのまにか荒々しい夫の愛撫というより責苦といった行為に、だんだん慣れてそうされないともの足りなくなってしまう……」と相談するのに対し、「世の中には、こんな生活を夢にまでみている奥さまや、女性が多いことを考えると、貴女は羨しい贅沢な人です」と、答えていました。正常な男性なら女性を可愛いと思うが故に縛り上げてみたいと思ふでしようし、女性らしい女性なら異性から、そうされたいと思うのが正常な心理ということでしょう。東北の女性は美しい肌の人が多く見受けられます。叶わぬ思いながら奇巧の写真にしたいくなる次第ですが、折角の東北住い、同好の方々の、お便りを、お待ちしております。

(郡山・池田勝)

秋冷の頃となりましたが皆様お変わりございませんか。お伺い致します。主人と結婚以来、MSに目ざめたとでも申しましょうか、すっかり耽美の世界のとりことなつてしまい一児の母となった現在でも楽しい二人だけの世界にひたつて居ります。而し変化を求めSM芸術を楽しんで参った私達もアル

バムも十冊をこえ8ミル迄自宅で完成させる程奇巧を学びつづけているものの何か最近では夫も私もマンネリズムから抜け出すことが出来ないのです。夫婦の愛は夫婦のみの世界で永久に終らせるべきだと知りつつどうにも新しいものへの欲求と期待が圧え切れなくなつた私達でございます。お笑ひにならないで下さいませ。この為には随分長い間苦悩して参りましたが、私達も意を決して同様なお考えの方々と御文通なりプレーも或は聞いて居りますMS交換プレーも辞さない積りでございます。どうかこの様な決心をした私達でございませうがよい方とお結びつきしたく恥しさも捨ててペンをとりました次第でございます。勿論個人の秘密、地位も充分尊重し合つた交際は云う迄もございません。最近奇巧誌上で御夫婦のプレーフォトがどし御発表になつて居りますが、本当に立派ないいことだと主人もいつも申して居ります。その内差支えない範囲で私達も一、二作品提供を協力すべきではなからうかと主人も云い出している位です。暫くおまち下さいませ。奇巧誌上で御活躍の新宮御夫妻、増田御夫妻、水野御夫妻、長田御夫妻

# 「新版Mフオト分譲」

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号 一〇〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

両足の首絞め責め 略号 八〇〇円

大手札三枚一組 略号 八〇〇円

花田佐沙子 略号 八〇〇円

肩車の臀部に喘ぐ 略号 八〇〇円

大手札三枚一組 略号 八〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

女の臀部をかかす 略号 八〇〇円

大手札二枚一組 略号 六〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

足舌めの強制 略号 八〇〇円

大手札三枚一組 略号 八〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

女王様の牝犬調教 略号 八〇〇円

大手札八枚一組 略号 一五〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

長谷、ST様始め御夫婦の方々とお知り合いになれたらどんなに幸いかと存じます。丁度お正月を利便して御会い出来る様なチャンスにも恵まれればと夫と二人で少々お恥しい様な空想の世界に期待を求めて居ります。ぜひ皆様から御連絡心よりおまちして居ります。私達は夫35才、私は28才です。(兵庫県加古川市・石崎達子)

増田みゆき夫人の妊婦フオト各種有難く拝見しました。貴重な資



料として永久に大切に保存させていただきます。ぶっくりとふくらんだまんまるいお腹は、ほんとうに見事なものでこんな立派ではきりした妊婦の写真を見たのは始めてです。まことに貴重なものだと感じいたしました。七、八カ月でこんなに大きいと思っていました。それから双胎児だったそうですね。今後がたのしみです。それで今後の撮影ポーズとしては次のようなものを加えていただければ、これに過ぐる幸せはありません。一、和服（浴衣）にて腰巻、腹帯着の脱衣順序を順を追うてうつつ。二、薄いセーターにタイトスカート着用

の上、乳房と腹部を強調してうつつ。三、ネグリジエスタイルから順次、脱衣してゆくとところをうつつ。四、腰巻をしただけに、立位、膝位、横臥、仰臥など数ポーズをうつつ。五、腹帯姿のもの、六、入浴のポーズなどです。

（兵庫・妊婦ファン）

私は市内で一杯呑み屋を営んでいる三十女です。私のからだは世間で言っている大女で背丈は五尺四寸、体重は十九貫程あります。お客さんや知り合いにもよく言われますが、私のからだつきは丁度妊婦のようなものです。決して孕

んでいるのではないのですが、お腹がものすごく大きく歩くのにも大儀なくらいです。別に病気ではないのですが、若い時からお腹が出ておりスタイルの悪さには恥しい思いをしてまいりました。三十年代になってから特にふとり最近ではひどいからだになりました。手足は普通の人と変わりませんが、お乳とお腹が異常に大きいのです。お客さんの中には私の大きなお腹を見て「妊娠何カ月か」なんて本気で聞きます。私は地バラですから平気なのですが、酔った客などお腹をなでにきたりします。私は一度も妊娠したことはないのですが

増田まゆみさんの妊婦フォトなんか見事でうらやましいとさえ思います。本当に妊娠している女の人の写真を見てみたいのです。私のこの大きなお腹もどなたか写真にとって下さらないかしら。自分の大きなお腹を写真でとっくりと見てみたいのです。お風呂やなんかで妊婦のお腹を眺めるよりも写真になったのを見たいのです。それと誰か弱々しい感じの男性と交際してみたいと思います。この大きな乳房とお腹で思う存分下敷きにしてやりたい、とそんな大それたことを空想しております。

（仙台市東三番丁・佐用千代子）

## 本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括し

てお求めの際はハ小包Vにて発送申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和38年12月号	(送共二七〇円)
昭和39年3月号	(送共二七〇円)
昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)

昭和39年11月号	(送共三二〇円)
昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)
昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)

昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)



# ☆編集後記☆

○嘗て本誌上で活躍されたことのある春風春太郎氏がペンネームも新たに於て入緊縛映画あれこれVを物される。引続いて豊富な縛られ女優のスチールを提供して下さい。大いに楽しみにして今後を期待しよう。

○斎藤夜居氏から「伊藤晴雨ノート」第二回を頂く。貴研究の大先輩を偲んで、まことに懐かしい文字の羅列である。文献の散佚しない中に印刷化して残しておきたいものである。

○S派垂涎の二大シリーズ、「SMカメラ・ハント」と「花と蛇」今月も又鋭筆益々芽えて名刀正宗の如き切れ味は、S人士的肺腑を抉ぐることに必至。加えて妖しきアブのムードを甘美に語りかけるハミモザ館Vが、今まで

に本誌になかった境地を開拓して呉れた。○「のおと・あと・らんだむ」が今月号で完結をしたのは惜しい。しかし千草忠夫民の健筆を以て更に新しい観点での再出発を心からお願いしたい。読者の方々も同感と思う。

○告白入貴重な体験Vを初めて寄せられた宇都宮宏氏は掲載の如き秀逸な絵を描かれる。引続いて描いて下さる由なので、皆様と共に大いに期待しよう。黒淵賀集子夫人が連載第一回として「妖霊城」を寄せられた。第一回にして、古寺、古城と妖しき道具立が揃っていて、ぐんぐん引き込まれる感じ。

○中康弘通氏がお得意の切腹史の重厚。芳野眉美氏の軽快なタッチ。三原寛氏の「モツキンバード」は今月で完結、今までの労を謝したい。では、次号に御期待を乞う。

## 愛読者原稿募集

### △体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には本誌六カ月分以上贈呈いたします。

### △創作、小説、物語△

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでは自作に限ります。若し引用する部分がありますら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては本誌五カ月分以上贈呈します。

### △感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのままとめて下さい。採用篇

### △(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。○尚、以上の採用篇に対する希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

## ☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円V  
三月分(3冊)一〇五〇円△送共V  
半年分(6冊)二一〇〇円△送共V

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 三五〇円

一月号 〔第二十一巻第一号〕  
〔通刊第二二三号〕

昭和四十一年十二月二十日 印刷  
昭和四十二年一月一日 発行

編集人 箕田 京二  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫  
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号  
発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本来成人として編集いたしておりますが、本誌成人として発行を企図して下さらないよう、未成年の方には絶対販売を上げません。特にくれぐれも、お願い申し上げます。